

艦隊これくしょん The Bridge 君でないとだめなんだ

Piyodori

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

南方の最前線。深海軍による海上包囲を受けている陸軍部隊救出のため、急遽救援部隊の一員として連合艦隊に加わるようになった青年提督とその指導役の重巡洋艦娘・那智。

提督は、艦娘と深海棲艦が日夜激闘を繰り返すこの不可思議な世界へ召喚されてからの半年間を思い返しながら、那智や仲間達と陸軍部隊の待つ孤島を目指す。

連合艦隊司令部による安易な作戦指導と敵機の触接に不安を募らせる青年提督と那智。

そんな二人を待っていたのは敵深海棲艦隊による周到な多重包囲網だった……。

※本作はPixiv様でも「The Bridge」出撃までの72時間」の題で投稿しております。

目次

プロローグ／ブーメラン島沖	1
ヤムヤム島泊地の午後	4
遊撃打撃艦隊の船出	9
作戦会議	20
触接	30
第一次ブーメラン島沖海戦／キルゾーン	34
第一次ブーメラン島沖海戦／突撃！ CA陣	42
第一次ブーメラン島沖海戦／一騎打ち	53
第一次ブーメラン島沖海戦／煙幕の向こうへ	61
カメヤマ提督の勘	69
シューズ・ベラ島の日は暮れて	72
行くも、留まるも	83
天敵	89
イワシとタロイモ	95
『転進！』ローリー泊地へ	102
インターナルアーマー	108
居酒屋・鳳翔での邂逅	114
あの人の艦	124
入渠 1	130
入渠 2	136
フェアトレード	144
スコール	151
最果ての初風	161
サヨナラ、帽ふれ	173

切れた生命線	182
Supplying War	197
ラポール港	207
新しい仲間	220
反攻作戦	235
マミヤ・コミント	254
ギンガ泊地	263
兵棋演習	276
戦艦山城	292
駆逐艦達の夜	302
ナイトキャップ	320
第二次ブーメラン島沖海戦	333
1／ブ島上空強行偵察	
第二次ブーメラン島沖海戦	347
2／天気晴朗なれど	
第二次ブーメラン島沖海戦	356
3／戦力喪失	
第二次ブーメラン島沖海戦	366
4／戦いのはじまり	
第二次ブーメラン島沖海戦	382
5／「敢闘精神」	
第二次ブーメラン島沖海戦	397
6／通信室	
第二次ブーメラン島沖海戦	407
7／決死のASW	
第二次ブーメラン島沖海戦	425
8／そして、戦いの終わり	
銃剣とオムレツ弁当	444
戦闘詳報	457
1	
戦闘詳報	476
2	
戦闘詳報	483
3	
山城牡蠣	502
写真暗室	515

プロローグ／ブーメラン島沖

『左舷、敵艦影確認。一番から三番主砲、各個、撃ちー方はじめ！』
『第二戦隊各位、目標は追って指示する。砲撃待て。』
『宛第一戦隊旗艦金剛、扶桑発。我、魚雷攻撃を受く。機関室浸水中。
速力低下……』

敵艦との撃ち合いがはじまってからなし崩し的に無線封鎖が解除され、スピーカーから一斉に無線電話の声が重巡洋艦那智の羅針艦橋へ流れ込んできた。

艦橋の窓越しにカメラのストロボのような砲火の瞬きが届き、一拍おいて猛烈な爆音が響いてくる。左前方を走る第一戦隊の旗艦、戦艦金剛の後部主砲が火を吹いたのだ。空に低い蓋をしたような厚い灰色雲に味方の砲撃の閃光が反射する。

「我々は挟まれている。方位014、複数の敵重巡、単従陣でこちらに腹を向けている。クソッ」

艦のすべての挙動を預かる艦娘の那智は、右前方の艦影に目をこらす。曇り空を反射した灰色の海面に複数の真っ黒い影が並んでいる。那智の指揮官であるトビウメ。アツオ提督が双眼鏡を敵の艦列へ向けた時、その黒い影が一斉に小さなオレンジ色の爆炎を吐いた。

「敵が撃った！」

提督はそう悲鳴をあげて海図台の後ろへしゃがみ込む。

「来るぞー！」

那智の言葉が終わらぬうちに轟音とともに艦首の先の海面から水柱が立ち上り、空中へ放り出された水しぶきが重巡那智の前甲板へと降りかかる。水柱は復従陣で進む仲間の艦船の周囲にも幾つも噴き上がり、ついに敵の砲弾の一発が先頭を進む金剛の煙突で炸裂した。爆発の火焰とともに、上部構造の破片が舞い散った。

「くそ、旗艦被弾か……」

そう言い終わらないうちに、前方を航行している第二戦隊長座乗の重巡・摩耶からも小さな火柱が上がった。

「このままじゃ狙い撃ちだ」

那智はそう言いながら、既に砲塔を右前方の敵艦へと旋回させ始めた。

「戦隊長よりの指示はまだか？」

那智は耳元に手をやりながら首を振った。

「摩耶からの応答はない」

『提督、発砲命令はまだ？ このままじゃやられちゃうよ！』

後続の加古からの無線電話が響く。

——どうする？ もう反撃するべきだ。このままじゃ撃ち返す前に全滅だ

トビウメ提督が悩んでいる間に、前方の摩耶や金剛は左右の敵へ闇雲に主砲を発砲しはじめた。提督が前方の金剛や摩耶へ双眼鏡のピントを合わせると、どちらの艦も後ろのマストが被弾によって傾いていた。金剛に至っては長距離通信用の空中線が千切れて、爆風に煽られながら後部砲塔の上へ垂れ下がっている有様だ。

「第一、第二両戦隊の旗艦は指揮管制能力を失ったな……。ん！」

那智が耳へ手を押さえた。耳を凝らしていた那智の顔が一瞬で青くなった。

「どうしたの？ 指示が来た？」

羅針盤にしがみついていた提督が尋ねても那智は答ええない。

「那智さん、しっかりしろ！ 何が起きた！」

提督の声にはっとして那智は血の気の引いた顔を提督へ向けた。

「たった今、長距離通信を受信した。南回りで行った陽動の第三戦隊が壊滅した、と……。足柄……」

トビウメ提督は絶句した。

——敵主力の誘い出す陽動作戦は失敗したのか？

その提督の疑問に答えをだすように、無線電話が羅針艦橋へ届いた。

『不知火です。司令、方位310に新たな敵影を複数確認しました。距離およそ一万と三千。総数六隻、うち二隻は戦艦以上、残りも重巡以上。進路005で複従陣から単従陣へ移行運動中です。このままでは退路を断たれます。早急に対処の要を認めます』

我に返った提督と那智は右後ろの旗甲板へ飛び出て、新たな敵の姿を確認した。

「このままでは囲まれるぞー！」

那智が猛烈な砲声越しに提督に叫んだ。その時、重巡那智のすぐ右舷に着弾した砲弾が海面から巨大な水柱を持ち上げた。

反射的甲板へ這いつくばった二人の上に土砂降りの海水が襲いかかる。トビウメ提督は海水の流れをやり過ごしてから、那智を助け起こして羅針艦橋へと駆け込んだ。

「決めるのが貴様の仕事だ……！」

海水を飲んだのか、咳きこみながら那智が言った。恐怖にひきつった表情のままトビウメ提督はうなずいた。

「わかつてるさ……。ああ、わかつてる！」

——怖がるな……。たとえ失敗しても死ぬだけだ。だから怖がるなよ、たとえ死んだって二度目なんだから

トビウメ提督は無線電話の黒い受話器を掴んだ。

ヤムヤム島泊地の午後

さつき機長から、緊急着陸を試みる旨のアナウンスがあった時から、これは助からないかもれないと青年は思っていた。汗ばんだ手で、長年愛用してきたカメラを握りしめた。もう少しで着陸すると思われたその時、機体がストンと落ちるような落下感とともに自分の腹の中で内蔵が少し浮いた。きつく目を閉じ、自分の体が生卵のように潰れる感覚を想像しながら、来るべき衝撃を待った。

そんなぞつとする刹那の余韻が消えないうちに、耳には波音が響き、顔面に妙に暖かい風を感じ始めた。恐る恐る目を見開いてみて、青年は呆気にとられた。小さい頃から人間は死ねば天国へ行くかもしれないと聞いてはきたが、ここもある意味では天国かもしれない。熱い陽光。それを反射して真っ白に輝く砂浜。その向こうには透き通るようなエメラルド色の海。まるでビーチリゾートのポスターのような光景が青年の目を焼いた。

気づけば自分は大きな南洋独特のヤシの木陰に寄りかかっている。酷く蒸し暑い。着た覚えもない真っ白なスラックスに真っ白な上着、おまけに白い手袋……。噴きだした汗ですぐにも肌着やズボンが体に張り付いた。いつ着たのかもわからないが、これでは暑いはずだ……。

——これがいわゆる死装束つてもものだろうか？

事情がわからず茫然自失の青年の手が傍らに置かれたあるものに触れた。感触に覚えのあるもの。それもそのはずだった。今さつきの事故の時も握りしめていた古いフィルム式一眼レフカメラだった。「貴様が指令官か？」

不意に声をかけられ、カメラをてにしたまま驚いて振り返ると。焼け付く太陽の下、スタイルのいい黒髪の若い女がこちらをみつめている。サイドテールにした黒髪は女の足下に届くくらい長く、黒髪の下顔は非常に端正だったが、その眼差しは鋭かった。

「へ？ しれーかん？」

相手の言葉の意味が理解できない様子の青年を、その女は値踏みす

るように見つめながら言った。

「私は那智。よろしくお願いします」

「僕はトビウメ アツオです。よろしく……」

これが妙高級重巡洋艦、二番艦「那智」との出会いだった。

『提督が泊地に着任しました。これより艦隊の指揮をとります』

『戦艦及び巡洋艦ヲ基幹トシタ打撃艦隊ヲ以テ、ブーメラン島、ポート・フリスビーヲ封鎖中ノ敵艦隊ノ包囲網ヲ突破シ、撤退準備中ノ味方輸送船団ヲ救出セヨ』

どこぞ大洋の西の果てにあるという『本土の軍令部』からの電文を受け取ったのは、この南海のヤムヤム島泊地付きの司令官となって半年を経た頃だった。

白い詰め襟の制服に白いアドミラルキャップという、なんとも堅苦しい服装にもやつと慣れ、何度か大がかりな作戦にも参加し、トビウメ提督は艦娘やこの世界のことにもようやく理解が及ぶようになってきた。

深海棲艦とよばれる謎の生体兵器の侵攻を退けるための軍艦。そして、その軍艦の挙動の一切を預かる人型インターフェースともよべる「艦娘」。その艦と艦娘の指揮監督が自分に科せられた使命であることを理解するのに青年は随分と時間を必要とした。

その間、自分の秘書であり補佐役であり、そして配下の艦隊の旗艦でもある艦娘の那智は、ややきつい言動ながらも根気よく自分の立場や役割を教えてくれた。

——訳の分からない世界だが、死後の地獄にしちや悪くないか……

軍令部からの緊急電が届いたのは、この半年を思い返ししながら司令官公室の窓から港に停泊している重巡洋艦を眺めていた時のだった。

「行くのか？」

漢字とカタカナのタイプされた紙面を前にしばらく顔をしかめてみると那智はそう尋ねた。

深海軍の攻勢が激しくなりブーメラン島の守備隊を撤退させるた

めに輸送船団を送り込んだタイミングで周辺海域に無数の深海棲艦が湧出し、複数の戦艦を含む強力な深海艦隊によって島は完全に包囲されてしまったという。輸送船団側には護衛の駆逐艦が三隻随伴しているだけで、深海艦隊の包囲網を突破する事は不可能とのことだった。実際、一番近い島の基地から軽巡と駆逐艦を主体とする高速水雷戦隊が救助に向かったが、待ち伏せしていた敵艦隊の厚い砲火の前に、大損害を出して撤退したとの連絡が四日前に入ったばかりだ。「行くしかないでしょ。明後日までに近隣の艦隊はタロタロ島の半月湾に集結。連合艦隊を編成して総力を挙げて敵艦隊を叩くことになる」

トビウメ提督は二枚目の電文をつまみながら言った。

「明〇五〇〇までに主力艦隊に出航準備。工廠で念入りに整備をしてもらって」

「承知した」

姿勢を正して黙礼するや、那智はきびすを返して執務室をあとにした。

しばらくすると、工廠の方からクレーンの動く音がして、整備の喧噪が聞こえてきた。不思議なもので、本来ならば多くの作業員の姿が見えてしかるべきのだが、まるでオートメーション化の進んだ工場のロボットのように、無人のはずのドックでひとりでにクレーンが資材をつり上げ、至る所で溶接機が動き出して火花を散らしている。

思えば提督がこの不可思議な「妖精さん」という現象を理解するまですいぶんと時間がかかったものだ。それは艦娘を乗せた軍艦そのものにもいえることだった。

本来は数百人、場合によっては一千人を越える乗組員を要するはずの軍艦の操作も全て、艦娘一人が乗船すれば自ずと機械が勝手に動き出し、操艦も火器の制御も自動で行ってくれるのだった。艦内から見るそれはさしずめ、家具や食器が勝手に動き回るといふポルターガイスト現象に似ていて、着任当初は機関がひとりでに回りはじめたり、突然ガチャガチャと動き出す無人の対空砲座などを見る度にびつくりしたものだ。

執務室のドアがコツコツとノックさつたので、入室を許可すると、きりつとした眼光鋭い小柄な少女が踵を合わせて敬礼した。

「失礼します。司令、出撃命令が出たようですね」

陽炎型駆逐艦の艦娘、不知火だった。

「ぬいぬいか。うん、目的地はポート・フリスビー。一度タロタロ泊地にて連合艦隊を編成してから攻め込む」

「船団救出作戦ですね。かしこまりました。腕が鳴ります」

トビウメ提督は執務机に腰掛け、腕を組んだ。

「おそらく総力戦となるからこちらも相当な支援をする事になると思うけど、この島の近海の警備も必要だ。誰かを留守番させないとな」

不知火は目を細めた。こういう時、この駆逐艦娘はとても恐ろしい表情を見せる。

「司令、まさか不知火を留守番させるおつもりではないでしょうね？」

提督はぶんぶんと手を振った。

「いやいや、今回ももちろん出してもらおうよ。艦隊規模から考えてうちは主力艦隊ではなく遊撃部隊に組み込まれるだろうし。留守番は一人か二人だな」

「そうですね。最近、この近海でも敵潜の目撃情報がありますから」

不知火と出発について話していると、開いたままのドアの前を少女が一人通り過ぎた。少女は廊下を小走りにドアまで戻ってくると、執務室前でランニングしながら二人に声をかける。

「司令、明日出撃だつて？ ブーメラン島まで人助けにでしょ？ 私も頑張っちゃおうよ。港をもう一周走り込んでくるね」

健康的に日焼けした澁刺としたその艦娘、軽巡洋艦長良はその場で足を休ませずにステップを踏みながら提督に言った。

「長良もぬいぬいも、明日は朝早いから早めに準備をして、今夜はゆっくり休むように」

「はいー！」

長良はそう言うなりジョギングの続きに戻っていった。

「では、不知火もこれにて準備にかかります」

「はい、お疲れさま」

ドアを閉めようとして、不知火は一度こちらを振り返った。目つきには冷ややかな怒気が込められているが、頬はかすかに赤い。

「司令……。以前も申し上げましたが、くれぐれも他人がいるところ
でぬいぬいとはお呼びにならないでください」

「ご、ごめん……。つい……」

「では、失礼します」

不知火が退出し、椅子に座ってから提督はふと思い出す。

「でも、うちでは那智さんと初風以外、みんなぬいぬいって呼んでないかな？」

と提督は一人つぶやいた。

遊撃打撃艦隊の船出

明〇五〇〇。ヤムヤム泊地。

「みんなく、行つてらっしやくい。お土産は無理しなくて大丈夫よ〜」
明け方、東の海上にオレンジ色の太陽がかすかに顔を出しはじめていた。栈橋では留守番を命じられた駆逐艦娘の荒潮が両手を振っていた。

旗艦の重巡那智の羅針艦橋から荒潮へ敬礼してトビウメ提督はつぶやいた。

「あの様子じゃ、逆に何か買ってきてあげないと後が怖いね」

「座布団の下に画鋏を仕込むくらいじゃ済まないかもな」

隣に立った那智が笑いながら言った。

「タロタロ島に駆逐艦娘の喜びそうなお土産なんてあるかな？」

まあ、それはともかく、出発の時間だ。微速前進」

「よし、那智戦隊、出撃するぞー！」

那智が無線電話で命じ、艦隊はゆっくりとヤムヤム島泊地から外洋へと漕ぎ出た。今回は奇襲作戦であることもあつてラツパも汽笛もない静かな出港だった。

旗艦の那智を先頭に古鷹型重巡の加古、長良型軽巡の長良、陽炎型駆逐艦の不知火と初風が短従陣を組み、泊地ある入り江から外洋へ出ると艦隊は速度を上げて進路を北にとつた。

「進路010、よーそろ」

那智が告げると提督は双眼鏡を抱えたままうなずいた。

「いいか、加古。居眠りして列を乱すなよ。ふらつけばすぐわかるからね」

提督は無線電話の受話器を握りながら言うのと、ざらついた雑音混じりの加古の声がスピーカーから返ってきた。

「だ、大丈夫だつて。ちゃんと昨日は早く寝たんだから」

「だといいいけど」

提督は苦笑いしながらマイクを無線機に戻した。いくら寝ても寝足りないのが加古の悪い癖だ。

「島から遠くなってきた。そろそろ無線の使用を控えた方がいい」
羅針盤に寄りかかりながら水平線を見つめていた那智がそう助言した。

「そうだね。後続艦へ信号。ただ今より目的地到着まで無線封鎖」
「了解した」

那智がそううなずくだけで、左舷旗甲板のあたりで小さな物音がして探照灯がひとりでに動き、チカチカとモールの発光信号を後続艦へ送りはじめめる。後ろを走る加古からすぐに応答の合図があり、後続の不知火へ……。発光信号の伝号ゲームはゆつくりと末尾の初風まで伝えられた。

外洋に出ると船はピッチングとロールリング、すなわち波頭を乗り越えるかすかな横揺れと縦揺れを断続的に繰り返しながら速力を上げた。

足と腰だけでバランスをとりながらピッチとロールをやりすごしている、こちらを見ていた那智がくすりと微笑む。普段はわりと陰しい表情でいることも多いので、トビウメ提督は怪訝に思い顔をしかめた。

「何？　なんかおかしい？」

「いや……。ただ、いつの間にかあれが要らなくなったなと思ってな」

那智は笑いながら海図台の下に置かれた洗面器を指さした。トビウメ提督は思わず舌打ちする。

「思い出させないでよ……」

「ははは、最初の貴様ときたら、それは酷いものだったからな」

那智は大声で笑い出す。提督はげんなりしてまだ着任したばかりの頃を思い出していた。

最初に彼を襲った試練は船酔いだった。いくら基準排水料量一万三千トン誇る重巡洋艦とはいえ、大海原に漕ぎ出れば当然のごとく右へ左へと大波に翻弄される。その揺れは元の世界にいた頃からは船に乗りなれていない提督の三半規管を狂わすには十分すぎた。外洋に出て三十分で提督は艦橋にその日の朝食を「リバーズ」する破目になったのだ。それも、最初の航海の際には下手に我慢してしまった

ため、こともあろうにこの艦橋の床に、那智のいる前でやらかしてしまっただった。

「お、思い出すと……。なんかまた気持ち悪くなってきた……。ううっ」

提督は青ざめながら口元を押さえる。

「ははは、洗面器を持って、せいぜい私の見てないところでやってくれ」

まさか死んだ後も船酔いに悩まされるとは思ってもいなかった提督だったが、一つだけ感心させられていることがある。それは、初めて床に吐いたときも、その後の航海で何度も船酔いに苦しめられ洗面器を抱えてトイレへ駆け込んだ時も、ひきつった表情こそ浮かべていたが、この那智は一度も自分を叱責したことはなかった。

艦娘はその艦と一心同体の存在だといわれている。その船の中で粗相をするというのは、艦娘とつてもすこぶる不快なことに違いはない。訓練や作戦等、こと仕事のことでは鬼のように怒ることもある那智だが、このことでは自分を一度も怒らなかつたその自制心に提督は内心とても敬服していた。

体というのは不思議なもので、航海も数を重ねるうちいつしか船酔いに悩まされることはなくなっていた。少なくともこの重巡那智に乗っている時に限っては。

日が昇り、空は快晴。生前の世界の太平洋の黒潮のように濃く蒼く、海は穏やかだった。

特に異常がない場合は階下の艦長室や甲板下の士官室でくつろいでもいいのだが、那智と一緒にだと、なぜか艦橋に入り浸ってしまうことが多かった。

「さてと、あとはお任せしてちよつと外へ出てくるか」

トビウメ提督は双眼鏡と前の世界から携えてきた愛用のカメラを首に下げて立ち上がった。

「ちよつと写真を撮ってくるよ」

「相変わらず好きだな」

那智は笑う。

「これが唯一の趣味みたいなものだからね」

「好きにしろ。だが、このあたりは敵潜も多い。適宜、之字運動をするべきだが」

「ああ、そうだな。そのあたりは任せるよ。何かあったらすぐ呼んで」
トビウメ提督は薄暗い艦内から艦橋の後ろにある旗甲板へ出ると、南海の強烈な日差しが目を焼いた。黒い煙を吐く太い二本の煙突越しに、白波を立ててついでくる重巡加古の姿が見える。双眼鏡で加古にピントをあわせてみる。前甲板、艦橋と観察し、艦橋構造物左の見張り所で加古を見つけた。

どうやらまだ昼寝をするつもりはないようで、こちらに気づき、セーラー服の裾をはためかせながら大きく手を振ってきた。提督も手を振り返して自艦の煙突越しに重巡加古の艦影を正面からカメラのファインダーにおさめてシャッターを切った。

旗甲板を右舷の方へ歩いていくと、遙か遠くの洋上に、船と平行するようにキラキラと海面から飛び上がる無数の光が見えた。再び双眼鏡を目に押しあててピントを合わせると、思ったとおりそれは海面上を飛ぶトビウオの群だった。こちらの世界にも同じように魚や海鳥がいることに驚いたものだが、いつか艦橋右舷側の見張り所で備え付けの70ミリ双眼鏡を覗くのに夢中になっていたときの事を思い出した。

それはまだ着任して間もない頃、対潜哨戒訓練のため那智と初風、荒潮を伴い練習航海に出たことがあった。訓練中、ウミウの群が魚を追い回す様子を双眼鏡で眺めていたときのことだ。提督はふとそのはるか後方に奇妙なものが浮かんでいる事に気がついた。見れば、海面から黒くて細い物干し竿のようなものが一本直立している。

不思議に思っただ双眼鏡のピントを合わせると、それは動いているらしく、白いウェーキを引きながらこちらへ向かって進んでいるように見えた。

「あのさ、那智さん。海から茶柱みたいなのが立ってるんだけど、あれ何かな？」

「なに!? どれだ!」

那智は珍しく取り乱して、提督が指さす方角へ身をのりだした。

「馬鹿! あれは潜水か……」

潜水艦だぞと言いつ終える前に海面下に白い筋が四本、猛スピードでこちらに向かつてきたのだ。

「くそ、魚雷だ!」

那智は即座に艦に回避運動をとらせつつ、無線電話で僚艦に魚雷接近の警告を発した。白い筋はみるみる近づいてくる。

「転舵、転舵、取舵一杯だ」

艦内にけたたましいブザーが鳴り響き、艦首がゆつくりと左に向き始めた。ゆつくりとしたシーソーのように船体が左に傾く。

「逸れてくれよ! 逸れてくれよ!」

提督も半ばパニックになりながら四本の迫りくる白い筋を見据えた。真っ青な海面のすぐ下を、ジェットバスの泡のようなものを曳きながら二本の魚雷が重巡那智に接近する。欄干にしがみつきながら提督はじーっと魚雷を見据えた。左へと進路を変えつつあるこちらの艦首付近に白い筋が突っ込んでくる。

「ああ、もう少し、もう少し……」

祈らんばかりの提督をよそに、二本の雷跡は左舷の第三砲塔下のわずか十メートルばかり右を、ウエーキを残して舳先の方角へ通り抜けていった。

「よし、逸れた」

「た、助かった……」

艦橋横の見張り所で安心のあまり脱力した二人だったが、那智はすぐに次の危機に気づいた。

「まずい初風が!」

那智はすかさず左舷側の見張り所へと走る。提督も那智を追って艦橋から飛び出したとき、ちょうど後続を走っていた初風の舳先から真っ白な水柱が吹きあがった。

「しまった!」

那智と同じように取舵で魚雷を回避しようとしていたが、間に合わ

なかつたようだ。

「初風ええええ！」

約一キロ後方を走る初風に届くわけもないのに、提督は絶叫した。那智が無線電話のマイクを握って叫ぶ。

「荒潮、対潜戦闘だ。敵潜水艦を攻撃しろ。本艦は初風救助に向かう！」

「やっぱり、これ潜水艦の攻撃よね？ 荒潮、華麗に撃沈よ〜」

何とも緊迫感のない応答とともに、殿にいた荒潮が速度をあげて前へでた。荒潮の前部主砲からポツポツと茶色い煙が吐き出されてから、一拍おいて砲声が那智艦上の提督達に届く。すぐに提督の言う『茶柱』の周囲に小さい水柱が二本立ち上った。形勢不利と見たのか、その『茶柱』が遠方へと避退を始めた。

「逃がさないって言ったでしょう？」

「ご丁寧に無線電話越しに呼びかけながら、荒潮は敵潜水艦の潜望鏡を砲撃しつつ追いかけていった。

一方の駆逐艦初風は、艦首の正面を大きな金槌で叩き潰したように大きくひしやげていた。

『被害状況ヲ報告セヨ』

無線電話に応答がないので、発光信号を送るとすぐに初風の艦橋横から応答の信号があつた。

「何て言っている？ 初風は大丈夫か？ ねえ？」

チカチカ光るモールス信号が理解できない提督は慌てて那智に尋ねる。那智は少し安心したように肩を落とした。

「自力航行は厳しいが、すぐに沈む心配はないそうだ。急いで救助するぞ」

その後も激戦や危険な状況はあつたものの、思い返せばあれほど慌てさせられたことはなかつた。

「あの時は参つたなあ……」

トビウメ提督は独りそうつぶやき、苦笑いを浮かべた。あのあと深海軍の潜水艦は何か荒潮が追い払い、艦首を吹き飛ばされて中破した初風を無事にヤムヤム島の港まで曳航してることができた。だ

が、すっかり腹を立てた艦娘の初風は艦が入渠しているその後一週間、一切口をきいてくれなかったのだった。

——今回もなんとか無事に済めばいいが

提督はひとりそう思いめぐらしながら、前マストを見上げると、之字運動開始を命じる信号旗がゆっくり信号桁を昇ってゆくところだった。

タロタロ島泊地、地域標準時一五一〇時。太陽がかなり西に動きやオレンジ色を帯はじめた。之字運動を繰り返しながらの航海だったため、やや時間がかかったものの、トビウメ提督指揮下の艦隊は敵の触接を受けることなく、無事タロタロ島東側に開けた泊地である半月湾に到着しつつあった。

タロタロ島には、今回の作戦の為に連合艦隊の臨時司令部が置かれていて、湾内にはすでに大小多くの艦船が錨を下ろしていた。

「へー、あれは金剛型だな。二隻も来ている。その向こうには扶桑型もあるよ」

双眼鏡を覗きながらトビウメ提督は少し興奮気味に言った。

「敵の包囲艦隊は強力な部隊らしいからな。軍令部もそれなりに本気なのだろう。向こうには潜水艦がある。第八艦隊も来ているようだ。ん、あれは……足柄も来ているようだ……」

那智は湾内の栈橋に係留されている重巡洋艦を目に留めてつぶやいた。

那智はタグボートの誘導に従い所定の位置に停船させると、船は艦首と艦尾から一本ずつ投錨した。後続の加古や不知火、初風が停泊の準備を終えるのを見届けると提督は書類鞆を持って艦橋を後にした。那智が前甲板右舷側の折り畳み式舷梯を展開させ、後甲板から内火艇をクレーンで海面へと下ろした。甲板から舷梯を下って那智と一緒に内火艇に飛び乗ると、指揮下の艦のそれぞれの舷梯へ艦娘を拾いにボートの舳先を向ける。

「いや〜眠かったなあ〜。でも寝てないからね！ ホントだよ、ホン

トだよ！」

棧橋に向かう船内で加古が一生懸命に弁明する。

「ええ〜？ マジで？ 本当かな〜？ ぬいぬい、後ろから見てもどうだった？」

内火艇の操舵輪を握りながら提督は意地悪く笑った。

「進路のふらつきや之字運動に乱れは認められませんでした。恐らく加古さんは無罪と思われます。ただ……」

「ただ？」

「きつと起きているので精一杯だったでしょうから、加古さんの分まで対潜警戒に気を配るのが大変でした」

「ぬいぬい、そりゃ酷いよ〜」

加古が叫び、艇内の一同がどつと笑う。

「指令官こそ、どうせ仕事サボって写真ばかり撮っていたんじゃない？ 那智さん、どうだった？」

初風が風でくしゃくしゃになる髪を必死で押さえながら言った。

「いや、その、僕は……」

狼狽をする提督を見て那智はニヤニヤ笑う。

「ふふふ、そうだな。確かにこいつは潜水艦より海鳥の姿に夢中になっっていたな」

「やつぱり思ったとおりね」

「落ち度だらけですね。司令」

「司令官、ずるいよ〜」

「司令にも甲板でトレーニングすることを勧めるわ」

「あーそこまで！ 接岸するから各自、上陸の準備用意！」

一番の悪者にされた提督は、大声でそう号令して内火艇を棧橋に横付けした。

「各自補給と給油を終えたら休息時間とする。市街地へ出るのもいいけど、全員2100までには宿舎へ戻るように。以上解散」

提督はそう命令して内火艇のもやい綱を棧橋に結びつけた。

「やったー！ これで昼寝ができるよ……」

「不知火、町へ出て何か食べない」

「いいわね。ご一緒にします」

「夕方のジョギングに行くかな」

加古や長良、駆逐艦達がそれぞれ棧橋へあがってゆくので提督は一人残った那智へ振り返った。

「あれ、行かないの？」

「貴様はこれから作戦会議だろう？ 私がいなくて大丈夫なのか」

——どうしようかな？ 一緒に来てもらえば心強いけど……

そうこう考えていると、棧橋からロングヘアのスタイル良い女性が内火艇の脇へとやってきた。

「姉さん、久しぶりね。調子はどう？」

「ああ、足柄か」

妙高型重巡、三番艦の足柄だった。

「岸壁から姉さん達の姿が見えたから」

足柄はそう言つて微笑んだ。

「やあ足柄さん。こんには」

提督は鞆を抱えながら棧橋へ飛び移ると声をかけた。那智の妹であるこの足柄とは以前遠征の際に顔を合わせたことがある。

それにしても、妙高型の艦娘姉妹はつくづく美しい艦娘だとトビウメ提督は思った。那智といい足柄といい、生前の世界でもそうそうお目にかかれない美人だ。特に一見物腰の柔らかい足柄など、街中で見かければ自分でも思わず振り返ってしまうかもしれないくらいだ。だが実のところ、那智にしろ足柄にしろ、その内面はかなりの武闘派で鳴らす艦娘であり、足柄に至っては無類の海戦狂だった。足柄は特に提督連中からデートの誘いも多いそうだが、本人の関心は一にも二にも砲雷撃戦であり、そのギャップについてゆけない多くの提督が涙を飲んだという。

「トビウメ提督、ご無沙汰しております」

足柄は踵を打ち合わせて姿勢を正すと、提督へ儀礼上の敬礼した。提督が答礼すると足柄は姿勢をくずして微笑んだ。

「姉さん。その後提督とはうまくやってる？」

「フーン！ ぎりぎり及第点といったところだ。それに私はなにせ忍耐

強い方だからな」

「何それ？　那智さん、それ聞き捨てならないんだけど」

「まあまあ、でも姉さんも提督も楽しそうで良かったわ」

さりげなくボロクソに言われた提督がつかかると、すかさず足柄が場を取りなした。

「足柄、お前も今回のブーメラン島作戦に参加するの？」

「ええ、昨日到着したわ。戦場がわたしを呼んでいるわ！　それはそうと、久しぶりだし今夜一緒に一杯やらない」

足柄はお猪口を傾ける仕草をしながら那智を誘う。

「いや、それは……。今夜はどうなのだろう」

歯切れ悪く那智は遠慮がちに提督の方を見る。

「別に今日は何もないよ。どーぞ、どーぞ」

——こういうことには急にしおらしくなるんだからな

「ほら、トビウメ提督もまあ言ってるんだし、行きましょーよ、姉さん」

「いいか。わたしは、作戦前は飲まない」

「はいはい、じゃあ提督、姉さんを借りますね」

「そ、その言い方はなんだ？　それではまるで……」

那智がなぜか狼狽したように顔を赤くした。

「いいよ、いいよ。いつともう帰ってこなくてもいいよ」

先ほどの意趣返しとばかりにトビウメ提督は笑って言ってやった。

「貴様よくも……。ああもう、行くぞ足柄！」

怒りのためか那智は顔を真っ赤にして、足早に棧橋を歩いていった。

妙高型姉妹を見送り、提督は棧橋に一人になった。

「やとと……」

おのずと表情が硬くなってくる。連合艦隊が編成されるため、これから別の泊地や鎮守府の提督達と顔を合わせることになる。

自分以外の提督と相対するとき、最も「生前」のことを強く意識させられる。艦娘はいくら人の姿形をしても船の精たる艦娘であり、他方、提督は人間である。正確に言えば「元人間」である。そして、これから作戦会議が開かれる。すなわち人間同士の仕事が始ま

る。前の世界の時から、人間とやり合うことはトビウメ提督にとって
苦痛を伴う作業だった。

作戦会議

一七三〇時。昼間の焼けつくような太陽がオレンジ色に変わり、水平線へ沈もうとする時刻。日が沈んでもうだるような蒸し暑さが続くヤムヤム島とは異なり、ここは夕方以降、急にさわやかな風が島を吹き抜けてゆく。

泊地の港湾施設の一角に設けられた木造の白い洋館にタロタロ島の基地司令部は置かれていた。トビウメ提督が時間通りにこの洋館の応接室兼会議室へと通されると、既に数人の艦隊司令や参謀と思われる人々が席に着いていた。皆、自分と同じく昔の記録写真に出てくるような白い軍服に身にまとっている。皆、自分と同じく何らかの災難に出くわした直後に飛ばされてきた仏さん達だ。

トビウメ提督は敢えて後ろの隅の空席に腰をおろした。窓の鎧戸は開け放たれており、涼しい夜風が吹き込んでくる。その後、さらに数人の提督らがやってきて、室内には十余名の男が席に着いた。

最後の一人は他の提督とは異なり、詰襟の上着を着ずに、略装の白いシャツ姿に濃い色眼鏡をかけたまま部屋に現れた。その上、その男から立ち上る強い香水の臭いがトビウメ提督の鼻をついた。周囲の提督たちも少し顔をしかめて鼻に手をやるが、そのシャツ姿の提督は気にする様子も無く、トビウメ提督の斜め前の空席に席をおろした。

——こんな香水つけすぎで、一体どこの司令官だ？

トビウメ提督はしばし口で息をしながら香水の悪臭を我慢していると、入口から制服に金モールを付けた二人の太った年配の男達がやってきて皆の前に立った。

「遠路はるばるご苦労だった。この度、連合艦隊司令長官を拝命することとなったモトヤマである。字が逆であれば尚よかったのだが、まあこればかりは勘弁してもらおう」

一部の提督連中が控え目に笑い声を上げる。トビウメ提督には、特に面白い冗談とも思えなかったのでそのまま口を閉じていた。香水臭い斜め前の提督も同様に口を一文字に曲げたまま反応を見せなかった。

「そして、こちらが軍令部から進出してきたフルカワ作戦参謀だ」

「紹介に預かったフルカワだ。応召に感謝する。諸君らの戦歴は聞いている。今回、軍令部は苦心の末、必勝の作戦計画を練り上げた。諸君の助力により、是非、暁の水平線に勝利を刻んでもらいたい。金剛、例のものを」

「イエース！」

作戦参謀が手を叩くと、場違いな黄色い声がドアの外から発せられ、一人の艦娘が書類の束を抱えて入ってきた。巫女装束のような上着に黒いスカート。白い肌ブラウンのロングヘアが魅力的な美しくもかわいらしい艦娘だった。

金剛が入ってくると提督達は色めきたった。

「おい、あれが第三戦隊から今回引き抜いたという金剛か？」

「あの有名な高速戦艦姉妹の長女だぞ。評判以上の美人だな」

「うーん、やはり戦艦娘はいいな」

金剛は提督一人一人に作戦計画書を配って歩いた。

「へい！ エブリワン。よーくりーディングして、頭にいれてよネー」

——戦艦娘ってほとんど関わったことなかったけど、なんというか華やかさが違うな……

トビウメ提督も金剛から書類を受け取りながら、妙高型とは違った魅力を持つ艦娘を前につい鼻の下が伸びてしまう自分に気付きちよつと恥ずかしくなった。書類を皆に配り終えた金剛は次に氷の浮かぶアイスティーを配り始めた。

「さて作戦図Aを見てもらいたい。承知の通り、目下ブーメラン島より撤退準備中の輸送船団がポート・フリスビーにて包囲攻撃を受けている状況である。深海軍の陸戦隊はさほど強力ではないが、我が方は補給線を断たれており、長期戦となった場合は危機的な状況となることは間違いない。現在、深海棲艦のは軽空母4隻を含む包囲艦隊をブーメラン島北方に展開し、ポート・フリスビーを完全に封鎖している。敵艦隊は空母を擁してはいるが、幸い敵の航空攻撃は小規模で、被害は軽微である。そこで、敵が本格的な攻勢に出る前に、我が方の強力な打撃艦隊により敵包囲艦隊を撃滅し、輸送船団を救出すること

が本作戦の目的である」

フルカワ作戦参謀はホワイトボードを引っ張ってきてブルーメラン島のポート・フリスビーと深海軍の位置をマーカーで色付けする。

「敵は大きく分けて三つの群れに別れて展開している。まず島の北西には戦艦二隻を含む強力な艦隊が展開しているうえ、島にもっと近い港の北方には重巡と水雷戦隊を主力としたグループがパトロールしている。最後のグループはシューズ・ベラ島に最も近い島北西に展開している部隊でこのグループは空母4隻含む機動部隊と思われる」

「空母が先に出てきているのか。こちらの空襲を警戒しているのか……」

隣に座っていた提督がそう独り言を言った。

「艦隊編成を発表する。第一戦隊、第二戦隊は戦艦を基軸とした打撃艦隊およびその護衛部隊として北方より包囲網の中央に突入する。巡洋艦と駆逐を主軸にした第三戦隊は島を南から迂回し、敵戦艦部隊に接近、これと接触の後、東方へ避退。敵艦隊を島の近海よりおびきだしてもらおう。第四戦隊は空母とその護衛の駆逐艦より編成し、島の西方に展開している敵機動部隊を北方より叩く。詳細は作戦図Bから作戦図Fを参照されたい」

トビウメ提督が書類に記された編成表を確認すると、予想に反して自分達は第二戦隊に組み込まれていた。第二戦隊の役割は主力部隊の護衛として戦艦とともに島の北からポート・フリスビーへ突入する役割だった。

——うちは完全な遊軍だから、てっきり第三戦隊だと思ってたんだけどな……

トビウメ提督が自分の役割を正しく理解するため、第二戦隊の編成表にじっくり目を通していると、目の前の香水のきつい提督が突然舌を鳴らして立ちあがった。

「気に入らないな。先遣隊、つまりうちの第八艦隊の配置命令。これは一体何だ？ この海域には敵が強力な対潜網を引いているから潜水艦での接近は危険だと今朝はつきりと報告した筈だ。それにも関わらず、潜水艦による散開線警備をその真上に配置しているところを

見ると、深海棲艦の対潜能力をナメているとしか思えない。はつきり、言つて、敵の対潜哨戒能力は我々よりも高い。それ以上に信じられないのは、敵の布陣が五日前にこのおれが報告した時点からまったく更新されていない点だ。参考にする情報が少し古すぎやしないか？」

五日前と聞いて提督達はどよめいた。作戦は早くとも明後日以降となる。一週間前の情報を元に作戦を実行するのはあまりに無謀に思えた。

第八艦隊と聞いて、トビウメ提督にもこの香水臭い提督の正体がやっと判った。目の前に座っている男は近辺の鎮守府ではその辣腕ぶりでも有名な第一潜水戦隊司令官だった。トビウメ提督は本の名前こそ忘れてしまったが、この世界にとばされてから素人だてらに海上なんとか論をとかいう戦術理論書を書いた男らしい。

「カメヤマ提督、皆を不安がらせるのはやめてもらおう。敵艦隊の動向は基地より毎日、偵察機を飛ばせて報告させている。それを踏まえての作戦立案だ」

作戦参謀が苛立ちもあらわに反論した。

「そうか。ならば今日正午、ブーメラン島南方120哩の地点を深海群の艦隊が北北東へ進行していたことをご存じか？ 島南方で哨戒中の伊401が三十分前に、うちの大鯨に打電してきた。それによれば敵艦隊、およそ20ノットで北上中。戦艦夕級一、重巡五、駆逐艦多数を含む艦隊だ。幸い、空母はないらしい」

「む、無論、敵の増援も、け、計算に入れての作戦だ。大きな変更は必要ない」

トビウメ提督には、狼狽する様子を見せた作戦参謀もGF長官も敵の増援の件を計算に入れていなかったように思えた。不安の色が一挙に室内を覆った。カメヤマ提督は諦めたように溜息をつき、声のトーンを落として言った。

「悪いことは言わない。南方から回り込む第三戦隊にも複数の重巡を加えて、敵の強力な艦隊が援護に出てくることに備えるべきだ。さらに言えば、フリスビー島の南方には深海棲艦の湧出ポイントがある。

そこからの補給線を断ってから艦隊決戦を挑んでも遅くない」

参謀と司令長官はそろって首を振った。

「馬鹿な……。今は急を要する。それに、せっかくの正面戦力を分散することになる。第一、第二戦隊の兵力をよそにまわす余裕はないぞ」

「そうだ。そもそも高火力艦の集中運用こそ、本作戦の重要な鍵だ。軍司令部もそう指示してきている」

「そうか、ならば軍令部の言うとおりにすればいい。ただし、この機械的な潜水艦配置だけはのめない。二十哩の均等散開線配置なんて、二隻以上でも敵に探知されれば芋ずる式に次々と探知されて全滅する可能性もある。お互い、前の世界では縁もなかつた軍人の真似事をしてるんだから、少しは勉強する事だな」

カメヤマ提督はそう言うと言形式的にだらしない敬礼だけを残して応接室から出ていった。そんなカメヤマ提督の後を、それまでドアの外で待っていた、勾玉を首にかけたエプロン姿の少女が心配そうに追いかけていった。

「おいおい、大丈夫なのか？」

「俺のところの第三戦隊はヤバいぞ……」

急に室内は騒がしくなる。

「静粛に、静粛に。作戦に大幅な変更はない。まず第三戦隊、明一八〇〇出航。第一、第二戦隊は明二二〇〇に出航する。なお、敵の増援や空母機動部隊の動きに備え、空母翔鶴を加えて第四戦隊を編成し、正面部隊に随行させることにする。これより後は予め任命した各戦隊長の指示に従うように。以上」

作戦参謀はそう声を張り上げ、半ば強引に作戦会議はお開きとなった。

軍港内の艦娘用宿舎は先についた艦娘達によって満室となっていたため、トビウメ提督と指揮下の艦娘達はタロタロ島の市街地にある唯一のホテルに宿泊することになった。

「はーい、みんなゆつくり休んでね。解散」

「あー、フカフカのベッドの上で寝られるー。ヤッター!」

「不知火、先にシャワー浴びるわ。提督が部屋に押し入って来ないよ
うに見張ってよね」

「そうですね。注意するわ」

フロントから階段を上ってゆく艦娘達を見送りながら提督はうんざりして肩を落とした。

「覗くだけの気力なんかもうないよ……。あ、長良ちゃん、整理運動をするなら迷惑になるからロビーじゃなくて外でやったほうがいいよ」
「はい」

「あんまり、無理しないで早く寝るんだよ」

外へ駆け出す長良の背中にそう声を掛けてトビウメ提督はフロント前のソファアーにどっかりと腰をおろした。

「どうした、なにか悩み事か?」

向かいに腰かけた那智が気遣うように言うので提督は溜息をついて首を振って、作戦指令書を那智に手渡した。

「これが作戦計画。ただし敵状は五日前のものだって」

那智は顔をしかめて書類をめくった。

「戦艦のお守りか……。作戦はともかく、この西の沖合に散らばっている四隻の空母が気になるな」

「そう? ああ、そういうえば飛行機、嫌いだったよね」

「それもそうだが……。軽空母ばかりの機動部隊にしては一隻一隻が散らばりすぎだ。うーむ」

「僕にはよくわからんよ……。ただ、なんか不安だね」

そう言って提督はソファアーに深くもたれかかった。

「貴様がそんなザマで私達はどうすればいいんだ? もっとしっかししてくれ」

「そうだね。よし明日に備えて寝よう!」

そう言って二人が立ち上がると、偶然階段を下りてきた二人組とはち合わせた。嗅いだ覚えのある独特な臭いが鼻をついたが、トビウメ提督と那智はすかさず敬礼する。相手は香水のきついあのカメヤマ提督と勾玉を下げたおっとりとしたエプロン姿の少女だった。少女

の手提げ袋には、キャベツやらジャガイモやらの野菜や果物がはちきれんばかりに詰め込まれている。

「おお？ お疲れ。おたく、何戦隊だ？」

答礼しながらカメラヤマ提督は尋ねる。

「我々は第二戦隊です。通常はヤムヤム島の遊撃打撃艦隊にいます」
「そうか……。つまり説教だが、空中線の手入れだけは怠るな。たとえ戦闘中でもだ。切れたらすぐ補修しろよ。情報さえ入手できれば生き残れる可能性が高まるからな」

「はい、ありがとうございます。もしかして、これから出発ですか？」

トビウメ提督は相手が手に持った大きな旅行鞆を見て尋ねた。

「ああ、すぐに哨戒任務に就く。お互いもし生きて会えればまた会おう。では失礼する」

そう言つてカメラヤマ提督は色付き眼鏡をはずして笑顔を見せると足早にホテルを出ていった。付き添いの勾玉少女も深く一礼すると急ぎ足で自分の上官の後を追っていく。カメラヤマ提督の色付き眼鏡の向こうの素顔は、トビウメ提督がイメージしていたよりもはるかに優しげな眼差しの男だった。

「連れの彼女は潜水艦娘かな？」

「いや、あれは第八艦隊旗艦の潜水母艦、大鯨だ」

階段の踊り場から提督と那智は誰もいなくなったホテルのロビーを見下ろしていた。

「もし生きていれば、か……。一回死んだ人間と一回沈んだ船……」

「なんか不思議なものだね」

「そうだな……」

トビウメ提督は何か言葉にできない重苦しい気分を抱きながら那智を伴つて自室へと向かった。

翌日は朝から、燃料、弾薬の補給、第二戦隊の戦隊長や他の提督等との打ち合わせに追われ、気づけばもう夕方となっていた。

トビウメ提督が停泊中の重巡那智へ戻ったのは夕方遅くになってからだった。中甲板にある士官会議室には仲間の艦娘達が全員そろっていた。

「さすがに暑いね。加古、そっちの窓開けて」

そう言いながら提督は自分に近い方の丸窓を開けた。潮の香りが室内に入ってくる。

「司令、遅いわ。最低限時間くらい守りなさいよ」

遅れて来た提督にさっそく初風が手厳しい一言をくらわせる。

「お、お兄さん、これでも忙しかったんだよ……」

「わかったから貴様も早く席につけ」

ヘトヘトになっているため、泣きそうな顔で言い訳する提督を那智が制して、作戦説明をはじめた。

那智が予定されている艦隊行動を一通り説明し終わると、不知火が手を上げた。

「司令、やはり敵艦隊の情報不足しているようですが、大丈夫でしようか？」

「うん、長官達は、ブーメラン島の近海で適宜、水偵をつかって情報を把握する予定らしい。ただこちらも自主的に偵察機で周囲を警戒する必要があるだろうね」

「はい、いいですか？」

次は長良だ。

「翔鶴さんが合流するってお話ですけど、どこかで合流するんですか？」

この泊地にまだ翔鶴は着いていなかった。

「空母翔鶴は現在、シューズ・ベラ島で待機中。島の沖合で合流予定だっつて」

「洋上で落ち合うのですか？　あまりよい判断とは思えませんね」

「え？　そうなの？」

不知火は珍しく表情を曇らせたので提督は思わず聞き返してきた。

「他方面から出発した艦隊が洋上で待ち合わせるの、実際は図上演習のように簡単ではありません」

「そうだな。その昔、わたしたちはその失敗を何度もしてきた」

不知火の言葉を後押しするように那智も腕を組んでうなずいた。

「困ったな……。長官からの指示だからな」

「それはやむをえないだろう。とにかく最善を尽くすのみだ」

那智のフォローで一同は納得したようだった。

「さて緊急時の連絡方法の確認だけど、いつもどおり原則は発光信号により。状況が許せば無線電話と両用でよろしく。あと那智さんと加古にお願いだけど、戦闘中にはいろいろと忙しいと思うけど、空中線の保護と補修に気を配ってくれ。うちの艦隊で一番マストが高い二人が通信の命綱だから」

那智は昨夜のカメヤマ提督の一言を思い出したのか、無言でうなずいた。

「えー、そんなの戻ってから泊地で直せばいいと思うけど。戦闘中は忙しすぎるよー」

案の定、加古がブツブツ不平を言うが、提督も那智も取り合わないのので、加古は渋々承諾した。

「とりあえず軍司令部よりの指示は以上。もう間もなく出航だ。みんなよろしく」

そう言つて提督は解散を命じて舷窓を閉じた。

一八〇〇。一斉に汽笛の音が鳴り響くとともに目の前数百メートル先を重巡がゆっくりと湾外へ向かって進みだした。妙高型三番艦の足柄だった。周囲の駆逐艦もそれを追うようにゆっくりと走り出す。

トビウメ提督は重巡那智の上甲板にある通風筒に腰掛け、ラムネ瓶片手に第三戦隊の勇姿を眺めていた。昇降口から甲板へ上がってきた那智がふと足を止めて第三戦隊の船出を見送る。提督が双眼鏡で重巡足柄を観察すると、夕陽の逆光になってよくわからなかったが、艦橋の窓越しに手を振っている女性の影が見えた。那智も軽く手を振り返した。足柄から太い汽笛が響いた。

どうやら昨夜のカメヤマ提督の警告が気になったとみえて、モトヤマとフルカワは急遽、第二戦隊に配属予定だった重巡足柄を第三戦隊の旗艦に任命したのだった。

あまりに付け焼き刃な司令部の対応にトビウメ提督は呆れたたも

の、第三戦隊の提督たちは新戦力の追加を歓迎しており、那智によれば別動隊の指揮艦に命じられた当の足柄自身も大喜びだったという。

「心配かい？」

出航しつつある妹の艦影を黙って見つめる那智へトビウメ提督が尋ねると、那智は外洋の方へ顔を背けて言った。

「そう思う時期は、とうの昔に過ぎたさ……」

「そう……」

提督は結露で汗をかいいたラムネの空瓶を手に立ち上がった。

「今回の目的は敵の撃滅じゃない。ポート・フリスビーで待っている仲間の救出だ。必ず成功させたいね」

提督の言葉に那智は黙ってうなずいた。

提督は夕焼けに向かってたたずむ那智の横顔へさりげなくカメラを向けそつとシャッターボタンを押した。

触接

二三〇〇時、タロタロ島西方海上

戦艦金剛を旗艦とする連合艦隊は時速17ノットで進路を東北東にとつて進んでいた。空には満天の星が広がり、波は穏やかだ。無線封鎖中なので、連絡はもっぱら信号灯によるもので、重巡那智は第二戦隊旗艦の重巡摩耶の後方一キロを航行していた。潜水艦の攻撃を警戒しているようで、時折旗艦より之字運動準備の指示が前方よりチカチカと送られてきた。信号の度、ジグザグに回頭する必要がある、回頭するたび、艦はゆっくり左右に傾く。

「まだ先は長い。ここは私が受け持つから、公室で少し休んでいてもいいぞ」

艦橋の羅針盤の前で腕を組んでいた那智が言った。

「いいよ、なんか悪いし……」

提督は海図台の横に座ったままあくびをかみ殺した。

「肝心なときに眠っていられたらこつちが困る。休めるときに休むのも戦いのうちだ」

「いや、確かに眠いことは眠いんだけど……。なんか緊張しているせいか、寝付けそうになくてね」

それを聞いて那智は笑った。

「ハハハ、つくづく肝っ玉の小さい男だな、貴様は。私の知っていた日本男児はもつと剛胆だったぞ」

「時代が変わるっていうのはそういうことなんだよ」

——そもそも、軍隊経験もない人間が昔の軍人と同じようにいくはずがないさ

トビウメ提督は欠伸をしながらそう言い返し、左腕に巻いた革バンド付きの防水時計をのぞくと、蛍光塗料の文字盤はもう日付が変わろうとしていることを告げていた。

艦隊はこのあと大きく北へ進路を取り、北方から島へ突入する予定となつている。突撃予定は明一二三〇だった。那智の言うとおり、明日こそ長い一日になりそうだ。

「やっぱり、お言葉に甘えて少し休ませてもらおうかな」

「ああ、それがいい」

「じゃあ、士官室にいるから。何かあったらすぐ呼んで」

トビウメ提督は那智に艦橋を託すと、階段を降りて士官室への廊下をよろよろと歩いていった。

艦内は廊下の照明以外は灯火管制で消され、ただ機関のうなる重低音が響くだけだ。

軍艦らしからぬマホガニー調の瀟洒な内装に白いクロスのかげられた長いソファやテーブルがいくつも並んだ士官室はまるで高級ホテルのレストランのような雰囲気の一部屋だった。かつては士官の食堂としても使われていたという。

蒸し暑いので扇風機のスイッチをいれてソファーに寝ころぶと、トビウメ提督は巨大なこの艦のなかで、今いるのは提督と艦娘の那智の二人だけだということに今更ながら思い出す。提督の乗っていない他の僚艦はみな艦娘一人が艦橋に佇み、休む間もなく艦の制御を行っている。前の世界で起きたようにいざ沈んでしまうときには大勢の人命が犠牲にならなくてよいが、艦娘というのはこのうえなく孤独な仕事なのだ。提督は思った。

疲れていたのか、いつの間にか眠ってしまったようで、トビウメ提督が突然のブザーで目を覚ましたのは、深夜二時過ぎのことだった。

「貴様、起きているか？ 艦橋に来てほしい」

飛び起きた提督が帽子をかぶって艦橋へあがると、那智は難しい顔で電文用紙を一枚差し出した。

「ちょうど八分前に受信した」

『第四戦隊旗艦空母翔鶴、敵潜水艦の雷撃ヲ受ク。機関部浸水ノ為、合流困難ト認め、シユーズ・ベラ島へ緊急避退ス』

「空母が来ないのか……」

提督は顔をしかめた。

「今、旗艦金剛の艦隊指令と各戦隊長の間で作戦継続の是非を検討中だ」

「航空戦力の援護が無くなったか……」

提督は夜行虫のLEDのような光を引きながら左前の洋上を進む戦艦金剛の黒い影を見つめた。

十分後、旗艦金剛の艦橋から発光信号。作成続行の指示が下る。各艦、速力を20ノットに増速の上、予定時刻を繰り上げてブーメラン島突入が決定した。

作戦に変更無いことを指揮下の艦に伝えて提督は海図台の上をのぞき込む。

「飛行機の援護なしで白昼の突撃か。長官達は自信あるのかな？」

「敵は先の西方海戦で多くの空母や航空機を失ったと聞いている。この海域まで大規模な航空兵力を裂く余裕はないという分析があるのだろう。仲間が待つてるからな。遅れは許されない」

——その通りだといいが……

やられたのが空母随一の不幸艦だからだと言い聞かせつつも、不安が増した。

その後、トビウメ提督は眠気覚ましのコーヒートを片手にずっと艦橋を留まっていた。

0535時。空が紫色に明るくなってきた頃、各艦に一齐にブザーが響いた。相互に発光信号が交錯し、旗艦に信号機が掲揚される。

『全艦、対空戦闘用意』

「敵機だ！」

那智と提督は慌てて立ち上がると羅針艦橋の二階上にある防空指揮所へと駆けあがった。そこは艦橋構造物のでっぺんにある露天の展望台で、大型の双眼鏡がいくつも据え付けられている。

「どこ？ 見える？」

トビウメ提督が双眼鏡をつかんだまま空を仰ぐ。薄雲が低く、敵の位置がわからない。すぐに左隣を航行している第一戦隊の軽巡五十鈴が空へ主砲を発砲して煙が上がる。

「九時の方角だ」

那智が北の空を指さした。見れば、明るくなりつつある雲の隙間か

ら黒い甲虫のような形の機体が、艦隊と進行方向を同じくして飛んでいる。遠方のため、はつきりと形を判別できるわけではないが、その豆粒大に見える飛行物体は間違いなく深海軍の航空機に違いない。

艦隊の主砲や高角砲がそれを追うが、放たれた砲弾は敵機からかながら後方で破裂して小さい黒煙となった。さらに黒い煙の塊がいくつかが敵機を追って空に浮かぶが、なかなか当たる様子はない。次第に敵機は高度を上げ、黎明の空に姿を消してしまった。

「敵機の触接……。もはや奇襲殴り込みはできなくなったな」

「うん……」

提督はオレンジ色に明るい雲の隙間を見ながらうなずいた。

第一次ブーメラン島沖海戦／キルゾーン

その後も二、三時間に一機ぐらいの割合で、深海軍の触接を受けながらも連合艦隊は白波を立てて躍進しつづつあった。

○九三〇時。艦隊はついにブーメラン島の接続海域に入り、ブーメラン島の西北西およそ八十哩の地点で旗艦の戦艦金剛と扶桑、それに重巡摩耶から零式三座水上偵察機が一機ずつ、カタパルトから打ち出された。

水偵が島の方角へ向けて飛び立つと、金剛にいる艦隊司令長官より増速と突入準備の指示があり、艦隊は一斉に南へと転舵しポート・フリズビーへと一直線に進路をとった。計画では目的地から50哩の時点で、港内の輸送船団や駆逐艦に待避準備を呼びかけ、そのまま最大船速で深海軍の包囲網に風穴をあける手筈となっていた。

離陸から三十分後に届いた水偵の一次連絡によれば、事前の予報と異なり、厚い雲がブーメラン島近海の空を覆っているとのことだ。

「曇りか……。憂鬱になるな」

那智が空を睨みながらつぶやいた。

深海棲艦が大量湧出する時は決まってその海域が異様な天候になるという妙なジンクスが艦娘や提督達の間でささやかれてきた。確かに、トビウメ提督の経験した海戦のうち、数度は酷い荒天や空が燃えるように赤紫に染まった異様な夕暮れの下に行われたこともあった。だが、突きぬけるような晴天下でも深海棲艦は容赦なく出現し襲ってくることも多く、トビウメ提督自身はそのジンクスを信じていなかった。

「あれはただの確率論だよ、那智さん」

「それはそうだが……」

提督はそう笑い飛ばして那智の不安を払拭しようとしたが、島に近づくとつれて雲は厚くなる一方だった。

トビウメ提督は艦橋横の右舷見張り所に折りたたみ式のデッキチェアを引っ張り出してネズミ色の水平線を眺めることにした。天気が悪く、そのうえトビウオもイルカも、海鳥もない退屈な景色で

ある。ただ、あの焼け付くような日差しが雲に遮られたので艦橋内より外の見張り所のほうが涼しくて快適だった。

「貴様というやつは……。少しは緊張感を持ったらどうだ」

艦橋から出てきた那智が呆れ顔で言うが、デッキキエアに寝そべった提督は経木に包まれたおにぎりを見せる。

「一つどう？ きつとランチしている余裕はないと思う。なによりも、食事も戦いだ」

柄にもなく凜々しい表情でそう言い放ってから、提督はニヤニヤ顔でおにぎりを差し出す。日頃なんでもかんでも戦いにかこつけて訓辞を垂れる那智の口調を真似てやりかえしたのだ。那智はぶすつとした表情で提督を睨み返した。が、那智はすたすたとそばへやってきて経木から一つおにぎりをつまんで食べ始める。

「それはおかか」

「うむ……」

おかかのおにぎりを半分までかじったところだった。那智ははつとして首を巡らせた。

「扶桑より信号！ 敵艦見ゆ！ 十時の方向、距離およそ九万と六千」

二人は手にしたおにぎりを口に押し込んで艦橋へと戻る。

提督は左舷見張り所へ飛び出し、備え付けの大口径双眼鏡をのぞき込んだ。左舷を走る僚艦と僚艦の間から遙か海上を臨むと、灰色の海に真っ黒な船体の影が並んで三つ、青いLEDのような燐光を光らせていた。

「まだ遠くてぼんやりしてるけど、おそろく巡洋艦クラスが三」

各艦から一斉にベルが鳴り、砲塔を回り始める。

「はじまるぞ」

艦橋構造物の一番上にある主砲方位盤が敵の正確な方角と距離と観測し始めた。もう間もなく火蓋がきらられる……。

旗艦金剛の艦橋構造物にある戦闘指揮所では艦隊司令長官のモトヤマと参謀のフルカワが大はしやぎで双眼鏡を覗いていた。

「金剛、まだ撃たんのか。敵だ！ 敵だぞ！」

「深海軍め、木っ端微塵だ！」

「ウエイトプリーズ、チョーカン。ファッツ？ 敵艦がエスケープ始めたヨー！」

自分の方位盤で敵艦を観測した艦娘の金剛が言った。

「さては深海棲艦め、こっちの陣容に恐れをなしたな」

「我が艦隊は戦艦三隻を誇る陣容ですからな」

「金剛、予定より早いが全軍突撃だ。見つけた敵は全部蹴散らしてポートフリスビーへ突入だ。敵艦は射程に捉えしだい吹き飛ばせ！」

自信満々といった様子で金剛はうなずいた。

「オール・ライト！ 皆さんついてきてきてくださいネー！」

間をおかず戦艦金剛の後甲板信号灯より全軍突撃セヨの号令が発せられた。

「突撃命令。速力23ノット。合戦準備！」

金剛からの命令を受け、トビウメ提督と那智は羅針艦橋の一フロア上にある戦闘指揮所へと駆け上がった。戦闘指揮所は羅針艦橋よりかなり手狭だが、艦橋より高いぶん見晴らしがよく、方位盤射撃用の計器や通信機も備えられていた。

「思ったより早かったね。このまま余勢に乗って敵陣を突破するつもりらしい」

「ああ……。だが、偵察に出した摩耶と扶桑の水偵は戻ってきたのか？」

「え？ そういえば……。とりあえず僕らも臨時で今すぐ飛ばそう」

提督の指示で、煙突後ろにある零式水上観測機を乗せた右舷カタパルトが風上の方へ向きを変えると、破裂音とともに機のプロペラが回り始めた。

「一番機エンジン、コンタクト」

那智が、偵察機のエンジンが無事始動したことを告げる。

「射出！」

提督の号令とともにバスーン！という爆発音を響かせ、偵察機の機体はしご状のカタパルトのレールに沿って海へ押し出された。急加速によって複葉の偵察機はすぐに揚力を得てゆっくりと高度上げて

南へと飛翔する。すぐにも左舷カタパルトからも偵察機が同様に水観が発艦した。那智は後続の加古にも発光信号を送り偵察機発艦を命じた。

『メンドクサイヨ。テキハモウメノマエダヨ?』

加古から即座に返ってきた信号に二人は顔をしかめる。

「どうでもいい連絡は寄越すな。3分以内に発進させよ!」

そんな無駄な発光信号のやりとりを経て加古の後甲板からも偵察機が撃ち出された。

「加古の水偵には後方を警戒させて」

「ああ、我々は現在の敵情を何も知らない……。だが、敵は我々の動静を知っている」

那智の言葉に提督は無言でうなずいた。

そんな那智艦上の二人の懸念も余所に敵艦を追って艦隊は南へと進む。だが、速力二十三ノットの突撃を突撃と呼ぶにはあまりに緩慢に過ぎた。鈍速の扶桑型戦艦を擁した艦隊には、陣形を保ったままそれ以上の速力で進むことはできなかったのだ。

後刻、トビウメ提督はもう少し早く気付くべきだったと悔やむことになるのだが、本来、快速を誇る巡洋艦が23ノットまでしか出せない追撃者を振り切るのはたやすいはずだった。だが、深海棲艦の巡洋艦は絶妙に連合艦隊の砲撃射程圏外に位置しつつも決して艦隊の視界外まで逃れることなく連合艦隊をポートフリスビー沖へ引き込みつつあった。

曇ってくるにつれ、穏やかだった海は徐々に荒れる兆しを見せ始めた。先ほどよりピッチングが激しくなり、船は波頭を越す度に前後、上下に激しく揺れた。

「水観一番機より入電! 我、敵艦隊発見。戦艦3、重巡……。クソッ、電信途絶えた」

「戦艦三なんて……。もうそれだけで五分五分の勝負だ。もしそれ以上敵がいたら……」

「いると思え。やはり楽観的すぎたか……。どうも我々は昔と同じ轍を踏むな」

『北方向ノ敵情及ビ避退航路ヲ索敵セヨ』

偵察機からの先に電信を加古も受信してたようで、那智が信号でそう命じると今度は素直に了解の応答があった。

「情報が古すぎた。一時撤退を具申するべきかもな……」

いつも好戦的な姿勢の目立つ那智らしからぬ言葉に提督は少し驚いた。だが、いざという時は退くことも勇気であることは提督にもわかっていた。

「しかたない、すぐ司令長官に進言するよ」

トビウメ提督が意を決し、信号で送るべき言葉をそらんじたとき、旗艦金剛より発光信号とともに、その後部マストに通信旗が掲揚された。

『敵艦隊見ユ。砲雷撃戦用意』

上層部は完全にやる気だった。トビウメ提督は眼前の戦艦金剛を睨みながらクソツと悪態を吐いた。

前方、水平線の彼方に大小無数の黒い影が浮かぶ。青や赤い燐光を放ちながら扇状に布陣している深海棲艦の真ん中へ、連合艦隊は複従陣で突き進んでいた。敵艦隊もこちらへ向かって包囲網を狭めてきていた。双方は正面からぶつかる反航戦の様相を呈し、敵艦隊の姿はみるみるはつきりと大きくなってきた。

戦艦金剛の戦闘指揮所では双眼鏡を手にしたフルカワ参謀が真っ青な顔で叫ぶ。

「方位〇一〇敵、戦艦夕級、二。ル級、一。重巡り級、七。その他駆逐艦三十隻以上！」

「チョーカン！ 軽巡多摩より入電ネ。方位二四〇。夕級、一。リ級、三。軽巡洋艦多数を含む敵艦隊発見。ちよつとデンジャラスだよ」

さすがに、今まではしゃいでいた金剛も心配になってきたようで声のトーンが落ちてきた。こころなしか、前髪のアホ毛もしおれてきたように見える。

「いや、進路このまま。軽巡や駆逐艦の射程に入る前に、長距離砲戦で勝負をつけるぞ。扶桑および比叡に信号！ 目標、左方の敵艦隊。再

度正確な測距と同時に砲撃を開始せよ」

「オーケイ！ 私の本気、見せてあげるネ！」

金剛は大仰に手を振りかざすと、艦橋最上部の測距儀を新しく現れたル級戦艦へ向けさせ、三角法で距離を測定する。すぐに発射解を得た金剛は前後四つの砲塔を一斉に左へ向けた。後続の扶桑と比叡もそれにならって砲塔を左へ向け、一斉に砲身を持ち上げる。

「OH！ チョーカン。第二戦隊の那智より信号デース。水偵、ブルーラン島東方に戦艦三以上の新たな艦隊を発見。一時転進を具申す、と言ってマース。どうしますか？」

「馬鹿な！ ここまで来て転進などありえない。作戦に変更はないと伝えろ」

モトヤマ長官がそう怒鳴ったとき、参謀が叫んだ

「敵艦が撃った！」

深海軍の戦艦から一斉に煙が上がった。

「金剛、撃ち返せ！」

「イエース！ 全門、ファイアー！」

旗艦金剛の主砲全八門が数秒ずつ時間をずらしつつ一気に火を噴いた。大きな火の玉と煙が立ちこめるが、直後、大きな轟音とともに周囲の海面から水柱が数本吹き上がり、周囲の硝煙を吹き飛ばした。

「ビーケアフル！ 至近弾！」

金剛がそう警告の声を発した直後、艦橋構造物はもの凄い衝撃に襲われた。

重巡那智の戦闘指揮所にいる那智とトビウメ提督は戦艦金剛の左舷舷側から爆炎が上がるのを目撃した。それを合図に、その他の敵戦艦と敵重巡洋艦も一斉に砲撃を開始した。左の艦列を進む味方の三隻の戦艦もやたらに撃ち始めて周囲は火薬の黒煙におおわれはじめた。

「戦隊旗艦へ信号！ 目標指示、請え！」

無線封鎖がなし崩し的に解除され、艦隊全体から悲痛な叫びが交錯する。

『敵水雷戦隊接近中이야！ 奴らの魚雷の射程まで近づけちゃだめにや！』

それは那智の左後方を航行中の軽巡・多摩だった。語尾こそなんかおかしいものの、その口調も内容もきわめて切実で真剣なものだった。

第一戦隊の多摩からの無線を聞き、那智はもどかしそうに提督を見た。

「戦艦の護衛が我々の任務だ。指示はまだなのか！」

だが、第二戦隊旗艦の摩耶からは依然、攻撃命令が来ない。そうしている間に、摩耶も立て続けに被弾し真っ黒な煙に包まれた。驚いている間もなく、重巡那智の左後ろを走る戦艦の左舷からは大きな水柱が二本立ち上る。水柱の力に押し倒されるように、巨大な艦橋が船体ごとぐらりと右へ傾いた。

「扶桑が魚雷を受けた……」

魚雷の直撃弾を受けたということは、それだけ敵の駆逐艦や巡洋艦が肉薄しつつある証拠だった。摩耶も金剛も敵弾を受けて損傷し指揮通信能力を失いつつあった。

そこへ追い打ちのように飛んできたのが、重巡足柄率いる陽動の第三戦隊が壊滅したとの知らせだった。

戦況はためらう者を置き去りにして変化する。最後の悪い知らせは不知火からで、艦隊右後方に敵の新手が出現したとのことだった。すでに序盤で手痛い打撃を受けて混乱しつつあった連合艦隊を、敵は完全に料理しようと呼びつつあった。

「……退路を断たれます。早急に対処の要を認めます」

「決めるのが貴様の仕事だ……」

不知火の無線と那智の声に押され、逡巡していた提督は無線機の受話器を掴んだ。

——たとえ死ぬとしても二度目だ。怖がるようなことか！

トビウメ提督は心中でそう自分を叱咤して受話器に叫ぶ。

「長良、不知火、初風。こちら那智・指揮所トビウメ。これより方位30に現れた敵艦隊を撃滅する。訓練でやったCA陣でいく。合図

と同時に、方位270へ面舵転針。突入後散開して魚雷攻撃を敢行せよ。本艦と加古は北へ急速転舵後、敵戦艦を叩く。長良、分隊の指揮をお願い」

『了解、任せておいて！ みんな、走るよ！ 機関の準備はいい？』
すぐに最後尾の長良から応答があった。

「ど、どうだろう？」

受話器を置いた提督は、先生に答え合わせを求める生徒よろしく那智へと振り向いた。

「ああ、悪くはない。さあ、いくぞー！」

那智は一瞬だけ提督に微笑み返すと、真剣な顔に戻って威勢よく叫んだ。

第一次ブーメラン島沖海戦／突撃！ CA陣

CA陣ことカウンター・アンブッシュ戦術。過去の戦史や戦訓を参考にトビウメ提督と那智が長い時間をかけて幾度も話し合って決めたヤムヤム島泊地オリジナルの対奇襲戦法だった。それは、もし洋上で敵の奇襲を受けた場合に、敵の第一撃をかわしたり、一度退避して優位な反撃位置を探すのではなく、重巡の火力援護のもと、軽巡、駆逐艦の機動力を生かして敵陣に一気に踊り込むという一か八かの反撃作戦だった。

とにかく奇襲してきた敵の出鼻をくじいて統制を乱すことを目的とした瞬発的反攻と退避。敵を怯ませられるかどうか、その鍵はスピードにあった。

後ろを振り返れば、後部の長良が戦列を抜けて、西へと高速回頭しつつある。それに従うように初風と不知火が徐々に戦列から外れて敵へ向けて進路を変えた。長良たちは速度を上げ、煙突からは黒煙が噴き出し、艦首と艦尾には白波が大きくたち始めた。軽巡長良を先頭に不知火と初風が砲撃を避けるためにそれぞれ不規則に蛇行しながら敵へと向かってゆく。

「本艦、攻撃目標、敵重巡り級一番艦。とーりかーじ、一杯！」

提督の指示を那智が復唱すると同時に、艦はジリジリと右へ傾き、急回頭をはじめた。艦は急な右傾斜をとりながら曲がり、無造作に突っ立っていた提督がよろけて床に転びそうなところを、後ろから那智に支えられた。

「ちよっと、那智さん……」

那智は提督の背中へ抱きつくように支えて羅針盤へと押しつけた。「少し暴れるぞ。これで体を羅針盤に縛るんだ」

那智はしっかりと提督を抱きかかえながら手を伸ばしてロープの端を羅針盤にくぐらせる。慌てて提督は腰と羅針盤にそのロープを巻き付けた。那智の、もどーせーの号令とともに回頭を終えて傾斜した船体が水平に戻り始める。

一方、敵艦隊もこちらの動きを警戒したのか、一斉に撃ち始めた。

軽巡長良や駆逐艦二隻の周囲に激しく水柱があがる。

「進路350、よーそろ」

艦が水平に戻るとようやく那智は体を離した。前部甲板の三基の砲塔が一斉に目標へ砲身を向けた。

「一番から三番砲塔、発射準備よし」

提督は双眼鏡を覗き、一番距離の近い重巡り級へ目標指示した。那智は的針、的速を計算し、正確な発射解を砲身の動きに同調させる。

「一番から三番主砲、撃ちーかた、はじめー」

トビウメ提督が叫んだ。

「撃ちーかた、はじめー」

那智の20・3センチ砲がついに火を吹いた。那智の復唱とともに艦橋はストロボのような光に覆われ、衝撃波をともなった轟音が分厚いガラス窓をたたく。すかさず、提督が双眼鏡をのぞき込む。後続の加古も一テンポ遅れて主砲弾を放った。

こちらへ船腹を見せながら右方向へ進む敵重巡の背後に水柱が上がる。さらに一つ、二つとまた水柱が現れた。その間にも那智の前部主砲は左右交互に、砲撃を続ける。

「弾ちやーく、今ー、遠、遠、近、命中！」

双眼鏡を覗きながら提督が叫ぶ。三本の水柱と至近弾の後、まるでサザエのような形を思わせる重巡り級の一番主砲塔がオレンジ色の火球に包まれたのが見えた。提督の言葉を受けて、那智は射撃指揮装置の発射解を修正し、主砲の照準を微調整する。

「二番砲塔、初弾命中。三番砲塔、近！」

射撃を終えた主砲はすぐに砲身を水平に押し戻す。すると甲板下にある弾薬庫と装薬庫からそれぞれ別のエレベーターで砲弾と火薬を毛の繊維で包んだ樽状の塊が砲塔内へと上がってくる。砲弾と装薬はすぐに主砲の付け根にある栓尾から薬室へ押し込まれて艦橋の主砲方位盤からの射撃指示に備えるのだった。その時間およそ二十秒。すぐに砲身が照準に合わせて仰角を取り二発目を敵へ発射した。

敵艦隊も盛んに反撃をはじめ、敵の砲弾が作る水柱は徐々に那智や加古の船体近くで吹き上がるようになってきた。最初の目標とした

敵り級はすでに前部主砲を二つ失い、真つ黒な煙に包まれていた。「三番砲塔、近、命中。二番砲塔、弾着、今。命中、続けて命中！」
り級の煙突や後甲板から爆炎が上がり、真つ黒な船体から炎が上がる。

『吹つ飛べえええ！』

背後の加古も一齐に那智の右後ろに位置しながら敵の重巡へ砲撃を続ける。その背後にはゆっくりと進路をこちらへと変える旗艦金剛と摩耶の姿が見えた。

「金剛より発光信号。ワレ、貴艦二続ク。全艦、進路340ニトリ、全速避退セヨ。何としても抜けるぞ」

那智が発光信号を解読し提督に告げる。提督は強くうなずいたが、後続の味方艦隊のなかには、すでにもうもうと黒煙や火柱を上げて落後し始めている艦がいくつも見えた。

——みんなを無事に連れて帰れるだろうか？

提督はそんな雑念を抱いたことを瞬間的に後悔した。今の戦況を厳しく見つめれば、全艦帰投など不可能な願いだ。これからこの海域で一体何隻の艦と艦娘が沈んでゆくことになるのかを想像し提督は思わず目元を手で覆った。

「おい、大丈夫か？ しつかりしろ！」

那智の声にトビウメ提督は現実には引き戻された。とにかく眼前の敵を打ち破らねば、誰も帰投できないのだ。

「ごめん……。次の目標、方位300、敵雷巡！」

「よし、一番、二番砲塔、追尾！」

主砲の目標を、まっ黒な黒煙の塊になって停船した敵重巡から前方にある雷装巡洋艦へと移す。

それはダークグレーの船体を持つ艦首船尾船楼型の巡洋艦で、艦橋後ろから艦尾にかけて設けられたウェルデッキには幾つものアコヤ貝のような魚雷発射管が据えられている。敵魚雷の射程は決して長くないが、いざ射程に入った際に散布帯射撃されれば、その無数の魚雷から逃げきるのは至難の業だ。敵に艦首を向けて蛇行しつつ突っ込む長良達はその射程に捉えられるのはもう間もなくだった。

那智はすぐに加古にも目標変更を告げて主砲塔を新しい標的へ向けて回す。この砲塔の旋回スピードの遅さが、提督にはこの上なく遅く、もどかしく感じられた。

艦を大きく揺さぶる強い衝撃を感じたのはその時だった。もし羅針盤に体を巻き付けていなかったら、衝撃で壁際に叩きつけられていたに違いない。衝撃のため主砲指揮所にいた那智と提督は床に尻餅をついた。

「ど、どうした?」

「後甲板に被弾した……。飛行甲板、火災炎上中。すぐに消火にあたる」

顔をしかめた那智が身を起こしながら報告する間にも、艦橋のすぐ横にさらに大きな水柱が上がり、艦を再び大きく翻弄する。

「敵戦艦、撃ってきた。気を付け……」

そう言い終わらないうちに背後の重巡加古の二番砲塔から炎が上がった。

「加古! 損害状況知らせ!」

『ちつくしよー! これくらい平気だよ! だけど、方位盤射撃ができなくなっちゃった』

酷くノイズがまじっているものの、加古はすぐに無事を知らせてきた。

「狙いは適当でいいから、とにかく撃ちまくれ!」

提督は受話器に叫ぶと、窓の外の敵艦影を指さした。

「雷巡を潰すんだ。長良達が奴の射程に入る前に!」

「四番、五番、主砲。撃ちかた、はじめー!」

艦の後ろにある砲塔の主砲から猛烈な硝煙が吹き出した。続けて、一番から三番主砲もそれに続けて褐色の硝煙を吐き出す。提督は双眼鏡で敵雷巡を睨みながら、弾着を待った。

間もなく、初弾から至近弾を告げる水柱が雷巡の手前に上がり、間もなく次の数発が立て続けに雷巡の艦中央機関部や上甲板を吹き飛ばした。真っ赤な炎を見て提督は叫ぶ。

「命中! 続けて撃て!」

すぐにも主砲は照準調整し第二射を発射した。トビウメ提督は目を凝らして、敵の艦舷に並んだ魚雷発射管を見張る。再び那智の放つ砲弾が雷巡の船体を打ちのめした。煙突が倒壊し、艦尾主砲が弾け飛び、火柱を上げる。さらに次の一発はウエルデツキを直撃した。だが喜ぶ間もなく、貝殻にあいた気孔のような発射管から海へ放り出された二本の魚雷を提督の双眼鏡は捉えていた。

「敵、魚雷発射！ 進路およそ……020！ 長良ちゃん！ よけて！」

トビウメ提督はすかさず無線電話の受話器へ叫ぶ。その時、遠方の海に目映いオレンジ色の火球が咲いた。火球はすぐに黄土色の巨大な煙の柱となって空へ上ってゆく。そこにもう敵艦影はどこにも見えない。搭載魚雷の誘爆を起こした敵雷巡が木っ端微塵に吹き飛んだのだ。

「目標轟沈！」

トビウメ提督と那智は二人とも同じガッツポーズをとった。

比較的近くにいた長柄達の周りには敵雷巡の破片が雨のように降り注ぎ、初風の艦橋スレスレのところをキャニスターに収まったまま誘爆しなかった魚雷が飛び越えていった。

「ちよ、ちよっと、危ないじゃない！」

初風は艦橋で思わず首をすくめて叫ぶ。

『各艦、魚雷に注意して！』

長良は軽巡長良の艦橋から後続の駆逐艦へ注意を発した。海面は灰色に濁っていて、まだ魚雷は確認できない。深海軍の魚雷は、味方の魚雷よりも短射程で速度もやや遅く、空気の泡を引いているため洋上からも発見しやすいのだが、爆薬の威力は味方のもものよりも強力だった。

『軽巡長良。こちら不知火艦橋。雷跡を発見しました。方位345、進路023、距離400。速力およそ45ノット。不知火は右にやり過ぎします。各艦は注意してください』

各々、蛇行してしながら敵へ突進していた三隻の艦はそれぞれ左右

に目一杯に舵を切って散開した。白い雷跡が長良と初風の艦尾後方の海面下をすり抜けていった。

魚雷をやりすぎすと、すぐに三隻は敵へ舳先を向けて突進を続ける。

『もうすぐ敵戦艦が射程に入るわ。各艦準備して！』

長良の無線電話が後続の駆逐艦に届く。

「目標前方に敵駆逐艦二隻！」

これから魚雷を見舞まってやろうと思っていた敵戦艦をかばうように高速の駆逐艦が二隻割って入りつつあった。

すでにこちらへ何発もの砲撃を繰り返しながら敵はどんどん間合いを詰めてくる。

長良と不知火はなんとかその邪魔な駆逐艦を排除しようと主砲を放つ。

『魚雷発射まで何とか持ちこたえて』

そのとき、緑色の燐光を発する一隻の敵駆逐艦の艦橋構造物が粉々に弾け、まるで最初から艦橋がなかったかのように消しとんだ。次に二隻目の敵駆逐艦の艦首と前部砲塔が爆煙に覆われた。

『やっ！ やっ！ 当ててやったよー！』

加古の無線電話が届く。インターセプトをはかった敵駆逐艦は背後の那智と加古の援護射撃よって撃破されたのだ。

「加古さん、意外にやるのね……」

不知火は自分の艦の羅針艦橋でかすかに笑った。炎と煙に包まれながらズブズブと海中へ沈みゆく敵駆逐艦のそばを突破してから、軽巡長良は突撃旗を掲げた。

「目標、射程内！ みんな、一斉回頭！ 進路、270！ 魚雷戦よーい！」

長良は号令をかけると一気に取り舵九十度へ回頭した。長良と僚艦二隻は一斉に敵へ右舷を見せる形で単縦陣へ移行する。

なおも追いつがる無数の水柱。しだいに敵駆逐艦や軽巡洋艦の小口径弾が舷側をえぐりはじめる。被弾するたび、艦橋に振動が走り、窓ガラスに大きくひびが入る。駆逐艦不知火の艦橋で艦娘の不知火

は腕を組んだまま動じることなく、目を細めて敵艦を睨みつけた。

こじんまりとした陽炎型駆逐艦の羅針艦橋の両橋には外側へ張り出した出窓のような一角が設けられている。そこに設置された魚雷戦方位盤が測的と発射解の割り出しにフル稼働していた。

——これは、普段気弱なあの司令が覚悟を決めて下令した作戦行動です。それに応えるためにも不知火はこの一撃、決して外すわけにはいきません

不知火は、敵戦艦のエスコートについている重巡洋艦をターゲットに定めた。

三隻だけの水雷戦隊は敵に横腹を晒しながら敵の攻射に耐える。各艦の方位盤が発射解をはじき出し、その情報に沿って二番煙突裏の旋回式魚雷発射管を右舷へ向け、射線を敵の進路上へあわせる。

「目標、敵重巡三番艦。発射準備よし」

『目標、敵戦艦二番艦。準備できてるわ』

不知火が告げると初風も無線電話で続ける。それを受けて長良は信号旗を揚げると同時に叫んだ。

『放てー!』

各艦の右舷甲板から丸太のような九一式酸素魚雷が、圧縮空気によつて発射管から海へ放り出され、水しぶきをあげて海中へと飛び込んでゆく。

各艦五本ずつ三度ずつ角度を変えて放射状に撃たれた魚雷はキャビテーションによるわずかな泡だけを曳いて深海軍の艦隊目掛けて静かに突き進んでいった。

「全艦突撃！ 砲戦開始！」

第一打の魚雷を撃ち終えた長良達は、それまでの一糸乱れぬ単従陣とは打って変わり、再び敵陣へと舳先を向けると、各々大きく不規則に転舵を繰り返しながら最大船速で突入をはじめた。

「水雷戦隊、突入した！」

「よし、僕らも続く……」

重巡那智の主砲指揮所で提督が答えた。とにかく退路を確保するには、そこに立ちほだかる敵の主力を押し退けなければならない。重

巡那智は加古を引き連れて包囲線を敷こうとする敵艦隊へ接近しつつ、絶え間なく主砲弾を放つ。

突然、それまで整然と航行していた敵艦隊が左や右へ急に進路を変え始めた。正面に見えるイ級駆逐艦は急激に舵を切ったため、背後の軽巡子級の進路を塞ぐ格好となりその舳先によつて船腹から真つ二つされてしまった。金属の引き裂かれる音と共に、イ級のボイラー室が水蒸気爆発を起こし真つ白な煙が上がる。

「さては、あいつらようやく魚雷に気付いたぞ」

トビウメ提督は嬉しそうに笑う。そう言い終わらぬうちに視界の左隅にあつた別の敵軽巡洋艦に真つ白な水柱を上がる。魚雷が缶室を直撃したようで水柱が消える頃には敵の船腹からは真つ白な蒸気が吹き上りすぐに敵は完全に停船する。どうやら深海軍は陣型を乱し、各自勝手に回避行動に移つて混乱しているようだった。

「よし、この機に乗じて包囲網に穴をあけるぞ！」

那智と加古は後続の金剛や摩耶へ合図を送りながら敵陣突破を目指した。

その頃、大混乱の中敵陣の真ん中に踊り込んだ駆逐艦不知火の艦橋で、艦娘の不知火が風防窓一杯にどんどん大きくなる敵の艦影を見据えながら呪詛のように呟いた。

「沈め……。沈め！」

その声にあわせるように敵重巡の喫水線下が一瞬白く光ったかと思つと、そこから前マストの倍はあろうかという水柱が敵の船体を覆い隠した。

「魚雷命中。弱いよね……」

復原力を失い、炎を上げながら急速に傾きつつある敵重巡を後目に不知火は呟いた。

不知火は次に屠るべき敵を探して周囲を見回した。敵陣に切り込んだわずかに三隻の水雷戦隊は、周囲360度すべて敵という状況で主砲と機銃の区別なく、手近な敵へ手あたりしだいに弾を撃ち込んでいた。それは、方位盤射撃などという手順に乗つ取つた洗練されたもの

ではなく、一キロもあるかないかの距離でひたすらバカスカと撃ち合う肉弾戦に近いものだった。

硝煙弾雨の洋上で不知火は周囲を見回した。

「もつと、骨のある敵はいないの……」

黒煙立ちこめる視界のなか、不知火はさきほど目にした戦艦の影を探した。退路を確保するためにも、ライトグレーのフジツボだらけの船体に黒い砲塔を無数に載せた、二隻の夕級戦艦だけはなんとか撃破しなければならぬターゲットだった。戦艦を仕留めるため、不知火は前部魚雷発射管の酸素魚雷四本を手つかずにしておいたのだ。

先ほどから全砲塔と機銃座は休みなく火を吹いているが、不知火自体も敵の軽砲弾により被害が多くなってきた。後部主砲指揮装置は被弾の衝撃により故障、両舷に据えられた艦橋横のカッターもいつの間にか粉々に粉碎されていた。

「まだまだ、沈め足りないわ。戦艦はどこなの……」

不知火は煙越しに姿を見せた敵駆逐艦を、相手に一発も撃たせる間をあたえず主砲の斉射で火だるまにすると、次の生贄を求めてさらに敵陣奥深くへ舵を切った。

そんな不知火の北北西1・5キロの洋上では駆逐艦・初風も持てる火力を最大限敵へぶつけて奮戦していた。混戦のなか、あまりに敵駆逐艦に接近しすぎたため、敵駆逐艦の艦橋にいる、魚のような怪物じみた深海棲艦の本体ユニットが驚愕の表情でこちらを睨んでいるのが、初風にもはつきりと見えた。黄色く光る恐ろしい双眼に初風は一瞬身震いした。

「き、気色悪いのよー!」

すかさず初風は前部二門の主砲で艦橋ごとその顔を吹き飛ばす。だがすぐに別のところから飛んできた敵弾の艦尾直撃を受けて、船が大きく揺れた。

「後甲板火災! 爆雷投棄!」

もったいないことだが、誘爆を防ぐために艦尾の投下軌条に乗ったドラム缶のような爆雷をゴロンゴロンと全て海へ捨てる。撃つてきたのは左手前から向かってくる軽巡だった。

「やったわね！ こっちははまだ魚雷があるんだから！」

前部魚雷発射管を旋回させ、魚雷を三発放り出す。投射後すぐに面舵80度で右へ回避し敵から距離をとろうとするが、敵軽巡から乱れ撃ちされた機銃弾が初風の艦橋を襲った。窓ガラスが砕けとび、通信機や備え付けの大口径双眼鏡がメチャクチャに破壊された。体のあちこちが傷だらけになったが、羅針盤の下に伏せ銃弾直撃を避けた艦娘の初風は額から垂れる血をぬぐって立ち上がった。

「じよ、上等じゃない……。通信できなくなっただけど、ま、まだやれるわ！」

間髪いれずに敵軽巡の舳先近くから大きな水柱が上がる。魚雷二発がほぼ同時に当たったらしく、艦首から艦橋構造物にかけて原型をとどめないくらい完全に粉碎されていた。そう長くは浮いていられないだろう。

——て、敵とはいえ、ぞっとする眺めね……

初風は喉元を押さえながら、息を呑んだ。

砲弾も魚雷もまだ残っている。艦橋前にもうけられた12・7センチ主砲は損傷して機能を停止していたが、他の兵装はまだ健在だ。後部魚雷発射管ではクレーンと台車が格納箱から魚雷をつり上げて次発装填中で、前部発射管にはすぐに撃てる魚雷がさらに二本残っていた。

無線電話や長距離無線も破壊されていたので、初風は左遠方で交戦中の長良へ発光信号を送りながら、次の敵を求めて周囲を見回した。艦尾の船体が損傷しているのでやや速度は落ちているが、機関はまだ元気だ。

洋上は漏れた重油やそれに引火した炎、そして低く立ち上る無数の黒煙に覆われ、視界は悪くなってきている。口元を押さえながら、煙の帯を突っ切った初風は突如目前に現れた黒い影に思わず顔色を失った。

それは、最初の一斉雷撃で惜しくも魚雷を当てそこねた二隻の敵戦艦夕級のうちの一隻で、甲板や舷側にずらりと並んだ無数の主砲、副砲がこちらへ真っ黒な口をあけている。

「……し、司令官、これはもう駄目かも……」

夕級の主砲が火を吐くと同時に駆逐艦初風の船体が四方へ飛び散った。

第一次ブーメラン島沖海戦／一騎打ち

「初風被弾！」

那智が叫ぶ。トビウメ提督は双眼鏡でその姿を探すが、視界は黒煙と炎に遮られてまったく判然としない。

『初風が応答しないの。敵戦艦の砲……』

長良からの通信が不吉な雑音とともに途切れた。重巡那智の左手遠方にオレンジ色の爆発が認められた。

「な、長良もやられた……」

後部マストと後ろ二本の煙突が完全に破壊され、船体後部から真っ赤な火の手に包まれた軽巡長良の姿が見えた。

「初風と長良へ信号。被害状況知らせ！」

提督は即座に叫ぶ。

——落ち着け、落ち着けよ。まだだ。まだ諦めるな。まだ皆連れて帰る方法があるはずだ

「長良より応答だ。後部兵装喪失スルモ、我航行二異常ナシ。砲戦ヲ継続ス」

那智が双眼鏡を握りながら長良からの発光信号を読み上げた。提督は少し安堵し双眼鏡を再びのぞき込む。

「初風は？」

「初風、未だ沈黙……」

「呼びかけ続けて！ 初風救助に向かう。長良と不知火は煙幕を展開しつつ北へ逃がして」

沈鬱な表情を浮かべる那智へ提督は即座に命じた。

提督が低く垂れ込める煙の向こうに黒く浮かぶ異様なシルエットを確認したのはその時だった。

「正面、夕級戦艦……それも二隻も。は、初風の目の前だよ！」

上甲板一帯から黒い煙を上げて停船している駆逐艦初風のすぐ背後に小島のような黒い戦艦の影が二つ浮きだした。どうも、二隻連れだって混乱する海域から一時退避をはかったところで初風とでくわしたようだ。

これまで遠距離を狙っていたために上を向いていた敵戦艦の砲身がゆっくりと下を向き、それを支えるカブトガニの甲羅のような砲塔が初風向けてじりじりと向きを変えつつあった。

「那智さんー！」

「ああ、心得ているさ！ 一番から五番主砲、再装填。左舷魚雷発射管旋回！」

「加古、敵の二隻目を狙え！」

提督はそう言って受話器をたたきつけると、はやる気持ちを抑えて静かに命じた。

「方位盤指示の目標。左対艦戦闘、主砲撃ちーかた、はじめー」

那智は一息深呼吸してからうなずいた。

「全門発射準備よろし。五番、一番、撃ちーかた、はじめ！」

那智はまず艦の最前部の一番主砲塔と最後尾の五番主砲塔からそれぞれ撃った。もう敵との距離も詰まり、双方とも水平に砲弾を撃ち合うまで肉薄しつつあった。間もなく敵戦艦の艦舷で二回ほど爆炎があがる。

「よし、命中！ だけど、戦艦はさすがに丈夫だな……。続けて撃つて」

あたえた損傷は大きくない。提督は残念そうに首を振った。だが那智は小さくうなずくと右手を敵戦艦へ向けて突き出した。

「次は、当てる！ 二番から四番、てええええ！」

隣に立っていた提督は、その一撃に那智が全力を注いだことをその瞬間になってようやく理解した。測距儀から方位盤、そしてすべての砲にいたるまでの機能が一つの統一した意志を宿したように連動して一糸乱れず動き出す。艦のすべての兵装とそれを支えるシステムがその会心の一打を叩きつけるため、その力が集約されるエネルギーを提督は肌で感じとった。

——この一撃は、きつと当たる

轟音と火炎を伴って放たれた六発の砲弾は小さな放物線を描きながら、一秒足らずのわずかな差をつけて一斉に夕級戦艦へと襲いかかった。最初の一発は、初風を狙っていた後部三番砲塔の基部にめり

こみ炸裂。その下の弾薬庫を誘爆させ砲塔は爆裂四散……というま
では上手くはこぼなかつたが、砲弾は砲塔の旋回軌条を大きく歪ませ
砲塔はびくりとも回らなくなり、太い砲身も根本から大きくねじ曲
がった。二発目は後部マストの上半分を粉碎し空中線を完全に切断。
もう二発は夕級戦艦の艦橋上部にある前部主砲射撃方位盤を跡形も
なく吹き飛ばし、最後の二発も後部主砲指揮所と測距儀を完全に破壊
した。

——さすがだ。敵の火器統制能力を完全に奪った

まるでオリンピックの聖火のように艦橋のてっぺんから火を上げ
る敵艦を見据えて提督は思った。

方位盤射撃ができなくなれば、精度の悪い各砲塔の照準器が勝手に
狙いを付けてバラバラに射撃するしか方法がなくなる。近距離なら
ばそれでも有効だが、遠距離砲撃のために正確な発射解を得ることは
到底不可能だ。

一方、那智は敵のダメージを確認する間もなく、艦後部の魚雷発射
管から魚雷四発を後方の夕級二番艦めがけ海中へ放り出した。

駆逐艦初風を狙っていた砲塔は沈黙したが、提督が安堵するまもな
く、その他の砲が一斉に重巡那智へ向けて旋回を始めた。

「二騎打ちだな」

「あれを沈める！」

提督と那智は顔見合わせてうなずくと、敵戦艦へ向けて進路をとつ
た。

炎と煙に包まれた駆逐艦初風艦橋の床の上で、艦娘の初風はうつす
らと目をあけた。艦橋の屋根は爆風でほとんど吹き飛ばされ、黒煙に
汚された空が直接見える。

——わたし、まだ浮かんでたんだ……。司令官や不知火達は無事逃
げられたかしら……

初風は体の痛みには耐えながらゆっくりと起きあがる。マストも屋
根も原型をとどめていないが、船はまだ浮いていた。朦朧とする意識
の中、初風はすぐ眼前の敵戦艦の影を見つけた。

「やっぱり、これでおしまいなのね……」

そのとき、敵戦艦の上部構造が火に包まれ、横から自分を押し退けるようにダークグレーの見慣れた型の重巡洋艦が突っ込んでゆくのが見えた。

——あ、あれは、妙高姉さんかしら……

ぼんやりとする意識のなかで初風はそう思ったが、すぐにそんな筈はないと悟った。同じ形だが、あれは今の自分達の旗艦である重巡那智だ。

「だめよ那智さん。あいつを連れて早く逃げて……」

通信機も信号灯も失った初風は声にならない声で叫んだ。

『初風ちゃん！ 初風ちゃん！ 無事？ 応答して！』

艦尾の方から拡声器越しの声があった。ねじ曲がった伝声管のパイプにもたれかかりながらゆっくりと後ろを見ると、船体を大きく損傷しつつも、まだ元氣そうな様子で艦首の錨甲板から手を振る長良の姿が見えた。

敵はあくまでこちらの退路を断つつもりらしく、重巡那智の進路を阻むように夕級戦艦は右へ舵を切りながら右舷をこちらに見せていた。初風を守る形でその間に割り込んだ那智はそのまま敵の横腹へ突っ込む位置関係になった。那智の各砲塔は砲身を水平に戻し次発装填中である。その間にも敵の舷側に並んだ無数の副砲が一斉に光った。提督たちが身を隠す暇も無く、飛来した砲弾が艦甲板や下部艦橋に当たって炸裂し、爆発音と猛烈な振動が主砲指揮所を襲う。

「下部艦橋被弾。操舵室大破、第一指揮通信室火災発生。大丈夫だ、戦闘に影響はない」

砲弾が次々直撃するなか、那智は落ち着いた口調で、身をすくめている提督に報告した。提督は那智を見習うように居住まいを正すと、艦橋の窓いっぱい近くに近づくと敵戦艦の横腹を見据えて首をふった。

「奴はぶつけてくる気だ……。艦を奴と水平にとって衝撃を受け流す。下手に距離をとったら並走して一方的に撃たれるよ。おーもかーじー！」

「了解、面舵一杯」

再び敵の主砲が火を噴き、那智艦橋のぎりぎりのところをかすめて第一煙突に大穴をあけた。

「間一髪だったな……」

あまりにも一瞬のことだったので、トビウメ提督は恐怖を感じる暇もなかった。

敵の砲火を受けながら、まるでスポーツカーが峠でドリフトするかのようにな智の船体は舳先を急角度で右へ降り、船体がぐつと傾く。夕級もこちらを巻き込むように右旋回をかけてきているが、すんでのところで頭から突っ込むことは避けられそうだった。

トビウメ提督は羅針盤にしがみつきながらじつと傾斜が戻るまで待っていた。二艦は五十メートルの距離をあけてほぼ並走状態になったそのとき、トビウメ提督が叫んだ

「那智！ サルヴォー！（斉射）」

提督の号令とともに、すでに真左を向いていた全主砲が一斉に火を吹いた。敵戦艦も同時に主砲を撃つが、那智が余りに右舷へ接近しすぎていたため、前後の砲塔うち那智をまともに射界に捉えられた主砲は二門だけだった。

そのうち一発是那智の後部第四砲塔を爆砕、もう一発は左舷艦尾に大穴を開けた。一方、那智の20・8センチ砲弾はすべて敵に命中し、夕級右舷の至る所で爆発と火の手が上がる。

「全砲火、開け！」

左舷に設置された持てるだけの12・7センチ高角砲や25ミリ機銃がすべて夕級めがけて発砲を開始する。それは敵も同じだった。夕級の巨大な煙突や艦橋の周囲に据えられた対空砲や副砲が一斉にな智の左舷へ砲弾を叩き込む。双方の真つ赤な曳光弾が空中に線を引き、お互いの装甲板をがりがりと削る。艦内の至る所から被弾の衝撃と爆発の振動が響き、艦橋を狙った敵の機関砲弾が主砲指揮所の窓を粉碎する。銃弾が装甲板や壁を削り、ガラスくずと鉄片がはね回った。夕級の真黒なゴツゴツした右舷側がみるみる迫り、ドシンという重い衝撃とともに船体が真横に大きく振れる。妙高型重巡の三倍近

い排水量を持つ敵戦艦がその艦舷をぶつけてきたのだ。艦舷同士がぶつかり、甲板の縁がいびつにめくれた。

「さらに面舵舵きって！」

那智に提督は命じた。もろに衝撃を受けられないよう右へ舵を切りながら重巡那智の主砲がさらに敵の船体を砕く。同時に、敵の砲火もこちらの機銃や射撃指揮装置を次々破壊してゆく。

破片の嵐の合間、トビウメ提督は敵の船体をまじまじと見つめた。ビルの窓から隣の敷地の高層ビルの窓を覗くかのように、窓の外にはちょうど、そびえ立つ夕級戦艦の艦橋構造物があった。目線より少し高い箇所にクリスタル張りの部屋から黄色く輝く目でこちらを睨む白い影、マントをまとった銀色の長い髪の女がこちら憎悪の宿った目で見つめているのを提督ははつきりと見た。

——あれが深海棲艦……

提督はふと羅針盤から手を離して愛用のカメラを敵戦艦の人影へ向けて構えた。

「あぶない、伏せろ」

シャッターボタンが押されるのと同時に、那智が提督を突き飛ばした。最後にはつきりと見えたのは自分をかばう那智の制服の白い襟元だった。その瞬間、重巡那智の艦橋構造物を狙っていた敵の5インチ副砲が艦橋左舷見張り所を吹き飛ばした。眼前に広がるオレンジ色の光と轟音、そして全身を棒で叩かれたような衝撃。その後に感じられた猛烈な煙と熱気。そして提督の意識はプツリと絶えた。

『那智、艦橋に被弾！』

加古の無線電話を聞いた不知火は手袋越しに自分の親指の爪を噛みしめた。

大破した初風の元には長良が救援に向かったため、不知火は戦艦との一騎打ちを始めている那智と加古を支援するため、機関に増速の指示を出したばかりのことだった。右前方に見える重巡那智は艦橋付近から大きく煙を上げている。

——司令、那智さん……

不知火は憎悪に満ちた目で重巡那智と並走する夕級戦艦を睨む。

「不知火を怒らせたわね……」

だがその手前では、加古が果敢にも二隻目の夕級戦艦と全砲火による殴りあいの最中だった。

不知火は一瞬、敵の一番艦への憎悪のために目標選択に迷いを感じたものの、敢えてほとんど戦力を喪失していそうな一番艦でなく、加古を一方的に打ちのめしている夕級二番艦をターゲットに定めた。

『この、変態野郎！』

加古にとつて深海棲艦はすべて「変態」だ。不思議に思ったトビウメ提督が以前聞いたところ、自分に命中弾を与えた敵艦は生理的にいけすかないらしい。

先のダメージによって射撃指揮装置が破壊された加古は、統制された射撃ができない状態だったが、重巡洋艦の開祖ともいうべき古鷹型重巡であるという意地もあつて、まだ動ける砲塔はありつたものの砲弾を敵戦艦へ叩きつけた。加古にとつて幸運だったのは、敵戦艦が前方から迫る那智の魚雷に気づき、取舵に急速転舵したため、加古を粉砕しようとする狙っていた火器の照準が一齐に狂ったことだった。惜しくも那智の酸素魚雷は夕級の海面下バルジからわずか五メートルのところを通過した。

戦艦による一齐放火を受けてあわや爆沈という危機から救われたものの、加古の上部兵装はほぼ壊滅し、有効な武装は艦尾近くに据えられた魚雷発射管に残る三発の魚雷だけだった。乱戦下、それも近距離、さらに元来の横着な性格も手伝って加古はろくな目標動作解析もせずに残りの魚雷を上甲板の左舷発射管から放り出した。

「あたしだって、やるときはやるからね！」

この日、加古は艦隊で一番ツイていた。前方から来た那智の魚雷に気をとられていた敵戦艦は、加古の魚雷発射に気付くのが遅れたのだ。すでに回避不能だった夕級の海面下四メートルのバルジに加古の酸素魚雷一本が突き刺さり、瞬時に炸裂した。魚雷は大きな水しぶきをあげてその船腹には直径3メートルの大穴があけた。

不知火は被弾によつて水柱をあげる夕級戦艦をみすえて加古と敵戦艦の後方に進路をとつた。左舷魚雷戦方位盤の照準器が夕級を捕捉する。

——的針三四〇。速度二十一ノット。方位角〇一九。信管撃発三秒……

不知火は射撃方位盤からの情報を統合し発射管に魚雷の調節を指示した。

行く手を阻む敵のエスコート艦を主砲で血祭りに上げながら、不知火は夕級戦艦へ向け前部魚雷発射管を左舷へ旋回させた。これまでの乱戦の最中、再装填と発射を繰り返し、発射管に残る魚雷は二本。不知火は命中精度を上げるため、敢えて被弾の危険を冒して艦の速度を落とした。

「二番魚雷管、放て！」

二本の魚雷は数秒の間隔をあけてトコロテンのように魚雷が発射管から押し出され、海面下に潜ると同時に速力50ノットまで加速し敵戦艦の後を追う。

敵戦艦が駆逐艦不知火の存在に気付いたのはその直後だった。加古に向いていた後部主砲塔がゆつくりと不知火へ向けて旋回をはじめた。すべての切り札を使いきつた不知火はひとり冷笑を敵戦艦へ投げかけた。

「無駄よ。遅すぎるわ」

砲塔が止まり、真っ黒な砲口がまっすぐ不知火へ向いたとき、敵戦艦海面下二メートルの船体に最初の魚雷が深々と突き刺さった。隙間から一斉に海水が流れ込む。そこから十五メートル後方の弾薬庫横に二発目が突き刺さったとき、大型艦用にセットされた魚雷の遅延信管が撃発。夕級の右舷後方に巨大な噴水が持ちあがった。間をおいて二発目の魚雷が爆発すると、夕級の下甲板は火災と浸水、そして煙に浸食され始めた。

果たして、今の攻撃が敵戦艦に致命傷を与えられたのかどうか、不知火には判らなかつたが、敵包囲網の一端を切り崩すことができたのは確かだった。

第一次ブーメラン島沖海戦／煙幕の向こうへ

「貴様、しっかりしろ！　おい！　おい！　目を開けろ！」

そんな那智の声にはっとしてトビウメ提督は目を開けた。うつすらと煙が立ちこめるなか、自分を助け起こそうとする那智の顔と、破断した伝声管や通信ケーブルが垂れ下がる指揮所の天井が見えた。険しかった那智の顔に安堵の笑みが広がった。

身を起こそうとしてあたりを見回し、まるで竜巻が通り過ぎたような惨状の主砲指揮所の真ん中に倒れている自分のことがようやく理解できた。

こんなことはしてられない。今は戦闘中だ。ようやく記憶と意識がそこまではつきりしたので跳び起きようとするのを那智が押しとどめた。

「よせ、まだだ！　この指、一体何本に見える？」

那智はそう言って提督の目の前で人差し指を立てる。

「一本……」

「よし、耳も聞こえるようだな。わたしの顔がはつきり見えるか？」

改めて那智の顔をまじまじと見つめ、提督の表情が曇った。

破片で切ったのだろうか、那智の頬にできた一筋の裂傷から大きく血が垂れ、襟元までを赤く染めている。

「そっちこそ、怪我してるじゃないか！」

なんとも場違いなことだが、那智の端正な顔にそんな傷がついてしまったことに、提督はやるせなさや怒りが沸き起こって来るのを感じていた。もしも凜々しくも美しい那智が、大口ばかり叩くポンコツ軽巡みみたいなキズモノになってしまったら、トビウメ提督には悔やんでも悔やみきれないことだ。

「これくらいの傷なんてことはない……。それより、もし貴様が目を覚まさなかったらと、こっちは生きた心地がしなかったぞ」

那智は自分の傷など気にする様子もなくそう言ったが、それでも提督の怒りと不快感は収まらない。

「大丈夫。どうやら爆風の衝撃で気絶しただけだよ。幸い、大きな怪

我もなさそうだし……」

トビウメ提督はそう強がりを言つて腕を振つて見せた。体の節々が重く痛んだが、幸い破片にやられて血がドバドバ……という状況ではないようだ。だが那智は真剣な顔のまま、提督から視線を逸らした。

「馬鹿を言うな……。一見無傷でも、爆風でノビたまま二度と目を覚まさなかつた者を私は大勢知っている」

「そ、そうなんだ……」

提督は言葉もなくうなずいた。

だが、今は海戦の真つ直中だったはずだ。床に座りこんでこんな悠長に話している場合ではない。提督是那智に助け起こされてようやく立ち上がると、窓ガラスが全て吹きとんだ主砲指揮場から外の状況を見回した。

当然、那智も戦闘継続中であることは心得ていて、提督が気を失っている間も艦の管制は怠っていなかった。

左舷を見ると、火災を起こしながらやや右に傾いた夕級戦艦が遠方へ避退行動中だった。

「あいつが逃げる。攻撃できない？」

そうはやる提督に、那智は無念そうにうなづいた。

「すまない……。奴は仕留め損ねた。後部砲塔は沈黙、魚雷発射管と方位盤も完全に破壊され、電気系統も手ひどくやられている」

その時、左後方から低くドドーンと爆発音が響いてきた。敵戦艦の二番艦からの爆発音で、こちらも大きく火災を起こし、弾薬庫の誘爆を起こしながら、一番艦と同じく避退しつつあった。そのすぐ近くには上部兵装を手ひどくやられて煙をあげる加古と、それに並走する駆逐艦不知火の艦影が見えた。

「あの二人に救われたな。加古達が二番艦を撃退してくれた」

提督がふと自分の大切なカメラのことを思い出し、顔面蒼白になつて周りを見回すと、不思議なことに、指揮所全体があれだけ攻撃を受けたにもかかわらず、愛用のカメラはレンズが割れるどころか、ボディにすらキズ一つついた様子もなく、破片で穴だらけになった海図

台の縁にスリング一本で引つかかっていた。

——驚いたな。これは幸運のカメラだ……

提督は安堵と驚きを感じながら巻き上げレバーをはじいてカメラを構え、使命を果たした仲間の艦影をフィルムに収めた。次に提督は徐々に遠ざかる、宿敵たる夕級戦艦二隻へ向けて一回ずつシャッターを押した。

そうしていると、大きな砲声が後方から響いてくる。指揮所の窓から頭を出して振り返ると、煙に覆われた金剛や扶桑、摩耶などの第一戦隊主力がまだ動く主砲を総動員して敵小型艦を追い払いながらこちらについてくる。

那智ら、遊撃水雷戦隊のカウンター・アンブッシュ戦法により敵の包囲網は完全に混乱していた。少数の敵小型艦がこちらに挑んでくるだけで、今のうちに北方へ逃げれば敵のを巻けるかもしれない。

「仕上げだ。なんとしても脱出させるぞ」

那智が再び表情を引き締めて言った。提督はしばらく無言で考え込んでから、空を見上げた。

「雲が低いね、風向きわかる？」

「東北東の風、やや弱く」

「よし、煙幕張ろう」

提督の指示に那智は深くうなずいた。

「長良は初風を伴ってして北東へ避退中。加古と不知火は上部兵装をほぼ喪失しているが、機関良好とある」

先ほどから発光信号を受けていた那智は提督にそう報告した。

「加古、不知火に伝達。針路057。東南東へ向けて緩い梯形陣で各艦、煙幕展開用意！ 回頭と同時に全力で吐き出す」

「承知した」

那智はすかさず、右舷でかろうじてまだ稼働する信号灯で加古達へ発光信号を送る。

「煙突をやられて、排気が悪い。この海域を抜けるころには15ノットも出ればいい方だ」

那智は少し心配そうに背後を振り返った。

「とりあえず急場をしのげれば二重丸だよ」

そう言っている間にも加古と不知火は那智を追い越して針路057に舳先を向けると、各々の煙突から、吸い込んだらひときわ体に悪そうな黒い煙を噴きだしはじめた。加古と不知火は、それぞれの缶に適正量の三割から五割り増しの重油を注ぎ、あえて燃料を不完全燃焼させて黒煙を煙突から吐き出し始めた。風上へ向かって進む二隻の後ろにはまるで黒いカーテンか屏風のように煙が海上に壁を作る。重巡那智は後ろに続く金剛へ、煙のカーテンを突っ切って脱出するよう発光信号を送り、煙幕を補強するように自らも針路を東南東へ向け、ひしゃげた煙突から黒煙を吹き上げた。

深海棲艦の流れ弾が散発的に飛んできたが、もはや組織だった攻撃ではなかった。金剛と摩耶率いる第一、第二戦隊の残存艦が辛くも煙幕の陰へ身を隠し、あらん限りの速力で北方へと離脱しつつあった。

トビウメ提督の白い上着を脱がせ、シャツの腕をまくって包帯を巻く那智に提督が言った。

「大活躍した加古とぬいぬいにはなにかご褒美をやらないとね」

「ああ、それがいい……」

「加古には、内地から低反発枕を取り寄せようか」

「ああ、ぴったりだな」

これまでずっと緊張した面持ちだった那智はようやく、クスリと笑った。

「ぬいぬいには……。どうしよう、新型爆雷とかあげると喜ぶのかな？」

「そうだな……。不知火には……。そうだ。貴様が頭でも撫でてやれば喜ぶんじゃないか？ ……ただし、誰も見ていないところですからどうぞ」

今度笑うのは提督の方だった。

「ははは、そんな真似したらトビウメ提督はおしまいだね」

那智は笑わず、包帯を巻き終えて端を結ぶと、その傷を包帯の上からピシヤリと叩いた。

「ほら、傷は浅いぞ。ふん、判っていないのは貴様の方だ」

那智は提督の腰と羅針盤を結んでいたロープをナイフで切り落として立ち上がった。

「さあ、我々も避退するぞ」
「う、うん」

提督は釈然としない表情で立ち上がった。

窓のなくなった主砲指揮所にも僚艦の吐き出した煙が吹き込んできた。口元をハンカチで覆いながらトビウメ提督は周囲の海を望むと、右舷側には数えるだけで十隻近い艦が炎と煙を上げて沈みかかっているのが見えた。その半数以上が味方の艦船だった。

先の冗談話でせつかく解かれたばかりの緊張が再びトビウメ提督の心中に冷たく入り込んできた。

「那智さん、あれ……」

トビウメ提督が指さす先には、中央部から真っ二つに折れた駆逐艦がまさに沈みゆくこうとしていた。艦首部の錨甲板には、旗竿につかまって呆然とこちらを見つめる制服姿の少女の影が見えた。遠くても顔も艦名も知る術はなかったが、提督は凍り付いたようにその少女を見つめた。

何も判らない頃ならば、すぐにも内火艇を走らせて助けるように那智や仲間にも命じたはずだった。

沈む艦の艦娘だけを決して助けてはいけない。それがこの不思議な世界の決して破ってはならない掟の一つだった。艦船そのものは艦娘の半身のようなもの、切っても切り離せない存在である。聞くところによれば、これまでも沈みゆく艦から艦娘だけを助け出してしまった提督は何人もいたそうだが、結果的に助けられた艦娘の末路はどれも良いものではなかったという。

人間に換算すれば小学校の高学年、もしくは中学生くらいになるのだろうか。その駆逐艦の艦娘は沈みゆく艦首の先につかまり、じつと重巡那智の方を見つめている。トビウメ提督はストレスのためにモゴモゴと無意識に歯ぎしりしながらその少女をみつめていたが、ふと、これは写真として記録に残すべき状況なのではという思いに駆られ、手元のカメラを見下ろした。だが、一瞬そう思ってもその腕を持

ち上げてカメラを構えることはトビウメ提督にはできなかった。

少女は不意に傾く甲板に直立し、こちらへ敬礼した。

「クソツ……。これが掟か？」

不条理とやるせなさのあまり、呪うようにトビウメ提督がうなつた。

「ああ、そうだ。こればかりは貴様にもわたしにも、どうにもできない……」

那智は苦しそうにそうつぶやくと、その艦娘へ答礼した。あくまで軍人のようなことをしているだけで、決して軍人になつたわけではないこの世界の提督が、実際に敬礼をする機会は少ない。訓練を受けたわけでもない自分が答礼することに一瞬躊躇いを感じたものの、提督は自分で正せる限り姿勢を正し、那智に倣って答礼した。

——いかれてる。この世界もやっぱりいかれている。この世界は……この世界は天国なんかじゃない！

これまで、那智や指揮下の艦娘に囲まれ、慣れないながらも「提督稼業」をそれなりに満喫してきたトビウメ提督にとつて、この死後の世界は天国のようなものかもしれないと思うことも度々あった。だが、今回の徹底的な敗北と眼前の不条理な現実をつきつけられ、トビウメ提督はそれが大きな思い違いであることをはつきりと悟つた。

提督と那智は、その駆逐艦の艦首が煙幕の向こうに見えなくなるまで最後の時まで、敬礼した姿勢を崩さなかった。

重苦しい空気を引きずつたまま、提督と那智は主砲指揮所から一階下の羅針艦橋へと移つた。主砲指揮所ほどではないものの、ここも酷い壊されかたをしていて、左舷から艦橋中央までの窓はすべて吹き飛び、左舷側は火災のため、黒く煤けている。

敗残の艦隊は一路北進したのち、西のタロタロ泊地へ撤退しつつあり、艦隊陣型もあつたものではなく、各艦出せるだけの速力でひたすら泊地を目指して機関を回して逃げ帰ろうとしていた。当然、機関系や操舵系を損傷している艦は次々落後し、五ノツト以下でよろよろと走る艦もあつた。

「マズいな……。これじゃあ格好の狩り場だぞ」

那智が渋い顔で避退しつつある残存艦を見回した。

「空からかな？ それとも下から？」

「空から来られたら全滅だ。空母の位置が気になるが、もはや知る術がない」

「僕は下が気になる。翔鶴はポートヴィラ沖合すぐで潜水艦にやられた」

那智はそうだなとうなずきながら頭を抱えた。煙幕展張を終え、殿をつとめていた加古が那智の右後方に艦影を見せたはそんな時だった。

「加古のやつ無事でよかった。ぬいぬいは一緒じゃないのかな？」

提督双眼鏡をのぞきながらそう言った。加古も兵装をこっぴどくやられていたが、機関は重巡那智より元氣らしく、高速でみるみる近づいてくる。那智は先ほどから損傷で切れたワイヤーアンテナの復旧を試みているがまだ応急アンテナの敷設も済んでおらず無線は使えなかった。加古のズタバロの艦橋から発光信号があつたのはその時だった。

「あの馬鹿が！」

モールス信号を解さない提督にはさっぱりな光の応酬の途中で那智が口元を歪めてそう呪い文句を吐いた。

「な、なに？ どうしたの？」

狼狽して尋ねる提督をよそに、しばらく加古と発光信号をやりとりしたのち、那智は観念したように息を吐いた。

「早霜か……。しかたないな」

「ねえ、どういうこと！ 何、はやしもって。何があつた？」

「煙幕を張った直後、不知火は損傷して動けなくなった僚艦を見つけ、その救援のために引き返したそうだ」

提督の顔が青くなった。

「そんな無茶な……。あんな中へ引き返すなんて……。それに駆逐艦一隻でどうしようっていうんだ！」

取り乱してまくし立てる提督の腕を那智は強く掴んだ。

「落ち着け！ 貴様が心配するのも無理ないが、よく聞け。確かに不合理な事だ。だが……。私たち軍艦は前の世界でそれぞれ残り残した使命や未練を抱えてこの世界に生まれてきた。貴様にだったら判るだろうか？」

提督ははつとして真剣な顔で自分に説く那智の目を見返した。

「今は不知火が戻ってくるのを信じて待つしかない……。水偵がまだ一機上空に残っている。避退する航路の安全を確認した後、燃料の続く限り不知火の捜索にまわす」

提督は不安に顔を歪めたまま深くうなずいた。

カメヤマ提督の勘

ブーメラン島沖、西南西に五十浬の洋上。もうすぐ夕暮れも近くなってきた頃。第八艦隊旗艦である潜水母艦の大鯨は事前の暗号電信どおりに、伊168とのランデブーを果たした。

「司令官、まだー?」

潜水母艦から延びた重油補給用のホースを自分の錆の浮いた船体につなぐと、スクール水着にセーラ服を羽織った艦娘、伊168ことイムヤは、潜水艦の甲板から潜水母艦大鯨の甲板を見上げた。

「急ぐぞ、イムヤ! 調子はどうだ?」

白ふんどし一丁で大鯨の上甲板に現れた第八艦隊司令のカメヤマ提督は大慌てで白い防暑衣と半ズボンに袖を通し、大鯨の甲板から旅行鞆を潜水艦の甲板へ投げ落とすと、潜水母艦の舷側におろされた縄ばしごを伝って自分も潜水艦の甲板へ飛び移った。

「重油満タン、蓄電池も最高電圧。魚雷も満載、機関も絶好調!」

大鯨から給油と補給を受けたばかりのイムヤは胸を張って言った。

「提督、お弁当と食料をお忘れですよ」

クジラのロゴプリントのついたエプロンを着た少女、艦娘の大鯨が提督を追って甲板へ顔を出し、ランチヨンマットにつつまれたお弁当二つと生野菜や缶詰と入ったザルを紐で釣っておろしてきた。

忘れ物を受け取った提督はやつとまともに服を着て、トレードマークの黒い色眼鏡をかけた。

「司令官、また慌ててお風呂?」

「ああ、しばらく風呂なし生活になりそうだからな」

提督は甲板にぽっかり開いた昇降口へ旅行鞆を放り込むと、もらった食料を抱えて潜水母艦上の大鯨を見上げた。

「知つてのとおり、連合艦隊の第一、第二戦隊は先ほど壊滅した。今頃、生き残りがタロタロ島へ全力で撤退中だ」

「やっぱりですか。提督の予感、当たってほしくなかったのに……」

「そうだな……。とにかく、俺にはイムヤとやることがある。大鯨は全速」

力でこの海域から離脱しろ。絶対にタロタロ島へは戻るな。近くのタロタロやシューズベラではなく、まっすぐ西のロングランド諸島まで避退しろ。ハチやゴーヤ達も順次、そっちへ戻るように伝えてある。道中、敵潜にだけは注意しろよ」

提督は大鯨を見上げながら大声で指示した。

「了解しました提督。提督もどうかご無事で……」

大鯨は甲板から心配そうに言った。

「大丈夫だって、大鯨姉さん。このイムヤがついているんだから」

「どうかイムヤちゃんも気をつけて。提督のことよろしくね」

別れの挨拶を交わすと、イムヤとカメヤマ提督は艦内の発令所において、すぐに母艦から離艦した。

「これより潜航する。前部バラスト、ベント開け。ダウントリム10度。速力5ノット。深度30」

「了解、司令官」

イムヤが答えると、潜水艦伊168はゆっくりと夕暮れ前の海面にその船体を消した。

「司令官、これから深海棲艦をやっつけに行くんでしょ？」

イムヤはプレゼントをもらった子供のように興奮して言った。

「ああ、すまないな、イムヤ。今回はかなり危険だぞ」

色眼鏡を取った提督は薄暗い発令所の潜望鏡にもたれかかりながら言った。ふだん柔和なカメヤマの顔には厳しく深い皺が寄っている。

「司令官と一緒になら大丈夫よ。あの……それから、今回の作戦にわたしを選んでくれてありがとうね。絶対敵をやっつけてあげるから」

「ああ、そうだな……。今回の標的はおそらくこのあたり」

提督は発令所の海図台に地図を開き、二脚デイバイダーをブーメラン島周辺で何度か回してから、シューズベラ島のずっと南方の一点を指さした。

「速力28ノットで北上したとなると敵はこの位置だ。用心してかかれよ。進路西北西250。陽が落ちたら一度浮上しブリッジに逆探のアンテナをあげるぞ」

提督はそうイムヤに命じ、まだ見ぬ敵を求めて暗い海面下をゆつくりと進んでいった。

シューズ・ベラ島の日は暮れて

避退中、那智と古鷹の上空には敵機の触接は何度かあったが、幸いなことに那智の懸念した深海軍の航空攻撃は一度もなかった。

だが、連合艦隊の退避行はトビウメ提督と那智の予感したとおり、大きな犠牲をはらうことになった。

トビウメ提督と那智がそれを知ることになったのは長距離無線用の空中線の応急修理が終わった直後だった。間に合わせに空中線のケーブルを張り終えて、無線の電源を入れた途端、悲鳴のようにモールの緊急電が混信もお構いなしにスピーカーから聞こえてきた。

トビウメ提督の心配したとおり、一番先へタロタロ島へと逃げ帰った残存艦を待っていたのは半月湾近海に潜んでいた敵潜水艦隊だった。

それまでなんとか無傷でいた戦艦比叡をはじめ十数隻が軒並み雷撃を受け、その半数が半月湾を目前に沈むことになった。比叡や金剛などの主力艦は被害を受けつつなんとか湾内の浅瀬に滑り込んで擱挫。慌てふためいた後続の艦は進路変更して手前のシューズ・ベラ島の警備府へと逃げ込んだ。

シューズ・ベラ島は珊瑚礁の島で、その警備府は小さな入り江の奥に置かれており、軍港はタロタロ泊地とくらべても小規模なものだった。

ドックは大型艦用のものが一つあるだけで、先に被雷した空母翔鶴が応急修理中で、狭い湾内にはほぼ水没しかかった駆逐艦や二十度以上傾斜し今にも転覆しそうな軽巡など、ボロボロの僚艦が二十隻以上ひしめいていた。栈橋にはなんとか鎮火に成功した重巡摩耶が、三本の煙突が全て傾いてしまった多摩と並んで係留されていた。

空中線の仮復旧によりタロタロ島沖合からの悲鳴を傍受した那智と加古は最初からシューズ・ベラへと進路をとり、本隊に遅れることおよそ十時間。満身創痍の船体を引きずってシューズ・ベラ島の軍港にたどり着いたのだが、港内は第一、第二戦隊の残存艦で停泊する場所すらない状況だった。

「あーあ、これじゃあヤムヤム島まで戻った方がいくらいだな」

入り江のすみに錨をおろすと、すぐに内火艇が一艘近づいてきた。

内火艇が那智に接舷し、操舵室から長良が顔を見せた。

「お疲れ様！ みんな無事でよかった！」

初風を連れて先に後退した軽巡長良は酷く損傷していたように見えたので、提督や那智はとても心配していたのだが、艦娘のほうの長良はほっぺと腕や膝に絆創膏とテーピングが巻いてあるだけで意外に元気そうだった。

「長良ちゃん、ありがとう。みんなのおかげで、大勢助かったよ！ と
ところで、初風の具合は？」

「重傷だけど、心配しなくて大丈夫。ただ、艦の方はボロボロだから
ちやんとドックで修理しないといけないんだけど……」

港内を一瞥しただけで、ここでの修理はとても望めないことはわかっていた。提督は遠くに停泊している軽巡の長良を見た。シンボルの三本煙突はことごとく倒壊し、艦中央部から艦尾にかけては真っ黒焦げに焼けている。あの状態で初風を引っ張ってきたのはすごいことだ。

提督は那智と一緒に内火艇に移ると長良の手をとった。

「ありがとう長良ちゃん。とにかく今は一度、上陸して休もう。ね？」

「そうだ、長良よくやったな……。感謝するぞ」

那智も長良の頬を優しくなでた。長良はかすかに笑みを見せたが、その顔はみるみるゆがみ、ついに那智の胸元へ顔を押し付けた。

「初風を曳航して煙幕を抜けるとき、周りの駆逐艦が何隻も、助けて、置いていかないで……。わたしには、初風しか連れてこられなかった……」

長良は那智に抱きついたままそう嗚咽した。

「わかっている、ああ、わかっているとも……」

那智は長良を強く抱きしめながらそうささやいた。提督はズタボロになったアドミラルキャップを目深にかぶり直し、ただ二人の様子を見ているしかなかった。

「とにかく今は休むんだ。心配なくていい。不知火も無事だ。さっ

きまで水偵で見っていたんだからな」

しばらく那智に抱きついていて長良はゆつくりと体を離すと、涙をぬぐって無言でうなずいた。

トビウメ提督は内火艇の操舵輪をつかみ、少し離れたところに錨をおろした重巡加古へと舳先を向ける。那智ほどではないが、加古もひどくダメージを受けていて、舷梯は爆風でゆがんで使えなかった。

「おーい、加古。迎えにきたぞー」

応急で垂らされている縄ばしごを掴んで提督と那智はなんとか加古の艦上へと這い上がり、瓦礫だらけの甲板を乗り越えて艦橋へ上ると、そこには天井のパイプとパイプに器用にハンモックを吊っていきをかいている加古の姿があった。

「おい加古。起きろー!」

呆れて揺り起こそうとする那智を提督が止めた。顔やセーラー服は煤で真っ黒けだが、大きな怪我もないようで、トビウメ提督は少し安心して笑みを見せた。

「寝かせておいてあげよう」

「わたしなど比べものにならないくらい凶太い奴だ」

那智が少し笑みを見せた。

熱帯のシユーズ・ベラ島も日が陰れば急に涼しくなる。この羅針艦橋も風防は全て失われ涼しい風が通り抜けている状態だった。

「なにか、かけてあげないと」

提督は瓦礫だらけの艦橋内をあちこちあさって、防水カンバス布の切れ端を見つけたし、ハンモックの加古にそつとかぶせてやった。

——今日はあるがとう。頑張ってくれたお陰で長良ちゃんたちも僕達も生きて帰ってこられたよ

提督と那智はそつと艦橋をあとにして長良の待つ内火艇へと戻っていった。

上陸し長良を宿舎へ送り届けてから、那智と提督はお互いの包帯を替えてから基地の食堂で配られていた麦茶とサンドウィッチを受け取り、そのまま港の突端まで戻ってきた。

那智は破断した空中線を本格的に修理するため内火艇で艦へ戻ったので、提督は一人、コンクリートの防波堤に腰を下ろし、夕暮れの水平線に目を凝らす。

岬の向こうから艦影が見えるや、提督ははっとして立ち上がるが、それは近海の哨戒任務からもどつてきた警備府所属の駆逐艦や海防艦だったということが数回続いた。

もう水平線に日が沈み、空が群青色になったころ、内火艇に乗って那智が戻ってきた。

「貴様、そろそろ休んだ方がいいぞ。眠れずとも、体を横たえるだけでもいい。休息も戦いだぞ」

内火艇から堤防へ飛び移ると、那智が心配そうに言った。

「そういう自分はどうなのさ？」

提督がそうやり返すと、那智は言葉を詰まらせながら、提督と艦娘は違うからな、とすつとぼけてみせた。

二人は並んで腰を下ろすとサンドウィッチの包みをほどき、口へ運び始める。いざ食べ始めると、二人は無言になり、最初は上品に少しずつかじっていたが、しだいにすごい勢いでガツガツと口へ押し込みはじめた。サンドウィッチを胃袋へ片づけ、ヤカンの麦茶を飲み干した二人は一息ついてようやく口をききはじめた。

「ツナサンドもなかなかいけるな……」

戦闘直前におにぎり食べてからその後丸一日、わずかばかりの乾麺包（乾パンのこと）以外ろくに口にしていなかったのだ。

日の名残でわずかに明るさを帯びていた空も黒くなり、空には星が光だした。

「明日もやならければならないことがある。いい加減休まないと……」

那智がそう言いかけたとき、洋上に黒い影が二つ、ゆっくりと島へ近づいてくる。島の灯台を認めたのか、その影は小さな信号灯に灯を入れ、港の方へとやってきた。

「ねえ、あれ。もしかして……」

提督は双眼鏡をのぞき込む。丸い視野の中には、マストも倒れ、砲

塔もひしゃげたボロボロの駆逐艦が黒い煙をはきながらゆつくりと軍港へやってくるのが見えた。その後方には駆逐艦に曳航されて、艦中央部が激しく壊れた別の小型艦がついてくる。

「間違いない、あれは不知火だ！」

那智と提督は内火艇に飛び乗ると艇のライトをつけて駆逐艦不知火へと急ぐ。

ライトで照らしながら近づくと不知火は艦体も艦橋構造物も穴だらけで、機関室の辺りからは黒い煙をはきながらも曳航索をしつかり延ばして別の駆逐艦を曳きながら時速6ノットで港へ入ってきた。

「よかったあ……。本当によかったあ……」

駆逐艦不知火は停泊中の那智や加古の後方に錨をおろした。すぐに提督達の内火艇が横付けされると艦娘の不知火は廃墟同然の艦橋から後甲板へ降りてきた。いつもきつちりと着こなしている制服はズタボロで白いブラウスは至るところ血で染まっている。

係船索に内火艇を結びつけると、提督と那智は甲板へよじ登った。二人を前に不知火はいつもどおり、きりつとした敬礼をきめて直立不動の姿勢をとった。

「ぬいぬい……」

「今回の命令違反を含む全ての落ち度はこの不知火にあります。どのような懲罰も受ける覚悟はできています」

提督が声をかけようとする、不知火は一点を凝視したまま開口一番にそう言った。

「ただ、後ろの早霜は機関室の浸水が止まらず、危険な状態です。一刻も早い保護を要請します」

「わかった、すぐタグボートを呼んでこよう。ところで不知火……。前世の業は少し軽くなったか？」

やさしくそう問いかける那智に不知火は深くうなずいて見せた。

「不知火は満足です」

「そうか、よかったな」

那智は微笑を浮かべて内火艇に戻ろうとする。

「私からも頼む。あまり怒ってくれるなよ……。ゲンコツ一発くらい

で許してやれ」

「そんなことしないよ……」

縄ばしごを下りる間際、那智は小声で提督に言うので、トビウメ提督は困った顔でため息をついた。

内火艇が駆逐艦不知火から離れてゆくと、左舷の甲板に残された二人の間には気まずい沈黙が訪れた。

居心地の悪さを何とかしようと、提督は静かに言った。

「どれだけ心配したと思っっているんだ……。まったく勝手なことばかりして……」

一応これから説教をしなければいけない立場のため、安堵やあからさまな喜びを押し殺して提督は言った。低く声で静かに言ったため、ガラにもなく少々ドスの利いた声になってしまった。そのうえ、すっかり夜になってしまったので、二人にはお互いの顔すらよく見えない。不知火には提督がとても怒っているように感じられたであろう。「弁明の余地はありません。ただ……ただ、司令と那智さんがご無事だったので、不知火はとても安堵いたしました」

いつもは凶手のオーラをまとっている不知火だが、今日に限ってはなんともしおらしい。

——さてどうしよう？

そう考えていて、ふと提督の脳裏にいたずら心が浮かんだ。戦鬪海域から撤退中に那智と話したあのことを思い出したのだ。

トビウメ提督はわざとらしい咳払いを言った。

「本当は真っ先に労をねぎらってあげるべきなんだけど、今回ばかりはそうもいかない。ちよつと罰を受けてもらおう」

「当然です」

——罰ゲームということにすれば怒ったりしないよね？ よね？

提督は内心にやにやしなから不知火を手招きした。

「こつちへきて、頭を出せ。一回で済むから」

不知火はそばへやってくると会釈するように頭をさしだした。どうやら本気で鉄拳制裁を受けると思っているようだ。

——どうしよう？ セクハラだとか言ってマジギレしちゃったら

絶対殺されるよ……

事ここにいたってトビウメ提督は躊躇したが、今一度、そばで誰も見ていないことを確認してから手袋をとった。鉄拳制裁の準備は万端とばかりに握りこぶしを作ってフーフー息を吹きかける。そして、こちらへ向かってうつむいている不知火の頭頂部へそつと右掌を乗せそのままゆっくりと三回なでた。

「今回は本当にありがとう。敵戦艦を追い払った上に殿で煙幕を張ってくれたぬいぬいのお陰で僕や那智さん、加古も無事に帰って来られたよ。ただ、その後戦闘海域に引き返したって聞いて、みんな死ぬほど心配してたんだぞ……。こ、こんな事は二度とごめんだからね！」
最初不知火がビクつと反応したので、一瞬提督も肝を冷やしたが不知火は黙ったまま、されるがままに頭を垂れていた。いつも無造作に結っているだけの髪だが、思っていたよりもずっと不知火の髪は柔らかくてしっとりとしていた。

——罰ゲームはこれで十分だろう

提督は不知火の頭からそつと手を離して言った。

「懲罰は以上。とにかく無事でよかった……。まず薬箱を探そう。今更だけど、その傷、応急手当しないと。ひどい怪我じゃないか」

そう言うなり慌てて艦内へ行くこうとする提督の制服の裾を不知火がぎゅつと掴んだ。

——うわ！ もうおしまいだ！ やっぱり怒ってるよ……

顔から血の気が引いてゆく提督の顔を不知火は真つ正面から見据えた。

「これだけは覚えておいてください、司令。この不知火は……不知火は司令や那智さん達のためならば、いつ何時でも沈む覚悟ができています」

不知火はそう言い終えると、呆氣にとられる提督の裾から手を離して艦尾の方へすたすたと歩いて行ってしまった。

「く、薬箱どこにあるの？」

「この程度で不知火は沈みません」

見れば、那智の呼んだタグボートがこちらへ向かってやってくると

ころだった。

不知火はタグボートに乗った軍港の作業員達に收容され担架に乗せられた。駆逐艦不知火にも曳航索が結びつけられ、安全な栈橋に係留すべくタグボートに曳かれてゆく。後ろを見れば、不知火が命がけで救い出した夕雲型の駆逐艦にもタグボートと内火艇が接舷し、救助作業がはじまっているようだ。

不知火と一緒にタグボートで港にあがると、あとはお願ひしますと提督は作業員に不知火の手当を託し、那智が内火艇が戻ってくるのを待つことにした。

「提督さんや。お宅さん、間宮の羊羹でももつたのがね？」

何を思ったのか、不知火の救助に当たっていた作業員の一人が、担架で運ばれてゆく不知火を見送りながらトビウメ提督にたずねた。

「いいや……。うちの艦隊は残念ながら間宮さんとはしばらく会えないですよ。本当は会わせてあげたいんですけど……」

提督がいぶかしげな顔でそう答えると、その作業員は不思議そうな顔で首をかしげた。

「はで、なんでだろうな？ あんの子、こんな負け戦にもががわらずキラキラしてだんだげんど……」

そう言つて作業員は歩き去る。ただ、その男はひどいダミ声だったので、はたして不知火が気分が高揚して「キラキラ」していたのか復讐に燃えて「ギラギラ」していたのか、提督には解りかねた。

すぐにもう一艘の内火艇が近くの岸壁に接岸し、夕雲型の艦娘を担架に載せた作業員達が下りてきた。

——確か、早霜とかいつたっけ？

長い黒髪で青白い顔の半分隠れているが、髪の間間から見える左目はじつとトビウメ提督を凝視している。

「ごめんなさい、那智さん……。私のために偵察機を犠牲にさせてしまつて……。でも、あの時と変わらさ……。とても素敵な水偵でした……」

担架に横たわつたまま、その艦娘はなんともおどろおどろしいゆつくりした発声で言つた。

那智に搭載してあった三機の偵察機のうち、一機は敵艦隊に撃墜され、もう一機は那智が被弾した際に飛行甲板上で破壊されてしまった。残りの一機は撤退用の航路を監視するため、ずっと上空におり、最後は燃料が尽きるまでこの駆逐艦早霜とそれを曳航する不知火を上空から見守り続けたのだった。前世と違い、無人の偵察機が未帰還となっても人命が失われることはないが、なかば念力や残留思念みたいな力で航空機を操っている艦娘にとって、自身の搭載機を失うことはそれなりに精神的な負担となるのだ。

「そんなこと、気にしなくていい。クレーンも駐機場もやられてどのみち回収はできなかつたからな」

那智は気丈にそう笑って早霜の頭を軽くさすった。

——どうやら二人は昔なじみみたいだな

提督は黙って二人の会話を聞いていたが、どうにも居心地が悪くて仕方がない。というのも、この早霜という艦娘はさつきから那智と話している間もずっと前髪の間からのぞく左目でじつとトビウメ提督ばかりみつめていた。薄気味悪い話し方と周囲が真つ暗なことも手伝って、提督は四谷怪談のお岩さんを思い出した。

——まさしく軍艦の亡霊みたいな艦娘だな……

「提督……。早霜は見ていましたよ……」

不意に早霜が提督へ話しかけたので、トビウメ提督はぎよつとして早霜を見返した。

「な、なにを……」

「フフフ……。不知火さん、それはそれは嬉しそうでしたね……。早霜は全部見ていたんですよ、フフ、フフフフ」

早霜はそう不気味に笑う。

いろんな意味で提督が青ざめていると、ちょうど黄土色の車体に赤十字のペイントをしたくろがね四起（九五式小型乗用車のこと。旧日本陸軍版ジープのようなもの）が提督達の前に止まった。

「ゆっくり休むんだぞ」

「はい、このご恩は必ず……」

那智に見送られ、早霜を乗せた救急車は走り去る。

「な、なんとも個性的な艦だね……」

「そうだな。でも、ああ見えてとても人懐こい船だぞ、早霜は」
「へえ……」

とてもそうは見えないと思いつつ、提督は生返事した。

「ところで貴様、不知火に何かしてやったのか？」

「いや、懲罰のかわりに罰ゲームを一つ。それも別にひどいことじゃないよ。ほら帰り道話したあれ」

提督は首を振りながら、なでなでするような身振りをして見せた。それを見た那智はアハハと笑いだした。

「貴様やったのか。そうかそうか……」

「まあ懲罰と言う理由でやったからそんな怒ってなかったみたいだけど、もしあれを見られてたって、ぬいぬいが知ったら僕はどうなるんだろう？」

「まあ、せいぜい覚悟を決めておくんだな……。ん、どうした？ 貴様、もどらないのか？」

急に足を止めた提督を那智は不思議そうに見る。

「いや、いいんだ。ちよつとだけ風に当たってからもどるよ」

「そうか。明日からまた忙しくなる。今日くらいは早めに休めよ」

那智はそう笑顔を残して歩いていった。

提督は足を止めたまま那智の後ろ姿をみつめた。とりあえず自分達の仲間は大きく損傷しつつもなんとか戻ってくる事ができた。

トビウメ提督はつい今までそのことを素直に喜んでいたのだが、ふと那智がこれまで、壊滅したという第三戦隊のことに一度も言及しなかったことに気づいたのだ。

——足柄さんのこと、一言も聞かなかったな……

当然、トビウメ提督達は上陸後すぐに基地の通信所へも立ち寄ったのだが、第三戦隊の詳細な安否は届いていないとのことだった。

気丈に振る舞う那智の心情を想像し、見ていられなくなったというのが提督の正直な気持ちだった。

提督はカメラと双眼鏡を抱えたままヤシの幹を背に腰をおろした。フリスビー沖からの撤退間際、沈みゆく駆逐艦から直立不動の敬礼を

送ってきた艦娘の姿がまたも脳裏に蘇った。

——『姉さんや提督には負けないから。第三戦隊の戦果を期待して
てね』つか……

第三戦隊抜錨間際、棧橋で別れ際に見せた足柄の喜び勇んだ笑顔が
思い出された。

——無事に戻っていてくれよ……。お姉さんのためにも

提督は愛用のカメラを握りしめながら、足柄の帰還を祈っていた。

行くも、留まるも

翌朝、シユーズ・ベラ島での損傷艦修理は期待できないので、自力航行可能な艦から後方のタロタロ泊地へ順次撤退し、修理せよとの電文が軍令部より届いた。

トビウメ提督の艦隊も、上部構造がほぼ木っ端微塵になってしまった初風以外はなんとか航行できそうではあったが、だからといって道中無事に退避できるとは限らない。

『オハナシハ キイテイルワ トテモオミヤゲドコロジヤ ナサソーネ アラシオ コレヨリ ユウガニバツビョーヨ』

ヤムヤム島泊地に残してきた荒潮に応援要請の無電を打つと、間を置かずにそんな返電が返ってきた。

「無電打つてから30分も経ってないのに返事が来たよ……。準備もあるだろうに大丈夫かな？」

普通、準備していなければ外洋航海に出るまで二、三時間は掛かるものだ。もし蒸気機関の火を落としていれば丸一日かかることもある。電文を読みながら少し心配になった提督が言うので、長良が伸脚と屈伸運動をしながら笑った。

「荒潮ちゃん、きつと一人で寂しかったんじゃない？」

「いつも、わたし潜水艦好きよくなって言うから対潜警備に置いてきたのになあ……」

そう言つて呆れる提督だったが、驚いたことに機関全速時速三十五ノットで飛んできたのか、昼過ぎに返信を寄越した駆逐艦荒潮はその日の夜にはシユーズ・ベラの港へ姿を見せた。

「さすがに疲れたわねー。それにしても、みんな酷い格好ねー」

入院中の初風以外の艦隊の仲間があわてて出迎えると、艦娘の荒潮は驚いた様子で包帯だらけの面々を眺めた。

「でも、司令官も五体満足みたいだし、みんなちゃんと浮かんでよかったわ」

荒潮は、いつもののんびりした口調こそ変わらなかつたが、あとで那智によれば、駆逐艦荒潮の主機は全速で回されつづけ、焼け付く寸

前だったららしい。

「ああ見えて、内心でが私達心配していたんだろう……」

後刻、二人きりになったとき時に那智は提督にそう告げるのだった。

翌朝から、トビウメ提督は他の提督達と、今後どうするべきかの協議に入り、動ける艦娘達は艦の応急修理にとりかかった。

午後、熱気のこもる駆逐艦荒潮の艦内食堂に集まった艦娘たちに提督は協議の結果を伝えた。

「動ける艦を束ねてまずタロタロ島へ。その後さらに後方へ移動することに決まったよ」

「ここじゃ修理もできないし、それしかないだろうな。しかし……無事にたどり着けるか？」

「撤退時も、タロタロ島の沖合でかなりの被害が出たようですね。危険ではありませんか？」

那智と不知火が次々に懸念を口にした。

「初風ちゃんは、今のまま外洋に出るのは危ないわ」

長良の言葉に提督もうなずいた。

「わかつてる……。初風には修理と回復が済むまでここで待機してもらう」

「……やむをえないな」

那智は腕を組んで静かに言った。

「長良ちゃん、申し訳ないけど、初風の介助の為にもここに残ってもらえるかな？ 軽巡長良の損傷も軽くないし、いざというときのために初風を守ってあげてほしい」

長良は一瞬、酷く落胆した表情を見せたが、すぐにいつもの表情にもどって強くうなずいた。

「うん、大丈夫。いつでも復帰できるようにトレーニングしておくね。だから次の作戦にも必ず連れて行ってよね」

艦娘であっても前線近くに残されるというのは心細いものだ。我慢して元気そうに言う姿に提督は、心中で何度も謝った。

長良と対照的に、手を焼かされたのは初風のほうだった……。提督と那智は同じ陽炎型の姉妹艦である不知火を伴って入院中の初風を見舞い、長良と一緒にシユーズ・ベラ島に残るよう伝えると、ベッドに寝ていた初風は布団を頭まで被ってしまった。

「手負いの艦にもう用はないってことね！ いいわ。放棄するなり、資材にするなり好きにすればいいじゃない！」

「なんで……。そんなつもりはないよ……」

面食らった提督はあわててフオローするが、初風は動かない。

「わがままを言わないでください。損傷艦を洋上で援護することが仲間にとりだけの負担をかけるのか初風も分かっていることと思いません。おとなしくここで擱座しててください」

——か、擱座なんて、ちよつとそんな言い方したら……

「ええ、そうよ。私はもう用済みだわ。勝手にすればいいじゃない！」
人選ミスだった。不知火はいつも礼儀正しいし、とても頼りになる艦娘だが、どうにもデリカシーとか配慮とかいう気持ちがない。残念だった。とうとう布団の中から鼻をすする音が聞こえてきた。

「応急修理の申請はしてあるし、必ず迎えにも来よう。だから、あまりわがまま言ってくれないな」

那智も困った様子で諭す。

三人が顔を見合わせていると、病室前の廊下から荒潮が顔を覗かせた。

「あらあら、なんか大変なことになっているわねー」

——一番この場に合わない子が来たな……

提督にからみて、いつともキャンキャンと噛みついてくる初風と、なんとも飄々として人を小馬鹿にしたような雰囲気、荒潮の相性はきつと悪いに違いないという思いがあったからだ。狭いヤムヤム島でも二人だけで一緒にいることはあまりないように思えた。

「初風ちゃんは元気かしらー？」

荒潮の能天気な声が癪に障ったのか布団がかすかに動いた。

「あら、いないわねえ？ まさか、首から上が吹き飛んじやったのかし

ら？」

我慢できなくなったのか、ふくれ面の初風が掛け布団を跳ね上げて起きあがった。

「そんな訳ないでしょ！ あんたこそ、留守番はどうしたのよ！ こんなどころ来てる暇あったら、さっさと対潜哨戒に戻りなさいよ！」

「あら、元気そうね？ でも、初風ちゃんも無事出よかつたわー」

荒潮はそのまま病床の初風に軽く抱きつく。

「痛い痛い、ちよつとやめなさいよ！」

「あらあらごめんさいく。でも〜」

荒潮は初風から離れるとトビウメ提督の横に寄り添うように立った。

「司令官はきつとワガママ言うフネはきらいよねー」

小さい子がすがりついてきたので提督が無意識に荒潮の頭をなでたのが良かったのか、いけなかったのか……。那智だけが、眉をしかめて小さく舌打ちした不知火に気がついた。

一方、初風は真つ赤になつてベッドの上に起きあがり、包帯や絆創膏だらけの手で荒潮を挑戦的に指さす。

「な、何言つてんの？ あ、あんた覚えておきなさい！ そんなこと言つてると今に敵機にボカンされても知らないわよ。いいわ、結構じゃない！ 待機でも留守番でもしてやろうじゃない！ ただし、みんなですぐに迎えにこなかったらその時は覚えてなさいよ！」

初風はそうまくしたてて、顔を背けると乱暴に寝転がった。

「あ、ありがとう初風。絶対約束するよ。うん、大丈夫」

「ああ、お前を忘れてたりなんかしないから、怪我だけでも早く治しておくんだけぞ」

提督と那智がなんとかなだめ、一同は一安心とばかりに病院から出てきた。

「知らなかったけど、あの二人、仲良さそうじゃないか？」

「良いと言うのか、悪いと言うのか……」

那智は苦笑いを浮かべる。

「司令、不知火は出航の準備にとりかかりますので、これにて失礼いた

します」

不知火は仏頂面でつつけんどんに言うと、きびすを返して港のほうへ歩いて行ってしまった。

「あらあら、ぬいぬいもご機嫌ななめね〜」

「え？ 朝は機嫌良さそうだったんだけどな？」

不思議そうな顔で見送る提督を前に那智は笑いをこらえて首を振った。

「さて、なんでだろうな……」

不知火の不機嫌は理由はともかくも、トビウメ提督には、それが那智が今日初めて見せるまともな笑顔だということは分かっていた。

撤退の準備を済ませ、なんとか機関が健在な艦が団子となって、一路タロタロ島への逃避行へと出発したのは翌日の未明だった。見送りのために防波堤から長良が見えなくなるまで手を振っているのを一同は辛い思いで見届けた。

動ける艦は密な輪形陣を組んでタロタロ島へと進む。海戦後、タロ泊地へ最初に戻った部隊が片っ端から潜水艦に食われたこともあり、航海はあえて対潜哨戒に比較的有利な昼間を選び、さらに浅海域やリーフの多い海域へと大きく迂回しつつ進むことになっていた。ただし、昼間の航行は航空攻撃を受ける危険がつきまとい、艦隊は敵機の出現に怯えながらぎりぎりまで艦を寄せあつての航海となった。

重巡那智や加古も輪形陣の右側に配置され、僅かに残った右舷側の機銃や高角砲を仰角最大にして、敵機の来襲に備えるのだった。

一方、駆逐艦荒潮などあちこちからかき集められた無傷の駆逐艦らは護衛のため、艦隊の外側をグルグル回りながらひたすらソナーに耳を傾け、少しでもあやしい音や海面の影をとらえるや、コスト度外視で盛大に爆雷を海へ放り込んだ。

今回ばかりは那智艦上のトビウメ提督も海鳥や景色などを眺めている余裕はなく、水中爆発の衝撃波で海面から盛大に水が吹きあがる様を横目に、海面下から姿を出すかもしれない「茶柱」を探すため、双眼鏡に食いついては波間を見張っていた。

「あまり無理するなよ」

右舷甲板から双眼鏡を覗いていた提督を気遣い、那智が言った。

「双眼鏡の連続使用は目に良くない。適度に休むことだ。それに、この強い日差しの下にいると体力を消耗するぞ」

那智は麦茶の入った水筒を提督に手渡した。

「うん。でも、ここまでできて潜水艦にやられるのはやりきれないよ」

「今日は快晴で視程が長く、海も澄んでる。油断さえしなければ日中はなんとかなる。問題は……」

「空か……」

提督は改めて空を見上げた。

「雲一つない。隠れる場所はないな……」

そんな折り、右舷甲板に立つ二人の遙か前方を、警戒中の駆逐艦荒潮が追い越しゆく。通りすぎりに荒潮の艦橋からチカチカと発光信号が瞬いた。

「なんだって?」

しばらくじつと信号を読みとつてから那智は呆れたようにため息をついた。

「ゼンポウノカイメンニ、クロイカゲガミエマース。イワシノムレダトオモウケド、イチオウ、バクライヲトーカシマースと言ってる……」

「大丈夫? 無駄遣いし過ぎて肝心な時に爆雷切れなんてことないようにしないと」

「ああ、今注意する」

那智がすぐに手持ち式の小型信号灯で荒潮に返事を送ると、了解と信号が返ってきたものの、荒潮はかわいそうなイワシ達の群へ突進していった。しばらくして付近一帯の海面はまるで沸騰しているかのように無数の噴水に覆われることになった。

天敵

敵潜と敵機の襲来に怯えつつも、それから丸一昼夜を経て、損傷艦の一団は敵に遭遇することなく無事にタロタロ島の半月湾へと入港することができた。数日前、湾の入り口で多くの艦がやられたので、艦隊は一層緊張して進んだが、敵潜の動きは一切見られなかった。

「見て、那智さん！ 足柄さんだ！ かなり損傷してるけど、ちゃんと無事に戻ってるよ！」

半月湾に入ってまもなく、艦橋で双眼鏡をのぞき込んでいた提督は後部煙突とマストが崩落している妙高型重巡を見つけて歓声をあげた。まるで瓦礫置き場ともいえる半月湾の奥に重巡足柄は僅かに右にかたむいたまま係留されていた。無事に帰港したうえに、着底も横転もしていないことに提督は胸をなでおろした。那智もすぐに気づいたように顔がほころびる。

タロタロ島もシューズ・ベラ島と同じく、着底したり、係留ブイに繋がれてかろうじて浮いていられる艦が港内のいたるところにあった。

那智と提督は投錨作業を終えるとすぐに内火艇をおろして重巡足柄へと向かったが、艦の主は留守だったので、一路泊地の司令部へと向かうことにした。内火艇を棧橋につけるとすぐに艦娘の足柄が姿を現した。大きなケガはなさそうだったが、額や腕に包帯を巻いた姿は痛ましいものだった。

「あ、足柄さん……」

提督が声をかけようとすると、足柄はかかとを打ち合わせて厳しい表情で敬礼した。那智もその正面に少し間合いをあけて姿勢を正し答礼する。

「姉さん……」

足柄は那智に歩み寄って勢い良く抱きついた。そして、那智の肩に顔を押しつけ鉄砲水のように泣き出した。

「ね、姉さんが無事で良かった……。金剛や扶桑が戻っているのに姉さん達が戻ってないと聞いて……。わたししてつきり……」

「ああ、わたしは大丈夫だ。こっちも心配したんだぞ。……よく戻っ

たな、偉いぞ」

那智は力強く妹を抱きしめながら鼻をすすり気丈に言う。だが、その目には涙がたまっていた。

「でも、わたし悔しい。第三戦隊は……。は、半分しか戻らなかったのよ……。どうして!」

そう大声で泣き叫ぶ足柄を那智は強く抱きしめ続けた。

「泣くな足柄……。泣いたって、誰も戻ってこない。誰もだ……」

トビウメ提督はそんな姉妹の様子を黙って見守り続けた。

ひとしきり泣いてようやく落ち着きを取り戻した足柄はようやくトビウメ提督へ顔をむけた。

「ごめんなさい……。提督も負傷してしまったのね。でも大きなケガでなくて安心したわ。姉さんを無事に導いてくれてありがとう」

「いや、僕は何も……」

「ああ、こいつの判断が大勢を救った。もちろん私の命もな」

いつも厳しいことしか言わない那智が、珍しく足柄の言葉をそのまま肯定した。生前からあまり褒められることに慣れていない提督は困った顔を見せる。

「いくら人の体を手に入れようと、わたしたちは艦だ。指揮者があつてはじめて動ける」

提督は無言でうなずきながら頭を掻いた。

「第二戦隊のトビウメ提督でいらつしやいますか？ 作戦参謀より、至急基地指令部まで出頭するようにとのお言伝てを預かっております」

突然声をかけてきたのは基地の司令部付きの職員だった。提督がうなずくとその職員は案内するのでついてくるよう提督を促した。

——やっぱりきたか……

いくら適切な行動だったとはいえ、作戦行動中に命令を受けずに避退行動に移ったのだ。何らかの叱責や処分があることは提督自身も覚悟はしていた。

「わたしも一緒に行こう」

「やっぱり、僕らの本当の敵は深海棲艦じゃなくて人間だよ」

提督はそうつぶやくと、同行を買って出た那智を伴って職員について歩いていった。

案内されたのは出撃前に会議を行ったあの司令部のある洋館の会議室だった。

「トビウメ君か、よく来てくれた。楽にしてくれたまえ」

肩をいからせて会議室へと入った二人を、腕やひざに包帯を厚く巻いたフルカワ作戦参謀が笑顔で迎えた。室内にはフルカワただ一人のみ。モトヤマと艦娘の金剛の姿はなかった。

「モトヤマ長官は重傷なので、病院へ入っておられる。それにしてもこの度の大脱出、実によくやってくれた。私も長官も君には感謝しているよ。なにせ、君のおかげで無事に帰ってこられたんだからな」

「は、はあ……」

相手が噛みついてきたら、こちらも言いたいことだけは叩きつけてやろうと身構えていたトビウメ提督は冒頭から調子を狂わされた。

「それにしても、敵の真ん中へ少数で踊り込むとは、君、見かけによらず大胆なことを思いついたな」

「あれは、その、この那智と相談して過去の戦史から……」

「それに夕級戦艦二隻を大破、中破相当のダメージを与えたことは複数の艦からの情報で確認済みだ。これが今回の唯一、最大の戦果とあっていい」

トビウメ提督の返答をろくに聞く気もなく、フルカワは話し続けた。

「ところでトビウメ君、今回の我々の敗因はなんだと思う？」

「そ、それは、敵の戦力を軽視して無理に……」

「それは火力不足に拠るところが大きい」

「へ？」

さも当然という態度でフルカワは言い放った。

——どう考えても、情報不足と楽観的な憶測に基づいた作戦計画が原因じゃないか

「振り返ってみても作戦自体には大きな誤りはなかった。問題は我々

が敵の火力を圧倒できなかった点にある。それだけに、君の活躍もただただ惜しい。実に惜しかった」

フルカワは無念でしかたがないという表情で目を閉じた。

「君がもし最初から戦艦に乗っていたら、必ずやの憎き敵戦艦を二隻とも海の底へ叩き落としていただろう。そればかりが実に惜しまれる」

その刹那、那智が息をのむ気配が感じられた。一方、提督も慌てて首を振り、傍らの那智の顔を見た。那智は眉間に皺が寄った険しい表情で真正面の虚空を凝視していた。

「いや、そんなことは……」

そんなことは、鈍速の戦艦にはできっこない。そう言いたかったが、トビウメ提督はそれを言葉に出して言うことができなかつた。それ以前に、この眼前の作戦参謀から出てくる言葉ひとつとつが、トビウメ提督の認識とかけ離れたことばかりなので呆氣にとられてしまったのだ。

「トビウメ君、私はすでに本土の軍令部に即時反攻を訴え、軍令部もそれを支持するといってきた。私はモトヤマ長官と協議し、可能な限り早く連合艦隊を再編成してポート・フリスビーへ突入をはかるつもりだ。その時には君にも、巡洋艦なんぞでなく戦艦に乗って出撃してもらいたい」

それからフルカワは那智を一瞥して言った

「それから、重巡那智といったか？　今回はご苦労だった。二人ともしばらくは傷を癒し、反攻に備えてほしい。以上だ」

フルカワは上機嫌にそういう終え、二人に退出を許可した。

司令部の建物を出るまで二人は無言だった。

「あの作戦に誤りがなかったなんて、受け入れられるのか？」

玄関を出たところで那智が足を止めて提督に詰問した。トビウメ提督は少し怯んだ表情で那智を振り返る。

「まさかそんな……」

「だが、貴様には、あの者にもつと言うべきことがあつたのではないか？」

提督の顔が一方的に叱られようとしている子供のようによく情けなく歪んだ。

「ごめん那智さん……。でも、駄目なんだよ、僕は。ああいう自分の事ばかりを前面に押し出してくるタイプは特に。前の世界のときから人間相手は嫌なんだよ」

古傷をえぐられたような顔をする提督の顔を見て、那智は自分が思っている以上に相手を追い詰めている事に気付いた。那智はため息を押し殺して顔を背けた。

「貴様、次は……。その、戦艦に乗り換えることになるかもしれないぞ」

那智はうつむき加減に低い声で言った。だが、提督は少しほっとしたような顔になって無理に笑って見せた。

「思いつきであんな事言ったって、そんなのがすんなり通りはしないよ。戦艦なんてどこの隊でも欲しがられてるし、おいそれと建造できるものじゃない。今回だって無理矢理、よそから金剛と比叡、扶桑を供出させたって聞いたよ」

それに僕は戦艦なんか乗ったことないんだから指揮できないよと提督は笑うが、それでも那智は笑わなかった。

「もし私の艦の主砲がもつと大きく、装甲も厚かったら、あの夕級を沈められていたかもしれない。貴様はそうは思わないか？」

「え？ それは……」

トビウメ提督は言葉を詰まらせた。

——確かにあの距離まで肉薄して大口径の砲弾を撃ちまくれば一隻くらいはやれたかもしれないけど……。でも……

先のフルカワの甘い言葉のせいで調子の良い想像が一瞬浮かんだ。だが、鈍速で、雷装も機動力もない戦艦であるカウンター・アンブッシュ戦法の指揮ができるかと問われれば、その答えははっきりしている。戸惑いつつも、そこまで考えたことを言葉に組み立てて伝えようとした矢先、那智がそれを制した。

「すまない、今のは忘れろ」

「いや、だけど……」

「いいんだ。無意味な問いだった」

那智は、眼前の提督がそんなことないと即答してくれることを期待している自分に急に気が付いたのだった。完全に相手に甘えた期待をした自分を律するように、那智は一度深呼吸して早口に言い添えた。

「わたしなりに今回の海戦での我が隊の反省点を洗い出しておく。貴様は作戦面の点での総括をしておいてくれ。同じ失敗は繰り返さないぞ」

那智はそう言うと、振り返りもせず足早に棧橋の方へ歩いて行ってしまう、司令部の前には罪悪感と自己嫌悪に肩を落とすトビウメ提督だけが残された。

イワシとタロイモ

島に滞在している艦娘の人数が少なくなったので、トビウメ艦隊の艦娘達も先日のように市街地のホテルではなく軍港内の宿舎に泊まることになった。パイプベッドと金属ロッカーだけが置かれた四人部屋の軍用宿舎と瀟洒なホテルのツインルームとでは、快適さは段違いだ。ぶーたれる加古の襟首をひつつかんで宿泊部屋に押し込むと、不知火は遅めの昼食をとるために食堂へとやってきた。

メニューは一品のみ。給仕のおばちゃんから焼き魚定食がのった盆を受け取って不知火はすいたテーブルの端についた。

玄米ご飯にタロ芋の煮付けと沢庵。もとより負け戦の最中に贅沢を言うつもりなどなかったが、意外だったのはメインのおかずとして焼いたイワシが二尾も皿にのっかっていることだ。

「ここのいいかしら〜?」

間延びしたアクセントで声をかけられたのは玄米ご飯の最初の一口を口に入れたときだった。見上げると向かいの座席にお盆を置いた荒潮が立っていた。不知火は少し表情を険しくしたものの、うなずいた。

「どうぞ……」

荒潮はニヤニヤしながら椅子に座るとお皿の上ののったイワシを指さした。

「今日限定でおかわり自由なんですって、これ。穫りすぎ過ぎも考え物ねー」

どうりで魚だけ豪勢なはずだと不知火は合点した。

シユーズ・ベラからこのタロタロ島へ来る道中、荒潮達護衛の駆逐艦が海へ爆雷をやたらにばらまいたため、爆発による水圧でノビた魚が海面にいっぱい浮かんできたのだ。駆逐艦たちは対潜哨戒の合間にその浮かんできた魚を大量にすくってきたのである。

「潜水艦かと思ったらイワシの群れだったの」

「そうですか。では遠慮なくいただきます。ですが、対潜哨戒中に魚獲りとはあまり褒められませんか」

「じゃあ、ぬいぬいは三食タロ芋の煮付けがよかつたかしら？」

ここタロ芋島の特産品はその名の通り、タロ芋で島の中央部には有名な群生地がある。万が一、深海棲艦に海上封鎖されるようなことがあっても、島民と艦娘を含めても半年は持ちこたえられるだけの量が収穫できるらしい。

「それとこれは話が別です」

話は終わりだとばかりに不知火は食事に戻る。どうも不知火はこのノリが苦手だった。いつもはクッションになる初風や長良もいるのであまり意識しないが、さしで向かい合うといつの間にか話の主導権を奪われているので、不知火は心中で警戒しつつ黙々と箸を動かす。

「ヤムヤム島のトビウメ艦隊も一躍有名になったわねー。さつきも知らない艦の子から、いきなりお礼を言われて戸惑ったわ。だってわたし、なーにも知らされてないんだもの」

そういわれれば、不知火自身もさつきから遠巻きに視線を感じていたのだった。

「すべて、司令の判断のおかげです。ですが戦略的にも戦術的にも今回の海戦は負け戦です。浮かれるようなことではありません。荒潮も平静にしていってください」

不知火は箸でイワシをつつきながらそう言い捨てた。ぬいぬいはクールねと言いながらしばらく荒潮も黙って食事を続ける。

「そういえば、ぬいぬい知ってるかしら〜？」

「不知火は何も存じません」

沢庵をコリコリ咀嚼しながら不知火が応じるが、荒潮はかまわず続けた。

「司令と那智さん、夫婦げんかでもしたのかしらね〜？ 司令部から戻ったあと、お互い一言も話しないのよ」

不知火は口に運びかけた箸を止める。

「こんな状況下です。きつと、お互いお忙しいのでしよう。喧嘩と決めつけるのは早計です」

「だといいだけどー」

そこまで聞いてしまうと、不知火はだんだん落ち着かなくなってきた。

——司令と那智さんが喧嘩？　今回あれほどの活躍をした二人の間に何があったのでしょうか？　もし喧嘩となれば我が艦隊の運営にも関わる一大事です。不知火には状況を把握する権利が……。いえ、きっとこれは不知火の義務です。

不知火はそこまで考えがまとまってから立ち上がった。

「このことは不知火が代表して子細を把握します。この話は繊細な問題です。不知火と荒潮の間だけのものとしましょう」

「あらー、加古さんにも言っちゃ駄目かしら？」

「駄目です。まあ、あの人には言ったところで理解できないでしょうから、実害はありませんが」

——あらあら、随分な言いようね……

「荒潮、いいですか？」

「わかったわー」

荒潮は含み笑いを浮かべてうなずいた。

その後の丸二日間、近海で哨戒任務のローテーションに組み込まれた荒潮以外のトビウメ艦隊のメンバーは修理もされずにそのまま待機を強いられた。

日中、那智と不知火はそれぞれの艦にこもりきりで、加古だけがその待機を喜び、宿舎のベッドで高いびきをかいて過ごした。

一方、トビウメ提督は艦娘らと顔を合わせる間もなく、艦の修理手配や補給の手続き、今後の艦隊行動の指針を決める会議に忙殺されていた。

その日のスケジュールを一通り終えて、トビウメ提督は愛用のカメラから巻き、取り出したフィルムの現像を基地の情報課へ依頼した。幸い前世から持ってきたカメラは銀塩式フィルムカメラだったからいいものの、もしこれがデジタルカメラだったらどうなっていただろう。不思議なことに、この世界にはパソコンが存在しないようだった。そのうえ、流通しているフィルムはほとんどがモノクロで、カ

ラーフィルムは希少なうえに、ひどく高価なのだという。

司令部のある洋館から宿舎へ行くため埠頭のバース横を通りかかった時、ちょうど岸壁のクレーンが戦艦金剛をタグボートとともにドックへ引つ張りこもうとしていた。艦橋の左側に大きな破裂口があいている。敵戦艦の主砲弾がそこで炸裂したのだ。艦橋上部にある戦闘指揮所は一見そんなに壊れたようには見えないが、トビウメ提督は中の惨状を想像してため息をついた。

フルカワ参謀は奇跡的に軽傷だったようだが、モトヤマ長官はそれほど幸運ではなかったようで、今でも面会謝絶の状態で治療中だ。そして、指揮所にいた二人を、身を挺してかばったと言われる艦娘の金剛は今でもICUで意識不明の状態が続いていた。

艦娘は人間とは比べものにならないくらい頑強な肉体をもっており、ケガの回復も驚異的に早い。しかし、決して不死身ではなかった。中には、艦が浮いていても艦娘が「破壊」され、一切のコントロールがきかなくなり、艦を泣く泣く解体した例もあったという。

出撃前に自分に書類とアイステイヤーを手渡してくれた金剛の姿を思いだし、トビウメ提督はとても気の毒に思いながらドックへ移動させられる戦艦を眺めていた。

宿舎の大きな食堂にやってくると、すでに混雑のピークは過ぎたのか、数グループの艦娘がまばらにかたまっているだけだった。そんな食堂のすみでうどんを手繰っている那智を見つけ、提督は急いで夕飯のお盆をおばちゃんから受け取ると那智の向かいに着いた。

「那智さん、お疲れさまー」

先日のできが咎めていた提督はつとめて明るい声で言った。

「ああ、貴様もな……」

那智は上目遣いに提督を一瞥するとそう言って、ふたたび箸で麺をつかまえる作業に戻る。

「うどん？ さすがに三食イワシだと笑うよね。今夜はフライだ」

那智は軽くうなづくだけで、黙々と食事を続ける。

「とはいえ、荒潮ちゃん達に感謝して……」

提督は両手をあわせてから玄米飯とたくわん、おかずはタロイモの天ぷらとイワシのフライという、それなりに豪勢な夕飯を堪能し始めた。

「爆雷が底をついている。明日からの航海には、駆逐艦一隻あたり定数の半分しか爆雷を積めないそうだぞ……」

那智はきつい表情でそうつぶやいた。トビウメ提督は思わず箸を止めて何とも言えない表情で自分の秘書艦の顔を見つめた。荒潮達駆逐艦が護衛任務中に悪ノリしすぎて爆雷が不足してしまっていることはトビウメ提督自身もわかっていた。そのため、対潜哨戒任務についている駆逐艦たちに口頭で一応の注意が行われたのは昨日のことだ。爆雷不足は確かに頭の痛い問題だったが、今その事を話すつもりもなく、駆逐艦達のもたらした微笑ましいトラブルを、件のイワシを肴に二人で笑い合えればと思っていた。そんな提督にとって、那智の反応はちよつとこたえるものだった。

那智も自分のまずさを察し、すぐに口ごもったが後の祭だった。二人とも苦い味しかしなくなつた夕飯を無言で噛みしめた。

「明日は出航の準備もある。悪いが先に休ませてもらうぞ」

先に食べ終えた那智はそう言うと言盆を持って足早に席を離れていった。

「うん、お疲れさま……」

残された提督は肩を落として、イワシの残りを始末すべく箸と口を動かした。

ずっと食堂の隅から二人の様子をうかがっていた不知火は提督が膳を下げてとぼとぼ出てゆくのを待ってから席を立った。

——どうも、荒潮の言うとおり、何かあつたようですね。しばらく不知火単独で様子を注意深く見守ることとしましょう

不知火はそう独りで納得すると、下膳棚に食器を戻した。

——戦争の定石は先を読むことです。もし今後、万が一にもあの二人の亀裂がさらに深まり艦隊が再編されることとなつた場合……。新しい旗艦と秘書艦が任命されることになるかもしれません。……

この不知火が秘書艦になる可能性がないともいえません。

『司令、今日から秘書艦はこの不知火が勤めます。これまで以上のご指導ご鞭撻よろしくです』

『司令、不知火に何かご用ですか？』

『司令、今回からは駆逐艦不知火から指揮をお取りください。ご命令を……』

『水雷戦たん、突撃します。司令は不知火の羅針艦橋より指揮をとってください』

——司令が不知火の艦橋に座乗しての突撃号令……。あら？
ちよつと素敵だわ……

「ぬいぬい、なんだか楽しそーねー？」

少々想像が飛躍しすぎてしまい、不覚にも無防備な表情をさらしていた不知火は、食堂の外で待ちかまえていた荒潮から不意打ちを受けてしまった。

「一人だといい笑顔するのねー？ 何を考えていたのかしらー？」

不知火は戸惑いを気取られないように、精一杯無表情な顔をつくらって荒潮に応じた。

「一体何のことですか？ 荒潮はこんなところで何をしていますのですか？」

平静を装いつつも、なぜか不知火には荒潮の笑顔がどことなく怖く感じられた。

「それで、司令官と那智さんのこと、何かわかったかしら？」

「いいえ。それに司令も那智さんも良い大人です。艦隊の士気にも関わりますから、周りが嗅ぎ回るのは良くないですね。荒潮もくだらないことに気をとられず、目の前の任務に専念してください」

不知火は真顔で、まるで一分前の自分に説教するかのようにつつた。荒潮は笑みを崩さずうなずいた。

「今だけは、そーゆーことにおいてあげる。だけど、ぬいぬい、何かわかったら情報の独り占めは厳禁よー」

荒潮はそう言うと、ひらひらと手を振って宿舎の方へ戻っていった。

一人になってから不知火は舌打ちする。

「どうも、あの朝潮型だけは油断がならないわ……」
不知火は声も低くつぶやくと自分も宿舎の方へと歩きだした。

『転進！』ローリー泊地へ

『撤退可能ナ艦船ハ、一時ローリー島泊地へ転進セヨ』

軍司令部より『全軍一斉転進』という名の後退命令が届いたのはその夜中のことだった。

ブーメラン島沖海戦の完敗は軍司令部にとっても衝撃だったようで、連合艦隊の再編成のため、南洋戦域で最大拠点であるローリー島へ艦隊集結を命じたのだった。

ローリー泊地には大型ドックを含む大規模な船舶の整備施設があり、さらに損傷艦の修理支援のため工作艦の明石が進出してくるという話だった。

翌朝、その事を知らされたトビウメ提督は、一人浮かない顔で岸壁に座り込んでいた。ローリー諸島はこのタロタロ島のはる北西に位置する拠点だった。おのずと今の最前線であるシューズ・ベラ島からも遠くなる。提督は損傷のために残してきた長良と初風の事が気がかりだった。シューズ・ベラ島には基地所属のわずかな駆逐艦以外は、ともに航行できない損傷艦ばかりが残されている。ここからシューズ・ベラまでは一日足らずの距離だが、ローリー泊地からは丸三日かかるほど離れている。残されることをあれだけ嫌がった初風の様子が思い出された。取り残されるという事自体が不安だったのだろう。かつて太平洋で、大勢の取り残されたまま最後まで帰ってこられなかった人々のことが記憶にあったのだろうか。

提督はそんなことを想像しながら、半月湾で出港準備のために煙を吐き始めた船々をボンヤリ眺めていると、近づいてくる足音があった。

「てーとく、そろそろ出港準備が終わるってさー。支度しなくていいの？」

振り返ると加古があくびをしながら催促した。

「現像に出した写真ができあがったから取りに行っていたんだ」

「そっか。たしか準備出来しだい後退していいんでしょ？ まあ、あたしはゆっくりのほうがいいんだけどさー」

トビウメ提督の顔が曇る。普段ならこういう連絡は真つ先に那智がしてくれるのはずだった。

「那智さんは？」

「もう艦じゃない？ さつき内火艇を引き上げてたよ」

提督は内心驚いて沖合の湾の奥に停泊している重巡那智を見た。煙突からは煙が上がっている。機関の蒸気圧をあげる為に準備しているのだろう。

——いつもは那智さんの内火艇で乗艦するのにな……

結局、提督は加古の内火艇で重巡那智の舷梯へと送ってもらうことになり、提督が重巡那智の上甲板へと登ると、血相かいた那智が艦橋の窓から顔を出した。

「すまない！ 損傷箇所の確認と考えごとに気を取られて貴様のことをすっかり失念していた。許せ！」

うなずきながら提督が羅針艦橋に上がると、再び那智が頭を下げた。

「雑事に追われ、私自身が少したるんでいるようだ。気をつける」

「そんな……。大したことじゃないよ」

詫びる那智にトビウメ提督は笑って返すが、那智はさらに気落ちしたようで、その後も那智はいつになく無口だった。

トビウメ艦隊は夕刻に抜錨。ほかの艦隊と前後してタロタロ島の半月湾を後にした。あちこち壊れたままだが足柄は元気な様子で汽笛を盛大にならしてこっちへ合図を送ると、一足早く外洋へと出て行った。機関と船体の応急修理のみで依然ボロボロのまま、それぞれの艦隊は外洋で散開しつつローリー島へと舳先を向けた。

夜間の出港は敵潜水艦による攻撃が心配されたが、未だ無傷の敵空母3隻の動向が不明であり、今日の昼に初めてタロタロ島にまで敵艦載偵察機の飛来が確認されたため、提督同士の協議で夜のうちにタロタロ島を出て、味方の勢力圏まで逃げ込むことに決まったのだ。これは事実上の撤退。いくなれば敗走であった。

「あの人達には島から逃げる術はあるのかな？」

那智は必要な報告以外では口を開かず、何か考え込んでいる様子

だったが、ふと提督がタロタロ島の島民や港の職員達についてそう口にしたときだけは、厳しい眼差しで提督を見据えてこう言った。

「そんなものがあると思うか？　そういうことを含めて考えるのが戦争というものだ。そそくさと出航する私たちを見送るあの者達の顔を見たか？」

那智は絞り出すようにそう言うてから、我に返ったように顔をうつむけた。

「悪かった。別に、貴様を責めるつもりはないんだ……。本当に」

そう言ったきり、那智は再びふさぎこんでしまった。

しかし、トビウメ提督にはこの一言が大きく響いた。

——確かに僕は艦隊の仲間のことばかりしか考えてなかったな……

各地の島や陸地の住民。それに港の作業員達は皆、提督とは異なり、この不思議な世界で生を受けた存在だった。ある者は商店主、またある者は農家など、この世界でそれぞれ何らかの役割を担い、使命を自覚して生活しているようだった。トビウメ提督には、この世界の住人達がどのような理由でこの世界に生まれてきたのか想像すらつかなかったが、それでも、一つだけ確信できていることは、艦娘と同じくその住人達の生活も深海棲艦の脅威に脅かされており、その脅威から住人を守る事が艦娘と提督の明らかな使命であるということだった。

——あの人たちは、きっと僕らに見捨てられたとと思っているはずだ……

提督は人々のそんな思いを想像し、眼前の那智の無念そうな表情の意味がわかった。

どうやら今夜は、いつものように那智と和気藹々と話をするべき時ではないようだ。

提督はこれまで無意識に避けてきた、自分がなぜこの世界にとばされてきたのかという意味を今一度真剣に考えてみようと思った。

提督は甲板で涼しい夜風に当たるため、そつと静かに艦橋をあとにした。

ローリー島泊地。大小六つの島とその内側のラグーンである宝石湾、そして最大の島であるアズライ島につくられた軍港からなり、複数の大型艦修理ドックと三つの飛行場を備える南洋戦域最大の拠点だった。

トビウメ艦隊は一昼夜かけて無事ローリー諸島へとたどりついた。敵潜水艦の攻撃が心配されたが、タロタロ島以西はなんとか海軍の制空権が確保されていたので、敵潜水艦の活動もあまり活発ではなかったようだ。

那智は航海の間、ほとんど艦橋を離れることはなく、その口は重かった。提督自身も居心地の悪さと気まずさもあって、艦橋と甲板と士官室を行ったり来たりして過ごしていた。

ローリー泊地の宝石湾に入港したのは真夜中の事だった。空爆の脅威も少ないのか、港も街も停泊中の船舶も、にぎやかに明かりを灯している。

タグボートに誘導され荒潮以外の損傷艦は宝石湾の奥へと案内されて錨を下ろした。

内火艇で仲間を拾って棧橋まで向かう途中、加古はもうすでに眠りこけ、荒潮はあくびをしながら疲れたわーとこぼす。不知火だけはじつと操舵輪を握る提督と、無言で考えごとをしている那智の様子を見ていた。

「頼みます。寝床だけでもいいので、どこかないんですか？ あの子達みんな疲れているんです」

夜勤の基地職員にトビウメ提督が粘り強く食い下がり、ようやく一同が案内されたのは基地内にある体育館だった。

「みんな艦で寝た方が快適だったかもしれないわねー」

仮宿舎が体育館とわかり、荒潮が不満そうにつぶやくと、すかさず不知火が応酬した。

「荒潮は無傷ですから、不満ならご自分の艦に戻ったらいかがでしょう？ 不知火は布団で寝られるだけで満足です」

「あらー、ずいぶんといけずな口きくのねー」

慌てて提督は二人をなだめる。

「まあまあ二人とも。司令部のおじさんが布団もつてきてくれるから、届いたら並べて敷いて」

体育館は冷房も扇風機もない建物だったが、畳張りの柔道場に布団と蚊帳を持ち込んでなんとか臨時の宿とすることができた。

「ドアを開けておいた方が涼しいと思うよ」

蚊帳を吊るのを手伝いながら提督は言った。

なんとか布団と蚊帳も整った。加古が真つ先に真ん中の布団にダイビングするとゴロゴロと気持ちよさそうに転げ回った。

「ああ、やっぱりハンモックより布団だよな」

遊んでいる加古をよそに、那智がたずねた。

「貴様はどこで寝るつもりだ？ 布団は四組しかないが……」

「いくらなんでもここで寝るわけにはいかないよ。司令部に長椅子かソファアがあつたはずだから。そこで休むよ」

「いいのか？」

那智は心配そうに言うが、提督は笑つてうなずいた。

「司令官く、わたし、艦に抱き枕を忘れて来ちゃったわ。代わりに司令官が抱き枕になってくれてもいいわー」

荒潮が歳不相応に色香のある眼差しでトビウメ提督に言う。零コシマ五秒間だけ不知火が殺意みなぎる視線で横の荒潮を睨みつけたが、それに気付いた者はいない。普段そういうことに目端の利く那智はうつむいたまま、一心に布団のシーツを伸ばしているし、加古はすでにいびきをかいていた……。

「おじさんは汗でベトベトだぞ〜」

提督は両手を広げ抱きつくポーズをとって、ガラにもなくふざけてみせた。トビウメ提督も長旅と寝不足で疲れていたのだろう。こういうときだけはなぜか変なノリと高揚感で冗談のキレがよくなる。加古が起きていればケラケラ笑つたに違いない。でも、荒潮だけは不満だったようだ。

「司令官のそういうところ、きらくい」

荒潮は膨れ面でそつぽを向いた。一方、なぜか隣の不知火は薄笑い

を浮かべてキラキラしていた……。

——さすがですね、それでこそ不知火の司令です

慣れない悪ふざけをやって場を和ませようとしたものの、提督も急に疲労を感じはじめた。それにいつまでも艦娘の寝所にいるわけにもいかないので、提督は自分の寢床をさがしにゆくことにした。

「じゃあおやすみ。ね、那智さん」

改めて那智に声をかけると、ぼんやりしていた那智ははっとしたように顔を上げ、伏し目がちに返す。

「ああ、貴様もゆつくり休むんだぞ」

そう言っ、那智は寝る支度に戻る。提督は一人、体育館を後にした。

インターナルアーマー

寝苦しい一夜だった。夜勤の事務官に案内された仮宿は司令部の小応接間で、エアコンがない部屋だった。窓を大きく開けて、小さなソファアーム足を折って横になるとすぐに意識が無くなった。

夢を見ていたが、暑さに耐えかね何度か目を開けたようだったが、思い出せない。前世のことを思い出すような夢だったが記憶に残る前に外界から呼び起こされてしまった。

「おい、そろそろ起きろ」

肩を揺すられトビウメ提督は目を開けた。ぼやけた視界のなかで那智の顔がこつちを見下ろしている。

「あ、那智さん、おはよう……」

「とつくに起床時間だぞ。五分で身支度しろ。ほら、はじめ！」

「そんなあ……」

そう提督をせきたてる那智の顔には少し笑顔が戻っていた。寝汗で湿ったシャツは不快だったが、提督は少し元気を取り戻したような那智の表情と声を聞き、ほっとしたような気がした。これでいつも通りの自分と那智に戻れるだろうと。

提督は頭をかきながら腕時計を覗く。時刻は0720。まだ四分は寝ているつもりだったのだ。提督が不満を言うと那智は鼻で笑う。

「なにを言っている。貴様に出頭するよう命令がきたぞ。そんな寝ぼけた顔ではみつともないな」

「出頭？」

聞けば、体育館へ司令部付の事務官がトビウメ提督を探しに来たというのだ。

「特に話すことなんか無いはずだし、提督の会議は明日の予定だよ」

ぶつぶつ文句を垂れながら提督は毛布をたたみ、汗だくのシャツの上から白い制服を羽織った。

「不安ならば、わたしも同行するが……」

「えっ？」

提督は一瞬、迷った。先日のようなこともあるが、憂鬱そうだった那智が少し元気になってきたので、一緒に来てもらおうように決めた。那智と共通の用事がほしかった。

「うん、じゃあ一緒にいこう」

呼び出された場所はその建物の二階にある戦域司令官執務室だった。

那智を伴って入室したトビウメ提督を迎えたのは、軍令部参謀のフルカワを筆頭とする数名の幕僚達だった。

どうやらトビウメ提督達よりも一足早く、飛行艇に乗ってこのローリー諸島まで逃げてきたようだ。前回、タロタロ島での面会以来、独善的で強引な言動が目立つフルカワ参謀は、トビウメ提督にとつて極力関わりたくない相手となっていた。トビウメ提督の顔は入室するやすぐに硬く強ばってしまった。

居心地の悪さと不安感のせいか額から嫌な汗がふきだしてくる。なぜか、意識不明のまま今もタロタロ泊地に残されている、元気の良かったあの艦娘金剛の顔が頭をよぎる。

どうやら、那智も同じような心持ちらしく、その表情はいつになく怖いものだった。それは海戦中に深海棲艦を見据える眼差しそのものだ。

だが、フルカワは二人の硬い表情に気付く様子もなく上機嫌だった。

「よく来てくれたトビウメ提督。こつちへ着いてからというものの、君の話で持ちきりだよ」

フルカワの言葉に幕僚達も笑みを見せて軽くうなずいた。

「この度、負傷されたモトヤマ長官の代理として急遽私が長官代理の任に着くことになった。

軍令部も即時反攻を大いに支持している。ブーメラン島解放はそれだけ急務ということだ」

——解放？ 敵の包囲網を突破して陸軍を救出するのが目的だったんじゃ……

そもそもの作戦目標が変わってしまったことに戸惑うトビウメ提督をよそにフルカワ長官代理は続ける。

「しかし、君惜しかったな。戦艦に乗っていたら敵戦艦を最低でも二隻は葬っていたろう」

フルカワは顎をしゃくって言った。

「やはり、何事も勝負は火力だ。こういう男には早々と戦艦を手配しとくべきだったな……」

「そうですね。急ぎ戦艦を用意させましょう」

「戦艦さえあれば次こそ深海軍を粉砕できますね！」

フルカワとお付きの幕僚達は勝手に盛り上がり始めた。

——失敗だ……。那智さんを……。那智さんを連れてくるんじゃないのか！

トビウメ提督に今の那智の顔を見る勇気はなかった。だが、前回タロタロ島の司令部で言いそびれた自分の思いが自然に口からでた。

「お言葉ですが、あれは中型艦、小型艦の機動力と、敵の攻撃態勢が整う前に反撃できたから成功したまでです。戦艦であれをやろうとしても、回頭する間もなく敵の集中砲火を浴びることになったと思います」

フルカワ達は一瞬、呆気にとられたような顔でトビウメ提督を見つめていた。それは那智も例外ではなかった。

フルカワは露骨に不機嫌な顔になる。

「何を言っている。先の海戦の第一の敗因は戦艦不足による火力不足というのが、我々と軍令部の共通見解だ。そもそもトビウメ、貴官自身がその一番の証しを我々に提供してくれたんだぞ」

そう言っつて、フルカワはファイルの間から数枚のモノクロ写真を引っ張りだしてテーブルに叩きつけた。

「これは……」

その数葉の写真を前にトビウメ提督と那智は言葉を飲んだ。

それは、いつも現像に使うL版の写真ではなく、一回り大きな印画紙に現像した軍艦の写真だった。間違いなく先の海戦でトビウメ提督自身が撮影したあの夕級戦艦の写真である。

「貴官が情報部へ提出した写真は非常に鮮明だった。ネガを飛行艇で急ぎこの島の参謀部に送って調べさせ、いろいろと分かったことがある」

おそらく情報参謀と想われる白衣の第二種軍装に金の飾り緒をつけた一人がそう言った。

「え？」

トビウメ提督は戸惑いを隠さずふと那智へ視線を送ると、那智は唇を噛んで下を向いていた。

「トビウメ提督指揮下の水雷戦隊、特に重巡二隻の健闘は認めよう。写真に写った二隻の夕級戦艦の損傷がなによりの証明だ。だが、同時にこの写真は重巡の火力の限界も証明しているのだ。情報部の分析によれば、写真に示された損傷状態では、敵は戦闘力を半減させつつも、バイタルゾーンへのダメージは皆無、もしくは軽微であり撃沈には程遠い状態であったという。また、敵戦艦の二番艦は魚雷を受けて大きく浸水しているが、未だ復原力を大きく保持している」

そう言うフルカワ長官代理の前に、提督も那智もまさにぐうの音も出ない有様だった。

「夕級は外見こそ大きく破損しているが、夕級のバイタルゾーンを守る水平装甲、垂直装甲ともに重巡の二十センチ砲弾の浸徹をほぼ完全に防いだ模様と、参謀部は報告していきっている」

「要するに火力不足ということですよ」

フルカワと情報参謀の言葉を、提督は呆然と、そして那智は歯を食いしばって聞いていた。普段の那智ならば、わかったような口をきくなど激こうするところだが、今日は反論の余地が無かった。何より、重巡洋艦たる自分の存在価値そのものを理詰めで否定されてしまったのだ。悲しいかな、弁舌軽やかに相手の主張をやりこめる余裕が今の二人には無かった……。

「でも、僕には戦艦に乗った経験すらありません。こんな緊急時にいきなりそんなもの貰ったところで、ものの役に立たないと思います
が」

いつもは人間相手だと万事押され気味になるトビウメ提督が今日

は珍しく食い下がった。

「おいトビウメ君、いい加減にしたまえ！ くたばる前の世界じゃそうかもしれないが、この世界の戦いなんてゲームみたいなものじゃないか！ ゲームには必ず攻略の方程式が存在する」

フルカワが苛立ちもあらわに言った。幕僚の一人がなだめるように間に入った。

「まあまあ長官代理。それにトビウメ提督。これは戦略上の要請だし、いくなればこれは上司からの業務命令だよ。君だって会社勤めをしたことがあるら判るだろう？」

「いや、僕は普通のサラリーマンをやったことはなくて……」

トビウメ提督が戸惑いながらもそう答えると、フルカワや室内の幕僚達の顔に軽蔑の色が露骨に浮かんた。

「とにかく、火力押しはともかく、僕がわざわざ戦艦なんか……」

「もういい、もうよせ。これは、命令だ……」

言葉を遮ったのは他でもない那智だった。

「命令は承知した、長官代理殿。我々なりに戦艦との合同戦術を急ぎ策定する。よろしいか？」

「ああ、それでいい……。もう下がってよろしい……」

那智に制されてトビウメ提督も不承不承に敬礼し、なんとか執務室から出ることができた二人の間には重苦しい沈黙が訪れた。

最初に口を開いたのはトビウメ提督だった。

「なんで止めたの？」

「命令だ。どんな馬鹿げた命令であっても命令は、命令だ……」

「それが昔のあの惨めな敗戦の原因だったとしても？ この戦いがゲーム？ どうかしてる！ あれだけの艦が生きた艦娘もろとも沈んでいったのに……」

感情的に言い返す提督に那智は、辛そうな笑みを浮かべて見せた。

「それが、私たちの性というものさ。今も、昔も……」

「そんな……」

珍しく怒りに震えている提督へ那智は優しい口調で諭す。

「貴様に恥ずかしい思いをさせて済まなかった。やつらの言うとおり

これが重巡の限界だ。それに、うちの艦隊に新しく戦艦が来るだけのことじゃないか。貫つてしまった後の運用は、こつちで好きにやればいいことだ。だからそんな顔をするな……」

提督は無言でうなずいた。確かに、戦艦をくれてやると言われただけのことだ。

二人が司令部庁舎から出ると。熱帯の太陽が二人を焼いた。

「私は戦艦との共同作戦のあり方を考えておく。貴様もその独創的な脳みそでまたおかしな作戦でも考えておいてくれ」

那智は笑つて提督の肩を叩いた。

「じゃあ、一緒に考えよう。一人より二人。脳みそは多い方がいいよ」「すまない、少し一人にしてくれないか。……自分の艦で、一人で考えたいんだ。頼む……」

那智は逃げるように提督を残して歩きだした。日頃から対人恐怖症と言つてはばからない提督が、珍しく司令部の者達に毅然とした態度で応じてくれたことは素直に嬉しかった。だが、そんな提督に、軍令部の者達に自分が痛く傷つけられたことを悟られたくなかった。そして、まさか自分が一瞬でも戦艦になりたいなどという荒唐無稽な思いを抱いてしまったことを気取られたくなかった。悔しさとやり場のない怒りを隠す自信がなかったのだ。

——今夜は酒が必要だな……

とにかく今は誰にも会いたくなかった。暗くなるまで艦で雑務をこなし、日が暮れたら酒を探しに街へ出ようと那智は決めた。それは、苦くてからい、悪い酒になることはわかっていたが、それでも酒が欲しいと那智は思った。

居酒屋・鳳翔での邂逅

「憂いの色濃くたたえていたが、今夜出逢った彼女の横顔はとても美しかった」

その日のマツエダ ヒロヨシ提督の日記にはそう書かれている。

メジロ諸島・巡航警備艦隊の艦隊司令を勤めるマツエダ提督が旗艦の重巡高雄とともにローリー泊地に到着したのはその日の昼過ぎの事だった。ブーメラン島沖での敗退により連合艦隊の再編成が必要となったため、近隣の基地や泊地からは多くの艦隊や提督がローリー島へと召集されつつあった。

艦を停泊させて艦娘の高雄とともに内火艇から栈橋へと降り立つと、熱い太陽とコンクリートの照り返しが二人をジリジリと焼いた。

「高雄ちゃん、暑ければそれ脱いでかまわないよ」

提督も自分の第二種軍装のカラーを開き、扇子でのど元をあおぐ。メジロ島では艦娘の高雄はいつも白いブラウス姿で過ごしているが、今日は司令部へ出向くとあって、正装であり戦闘服でもあるピシッとした紺の上着を身につけていた。

高雄は微笑みながら、ためらいがちにうなづくと上着を脱いでブラウスだけの姿になった。グラマスな体のラインがよりはつきりわかるようになったので、そこまで考えてなかった提督は少し困ってワイヤフレームの眼鏡をかけなおした。

高雄型の艦娘姉妹は提督連中にとても有名だ。仮に災難にあつて死んでしまった者も、煩惱から解脱してこの世界へとばされて来たわけではない。言わずとした高雄型の艦娘達のグラマスなボディラインは多くの提督の注目と人気の的だった。特に妹の愛宕は開放的な性格も相まって、提督向けに何冊も写真集を出しているくらいである。

秘書艦である高雄も妹に負けず劣らずのプロポーションの持ち主なのだが、真面目で物静かな性格のためか、あまりそれをおおっぴらにして耳目を集めるといったことはほとんどなかった。

「会議は明0900より南洋戦域総司令部の大会議室です。やはり少

し早く着きすぎたようですね、提督」

秘書艦である高雄が大きな内海を眺めながら言った。そう言っている間にも別の艦隊が次々と白波を立てて泊地へと入ってくる。湾内には損傷して修理を待つ艦も多くあり、ドックはフル稼働状態のようだ。

対潜護衛のため連れてきた指揮下の駆逐艦達には、燃料補給を終えしだい自由時間にするよう伝えてあった。

「あの子達はちゃんと小銭持つてるかな？ ローリー島まで来てうっかりアイスを食べられなかったなんてことになったら、菊月なんかは泣いちゃうだろう」

「提督ったら。そんなこと言われたって菊月ちゃんが知ったら、本当に泣いちゃいますよ。あの子、一度いじけると大変なんですから」

「そ、それは気をつけないとな……ハハハ」

提督と高雄は二人でクスリと笑い合った。

「そういえば港に入るとき、愛宕君の艦が見えたね。もう来ているみたいだよ。会う約束をしてるんだろ？」

マツエダ提督は書類鞆を抱えながらそう言った。

「ええ、一緒に洋食屋さんへでも行こうって。あ、あの、提督もよかつたらご一緒にいかがでしょうか？ きつと愛宕も喜びますよ」

休憩時くらい自由にすればよいものを、高雄はいつも提督のことを気遣うのが常だった。久しぶりの妹との再会という時までこの調子なので提督は笑って首を振った。

「いろいろ話したいともあるだろう。姉妹水入らずで行ってきなよ」

「でも提督……。ご夕飯はどうするつもりですか？」

高雄は後ろめたそうに言うので、提督はニヤッと笑って沖を指さした。

「私のことは心配いらない。ほら、あそこの伊勢型の横に繋がれているの、見える？」

泊地の一角で投錨している伊勢型戦艦の横に並んでいる平たい小型艦を見て高雄も合点がいった。

「あれは鳳翔さんですね。ということは、今夜は……」

高雄は少し安心したように笑った。

「実は楽しみにしてたんだけ。こっちはこっちで好きにやるから、高雄ちゃんも美味しいもの食べておいで」

「わかりました。でも、何かあったらすぐに呼んでくださいね、提督。近くなりますから」

愛宕君によりしくと言って高雄を送り出すと、夕暮れまでまだ時間があるのでマツエダ提督は鞆を手にして軍港の外へと歩き出した。

半分は高雄の背中を押す方便だが、提督が停泊中の空母鳳翔の姿を見つけてから、今日の夕暮れが少し楽しみだったのも事実だ。

条件が許されるときにだけ寄港地の飯店舗で開かれる「居酒屋・鳳翔」。料理を得意としている航空母艦娘の鳳翔が趣味を兼ねて、寄港地の飯店舗で小料理屋を開くことがあった。その料理は非常に家庭的ながらも手間暇かけられた逸品で、本土の料亭の板前もうなるほどの出来映えと言われていた。そのため、提督や立ち寄り先の島民達だけでなく、艦娘からも評判だった。他ならぬマツエダ提督自身も、居酒屋・鳳翔のファンの一人だった。

一度、市街地にあるホテルへチェックインして荷物を置くと、再び基地の司令部庁舎に隣接した提督用のラウンジへと顔を出した。そこで知り合いの提督数人と挨拶を交わして暇をつぶしてから、マツエダ提督は外へと出てみると灼熱の太陽は西の水平線へと沈もうとしていた。

港や市街地に灯りがつきはじめる。さすがに地域の一大要港とあって、ここでは灯火管制も関係ないようだ。

——前は煮魚がうまかったが、今夜は何があるだろうか？

そう楽しい想像を巡らせながら、マツエダ提督は基地のゲートを出て市街地へと歩き出した。

市街地は低層の木造もしくはトタン張りの簡素な家屋や商店が連なっていて、時折、トラックや軍用の四輪駆動車がエンジンをうならせて通り過ぎるほかは静かなものだった。

ラウンジで会った顔見知りの提督にあらかじめお店の場所を聞いておいたので、鳳翔の小料理屋はすぐに見つかった。模造紙に「居酒屋

屋 鳳翔」と上品な墨筆で書かれた仮看板が軒下に張り付けられていて、ガラス戸の前には赤紫色の暖簾がはためいている。木造、トタン張りの納屋のような建物にガラス戸が着いただけのシンプルな店構えだ。商い中の札がかかっているので、マツエダ提督は遠慮がちにガラス戸を右へ引いた。立て付けの悪い引き戸をガタガタいわせながらやさしく開けると、熱気とともに醤油やみりんなどの食欲をそそる香りが鼻孔をくすぐった。

「いらっしやいませ。ようこそ」

白熱ランプのともる中、やさしい声とともにカウンターから和服に袴姿の女性が迎えた。

「あら、だいぶ前ですが、以前も来てくださったことがありましたね？」

艦娘の鳳翔は静かに笑いかけた。提督は熱気で曇った眼鏡をハンカチでぬぐいながら少し驚いた声を出す。

「あんな前のこと覚えていてくれたんですか？」

「ええ、たしかベーリンガー諸島のワンコップ基地だったでしょうか？」

「そうです。ちよつと感激ですね」

「二度来てくださった方の事は決して忘れてりなんかしませんよ。さあお好きな席にどうぞ」

簡素な建物の割に、店内は装飾こそないもののテーブルもイスもしっかりとしたもので、急ごしらえにしてはとてもおちついた空間に仕上がっていた。

店内にはすでに先客がいて、板張りの上にゴザを敷いた座敷席には四十代半ばくらいのやせた白い制服姿の男と、時代劇の渡世人のような服装のボブカットの女が卓を囲んでいた。きつと中年の男はおそらく提督で、女の方は艦娘だろうと想像した。マツエダ提督はアドミラルキャップを取って軽く会釈すると、先客の二人も軽く頭を下げた。

マツエダ提督はカウンター席のイスにつき、おしながきに目をはしらせる。

「今回は日本酒やワインもあるんですか？」

マツエダは少し驚いて言った。

「ええ、焼酎やウイスキーだけのことが多いんですけど、今回はちょうど定期便が届いたばかりで本土からの醸造酒もありますよ。ただこの暑さですから、どれも早めに飲んでいただいたほうがよいでしょうね」

鳳翔はそう言っただけで朗らかに笑った。

「じゃあ、この本醸造の霧島とカツオのたたきを」

「はい、ただいま」

先客の二人連れは言葉少なに食事をとっているようで、しばらく店の中は包丁の音と鍋の煮える音がきこえるだけだった。

鳳翔がマツエダに冷酒のコップを差し出したとき、引き戸がガタガタと音を立てて開かれた。暖簾の陰から現れたのはすらつとしたスタイルのよい、長い黒髪をサイドテイルに垂らした女だった。

——艦娘か。雰囲気から見ると戦艦娘か巡洋艦娘か

マツエダはそう想像した。

「あら、お久しぶりね。いらつしやい」

「ご無沙汰しています。いいですか？」

鳳翔の出迎えに、その女は軽く頭を下げてから遠慮がちに尋ねた。

「もちろんですよ。さあ、お好きなところにかけてください」

鳳翔に促されて、その客はマツエダの右に座席一つあけて座った。

「だるまを。ロックで」

女はそう言うなり、何か思い詰めたような顔で両手を組んだ。

鳳翔は穏やかな表情を崩さず、どうぞとグラスを差し出した。お通しの海草サラダに手をつける様子もなく、その女はウイスキーに浮かびながらゆらゆらと溶けてゆく氷をぼんやりとした目で見つめている。

さつきから何となしに様子を見ていたマツエダ提督はふと声をかけた。

「艦娘さん、かな？」

声をかけられた女は怪訝そうな顔でマツエダの方を向いた。

「いや失礼、見てのとおり提督をやってる。なんだかとても物憂い感じだったから、つい……」

その艦娘は一瞬だけ無理矢理な愛想笑いを返した。

「いや、なんのことはない。心配御無用」

艦娘はそう言つてグラスのウイスキーを一気にあおると、鳳翔におかわりを注文した。

「こちらの提督がおっしゃるのように、確かに元気がないようで、私もちよつと心配ですよ」

カウンター越しに新しいグラスを手渡しながら鳳翔も言う。艦娘は無言だった。

なぜだろうか。マツエダ提督には、そのまま無言でいるよりも、ふとこの艦娘の身の上を聞いてみたい欲求が起こってきた。四杯目となった本醸造の霧島が頭に効いてきたことも手伝ったかもしれない。それは単に話題を振っただけのつもりだった。

「そういえば、今、港にはいろんな艦がきているけど、君はブーメラン島へは行つた組ですか？」

艦娘の表情が一瞬暗鬱なものへと変わった。

「貴官は参加したのか？ あの作戦に」

「いや、再編の命令を受けて今日到着したばかりだが……」

「そうか……。それは幸運というべきだな。作戦は……それは酷いものだったぞ」

艦娘は苦労自慢をするかのように不敵に笑った。笑みこそ見せたものの、マツエダ提督にはなぜかそれが虚勢を張っているかのようにも感じられた。やはり関心を引いたのか、座敷にいた先客の提督と艦娘がこちらを一瞥したのがわかった。店内の者達の間にも再び沈黙が訪れた。

「鳳翔さん、私にもオールドのロックを。それから、彼女にも……」

マツエダはそう言つて、隣の艦娘を見た。

「何かの縁だ。一杯ご馳走させてもらうよ。もしかして悪いことを聞いてしまったかな？ 過酷な戦いだったとは聞いているけど……」

艦娘は少し驚いたような顔をしたが、何故か急に辛そうな顔をして

うつむいた。

「いや、幸い同じ艦隊の者は皆、帰還できた。私の司令官は……とてもできた奴だからな。とても……」

そう言つて艦娘は声を詰まらせ、口元を押さえたまま黙つてしまつた。

「申し訳ない。変なことを聞いてしまった……」

そう詫びてマツエダ提督はしばらく艦娘を見つめていた。涙こそ流してはいないが、彼女の目がうるんでいることに気付き、何がこの艦娘を苦しませているのか、マツエダには想像を巡らせることしかできなかつた。

だが、艦娘が次に発した問いは意外なものだつた。

「貴官の艦隊には、戦艦はいるか？」

「え、戦艦？ ああ、戦艦は一隻いる」

戸惑いながらもマツエダが答えると、艦娘は何度か深くうなずいた。

「そうか……。もし自分が戦艦だったら、どんなだつたらうと思つてな……」

独り言のように、そうつぶやいた艦娘は遠くを見つめるような目つきで言つた。

鳳翔が二人のウイスキーを持つてきた。

「提督、人も艦娘も深酒は禁物ですよ」

提督は苦笑いを浮かべるが、艦娘はグラスを受け取りながら。悲しそうな笑みを浮かべるとグラスを顔の前に掲げた。

「大丈夫、これが最後だ。沈んでいった仲間……」

そう言つてまだあまり氷の溶けていないだるまのロックをぐい飲みました。氷だけになったグラスをカウンターに置くと、艦娘は立ち上がつて鳳翔にお勘定を求めてマツエダ提督へ無理やりな笑みを返した。

「この一杯に礼を言おう。では失礼する」

艦娘はそう言つて敬礼すると、鳳翔へ会計を済ませて足早に店を後にした。

一人カウンスターに残されたマツエダ提督はしばらく、隣の席に置かれた空のグラスを見つめた。

「そういえば、鳳翔さん。あの艦娘さんの名前、ご存知ですか？」

先の艦娘の食器やグラスを下げようとしたりした鳳翔に提督がたずねると、鳳翔はええとうなずき、なにか許可を求めるように座敷に座っている客達へ顔を向けた。先客の提督らしき男の方が軽くうなずいた。すると、かたわらのサムライのような服装をした艦娘が代わりに応じる。

「あれは妙高型重巡の那智。確か今は……ヤムヤム泊地の旗艦だったな」

「はい、この前のブーメラン島の海戦でも、那智さん達の活躍で全滅を免れたと評判ですね……。それなのに、何があったのでしょうか？」

——そうか、彼女は重巡の那智というのか……

那智という艦娘のものの悲しそうな横顔を思いだしながら、マツエダ提督はその艦娘の名前を反芻した。

その後、静かに食事を終えて、マツエダ提督は居酒屋・鳳翔を後にした。前回に違わず、料理は絶品揃いだったが、なぜか今回はどんな味であったか全く覚えていない自分がいた。

マツエダ提督はぼんやりしたまま、日の落ちた薄暗い市街地を抜けて海に面した基地へと戻ってきた。時計を見ると、まだ二〇時を少し過ぎたばかりである。

灯火管制もなんのその、泊地には無数の艦が信号灯をともして停泊している。

——あの艦娘もこの光のどれか一つなんだろうか

そんな思いを抱きながら、マツエダはしばらく港に佇んでから、軍港に程近い宿舎代わりのホテルへフラフラと戻ってきた。

時計の針は二十一時を過ぎていた。

「あら、提督。お帰りなさい！」

ロビーで待っていたのは秘書艦の高雄だった。妹との楽しい食事でもそこそこに自分よりも早くホテルへ戻ってきたのだろう。それでも、高雄はいつものように嬉しそうにマツエダ提督へ笑いかけた。

「ああ、早かったね……」

提督もかすかに笑いかけるが、どこか上の空だった。

「駆逐艦の子達はもうみんな自室に戻りました。やっぱり航海で疲れ
たみたいですよ」

「うん……。愛宕君は元気だったかい？」

「ええ、今度はぜひ提督も一緒に言っていましたよ」

「そうか……」

マツエダ提督は軽くうなずきながら、フロントでキーを受け取って
自分の部屋へと歩きだした。

「あと、先程、メジロ島の衣笠さんから入電があったんですけど、また
山城さんがいつものように艦に引きこもってしまったようです」

「ああ、またか……」

メジロ島泊地所属の戦艦山城が周期的に抑鬱状態に陥ってしまう
ことは、マツエダ艦隊の者達にとってはいつもの事だった。前世での
スリガオ海峡のことや、姉への想いが突発的にフラッシュバックする
と、しばらく自室や自分の艦に閉じこもってしまうのが常だった。

「ええと、様子を見て衣笠君には明日以降指示するよ」

どうでもいいと言ってしまったら乱暴だが、今はあまりそのことを
考えたくなかった。

「提督も、お疲れのようですね。もうお休みになりますか？」

提督はうなずいた。

「そうするよ。高雄ちゃんもゆっくりして」

「はい、おやすみなさい、提督。明日もがんばりましょうね！」

そう言つて高雄は提督に頭を下げると自分の部屋へと歩いていっ
た。

提督は暗い自室へと入り、書類鞆をソファアームへ投げ出すと、シート
できれいにベッドメイキングされた寝床へそのまま寝ころんだ。

那智という名の艦娘の横顔が脳裏から離れなかった。しばらく暗
い室内でそうしていたが、まだとても寝付けそうもないので、提督は
部屋の明かりをつけ、窓を開け放った。生暖かい風が部屋へ吹き込ん
でくる。

マツエダ提督は書類鞆から黒いエボナイト製の太い万年筆と革表紙の日記帳を取り出し、物書き机についた。

その万年筆はマツエダが前世で最期を迎えるその瞬間、胸ポケットに入れていたものだった。万年筆のキャップをひねり、提督は今日出会った艦娘のことを日記帳へインキで刻みはじめた。簡単に書きとめるつもりだったが、いざ書き始めると、その筆は止まらなくなった。

あの人の艦

翌朝、マツエダ提督はホテルのレストランで高雄と向かい合って簡単な朝食をとっていた。

「提督、今日は〇九〇〇より南側の大講堂で会議ですね。資料はこちらへまとめておきました」

「うん……。ありがとう」

提督はぼんやりとパンにバターを塗りながら答えた。

「提督？ 昨夜はあまり眠れなかったのですか？」

「いやそんなことも、ないんだが……」

相変わらずマツエダ提督は眠そうな声でつぶやいた。

高雄は怪訝な顔で提督を見つめる。いつも、キリつとしていて、それでいて笑顔を絶やさない提督が今日に限って生気が抜けたような顔をしているので、高雄は少し心配になった。

「どこかお体の具合が悪いなんてこと、ないですか？」

高雄は手袋をとって提督の額にそつと振れる。

「いやいや、大丈夫。心配いらないよ」

さすがにマツエダ提督も恥ずかしくなり首を引つ込めると、高雄は今更ながらに顔を赤くして笑った。

「ごめんなさい。でも提督、無理はなさらないくださいね」

食事を終えてホテルを出ると二人は南国の陽光に目を細めた。

「私は、会議まで総監部の資料室にいるから、高雄ちゃんは別命あるまで待機を」

「はい提督。あと、この時期はスコールが多いので、傘を忘れないてください」

高雄はそう言って折り畳み傘を差し出した。提督は礼を言って傘を受け取ると高雄と総監部の庁舎へと歩きだした。

朝一番ということもあり、職員に通された総監部庁舎の別棟に設けられた資料室はまるでサウナのような蒸し暑さだった。職員はすぐに冷房と扇風機のスイッチを入れてくれたが、涼しくなるには時間がかかりそうだった。マツエダ提督は上着を脱ぎ、シャツを腕まくりし

て書架に向き合った。

ここは南洋戦域随一の知識の宝庫であり、軍事戦略や技術に関することや、提督自身も知らないかつての太平洋戦争の資料、そしてマツエダが過ごした前世の時代からその後の時代の戦争の記録までもが、この不思議な資料室には納められている。そのため、勉強好きの艦娘のなかには、アスロック対潜弾やフェーズド・アレイ・レーダーといった、本当なら存在すら知らないはずの技術について知っている者もいた。

もつともマツエダ提督が今調べたかったのは太平洋戦争時代の記録と資料だった。目当ての資料はすぐに見つけることができた。

数冊の書籍や写真をおさめたファイルを探し当てたマツエダ提督は机に本を積んで、ファイルを開いた。机の上に数枚のモノクロ写真がこぼれ落ちた。戦艦をスリムにしたような洗練されたシルエットを持つ妙高型重巡の写真である。前世、あの大戦のはじまる直前に撮られたものだった。

「重巡那智、一九二八年、呉造船所にて竣工。一九三二年、第一次上海事変へ警備出動。一九三七年、日華事変最中の上海上陸作戦に参加。一九四二年、太平洋戦争勃発によりジャワ島沖海戦、スラバヤ沖海戦にて英、蘭の東洋艦隊の撃破するも、敵主隊の補足に失敗する。翌一九四二年、第五艦隊旗艦となりアリユンシャン戦線にてアツツ島守備隊増援のため、輸送船団護衛任務に従事。作戦中、アツツ島沖にて米艦隊と遭遇しアツツ島海戦となる。戦況優勢なるも、戦術上の不手際と、敵航空部隊への恐れから敵艦隊捕捉、撃滅及びアツツ島増援作戦も失敗となる。一九四四年、レイテ海戦に合流するため、台湾沖からフィリピンのスリガオ海峡へと突入するが、すでに先行した西村艦隊は壊滅し、炎上中の航空巡洋艦最上に衝突。戦果なくマニラへ避退。同年十月、米海軍第三八任務部隊の雷爆隊による波状攻撃を受けマニラ湾にて沈没、か……」

『最後まで用兵者と時運に恵まれず、姉妹艦のなかでも、もつとも不遇をかこつた艦』

誰が書いたのか、末尾には手書きで一文添えられていた。

マツエダは昨夜のあの艦娘の悲しげな顔を思い出す。

「用兵と時運、か……」

マツエダ提督は自分の額に汗を拭うのも忘れて、つぶやいた。

○九〇〇時。大講堂へとマツエダ提督が駆け込んだのは、ちょうど司会者が開会の言葉を述べたときだった。大講堂には白い二種軍装やカーキ色の第三種軍装姿の提督、およそ二十余名が詰めていて屋外以上の熱気がマツエダ提督を襲う。

マツエダは室内の提督達を見回した。老いも若いも、少ないながら女性の提督もいた。みな日本人であるようだったが、前世に生きた時代はあの戦争以後の様々だ。左前方の席には、昨夜居酒屋鳳翔で見かけた物静かな中年の提督の姿もあった。

壇上では作戦参謀であり連合艦隊司令長官代理となったフルカワという男が、なんとも得意げに話し始めている。ブーメラン島沖での作戦失敗の経緯からその敗因についてが要旨だったようだが、不運とか天恵とか、必勝の決意などというキーワードが重ねて聞こえてきたため、マツエダ提督はそれ以上、耳を傾けるのをやめた。次に軍令部の作戦参謀が、話しはじめる。長官代理よりはだいぶ弁が立つようだったが、自己弁護と作戦指導の正当化に終始するので真面目に聞く価値はなさそうだった。

——このなかに、トビウメ提督という者もいるのだろうか？

昨夜出会った重巡那智の司令官が一体どんな人物なのか、マツエダ提督には会議よりもそっちのほうが気がなっていた。

「以上のように、勝利の鍵は砲口の直径と砲門の数である。大口径火力で敵艦隊を圧倒できてこそ我々はブーメラン島の友軍を助け出せるのだ。しかるに、我が連合艦隊は目下、深刻な火力不足。すなわち戦艦の隻数不足に直面している。現状の兵力では敵艦隊撃滅は困難をきわめるだろう。そこで本土軍令部の許可を得てこの各艦隊の指令諸君に、戦艦の供出を強く要請するものである」

——まるでドレッドノート時代の発想だ……

マツエダ提督自身、先の海戦の経緯についてまだ詳しい検証を行っ

ていたわけではないが、作戦指導に大きな問題があったという噂はどうやら本当らしいと合点した。

「先のトビウメ艦隊の活躍も……」

フルカワ作戦参謀からトビウメという名前が出たのでマツエダ提督は会議へと意識を戻す。

「戦艦があれば、より大きな戦果を上げられたことは疑いない」

フルカワの言葉とともに提督達の視線が一人の若者へと注がれた。会議室の反対側に座っている、やせた若者が居心地悪そうに体を動かした。昨夜会った那智のするどい眼差しやキリつとした雰囲気から、その指揮官にはもつと剛毅なタイプの提督を想像していたが、意外にもそれは内気そうな優男であった。マツエダ提督は眼鏡の奥から冷やかな目でトビウメ提督を見据えた。

マツエダ提督の目には、トビウメという男はなんとも取るに立らない人物に見えた。同時に、昨夜の那智の物悲しげな顔が思い出され、軽い嫌悪感すら沸き上がってきた。普段はわりと立ち止まってものを考えるマツエダだったが、今日ばかりはなぜか理性より妙な感情が先をいった。その感情が、風采の上がないこの若い提督への嫉妬だとマツエダ自身が気づくのはだいぶ後になってからのことである。

「よって、南方戦域の諸提督に強く要請する。目下、ブーメラン島の友軍救出と敵包囲艦隊撃滅の為、連合艦隊の再編、強化は急務である。その為、戦艦を保有する艦隊にはぜひ、連合艦隊への派遣を強くお願いしたい」

室内が少し騒がしくなった。

「諸君らの動揺はもつともだ。深海軍の侵攻は外縁部のみならず、南洋全海域で活発化している。それぞれの戦艦が各戦線を維持する要となっていることは十分に理解しているつもりだ。だが、今は緊急事態である。一ミリでも大きく、一門でも多い砲火のみが絶望の淵にいる味方を救い得るのだ」

フルカワ作戦参謀の言葉に、室内は少し静かになりつつあった。納得したように無言でうなずいている提督も何人かいた。

——この男、言ってることは無茶苦茶だけど、どうやら口は達者だ

な……

マツエダ提督は黙って周囲を観察していた。フルカワの言葉に感心する提督がいる一方、戦艦を持っていく提督たちは明らかに戸惑っていた。戦艦がその泊地の屋台骨となっている所もあれば、戦艦艦娘と強い信頼関係で結ばれている提督もいることだろう。どちらにせよ、フルカワの発した『要請』という名の戦艦供出令は提督たちに衝撃を与えた。

だが、母港メジロ島に戦艦山城を抱えているマツエダ提督の一切の関心はトビウメ提督の様子に注がれていた。周囲の者とヒソヒソと相談しあう提督連中のなかで、トビウメ提督だけは生気のない顔で一人考え事をするようにうつむいたままだった。

——あの提督と艦娘の間になにがあったのだろうか……

マツエダ提督はそう想像を巡らしている間に会議は幕となった。

提督達が一斉にがやがやと会議室を後にするなか、トビウメ提督は一人ぼんやりと席についたままだった。

そんなトビウメ提督を後目にマツエダ提督が会議室を出て、司令部のロビーにやってくると、例によって艦娘の高雄がマツエダ提督を待っていた。

「お疲れさまでした、提督。会議はいかがでしたか？」

「ああ、たいした議題じゃなかったよ。艦隊再編に関わる本質的な議論は次回だろう。そっちは特に問題ない？」

「駆逐艦の子達は特に問題ありません。ただ、また基地の衣笠さんから連絡があつて……。山城さんがまだ艦から出てこないそうなんです」

「あ、衣笠君に連絡するのを忘れていた。そうか、山城君か……」

マツエダ提督は思い出したように山城の名前を口にした。

「提督？」

「あ、いや、いいんだ。わかった、とりあえず昼食としよう」

そう答えてマツエダは高雄を伴って歩きだした。

先ほど会議室で配られた連合艦隊の編成表には、山城の姉である戦艦扶桑の名前があつたことをマツエダ提督は思い出した。

姉恋しさに引きこもってばかりいる戦艦。功のあった重巡を軽んじ戦艦ばかりを欲しがっている艦隊司令部と提督。そして、重巡主体の高速艦隊をもっと強化しようと思っっている自分。そして昨夜会ったあの艦娘……。

——誰にとっても悪い話じゃないな

マツエダ提督は自分の心が踊るのを感じていた。

「提督、なんだか嬉しそうですね？ なにかいいこと、ありましたか？」

高雄が不思議そうな面持ちで尋ねる。提督は眼鏡をかけなおして笑った。

「高雄ちゃん、もしもだが、新しい重巡がうちの艦隊に加わるとしたらどう思う？」

「ええと、えーと、それは良いこと何じゃないでしょうか？」

突然の質問に高雄は驚きながらも笑顔で言った。

「そうか。良かった」

マツエダ提督何度か頷くと、足取り軽く港へと歩き出した。

「どうやら、荒潮の言うことに間違いはなかったようですね」

食堂の長テーブルに着いた不知火は味噌汁に沈んだ油揚げを箸でたぐりながら小声で言った。

「やっぱりそうだったでしょう？　那智さんのあんな顔、初めて見たわ。一体何があったのかしらねー」

はす向かいに座っている荒潮は、デザートフルーツポンチをスプーンですくいながら笑った。それは緊迫した口調の不知火とは対照的に少しうれしそうですらある。

「艦娘と司令官の信頼関係の悪化は、艦隊の士気と戦力によからぬ影響をもたらします。もしも、お二人の間に不和が起きているならば、和解のため、何らかの手を打つ必要があるでしょう」

不知火は味噌汁をすすってから冷静に言った。

「あらー、それは本心かしらー」

不知火は喉に味噌汁を詰まらせ大きくむせた。

「急いで食べるのは体によくないわー」

不知火は苦しそうに何度かせきこんでから、恐ろしい表情で荒潮をにらみつけた。

「その言葉、聞き捨てなりませんね……」

「確かに自分の心の真実を見据えるのは辛いわー。でも、もしも那智さんが旗艦じゃなくなるとしたら、その後のことを考えるのはとっても大切なことじゃないかしらー」

「そんな戯言は大概にしてください。司令と那智さんとの間にそのようなこと本当に起こると思っっているのですか？」

不知火は射殺さんばかりの視線でにらむが、荒潮は全く動じない。「あらー、私の司令官はあの人だけですけど、私が来るまでに、那智さんの司令官はこれまで三人も変わってるって聞いたわ。ぬいぬいは知ってるでしょう？」

荒潮がヤムヤム島配属になったのはトビウメ提督がやってくる二カ月前のことだった。艦隊運用上の都合により、元々、重巡と駆逐艦

しかいかなかったヤミヤム泊地に、出向という形で別の艦隊から軽巡長良がやつつてきたのはトビウメ提督着任後から一月後のことである。それ以前の泊地の様子はこの拠点に配属されていた那智や不知火達しか知らないことだった。

荒潮の言葉を前に険しかった不知火の顔が沈鬱なものへと変わった。

「残念ながらこの世界にやって来る誰しもが、提督という職務に適しているわけではありません。また、指揮官としてふさわしい人であったとしても、秘書艦となる艦娘との相性がうまくゆかないこともありまます。那智さんはたまたま、そのような巡り合わせが悪かったまでのこと。今の艦隊においてそのような心配をすること自体、不謹慎というものです」

不知火は箸を握ったまま、静かにそう言った。

荒潮がスプーンを置いた。どういうわけか、はるかに口数の多かった荒潮のほうに食事を速く終えてしまった。

「そんな話を聞いちやうと、ちよつといたたまれないわねえ……」

「荒潮はなにを知りたがっているのですか？ 興味本位の詮索は司令にも那智さんにも失礼ですよ」

荒潮はしばらく窓の外へと視線をそらしてからおもむろに不知火の問いに答えた。

「わたし、噂で聞いちやうただけどお……。なんでもうちの艦隊に戦艦が来ることになりそうよー」

不知火は首を傾げた。

「戦艦……。我が隊は機動性重視の遊撃部隊のはずです。そんなのが来たところで、適切な運用が可能だともおもえませんが？」

「難しい話はわからないわ。ただ、軍令部から無理強いされたら、わたしの司令官じゃきつと断れそうもないわね」

『私達の』司令です」

「あく、ぬいぬいに荒潮じゃん。なんの話？」

気だるい声とともに加古がお盆をもってやってきた。

「なんでもありません」

「なにもないわ〜」

二人の言葉に加古は瞬きした。

「まあそーならいいけどさあ……」

加古は荒潮の隣にお盆を置いた。

「じゃあわたし、行くわね〜」

加古がイスを引く前に荒潮が立ち上がった。

「うーい、おつかれ〜。そういや、提督がさー」

「なんででしょうか?」

「なにかしら〜」

それまで煙たそうにあしらっていた駆逐艦の二人は急に血走った目で加古に詰め寄る。

「なになに、そんな怖い顔して? いや、夕べ提督がさ、写真くれたんだよねー。ほらー」

加古はスカートのポケットから四つ切り版のモノクロ写真を取り出した。海戦前にヤムヤム島からタロタロ島へ移動する間にトビウメ提督が洋上で撮った、重巡加古の写真だ。

「見て見て、よく撮れてるでしょ? ここの艦橋の横にいる白いのがあたしだよ。この距離じゃ豆粒にしか見えないよねー」

加古が笑って言う両側から二人は食い入るように写真を見つめた。「この後ろの黒いシルエットは長良ちゃんだね。あ、ここにぬいぬいも、なんとか写ってるよ」

不知火は額に青筋を浮かべながら、身を乗り出す。洋上に黒いゴマ粒のように写る駆逐艦不知火の姿があった。

「こういうのって、癩よね〜」

「加古さん。重巡艦娘ともあろう者がこういうものをひけらかして、恥ずかしくはないのですか?」

荒潮の威圧感に満ちた微笑みと不知火の直球の殺気を前に、加古は訳が分からずたじろいだ。

「えー、この写真そんな駄目かなー? あたしはその、まあまあ気に入ってるんだけどなあ……」

「もう結構です。不知火は作業がありますので失礼します」

「わたしも哨戒の準備があるか行くわー」

はてな顔の加古をおいて、不知火と荒潮は二人仲良くお盆を手に肩を並べて歩いて行ってしまった。

朝の馬鹿らしい提督会議が終わり、トビウメ提督は泊地の病院へ立ち寄って、軍医に手足の包帯を取り替えてもらった。以前から、熱帯では些細な傷も化膿しやすいからこまめに病院へ行くよう那智からよく言われていたのだ。当の艦娘のほうは、人間より遙かに治癒力が優れているようで、トビウメ提督より重傷そうに見えた那智はとうに包帯をはずしていた。

もつとこまめに包帯を変えるよう軍医から小言をもらい、トビウメ提督は生気の失せた面もちで病院を出た。那智とはあれから一度だけ顔を合わせたか、事務的な連絡をしただけで、その後満足な会話はしていない。

この日の昼からようやくヤムヤム泊地所属の艦船にも本格的な修理が許され、重巡那智と加古はそれぞれタグボートに曳かれて五番、六番ドックへと入渠した。午後には本土から航海してきた工作艦明石が入港する予定だった。

トビウメ提督は借り物の作業着へと着替え、安全第一ヘルメットを被って、とぼとぼとドックのある工廠地区へ向けて歩き出した。

熱帯の炎天下、長袖、長ズボンで頬からあごへ玉の汗が流れ落ちる。とにかくローリー泊地は巨大な基地だ。工廠地区まで内湾を迂回して2キロほどあるようだった。

「ここ、レンタサイクルありませんか？」

宿舎がわりのホテルのフロントでそう尋ねると、従業員は一瞬えっという顔をしてからははいはいとうなずいた。

「ああ、貸し自転車の事です。うちではやっておりませんが、もしお出かけでしたら軍のくろがねを呼びますよ」

わざわざ自動車を呼んでまでで行く距離でもないと思ったのでトビウメ提督は礼を言ってホテルを出たのだった。

——こんなことなら、くろがねを呼んでもらえばよかつたかな……

目的地である遠く入り江の反対側に見える覆い屋とクレーンの方を向きながら、トビウメ提督は岸壁にへたりこんだ。周囲は人影の少ない倉庫街で、ほとんど人影がない。一方の泊地の湾内には多くの連絡用内火艇が白波を立てて行ったり来たりしている。

「ああ、そうだ。こんな歩くくらいなら、内火艇に乗ってゆけばよかつたんだ……」

提督は恨めしそうに海上の内火艇を見送る。

——ヒツチハイクするわけにもいかないしな……

こんな日の当たるところでグズグズしてられないので、仕方なく立ち上がったところで、提督は一艘の内火艇を目にとめた。ロングヘアを風にたなびかせたきれいな女性が颯爽と操舵輪を握って内火艇を駆っている。すぐにトビウメ提督は一番近くの浮き棧橋の上まで走って行って手を振り回しながら大声で叫んだ。

「足柄さーん！ 足柄さーん！ おーい！」

内火艇の主はちらつとこつちに顔を向けてから軽く手を振り返して、内火艇の向きをこちらへと変えた。

「あんなところまで歩く人なんて、あんまりいないわ」

風を切って進む内火艇の舳先で一心地つくトビウメ提督に艦娘の足柄はくすりと笑って言った。

「いや、本当は自転車を借りるつもりだったんだけどね……。でも助かったよ」

「姉さんは一緒じゃなかったの？」

「うん、午前中に会議があったから入渠のため、加古と先に行ってもらったんだ」

「ふーん……。姉さんの事だから時間をみて迎えに来てても良さそうなものだけど……。もしかして、喧嘩したとか？」

足柄がからかうように言うので、とっさにトビウメ提督は否定した。

「け、喧嘩なんか絶対しないよー！」

——そう、少なくともあれは喧嘩なんかじゃないんだ

「冗談よ、冗談。もう、そんなに怒らなくても……」

「別に怒ってなんか……」

「でも良かったわ。姉さんと提督の仲がよさそうで……」

冗談めかしつつも、足柄はしみじみ言うので、トビウメ提督は少し不思議そうな顔をする。

「ほら、姉さんってあんな性格で、ちよつとお堅いでしょ？ 提督にも

いろんな人がいるし……。トビウメ提督が来てから、姉さん前よりも笑顔が増えたような気がするの」

「そ、そうなんだ……」

トビウメ提督は戸惑いつつも、ここ最近の那智の表情がすぐれないので心が痛むのを感じた。

——今日こそ、食事かお茶でも誘ってなんか楽しいことしたいな……

「そういえば、足柄さんの艦の修理はどうなの？ もう済んだの」

話題を変えようとトビウメ提督がたずねた。

「私は明日から一番ドックよ。ちやつちやと済ませて、はやくあの憎き深海棲艦どもギツタギタのグツチャグチャにしてやりたいわ！」

怒りいまだ冷めやらずといった表情で足柄が言う。

「ねえ？ もう次の反攻作戦の計画練っているんでしょ？ 早く出撃したいわ」

「いや、その、まあ、ぼちぼちね……」

午前中の馬鹿げた会議を思い出し、提督は少しいたたまれなくなつた。

そうしているうち、内火艇は巨大な覆い屋のあるドックの前へとやってきた。

「わざわざありがとう。足柄さんの艦も修理早く済むといいね」

「そうね。あと、せっかく同じ泊地にいるんだから、姉さんも誘って三人でおいしいものでも食べましょ？ 勝利への道は何と言つても腹ごしらえよ」

「うん、それはいいね」

岸壁に飛び移ったトビウメ提督は足柄に礼を言って、司令部のある港の方へ戻ってゆく足柄の内火艇を見送った。

五番、六番ドックは一つの大きな三角屋根の覆い屋に覆われたドックで、外からは海に面した一つの巨大な工場のように見える。内部は冷房こそきいていないが、強烈な直射日光に襲われないだけ、露天の通常ドックよりは快適だった。

覆い屋の天井近くを通るキャットウォークからドック内を見下ろすと、水を抜いた巨大な二つのバスタブのようなドックにそれぞれ巡洋艦の船体がおかれていた。普段見上げるほど巨大な巡洋艦が、この時ばかりは風呂場に置いた模型の船のように見える。

——大きいなー。スペースに余裕がありそうだから、同時に不知火の修理もできそうだな

工事はすでに始まっていた。作業の優先順位はもうすでに決めている。重巡那智の損傷は激しく、泊地の予備資材には限りがあったため、比較的損傷の軽い加古から優先的に修理することとなっていた。

トビウメ提督はドックの底へと降り立ち、先に修理に立ち会っていた艦娘の加古と落ち合った。加古はいつもと同じセーラー服姿だったが、一応提督や周囲の作業員と同じく安全第一ヘルメットをかぶって作業を見守っていた。

「おー提督じゃん。おつかれー」

「損傷の度合いはどんな感じ？」

クリップボードと鉛筆片手に提督が聞くと、加古は両手で口を押さえながら体をよじる。

「うぷぷ、提督、そのかつこ似合わねー」

「忙しいときにふざけると怒るよ！ で、修理の見通しは？」

ようやく加古は真面目に説明しはじめた。

「なんか船体のほうは大きな被害や水漏れはなくて、修理は今日中に終わるってさあ。まあ、喫水線下の被害は至近弾が数発のみだからそんなもんだらうねー。問題は上構で、こっちは穴だらけだから最低でも三日くらいはかかるかもしれないってさ」

あずき色の錆止めが塗られた重巡加古の艦底を見上げながら提督

はうなずいた。

「修理に三日以上と……。これだけ壊れてても、三日で直るというのもすごいけどね。向こうの世界だったら修理に数ヶ月かかるよ」

「確かに前の世界じゃそうだったよねー。あたしらにとっても、この世界は不思議なことばっかだよ」

加古は錆止の塗られた赤い船底をなでながら言った。

二人は梯子や階段を何度も上がって重巡加古の上甲板へとやってきた。破片や瓦礫をのけて、作業に邪魔な機銃座や艀装を撤去してしまおうと、ふだんはせせこましいと思っていた加古の甲板はなんとも殺風景でただっ広く思えた。

「とりあえず左舷の十二センチ短装高角砲は新しく交換するって。主砲塔はどれもめっちゃくちゃだけど、外装甲と装填機以外は交換しなくても大丈夫だってさ」

二人が前部甲板の方へと歩いてゆくと、主砲塔が納まっていたところはぽっかりと丸く穴があいている。砲塔は揚弾機ごとクレーンで吊り上げて外で修理するのだ。

「それはよかったね。とりあえず砲だけでもきちんとして修理できればいいよ。問題は偵察機なんだよな」

トビウメ提督達は煙突後ろの艦載機駐機場へとやってきた。

「カタパルトの修理もそんな時間かからないみたいだけど、肝心の飛行機が今本土から輸送中らしいんで、搭載は後回しになるよ。あとは魚雷か……」

「うんうん、あたしは、水偵ってあんまり頼りにしてないから、ゆっくりでいいよ」

「つーか、少しは索敵の練度もあげてよ……。あとは魚雷か」

提督は呆れてつつクリップボードの修理要目へと目をやる。

先の海戦で重巡加古は敵へ左舷を向けて交戦したため、損傷のほとんどが左舷に集中していた。夕級戦艦に一矢報いた左舷の六十一センチ四連装魚雷発射管も、その後の被弾で粉碎されてしまったのだ。

「魚雷充填用の酸素発生機も破損してるから、しばらくは空気魚雷の

みの運用となりそうだね。機材の予備があまりないらしくて、酸素魚雷準備用の酸素発生機はぬいぬいのほうへ優先的に回したいと思ってるんだ」

加古は鎖の欄干によりかかって眠そうにあくびした。

「いいよ。あたしのメインの仕事は砲撃だと思ってるから。魚雷みたいに、もったいぶってちまちま撃つってというのはどうも苦手でさあ……」

「おいおい、砲撃だってちゃんと調整して撃つてよ。弾着の散布界が広すぎるって、那智さん怒ってたぞ」

「ええ〜マジで？ うーん、それはちよつとまずいかな……」

ようやく悪びれた様子で加古は頭をかいた。

「そういえばさあ提督。昨日、洋上であたしを撮った写真くれたじゃん？ あれを今朝、ぬいぬいと荒潮に見せたら、なんか超不評だったんだよねえ」

「ええー！ そんな……」

不意に写真のことを言われ、トビウメ提督は驚いてクリップボードから顔を上げた。生前はカメラマンを志していたトビウメ提督にとって、写真のことを言われては黙っていられない。

「なんでだろう？ あの条件ではそれなりにきれいに撮れたと思ったんだけどなあ……。明るすぎて露出過多だったかなあ……。それとも構図の問題かなあ」

「あたしはあれで十分嬉しいんだけどね。あの二人、随分ムキになってたよ」

「ええええ……」

——ぬいぬいと荒潮が写真に詳しいとは知らなかったな……。軽はずみに写真なんか渡したら大変だ……。気をつけないと

提督はそう肝に銘じる。

「そういえば、那智の修理、後回しでいいの。旗艦だし一応お気に入りなんでしょ？」

無邪気に加古にそう言われ、トビウメ提督は少し照れくさく感じて苦笑いした。

「加古と一緒ににはやく修理してあげたいんだけど、砲も発射管も根こそぎやられているから、今必要な部品や資材は給兵艦で本土から回航中だって」

そっかあとうなずき、加古は右舷の魚雷発射管の上に座る。

「たださあ提督、魚雷の射程がいくら伸びても、戦闘で有利なるかどうかは別問題だと思うんだよねえ……」

「え？」

尻の下の魚雷発射管を見下ろしながら加古はいつになく真面目な顔で言った。提督は加古の意外な言葉に目を丸める。

「今回は運良くあたしの魚雷は当たったけどさあ。そもそも実戦での水雷戦って敵の真ん前でありったけぶちまけて運良く一本か二本当たればめつけものって感じなんだよね……」

ふとそうこぼした加古だが、ずつと提督が押し黙っているので急に手を合わせて謝りだした。

「ウソ、今の全部ウソ。今度からちゃんと狙って撃つから、那智には言いつけないで。この通りだから……」

「いや、そうじゃなくて……」

怖くなったのか折檻された子供のようには謝りだした加古をなだめつつ、提督考えた。

深海軍より明らかに勝っていると思われる数少ないテクノロジーの一つが九三式酸素魚雷だった。その射程、速力、隠密性ともに深海軍の使うどの魚雷よりも長く、早く、見つかりにくいとされており、軍令部の指導する戦術ドクトリンもその長所を十二分に生かしたものが多かった。

ただ先日のブーメラン島沖海戦のように、魚雷が有効打になりえるのは、もっぱら肉薄した状態での魚雷戦によるもので、酸素魚雷自慢の長射程を生かした射法が、目覚ましい戦果を上げていいるかと問われれば、そうは言い切れないように思えた。

——加古の言っていることは真実かもしれない。時間のあるときに那智さんに相談してみようかな？

提督は隣のドックに見える那智の船体を見つめながら思った。

「あ、那智さん……」

隣のドックに鎮座した重巡那智の後部甲板には、破壊された五番砲塔を撤去してできた丸い穴を検分している那智の姿が見えた。

「ちよつと、那智さんのほうも見てくるよ」

「あいよー」

トビウメ提督はそう言つて隣のドックへ移るため乗船橋へと行こうと思つたとき、隣のドックのへりから那智に声をかける見知らぬ男の姿に気がついた。

「あれ？ 知り合い？」

それぞれのドックは余りに巨大なため、声が聞こえたり、顔がはつきりに見えるわけではないが、工場内にもかかわらずヘルメットもかぶらず、第二種軍装を身につけているので、作業員でないことはすぐ分かつた。

「ねえ加古。あれ、誰だか知ってる？ あそこで那智さんと話してる人」

「いやあ、あたしは知らないなあ……」

「そつか……」

トビウメ提督は怪訝な顔でうなずくと加古の上甲板を乗船橋のほうへ歩きだした。誰かは、那智に直接きけば済むことだ。

そんなトビウメ提督の行く先を遮るように、薄緑色の第三種軍装を着た男二人が乗船橋の出口で待ち受けていた。

「ヤムヤム島のトビウメ提督であらせられますね？」

「は、はい」

「参謀部命令により、これよりマラカイ島の第二保養所まで出頭していただきます」

男達は能面のような顔で威圧的に命令した。この世界の住人達も前世からとばされてきた提督達と同じで、様々な人間くさい性格をもつて生きているのだが、なぜか軍令部や参謀部お抱えの職員にはこういうタイプが多く、トビウメ提督は苦手意識を持っていた。

「ええ、これからあ？ 僕は今日は修理の立ち会いで……」

「いーよいーよ。こっちは大丈夫だから。あたしだって自分の艦の修

理くらいは真面目にやるよ」

迷つても仕方ないので、トビウメ提督はため息をつく。と参謀部の遣いについてドツクの外へと歩きだした。ふと、重巡那智のほうを振り返ると、あの白い服の提督と那智は那上甲板でまだ話し込んでいた。

第五砲塔のあつた場所にはぽっかりと黒い大穴が口を開けている。重巡那智の後甲板で二十・三センチ連装砲の砲塔と揚弾機構が納められていた場所だ。艦娘の那智はその穴をぼんやりと見下ろしていた。これまで疑いを感じたことのない、自慢の二十センチ砲の心臓部である。

だが、今は敵の主砲弾一発で粉碎され、自身の渾身の一撃は敵にまったく効いていなかったということを感じ知らされ、那智は自分の半身ともいえるこの艦の戦闘力自体に疑念を抱くようになってしまった。

——ここに三十六センチ砲が積めたら、こんな思いはしなくて済むのにな……

あまり生産的でない想像ばかりして時間が過ぎてゆく。あの夕級戦艦の写真を見せられて以来、自分の貧弱な兵装に苛立ちばかりがついついてきていた。もうすぐ、トビウメ提督が修理手配のためにここへやってくる。

期せずして今回の海戦では本人が思っている以上に大きなことをやってのけ、それでいて、それを鼻にかけることもなく。土壇場のときに期待に応えきれなかった自分に文句一つこぼさなかったトビウメの顔を見るのがなぜかとてもつらかった。常に不完全燃焼の烙印を押された前世の苦い業が那智を苦しめていた。

「わたしはどうすれば……」

そう一言つぶやいたときだった。

「やあ、また会えたねー！」

作業員ではない白い軍服姿の男が右舷側のドツクのへりからこちらへ手を振った。見覚えのある男だった。

「ちよつとお邪魔していいかな？」

男は重巡那智の上甲板へ通じる乗船橋へ首を向けてたずねた。驚

きながらも那智がうなずくと男は嬉しそうに笑うと乗船橋を渡って艦の上甲板へとやってきた。

「貴官は確か居酒屋鳳翔で……」

「そうそう。重巡の那智君、だね？ 申し遅れた。マツエダ ヒロヨシ。所属はメジロ諸島の巡航警備艦隊。知つての通り一応提督だ」

マツエダ提督はかしまつて踵を打ち合わせると、きりつとした敬礼を送る。慌てて那智も答礼して自分の名前と所属を答えた。

「戦艦相手に肉薄攻撃か……。さぞや凄まじかったろう」

マツエダ提督は改めて那智の被害状況を見回した。

「戦果といえるものは、無い……」

那智は苦しそうにそう言った。マツエダ提督はすぐに反論しようかと思つたが、那智の様子を見て言葉を呑んだ。

提督は話題を変えるように那智の艦全体を見回した。

「やっぱり重巡はいいなあ。今は工事中だけど、修理が終わればきつと美しい艦に違いないだろうね……」

「え？」

予期せず、全肯定ともとれる言葉をかけられ、那智は思わず聞き返す。

「いや、私のところにも重巡が何隻かいるんだけど、どれも美しい艦だし、いざというときには頼りになるし。なによりどんな作戦にも使える」

那智は戸惑いながらも少し笑った。

「そうか、貴官の配下の重巡は優秀なのだな」

マツエダ提督は那智の心中をおもんばかり、軽くうなずいただけだった。

「修理が終わる頃、また寄つても良いかな？」

「ああ、それは構わないが……」

「ではこれにて……」

そういつて笑顔で敬礼を送ると、マツエダ提督は乗船橋の上をドックの方へ歩きだした。

参謀部からの迎えがすでに自分を待っていた。マツエダ提督は再

び背後のドックを振り返る。あちらこちら工事中で足場やシートに覆われている状態だったが、いつも自分が乗っている重巡高雄に負けなくらい近代的で流麗なフォルムの艦であることがよくわかった。「綺麗だよな……」

マツエダ提督はそう一言つぶやいた。

フェアトレード

トビウメ提督は参謀部の用意した内火艇に乗せられて、ローリー諸島の内湾である宝石湾上へと連れ出された。ローリー泊地には大小六つの島があるのだが、トビウメ提督達を乗せた内火艇は司令部や工廠、市街地がある本島ことアズライ島から、丁度宝石湾の対岸にあるマラカイ島へと向かっていた。

遣いの職員に自分が召集された理由を尋ねても、理由は承知しておりませんとけんもほろろに返されるだけだった。灼熱の陽光に目を細めながら、トビウメ提督は内火艇の船縁に座って湾内の艦を眺めていた。

この日も、ローリー泊地の宝石湾には無数の艦が錨を下ろしていた。

トビウメ提督が北西の外海へ通じる水路へと視線を転じると、ちょうど艦橋の後方に大型の起重機を三基乗せた大きな艦がゆっくりと宝石湾へと入ってくる場所があった。周囲には護衛の駆逐艦と軽巡洋艦を四隻も従えている。

「あれってもしかして……」

トビウメ提督は誰に尋ねるともなくこぼすと、意外にもつかいの参謀部付き職員の一人が、相変わらぬ無表情ながらもトビウメ提督の疑問に答えてくれた。

「工作艦の明石かと思われませう」

前世より他人にぞんざいに扱われることは慣れているトビウメ提督は、その仏頂面の職員が返答してくれたことに少し驚きつつももうなずいて言った。

「あれが明石……。大きいんですね」

提督は肩に掛けていたカメラを構えるとゆっくりと入港しつつある明石とその護衛艦の一行をフィルムに収めた。

この工作艦明石が給糧艦間宮や伊良湖と並んで、海軍にとって戦略上重要な役割を担った艦であることは那智から聞かされていた。

——このぶんなら不知火の修理も早くはじめられるかもしれない

出迎えのタグボートが明石や随伴艦の出迎えに行く様子をボンヤリ眺めながらトビウメ提督は思った。

十分ほど波に揺られてトビウメ提督らに乗せた内火艇はマラカイ島の船着き場へ接岸した。軍港のごつい浮き棧橋とは違う、田舎のマリーナにあるような木製棧橋に内火艇や手漕ぎボート、小さなヨットなどがつながれている。

その一つにもやいがかけられると、無愛想な参謀部の職員らに連れられてトビウメ提督は棧橋から椰子の灌木林へと歩いてゆく。島の奥へ続く小径にそつて数棟のログハウスが建っていて、その一軒から数人の少女達が水着姿で飛び出してきた。

「海水浴もわたしがいつちばーん！」

「待つつぽい！ 体操しないで飛び込むと心臓止まるっぽい？」

「はいはい！ 人工呼吸もAEDもスタンバイオーケーよ！」

——どこかの艦隊の駆逐艦かな？

ギヤーギヤー騒ぎながらすれ違う少女たちを振り返りながらトビウメ提督は思った。周囲を見回すと、道の反対側には短パンにアロハシャツ姿で、ビール片手にバーベキューをしている中年の男性グループの姿が見える。おそらく提督達に違いない。

ローリー諸島の北端に位置するこのマラカイ島は島全体が海軍の保養所として整備されていて、南洋随一のリゾート地といわれている。実際に条件が許せば、提督や艦娘はこの島で束の間の休息とレジャーを楽しむことができるようになっており、奥にはビーチやゴルフ場、屋外映画館まであるという。

参謀部に呼び出されたこと自体、いい予感などしていなかったのだが、一方でもし自分の艦隊の艦娘達をここへ連れてきたらどうだろうと想像した。

——ぬいぬいはともかく、初風や加古なら喜びそうだ。こんど余裕があつたら使用申請出してみようかな……

提督はよく整備されたコテージやログハウスを見回しながら思った。

少し歩くと、シユロの林の奥にひとときわ瀟洒で大きなつくりのログ

ハウスが見えてきた。建物の裏で大きな室外機がうなつていところを見るとどうやら、クーラーも完備されているようだ。

トビウメ提督はそのログハウスへ案内され、大きなコロニアル調のバルコニーから屋内へと通された。すぐに夏場の冷房特有のあの爽快感に満ちた冷気がトビウメ提督を迎えた。その心地の浸る間もなく、トビウメ提督は広くて明るい居間へと通された。

洋風のソファやテーブルが設えられた落ち着いた居間には、案の定、連合艦隊司令長官代理のフルカワをはじめとする軍令部の幕僚達がくつろいでいた。

「ヤムヤム泊地のトビウメです……」

安全第一ヘルメットを手にツナギ姿で挨拶するトビウメ提督を、幕僚一同は怪訝な顔で迎えた。

「やつと修理が始まったところで呼び出されて、その……」

おずおずと弁解すると、フルカワはうなずきながら近くのソファへと座るよううながした。

「それはすまなかつたな。まあかけたまえ。実は、いい知らせなんだ。君が乗るべき戦艦が見

つかった。その話をしたくて呼んだんだよ」

「ええ？　は、はあ、それはどうも……」

一瞬狼狽したものの、トビウメ提督は平静を装つてうなずいた。とにかく苦手な相手には気持ちに余裕をもって対応しなければと思つた。それに、くれるものはもらっておけという那智の言葉が提督を少し勇気づけた。

「な、なんとも、喜ばしいことですね……」

調子のよいお世辞も飛び出た。なんとか乗り切れるかもしれない。「ああ、まったく。ちょうど次の作戦の為に、大々的に戦艦供出令を出そうとしていたところだったのでなおさらだ。我々は過去の歴史のように、戦艦を後方に遊ばせておくつもりはない。最強の連合艦隊を組んでブーメラン島を奪還する」

——こんな人でも一応戦史は読んだのか……

はいそうですねと、いい加減な応答をしながらトビウメ提督は思っ

た。

「メジロ泊地のマツエダ提督がおいになりました」

職員という言葉にトビウメ提督とフルカワ長官代理は振り返る。戸口から現れたのはさつきドックで那智と話していたあの提督だった。

——あれ？ この人さつき……

「こんにちは。メジロ諸島のマツエダです。トビウメさんですね？ よろしく」

トビウメ提督よりやや年上に見える、知性的で頭の良さそうに見える男が右手を差し出した。眼鏡の奥の柔和なまなざしがこちらを見つめている。

「ど、どうも……」

トビウメ提督もおおずと手を出して握手をした。自分よりも数段スマートで、人慣れしている男だとトビウメ提督は思った。

「よく来てくれた。さあこちらへ」

マツエダ提督が近くのイスに腰を下ろすと、フルカワ長官代理は身乗り出して嬉しそうに言った。

「今回、このマツエダ提督が一番に戦艦を提供したいと申し出てくれた。確か扶桑型戦艦の……」

「山城です」

「そうそう山城。かつてフィリピンあたりのどっかの海戦では旗艦つとめたこともある優秀な戦艦だ。それを是非君に指揮してもらいたい」

「は、はあ……」

なんとか調子を合わせていたトビウメ提督だったが、フルカワの次の発言には言葉を失った。

「しかし、戦艦と重巡のトレードとは、なんとも釣りあわない取引だが、なんとかこらえてくれたまえ、マツエダ君」

「はい、確かに苦しくないと言えますが、ブーメララン島の今の状況を考えればワガママは言えません」

やや厳しそうな表情でマツエダ提督はうなづく。

——え？ 何、トレードって……。重巡と戦艦って何？

予想外の事に、トビウメ提督は青くなる。

「たしか遊撃打撃艦隊の旗艦重巡は……」

「重巡那智です」

フルカワの問いにマツエダ提督は淀みなく答える。

「そうだった。トビウメ提督、君のところの那智と入れ替えるかたちで山城を連合艦隊に供出すると、マツエダ提督は提案してくれたんだ」

——そんな、冗談じゃない！

「せ、戦艦を頂けるのは結構なことですが、その代わりに重巡を出せなくて、そんなの無理ですよ。こっちにだって都合がありますから……」

突然のことに真つ青になりながら、トビウメ提督は慌てて言った。それまでなごやかだった室内の雰囲気が一瞬に変わる。黙って聞いていた幕僚たちも一様に不安そうな顔をした。それでも、トビウメ提督は喉から声を絞り出すように言った。

「長官代理が考えた最強の連合艦隊にも、戦艦主体の作戦指導にも、僕は異議はないです。でも僕が無理に戦艦に乗らなきゃならない道理もないし、うちの那智と戦艦を交換する必要もないでしょう？」

驚きつつもトビウメ提督は必死に言う。

「なんで、うちの那智なんですか。南洋戦域の地域に絞っても重巡の余力はそれなりにあるでしょう？」

トビウメ提督は必死の抵抗を試みつつ、フルカワと先ほどからずっと黙っているマツエダ提督を見た。

マツエダ提督にとってトビウメ提督の抵抗は意外だった。戦艦をくれると言われれば一つ返事で重巡と交換したがるタイプの提督だとばかり思いこんでいたからだ。実際、提督の中には、その圧倒的火力や防御力、そして戦艦娘の持つプロポーションなどに惹かれて、是非自分の艦隊にもと欲しがる者も多い。

戦艦というエサをちらつかされても配下の重巡への愛着を感じさせるトビウメ提督の様子に、マツエダ提督は少し好印象を抱きはじめてたのだが、自分の発言が求められる段となったので、とどめとばかり

に口を開いた。

「いくら前線から遠いとは言え、私たちは戦力の中核となる戦艦を手放すわけですから、こちらの艦隊に生じる戦力的空白も決して小さくはありません。その空白を重巡一隻で埋めなければならぬ。だから、重巡なら誰でもよいというわけではありません。相応の実力と戦歴、練度を保証してもらえる艦でないといけません。そのなかで、今回目覚ましい活躍を見せた重巡那智は適任と判断しました」

淀みなくそう説明するマツエダ提督に、フルカワや幕僚連中は何度もうなずく。

「わかったな、トビウメ提督。こちらは正式な手続きを進めるので、君は艦隊再編成の準備をしておけ」

「そ、そんな……」

フルカワ長官代理の言葉にトビウメ提督は茫然自失となつてつぶやいた。

マツエダ提督は自分が願つたとおりに事が進みよかつたと思う反面、目の前の内気そうな若者が少し気の毒にも思えてきた。

「フルカワさん、僭越ながら連合艦隊司令部令として再編命令を出すのはともかく、トビウメ提督にも急なことです。少し時間が必要では？ 艦娘はただの機械や戦闘兵器ではありません。提督と艦娘として心情的な問題もあるでしょうし、頭ごなしに艦娘を異動させては、こちらに来てもらつてからの士気にも悪影響を及ぼします。それに、トビウメ提督にも少し気持ちを整理する時間が必要でしょう」

マツエダ提督はうなだれるトビウメ提督を見ながらそう提案した。期せずしてトビウメ提督に助け船を出す形となつたが、軍令部の人間の力を借りて無理矢理に艦と艦娘を取り上げるとあつては、自分としても寝覚め悪い気分だったのだ。それに今の情勢下では、トビウメ提督がどんなに拒んでも結果は変わりはない。

一方、トビウメ提督は冷や汗に額を濡らしながらも少しほつとしたように、弱々しい感謝と親しみの笑みをマツエダ提督へ向けた。それを見たマツエダ提督がいくばくかの罪悪感を抱かなかつたといえば嘘になる。

「仕方ない……。一日だけ考える時間をやるから、なんとか気持ちの整理とやらをつけておくことだ。下がっていい」

やむなくフルカワもそれに同意し、トビウメ提督に退出をうながした。締まりのない敬礼もそこそこにトビウメ提督は力なく部屋を後にした。

さほど間をおかずにマツエダ提督も応接室を辞して、棧橋へと歩きだした。保養所のログハウスを出るとマリーナへ続く小径の先に力なく歩いてゆくトビウメ提督の背中が見えた。

相変わらず風は生暖かい。ただ、先ほどの炎天下と青空はどこへやら、空は急にどんよりと曇りだした。南洋の孤島ならどこでもそうだが、天気はとても変わりやすく、一日に一度か二度は必ずスコールが訪れる。

——高雄ちゃんにもらった傘は置いてきてしまったな

マツエダ提督はそんなことを思い出しながら、自分も急ぎ足で内火艇のあるマリーナまで歩きだした。

居酒屋鳳翔での悲しそうな那智の顔と今さっきのトビウメ提督の困惑顔。歩きながらふと、そんな二人の顔が脳裏でオーバラップする

——『とてもできた奴だからな』か……

マツエダ提督は居酒屋で言った那智の言葉を思いだした。

スコール

宝石湾の中央に駆逐艦不知火は停泊していた。その右舷には、艦舷が高く駆逐艦不知火の数倍の排水量を誇る工作艦明石が接舷している。

その明石の艦娘はやたら陽気で、独り言の多い艦娘だった。

「随分とやられています、船体内部の被害はさほどでもないですねー。このぶんならすぐに修理できそう！ それにしても、これは珍しい配置ですねー」

明石は駆逐艦不知火の甲板で、艦首と艦尾の兵装を見比べた。艦橋構造物に寄りかかってぼんやりと空を眺めていた不知火はそうですねとぼそりと呟いた。さつきまでは快晴だった空も急に雲量が増えてきた。不知火が待っている司令はまだ来ない。

「艦橋前や甲板に機銃を増設しているのに、二番砲塔は撤去していないですねー。オリジナルですか？」

それまでいい加減に相槌をうっていた不知火は明石へ視線を戻した。

「先日、内地で妹さんの雪風ちゃんにも会ったんですよ。完全に近接対空強化の装備で機銃のハリネズミのようでしたねー」

「それは話し合って決めたんです、司令と。今の戦況では、極力火力を維持した方がいいということ。二番砲塔を残しました。そのお陰で今回も生き延びることができました」

「そうなんですかー。前世でやらなかった配置もオツですねー」

明石は興味津々といった様子で何度もうなずいた。

内火艇の一艘がこちらへと近づいてきた。デツキにトビウメ提督の姿が見えた。

「司令がいらしたようですよ」

不知火は艦橋の壁から背中を離し、艦首楼甲板から下の甲板へと颯爽と飛び降りた。

内火艇が駆逐艦の舷梯に寄ると、ツナギとヘルメット姿のトビウメ提督がよろよろと舷梯へ飛び移った。

提督はゆっくりと階段から上がって不知火と明石のいる甲板へやってきた。

「遅刻ですよ、司令」

「うん……。遅れてごめん、ぬいぬい。あ……」

そこまで言って、提督はそばに立っているやや背の高い元気そうな艦娘に気がついた。

「ぬいぬい？ ああ、不知火ちゃんの愛称ですかー。仲いいんですねー！」

不知火は耳まで真っ赤だ。まあそうですねと少し弱り顔でトビウメ提督はうなずいた。ただ、どことなく表情は硬い。普段ならもつと怒ってみせるところなのだが、不知火は少し怪訝な顔で提督を見た。

トビウメ提督はわざわざヘルメットをとって明石に会釈した。

「えっと、明石さんですよね？ ヤムヤム島のトビウメです。今回はよろしく……」

「はい、工作艦の明石です！ 不知火さんの修理ならお任せください！ ざっと状態を見せてもらいましたが、損傷は見かけより軽微ですねー。機関係、航海系は簡単な修理で済みそうです。あとは兵装ですが、大きな修理は魚雷発射管と歪んだ主砲の砲身の交換となります」
提督とは対照的に、明石はハキハキとした声で説明する。

「それは良かったです……」

提督はかすかな笑みを浮かべてみせた。

「司令、酸素発生器の搭載ですが、本当に加古さんよりも先に不知火がいただいでよいのですか？」

トビウメ提督は、酸素魚雷に酸素を充填するための設備の復旧を誰よりも先に不知火からすることに決めていた。補充の資材には限りがあり、指揮下の艦船で魚雷を最も有効に使える艦は駆逐艦に他ならないとの判断だった。遠慮がちにそう聞く不知火に提督はうなずいた。

「もちろん、もちろん。魚雷こそ駆逐艦の切り札だし、加古自身が、先にぬいぬいになって……。加古も普段はあんな風だけど、何も考えてない訳じゃないんだよね……」

穴だらけになった不知火の煙突を見上げながら、トビウメ提督はぼんやりと言った。

「そうですか。後ほど改めて加古さんへはお礼を言っておきます。それにしても、あの後ろの砲塔、よかったです」

破片や砲火を受けて穴だらけの二番砲塔を見ながら不知火が言った。

「え？ ああ、そうだね。どうする？ 兵装このままでいいかな？」

不知火はうなずいた。

「次の反攻作戦も近いのでしょうか？ 不知火はこのバランスの良い兵装が気に入っています。ところで司令、どこか具合でも悪いのですか？」

いつも以上に歯切れも反応も悪いトビウメ提督を見かねて不知火は言った。提督はなんとも弱々しい笑顔で首を振る。

「ごめん。大切な修理だからちゃんとしないとね……。ちよつと疲れしているだけだよ」

「そうですか。ならよいのですが……」

そう言ってるそばから、トビウメ提督は被弾でめくれたリノリウム甲板の裂け目に足をとられて危うく転びそうになった。

「うーん、提督も故障してるかもしれないですねー。一緒に修理しちゃいます？ なんちゃって〜」

電動ドリルを手にした明石が頭を指さしながらおどけてみせる。不知火がものすごく怖い顔で睨んだので、明石は冗談ですよ冗談と笑いながら作業に戻った。

その後、明石を含めた三人で修理すべき箇所の確認に回っていると、ついに空からゴロゴロと雷鳴が鳴り出した。

「ああー、お天気悪くなってきました。雨降ると修理の能率も落ちるんで、少し作業を見合わせましょう」

明石に島に戻っていていいと促され、不知火とトビウメ提督は一旦内火艇でアズライ島へ戻ることにした。

ぼつりと頭に水玉の当たる感触を感じて空を見上げるや、二つ目、三つ目……。その後は、みるみる土砂降りのスコールとなった。操舵

輪を握っていた不知火は内火艇に備えてあつた洋傘を開いた。後ろのデッキには呆然とした表情で濡れるがままになっているトビウメ提督がすわりこんでいる。

「あの、司令……。その、もし、よかつたら、い、一緒に入ったらどうですか」

不知火はそっぽを向きながら歯切れ悪く言った。トビウメ提督の耳には不知火の言葉が全く届いていないようで、ぼんやりしたままだ。不知火はゴホンと大きく咳払いした。トビウメ提督はようやくびつくりしたように不知火を見る。

「司令、申し訳ありませんが。傘を持っていてくださいませんか。今は不知火が舵を取っているので」

「ああ、ごめん！ 舵は僕がとるから」

「いえ、司令は不知火より背が高いので傘のほうを持っていてください」

慌ててトビウメ提督は不知火の手から洋傘を受け取って、濡れないように空へかぎす。ピンク色のなんとも女の子らしい傘だ。

「へえ、意外にかわいらしい傘使ってるんだね……」

「意外は余計です」

「そうだね……ごめん」

真つ赤になつた不知火がドスを利かせた声で言うので提督は条件反射的に謝った。

「おや、あれは荒潮ですね」

内火艇のずっと右手を、駆逐艦が停泊場所を求めて微速で進んでいる。

「そういえば近海の哨戒任務から帰ってくる時間だったね。無事に帰ってきたね……」

不知火がそつと見上げると、ようやく少し生気が戻つたような表情のトビウメ提督の顔があつた。不知火の仏頂面にも少し笑みが浮かぶ。

「ふふ、司令、手をふってみましょう」

そう言つて不知火が大きく手をふる。つられてトビウメ提督も安

全第一ヘルメットを持った手を大きくふると、汽笛の音とともに、スコールにも関わらず艦橋の窓から艦娘の荒潮が身を乗り出して手を振った。

「勝利の女神はここよ、早くつかま……あらあら大変」

離れていたのが内火艇まで声は届かなかったが、内火艇の上で同じ傘に入っている二人を見た荒潮の顔が凍る。内火艇上の不知火にだけはそれが判った。

「あーあ、こんな雨の時にわざわざ外まで出て来なくていいのに……」

無邪気な提督は苦笑いしながら、遠くの荒潮に手を振り続ける。

「司令、よい雨ですね……」

「え？」

「よい雨です。とても……」

荒潮の嫉視を存分に感じながら、不知火は一人ほくそ笑んだ。

スコールは激しさを増してゆく一方だった。本島へ戻り、トビウメ提督と不知火が宿舎へとたどり着く頃には二人ともずぶぬれの有様だった。

「そういえば、艦娘も風邪って引くの？」

「当然です。その状態で戦闘となったら、艦の統制にも大きく影響します」

「じゃあすぐ着替えて暖かくしないと」

慌てて言うトビウメ提督に不知火もピンクの傘を畳みながらうなずいた。

「そうします。南方の雨は時として冷たいので、司令も風邪には気を付けてください」

「確かに寒いね。まさかこんな南の島で寒さを感じるとは思わなかったな……。何か温かいものでももらっていいこうか？」

「不知火も一緒にします」

そう言っ提督達が食堂の出入り口へやってきたところで、出会い頭に食堂から加古がとんできた。

「ちよつと、提督！ どうなってるのさ？ 那智をクビにして他所の

艦隊にやっちやうって嘘だよねえ？」

開口一番、加古は泣きそうな顔で叫ぶ。不知火もこれには驚いたように、言葉を呑んでトビウメ提督の顔を見上げた。

「ど、どうして……」

トビウメ提督の顔は死人のように真つ青だ。

「みんな噂してるよ！ 戦艦を配備するために那智を解任するって。ねえ、提督はこの半年ずっと那智と一緒にうまくやってたでしょ？」

不知火も驚いた表情でたずねる。

「司令、加古さんの言うことは本当なのですか？」

「そんな……。まだ何も決まっていないはずなのに……」

トビウメ提督はそうつぶやくだけだ。

「戦艦が欲しいからって、そんなのあんまりだよ！」

トビウメ提督は立ち尽くしたまま何も答えない。今心配だったのはこの話が那智の耳に入っていないなければならないが、ということだけだった。

——もうこんなに噂になっているだなんて。とにかく那智だけに僕からは話さないよ

トビウメ提督は慌てて食堂内を見回す。いない。すぐに探しに行こうと宿舎の玄関へ歩きだした提督は、ぴたりと足を止めた。

「あ……」

思わず息を呑んだ。まるでシャワーのような雨のなか、傘も差さずにずぶ濡れの那智が立っていた。

トビウメ提督はうなだれ、那智は身じろぎもせず険しい表情でトビウメ提督を見据えていた。追いかけてきた加古と不知火もそんな二人の様子を見て、かけるべき言葉がみつからない。

「あー司令官、荒潮もこんなに濡れてしまったわ、暖めてくれても……って、あらあら？」

どうみても、わざと傘を持たずにずぶ濡れになって宿舎までやってきた荒潮も一同のただならぬ雰囲気の前に押し黙る。

覚悟を決めたようにトビウメ提督が言った

「那智さん、話しが必要だね」

「そうだな」

那智もそううなずいた。

「なんだか修羅場って感じね〜」

白いブラウスが濡れて体に張り付いた状態の荒潮が不知火の横までやってきて小声でささやいた。不知火はいたたまれない気持ちになっつてつぶやいた。

「ええ、本当の修羅場です……」

食堂では人目もあり、落ち着いて話もできないので、那智とトビウメ提督は基地の正門近くにあるカフェへとやってきた。ずぶ濡れの二人組を前に店主のおばさんは一瞬だけ嫌な顔をしたが、元々この世界の人々は艦娘にはやさしい。二人はすぐに屋根付きバルコニーにある席へ通された。雨のせいで店内には他に客はおらず、貸し切り状態だった。

席についても、しばらく二人とも言葉が出ない。猛烈な雨音と時々雷の轟音が聞こえるだけだ。湯気の立つココナッツ入りのコーヒーを一、二度口にしてから、トビウメ提督は今日の出来事をとつとつと語った。

「マツエダ……」

トレードの相手方の名前が出たとき、那智は少し顔を上げてそうつぶやいた。

「それで、貴様はどうするつもりなんだ？」

一通りの経緯を聞いた那智は提督を見据えて問う。

「やつぱり、その、つっぱねる……べきだと思うけど……」

艦娘の事に気をつかいつつも、それでいて頼りなくもごもごも煮えきららない提督を、那智は内心とても苛立たしくも、一方でとてもいとおしく思った。顔の表情は険しくとも、那智はトビウメ提督が彼なりに必死になっていることだけはよくわかり、そのことだけは嬉しかった。

「言っておくが、わたしには決められんぞ。人と同じ体と考える頭、そして心を手に入れたが、あくまでわたし達は戦うための船。一緒に考

えてやることはできるが、重い決断を下すのは貴様たち提督の仕事だ」

那智はわざとそう突き放すように言った。今言ったことは真実だし、もう行く末はだいたい決まっている。それが最善かどうかは那智にもわからなかったが……。

一瞬、テラス席も紫色の雷光に照らされ、轟音が空をふるわせる。どうやら宝石湾の中に落ちたのだろうか？ かなり近かったようだ。

だが、今の二人にとっては雷鳴など遠い世界の事だ。身じろぎもせず、湯気の立たなくなつたコーヒーを見つめる。

「知つての通り、わたしには敵の戦艦を葬るだけの力はない。これは現実だ。そのことで作戦上不都合なことが予見されるなら、迷う余地はないのだぞ」

提督は黙っていた。

「貴様……」

「一つだけ。一つだけいいかな……」

那智の言葉を遮つて提督が言った。

「那智さん個人の考えでいいんだけど。この変な世界で、那智さん達は何のために生まれてきたのかな？」

那智はコーヒーコップから顔を上げた。

「艦娘や僕たちは何のために戦っていると思う？ 前世でやり残したことをこっちでやり遂げるためなのか、それとも……」

提督は店の奥でテーブルを拭いているおばさんへと目をやる。

「この不思議な世界の人々をあの手から守るためなのか？」

那智自身その疑問は何度も抱いたこともある。確かに前世のどす黒い、苦い記憶を少しでも「そそぐ」ことが、この世界で生きてゆく大きな糧であることは間違いない。だが、それだけなのか。得体の知れない化け物に浸食されつつあるこの不可思議な世界で、自分の『道具』としての本分を忘れたことは一度もなかった。

「きれいな世界だな。こっちの世界も、前の世界も……」

那智はスコールの降りやまぬ椰子の植えられた街路へと顔を向け

る。

——前世の業を乗り越えることも気にならない訳ではないが……

「戦うことと守ること、兵器としての本分を忘れたことはないさ。今、ここで求められることに最大限力を尽くすのみさ……。だから貴様も私情は捨てる。なにが一番大切か、それを考えて決めるんだ」

「そう、わかった。ありがとう……」

トビウメ提督は苦しうなずいた。また雷が鳴った。ブーメランの島の陸軍部隊救援が今求められている最大の課題だった。時間も機会もそう多く残されてはいない。火力、夕級戦艦、二十・三センチ砲、インターナル・アーマー……。

トビウメ提督は深く深呼吸してから真剣な顔で那智を見据えた。

「決めた。軍令部の指示に従い、那智さんを遊撃打撃艦隊旗艦の任から解くよ。代わりに戦艦を艦隊に迎えることにする」

那智は一度目を閉じてからうなずいた。

「承知した。貴様が熟慮の上、決めたことだ。異議はない……」

那智はそう言つてニツと笑つて見せた。ひどい笑顔だった。

「よく決めたな。貴様はよくできたやつだ。それにしても、少々甘かったがうまいコーヒーだったな。ここはわたしが払つてやる」

那智はそう言つて立ち上がる、水を吸つてクニヤクニヤになった軍票をテーブルに置いて逃げるように店から出て行った。

トビウメ提督は動かなかった。追うべきだと思つたが、体が動かなかった。今日のスコールはずいぶん長く、まだ止む気配はない。トビウメ提督はすっかり冷たくなつたコーヒーを飲み干した。さつきまで甘かつたはずのコーヒーが、今はなんの味もしないまじい液体にか思えなかった。

那智は喫茶店を後にして足早に棧橋へと歩いていった。無理につくつた笑顔は店を出るときすでに崩れていた。こみ上げてくるものをとにかく腹に飲み込む。基地の門を過ぎたところからはひとりだけで走り出していた。

今、自分の顔を誰かに見られたり、声をかけられることだけは避けたかった。

棧橋まで走ってきた那智は自分の内火艇に飛び乗るとすぐに第五ドックへと舵をきった。猛烈な雨が顔当たるのもかまわず、那智は内火艇を駆って第五ドックの建屋へと駆け込んだ。

休憩時間だったのか、幸い工事中の艦に作業員の姿はない。那智は駆け足で自分の艦の艦長室へやってくる途中から鍵をかけた。この部屋是那智が私室として使っている。すぐに戸棚からウイスキーの瓶を取り出しコップに注ぐと一気におおる。ダルマを何かで割りもせずに飲み込んだのでどが焼けてゲホゲホとむせた。

ジャワ島、アツツ、そしてフィリピン……。この世界で自分の元から去っていった提督連中、夕級戦艦とその写真、トビウメ提督……。前世とこの世界での思い出が一気に脳裏にフラッシュバックした。

「また、半端な終わり方なのか。こっちでもわたしは……クソ！ トビウメ……トビウメ……」

那智は艦長室の寝台に顔を沈めて嗚咽した。

最果ての初風

ローリー島のはるか遠く、最前線の拠点シューズ・ベラ島。連合艦隊の主力が後方へ撤退してしまつてから、この拠点には外洋航海ができないほど損傷を受けた艦とその艦娘が大勢取り残されていた。

そんな取り残され組の一人である駆逐艦娘の初風は今日も浮かない顔で宿舎の壁に張られたカレンダーにバツ印をつけた。もう今日で十日目である。

「どうなつてんのよ……。もうこんなに経つちやつたじゃない……」

初風はマジックペンにキヤップをしながらつぶやいた。

先のブーメラン島沖海戦で自分の艦は大破し、自身も重傷を負つた初風は、この小さな基地の艦娘専用の病院に収容され、退院まで全治八日と診断された。

艦娘は人間と比べて、遙かに頑強で怪我の回復も驚異的に早い。ただ、決して不死身ではなく、再生できないほどのケガを負つて手足を失つてしまうこともある。

幸い初風はそのような深刻な傷を負つたわけではなかったが、額や両腕両脚、腹部に背中と、どこも包帯とガーゼまみれで絶対安静を余儀なくされた。そうして大きな病室のベッドの上でケガの回復を待つことになつたのだが……。初風がこのシューズ・ベラ島を嫌いになるのにはわずか三日で十分だった。

トビウメ提督達がシューズ・ベラ島を撤退した日の夜から、初風は毎夜、ガリ版刷りのカレンダーにペンでバツ印を付け始めた。一緒に島に残つた長良は毎日見舞いに来てくれるが、夜になると急に孤独感におそわれ涙がこぼれてくる。

「不知火……。那智さん……。司令官……。なんで、みんなして行つちやうのよー」

広い病室には他の入院中の艦娘も大勢寝ているので初風は枕に顔を押しつけてグスングスンと泣き声を押し殺していると、突然となりのベッドから不敵な低い笑い声が聞こえてきた。

——ヒツ、な、なんなのよ一体……

初風がぎよつとして顔を上げると、頭まで布団をかぶった艦娘がわずかに頭と目元だけを布団と枕の間から覗かせて初風を凝視している。黒くて長い前髪の隙間からキラリと光る右目がなんとも不気味だ。

「フフフ……。おさびしいのですね……」

「うっ。べ、別にさびしがってなんかいないわよ！」

初風は肝を冷やしたが、平静を装って反対側へと顔を背けた。隣のベッドは確か夕雲型の早霜とかいう艦だったと初風は思い出した。前世でもこつちでも特に関わったことはなく、物静かな艦なのでこれまで話すことはなかったが、なんとも気持ち悪い艦の隣になってしまったものだと初風は我が身を哀れんでいるうちに眠りに落ちた。

次の日も朝一番に長良が勢いよく病室に飛び込んできた。

「初風ちゃん、具合はどう？ 元気になった？」

「いや、その……。まだあと一週間は安静にしていないと駄目だって言われてるんで……」

やっと、腕の包帯一枚がとれたばかりの初風は苦い愛想笑いを浮かべる。

「そっかー、退院したら一緒にリハビリしようね！ さーてもう一周行っちゃうかなー」

「は、はあ……」

そう言いうと長良は初風にさわやかなVサインを送って、またどこかへ走って行ってしまった。

「元気のよい方ね……」

またも急に低く沈んだ声が背中から投げかけられたので、初風は背筋にゾクゾクとしたものを感じて振り向いた。

「な、なによ……。いきなり声かけないでよ！ びっくりするじゃない」

声の主である駆逐艦娘早霜は今度も目元まで布団をかけたまま初風を凝視している。声音こそ薄気味悪いが、どことなく嬉しそうにすら見える。初風は、自分がこの薄気味悪い隣人におちよくられているかのようで、少し腹が立ってきた。

「初風さん……。初風さんはあの不知火さんと同じ艦隊なのね。あなた達の司令官はいい人ね……」

早霜は布団をかぶったまま不意に話し出した。

「は？ あのバカ司令官が？ ふーん、どうだか」

そう突っぱねてみてから、初風は思う。

——見かけや性格は頼りないけど、まあ優しいし、今回も助けられたし、確かに嫌いじゃないわ……。って、何考えてんのよ、わたし脳内で勝手に自爆した初風は赤くなってそっぽを向いた。

「不知火さんは、わざわざ命令違反をしてまで、沈みかけていたわたしを助けてくれたんです。そのために、不知火さんが危険な目にあったり、なにか罰を受けてしまうのではと、心配でならなかったわ……」早霜は背中を向ける初風にそう言っただけでまたもフフフフ……と笑った。

不知火のことが早霜の口から出たので、実は結構気になってきたのだが、いまさらそれを態度に出してはバツが悪すぎる。初風はそのまま背中を向けていた。一方の早霜はそんなつれない初風に構わず一人でボソボソとつぶやき続ける。

「不知火さんそれはキラキラしていたわ。フフフ…：那智さんとあの司令官は港の防波堤の先でずっと不知火さんが来るのを待っていたみたい。あなた達の司令官と不知火さんが二人になったとき……：フフフ」

初風のやせ我慢もそこまでだった。ぐるりと早霜の方へ向き直ると頬を赤くして言った。

「さつきから笑ってばかりいないで、はやく肝心なことを言いなさいよ。まさかあのバカ、不知火に酷いことしたんじゃないでしょうね！」

「早霜は見ていましたよ。不知火さんは制裁を覚悟していたみたいでしたが、司令官は不知火さんの頭をそれはやさしく撫でてあげたんです。不知火さん、驚いたでしょうし、とても嬉しかったでしょうね……：フフ、フフフ、フフフフフ」

なんともほんわかした話をまるで怪談話のように語り終わると、早

霜はまたも静かに笑った。

「ええー！ し、不知火もあんな澄ました顔して、ちよ、チヨロすぎよね、まったく……」

そういつて初風はベッドの反対側へと体を戻した。

——なによ不知火、抜け駆けもいいところじゃない！ そういえば、荒潮も何もしてないくせに司令官に頭撫でてもらって……。つて、もしかして駆逐艦で司令官に誉めてもらってないの私だけじゃないの！

なんとも悔しくなって、初風は布団を被って静かにすすり泣く。

隣のベッドからの泣き声を聞きながら、早霜は口元に笑みを浮かべる。

——フフフ、初風さん。絵に描いたようなツンデレね……フフ、フフ、フフ、フフ、フフ

「おおー！」

「ま、眩しい……」

「天使だ！ マジで天使だ！」

廊下からそんなどよめきが聞こえてきたのはそんなときだった。

「皆さん、包帯を替える時間ですよ」

病室内に柔らかな声が響き、入ってきたのはナース服姿の空母娘、翔鶴だった。

ブーメラン島沖海戦の直前、このシューズ・ベラを出航直後に敵潜水艦の魚雷を受け大きな損傷を受けた空母の艦娘だった。艦娘の翔鶴に怪我はなかったが、魚雷二本の被雷により左舷艦底に大穴があり、現在も第一ドック修理中だった。湾内には初風や長良だけではなく、ブーメラン島沖海戦で損傷した艦が多数、座礁や着底寸前の状態で修理の順番を待っている状況だった。

その状況に気兼ねした翔鶴は、元来の優しい性格も手伝って人手の足りない病院で負傷した艦娘の看護を買ってでたのだ。

「痛いところはない？ 今新しい包帯を巻いてあげますからね」

上下白の看護服に身を包んだ清楚な翔鶴の甲斐甲斐しい介護に、負傷したうえに自分達の司令官や僚艦と離ればなれになった艦娘達は

大いに励まされることになった。だが、どういうわけか翔鶴が病院で手伝いを始めてからというものの、島に残っていた提督達や島民の間に体の不調を訴える者が続出しはじめたのだ。

「急にお腹が痛くなつてしまった。緊急入院が必要だ」

「漁に出ていたら、釣り針で指を刺しちゃったよ。ものすごく痛むんです是非海軍の病院へ入院したいんだけど」

先の翔鶴登場の際に廊下でうれしそうな声を上げたのはこういう手合いだった。美しい花に群がる小バエのごとく、病院もとい翔鶴へ殺到する自称患者達を病院から追い払うのに憲兵隊はとて手焼くことになるのだが、それはまた別の話である。

同じ部屋の艦娘達の介抱を終えた翔鶴は布団をかぶっている早霜へ声をかけた。

「早霜も包帯を替えないとだめよ。そんなに布団をかぶって、暑くはないの?」

「ええ、実はとても暑いわ。フフフフ」

「ほんと早霜はおもしろいわね。さあ腕を出して」

そう優しく笑って翔鶴は早霜の腕に巻かれた包帯を解いてゆく。

「もう少しで包帯をとっても大丈夫そうね。でも気温も湿度も高いから消毒だけはこまめにしないとだめよ」

そういつて早霜の腕にきれいな包帯を巻き直した翔鶴は、布団に身を隠す初風へ声をかけた。

「初風ちゃんも古い包帯は取り替えましょう。ちよつとだけ起き上がってね?」

翔鶴はそう優しく声をかけて掛け布団にそつと触ると、初風は突然布団を跳ね上げる。

「ちよつと、初風ちゃん。大丈夫よ、落ち着いて」

驚いた翔鶴は一生懸命になだめるが、初風は翔鶴の胸に抱き着いてわんわん泣くばかりだ。

「もうイヤよ、こんな島。じらぬいー、なぢさーん、じれーがーん……、はやぐむがえにぎでよお……」

初風の入院生活はまだ終わらない。

物事は動きだすとあれよあれよという間に進んでゆく。トビウメ提督が連合艦隊司令部へ艦隊再編を受け入れる旨を返答したのは、トビウメ提督がマラカイ島へ呼び出された次の日の午後だった。

重巡那智の異動に関わる書類手続きは司令部付きの役人達の手によってあっという間に処理され、あとは重巡那智の修理完了と戦艦山城の到着を待つて異動日とすることが決まってしまった。

話は少しさかのぼって、トビウメ提督が艦隊再編命令を受け入れる電報を司令部送る三時間前。

トビウメ提督はマツエダ提督の滞在するホテルのロビーを訪れた。

ロビーで十分ほど待たされてからやってきたのは、黒い髪をボブカットにして、白いブラウス姿のやさしそうな女性だった。

「はじめまして、重巡高雄です。トビウメ提督ですね？ マツエダ提督はすぐに参ります。今少しお待ちくださいね」

そう挨拶した秘書艦の高雄はほがらかに笑った。

「そういえばブーメラン島でのご活躍、うかがっています。わたしの妹の摩耶を救ってくださいありがとうございました」

トビウメ提督は愛想笑いを浮かべていえいえと言った。

「そちらの艦隊には、重巡は多いんですか？」

「どうでしょう？ わたしの他にもう一隻。あと那智さんがくれれば三隻になります。マツエダ提督はほんとうに重巡を気に入ってくれたみたいで、わたしもすぐくうれしいんです」

高雄は少し頬を赤くして言った。

「お待たせしてすみません、トビウメ提督」

マツエダ提督が小走りに階段をおりてきた。

シユロ林の木陰にあるホテルのテラスにおかれたテーブル席に二人は座った。すでに朝日に暖められた熱気が周囲をおおいはじめていた。

トビウメ提督は切り出した。

「昨日お話しがあった件……。お受けするつもりではいるんですが……」

「そうですね」

マツエダ提督の顔が一瞬明るくなった。

「ただそれには二つお願いが。それがかなわない場合は司令部の命令を拒絶し自分の泊地へもどるつもりでいます」

あまり穏やかでないもの言いにマツエダ提督は顔を曇らせた。

この世界の海軍は、体裁こそ軍隊式の組織を装っているが、内実はそれぞれの基地に散らばった提督と艦娘達の緩い結束と協力によって戦線を維持しているという体制だった。仮に司令部や司令部から至上命令が下ったとしても、それに無視したり、抗命することができた。処罰や拘禁などということはずまずありえず、重い場合でも艦隊の指揮権剥奪や物資を積んだ定期連絡船の停止などのペナルティーがせいぜいだった。もつとも、深海軍の侵攻が激しく、各地で防戦に追われる提督達が司令部からの命令に大きく背く例は少なかった……。

「それで、条件とは？」

「まずは、工作艦明石のタロタロ、シューズ・ベラ進出を求める意見具申を求めるつもりです。マツエダさんからも、参謀や司令長官代理へはたらきかけていただけませんか？ あそこにはまだ十分な修理ができていない艦がたくさん残されています」

「明石ですか……うーん」

工作艦明石の希少性と重要性はマツエダ提督も認識していたので、少し考え込む素振りを見せた。

明石はその重要ゆえに、司令部が前線へ進出させることをためらっていた。

軍司令部も連合艦隊司令部もすぐにはうんと言わないだろうと予想された。だが、このローリーには今でもタロタロ島とシューズ・ベラ島に自分の艦隊の艦娘をそこへ残したままの提督が多くいるのも事実だ。

今ここで拒めば艦隊再編の提案がお流れになってしまうこともあり、マツエダ提督はそれを承諾した。

「ええ、いいでしょう。私からも提案してみます。それで、二つ目の条件とは？」

トビウメ提督は軽くうなずき、硬い表情のまま言った。

「こちらもとても大切なお話です」

数分後、トビウメ提督が足早に立ち去った後も、マツエダ提督はテラス席にボンヤリと座ったままだった。

「提督、ちよつと暑くなつてきました。中へ入ったらどうですか？」

高雄が提督を心配して外へとやってきた。

「ああ、そうだね」

「ところで提督、今回の山城さんと重巡の那智さんの配置転換、急なお話でわたしも少し驚きました」

マツエダ提督は少し歯を見せてニヤつと笑った。

「連合艦隊が高い火力をもつ戦艦を欲しがっていてね。山城君も泊地でじつとしているよりその方がいいんじゃないかなと思つたんだ。それに……うちに重巡が増えるのはいいことだろう、高雄ちゃん」

そう笑顔を見せるマツエダ提督に、高雄は元気に「はい」とこたえたものの、高雄は今まで感じたことのない理由のない不安を抱きはじめた。

八日間の療養期間を経て、初風はやつとシユーズ・ベラ基地の病院を退院した。入院六日目にやつとあの妙な隣人である早霜が退院してゆき、気分的に少し落ち着くことができたのだが、その後の二日間はどういうわけか猛烈な孤独感におそわれた。

看護師・翔鶴に慰めらなからなんとかつらい二日間を乗り越え、晴れて退院となった初風を迎えたのは同じトビウメ艦隊の長良だった。よろよろと病院から外へと出てきた初風は強い陽光に思わず目眩を感じた。

「初風ちゃんよく頑張つたね。さあ、これからはすぐに実戦に復帰できるように一緒にリハビリしよ？　まずは島内一周のランニングからはじめよつか！」

元気にそう言う長良を前に初風は別の意味での目眩に襲われてふらついた。二人とも艦の修理は終わっていない。昨日やつと空母翔鶴の修理が終わつたばかりで、今は巡洋艦が二隻入渠している。

「うーん、ちよつと体が追いついていなみたいだから、最初はまずストレッチからにしょー！」

長良はそう言って病み上がりの初風を炎天下の砂浜へと引っ張りました。

熱中症と貧血になった初風が、退院したばかりの病院へ再度かつぎ込まれたのはそれから三十分後のことだった。

「ごめん、初風ちゃん！ わたしつい調子乗っちゃって……。今度はもつと軽いメニューにするから。だからしっかりして！」

そう言つて半ベソになつて長良が詫げる。

「だ、大丈夫よ……。たいしたことないわ」

——こ、今度つて……。ああ駄目、なぜか妙高姉さんの顔が見えるわ……

初風はベッドの上で意識を失つた。

翌日、なんとか回復した初風は、長良に見つからないように朝一番で病院を飛び出した。初風は港で小さな内火艇を借り、湾内でブイにつながれている駆逐艦初風の様子を見に行くことにした。

わざわざ近寄らなくとも、駆逐艦初風の損傷の酷さは一目瞭然だった。煙突はふたつとも倒壊していて、前後の魚雷発射管は吹き飛んでしまったのか影も形もなかった。三基の砲塔は、どれも上から踏みつぶされた空き缶のような状態で、どれもまともに動きそうにない。自分がいた艦橋も屋根が吹き飛んで今にも崩れ落ちそうだ。

——あんなところにおいて、わたしもよく助かったわねー

初風は、内火艇の上から自分の艦の艦橋を見上げしみじみと思つた。

初風は陸へ戻つてからはずっと岸壁へ座り込んで海を眺めていた。空母翔鶴の修理も終わり、今は軽巡洋艦二隻がドックへ入つて修理を行つている。だが、湾内にはまだ多くの艦が沈没寸前の状態で残つており、初風の番まであとどれほどかかるのかわかつたものではない。

空襲警報のサイレンが鳴つたのはそんな昼下がりの頃だった。島中の拡声器からサイレンのウーウー唸る音が響く。

——敵機襲来！ どこ？

初風は陽光の眩しさに目を細めながら空のあちらこちらへ視線を走らす。島の上空を薄雲が覆っているせいが見えない。周囲の艦娘や作業員も大慌てで走ってゆく。

本当なら初風も艦を港外退避させるところなのだが、今は艦も動かせず、罐の火も落としてしまっているのものでそれもできない。兵装もすべて失われていて、なにもできない状態だった。

雲の隙間からちらっと黒いものが見えた。かなり高度の高いところに黒い十字状の物体が三つ。

深海軍の航空機は巡航時は団子にひれをつけたようなものや手足のない甲虫みたいな形をしているが、いざ戦闘となると急に定規のような翼を伸ばし、スリムな円筒形な胴体となって、まるで前の時代の飛行機のような姿へ変化する。初風が見つけた敵機はすでに戦闘形態に変化してゆつくりと島の南側から北へ進んでいるようだった。

すぐに基地の高射砲が一齐に撃ちはじめた。初風は両手で耳を押さえながら呆然と空を見上げる。敵機の近くで太陽の光に小さな何かがキラキラと反射した。ポツポツと高射砲の作る黒い雲の向こうから、何かが落ちてくる。敵の爆撃機はもう爆弾を投下していたのだった。爆弾はゆつくりとだが、みるみる大きくなってゆく。狙いは基地や港の施設ではなく湾内の船だった。初風は自分の艦のことが気がかりでならなかったが、もはやどうしようもない。身を隠せる場所を探そうと堤防の後ろへ伏せたとき。ついに最初の爆弾が湾内に落ちて大きな水柱をあげた。爆弾は次々に湾内に落ちて炸裂する。直撃せずとも近距離で炸裂した爆弾は付近の船舶に深刻なダメージを与える。

——お願い。当たらないで。大破着底くらいなら耐えられるから、お願い！

初風は地面に伏せながら必死で祈った。

海面につつこんだ爆弾が炸裂する轟音はやまない。次の爆発音は大気をガンガンとふるわせて防波堤裏の初風も嫌な熱気を感じたほどだった。

——直撃した！

初風がおそろおそろ防波堤の影から泊地を覗くと、目の前で擱座している軽巡の後ろ、さらに数百メートル沖にいたどこかの艦からもうもうと爆炎があがっていた。

「やられたぞー！ 救援急げー！」

誰かがそう叫ぶのが聞こえた。直撃弾を受けたのが自分の艦でないことは艦娘である初風にはすぐにわかったが、それでも生きた心地はしない。

——お願い、早く助けてあげて

その瞬間、燃えていた艦が真つ赤な火の玉となって破片をあたり一面に吹き上げた。きつと搭載弾薬か魚雷が誘爆を起こしたのだろう。もう船の形をとどめていない燃える残骸と真つ黒な煙の柱が見えた。「そんな……。せつかく、せつかくこの基地までたどり着けたのにいいい！」

初風は思わず口元を押さえて叫んだ。

その後、すぐに島の飛行場から戦闘機が迎撃に上がったものの、すでに敵機は爆弾の投下を終えて高空へと逃げていた。

空襲警報が止んだ。被害は直撃弾を受けて爆沈一隻。他至近弾を受けて損傷した艦多数。奇跡的に駆逐艦初風には被害はなかった。初風は警報がやんでも防波堤の上から動けずにいた。湾の中央部では爆発して木っ端みじんになった艦がまだ黒い煙を上げている。

「初風さん……ご無事だった？」

岸壁に座り込んでいた初風が振り向くと、額に包帯を巻いた早霜が立っていた。

「あんたはどうだったのよ？」

「幸い至近弾だけで済んだわ」

早霜はそういつて初風の隣に腰を下ろした。

「やられたのはわたしたちと同じ駆逐艦の子でした。すぐに病院に搬送されましたが、もう……」

艦と艦娘はお互い一心同体の存在だった。艦が修復不可能な状態まで破壊されれば、その艦娘がたとえ無事であったとしても、その艦娘に明日は来ない。

「そう……。ここまでたどり着いたのに哀れよね」

初風は強がるようにそうぶつきらぼうに言った。しばらく膝を抱えて海を見ていた初風は次第に小刻みにふるえて泣き出した。

早霜がそつと横から初風の肩を抱きしめると、初風は激しく泣きだして早霜に強くしがみついた。

「わたし、嫌……。みんなに会えないままここで死ぬなんて全体に嫌！」

「大丈夫ですよ。初風さん達の司令官は必ず迎えにきてくれるわ」

——そうよね、不知火さん

早霜は初風が泣きやむまでその肩を抱きしめつづけた。

サヨナラ、帽ふれ

「ザーザー……。ザーザー……」

食堂のテーブルに頬をつけたまま荒潮は外の雨を眺めていた。はす向かいのテーブルでは不知火が黙々と昼食のサンドウィッチをかじっている。

「那智さんが本当にいなくなるなんて、言葉って、怖いわねえ……。なんだか、罪な感じがしてきたわー」

荒潮がそう口にしても、不知火はなにも言わない。皿の上のサンドウィッチをすべて食べ尽くすと、じつと虚空を見つめている。

「ねー、ぬいぬいはどう思ってる……」

「不知火は……。不知火はとも……。とても残念に思っています。それに、戦艦と比べられてなどという理由で、那智さんが不憫でなりません」

不知火はそうつぶやくと肩を落とした。

どんな小さな艦隊であれ、そこで旗艦になるということは名誉なことであり、秘書官となって提督と良好な信頼関係を築くことは艦娘として幸いなことだった。自分もそうなりたいと願うことは、軍艦の精として当たり前のことなのだが、それでも不知火は罪悪感にとらわれていた。

——旗艦や秘書艦になりたいなんて願った事自体が不知火の落ち度です

バツの悪い思いをしているのは荒潮も同じようだった。

「わたしだって、別に那智さんの更迭を願っていたわけじゃないのよー」

「よしませう、荒潮。もう決まっちゃった事です。那智さんを万事怠りなく送り出し、万全の体制で新しい戦艦を迎えることだけを考えませう」

——戦艦が来る以上、私たちは旗艦にも秘書艦にもなれないのですから……

不知火は自分に言い聞かせるように言って立ち上がった。

「私たち、これからは戦艦の護衛艦になるのねー」

「戦艦のおもりも駆逐艦の重要な仕事です」

駆逐艦不知火、荒潮ともに、かつて帝国海軍最強といわれた第二水雷戦隊に籍を置いていた経験を持つ艦だった。自分たちの本分は近接水雷戦闘をもって敵を撃滅することという自負を持っている。不知火はそんな雑念を振り払うように言った。

「戦争にロマンは不要です」

不知火は荒潮の機先を制するように言った。

不知火も荒潮も、戦争や作戦立案にロマンティズムや非合理的な願望を持ち込むとどのような悲劇にみまわれるのか、前世の経験からよくわかっていた。

不知火は突つ伏したまま動かない荒潮を残して、下膳カウンターへ盆を戻しに向かった。

不知火は艦隊にやってくるであろう戦艦山城の事を考えた。前世の艦歴はなんとなくは知っているものの、この世界へ生まれ変わってからの経歴は不知火もあまり知らなかった。艦娘として顔を合わせてた経験もほとんどない。

——戦艦山城……。那智さんの代わりとなる良い艦だといいいのですが

不知火は旧知の駆逐艦達に、今度やってくる戦艦山城について尋ねてみようと思いい食堂を後にした。

ローリー泊地のマラカイ島の保養所へ呼び出された翌日。トビウメ提督が旗艦交代命令を受けいれる旨を、GF司令長官代理へ伝えると、艦隊再編のための事務手続きはたった二日間で片づいてしまった。

同じくして、重巡那智の修理用装備、資材を積んだ貨物船がやつと到着し、艦の修理が急ピッチで進むことになった。

自分がいることで何か役に立つわけではないが、トビウメ提督はその期間中、重巡那智の修理にずっと立ち会い、島の作業員達と自分の目には見えない「妖精」達の不思議な力によって艦や装備が徐々に修

繕われていく様を見守った。修理期間中は艦娘的那智もドックにずっと詰めていたが、トビウメ提督と那智は修理に関すること以外ほとんど言葉を交わすことはなかった。

艦隊再編の日は突然前倒しされることになった。相手方のマツエダ艦隊が予定より早く自分達の泊地へ撤退することになり、重巡那智の引き渡しだけが前倒しされることになったのだ。というのも、長らくメジロ泊地に錨泊していた戦艦山城の機関に不調がみつきり、急ぎ修理をしてから前線へ向け出港することになった。この修理対応のため、マツエダ提督は急に母港へ戻ることになったのだ。そのため那智の引き渡しは戦艦山城の到着を待たずに行われることになった。

この日、これまでは半袖の防暑服や作業衣で過ごしていたトビウメ提督も海戦以来、久しぶりに正装である白い麻の第二種軍装を身につけることになった。この日の昼までには、マツエダ艦隊へ修理の終わった那智を引き渡すことになっていた。

ホテルの一室でマツエダ提督が詰め襟の制服のカラーを止めていると、ドアをノックするする音が聞こえた。どうぞと返答するとドアが開く。入ってきたのは勝手知ったる秘書艦的那智だった。

「那智さん……」

「準備は済んだか？」

トビウメ提督は驚いたが、那智はニツと笑ってみせた。トビウメ提督が久しく見たいと願っていた笑顔だった。それだけにトビウメ提督は戸惑った。そんな提督にかまわず那智は提督の足下から頭まで眺め回してうなずいた。

「新調した制服か……。やっぱり糊のきいた新しい制服はいいな」

これまでの制服はこの前の海戦でボロボロになり、今着ているのは新しく支給された制服だった。

「那智さんはもう準備できてるの」

「ああ、貴様のほうはどうだ？」

提督は浮かない顔で大丈夫と答えた。

「修理に付いていたてくれたこと、感謝するぞ。もう万全だ」

「いや……。僕は何もしてないから……」

提督はもごもごとつぶやいた。

「そういえば、島においてきた私物とかどうする？ 送らせようか？」
「まあ大したものはないから戦況が落ち着いたら取りに行くさ。貴様こそ艦に忘れ物などしないようにな。ああ、しまった、開けたばかりのだるまを戸棚に忘れてきたな……。ええい、仕方ない。貴様が飲んでいいぞ。執務室の棚の二段目に置いてある」

提督は無言でうなずいた。もつともトビウメ提督が酒を飲まないことは那智も知っている。

「今度来てくれる時の為にとっておくよ」

提督は無理に笑って見せた。那智はわざと眉間に皺を作って見せた。

「まったく覇気のない顔だな……。最後くらいちゃんと送り出してもらわないとわたしが恥ずかしいからな。こつちもその後が気が気じゃないぞ。そうだ、貴様に一つ教えていなかったことがあった。最後に海軍式の別れの挨拶を教えてやろう」

那智は笑いながら言つて、姿見の前へ提督を立たせるとその背中を軽く小突く。

「ほらシャンと背筋を伸ばせ。そして右手で制帽のツバを持ち、こうやって高く上げろ」

那智は後ろからトビウメ提督の肩と右腕に手をやり、帽ふれの姿勢をとらせた。

「こうやって右手を上げたらゆっくりと円を描くように回すんだ。下士官や整備兵なんかは勢いよく左右に振って見せたりするが、貴様は一応司令官だから少し落ち着いて振るといいだろう……。そう、こうやって……」

提督の手をとって那智は鏡の前で帽ふれの姿勢をとらせる。トビウメ提督は鏡に向かって那智の言うとおり帽子を高く掲げて腕をふる。鏡越しに自分をみつめる那智と視線が交錯した。

「そう、こうやって……」

その姿勢のままお互い無言でしばらく鏡越しに向かい合った。先ほどの笑顔もどこえやら、鏡に映った那智とトビウメ提督の顔は、何

かを必死にこらえているようにくしゃくしゃになっている。トビウメ提督が右に顔を向けると、肩ごしに那智もこちらを見つめている。「仲間の修理も終わった……。いちはやく長良と初風を迎えに行つてやれ。昨日、シユーズ・ベラに敵の重爆が飛来したと連絡があった。錨泊中の艦船にも被害が出たという。あまり時間がない……」

トビウメ提督の背中に体をつけたまま、那智は低い声で言った。「うん、僕達は明日ここを発つて工作艦明石を護衛しながらタロタロ島とシユーズベラ島へ順次展開することになってる」

那智ははかない笑みを浮かべて提督から体を離した。

「それは結構。半年か……長いようであつという間だったな。貴様とはなかなか楽しくやらせてもらった。改めて礼をいうぞ」

「そんな……。こつちこそ……」

トビウメ提督は歯切れ悪く口を動かした。

「トビウメ司令。ブーメララン島の仲間を必ず救い出せ。必ず……。では、わたしは先に栈橋へ行つている。これにて失礼する」

那智は真剣な表情になってそういうと両の踵を打ち合わせて敬礼するとそのまま回れ右をして退室した。トビウメ提督は制帽を握りしめたまま部屋のドアを見つめていた。

昼過ぎ。空には若干の薄雲がかかっている、コンクリートの栈橋の照り返しはさほど厳しくはなかった。トビウメ艦隊とマツエダ艦隊の艦娘一同は埠頭の栈橋の前で向かい合つて整列した。

「那智さん。こんなことになって、とても残念です……」

不知火は那智の前で顔をうつむけて言った。

「不知火、あいつのこと頼むぞ」

那智はそつと不知火の肩に手を置く。

「はい。那智さんもどうかお元気で……」

不知火は毅然とした表情で強くうなずいた。

「ねえ那智、急すぎてなんて言っていないかわからないよ……」

「初風ちゃんや長良さんもきつと寂しがるわねえ……」

加古と荒潮も沈んだ表情で那智との別れを惜しんだ。向かいの列

にはマツエダ艦隊の秘書艦の高雄と護衛の駆逐艦娘の菊月、春雨の三人が少し戸惑った表情を浮かべて自分達の提督を待っていた。彼女たちにとつても那智の転属は寝耳に水だったのだ。

トビウメ提督とマツエダ提督の二人は司令部庁舎のほうから歩いてきた。

「さて、転属の書類上の手続きはこれで完了ですね」

「はい……。重巡那智の修理と整備は全て完了し、いつでも出港できます」

沖合に浮かぶ重巡那智を眺めながら笑顔で言うマツエダ提督とは対照的に、トビウメ提督は無表情でうなずいた。

二人の提督は指揮下の艦娘達の前で整列して向かい合った。

「現時刻をもって、重巡那智のヤムヤム島泊地、遊撃打撃艦隊旗艦の任を解き、メジロ島泊地巡航警備艦隊付きを命ず」

那智は峻厳な面もちでトビウメ提督の読み上げる辞令を聞いていた。

「それで結構です、戦艦山城は機関の修理が終わったらすぐにこちらへ向かわせます。何とか次の作戦までには間に合いますので。そろそろ……」

「ちよと、あんた！」

いよいよ別れの時というところを、突然そんな怒鳴り声が割って入った。

「姉さんを放り出して戦艦に鞍替えってどういうつもりなの！」

厳粛だった場に割って入ってきたのは艦娘の足柄だった。

「あ、足柄さん……うぐっ」

戸惑う一同をもものともせず、足柄はトビウメ提督の襟元に掴みかかった。

「あんた、わかってんの？ 姉さんがあんたの為に、どれだけ……。なんで姉さんを捨てるような真似……」

足柄はもの凄い剣幕でトビウメ提督に詰め寄ったが、目尻には涙がたまっていた。トビウメ提督は喉元を絞め上げられてもがくだけで、

足柄の問いに答えられるだけの言葉もなかった。

「こんな理由で放り出される姉さんの気持ち、ちよつとでも考えてみたの？」

その一瞬後、眼前で起こったことは不知火の脳裏に鮮明に刻みつけられることになる。

「この馬鹿！　ちよつと来い！」

那智は一挙動で、トビウメ提督に掴みかかる足柄の両腕を素早く捻り上げると、後ろ手に押さえつけた。

——み、見事な業前です

呆気にとられている一同と、一人感心した表情で見守る不知火の前で、那智は足柄を拘束したまま倉庫の方へと連れてゆく。

「ちよつと姉さん痛い、痛いってば。どうして！　ちよつと、離してよ！」

そうわめく足柄の声もだんだん遠く聞こえなくなり、埠頭に聞こえるのは窒息寸前となったトビウメ提督のゲホゲホとせきこむ音だけとなった。

「あ、あの提督。そろそろ出発の準備もありますし……」

呆然とする一同の中で、一番最初に我に返った高雄が口を開いた。

「ああ、そうだね。こちらも出港の準備がありますので、それではこれにて」

「は、はい……では」

厳粛な別れの儀式を予感していた一同は、足柄の乱入によるドタバタ劇で調子を狂わされ、なんとも締まりのないかたちで解散することになった。

那智から教わった帽ふれの儀式もなく、なんともいい加減な別れ方となってしまうが、湿っぽい別れのやりとりをせずに済み、トビウメ提督には救いでもあった。

「トビウメ提督。那智さんが一日もこちらの艦隊に慣れてくれるよう、私たちががんばりますからどうか心配なさらないでくださいね」

別れ際に高雄はそうやさしくトビウメ提督へ声をかけ、マツエダ提督に付き従って歩いて行った。

マツエダ提督とその艦娘達が去り、トビウメ提督も自分の艦隊に解散を命じてから岸壁に腰をおろした。新調した制服の詰襟のカラーは足柄に掴まれたせいでしわくちゃになってしまっていた。

ただ一人そばに控えていた不知火が表情のない顔で言った。

「司令、実は不知火も気持ちは足柄さんと同じです。このようなこと、賛成できません」

「ああ、そうだね……」

「それから、今度この艦隊に来ることになった戦艦山城ですが、その性格面、艦の性能面ともにあまり評判が芳しくありません。そもそも、転属してきたばかりの艦にすぐに艦隊の旗艦、秘書官を任せるのには大いに不安が残ります」

「うん、それはわかってるよ」

トビウメ提督はうなずいた。

「だから当面は、秘書官だけはぬいぬいに頼みたいんだ」

トビウメ提督は岸壁に座りながら不知火を見上げた。不知火は一瞬目を丸くした。目深にかぶった制帽下からギロリとした視線が不知火を見つめている。真剣なときトビウメ提督がそういう目つきになることを不知火は知っていた。冗談や悪ふざけではないようだ。

——まあ司令は普段から、あまり冗談を言うような方ではありませんが……

不知火は一度深呼吸してから努めて冷静に言った。

「そんな急に決めてしまつてよいのですか？ 一応序列や艦種の問題もありますし……」

トビウメ提督はブンブンと首を振る。

「真面目に考えたら、他にいないよお……。加古？ うーん、無理なんじゃないかな」

提督は困りきつたように気弱な声を出す。加古さんのパーソナリティを考えればそうれはそうでしょうねと、内心では不知火もそう合点したのだが、あまり無体に扱いきりても加古が気の毒だ。

「加古さんはどう思うでしょう？」

提督はため息をついた。

「ちゃんと加古には相談したんだ。そうしたら、なんでも言うこと聞
くから秘書艦だけは勘弁してーだって……」

不知火はトビウメ提督から視線を逸らして言った。

「そう、ですか。だったら、仕方、ないですね……」

「負担かけてごめん」

トビウメ提督は立ち上がってズボンのお尻をパンパンと払うと居
住まいを正した。

「明一一〇〇、駆逐艦不知火と荒潮はその他の護衛艦とともに出港し、
工作艦明石を護衛しつつタロタロ島そしてシユーズ・ベラ島へ進出す
る。急ぎ出撃の準備を。初風と長良ちゃんを迎えに行こう。現時点
では大型艦の加古は別命あるまでこの場で待機。反攻作戦の準備だ
よ」

「それは良かったです。承知しました、司令。荒潮にも伝えすぐに支
度にかかります。しばらくは艦にいますので、なりがありましたら
……」

そう言って敬礼すると不知火は急ぎ足で去っていった。

——この不知火が秘書艦、この不知火が秘書艦、この不知火が秘書
艦……

不知火の脳裏をそんな言葉が無限ループしたが、不知火は自分の高
揚感を必死で押しとどめつつ出撃準備の段取りを考え始めた。

埠頭に一人だけになったトビウメ提督は湾内に浮かぶ重巡那智の
艦影を改めて目に焼き付けた。

——三ヶ月……。三ヶ月以内には必ず

トビウメ提督は一人、そう心に念じた。

その午後、連合艦隊司令部はブーメラン島の陸軍部隊救出のための
再度の反攻作戦準備令を発令した。

切れた生命線

喉の奥からせり上がってくる酸味。もう抵抗は無駄と観念し、トビウメ提督は思い切り口を開き目をつぶる。ついさつきまではおいしい「昼食」だったはずの物体をあらかた海面へ吐き出したトビウメ提督の背中をさすりながら、艦娘の不知火はため息をついた。

「大丈夫ですか？ 司令」

駆逐艦不知火の後甲板から身を乗り出して胃を空っぽにしたトビウメ提督は苦しそうに起き上がった。

「今日は……揺れるね。ああ、頭痛い……」

「もう船酔いは克服されたと聞いていましたが……」

「ごめん……平気だと思ったんだけど」

提督はうなだれた。そんな二人の様子を後ろ八百メートルから見ていた駆逐艦荒潮からすぐにもカチカチと信号が届く。

『ヌイヌイノ操艦ハ乱暴スギナイカシラー？』

もちろん不知火はこんな通信をわざわざ提督へ通訳したりしない。提督に気づかれないよう、たった三文字だけ信号灯で応答した。

『シ・ズ・メ』

ローリー泊地を発って十時間。臨時編成された駆逐隊は工作艦明石を伴って、白波たつ大平洋上にあつた。

「了解、駆逐艦不知火、目標に対処する。送れ」

不知火は突然そうつぶやくと、甲板に座り込んだ提督を力強く引き起こした。

「方位三五〇、距離六百の海面上に潜望鏡らしき影があるようです。不知火が攻撃します。また少し揺れますよ」

不知火が早口でそう言うと、提督は青い顔でうなずきよろよろと艦橋へと歩きだす。駆逐艦不知火が二十ノットに増速して面舵にきると艦はみるみる右へ傾斜する。

——うわ、気持ち悪い……

もう吐き出すものもなくなり、提督はやつこのことで羅針艦橋の後ろに位置する旗甲板へと這いあがった。

ポンツという破裂音とともに、仲間の駆逐艦からドラム缶のような爆雷が射出される。

「調定深度三〇、てえ！」

不知火のかけ声とともに、後甲板から乾いた発射音。投射器から打ち上げられた三式爆雷が右舷へ遠く放り出される。爆雷が沈んでしばらくしてから、海面が沸き立つとともに海面から空へ向けて滝が落ちるがごとく海水が吹きあがった。三つの爆発が収まったあとの海面には、爆発による水圧でのびた魚たちがプカプカ浮いていた。

もつとも今日に限っては、おかげのために魚をすくおうとする艦はいなかった。工作艦明石をつけねらう潜水艦を撃退する。連合艦隊司令部から明石死守を厳命されていて、どの艦も対潜護衛に真剣だった。

「ただいまの目標は流木と確認。脅威にあらず」

双眼鏡を覗いていたトビウメ提督は不知火に伝えると、旗甲板から羅針艦橋へ戻って椅子にぐったりと腰をおろした。

「爆雷、もつかな？」

「なんとかもたせませ。少し曇っていて視程がやや短いので注意しませんと」

提督の問いに不知火はそう答え、艦隊の中央を航行している工作艦明石の方へ顔を向ける。

「でも、明石さんが一つ返事で引き受けてくれてよかった」

トビウメ提督の要請を前に、予想通り司令部は判断を渋った。だが艦娘の明石はさも当然とばかりにあっさり承諾してくれたのだ。

「もちろん、いいですよ。戦闘以外ならこの明石にお任せください！」
あっけらかんとそう言って明石は笑った。

トビウメ提督の上申など、もとから突っぱねる腹づもりだった司令部も、明石のこの態度を前に、しぶしぶ明石進出を許可したのだった。末端の提督のなかには仲間の艦娘を前線に残してきたままにしている者も多く、明石の派遣は多くの提督と艦娘の願いでもあり、戦艦供出令にいち早く応えて司令部へ恩を売っていた提督からの強い働きかけもあって、司令部はやむなく許可したと言われている。

「ああそうだ、この艦にも一応小さな冷凍庫があったよね？　これ、入れといてくれる？」

トビウメ提督は海図台の下に置いた鞆から何やらをござと取り出した。

「し、司令、それは……パイン缶！　よく手に入りましたね」

不知火は、提督の取り出した三つの缶詰をまるで金塊の塊でも見るように目を丸めた。

「こっちはミカン。ローリー島の商店で偶然見つけたんだ。初風達へのお土産にいいかなと思つて。遅くなっちゃったしね……」

甘いものはどこへ行つてもありがたがられる。特に、物資の乏しい南洋ではなおのこと。フルーツ缶は艦娘の間ではご馳走だった。

不知火はトビウメ提督から受け取ったフルーツ缶を抱えてかすかに口元に笑みを浮かべる。

「確かに初風も喜ぶでしょうね。おや！　司令、察艦白露より発光信号。包囲〇一五、距離四五〇〇。海面下二艦影見ユ。敵潜水艦ノ模様。見ツケタノハ白露ガイチバーン」

不知火が右舷を航行する駆逐艦白露の発光信号を翻訳すると、提督はすぐに双眼鏡を手に窓際へと走り寄る。

「確かになんか見える」

「前衛の村雨より発光信号。ハイハイ、探信儀二感アリ。対潜戦闘スタンバイ、OKヨ。後方荒潮よりも信号、暴レマクルワヨ」

抑揚のない低い声で不知火はとつとつと読み上げる。トビウメ提督は双眼鏡の対物レンズを艦橋の窓に押しつけ、報告にあつた物体にピントを合わせる。群青色の海面の一部分にうつすらと黒い影が沈んでいるようだ。サイズはかなり大きそうだった。もしも敵の潜水艦なら一早く攻撃しなければならぬ。ただ……。

——いや、あれは間違いない！　ザトウクジラだ！

波間にかすかにのぞく光沢のある肌と尾ビレの影が見えた。

「前衛艦の村雨、夕立。攻撃にうつります。」

「いや、ちよつと攻撃待つて！　駄目だよ！　あれはクジラさんだよ！」

トビウメ提督はとっさに叫ぶ。

「え？ クジラですか？」

不知火は狼狽した様子で提督を見る。

「攻撃やめて！ ストロープ！ ああ、そんな……」

前衛の駆逐艦から発砲炎が上がるのと、トビウメ提督の悲鳴があがるのはほぼ同時だった。

数分後、トビウメ提督は脱力した表情で艦橋の魚雷戦方位盤にもたれかかった。

「大丈夫ですか？ 司令」

「ああ、ちよつと焦ったね……」

トビウメ提督は弱々しい笑みを浮かべてため息をついた

『不知火ちゃんの提督さんのせいで、クジラの大和煮、食べ損ねたっばい……』

『白露は鯨鍋がいつちばーん……だったのになあー』

『そうだね……。ちよつと失望したね』

『あらあら、散々な言われ様ねー、でもー、私もー鯨の唐揚げ、食べたかったわー』

僚艦は各々好き勝手に発光信号で愚痴をこぼすが、不知火は敢えてそれを提督には伝えないことにした。

幸いなことに駆逐艦夕立の放った砲弾は、そのザトウクジラより離れた海面に二本の水柱を作っただけですみ、そこへ割って入った駆逐艦不知火がなんとか砲撃を止めさせたのだ。砲弾の炸裂はクジラくらい簡単に引き裂いてしまうほど強力なのだが、当のザトウクジラは我関せずといった様子で、平然と光沢のある黒い背中を見せて鼻から潮を吹いた。その後、クジラは大きく尾ビレを見せつけて青く深い海へと潜っていった。

「司令はクジラがお嫌いですか？ その食べ物としての意味です……」

不知火は自分も内心では少しガツカリしていることを隠しつつたずねた。

「え？ うん……。僕にとっては、あれは食べる動物じゃないかな

……」

そう苦笑いを浮かべてトビウメ提督は双眼鏡を手にして立ち上がった。

「明石さんはどうしてるだろう？　大丈夫かな」

トビウメ提督と不知火は旗甲板へ出て、左舷後方を走る工作艦へと双眼鏡を向ける。

トビウメ提督が双眼鏡越しに、後甲板でなにやらスパナ片手に作業している明石を見つけた。

「あ、いた。なんかやってる」

双眼鏡の向こうの明石は、上機嫌に鼻歌でも歌っていきそうな表情でのん気な様子だ。

「不安になっていないのは良いのですが、少々警戒心が薄すぎるようですね」

提督と並んで双眼鏡をのぞき込んでいた不知火は少しイラっとした様子でつぶやいた。

まあいいじゃないかとトビウメ提督が笑ってなだめるが、一瞬後、不知火はものすごいきつい眼差しで北東の空を一瞥、そして自分の艦の後部マストへと視線を走らせた。そこには修理の際に新しくつけたおした十三号対空電探の空中線がある。同じ頃、トビウメ提督と不知火の立っている艦橋後部の旗甲板の真下にある電探室に据えられたオシロスコープのような画面は複数の波形が表示していた。

「司令、電探に感あり。方位〇三〇。距離三十八浬。目標は複数。高度はおよそ二百から三百。敵機の可能性があります」

同じく電探で異変を察知したらしい仲間の護衛艦も一斉に発光信号と信号旗を上げて航空機探知を告げる。

「ぜ、全艦、対空戦闘よーい！」

各艦のブザーが鳴動。トビウメ提督の号令一下、駆逐艦不知火も艦内ブザーを鳴らし、常設、特設を含む艦の全ての機銃座が一斉に予備動作に入る。

「密集隊形の輪型陣をとります」

トビウメ提督が明石の様子をうかがうと、さすがに不安になってき

たようで明石も心配そうに周囲を見回しながら艦橋へと走っていくところだった。

「なんとしても逃げきらないと……。防ぎきれぬかな……」

不知火は厳しい表情でつぶやいた。

「今の護衛艦の数では、厳しいでしょうね……」

不知火は電探室から自分の脳裏に届く敵機編隊の反射する電波像を感じて唇をかんだ。

——敵機は小型機。数は十機余り……。那智さん、もしも明石を守りきれなくなつた場合、せめて司令だけでもなんとかお助けしたいのですが……。那智さんならこんな時どうされるのでしょうか？

不知火は、明石の身を案じている自分の提督を見ながら思った。

そうする間にも護衛の各艦は対空用三式弾を各砲塔へ揚弾。起爆信管調整後、装薬とともに一斉に薬室へと装填する。

トビウメ提督と不知火は艦橋の天井によじ登り、東の空を見上げた。薄曇りの空に黒い点がいくつか浮かび上がってきた。最初に見えたのは雲の直下に数機、しばらくして低空域にも航空機の影が見えはじめた。すでに虫のような巡航形態ではなく、その影は攻撃準備を整えた航空機の形をしていた。

「一番砲塔追尾開始。各艦射程に入り次第、撃ちー方はじめ」

「了解……」

トビウメ提督は双眼鏡をのぞいたまま不知火に命じた。不知火の応答とともに、艦橋のすぐ前にある一番主砲がゆっくりと敵機めがけて旋回をはじめめる。バババツともものすごい破裂音とともに、各部の機銃が順番に作動確認のため数連射発砲し、曳光弾のすじが短く空へ吸い込まれた。

——二十機近く……。防ぎきれぬのか？

トビウメ提督は再び明石の方を振り返った。駆逐艦不知火は最高三十五ノットまで出すことができるが、護衛すべき工作艦明石の最高速力は十九ノットなので、それに合わせて艦を走らせるほかなかつた。当然速度が落ちれば的になりやすくなる。

提督は、明石から自分のかたわらで厳しい表情で空を見据える少女

へと視線を戻した。ふとこちらを見た不知火と視線が合った。

「司令、ご心配なく。司令と明石はこの不知火が必ず守り抜きます。だから司令は不知火のそばを決して離れないようにしてください」

「う、うん、もちろん大丈夫だよ」

顔を見れば全然大丈夫じゃないことがはっきりわかる。嘘はつけないタイプだ。不知火の口元には少しだけ笑みが浮かんだ。

敵機の群れはまっすぐ向かってこないで、はるか遠方で左右に広がってこちらを遠巻きに囲みはじめた。

通信機がツーツと電信を受電したのはそんな時だった。

『我、シューズ・ベラ基地航空隊。タロタロ泊地マデ貴艦隊を先導、直掩ス』

双眼鏡を覗いていたトビウメ提督が、敵機と思っていた機体の翼や胴体に大きな赤丸を認めたのも同時だった。

「あの飛行機、日の丸がある。仲間だよ！ 全艦撃ち方やめ！」

「司令、通信受電しました。シューズ・ベラ島から飛んできた護衛機です」

不知火は少し安堵したような声で言った。

戦闘態勢を解いて合図を送ると、比較的低空にいた編隊がそばへとやってきた。それは上半分は濃い緑色、下半分はグレーに塗装された九七式艦上攻撃機だった。

「胴体に白帯が一本、第五航空戦隊の翔鶴航空隊所属機ですね。艦載機を臨時編成して基地航空隊にしたようです」

と不知火が言った。

シューズ・ベラ島から飛んできたと聞き、トビウメ提督は思わず空の飛行機へ手を振った。もつとも航空機のコクピットに誰も座っていないことはトビウメ提督も知っていた。シューズ・ベラ島にいる艦娘の思念によつて操られ、ここまで出迎えに来てくれたのだ。その同じ島に初風や長良がいると思うとトビウメ提督は自然と手を振らざるをえなかった。すると、一番近くを飛んでいた艦攻が大きくバンクしてそれに応えた。

——一航戦の機体は手を振っても見向きもしないと聞いていまし

だが、五航戦はそうでもないようですね

機体の腹には黒い250キロ対潜爆弾が二発取り付けられていた。少し高い高度にはグレー一色に塗装された戦闘機の編隊もいる。

「見てぬいぬい、あれゼロ戦だよ」

トビウメ提督が嬉しそうに言うので、不知火はうなずいた。

「ええ、そのようです。気を抜きすぎてはいけません、潜水艦も敵機もそうやすやすとは近づけないでしょう」

不知火は上空の直掩機を見上げながらそううなずいた。

シューズ・ベラ島からやってきた艦載機は、艦隊がタロタロ島の半月湾へ入港するまで、入れ替わり立ち替わり、つきつきりで護衛してくれたのだった。

タロタロ島の軍港がある半月湾にトビウメ提督達が到着したのは夜になってからだった。設備も整っている島なので、残されていた艦の修理も少しずつ進んでいた。湾には着底している艦がまだ多く放置されていたが、先日ここを発った時より混乱は緩和されていて、座礁した船はクレーンで引き起こされ修理を待っていた。

工作艦明石は湾の中央に錨をおろすや、すぐにも損傷している艦を両舷に横付けさせて修理をはじめた。

燃料補給の算段をつけるために基地の司令部へ行っていたトビウメ提督はそこで、意識不明だった金剛が三日前から意識を取り戻し、順調に回復しつつあるという話を聞いた。艦の修理がほぼ完了して、戦艦扶桑と並んでバースに係留されている。

少し足取り軽く不知火と荒潮の待つ棧橋へ戻ってきたのはもう夜も更けたころだった。

「艦娘と基地の人達が、明石を連れてきてくれたからって、ささやかな歓迎会を開いてくれるって。僕たちは明朝出発だから長くは楽しめないけど、ちよつと行って何か食べて来たら？」

「あらー素敵、せっかくだから行きましょーよ？」

荒潮が嬉しそうに声をあげて不知火を誘う。

「うん、そうしておいで。明石さんもちよつとだけ顔出すってさ。白

露型の子達はもう来てたよ」

「司令はいかがされるのですか？」

「僕は行かないよ。そういうの苦手だし……。それにシユーズ・ベラ島に運ぶ貨物の積み込みがあるから、それを見届けたら少し寝ようかな」

工作艦明石はしばらく、タロタロ島にとどまっていた艦の修理を終えてからシユーズ・ベラ島へ進出することになっていたので、トビウメ艦隊は一足先にシユーズ・ベラ島へ行く許可をもらっていた。先の海戦で敗れて以来、輸送船の往来も危険と判断され、シユーズ・ベラ島との定期連絡船も運休している状態だったので、いち早く誰かが物資をもって救援する必要があったのだ。トビウメ提督はすぐにその任務を希望したのだった。

「そうですか、では不知火もご一緒します」

不知火はそう言って、埠頭の岸壁から動こうとしなかった。

「あらー、二人ともノリ悪いのねー」

「気にせず行ってきてください」

「そう、食べるのも戦のうちだよ」

不知火と提督がそう言うので、荒潮はなんかモヤモヤするわーと言いつつ基地司令部の方へと歩いていった。

提督と不知火が内火艇で艦に戻ると、港の倉庫の方から積み荷ののせたバージ(はしけ)を曳いてタグボートがやってきた。灯火管制下、限られた照明のもとで作業をしなければならないので、不知火と提督が心配そうに見守る中、バージに装備されたデリックがシユーズ・ベラ島へ届ける貨物をモツコごとで吊り上げ、駆逐艦不知火の後甲板へとおろしはじめた。

不知火が甲板へ飛び降りて、港の作業員達へ荷物の置き場を細かく指示する。しばらくすると砲や機銃の邪魔にならないスペースは袋や網でまとめられた物資で一杯になった。

駆逐艦不知火への荷役が終わると、タグボートとバージは隣に錨泊している駆逐艦荒潮に横付けした。艦の主がないので、トビウメ提督が荷役に立ち会うことにした。作業員達の手際はとても良かった

が、バージ二つ半を二隻の駆逐艦の駆逐艦に積み込んだときにはもう夜も遅くなっていた。

自分の艦で休んでいればよいのに、艦娘の不知火は荒潮への荷役が完了するまで、ずっと提督のとなりで荷物の配置や固定を監督していた。

タグボートとバージが去り、駆逐艦不知火艦上は再び提督と不知火二人だけになった。

「ああー、疲れた！　なんか食べて寝よう」

トビウメ提督はくたびれた様子で艦橋前の甲板にデッキチェアを引っぱりだした。

不知火は調理室で急ぎうどんを茹でて、どんぶりを両手に甲板に戻ってきた。乾燥麺を茹でた掛けうどんに、薬味にフリーズドライのネギを出汁でふやかしたただけの簡単な夕食だ。

「やけにうまいね」

トビウメ提督がしみじみと言った。

「空腹がそう感じさせているだけでしょう。ほんとうならもつとマシンなものを作るのですが、あいにく時間がありません」

不知火は通風筒の上に座ってどんぶりの麺を手繰る。

「いやいや、今はこれで十分」

そう行つてがつついて麺をすするとトビウメ提督を前に不知火はかすかに微笑んだ。

「あー、お腹も膨れたし、僕はここで休むよ。陸地に戻るのも面倒だし、停泊中の艦内は暑いでしょ？　風があるから少しは眠れるかな」

トビウメ提督は食べ終えたどんぶりを置くとデッキチェアの上に寝そべって両手足を大きく伸ばした。

「どうせなら艦長室に寝台がありますので、そちらで休まれたら？　窓を開ければそれなりに涼しいですよ」

「いいよ、いいよ、気にしないで。ほら、天の川があんなにくつきりとこの世界にも天の川があるんだね」

不知火が空を仰ぐと夕方まで曇っていたはずの空は満天の星空だった。

「そうですね。この世界も前の世界と同じくらい自然は美しいと思います」

不知火はそうつぶやいてデッキチェアへ目を向けると、トビウメ提督はもう目を閉じて寝息を立てていた。

「こんなところで寝てしまって、マリアにかかっても知りませんよ……。それに荒潮が見たら何と言うでしょう……」

不知火は困ったように言うのと、どんぶりを片づけてから毛布もってきて提督にかけ、艦橋と第一砲塔の間に手早く天幕を張った。このあたりは夜だけは涼しい。それに南洋の天気は変わりやすく、いつスコールに見舞われるかわからない。

——さて、不知火も少し休息しましょう

普段なら士官室か艦長室で休むのだが、少し悩んでから不知火は艦内からデッキチェアをもう一つ引っ張りだしてトビウメ提督の隣へと広げる。そして毛布をかぶって自分もそこに横になった。

「おやすみなさい、司令」

そう声をかけ目を閉じると不知火は、あつという間に眠りに落ちた。

荒潮が自分の内火艇で艦へ戻ってきたのはそれから二十分後のことだった。

「すっかり遅くなってしまったわー。司令官達はどうしたかしらー」

自分の艦への荷役が終わっている様子を見て荒潮は駆逐艦不知火の舷梯へと内火艇を寄せた。

——せめてお礼くらい言わないといけないわねえ

艦はすっかり静まり返っている。

「あらあら、なんか大変なことになってるわあ……」

甲板に仲良くデッキチェアを並べて寝ている二人を見つけて荒潮は思わずそう口にしたが、二人とも起きる様子はない。

——このまま自分の艦に戻るのも、ちょっと嫌よねー

荒潮は艦内を物色して毛布とハンモックを見つけてくると、二人に並ぶようにそれを吊し、横になった。荒潮も一度、色つぼくあくびをすると間もなく寝付いてしまった。

波の音とジャングルの虫の音が遠く響いている。南洋の夜は静かに更けてゆく。

そして、翌朝目を覚ました不知火と荒潮の間で一悶着あったのはまた別の話である。

一方、タロタロ島の北東にあるシューズ・ベラ島では眠れぬ夜を過ごしている艦娘がいた。トビウメ艦隊の駆逐艦娘初風だ。

体が回復してからというもの、艦娘たちと島民有志はジャングルを開墾して畑をつくる作業に追われていた。連合艦隊がこの海域から撤退し、タロタロ島からの連絡船も途絶えてから島民達の対応は早かった。長期戦に備えて食料自給の準備がはじまったのだ。

「なによ、いくら船が来ないからって、ちよつと慌てすぎじゃない。連絡船が来なくなつてまだ一週間よ……」

麦わら帽子に作業着という姿で土を掘り返していた初風は小さく愚痴をこぼす。なるべく肌の露出を減らして、強い日差しと蚊の襲来を防ぐのだ。

「ねーちゃん、腹減りすぎて互いガリガリかじり合うようになつちまう前にイモつくつとかねーと、手遅れだかな。ささ、手え動かす、動かす」

となりで木の根を引っこぬいていたおじさんが言った。初風はため息をついて作業にもどる。

「フッフ、言い込められてしまったわね……」

麦わら帽子にサングラス、さらに顔には手ぬぐいが巻かれ一見誰だか判らない姿で土を耕している早霜が静かに笑う。初風はほつといてよと言つて作業にもどると、突然、島中の拡声器からサイレンの音が鳴り出した。

「いっけね、空襲警報だ！ 皆ジャングルに隠れろ！ 早く！」

島民も艦娘も一斉に走り出して、林冠に覆われた茂みのなかへと身を潜める。飛行場のほうからはエンジンを唸り声があがり、ゼロ戦数機が空へあがっていくのだけが見えた。じつとジャングルの中で身構えていると、港の方から高射砲の砲声が断続的に鳴った。上空を何

かが飛んでいる音がかすかに聞こえる。森の中にいると空で何が起きているのかまったく分からない。何かで地面のそこを叩くような揺れがおきてから、飛行場や町の方からものすごい爆発音が数回聞こえてきた。その後も高射砲が何発も撃ちまくっていたが、しばらくして突然静かになった。

——ど、どうなったのかしら？ 町や港は大丈夫かな……

しばらくして、警報解除ー！という声が聞こえてきてみな安心したように立ち上がり作業へと戻った。

「翔鶴ちゃんの飛行機が全機撃ち落としてくれたみたいだぞ。飛行機が飛べるうちはこの島も大丈夫だろう」

一輪車で土を運びながら島民の一人が教えてくれた。

空襲が一段落すれば、再び気になってくるのは猛烈な湿気と暑さ、まとわりつく蠅と蚊の襲来だ。初風がだらだらと汗を流しながら黙って土壌を掘り返していると、突然隣にいた早霜が手にしていたクワを落つことし棒のように倒れた。

「ちよ、ちよつと早霜！ 大丈夫！」

初風は慌てて駆け寄る。

「あっちゃー、また熱射病か。おーい誰か、病院つれてってやれ」

隣にいたおじさんがため息をついて、倒れた早霜を抱き起こす。一緒に作業していた数人が早霜に肩を貸して病院のある方へ連れていった。早霜はなにも答えず微動だにしない。まるで死んでいるみたいだった……。

初風は首に巻いたタオルで顔中の汗を拭いながらつぶやいた。

「この暑さじゃ無理ないわね……」

日が傾き、作業が終わると次の受難が初風を襲う。いつも元気いっぱいいる長良先輩だ。

「やっぱり畑仕事も海戦も体力勝負だよ、初風ちゃん、少し涼しくなってきたし暗くなる前にジョギングに行こうよ！」

この島に来て益々健康的に日焼けした長良が微塵の悪気もなく言った。その誘いを断る元気は初風には残っていなかった。

島を一周するコースで一緒に走り出した方がいいが、長良に大差を付

けられ、初風がふらふらになって港に戻ってきた頃には空は暗くなっていた。

——わたしも熱射病になってしまえばいいのに。荒潮や不知火達は どうしてゐるかな……

ふと仲間のことを考え出すと、急に涙がこぼれてくる。誰かに見られては恥ずかしいので、初風は手ぬぐいで目元を拭うと、とぼとぼと港へ戻ってきた。

「あら、初風ちゃん。今日も大変だったわね」

声をかけたのはナース服を着た翔鶴だった。

「さつきから探してたのよ。実はね、今日艦載機の子達に周辺の哨戒をさせていたらローリー島からタロタロ島へ工作艦の明石がやってきたの。その護衛には駆逐艦の不知火と荒潮もいて、明日この島まで生活物資を持って来てくださるんですって！ よかったわね」

そうやって翔鶴は驚いて言葉もでない初風の頭をやさしくなでた。

「不知火と荒潮が来る……」

「ええ、初風ちゃん達の提督さんも一緒よ。艦載機の子達にもずいぶん手を振ってくれたみたい」

「そう、そうなんだ……。翔鶴さんありがとう！」

初風はそう言って頭を下げると、スキップするように自分の宿舍へと戻ってきた。部屋にはひょうんなことからルームメイトになってしまった早霜がベッドに横になっていた。

「お帰りなさい……。昼間はごめんなさいね……」

「生きていたみたいで安心したわ」

初風はそう憎まれ口をきいて笑った。

「何か良いことでもあったのかしら？」

初風はボンッと自分のベッドに飛び乗るとうれしそうに笑った。

「明日、不知火と荒潮がここへ来るの。もうタロタロ島まで来てるんですって。司令官も一緒に……」

目元だけ掛け布団の上に出していた早霜の目が一瞬驚きで大きくなってから、その眼差しはとてもやさしいものに変わった。

「そう……それはよかったわ。早く明日になるといいわね……」

「そうね、ああく早く明日にならないかなあ」

初風はそう言ったが、心が躍るあまり初風は夜が更けてもベッドのなかでなかなか寝付くことができなかった。

Supplying War

シユーズ・ベラ島への救援物資を満載した駆逐艦不知火と荒潮は日の出と同時に抜錨、静かに港を出た。しばらくすると、またもゼロ戦と九七艦攻が上空援護につく。

艦橋の屋根で援護の艦載機を見上げていた不知火が言った。

「あの艦攻は対潜用の磁気探知機を積んでいない通常の攻撃機です。哨戒能力はあくまで目視相当でしょう。こちら警戒を怠らないようにするべきかと。那智さんならきつとそう進言するのではないでしょうか」

不知火が言うので、提督もうなずいた。

「そうだね、ぬいぬいの言うとおりでね」

上空援護の甲斐もあり、数時間後に二隻は何事もなくシユーズ・ベラ島の近海へとやってきた。

「初風、きつと怒ってるだろうな……」

駆逐艦不知火の前甲板からうっすらと見えてきたシユーズ・ベラ島を眺めていたトビウメ提督がつぶやいた。

「連合艦隊の転進後、最初に戻るのが不知火達です。一番に迎えに来たのだから、そんなに怒ったりしないでしょう」

「そうだといいんだけど……。思っていた以上に戻るのが遅くなっちゃったね……」

二隻だけのトビウメ艦隊が港の外防を越えて湾内に入ると、埠頭にはすでに黒山の人だかりができていた。

「な、なんだろう、あれ？」

予想外の出迎えにたじろぐトビウメ提督とは対照的に、砲塔の上に飛び乗った不知火ははにかんだように笑う。

「みんな見捨てられたと思っていたので、うれしいのでしょうか」

「一応、ちゃんとした服にしとく」

半袖の防暑服を着込んでいたトビウメは慌てて着替えるために艦内へと戻った。

タグボートの指示で二隻の駆逐艦が埠頭から数十メートル離れた

場所に錨をおろすと、すぐにバージを曳いたデリック船が隣にやってきました。

「ようこそ！ よくきてくれました！ 荷揚げはこちらで行いますから、迎いの内火艇で港へどうぞ。ただし、すぐに動けるよう機関の火は絶対に落とさないください。あと、錨はすぐに切断できるようにお願いします。空襲に備えてすぐ動ける準備だけはしておいてください」

タグボートに乗った作業員からそう言われ、トビウメ提督と不知火は顔を見合わせた。

「やっぱり最前線、だね……」

「そうですね。タロタロ島のようにはいきません。荒潮にも注意しておきます」

「うん」

トビウメ提督は湾内に放置された真つ黒焦げの駆逐艦の残骸を振り返った。空襲で破壊された艦だとすぐにわかった。トビウメ提督は湾の反対側の岸壁に並んで係留されている軽巡と駆逐艦へと目をやる。ここを去るときと同じで上部構造がメチャクチャに破壊され、少し錆が浮いているが、舷側にははつきりと「ゼカツハ」の文字が白くペイントされていた。その向こうの軽巡は長良にちがいない。提督の口元に安堵の笑みが浮かぶ。

内火艇から埠頭へ上がった提督と艦娘二人に歓迎の人々が襲いかかった。

「戻ってきてくれてありがとう！」

「よく来てくれたな！」

「信じてたよ！」

心ならずも一度は見捨てたも同然の仕打ちをした相手からの予想外の歓待ぶりに、トビウメ提督と不知火はかなり戸惑いながらその歓声に応えた。

「あらあら、大層な歓迎ぶりね〜」

何事にも余裕の笑みを浮かべて優雅に対応する荒潮が一緒だったことが二人には救いだった。

三人は蘭の花でつくつたのフラワーリースを首にかけられ、港湾局の職員や艦娘達の出迎えをうけた。

——まるで表敬訪問したお偉いさんになったみたいだ……

対人恐怖症のトビウメ提督はひきつった笑みを浮かべながら手を振る。

「遠路はるばるお疲れ様。航空母艦の翔鶴です。驚かせてしまい、ごめんなさい。でも、みんなうれしくて仕方がないんですよ」

銀髪に真っ白なナース服がまぶしい艦娘の翔鶴が出迎えると、トビウメ提督はさらにどきまぎとして挨拶した。

「いやあ、その、あの、この度は上空援護ありがとうございました。その、と、とても助かりました」

——すこし鼻の下が長くなりすぎです、司令

不知火はツーンと顔を背けた。

「最前線なので、何もおもてなしできませんが、くつろいでいってくださいね」

「いやそんな、僕たちは救援に来たんですから……」

トビウメ提督は恐縮して言った。

「提督、待ってたよ！ 迎えに来てくれるって、信じてたよ！」

人波をかきわけて走ってきた艦娘は長良だった。さらに日焼けしたうえに、なぜかいつも以上に元氣そうだった……。

「長良さん、お元氣そうでなによりです。遅くなってすみません」

「そうね、でも無事に会えてよかったわ」

艦娘三人は再会を祝って手をつなぐ。

「つらい思いさせてごめんね。もう大丈夫だよ」

すると長良はけろりとした顔で首をふった。

「全然、そんなことないよ！ この島、結構走り甲斐あるし、農作業もけっこういいトレーニングになるし、楽しいよ！」

「そ、そう、な、ならよかった」

——初風はどこだろう？

トビウメ提督はあまりに平常運転すぎる長良に少し呆れつつ、人混みのなかから初風の姿を探すがなかなか見つからない。

「今週中に僕たちが護衛しながらタロタロ島までの連絡船を再開させます。来週には工作艦明石も進出してくる予定です」

トビウメ提督が基地の関係者や島民達に伝えると、皆歓声をあげた。こんな些細なことでもこれだけ喜ぶということは、連合艦隊の撤退を知らされた際の人々の落胆をどれほどだったのか、那智の言葉を思い返してトビウメ提督は少し辛くなった。

「おーい、最初の積み荷が揚がったぞー!」

埠頭からそんな声がかかると、それまでトビウメ提督達をもみくちやにしていた人々が一齐に埠頭へとかけだした。

「慌てるな、慌てるな! まずは一一人一個ずつ。全員にまわるようにー!」

慌てて憲兵がその整理に追われることになった。

残された三人は呆気にとられて顔を見合わせる。

「なんだかんだいって、食い気よね〜」

「これが世の理ですね」

「ま、まあこれでいいんじゃないかな……。あはは……」

提督は少しほっとしたように苦笑いを浮かべる。

「まったく恥ずかしいわ。ごめんなさい、島みんなは長期戦を覚悟して質素節約していたから」

翔鶴が三人にそうわびるので、提督は首を振る。

「いや、気にしないでください、ほんと。あやまるのはこっちです。ところで、うちの初風はどこにいますか?」

「え、初風ちゃん? 変ね、さつきまでその辺に……」

「司令……」

翔鶴が周りを見ると、不知火が左手にある倉庫の方を見て声をかけた。

見れば木箱に腰掛けていた初風が立ち上がってゆつくりとこちらに歩いてくる。ここを去るときに巻いていた包帯も今はなく、元気そうな様子に提督は安心した。

「初風ちゃん、皆さんのこと、本当に首を長くして待っていたんですよ。どうか労ってあげてくださいね」

翔鶴はそう言うのと病院へと戻っていく。

一方、初風はすました顔でやってくると、いつもと変わらぬ尊大な態度で腰に手を当てた。

「来たのね……。随分待ったわ」

「ご、ごめん。すっかり遅れちゃったね……。ははは……」

「無事な様子で何よりです」

初風は三人を一瞥してから、つかつかと荒潮に近づくと、不意に抱きついた。

「もう会えないと思ったわ……。ほんと、あたしが……。どんだけ、どんだけ待ったと……。うわぁーん」

最後は鳴き声で何を言っているのかわからなくなった。

「あらあら、困ったわね。みんな見てるわ」

抱きつかれた荒潮も初風の背中をさすりながら精一杯の照れ笑いを浮かべて言う。

「もっと早く来るはずだったのに、遅くなって悪かったね。もう大丈夫だよ、あいたー！」

荒潮に抱きついて泣く初風をトビウメ提督がなだめると、突然、初風が提督の向う脛すねを思い切り蹴った。

「遅すぎんのだよ！ 見捨てられたと思ったじゃない！ ぶつわよ、叩くわよ！ もう一人は嫌よ！ じれーがーん、じれーがーん、ワァー」

初風はトビウメ提督の腹に抱きつき、さらに激しく泣き出した。

「ごめんごめん、もう大丈夫だから」

トビウメ提督もやさしく声をかけながら初風の背中を叩く。すると横で見っていた不知火がトビウメ提督の制服の袖を軽くチョンチョンと引っ張った。トビウメ提督が顔を向けると、不知火は無言で自分の頭をコツコツと指さした。

——あ、そうか

提督は無言でうなずき、泣きじゃくる初風の頭を何度も撫でる。

「ありがとう、無事でいてくれて……」

初風はさらに声を上げて泣き、提督に自分の顔を押し付けた。提督と不知火は顔を見合わせて不器用に笑う。荒潮と長良もやさしい笑

みを浮かべて泣きじやくる初風を見守っていた。

「司令、ちよつとすみません……」

突然、不知火はそう言うと、ゆつくりとサゴヤシの木陰へと歩いていく。

——おや、あの子はたしか……

木陰には、長い黒髪に顔が半分隠れた、色白の艦娘が立ってこちらを伺っている。

不知火はつかつかと歩いてゆくと、その駆逐艦娘、早霜が声をかけた。

「やっぱり来たのね。信じていたわ」

「当然です」

不知火は表情を変えずに応える。

「初風さん、本当によかったわね……」

「ええ。早霜も無事でなによりでした」

「あら……。わたしなんかの心配をしてくれたというの？」

早霜がかすかに口元をほころばせ、試すように尋ねると、不知火は鼻で笑った。

「いいえ。不知火は、早霜という艦がどれだけしぶといかを知っています。これしきのことので心配などしないわ。ただ……また会えてとても嬉しいです」

「私もよ、不知火さん」

二人の艦娘はぎごちなくお互いの手を握った。

新調して間もなく足柄にカラーをつぶされ、この島では初風の涙とゆだれ、鼻水でぐしょぐしょになったトビウメ提督の第二種軍装はまたもクリーニング送りとなり、すぐに防暑衣に着替えた提督は不知火にパイナップとミカン缶を甲板に出しておくよう頼んだ。

熱帯の太陽に焼かれ、冷凍庫でコチコチになっていたフルーツ缶はわずか二十分で食べごろの状態まで溶け、二人はそれを抱えて内火艇で陸へと戻ってきた。

倉庫の軒下に腰掛けたトビウメ艦隊の仲間はフルーツカクテルで

ささやかに再会を祝うことにした。

トビウメ提督が缶切りで手際よく缶をあけると、それぞれが持ち寄った飯ごうの中ぶたに、ミカンと輪切りになったドーナツ型のパインの果肉をよそい、その上に程良く冷えた缶詰のシロップを注ぐ。

「提督、フルーツの缶詰なんてどこで手に入れたんですか？ ああ、甘い！」

目を輝かせて長良がたずねる。

「そうよねー、わたしだって司令官とぬいぬいがそんなものを隠していたなんて、まったく気づかなかったわー」

「ローリー島の露天で見つけたんだ。本当は羊羹を持ってきたかったんだけど、手に入らなくて……。今ナタデココの缶詰も開けたから。長良ちゃんも初風には大盛りサービスだよ」

艦娘たちが食べ始めたので、自分も少しだけ食べようとトビウメ提督がスプーンを持つと、再び不知火が提督のシャツを軽く引つ張った。顔を上げると不知火が遠くを指さす。その先には資材小屋の陰からこつちを見ている早霜の姿があった。

——またあの子か……

相変わらず薄気味悪い印象は拭えないものの、放っておくわけにもいかず、トビウメ提督はこちらに手招きした。すると、その艦娘はコクリとうなずくと倉庫の軒下へとやってきた。

「え、えっと確か早霜ちゃんだっけ。君も無事で良かった。フルーツの缶詰だけど良かったらどう？」

すると早霜はフフフと根暗そうに笑う。

「わたしにも気を使ってくれるなんて、不知火さんの司令官はやさしいのね、フフフ、フフフ」

——そんな大げさな……

提督は少し面食らいながらも、自分用によそっておいたフルーツを早霜に差し出した。量が少ないと思っただのか、すぐに不知火が自分用によそった飯盒の中ぶたのフルーツを少しとりわけける。

「早霜じゃない。さあ、こつちに来て座りなさいよ」

初風も気安い様子で早霜に木箱の上に座るよう促した。

「程良く冷えてて美味しいのね……」

早霜も控えめながら、フルーツを美味しそうに口に運んでいる。

「司令、すみません」

フルーツを全部早霜にあげてしまった提督を気遣って不知火が謝るが、提督は笑って首を振った。

「僕は大丈夫。そのかわり一番冷えてるのもらうよ」

そう言ってトビウメ提督は、足下に置かれた氷で満たされたオスタップ（金だらい）からラムネ瓶を一本手に取った。栓のビー玉を押し込むと提督は美味そうにラッパ飲みして見せる。

久々に駆逐艦全員が揃い、ちよつとおつかない早霜も含めて楽しそうな様子なので、トビウメ提督はカメラを向けてシャッターボタンを押す。カシャリというシャッター音に気づき、ファインダーの真ん中でとりとめもない会話に興じていた初風が赤くなって口をとんがらせる。

「ちよつと、いきなり撮らないでよ。心の準備ができてないでしょー」

「でも、初風さん、今日はとても元気ね……フフ、フフフ」

「そうだねー、なんか今日はいい笑顔してるよね」

早霜と長良が口々に言うので、初風は首をぶんぶん振って否定する。

「そんなことないわ！ 変なこと言わないでよ！」

一同が笑う。不知火すら幾分リラックスしたように、滅多に見せない笑顔になっていた。

「そういえば、那智さんと加古さんはもう修理できたの？ 那智さんも、艦を置いて本人だけは来ると思っただのに」

事情を知らない長良が無邪気にたずねた。トビウメ提督には、その一言が和気藹々とした空気を一刀両断するように感じられた。

「いや、その、那智さんは、あの、ちよつと都合で艦隊を離れることになって……。それで、今はその……」

困惑してまったく要領を得ないトビウメ提督の言葉に、事情を知らない初風は矢継ぎ早に質問を浴びせる。

「ええ、都合って何よ？ 離れるって、意味わかんないけど」

「あの、初風ちゃん……。ちよつと」

さすが別の艦隊から出向してきている軽巡だけあつて長良は何かを察したらしく、提督にあれこれ聞く初風をなだめた。早霜は黙ってじつとトビウメ提督と初風を見つめている。荒潮も笑顔のまま言葉が見つからないらしく黙っている、不知火が毅然と言った。

「あくまで戦術上の要請から、司令が判断されました。第二次反攻作戦の準備令が発令されたことは知っていますね。この遊撃打撃艦隊の秘書艦はこの不知火が勤めます。いいですか？」

「なによ、秘書艦はじめてのくせ板に付きすぎじゃない……」

そう初風が不満そうつぶやいたので、荒潮も笑いながらうなずいた。

「そうねー、ぬいぬいに先を越されたのは、ちよつともやつとするわね」

またいつものゆるやかな空気に戻り始めたのでトビウメ提督は少しほっとした。

——ありがとう、ぬいぬい

トビウメ提督が心中で不知火に感謝するのと、拡声器が空襲警報のうなり声を上げ始めたのは同時だった。和やかな再会の宴は唐突に幕となり、皆一斉に真剣な顔で空を見上げた。

「不知火、荒潮、急ぎ艦に戻って対空戦闘準備。同時に錨鎖を投棄し、速力最大で回避行動はじめ。えっと初風達は……動けないね。とにかく防空壕とか安全な所へ」

——罐の火を落とすなつていうのはこういうことか
トビウメ提督はそう痛感しながら、不知火と荒潮の後を追って埠頭へと走り出す。

すでに迎撃のゼロ戦のエンジン音が空に響く。三人は内火艇に飛び乗ると、もやい綱を放りだして艦へと進む。普段は意識しないが、こういう時、内火艇という乗り物はとてもじれったく感じられる。

——ああ、これが高速モーターボートだったらなあ

そういう間に島内にある対空防衛陣地の高射砲が数発打ち上げた。青い空に真っ黒な花が咲く。

もう少しで艦に着くというところで、島の反対側の方角から真っ黒な双発機が右エンジンから黒煙を吐きながらゆつくりと北の方へ高度を下げて飛んでいった。その背後から日の丸をつけた灰色のゼロ戦らしき機影が三機、双発機に追いつがっていく。それらが島の稜線の向こうに姿を消してから、陸の方から警報解除ー！と叫ぶ声が聞こえてきた。

「今は無事に済んだようですね」

内火艇の舵輪をにぎったまま不知火が少し緊張を解いて言った。

「うん、よかった」

トビウメ提督はそれに応じてつぶやいた。

——確かに最前線か……。那智さん、初風と長良ちゃんを迎えに来るの、なんとか間に合ったよ。

トビウメ提督は眼前の現実をかみしめながら、敵機が空に残していった煙の筋を見上げていた。

ラポール港

那智は倉庫の裏で足柄を何度も叱りつけ棧橋に戻ると、もうそこにはヤムヤム島泊地のメンバーの姿はなかった。お互い明日をも知れぬ身で、別れの挨拶くらいしつかりやつておきたかったが、足柄のおかげであまり余計なことも考えず状況が流れていくことに、那智は少しほっともしていた。

那智は新しい艦隊に合流するため、自分の内火艇のあるポンツーンまで歩いていくと、そこに新しく自分の司令官となったマツエダ提督と重巡艦娘の高雄、それに駆逐艦娘三人が那智を待っていた。「そろそろ出港だが、まだ紹介が済んでいなかったね。今日から新しく仲間になった重巡の那智君だ」

駆逐艦娘達は軽く会釈する。三人のなかでは一番大人びた印象の、ベレー帽をかぶった艦娘が最初に自己紹介した。

「あ、あの、春雨といいます。よろしくお願いします」
「どうも引つ込み思案のようで、その駆逐艦娘はか細い声でそう言う」と深々と頭を下げる。

一方、隣の一回り小柄な艦娘は、なんとも堂々とした様子で呟いた。
「菊月だ。これからよろしく頼む」

なんとも尊大な物言いをする菊月の頭を隣の黒髪の艦娘が無理矢理押し下げた。ゴキッと首から不穏な音が鳴る。

「ダメですよ菊月。ご挨拶はちゃんとしないと。えっと、睦月型の三日月です。那智さんは前の世界でも、こちらでも歴戦の艦ですよ。これからは、是非いろいろ教えてくださいね」

そうやって三日月は丁寧にお辞儀する。
「いきなりやめくれ、結構痛いんだぞ……」

首を変な方向にひねったらしく、菊月は涙目になって抗議する。さっきの威厳はどこにもない……。今にも泣きそうな菊月を、春雨は心配そうなだめる。

そんな駆逐艦娘達を笑顔で見ていたマツエダ提督は那智言った。
「うちにはあと、巡洋艦娘二人と駆逐艦娘が一人、それにこれから君と

交代する戦艦娘が一人いるが、泊地に戻ったら紹介しよう」

「じゃあ、那智さん行程をご説明しますね」

マツエダ提督のわきに控えていた高雄が那智に海図を見せて行程を説明した。

「途中ニューガリア島のラポール港で給油、その後メジロ島まで北上します。航路の制海権はこちらにあります。敵の潜水艦が浸透している可能性もあるので注意していきましょね」

「那智君、メジロまでは高雄を先頭に単縦陣で進む。今回は後ろをついてきてくれればいい」

マツエダは笑顔で那智に言った。那智は承知して海図を受け取り、自分の内火艇で艦へと戻った。

内火艇を甲板へ吊り上げて羅針艦橋へ上がると、すでに睦月型駆逐艦二隻がゆつくりと環礁の出口へ向けて動き出していた。汽笛が鳴り、クレーンの陰から重巡高雄の巨大な艦橋が現れた。那智は艦の状況を確認してから、艦に抜錨を命じると、鎖巻上げ機が大きな音をたてながら錨を引き上げた。

那智は今一度、棧橋を振り返る。見送る者はない。後ろ髪を引かれる思いをせずにすんだので、那智は心なしかホッとして、艦のスクリューをゆつくりと回し始めた。そうして重巡那智は高雄に続いてローリー泊地から外洋へと出港した。外洋に出るまでもう島の方を振り返ろうとはしなかった。

「提督、少し休憩にしませんか？」

重巡高雄の羅針艦橋に詰めていたマツエダ提督に艦娘の高雄は氷の浮かんだレモネードを差し出した。

「ああ、ありがとう。高雄ちゃん」

マツエダ提督はコップを受け取り、第一煙突の左舷から、後ろに続く重巡那智の姿を見つめた。

「船体のシルエットは高雄型に似ているね」

「ええ、妙高型の拡張発展型が私たち高雄型です。言うなれば、わたし

たちのお姉さんともいふべき存在ですね」

「そうか……」

マツエダ提督はレモネードを飲み干し、白波を立てて進む後方の重巡洋艦を眺めていた。

「あ、あの、提督、なぜ那智さんをうちの艦隊に？」

「え？」

遠慮がちにたずねた高雄に、提督は虚をつかれて戸惑った表情を浮かべる。

「いや、なんていうか、その、なんかいいなって思ったんだ。ローリー島で君が愛宕君と食事に行った夜、たまたま出会ったんだが、軍功をあげたのに、なんだかとても悲しそうに見えた、うちへ来たらもつとよくしてあげられるのにと思ったんだ」

「そ、そうなんですか……。そ、その、はやくうちの艦隊に慣れてもらえるといいですね」

「そうだね」

ややぎこちなく言う高雄に気づく様子もなく、マツエダ提督は後方の重巡那智を見つめていた。ローリー島で芽生えた高雄の中の小さな不安が少しだけ大きくなった。

一方、後方七百メートルに位置する重巡那智の羅針艦橋では、艦の主が一人、前方の海上を見つめていた。艦橋の窓ガラスをたたく風の音とかすかに響く機関の振動音のほかは何もなにも聞こえない。艦橋は静かだった。艦には艦娘の那智以外誰もいない。半年ぶりの一人での船出だった。この世界に生まれてから、一人の航海、一人の出撃など、これまで何度も経験してきたのだが、どうにも気分が落ち着かず、那智は外の空気を吸うため旗甲板へ出ることにした。折り畳まれたリゾートチェアが、倒れないよう手すりと壁の間にはさまるよう立てかけられていた。那智は一人でこれを使う習慣はない。

ドアを開けると、海風にあおられたサイドテールの黒髪がふわりとはためいた。薄曇りの雲の隙間から帯状に日がさしている。左舷に目をやると、並走している駆逐艦の後甲板にカモメが群がっている。

目をこらすと、水兵帽を被った艦娘がパンくずをちぎっては甲板にまいていた。

「ハルサメ。ああ、あの白露型の一隻か」

艦舷に白ペンキで書かれた艦名を見て、那智は港で会った内気そうな艦娘を思い出した、甲板に据えられた望遠鏡をのぞいてピントを合わせる、艦娘の春雨は後甲板に並んだ爆雷の上に腰掛け、楽しそうにコッペパンを小さくちぎっては空へと投げていた。風にふかれたパンくずは甲板に散らばる前に、ことごとくカモメが空中でさらっていく。そんな器用なカモメを見るのが春雨は楽しいらしく、風呂敷の上のパンがすべてなくなるまでカモメに餌を投げ続けていたが、春雨は不意にこっちの視線に気づき、赤くなって深々と頭を下げた。

——別に気にすることは無いのだがな

那智はくすりと笑って、トビウメ提督がいつもするように望遠鏡を覗いたまま軽く手を振ってみた。春雨も那智へ控えめに軽く手を振り返した。

艦橋へ戻った那智は、航路を確認するため海図台に向かった。高雄から受け取った海図を確認しようとしたところ、那智のブーツのつま先が何かを蹴飛ばし、鈍い金属音が鳴る。那智が足下を見ると、それはいつもトビウメ提督がよく使っていた、錫でできた洗面器だった。「あいつ、これを忘れていったか……。駆逐艦はこの艦より揺れるんだぞ……」

那智は洗面器を抱えると、そう一人呟いた。

重巡高雄を先頭とするマツエダ艦隊は、之字運動を繰り返しながら航行し、2日かけてようやく中継点のラポール港へと到着した。南北に伸びる巨大なニューガリア島の東に位置する南洋戦域の要衝の一つだった。

ラポールは噴火口の右半分が海面下に沈下したような地形の良港で、湾内には多くの艦艇が錨泊しており、緑と赤の航行灯が無数に揺らめいている。戦線の後方とあって余裕があるのか、灯火管制も解除されていて、艦船や市街地はほんのりとオレンジに、一方ゲート型の

大型クレーンや倉庫が並ぶ工廠地区は水銀灯の白い光に照らされている。那智は自分の内火艇で陸へ上がった。すぐに高雄や駆逐艦たちの内火艇も棧橋へとやってくる。

「お疲れだったね、負け戦の後なので潜水艦を警戒して遠回りしたから疲れたでしょう?」

高雄を伴って棧橋に上がってきたマツエダ提督が言った。駆逐艦達も続いて集まってくる。

「菊月、こんな所で寝てはいけませんよ」

「わたしはもうダメだ……。もう落ちる。わたしに構わず先に行くんだ……。もう楽にしてくれえ……」

「菊月ちゃんもう少しだからがんばりましょ」

まぶたが落ちかかってふらつく菊月を、三日月と春雨が引つ張ってくる。

「宿舎の手配は済んでいる。すぐに係員が迎えにきてくれるよ。この泊地の宿舎は空調も効いているし、ローリーより快適だよ」

そう言うマツエダ提督に、那智はためらい勝ちに言った。

「少し夜風に当たってからで構わないか? 場所を教えてくださいればすぐに行く」

マツエダ提督は高雄と顔を見合わせてからうなずいた。

「了解した。宿舎はA-3棟、メジロ泊地と伝えれば事務官が案内してくれる。明日正午にここを発つから、それまでに油槽船から燃料を補給しておくように。それからなるべく十分に休息をとること。いいかな?」

「承知した」

すぐに基地のトラックが埠頭へやってきた。一行が荷台によじ登ると、一行は那智におやすみなさいと声をかけた。那智は両の踵を打ち合わせて敬礼を返した。

トラックが去ると那智は埠頭で一人になった。今夜も飲みたくなっているのだが、明日出航の予定もあるので控えることにした。

昨日までいたローリー泊地と比べ、ここラポール泊地はいくぶん涼しい。那智は夜風に吹かれつつまだ照明が灯る低層ビルが並ぶ一角

へと歩きだした。航海中は外の情報がほとんど入らないので、那智は司令部のある建物へとやってきた。

突然、対岸に係留されているタグボートから立て続けにブザーが鳴り、二隻がもやいを解いて湾内へと漕ぎ出しはじめた。空襲警報ではないようだ。タグボートの向かう先には、ゆつくりと環礁の内側へ入ってくる大きな艦影が見えてきた。

——あれはたしか……

その艦は環礁内に入ってからやっと航行灯をつけ、こちらへ向かってくる。艦尾から数本のワイヤーが伸び、何かを曳いているようだ。港のタグボートがすぐに横付けし接岸作業に入る。どうやら沖に錨泊せず、直接埠頭につけるようだ。那智の足は自然と、その埠頭の方へ向かっていった。

タグボートによって無事に艦が接岸し、搭乗橋がおろされると、担架を抱えた数人の作業員が階段を駆け上がる。

「こつちだ。急いでくれ！」

「あとは我々にお任せください」

黒い色眼鏡に無精ひげ、垢とオイルで真っ黒な顔をした、潜水艦隊司令のカメヤマ提督が甲板から叫ぶと、作業員達は心得たとばかりにそう応じ、船室へと入っていった。カメヤマ提督の傍らには、この艦、潜水母艦大鯨の主である艦娘大鯨が心配そうに見守っていた。すぐに担架を担いだ作業員達が船室から甲板へと出てきた。担架には、頭に血染めの包帯を巻いた艦娘の伊一六八ことイムヤが寝かされていた。大鯨とカメヤマ提督はイムヤ達に続いて埠頭へと降り立った。

「よくがんばった。おまえは最高のスナイパーだ」

カメヤマ提督がそう力強く声をかけると、イムヤはかすかに笑って応え。

「わたしを信じてくれて、ありがとうね……」

そう言ってイムヤは右手で勝利のVサインをつくってみせた。カメヤマ提督もVサインを送り返すと、イムヤは満足そうに笑って迎えにきたトラツクへと乗せられた。

「ご安心ください。すぐに処置します。ご自身におケガはありませんか」

「おれはなんともない。あいつのこと頼んだぞ」

「ご安心を。お見舞いに来られる場合は明朝以降でお願いします。艦の方はタグで造船部の工廠へ曳航します。浸水の程度によっては艦の修理の方がずつと時間がかかるかもしれません」

司令部から出迎えた係官が説明すると、提督は何度もうなずいた。

「それはしゃーない」

「司令部に出頭いただければ、宿と食事の手配をいたします。それでは……」

「ああ、お疲れ……」

カメヤマ提督は係官や作業員へそう声をかけた。

「無事にここまで来られて良かったですね」

大鯨が少しほっとした様子で言った。

「まったくだ……」

カメヤマ提督はため息をついて肩を落とした。

「また、あいつらに無理をさせたな……。小型空母四隻、それにどれだけの意味があったのか……」

「提督、そんなことありません。イムヤちゃんもゴーヤちゃんも、提督のために役立つことが何よりの誇りなんですよ。わたし達はそれだけで十分なんです」

大鯨はカメヤマ提督の肩にそつと手を置いて言った。提督はうなずくと、ポケットから香水の小びんを取り出すと体中に数回吹きかけた。カメヤマ提督自身、香水の匂いは決して好きではないのだが、潜水艦の中でしばらく灼熱の風呂なし生活をしてきたことを考えれば仕方ない。

「すぐにお風呂のしたくしますね」

「ああ」

「海の中からこんにちはー!」

突然海から岸壁へはい上がってきたのはスクール水着姿の少女、艦娘の伊五八ことゴーヤだった。潜水艦伊五八は沖に錨泊し、カツター

も内火艇も使わずにここまで泳いできたのだ。

ゴーヤ駄々子のようにカメヤマ提督の腕に抱きついた。

「ねー、忘れてないよね。イムヤも提督も、無事に帰ってこられたのはゴーヤのおかげでち」

ゴーヤは頬を膨らめて言うので、大鯨とカメヤマ提督は慌ててゴーヤをなだめる。

「まさか、忘れてなんかないぞ。本当にゴーヤのおりこうな魚雷がなかったら、おれもイムヤも今頃、海の底でペシヤンコだ」

「そうよ、ゴーヤちゃん。イムヤちゃんと提督を救ってくれてありがとう」

カメヤマ提督と大鯨がそうゴーヤを労うと、ゴーヤはにひひと照れ笑いする。

「ご褒美はやっぱり間宮がいいか？ この島に何かいいものがあればいいが……ん？ おたくさんは確か……」

カメヤマ提督は岸壁の電灯の下で、こちらを見ていた人物の影に気がついた。

「あら……。確かタロタロ島で……」

大鯨とカメヤマ提督の二人はすぐに、タロタロ島のホテルで会った艦娘の那智を思い出したようだ。そこに立っていた那智は姿勢を正して敬礼を送った。

「大鯨、先にゴーヤを風呂に入れてやれ。すぐ行くから」

カメヤマ提督はそう言って色眼鏡をはずした。

那智とカメヤマ提督は岸壁に腰をおろした。

「しばらく風呂なしの潜水艦暮らしのうえ、軍令部の奴ら、南洋での修理は水上艦艇優先で、潜水艦は中部太平洋まで回航しろとほざくから、この臭いは勘弁してくれ」

そう言つてカメヤマ提督は再度自分の体に香水を振りかけた。那智はけらけら笑って、気にしないでくれと言った。

「そーういや無線越しに断片的にしか聞いてないが、重巡那智の活躍は知ってるぞ。お手柄だったな。えっと、トビウオ提督氏もここへ来てるのかい？」

那智は首を振った。

「トビウメだ」

と那智は笑いながら訂正し、首を振った。

「彼は無事だが、今はまだローリー泊地にいる。実は戦術上の理由から、私は暇を出された。これからはメジロ島の巡航警備艦隊で哨戒任務にあたる」

カメヤマ提督は驚いて顔をゆがめる。

「おいおい、一番手柄の艦娘にちよつとあんまりじゃないか……」

「撤退戦の最中、わたし達は夕級戦艦二隻を取り逃がした。連合艦隊司令部はそれを重く見てな。遊撃打撃艦隊旗艦を戦艦と配置転換するように命じた。実際、敵戦艦を確実に撃沈するには戦艦の火力が欠かせない。わたしはあいつに大恥をかかせてしまったんだ」

那智は無理に笑ってそう言った。カメヤマ提督は事情を察してそれ以上たずねようとはしなかった。

「貴官はずつとあの潜水艦と一緒だったのか？」

「ああ、おれたちはブーメラン島の南およそ二百浬で敵の機動部隊を張っていた。ちょうど連合艦隊壊滅の知らせを受けて、南方で静止していた敵空母の四隻がどう動くか気になったんで、タロタロ島へ通じるラインで哨戒していたら四隻のワ級空母含む機動部隊を進出を確認した。連合艦隊へとどめを刺そうとしていると判断したおれたちは、それを攻撃したってわけだ……。戦果は軽空母一隻撃沈確実、三隻は大破から中破ってところだな」

那智は目を丸くしてカメヤマ提督の言葉を聞いていた。

「貴官はまさに命の恩人だったのか……。礼を言わなければいけないな」

那智は頭を下げるが、カメヤマ提督は自嘲気味に笑いだした。

「いやいや、おれもイムヤも連中に魚雷を撃ち込むまではそう思ってた。ところがどっこい、反撃に出た連中が空に放ったのは最新の対潜哨戒機。どうも敵は潜水艦狩りを専門やる護衛空母だったみたいだな。いざやっつけてやると息巻いた方がいいが、待ちかまえてたのは敵の方だった。笑い話だろ？」

那智は慌てて首をふる。

「そんなことはない。例え対潜機であろうが、敗走中の艦隊が空から襲われたら多くの犠牲が出ていたはずだ。あの潜水艦娘にも感謝するぞ」

二人は突堤に腰掛けて、無言で湿気の高い夜風に身をまかせていると、目の前を大型客船が色とりどりの装飾ランプをつけてまま目の前をゆっくりと外洋の方へ向かって進み出した。なにやらパーティーでもやっているのか、ジャズバンドの音楽と人々の歓談するざわめきがかすかに聞こえてくる。

「どうやら軍令部のお偉いさんでも来てるみたいだな……。きっと接待の船上夜会で、そこいらをシヨートクルーズってところだろう」

アホらしいとばかりにカメラヤマ提督は吐き捨てた。那智は無言でその客船が外洋まで出ていくのを見つめていた。

「てーとくー！　ゴーヤお風呂出たよ！　早く入ってご飯にしようよー！」

潜水母艦大鯨の上甲板から体にバスタオルを巻いた艦娘の伊五八が大声で呼びかける。

「おっと、そろそろ行かないと。じゃあな、那智さん。元気出せよ。新しいとこ、いい艦隊だといいな」

「そうだな。貴官もゆっくり休んでくれ。また会おう」

二人は笑顔で敬礼を交わした。

埠頭を後にした那智はそのまま、泊地の司令部へと歩きだした。新聞でも読めば少しはほかの地域の情報が手にはいると思ったのだ。

この泊地の司令部もコンクリ建ての立派な建物だった。夜勤の職員が起きているのか、窓の多くに明かりが灯っている。

那智が玄関から館内に入ると冷えた心地よい空気に包まれた。冷房が効いているのだ。玄関や廊下の照明は消されていて人の気配はない。那智が歩いていくと、薄暗い休憩所らしき一角に大きなテレビがおかれていた。

——テレビジョンか……

テレビの存在は知っていたが、外南洋の果てにあるヤムヤム島には

テレビ電波が届かない。

本当は新聞が欲しかったのだが那智は仕方なしにテレビの電源を押ししてみた。

ザーっと音がすると、突然ガリガリとした雑音混じりのラツパの音楽がスピーカーから流れてきた。ブラウン管がゆつくりとぼんやりした像を映し始め、やがてそれは徐々に鮮明なモノクロ映像になっていった。

『風雲急を告げる南洋戦線。連合艦隊の転進から二週間、連合艦隊司令部はこのほど、最前線のシューズ・ベラ島へ向け、東京急行を敢行しました。ブーメラン島海戦以後、定期連絡船も欠航し孤立状態にあったシューズ・ベラ島へ向け初の渡航とあって、甲板には食料や生活物資を満載した水雷戦隊の勇姿いまここに！』

画面は海上を進む二隻の駆逐艦を俯瞰で映し、妙に力んだナレーションが添えられる。

『晴れて南海の孤島に到着した水雷戦隊を島民総出で歓迎。救援物資を携え東京急行任務を成し遂げたのはトビウメ アツオ艦隊司令と駆逐艦不知火、荒潮らの遊撃艦隊。迎えるのは絶海の孤島に咲く一輪のユリ、空母艦娘翔鶴の歓迎を受けます』

荒い白黒画面の向こうで、トビウメ提督は首に花輪をかけられ、翔鶴に手を握られて締めりのない照れ笑いを浮かべている。隣には不機嫌そうに頬を膨らませる不知火もいる。那智はしばし画面に釘付けになった。

『待ちに待った救援物資に皆につこり、整然と公平に分配されます』
制止する憲兵を押し退けて、我先にと食料に群がる人々を映しながらナレーションが続く。

『しかし、ここは南海の最前線。喜びもつかの間、すぐに敵機襲来を告げる空襲警報発令。迎え打つは我が日輪の翼、翔鶴の命を受け、はるか上空に舞い上がり、敵深海軍の双発爆撃機へ襲いかかる』

離陸する零式戦闘機と黒い煙を吐きながら逃げていく大型爆撃機が映し出された。

『これが敵機撃退の決定的瞬間です。見たか、我が無敵の防空陣！』

大げさなレーションとはちぐはぐに、最後は初風と長良、荒潮が椰子の木陰でカレーライスを食べている姿が映る。

『私たちは仲間を決して見捨てない。連合艦隊は近く、南方戦線で大規模な反転攻勢に出ると発表しました。外南洋の島々の解放も目前と言つてよいでしょう』

那智はブラウン管に映る仲間を見つめながら笑みを浮かべた。

「よくやった。よかったな……」

那智はそう画面越しに仲間と提督を労い、自分がそこにいられなかったことをとても残念に思った。

いいニュースを聞き、心なしか気分よくなった那智は結局ウイスキーの誘惑に勝てなくなり、外の酒屋で小瓶を調達し、宿舎へと戻った時には、そのほとんどを飲み干してしまっていた。

「お帰りなさい、遅いから心配してたんだ」

ほろ酔い状態で戻った那智を迎えたのは、明かりの灯るラウンジで読書をしていたマツエダ提督だった。那智は一気に酔いが醒める思いがした。

「も、申し訳ない。貴官、まさかわたしを待っていてこんな時間まで……」

「いやいや、そうじゃない。ついさつきまで高雄と一緒にこれからのことを話してたんだ。だから気にしないで」

本当は那智を待つて起きていたのだが、マツエダ提督はそう誤魔化した。那智は恐縮した様子で頭を下げる。

「ほかの者はもう寝たのか？」

「ああ、高雄はちよつと前まで起きていたんだけど、眠そうだったから、先に寝かせたよ」

「そうか……」

マツエダ提督は那智の顔を見ながらそれとなくたずねる。

「何かいいことでもあったかい？」

「え……」

「さつきより、嬉しそうに見える」

「いや、それは、実はな、先の作戦前に会った知り合いと偶然再会して、

お互い無事を喜び合ったところだ」

那智はそう言ったが、もう一つの良いことを口に出すのはなぜか氣詰まりだった。

「それは良かった」

そう言つてマツエダ提督はサイドテーブルに置いたビールグラスを傾ける。黄金色のビールには氷が浮かんでいる。

「貴官、珍しい飲み方をするんだな……」

「ああ、これ？ 以前インドナシ方面に行ったとき、みんなビールをこうやつて飲んでいてね。暑いところではいける飲み方だ。那智君もよければ一杯どう？」

実際、興味がないわけではないが、すでに飲んでしまっているのだから那智は首を振った。

「次に機会にな」

「そう、じゃあ次を楽しみにしとくよ。さて私も寝ないと……。那智君も明日に備えてくれ」

マツエダ提督は本を閉じてそう言うので、那智は少し笑みを浮かべて敬礼した。この二日間でマツエダ提督が初めて目にする那智の笑顔だった。

新しい仲間

ラポール港に寄港中のマツエダ艦隊は翌日の昼に抜錨、再び単縦陣で北西へと進路をとった。航海中は何事もなく、各艦は之字運動を続けて西をめざし、二日後には無事メジロ諸島へとやってきた。

小雨模様のなか、那智はタグボートの指示に従い、先に着岸した重巡高雄に並んで自艦を係留する。港内には巡洋艦と駆逐艦が数隻、錨をおろしていた。もやい綱を繋ぎ終えた那智はふと、構内に錨泊している扶桑型戦艦を見つめた。缶を炊いているらしく、積み木を積み上げたような複雑な形状と艦橋の後ろにある煙突からは、黒煙が上がっている。

「戦艦山城……か」

那智は奇怪な塔のような艦橋を見上げた。程なく自分が元いた艦隊に配属され、そこで旗艦となることが決まっている戦艦だった。六基の砲塔に二門ずつ装備しているのは、那智の二十センチ砲よりはるかに高威力を持つ三十五・六センチ砲だ。

一瞬、那智は無力感に襲われ奥歯を噛みしめたが、考えまいと言い聞かせて舷梯へと歩きだした。

雨に濡れたコンクリの上で那智を迎えたのはマツエダ提督と高雄、そして三人の艦娘だった。

「やっほー、こっちの世界では初めてだよね？　青葉型重巡二番艦の衣笠だよ。よろしくね！」

白いセーラー服を着たミドルヘアの艦娘がウインクして手を振った。隣にいる駆逐艦娘も元気澆刺な調子で頭を下げる。

「夕雲型十八番艦の清霜よ」

三人目の髪を短くショートカットにしたセーラー服姿の艦娘も笑顔で自己紹介する。

「長良軽巡の鬼怒です！　長良姉さんは元気になっていますか？」

那智はかかとを合わせて敬礼してから自己紹介した。

「妙高型重巡の二番艦、那智だ。縁あってこの泊地で世話になることとなった。よろしく頼む」

那智は手をおろして、ブーメラン島沖での長良の活躍や、先日テレビジョンに映った元気そうな様子を鬼怒に話すと、鬼怒は目を輝かせて喜んだ。

「そうなんだー。あー、わたしももっと強くなって姉さんみたく活躍したいなあ。もつとトレーニングしないと」

あの姉にしてこの妹ありといった様子で、鬼怒はストレッチでもするかのように両腕を真上に持ち上げてポーズをとった。

「ねえねえ、やっぱり那智さんも提督にナンパされて連れてこられちゃったわけ？ やっぱりそうなの？」

「な、ナンパだと……。そ、それは、どういうことだ？」

茶目っ気いっばいで衣笠が那智に聞く。那智は少し顔を赤らめて首をふった。

「いやー、衣笠さんがこの艦隊に来るときだって、提督のアタックがすごくて、もう大変だったんだから」

「衣笠さん、変なこと言わないの」

呆れて高雄がたしなめる。マツエダ提督はそんなやりとりに慣れているのか、笑顔で艦娘達のやりとりを眺めている。

「高雄さん、普段は優しいんだけど、提督のこととなるとムキになるから、那智さんも気をつけてね」

衣笠是那智の耳元でいたずらっぽく言った。

——悪くない雰囲気艦隊だな

那智は衣笠に応じて微笑しながらうなずいた。

「衣笠君、山城君はどうしてる？」

マツエダ提督が周りを見回しながら尋ねると、衣笠は肩をすくめる。

「二日前に提督が電話くれたでしょ。山城さんの転属と連合艦隊への編入のこと。そのことを本人に伝えたら、急に元気になっちゃって。ほら？ 前線の連合艦隊には扶桑さんがいるって、提督言ってたでしょ？」

提督はそうかとうなずいた。

「じゃあ、今は艦にいるの？」

「二日前から不眠不休でずっと……。『姉様……。扶桑姉様……。』つて
とり憑かれたようにつぶやきながら、缶に火入れて。弾薬の積み込み
も完了。あと重油の補給が終わればいつでも出港できるみたい」

「衣笠さん似てる、似てるー！」

衣笠のモノマネがツボだったらしく、清霜がお腹を抱えてケラケラ
笑う。

「そうか、キリのいいところでこちらに呼んでくれ」

提督はそう言うと、沖の戦艦へと目を向ける。

「山城さん、やる気になってくれて、よかったですね」

高雄が言った。

「こちらの世界では、山城というのはどういう艦なんだ？」

那智が尋ねると、高雄とマツエダ提督、それに衣笠の三人は相互に
顔を見合わせた。

「三十五・六センチ砲を十二門、戦艦としての火力は十分だが、率直な
ところ、弩級戦艦がこの泊地の任務に適していたとはいえない。実
際、護衛任務や哨戒、威力偵察の任務では、彼女だけ留守にまわるこ
とも多かった。那智君も前世の世界では、スリガオ海峡での彼女達の
悲劇は、僕らよりもずっとよく知っているだろう」

那智は前世のレイテ沖における記憶を思い返し、心の中の古傷が痛
む思いがした。

「彼女の艦歴は不遇だったが、こつちの世界でもいまだそれを引き
ずっているようだね。お姉さんや昔の仲間のことを思い出すと自室
に引きこもってしまうことも多い。そんななか連合艦隊の再編成と
戦艦供出令がここにも届いたから、火力を欲する連合艦隊のほうが、
山城君も活躍しやすいだろうと思ってね」

「あの人、お姉さんのことが大好きだから、一緒にいさせてあげたほう
が、いいんじゃないかな？」

マツエダ提督と衣笠の言葉に那智はそうかとうなずいて海の方を
みた。

——あいつ、うまく乗りこなせるだろうか……

那智にはそれが気がかりになった。

那智はマツエダ提督に話を向けた。

「ブーメラン島の救出作戦、貴官はどういう方針で望むべきと考えている？」

マツエダ提督と高雄はまたも顔を見合わせた。

「なに、他意はない。貴官の考え方を知りたいだけだ」

那智が言い添えると、マツエダ提督は言葉を選ぶようにゆっくり言った。

「以前も話したが、私たちはブーメラン島沖の作戦には参加していない。先日、連合艦隊司令部が発行した戦闘詳報によれば、作戦失敗の主要因は敵の前哨を撃破するための火力集中が遅れたからとある。私達にはそれが当を得た分析かは判断できない。ただ、君もトビウメ提督もそうは思っていないみたいだね」

「その戦闘詳報を書いた奴は、戦闘中、昼寝でもしていたんだろう」

那智は不愉快な思いを隠さずに言った。

「艦隊司令宛に緊急入電です」

やってきたのは基地の電信員で、電文を携えマツエダ提督の元へ差し出した。提督はありがとうといって電文に目を走らせると、言葉もないといった様子で肩をすくめ、高雄に電文を見せて言った。

「軍令部はブ島奪還のため、本土から陸軍の師団三千をタロタロ島へ進出させるようだ。サキジマ諸島のニライニライ島からローリー泊地まで、船団護衛はうちが担うことになった。どうやら本気である島の『奪還』するつもりみたいだ」

那智は何も言わず、顔を背けることしかできなかつた。

シユーズ・ベラ島の栈橋で、トビウメ艦隊の面々プラス一名はつかの間の別れを惜しんでいた。

「初風、ほんとにいいの？」

トビウメ提督は心配そうに言った。

「そうよー、無理すれば、重ーい初風ちゃん一隻くらい、なんとか曳いて行けないこともないのよー」

荒潮も荒潮なりに、島に残る初風の身を案じる言葉をかけた。

「大丈夫よ。仲間もいるし、さびしくなんかないわ。そのかわり、三日後には必ず迎えに来てよね！」

初風は両脇に立つ長良と、プラス一名こと早霜を見ながら言った。

「大丈夫。泳いででもくる」

トビウメ提督は何度もうなずいた。

「ええ、次は工作艦明石を連れてきます。そうしたら一緒に戻りましょう」

そう言うと、不知火は長良と早霜に向かって言った。

「本当は皆、連れて帰るつもりだったのですが、あと三日辛抱してください。長良さん、早霜、それまで初風をお願いします」

「大丈夫、任しといて！ 一番に来てくれたんだから、大丈夫だよ！」

「待っているわ、不知火さん。フフ……、フフフフ」

長良と早霜は笑顔で言った。

「今回はありがとうございました。上空の警戒は任せてくださいね」

島民らとともに見送りに来た翔鶴が挨拶した。

「はい、次は明石を含めた連絡船と一緒に来ます」

トビウメ提督と不知火、荒潮は内火艇に乗ってゆつくりと棧橋を離れた。島に残る四人の艦娘達はいつまでも内火艇の三人へ向け手を振り続けていた。

少しでも早く明石を連れて戻るため、駆逐艦不知火と荒潮は即座に抜錨し、スクリューを回し始めた。

「ん、あれは？ 飛行艇じゃない？」

羅針艦橋の窓越しに、トビウメ提督が空を見上げる。不知火も目をこらすと、機影は徐々に大きくなり、味方を示す両翼の日の丸が見えてきた。

「二式飛行艇、珍しいですね」

その四発の飛行艇はゆつくりと湾内を旋回し、ふわりと着水した。「大きな飛行機だね。どこから来たんだろう」

普段目にする九七式飛行艇よりも一回り大きい威容にトビウメ提督は感心したように言って、カメラを向ける。

「司令、乗ってみたいのですか？」

不知火の問いに、トビウメ提督はとんでもないとばかりに首を振る。

「まさか！ 僕は二度と飛行機には乗らない」

不知火はかすかに笑みを浮かべた。

「そうですか、不知火も飛行機は嫌いです。そろそろ外洋に出ます。行きましょう」

「うん」

駆逐艦不知火と荒潮は上空の九七艦攻の援護のもと二十五ノットまで増速し、タロタロ島へ進み始めた。

トビウメ提督は決してツイてる男とは言えなかったが、第五航空戦隊司令と自称「幸運の空母」にとって、シユーズ・ベラ島滞在は非常に不幸なものとなった。

トビウメ艦隊の駆逐艦が出港するのと入れ違いに、大型飛行艇一機がゆっくりとボート用栈橋へと接近してエンジンを切った。

すぐに港の職員や島民がわんさかと集まってくる。みんな新しい補給物資に期待しているのだ。

すぐにパイロットがハッチを開けてバシヤバシヤと浅瀬に降り立つ。

「待たせたな！ 食料、菓子、薬、持ってきてるぞ！」

歓声とともに、憲兵の制止ものともせず、島民による壮絶な争奪戦がはじまった。

「あーあ、まーたやってる。恥ずかしいわね」

だいぶ気持ちに余裕ができたのか、呆れたように初風が腰に手を当てる。飛行艇の前部ハッチから次々に木箱が外に放り出されるなか、それまで微笑んでいた翔鶴の顔が機体の一点に釘付けになった。

「ず、瑞鶴、それに提督……」

「え、翔鶴さん、どうしたの？」

飛行艇の後部ハッチからは白い制服のボタンを止めず、だらしなく羽織った男と胴着姿の長い髪をツータールにした艦娘らしき二人連れが栈橋へと出てきた、誰かを捜すように周りを見回している。

翔鶴が栈橋へ駆けてゆくと、二人はようやくそれに気づいたらし

く、大きく手を振って走り出した。

「翔鶴ー！ 翔鶴ー！」

制服をだらしなく着た若い男はそう叫び、猛ダツシユで翔鶴に抱きついた。

「翔鶴、良かった！ お前が被雷したと聞いて、おれと瑞鶴がどんなに心配したと思つてんだ……。でも良かった。無事で良かった！ それに、看護服姿のお前が見られて、おれはもう死んでもいい……。」「て、提督、そんな急に、こんなところでだめですよ」

涙と鼻水と鼻血を垂れ流しながら抱きつく提督に翔鶴は戸惑いながら言うが、その提督は離さない。

「あー、提督さんばかりズルいー！ 私も翔鶴姉とハグしたい！」

抱きつく提督のあとから、一緒に来た艦娘、空母娘の瑞鶴も割り込まんとばかりに抱きついた。

「翔鶴姉、潜水艦にやられたって聞いて、本当に心配したんだよ。また先に逝っちゃうんじゃないかって、私も提督さんも……」

そう言つて艦娘は涙をこぼしながら翔鶴を強く抱きしめた。

「大丈夫よ翔鶴、それに提督も、二人をおいてどこにも行つたりしないわ」

戸惑つていた翔鶴もそう言つて二人を抱擁する。

当人たちにとつては真剣で、涙なしには済まない感動の再会シーンとなつたのだが、この若い提督、第五航空戦隊司令ナカツル ツバサ提督の不幸はこの瞬間に始まつた。

争奪戦に参加している食い意地の張つた職員や島民を除く男性陣の一部は三人の再会に冷やややかな視線を送つていた。

「なあ、あいつ、何？ おれたちの癒しの女神、翔鶴ちゃんになにしてくれちゃつてんの？」

一人の兵士が額に青筋を浮かべて言うと、しゃがんでいた工廠部の作業員がつぶやいた。

「大艇の乗員に聞いたたら、どうも五航戦の提督らしいですよ」

「へー、五航戦のねー。ふーん……」

椰子の木陰からじーっと様子を見ていた島の若者がつぶやく。軍

刀を腰に下げた憲兵の一人も、抱き合う三人を見ながら舌打ちした。「やりすぎんな……。それだけだ」

憲兵はそう一言残し、肩をいからせて去っていった。憲兵隊は関知しないという、これから起こることへの黙認の意思表示だった。

「やつこさんには、島の流儀つてもものを十分に教えてやらねえとな……」

男達はニヤリとサディステイックな笑みを浮かべた。

夕刻、ナカツル提督と五航戦の姉妹は二ヶ月ぶりにそろって夕食の席についた。

「びっくりしたわ、急に二人で来るんですもの。でも、二人の顔が見られて、本当によかったわ」

翔鶴がうれしそうに言った。

「わたしも提督さんも、どうしようかと思つて。軍令部に作戦に南洋の参加できるように頼んだけど却下されちゃったから」

「やっと飛行艇の都合がついたから来られたんだ。遅くなってほんと悪かった」

瑞鶴とナカツル提督も翔鶴の元気そうな様子に心底安心したとばかりにうなずいた。

「ご心配おかけしました、提督。でも大丈夫、次は作戦を成功させますね」

「えー、翔鶴姉まだ戻つてこないのー?」

瑞鶴が駄々っ子みたいに足をバタバタさせる。

「わががまま言つてはだめよ。ブーメラン島には助けを待ってる人達が大勢いるんですもの」

「軍令部さえ許可すれば、おれも瑞鶴も出撃するんだけどなあ」

ナカツル提督は悔しそうに言った。

「戦争は南方だけじゃないですよ、提督。わたしは大丈夫ですから、二人はリゾン島で待つていてください」

五航空戦隊の母港は外南洋よりずっと本土に近い、リゾン島のクレインフィールド港にあった。ブーメラン島沖海戦前に空母翔鶴が損傷して以来、ナカツル提督と瑞鶴はずっと、翔鶴のいうこのシユーズ・

ベラへ来る手段を探していた。シューズ・ベラ島へ臨時で飛行艇による物資の航空輸送が実施されることになり、たまたま本土から進出してきた秋津洲をつかまえた二人は、なんとか拝み倒して貨物と島へ向かう大艇に乗せてもらったのだった。

少し離れたテーブルで三人を見ていた初風、長良、早霜の三人は、五航戦の歓談を微笑ましく見守っていた。

「翔鶴さん、いつもより楽しそうね」

「そうだね、なんか笑顔が輝いてる感じがする」

初風と長良が麦飯を口に運びながら言った。

「自分の司令官や姉妹艦がわざわざ会いに来てくれるのは、艦娘にとって、とても、とても幸せなことだと思うわ……フッフ」

「そうだね。でもちよつと照れくさいね」

「まあ……。それは、それなりに、ね……」

長良は照れくさそうにキシシッと笑い、初風は少し顔を赤くしてモゴモゴとつぶやく。

「そういえば、あんたの司令官はどうなの？ 心配して、連絡くれたりしないの？」

初風の問いに、早霜はゆっくりと首を振った。

「わたしは数合わせて徴用され連合艦隊に編入されました。もしかしたら、私の司令官は自分の艦隊に早霜という艦がいたことすら覚えていないかもしれないわね」

艦隊にはいろんな事情があるからね、と長良がすかさずフォローする。初風は言葉を失い、変なこと聞いてごめんと謝った。

「大丈夫よ、初風さん。わたし、今は寂しくないわ。本当に……本当に寂しくないわ。フフ、フッフ」

早霜はそう妖艶に笑った。

翌朝、食堂にやってきたナカツル提督と瑞鶴の顔を見た翔鶴は驚いて口元に手をやる。

「て、提督、その顔はどうしたんですか。それに瑞鶴まで……」

二人は顔や腕にできた赤いぼつぼつをかきむしりながら眠そうに言った。

「提督さん、この蚊帳、あちこち破けてて、寝てる間ずっと蚊に襲われちゃった……」

「あのボロ蚊帳、交換しないとだめだぞ……。まったく」二人とも寝ぼけ眼で、虫さされのあとをポリポリかきながらつぶやいた。

「この辺の蚊はマリアアを持つてるのも多いから危ない気をつけないと、新しい蚊帳を用意しておかないと、軍医さんに話しておきますから、二人ともあとで病院へ来てくださいね」

そんな三人の様子を食堂のすみで見ていた男達はニヤニヤ笑いながら親指を立てた。

「奴の蚊帳にちよつと細工をしてやりました。この辺の蚊は強力ですからね」

「でも、あの艦娘までやられてるぞ。そこまでしなくてもいいのに……」

「え？ あいつの部屋の蚊帳しかいじってないっすよ。何で？」

男の一人がはっと思い立って思わず顔を赤くした。

「くそ、あの野郎、つまり、そういうことですよ！ ちくしょう！ 許せねえ……」

みんな、合点した。

「まさか翔鶴ちゃんも一緒だったんじゃないだろうな？」

「そ、それは大丈夫、昨日は病院で夜勤でした」

「頭に来たぜ、もう手加減はいらねえ……」

「ゲへへ、あいつが今飲んでる味噌汁、煮沸してない貯め水で作った特製です。それに、飯にはたっぷりフケをふりかけときました」

給仕係の一人が言った。

「おい、あれって確かボウフラが沸いて……」

「し、声大きい……。フケ飯にボウフラ味噌汁、あいつの胃腸はどこまで持つかな……」

猛烈な殺意を向けられていることも知らず、ナカツル提督は指揮下の艦娘二人と楽しく歓談しながら味噌汁をすすった。

「ねえねえ、翔鶴姉ばかり看護師さんのカツコしてずるーい。瑞鶴もお手伝いする」

「瑞鶴、これは遊びじゃないのよ。それに私だって好きでこんな服装をしてるわけじゃないんだから……。ねえ提督、提督？」

翔鶴が困惑して提督に助け船を求めると、虫さされの顔をかきながら、ナカツル提督はうんうんとうなずいた。

「いいじゃん、超ーいいじゃん。姉妹でナース。わざわざ南の島まで来た甲斐があった……」

ナカツル提督は一人でそう納得し、何度もうなずいた。

提督の口添えで話ほとんどん拍子で進み、病院が人で不足だったこともあり、さつそく瑞鶴も臨時看護師として手伝いに入ったのだが……。もって生まれたがさつな性格故に、患者の点滴袋を間違えたり、うっかり骨折している患者の足を蹴り飛ばしたりと、洒落にならない重大医療事故ストレスのミスを何度もやらかし、一日で野戦病院からつまみ出されてしまった。

「ちえー、わたしだって一生懸命だったのに……」

夕刻、瑞鶴は食堂のテーブルに突っ伏してふてくされていた。

「まあまあ、何かやろうとする気持ちが大切なんだよ。そんな気にならない」

提督の膳によそわれた味噌汁と生野菜のサラダをムシヤムシヤ咀嚼しながら瑞鶴の肩をたたいた。ナカツル提督は苦笑いをかみ殺しながら、食事を続ける。いざ実際にナース服の五航戦のコンビが並んでみると、個性の向き不向きが歴然と出てしまう結果となった。神々しいまでの包容力と清楚さ、それに控えめかつ健全なエロスを醸し出す翔鶴の看護師姿に比べ、瑞鶴はあまりに澆刺とした無邪気さと快活さが前面に出て、まるで学生が学芸会の衣装を着ているよう雰囲気だった。

——瑞鶴のナース服姿は可愛いかったけど、エロさがまだまだだかならな仕方ないよな。そうだ、今度瑞鶴には女子高生の制服とメイド服着せたいな

ナカツル提督はそんな不屈きな事を考えながら瑞鶴を慰めた。実際、もし瑞鶴に翔鶴並の色気があったら、どんなポンコツ看護師ぶりを発揮したとしても病院から追い出されなかったというのが、島内の

もっぱらの噂だった。

翌日の朝が来た。

「あれ、提督さん食欲ないの?」

いつものように三人で朝の食卓を囲むこととなったが、ナカツル提督はなかなか箸が進まない。

「うん、なんか風邪っぽくて、ダルいんだよ」

「あら、それはいけないわ、しっかり食べていただかないと」

ナカツル提督は力無くうなずいて麦飯やおかずを手を付けるが、すぐにお碗を置いてイスの背もたれに身を預けた。

「もういらぬ……」

「じゃあ提督さんの分も、瑞鶴が食べたげる」

そう言うと、瑞鶴はナカツル提督のご飯やサラダをかすめ取っておいしそうに食べ始めた。

「だめじゃない瑞鶴、それは提督の分よ。提督も元気がないときこそ食べないと……」

翔鶴が瑞鶴をたしなめるが、提督は弱々しく首をふる。

「もつたいないから全部食べていいよ」

「わーいやったー!」

一方、密かに見張っていた島の男たちも不安感じ始めていた。

「おい、あの艦娘、食っちまったぞ……。やばいんじゃないか?」

「これ以上はまずいよ……」

「あの嬢ちゃんには気の毒だけど、今更どうもできないだろ」

この世界の住人にとって艦娘は大切な存在だ。嫉妬に狂った男たちも艦娘まで痛めつけようとは微塵も思っていなかった。

「提督、大丈夫ですか? お熱はありませんか?」

翔鶴は心配そうに言って自分の額をナカツル提督の額に当てる。

「はあああ、あの野郎おおお……」

それを見せつけられた男たちの良心は、ナカツル提督への憎悪を前に一瞬で消しとんでしまった。

その日夕方からナカツル提督と瑞鶴体調が急速に悪化した。

「しよ、しよ、翔鶴姉……。わたしちよつとお腹の具合が……。ああ、

だめー」

顔を真つ青にした瑞鶴があわてて廊下へと飛び出していく。

「あああ、ずるいぞ、お、おれも……」

半纏に毛布をかぶっても悪寒でガタガタ震えているナカツル提督が腹部を押さえながらヨロヨロと後を追う。ちなみに現在の島の気温は摂氏37度、湿度96%である。仮に裸でいたって辛い暑さだ。「あれ、たぶん悪性のマラリアだよ。きつと悪い蚊に刺されちゃったんだよ……」

遠くから様子を見ていた長良が気の毒そうに言った。

「あの二人、わざわざ病気になりこんなどこまで来たのかしら……。呆れるわね。五航戦の提督って優秀だつて聞いてたんだけど」

初風が言うのと、早霜が首を振った。

「どんなに善良でも、周りが見えなくなってしまうつては駄目よ」

悲惨な二人を凝視しながら早霜が言った。

翌日、シユーズ・ベラ島の埠頭には大勢の人が集まっていた。駆逐艦隊に護衛され、定期貨客連絡船と工作艦明石が入港するのだ。翔鶴は病気なつた提督と妹の事がきがりになりつつも、基地から哨戒機を離陸させ、船団の護衛につとめていた。

沖合に明石のひとときわ大きな艦影が見えたときには、多くの島民や艦娘が歓声を上げた。

約束どおり駆逐艦不知火と荒潮も明石を護衛しつつシユーズ・ベラ島の港内に投錨した。連絡船と護衛の艦船には物資が満載されていて、すぐに荷揚げの作業が始まり、島民は大喜びで物資を包んでいた木箱をばらしていく。

「長良さんは自走可能ですし、明石による初風の応急修理が終われば、すぐに曳航してタロタロ島へ連れて帰れます」

内火艇を海面におろしながら不知火が言った。周囲には一緒に護衛任務についてきた白露型駆逐艦数隻も錨をおろして上陸の準備を進めている。

「司令、また飛行艇が来ていますよ」

不知火がトビウメ提督の袖を引っ張りながら言った。

「あ、本当だ。誰かいるね」

トビウメ提督は双眼鏡を向けてピントを合わせる。

「あれ、この前の二人じゃない？ どうしたんだろう？」

トビウメ提督は双眼鏡を不知火に渡しながら言った。不知火が双眼鏡を覗くと、担架に乗せられた男と、艦娘らしき女がナース服姿の翔鶴に寄り添われて二式飛行艇に担ぎこまれるところだった。

「こんな暑いのに、あんな毛布掛けて、平気なのかな？ 見ているこっちが熱中症になりそうだね……」

トビウメ提督が言うと、不知火はいつもの仏頂面を崩さずみ言う。「震えていますし、腹部を押さえているところを見ると、恐らく赤痢がマラリアですね。いいですか司令、南洋での不摂生や落ち度は自身に病気を招き、艦娘もろとも、あのように航空機で後送される羽目になります。司令も注意してください」

不知火はトビウメ提督にグイと顔を近づけて言った。トビウメ提督は冷や汗をかきながら首をふった。

「やだ、飛行機なんか絶対乗りたくない！」

「不知火もです。お互い注意しましょう」

赤の他人からボロクソにこき下ろされても知らず、ナカツル提督と瑞鶴、それに見送りにきた翔鶴は愁嘆場を演じていた。

「瑞鶴、すっかりね。ローリー島には大きな病院があるから」

「じょーがくねーも一緒に帰ろうよ、ねえ、お願い〜」

担架の上で身をよじりながら瑞鶴が泣き喚く。

「翔鶴、寒い、寒いよ。おれを温めてくれよ、翔鶴〜」

ナカツル提督も滝のような汗をかき、震えながら言った。

「なんで二人とも、なんで……」

翔鶴は目に涙を浮かべ瑞鶴と提督の手を交互に握る。

「本当はわたしも二人と帰りたいけど、今は無理なの。任務を終えたらすぐに戻るから、二人とも必ずよくなって……。お願い」

瑞鶴とナカツル提督は軍医からマラリアと赤痢を併発したと診断され、急ぎローリー島の病院まで搬送されることになったのだ。

「じゃあそろそろ出しますよ」

二式大艇の搭乗員は、泣きわめくけつたいな荷物二つを機内運び込むと、めんどろくさそうに言った。

「じょーがくねー、じょーがくね……」

ハッチがボタンと無情に閉じ、叫び声が聞こえなくなった。

発動機が回り、飛行艇はゆつくりと洋上へ滑り出す。飛行艇は外洋へ向けてゆつくり離水し東のローリー泊地目指し飛び去った。

栈橋に佇む翔鶴は機影が見えなくなるまで手を振り続けていたが、基地の男たちはお互い顔を見合わせ静かに笑い、邪魔者の退場を祝うのだった。

反攻作戦

那智と山城の出会いと別れは本当に一瞬のことだった。

「戦艦山城、これより姉様の元へ……前線の任務に赴きます。これまでも世話になりました」

艦娘の山城はそうまくしたてて、マツエダ艦隊の面々に敬礼を送った。

「急で驚いたけど、私たちの分までよろしくね。でも絶対無理しちゃうだめだよ」

「あーやっぱり戦艦はすぐに活躍の場がやってきていいなあ。もし連合艦隊に武蔵さんがいたら、清霜はメジロ島でがんばってるって、伝えてね」

衣笠が少し心配そうな顔をするが、清霜は元気に声をかける。

「武運を祈ろう」

菊月はかしこまって言った。

「山城さん、突然のことだったから満足にお見送りもできませんでしたが、任務の完遂を皆でお祈りしますね」

高雄は申し訳なさそうに送別の言葉をかける。

「転任先の艦隊が山城君に良い艦隊であるように。そしてブーメラン島の友軍を救うため、君の火力が大いに生かされるよう祈っているよ」

マツエダ提督はそうはなむけの言葉をおくるが、山城はどこことなく上の空だ。

最後に那智が挨拶する番となり、山城と向き合った。

「お互いままならぬ境遇でこういうことになったが、貴艦の転属先では戦艦が力を貸してくれるのを待っている。私の原隊の者達を助けてやってほしい」

それが那智の切なる願いだった。山城は軽くうなずいた。

「扶桑型戦艦の恥じることなく、姉様と一緒に戦果をあげてみせるわ」

山城は真剣な顔で言うと同様に礼をした。

「では山城、扶桑姉様の元に参加します」

そう言うなり山城は栈橋をかけていき自分の内火艇に飛び乗った。山城は内火艇ごと自分をダビットで甲板へ引き上げると、素早く錨を引き上げ、機関両舷全速で外洋へ滑り出す。

——頼む。私の分まで……

那智は祈るような気持ちで、黒煙を吐きつつみるみる小さくなつてゆく戦艦山城の船尾を見つめていた。

「さて鬼怒君、清霜君、準備はできてるかい？　春雨君はいつでも出られるそうだ」

マツエダ提督は言うのと、二人は急に慌て出す。

「うわー、そうだった。こうしちゃいられないよ」

「ああ、鬼怒さん待つてよー」

自分の艦の係留場所へ走り出す二人を高雄が追いかける。

「二人とも、忘れ物がないか気をつけて。出港前の確認は急がずにね」

「本土まで行つての、陸軍の輸送船団の護衛任務かあ。あーあ、衣笠さんも一度、本土戻りたかつたなあ……」

羨ましそうに言う衣笠を提督がなだめる。

「また戻る用事もできるよ」

本土は大平洋の西の端に日本列島とそっくりそのまま地形で存在する陸地で、軍司令部や造船所、そこそこ大きな都市が存在している。もつとも、そこへ戻つたことのある艦娘や提督は決して多くない。本土が生産の拠点であり、食料と工業製品の供給源であるため、そこへ行つておいしい物を食べ、贅沢をしたいというのは艦娘共通の思いだった。

「那智君、もし疲れていなければ、明日出港できるかな？」

唐突にマツエダ提督が切り出した。山城を送り出した直後とあつて、那智は少し驚いたが、常在戦場を信条としている那智はすぐに承知すると、高雄とマツエダ提督は満足そうにうなずいた。

なんとか自力航行できるよう工作艦明石から応急修理を受けた軽巡長良と駆逐艦初風を伴ったトビウメ艦隊とプラス某駆逐艦一隻がシューズ・ベラ島からタロタロ島へと帰還したのは太陽の高い昼のことだった。湾内には先日の海戦前と同様に多数の軍艦が錨をおろし、

出撃に備えている。駆逐艦不知火の艦橋から湾内を見回したトビウメ提督は脳裏に先日の作戦発動前のこと浮かび、突然不快な既視感に襲われた。

「司令、大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ」

不知火が気遣うが、提督は魚雷戦方位盤にもたれかかりながら首を振った。

「大丈夫、なんでもない」

——おそらく初風と長良ちゃんの修理は作戦開始に間に合わないだろう

前の作戦で大きく損傷し、孤島で苦労した二人が来るべき作戦に参加しなくて済むことはトビウメ提督にとってせめてもの救いだっただ。

「司令、あそこに扶桑型戦艦がいます」

不知火の言葉に我に返った提督にも、その大型戦艦が重油を供給する油槽船に横付けされているのが見えた。まるで無造作に積み木を積んだような危なっかしいタワー状の艦橋がそそり立っている。

「あれが山城かな？」

「いえ、あれは1番艦の扶桑です。山城はまだ到着していないようですね」

トビウメ提督はぼんやりと艦橋を見上げる。

「高いなあ……。ぬいぬいの艦橋の三倍くらいあるんじゃないかな？」

不知火がうなづく。

「それくらいはあるでしょう。遠い視界を確保することが艦隊砲戦の定石と考えられていました。あの艦橋はそのためのものです」

「ふーん……」

トビウメ提督はカメラを構えると、特に思い入れもなさそうに、無造作にシャッターを切った。

一同が上陸すると、すぐに栈橋へ基地の職員が身元を確認にやってきた。所属を伝えると、職員はクリップボードを手に次々と必要事項を記入していく。

「艦隊構成は？」

「重巡二……じゃなくて一、あと軽巡一、それに駆逐艦が三です」

職員はすぐに湾内の泊地へと目をやる。二隻ずつブイに係留されている艦を数え直す。すぐに不知火がトビウメ提督の袖を引つ張った。棧橋には長い前髪の分け目から左目だけを覗かせた駆逐艦娘の早霜が、何がおかしいのか不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。「えつと……。どうしよう……」

正直なところ、対応に困ったトビウメ提督だったが、相手の職員はかなり忙しそうだし、自分達の込み入った事情をうまく説明してみせる自信もない。

「す、すいません、今のところ駆逐艦は四隻みたいです」

「わかりました。整備、給油、弾薬補充は秘書艦を通じてお知らせします。それでは」

なんとも曖昧でいい加減なトビウメ提督の回答にもかかわらず、職員は合点して手早く書類に記入を終えると去っていった。

——これで良かったのかなあ……

「フッフ、司令官、よろしくお願いしますね、今のところ。フフ、フッフ……」

怪訝な顔で考え込むトビウメ提督の心中を知ってか知らずか、早霜は妖艶に笑う。

——本当にこれで良かったのかな……

提督の問いに答えは出ない。

「ねえ、そんな事より、宿舎は大丈夫なんでしょうね？　また体育館なんて嫌よ」

頭をボリボリかきながら眠そうに突っ立っている加古とスクワツトしながら話を聞いている長良の間で、荒潮が潮風になびく髪をかきあげながら言った。

港内はこの前の作戦準備の時以上に混雑している。当然、艦娘用の宿舎も不足しているはずだ。

「今回も宿舎は市街地のホテルが割り当てられています。よかったですね」

不知火が渡された書面に目を通しながら言った。不知火を除く艦

娘達は一樣に歓声をあげる。

「今日は夕方から連合艦隊司令部主催の戦術策定会議があるようです。司令はそれに出ないとだめなようですね」

トビウメ提督は黙ってうなずいた。もとより覚悟の上だった。

「秘書艦の同伴が許可されていますが、どうしますか？」

「その時間になにかやりたいことはある？」

「いえ、特には」

「じゃあ一緒に行こう」

そう言つてトビウメ提督は書類や本でパンパンになった手提げ鞆を手に宿泊先へと歩き出す。

「ぬいぬいも立派な秘書艦だね」

提督の後を追い、すたすた歩いていく不知火の後ろ姿を見ながら長良が感心して言うのと、加古が苦笑いした。

「ちよつち厳しいけどね……。ナッチはもちつと緩かったかな」

「ぬいぬいにとつては、この世の春ねえ。でも、季節はあつという間にうつろぐものよ、うふふふ」

子供らしい笑顔を浮かべつつも、荒潮が物騒な言葉を吐く。

「司令官、ちよつと感じ変わったわね……。うまく言えないけど、なんだか、あとがないっていうか、いつも以上に余裕無さそう……」

初風だけは、浮かない表情でそう口にするが、他の三人はのんきなものだった。

「えー、そうかなあ？　いつも通り写真ばつか撮ってるけどねー」

「そうだよ、提督は練習試合や消化試合でも真面目に全力出しちゃうタイプだからそう見えるんじゃないかな？」

「あらあら、初風ちゃんも、すっかりしおらしくなつたわね。今更イメチェンのつもりかしら？」

加古、長良、荒潮は各々好き勝手言うが、早霜だけはその言葉を噛みしめるように黙つたまま、初風の肩に手を置いた。

数週間前に訪れたときと同様に、折りたたみイスが並んだ会議室では、すでに白い第二種軍装の提督連中が金モールを付けた連合艦隊司

令部所属の参謀達による作戦説明を受けているところだった。

「以上が先のブーメラン島沖海戦の総括である。次に、陸軍部隊及び上陸部隊と呼応したブ島奪還作戦の説明にうつる」

重傷を負ったモトヤマ司令長官にかわり、フルカワ司令長官代理が得意げに説明していた。

「そこに座りましょう」

他の提督の邪魔にならぬよう、不知火はトビウメ提督を、すみにあいたイスへと座るよううながした。腰をおろした不知火は、提督の表情がいつになく険しく硬直していることに気が付いた。艦隊や島にいるときにそんな表情をしたことがなかったので、不知火は少し驚いた。

——他人が苦手と常々おっしゃっていましたが、確かに重症かもしれませんね

きつと那智は提督のこういう一面もよく知っていたに違いない。那智が、優しくもやや頼りないこの男をどう支えていたのか、不知火は自分で一生懸命に考えて行動するしかなかった。

「さてここからが、本題だ。今回の作戦は知っての通り、陸軍との共同作戦となる。作戦は大きくわけて五段階からなり、我々連合艦隊はその前段となる三段階で特に重要な役割を担うことになっている。諸君、今回は勝ちに行くぞ」

室内の各所から緩慢な拍手が鳴る。不知火はつられて拍手しそうになったが、トビウメ提督は手をたたかない事に気づき、やめることにした。トビウメ提督はむすつと口を閉じたまま、正面で自信たっぷりに話すフルカワを見据えている。

「具体的な作戦内容は艦隊旗艦の大淀から説明してもらおう」

フルカワがそう言うとはいと澄んだ声で最善列に座っていた艦娘が立ち上がった。

黒髪の長い、メガネをかけたクソまじめそうな学級委員長タイプの艦娘は丁寧にお辞儀をしてから自己紹介する。

「このたび、連合艦隊旗艦を拝命いたしました大淀です。わたくしから作戦概要を説明させていただきます」

大淀と名乗った艦娘は黒板に新しい作戦図を貼る。

「まず第一段階。ブーメラン島西方沖合に展開しているとみられる敵深海棲艦隊に対し、水雷戦隊を中核とした先遣隊が北西方向から接近、奇襲と威力偵察をかねて敵に肉薄、打撃を与えた後、速やかに南西方向へと離脱します。この先遣隊の役割はあくまで敵の規模や展開状況を探るためのもので、決して深追いはしません」

熱帯気候のもと、大勢の人間や艦娘が一室に集まっているので、室内はとても蒸し暑くなっている。不知火も汗が伝う額を拭いながら自分のメモ帳に内容を書き留める。トビウメ提督もノートを取りだし、一心に作戦説明を書き留めていた。

「次に第二段階。軽巡、駆逐艦を主とした快速艦で編成された第二分隊が、先遣隊の離脱と呼応しブーメラン島の北方から、まさに友軍が孤立するポートフリスビーへ向けて突撃、港口を閉鎖する敵艦隊を攻撃します。ただ情報によれば敵の封鎖艦隊は複数の重巡、さらに戦艦が加わっているという未確認情報もあるので、第二分隊の目的は奇襲による敵包囲網の攪乱となります。他方角から反復攻撃を加え、続く第三段階で戦艦を含む我が第三分隊をブーメラン島東岸へ肉薄、敵包囲艦隊の撃滅をはかる予定です」

大淀はそう説明し地図に描かれたひとときわ大きい赤い矢印を指し示した。

「第三分隊の役割は、もともと脅威となる敵主力艦隊を無力化し、続く陸軍の上陸部隊の突入路を切り開くことです。本隊は第三分隊の後方に展開し、敵艦隊の撃滅とともにこの位置、ブ島南西部のヤシガニ海岸沖で強行上陸を支援します」

ブーメラン島。南北四十キロ、東西十〜十五キロ、島の北半分は北東から南西へ約十七キロ、そこから南東方向に十三キロにわたって折れ曲がった、まさしく「く」の字型の島で、島名はその形から名付けられたとも言われている。現在、深海軍は島の南端にあるクラゲ海岸から陸上部隊を上陸させ北へ進行中で、陸軍一個連隊が狭隘な「く」の字の中央地点に防衛線を張り、なんとか島の北半分を持ちこたえている状況だが、海上の制海権は深海軍の手にあり、救助のために北端の

港町のポートフリスビーに入港した輸送船団も、敵艦隊の封鎖にあつて身動きがとれない状況にあつた。

トビウメ提督が見たところ、当初ポートフリスビー周辺と島の西部にしか展開していないと思われていた敵艦隊は、今では島の四方に位置し、南端のクラゲ海岸には敵の陽陸艦や補給艦が殺到していると言われていた。状況は前回の時より確実に悪くなっている。

「最終段階、西方、南方で敵艦隊に打撃を与えたタイミングで、ポートフリスビーに孤立している陸軍部隊は一斉に輸送船に乗艦。一方、封鎖艦隊は島の西方、南方で艦隊が撃破されたことを知れば、きつと一部を援護に差し向けるでしょう。敵の包囲が手薄になった時を見計らい、一度後退した第一、第二分隊がポートフリスビーを急襲し、味方船団を救出する手筈です」

大淀はそこまで説明し言葉をきつた。

「二種の波状攻撃か……」

近くに座っていた提督が独り言をつぶやく。不知火はトビウメ提督がノートその言葉もノートに走り書きしたのを目に留めた。すると別の提督の一人が手を挙げる。

「前回の作戦では陸軍部隊の撤退が第一目標でした。今回も、増援部隊の上陸よりまずポートフリスビーの船団救助に戦力を振り向けるのが筋だと思つたのですが」

その提督が疑問を口にする、大淀は戸惑つたように、えっとそれは……と言葉を飲んだ。一方、フルカワや参謀連中を見ると、何度もウンウンとうなずく素振りを見せた。

「確かに君の言うとおり、ブ島に孤立した陸軍や輸送船を救助する事が本作戦の最重要目標であることは変わりはない。だが、非我の戦力差、大局的な戦略目標を考えた場合、救出だけを目標とするのはあまりに消極策に過ぎるという結論に達した。実際、戦力を結集すればブ島の守備は確実、さらに外南洋戦域の外に深海軍を駆逐する千載一遇のチャンスでもあり、いたずらに撤退作戦のみに拘泥してブ島を放棄するに及ばずというのが司令部と軍令部の共通した見解だ」

質問した提督は納得したようで、わかりましたとうなずいたが、す

ぐに別の提督が立ち上がった。それはかつて見覚えのある、あのきつい香水とサングラスをかけた第八艦隊司令のカメヤマ提督だった。

「質問が二つ。一つは制空権の問題だ。前回は序盤で空母が潜水艦にやられた。今回、機動部隊はどう動くのか？ 二点目は、敵の戦力の見立ての論拠と、行動予測をもう一度詳しく聞きたい」

再び室内がざわついた。フルカワをはじめとする参謀連中は不真面目そうな苦笑いを浮かべる。

「おい、またカミツキガメだぜ」

前に座っていた提督の一人がバカにするようにつぶやいた。

「みなさんお静かに。お静かにお願いします」

大淀は一生懸命に場を収めようとするが、一向に静かにならない。フルカワ司令長官代理が何度か手をたたいてから立ち上がった。

「よしよし、そのへんで！ カメヤマ提督の言うように、制空権の確保は作戦成功の前提条件だ。実際、今シューズ・ベラ島にある空母翔鶴は、作戦開始とともに三波にわたって、敵の西方艦隊、敵の陽陸地点であるブ島南岸に展開中の敵輸送船団及びクラゲ海岸の陽陸拠点を徹底的に叩く予定だ。さらにブ島近海の敵情は翔鶴航空隊の偵察機やローリー島から派遣された飛行艇による長距離偵察、さらにブ島の陸軍部隊による決死の沿岸監視により、島北部の敵艦隊の動きは、常時このタロタロ島の臨時司令部と連合艦隊旗艦の大淀まで無電連絡が届く手筈となっている。もちろん私も大淀から直々に指揮をとるつもりだ」

「是非、カメヤマ提督の潜水艦隊にも、前線の背後で有益な情報収集活動に励んでほしいと思っております。くれぐれも情報を一人で抱え込むようなことだけはおやめください」

フルカワの回答に続けて、一人の若い参謀が皮肉混じりに言ったので、さすがのカメヤマ提督はサングラスを自分の顔からむしりとりて怒鳴る。

「おれが一度でも自分の知っていることを出し惜しみしたことがあったか！ お前たちこそ、『通信機の故障で受信できませんでした』なんて言い訳だけはするなよ！」

一見強面のサングラス姿とは裏腹に、素顔は非常に柔和なのだが、今のカメヤマ提督の顔は怒りで紅潮し、眉間には深い皺が刻まれている。

——きつとあの人は自分の艦娘達には、絶対あんな顔、見せないんだろうな

トビウメ提督は妙に冷めた感覚で、参謀とカメヤマ提督の口論を眺めていた。

場が騒然とするなか、フルカワ長官代理がすぐに割ってはいる。

「まあ二人とも落ちついて。指揮官同士で喧嘩しても始まらない。カメヤマ提督の疑問ももつともだ。海軍軍令部も陸軍の参謀本部も、深海軍の陸上部隊に対する増援ペースは非常に緩やかだという見解で一致している。それに敵は陸戦が苦手、敵の兵器陸上も非常に鈍重との報告を受けている。それに、最新の情報では、ブ島近海の戦力比は輸送艦や補給艦など、支援艦艇を除いてもなお、総トンベースでおよそ二万四千総トンほど我が方が上回っている」

「敵の数は多けれど、ほとんどは小型艦。大火力をもつてして蹴散らすのみです」

別の参謀も自信満々の様子でうなずく。カメヤマ提督はサングラスをかけなおすと不満そうにイスについた。

「それでは編成割りを発表します。第一分隊は第三艦隊司令のシンドウ提督、そして第二分隊はカキモト提督に指揮していただきます。二人とも孤立部隊救出の主役となります。よろしくお願いいたします」

「ぜひ乙旗を掲げる気持ちで臨んでもらいたい」

大淀に続けてフルカワも激励する。中年の提督二人が心得たとはばかりにうなずく。

「さて、敵を撃滅する打撃部隊の中となる第三分隊はタロタロ島泊地のトビウメ提督に指揮していただきます。先の海戦における提督のご活躍は大変見事でした。今回も、そのご武運を遺憾なく発揮されることをお祈りいたします」

大淀がトビウメ提督を一同に紹介すると、提督本人は厳しい表情で大きくうなずいた。

「必ず敵を撃滅し、陸軍を救出します」

トビウメ提督はいつになく毅然とそう宣言すると、散発的な拍手が起きた。らしくない振る舞いに、不知火は少し怪訝な表情で自分の提督の横顔を見上げる。

「おお、その意気だ。さて、最後の第四分隊は連合艦隊司令部が直接指揮し敵背後への上陸作戦を成功させる。作戦発動は三日後の一八〇〇。出港までに各分隊で作戦を読み合わせの上、必ずや、暁の水平線に勝利を刻んでもらいたい。以上、解散！」

フルカワ司令長官代理はそう宣言し、会議はおひらきとなった。
「準備がある、行こう」

トビウメ提督は不知火を伴って立ち上がった。第三分隊で打ち合わせが必要になるし、交戦直前まで継続的な情報収集が必要になる。

二人は出入り口でちょうど退出しようとするカメヤマ提督と目が合うと、先方はサングラスをとってトビウメ提督のそばまでやってきた。

「活躍は聞いたよ。今度は分隊司令か。責任重大だな」

腫れ物にさわるようにカメヤマ提督は戸惑いがちに言った。

「カメヤマ提督もご無事でなによりでした。あの時のアドバイスのおかげで、無事に戻れました」

トビウメ提督が礼を述べると、カメヤマ提督は軽くうなずいた。

「今の秘書艦はそちらの駆逐艦のお嬢ちゃんか」

不知火は革靴のかかをと打ち合せ、背筋をピンと伸ばした。

「タロタロ島泊地所属、陽炎型二番艦の不知火です」

カメヤマ提督はよろしくなと不知火に挨拶してから、トビウメ提督を気遣うように言う。

「新しく扶桑型戦艦の指揮官に昇格した提督がいるって、ついさつき噂で聞いたが、君だったんだな。準備は済んでるか？」

トビウメ提督は弱りきった顔で大丈夫と答えたが、戦艦山城にはこれから初めて会うと言うと、カメヤマ提督は驚いて眉をひそめた。

「いろいろ状況の変化が急だったもので……仕方なく。で、でも作戦には全力で最善を尽くします」

「そうか……。そういや、ラポールで、たまたまあの妙高型の彼女に会った」

「え、那智さんに？ その、彼女はどんな様子でしたか？」

「え、どんなって……。うーん、元気そうだったぞ」

二人の間にながったのか、想像を巡らすしかないカメラヤマ提督は当たり障りのない嘘をついた。カメラヤマ提督の目にあの艦娘がとて「元気そう」には見えなかった。

「そう、ですか……」

トビウメ提督は肩を落としてうなずいた。手前勝手なことと自覚しつつも、トビウメ提督にとっては、那智が今元気であっても、落ち込んでいても、どちらも面白くないことだった。

「あら？ お二人はお知り合いだったんですか？」

立ち話に割って入ってきたのは先のメガネの学級委員長、連合艦隊旗艦の大淀だった。

「相変わらず大淀ちゃんはシャキシャキしてるな。そんな肩肘張っていると、作戦発動前に疲れちゃうぞ」

カメラヤマ提督が気安く、からかう。さつき司令部に食ってかかった時とは別人のようだった。

「もう、茶化さないでください」

大淀はむくれたように頬をふくらませる。

「大淀ちゃん、ほんとのところ、こんな力押し of 作戦が段取り通りいくと本気で思ってるの？」

カメラヤマ提督が少しあきれたように問うと、大淀はメガネに手をあてて大きくうなずいた。

「当然です。私は連合艦隊司令部の皆さんを信じています。ブ島奪還は間違いありません！」

思わずビシツという効果音が聞こえそうなくらい、大淀は毅然と答えた。

「本当？ 本気で、絶対？ 百万パーセント？ いやせめて五十パーくらいでも、うまくいくと思ってる？」

カメラヤマ提督がしつこくたずねると、大淀は困ったような表情にな

り、視線が宙を泳ぎ始めた。

二人のやりとりを見ていたトビウメ提督と不知火は思わず顔を見合わせた。

「うまくいったら素敵だなあとは、思っていますよ……」

「ほらあ、やっぱり」

「ち、違います！」

トビウメ提督には、二人がまるで職場の年輩のおっさんと、それにイジられてる新入社員みたいに見えるてきた。

——やっぱり作戦を立案したのは、この艦娘じゃないんだ

二人のやりとりを聞き、トビウメ提督はそう想像を巡らした。

「ダメだよ。大淀ちゃんみたいなのに、いつも作戦の中枢にいる子は、いくら参謀だか長官代理だか、金モールのお偉いさんが相手でも、違うと思っただことは違うって言わないと……」

「そ、そんなことを言われましても。私は誠心誠意お仕えするのが職務ですし……」

「とにかく、あいつらが無茶やりでしたら、大淀ちゃんには体張って止めてもらわないと。これ以上の犠牲はまっぴらだよ」

「はい、わかっています。作戦の合理性を第一に考えています。カメヤマ提督はこれからどうされるのですか？」

大淀が問うと、カメヤマ提督は親指で廊下の奥を示す。そこには青い鯨がプリントされたエプロン姿の艦娘大鯨と水着姿にセーラー服を羽織った、小麦色に日焼けした少女が立っていた。

「もう出撃ですか？」

「明朝な。何かあったらすぐ知らせるから、通信のほうは頼んだぞ。さて明日からまた風呂なし生活だ……」

黙って聞いていたトビウメ提督は少し驚いた。

「え、潜水艦にはお風呂がないんですか？」

「無い無い、潜水艦は、お兄さんところの水上艦艇とは全然違うんだ。まあ本来数十人乗りの艦に艦娘と二人だけだから、水の自由はある程度利くが、専用のシャワー室があるわけじゃないし、潜航中の潜水艦ってのはサウナみたいだからな」

トビウメ提督には、カメヤマ提督がなぜ香水の香りをまとっているのかわかった。

——この人はいろいろなことに気が回る人なんだな

大鯨はカメヤマ提督のそばまでやってくると、礼儀正しくトビウメ提督と不知火、大淀に向かつてお辞儀した。不知火と提督も会釈を返す。

「提督、そろそろ準備にとりかかりませんと。それから、先ほど鳳翔さんが来て、間宮さんもあと一時間ほどで入港すると教えてくださいました」

大鯨がカメヤマ提督へそう伝えると、大淀も思い出したようにうなずいた。

「そういえば、出撃前に特別食の配給をすることになっていました。入港したらきつと大変な騒ぎになるでしょうね」

大淀はうれしさを隠さず言った。そばで聞いていたトビウメ提督と不知火の眼光が一瞬だけ鋭く光る。

——間宮さん、来るのか！

二人とも顔を見合わせ、うなずき合った。あまり大っぴらにはいないが、二人とも無類の甘い物好きだ。

そんなところへふらりと加古が顔を出した。めんどくさがり屋で、真面目な仕事がらみの席にはまず顔を出さない加古だが、今日はどういう風のふきまわしだろうか。傍らには荒潮と初風を伴っている。

「あー、いたいた。提督、なんか戦艦山城が入港したってさー」

不知火には、トビウメ提督が緊張で体を強ばらせるのが、感じとれた。

戦艦山城との顔合わせは港湾管理事務所のタグボート係留棧橋の横でおこなわれた。トビウメ艦隊の一回が出迎えるなか、どういうわけか山城は自分の内火艇ではなく、タロタロ島の作業用タグボートに便乗して陸へ上がってきた。聞けば、山城がいつも上陸用に使っている内火艇は、甲板から海面へおろす途中、吊っていたダビットが突然折れ、舷側にぶつかって壊れてしまったという。二艘目を下ろそうと

したが、それはしばらくエンジンをかけていなかったため始動せず、やむなく一番小さい手漕ぎのカッターを使おうとしたが、それには底に穴があいていたため、たちどころに沈んでしまい、やむなくタグボートに乗せてもらってきたという。

巫女装束のような装いに赤いスカートのコントラスト、セミシヨートボブにした黒髪を海風に揺らせ、艦橋を模したトンガリコーンのような艤装が額に乗っている。内火艇を下ろす際にぶつけたのだろうか、その艦橋は変な方向へ曲がっている。

戦艦娘は美しさと妖艶さを兼ね備えた者が多いと噂されていたが、山城は先日会った金剛とはまた違った雰囲気醸し出す、美しい艦娘だった。

「あ、あの、タロタロ島遊撃打撃艦隊のトビウメです、よろしく。そして彼女が今秘書官をやってくれている陽炎型の不知火」

不知火は、よろしくですと頭を下げた。提督は艦隊の仲間を紹介すると、山城はジーと一同を眺め回した

「扶桑型戦艦、二番艦の山城です」

山城は威勢良く自己紹介し深くお辞儀をしてから、急に不安そうな表情でたずねる。

「……あの、扶桑姉様はどちらでしよう?」

「え? ああ、戦艦の扶桑さん? 扶桑さんは今度の作戦では同じ第三分隊で一緒に行くけど。艦隊はここじゃないんだけど……」

トビウメ提督がしどろもどろに説明していると、山城の不安げな顔は、徐々に青ざめた絶望のそれへと変わっていく。

「そんなあ……、姉様と同じ艦隊と聞いて、この山城、はるばる絶海の孤島までやってきたというのに……。そうよ、きつと詐欺よ、また騙されたのよ……。不幸だわ……」

「いや、そんなこと……。た、確か戦艦扶桑は、お、同じ第三戦隊所属だから、今夜にも会えるから、それに、誰も騙すなんてことしないよ」
慌てふためいて必死に提督がなだめるも、まったく要領を得ない。
不知火は露骨に舌打ちする。

——とんだメンヘラ戦艦ね

「お願いぬいぬい、怒らないで」

提督は周りに聞こえないように小声でなだめる。

その他のメンバーも、悲劇のヒロインみたいになってしまった山城を前に、どうしてよいかわからず立ち尽くしている。

「戦艦扶桑は現在、連合艦隊司令部直轄で、本日付けで第三戦隊指揮下に配属されています。夕方、戦隊が集まって作戦の読み合わせをおこないます。一緒に来れば扶桑さんに会えますよ」

不知火が先に配布された編成割りを見ながら言うと、いじけていても、それはそれで憂いのなかに美しさを秘めた山城の顔にぱつと明かりが差した。

「本当？ その集まりには私も一緒に行つていいのね？」

「当然です。今日から同じ艦隊の仲間ですから……」

不知火が笑みを浮かべて言った。不知火の作り笑みほど酷い表情もそうないかと、トビウメ提督は以前から思っていた。普段あまり笑顔を見せることがない不知火が無理に笑顔を作ろうとすると、それはまるで罰ゲームでニガウリのペーストを舌に山盛り乗せられたような顔になるのだ。それはもはや笑顔ではなく、怒りや忍耐、葛藤や理性といったものがムラだらけにちりばめたような顔だ。今の不知火はまさにそんな表情だった。

「山城さん、次の作戦では山城さんが戦隊旗艦になるんだ。あとで艦の様子を案内してくれないかな？」

「わたしが旗艦？ 姉様を差し置いて、いいのでしょうか？」

「う、うん軍令部の意向でね」

「わかりました。扶桑姉様をお招きした後でしたら、いいですよ」

「そ、そう、ありがとう……」

——さつきから、お姉さんのことばかりだな……

トビウメ提督は苦しい笑みを絶やさずうなずく。

「じゃ、じゃあ、せっかくだから親睦もかねて街の喫茶店にでも行こうか」

トビウメ提督は財布から軍票を取り出しながら言いかけたが、山城が首を振る。

「すみません。わたくし、まだ扶桑姉様にご挨拶をしていません。お茶はその後で……」

不知火がまた舌打ちするので、慌ててトビウメ提督はなんでもない様子で笑ってみせる。

「ははは……。それは仕方ないね。あ、後にしようね。読み合わせは一七〇〇の港湾管理事務所前で待ち合わせだからね」

「はい、承知しました」

「山城？ やっぱり山城なのね」

倉庫の角から姿を見せたのは、感娘の山城と同じ巫女装束に赤いスカート姿の艦娘だった。長さは腰に届くだろうかと思えるくらい長いストレートの黒髪が風に揺れ、頭についた斜塔のような艀装は山城とは反対に左にある。儂い微笑みを浮かべる白い細面の顔には若干の憂いの影が見られる。

「ふ、扶桑姉様！」

はつと振り返った山城はその艦娘に駆け寄る。

「姉様、この山城、姉様との再会を日夜心待ちにしておりました」

山城は扶桑の首に手を回し、涙を流す。

「山城、これからは一緒よ。次の作戦、一緒にがんばりましょう」

「はい姉様、この山城、姉様に一生ついて参ります」

山城は大粒の涙を流しながら言う。

「感動の姉妹再会ですね」

一同、呆気にとられるなか、不知火が冷ややかにつぶやいた。

ひとしきり涙の再会を見せつけた後、扶桑が提督達へ向き直った。

「扶桑型一番艦の扶桑と申します。これから山城がお世話になります。わがままな妹ですが、今度の作戦では、どうかよろしくお願い申し上げますね」

「いえ、こちらこそ。戦艦の火力に期待しています。なんとかこの作戦、成功させましょう」

トビウメ提督がガラにもなく決然と言った。それを受け、扶桑もうなずく。

「そうね。山城、がんばりましょうね？」

「はい姉様、扶桑型戦艦の火力で、敵艦隊を必ずや粉碎して見せます！」

ついさっきまでの悲劇のヒロインは、いつのまにか闘志爛々の熱血淑女に変わっていた。

「じゃあ、一度解散にしましょう。作戦読み合わせまでは自由時間とする。それから、初風と長良ちゃんにはちよつと頼みごとがあるんだ」

トビウメ提督がそう宣言すると、扶桑と山城は会釈して去っていく。扶桑の艶のある黒くて長い後ろ髪が海風に吹かれ、毛先が軽やかに揺れた。その黒髪に一瞬目を奪われたトビウメ提督の心に鈍い痛みが走る。今思い出すべきでない別の黒髪の持ち主のことに思考が飛んだ。

「司令、司令……。司令？」

不知火に呼びかけられ、トビウメ提督ははつと我に返る。

「大丈夫ですか？」

「ああ、うん。なんでもない、大丈夫。えつと……」

不知火は怪訝そうな顔を見せながら言った。

「戦艦山城は扶桑と共同で運用するのが望ましいようですね。司令は扶桑を旗艦にしたほうが良いかもしれません」

「そうだね。ちよつと様子を見ないと。でも、戦艦扶桑はそもそも外南洋戦域の管轄じゃないから、山城に白羽の矢が立ったみたいなんだけど……」

トビウメ提督はそう答えながら、歩いていく扶桑の黒い髪から目を離せずにいた。

「ねー、ところで用事って何なのよ？」

そばで待っていた初風が口を尖らせる。トビウメ提督はようやく目が覚めたような顔をして初風と長良へと体を向ける。

「そうだった。実はさつき、極秘情報を聞きちゃった」

いつになく真剣な提督の様子に、初風と長良も息をのむ。

「よく聞いてね。実はもう間もなく、このタロタロ島に給糧艦問宮がやってくる。きつと湾内に入ってきた時点で大騒ぎになる。二人は

先んじて内火艇で出て行って待ち伏せするんだ」

そう言つてトビウメ提督は財布からありつただけの軍票を出して二人に渡す。長良と初風は驚愕の表情で顔を見合わせた。

「中でも羊羹でもあんパンかラムネでもいい。買える物をありつたけ買うんだ。せめて出撃前くらい、みんなで甘いものを好きだけ食べよう」

鬼気迫る顔でそう指示する提督に、二人は真剣な顔でうなづく。

「それは確かに一大事だわ……」

「うん、こうなつたらウォーミングアップ無しでいくよ、初風ちゃん」

「隊の士気に関わる重大な任務です。頼みましたよ」

不知火がそう言い添えると二人は内火艇棧橋へと走り出した。

「出撃前に間宮か、なんか幸先良さそうじゃん。ね、提督」

加古がうれしそうに言う。今はこの楽天的な加古の言うとおりになればいいなとトビウメ提督は思った。

マミヤ・コミント

「伊良湖ちゃん！ 洗濯板五本と最中三十個！」

「抹茶アイス、抹茶アイスを八人分ください！」

「スポンヂケーキ、スポンヂケーキはないんですか？」

トビウメ提督の予見したとおり、給糧艦間宮の入港はタロタロ泊地に大きな混乱をもたらした。間宮が半月湾の入り口に姿を見せるや、艦娘や提督、基地の主計担当らが内火艇やカッターに飛び乗って、まだ係留作業も済んでいない間宮めがけて殺到した。すでに湾の真ん中で内火艇に乗って待ちかまえていた長良と初風もうかうかしていらなかった。間宮が錨を下ろし、艦舷から舟艇をつなぐための係船桁を広げると同時に長良がその下へ内火艇を滑り込ます。初風がもやい綱をつかんで急いで船に縛り付けた。

「長良さん行ってー！」

「うんー！」

長良は操舵輪を手放し、縄梯子に飛び移ると、まるで猿のごとくするするとよじ登り、平均台のような細い係船桁の上を軽やかに駆け抜け、間宮の上甲板へとジャンプした。

——さすが、運動神経良いわね。ああ、わたしもこうしちゃいられないわ

すぐに別の内火艇も間宮に乗り移らんと係船桁へ近づいてきた。初風も麻のずた袋を肩にかけて縄梯子をよじ登る。初風がなんとか間宮の上甲板にたどり着き、周囲を見回すと、内火艇やボートが群がり、提督や艦娘が乗り移ろうと酷い騒ぎになってきた。その様はまるで獲物に群がる海賊の群れのようだ。

「皆さん、慌てないで。急いで縄梯子を登ると危険ですから。ゆっくりとー！」

甲板から艦娘の伊良湖が声を張り上げて注意するが、聞く者はいない。

「い、伊良湖ちゃんがいるぞー！」

「イ・ラ・コ！ イ・ラ・コ！ イ・ラ・コ！」

「海賊」の群れは、間宮に次ぐ艦隊のアイドル・ナンバー2の降臨にかえって大はしやぎとなり、謎の伊良湖コールまで始まる始末だ。

すでに長良と初風の前には、デリックで船倉の冷凍庫から引き上げられた氷漬けの野菜や冷凍肉と並んで、アイスクリームの箱や果物の缶詰、それに間宮名物の羊羹「洗濯板」がすのこの上の山と積み重ねられている。

「洗濯板五つと最中二十個にアイス一箱。えっと、それに……」

「長良さん、あそこに司令官の好きなドーナツケーキがあるわ!」

「あつ、じゃあドーナツケーキも十個、それにラムネを二ダースください」

伊良湖とともに手伝いに来ている主計科の職員に長良達は早口で注文する。二人が注文を終える頃には、間宮の甲板はすでに多くの艦娘や提督が押しかけ、大混乱になった。

軍票で支払いを終えた長良は、箱に詰めてもらった品物を伊良湖から受け取り、甘味を求める餓鬼の群れを押し分けて係船桁まで戻る。内火艇は次々、集まってくる。

「そういえば、伊良湖さんはいたけど、間宮さんいなかったわね」

「そうだね。下で料理でもしてるのかな?」

初風の言葉に、長良もそう言われてみればと周りを見回す。

「出撃前にみんなで間宮さんの特製料理、食べられたらなあ……」

状況が許すときは、間宮は停泊中、自艦の食堂を開放し、自慢の手料理を振る舞うこともあった。

初風は長良の言葉で、ふわふわのオムレツやジューシーなカツレツを想像し、一瞬夢見心地になったが、望み通り手に入った手元のご馳走を思い出し、慌ててその想念を振り払う。

「あ、あまり出撃前にいいことばかりってちょっと、怖い……。わたしは、みんなが作戦から帰ってきた時にしたいかな……」

「もー、初風ちゃん、ちょっとナイーブだよ」

長良は呆れたように笑い、二人は自分たちの内火艇へ箱を下ろすため係船桁へ向かった。

その頃、一隻の内火艇が間宮の艦橋から一番近い舷梯につき、白い

制服姿の小柄な中年男と和服姿の艦娘が間宮の舷梯へ乗り移った。その提督は小柄だったが背筋がピンと伸び、穏やかながら常にキリツとした雰囲気まとった提督だった。艦娘の一人は頑丈そうな体格のボブカットヘア、泰然自若とした無愛想な艦娘で腰に軍刀を帯びており、まるで江戸時代の任侠者のような装いだ。三人目は鴉色の弓道着に袴をはいた長い黒髪をゆった穏やかそうな艦娘だ。三人連れは甲板上の大騒ぎを尻目に艦橋構造物へと上がっていった。

ラツタルを上がると廊下のかすかな香水の残り香が三人の鼻をつく。

「彼は先に来ているようだ」

任侠風の艦娘がぼそりとつぶやく。通信室の前へやってくると内側からドアが開いた。

「お！ お疲れ様です。来ましたね」

サングラスをとった匂いの発生源こと潜水艦隊司令のカメヤマ提督が顔を出した。

「おひさしぶり、カメヤマ提督もお元気そうで」

カメヤマ提督が薄暗い通信室に三人を招き入れると、その小柄な提督は帽子をとって室内の面々に挨拶する。

「どうも皆さん、ご無沙汰しています」

「ナス提督！ お久しぶりです！ さあこちらにお掛けください。それに鳳翔さんと日向さんも、さあ入ってください。今冷たいお飲み物、お出ししますね」

この給糧艦の主、艦娘の間宮の表情がいつも以上にぱあつと輝いた。白いエプロン姿の間宮は嬉しそうに氷出し玉露をグラスへ注ぐ。「なんだよ、間宮さん。おれが来たときの営業スマイルとはちよつと態度違うんじゃない？ 傷つくなあ〜」

カメヤマ提督がニヤニヤしながらからかうと、間宮は少し頬を赤くして、そんなことありませんと慌てて否定する。カメヤマ提督のそばに控えていた艦娘の大鯨と、ナス提督の横にいる空母艦娘の鳳翔は、もうお決まりとなったこのやりとりを笑顔で見守るのみだ。もう一人、いつもクールな表情でいることの多いナス提督の秘書艦である戦

艦娘の日向でさえ、今は少し薄笑いを浮かべている。

以前、任務で外南洋に進出した給糧艦間宮を執拗に付け狙った潜水艦隊の猛攻を全力で退けた時の海上護衛部隊の指揮官が、この物静かなナス トモズミ提督だった。ナス提督と合うと間宮さんがなぜかいつも以上に機嫌がよくなるというのは、一部の艦娘や提督の間でだけ知られていた。

「しかし、ナス提督も気をつけてください。うちの潜水艦が噂で聞いた話なんです、ある機動部隊の司令官をやってる男が、みんなからアイドル扱いされてる部下の空母娘と場所柄もわきまえずイチャついたからさあ大変だ。その艦娘のファンだった嫉妬に狂った男どもから陰湿な嫌がらせにあつて、ほうほうの体で島から叩き出されたつて話です。鳳翔さんを囲ってる提督が、間宮さんからも想いを寄せられてるなんてことが知れた日には……。想像するのも恐ろしいですよ」

「カメラマ提督！ 囲ってるだなんて人間きが悪すぎます」

「そうですよ、いくら冗談でもナス提督と鳳翔さんにそんな言い方なさらなくてください」

さすがに、鳳翔も間宮と口をそろえてカメラマ提督をたしなめる。

日向も笑い出す。

「あーあ、二人から揃って嫌われちゃったよ……。おれの理解者はやっぱり大鯨だけだな」

大鯨も、知りませんと笑いながらそっぽを向いた。

狭くて薄暗い通信室にこれだけの人数が詰めかければ室内には熱気がこもる。扇風機はひっきりなしに首を振り、換気装置からも外気が流れ込んでくるが、肌にはじつとりと汗が浮く暑さだ。

「あら、おいしい日本茶ですね。本土の茶葉ですか？」

「はい、今年の新茶ですよ」

間宮は嬉しそうに答えた。

「甘いですね。冷たくて生き返る感じです」

「ああ、確かに悪くない。特に暑いときはな」

ナス提督と日向も舌を鳴らす。

「それは良かったです。氷出しだからですよ。鳳翔さん、あとで茶葉をお分けするから是非持って帰ってくださいね、もちろん、大鯨ちゃんとかメヤマ提督もね」

「呼ばれた順番が気になりますが、どーも……」

拗ねたようにカメヤマ提督がぼやき、一同ひとしきり笑ったあと、皆、急に静かになった。

「さて、出撃前の忙しい中、集まってもらってありがとうございます。特に間宮さんは軍令部の反対も押し切って、この前線のタロタロ島まで来てくれました」

「本当にお疲れ様です」

ナス提督と鳳翔が間宮に頭を下げた。

「間宮さんに危険な前線まで出てきてもらったのは、艦隊の慰問のためだけではありません。というのも、深海軍の動静に少し気になる兆候があらわれたようです。そうですね？」

ナス提督に促されて、間宮はうなずいた。

「ええ、わたしはローリー泊地に停泊していた一週間前から南方戦域の電波発信状況をつぶさに監視していました。あらゆる周波数帯、特に新海軍がよく使う長波から超長波帯の電波の発信に耳を尖らせていると、四日前から突然、南西から南南西方向からの通信回数が増したんです」

間宮はそう言って、ノートをテーブルに広げる。それは間宮が傍受したあらゆる通信の時間、周波数、方向、内容が全て記録されていた。

給糧艦間宮。艦隊の胃袋を支え、甘味などの嗜好品の製造と輸送を一手に引き受ける艦隊のアイドル・ナンバー1として知られる間宮は、高性能の通信設備を擁して味方艦隊の通信をチェックし、機密漏洩有無や通信に用いるモールス符号の精度を監督する無線監査艦として顔を持っていた。司令部機能を有する艦に匹敵する間宮の通信装備は本来、敵の通信に耳をすませるための物ではなかったが、ナス提督とカメヤマ提督のたつての頼みで、密かに新海軍の通信傍受を続けていた。

「五日前の通信回数は、ローリー近海に潜む新海軍の潜水艦によるも

のを入れてもわずかに六回、その前も八回と五回と日に十回を超えることはありませんでした。それが四日前から、南南西の敵本拠の方角から発信されたものだけでも十八回、戦線の内側に浸透した敵潜水艦のものも合わせれば二十四回にまで急増しました。三日前は三十一回、一昨日は二十九回、昨日は四十五回、今日はすでに三十八回も受信しています」

「まだ一五〇〇か……。今日も増えそうだな」

日向が壁の時計に目をやってつぶやいた。間宮は黒いレコード盤を取り出し、小型蓄音機にのせる。

「今日午前中に録音したものです」

間宮がゼンマイを回してレコードを回すと、ざらついた雑音とともに、「た」とも「ち」ともつかない音が不規則に何度も発せられた。

ター、タタツター、ター、ター、ター、タタタタ、タツタタータタツター……

「大鯨、意味わかるか？」

「いいえ、まったく……」

カメヤマ提督の質問に大鯨は困惑して首を振る。

「艦娘にわからなきや、おれたちに分かるわけ無いな」

深海棲艦が用いる言語は人間には到底認識できないものといわれており、艦娘にすらその解読はできていなかった。

「ふむ、この世界にもスパコンがあればよいのだがな」

日向がしみじみと言う。提督二人はくすりと笑うが、スーパーコンピュータどころか電算機すら知らない他の艦娘三人ははてな顔だ。

「さつすが日向ちゃん、勉強家だな」

艦娘の日向は妙に現実世界の進歩に詳しい。実際、前の世界で自分が解体された後の歴史や戦史、兵器についても、後世から来た提督以上に詳しくあったりする。どこで勉強したのか、この世界には存在しないはずのスーパーコンピュータの力も知っていたのだ。

「あ、またです！今アンプに出します」

間宮は壁際の一際大きい木製の無線機と繋がったヘッドホンを耳にかけるとノートに鉛筆を走らせる。

チツチツチツ、チーチチチ、チチツチーチチ……

スピーカーから雑音紛れに小さな音が四十秒ばかり続いて突然途切れた。

「周期や長さに規則性はあるんでしようか？」

鳳翔の問いに間宮は首を振った。

「通信の間隔も長さもばらばらです。なにか意味がわかればいいのですが……」

「四日前に何か動きがあったか？ 例えば、我が方がなにか新しい変化を見せるようなことか？」

日向が誰にともなく言う。一方、カメヤマ提督は間宮のノートを見ながら自前のソロバンで何やら一人で計算し始めた。

「昔の偉い海軍参謀は、なんでも数字を可視化して考えるようにしていたらしい。えーと、昨日の通信回数はそれ以前の十日間平均と比べておよそ五百パーセント増、それに増加した四日前からはそれ以前と比べて平均四百パーセント増だ。知っての通り、長波は長距離通信や海面下の潜水艦との通信でよく使われる。恐らく遠方の艦とのやり取りが多いはずだ。やつら、かなり広い地域に散らばった艦を動かして何かをしようとしている」

ナス提督はなるほどとうなずき、間宮に尋ねる。

「敵の中波や短波はどうですか？」

「日に一、二件だけで、大きな変化はありません。きつと近くに潜んでいる潜水艦同士の通信だと考えられますね」

「四日前……、君、たしかブ島に上陸させる陸軍部隊を満載した輸送艦四隻がローリーへ到着したのが五日前の夜だったな。もちろん偶然かもしれないがね……」

日向が思い出したように言うとかメヤマ提督もうなずく。

「確かに、ローリー島の周辺には常に敵潜水艦が潜んでいて、こちらの様子を伺っているはずだ。陸軍部隊の輸送船を見つけてこっちの反攻の意図に気づいたかも知れない」

「軍令部やGF司令部は知っているのか？」

「ええ、毎日の通常報告とあわせて臨時報告も提出していますが、特に

追加の指示や命令はきていませんね」

尋ねた日向は呆れたようにため息をついた。

蒸した室内は重苦しい空気に包まれた。

「大鯨、予定変更だ。今日の夜出る。シオイはもう準備できているはずだ」

唐突にカメラヤマ提督が言うので、大鯨は驚く。

「ええ、急にですか？ 今日の夕飯は私特製のカレーでしたのに」

「情報が足りないからな。少しでも早いほうがいい。悪いことはつく知ったほうが得つてな」

「わかりました。シオイちゃんと二人分、急いでお弁当つくります」

大鯨は観念したようにうなだれた。どうやらみんなでの夕食を楽しみにしていたらしい。

「間宮さんはいつまでこの泊地にいられますか？」

「軍令部からは糧食を供給後すぐに帰還するよう命じられています。可能な限り、ここで皆さんのお手伝いをするつもりです」

ナス提督に間宮は決然と言った。

「間宮さん、ありがとうございます」

と鳳翔が頭を下げる。

「私と鳳翔で、自主的に付近の航空哨戒を強化しよう。敵は何を考えているかわからんぞ」

日向はそう言つて腕を組む。

「間宮さん、引き続き、敵通信の監視をお願いします」

「はい、承知しています」

一同が艦橋構造物から甲板へと出ると、そこでは相変わらず甘味の争奪戦が続いていた。

「島や艦隊の皆さんにはお気の毒ですが、明日から糧秣や嗜好品の供給量を減らして任務完了の時間を稼ぎます。そうすれば軍令部への言い訳も立つでしょう」

そう間宮が言ったのもつかの間、目ざとい艦娘の一人が甲板上の間宮本人を見つけた。

「見ちゃいました！ あそこに間宮さんがいますよあああ！」

「うおおお！ 間宮さーん」

「間宮さん、一緒に写真撮らせてください！」

「おれにはサインください！」

主に提督連中を主体とした間宮ファンが一斉に殺到するので、一同はまともな別れの挨拶をする間もなく、それぞれの内火艇で自分の艦へと戻ることになった。

ギンガ泊地

タロタロ島の西の水平線に夕日が沈んで1時間後。基地の建物や湾内の艦船は、灯火管制により空と海面の反射のコントラストの間で黒いシルエツトとしてうつすらと浮かぶだけだ。タロタロ泊地・半月湾の隅で潜水母艦大鯨に接舷している巨大な潜水艦・伊四〇一に小さな内火艇が近寄ってきたのは一九〇〇時を回った頃だ。

「あ、ねえねえ大鯨さん、提督。間宮さん達だよ」

艦娘のシオイが潜水母艦の甲板にいる大鯨とカメラヤマ提督を呼ぶ。

ほぼ出港作業を終えた二人が甲板から見下ろすと、信号灯だけを灯した内火艇が伊四〇一の横で止まり、船首に立っていたさむらい姿の日向が舳い綱を持ってシオイの甲板に飛び移った。

シオイが係留金具をもって日向を手伝うと、バスケットを抱えた艦娘の間宮と鳳翔が足元がおぼつかない様子で日向に手を貸してもらいながら恐る恐る潜水艦の甲板へと移った。

「驚いたな。二人ともどうしたんですか？」

カメラヤマ提督と大鯨は慌てて縄梯子を降りて、伊四〇一で急な来訪者を出迎えた。

「出発前のお忙しいところごめんさい。ただ、昼間はあんな騒ぎになっちゃってしまって、せっかくの玉露をお渡しできませんでしたから」

間宮はそう言ってバスケットから漆塗りの茶筒をとり、カメラヤマ提督へ差し出した。カメラヤマ提督は恐縮しつつそれを受け取ると、大鯨とシオイに見せる。

「間宮さんが持ってきたくれた本土のお茶だ。よかったなー。氷出しで冷たくしても飲めるそうだよ」

「やったねー！」

「間宮さん、わざわざありがとうございます」

シオイと大鯨もぺこりと頭を下げる。

「それはそうと、日向さんはいつもどおりとして、そちらの二人はいい……」

カメラヤマ提督はやや困惑気味に頭をかいた。というのも、間宮も鳳

翔も今夜はいつもの仕事着でなく、白地に明るい色の花びら模様を染め抜いた艶っぽい浴衣姿だった。

二人とも顔を赤らめてうつむく。

「出撃前にこんな格好では失礼かと思ったのですが……」

「ナス提督が、浴衣姿でカメラヤマ提督達をお見送りしてはと強く勧めますものから……」

鳳翔と間宮は恥ずかしそうに身をよじりながら言った。その二人の仕草がなんとも色っぽく、カメラヤマ提督は目のやり場に困ったように首を振りながら笑う。

「いやはや、こいつは眼福だなあ。ナスさんには借りができちゃった」「お二人とも本当におきれい。わたしも浴衣着てみたいです」

「あー、わたしもー、わたしもー！」

大鯨とシオイも二人の浴衣を絶賛する。

「お返しは帰還までツケおきますので、必ず無事に戻ってきてください。無茶は禁物ですよ」

そう冗談を言いながら、内火艇から制服姿のナス提督がシオイの甲板へ渡ってきた。

「お赤飯の缶詰がいつくか残っていたので、無事帰路についたら二人で召し上がってくださいね」

鳳翔は濃緑色に塗装された缶詰五缶をシオイ達へ差し出した。

「出発前にこんな良いことばっかだと、逆に撃後が怖くなるな」「嫌ですわ、そんな怖い冗談……」

カメラヤマ提督を間宮がたしなめる。

「ねーねー、なんで日向さんは浴衣着てないのー?」「ずっと黙って見守っていた日向にシオイが尋ねる。

「そうですよ。日向さんの分もせっかく用意しておいたのに……。提督もあれほどおっしゃったのに頑固なんですから……」

シオイと鳳翔から責められ、それまで泰然とみんなを見守っていた日向は急に分が悪くなり、困ったように少し咳払いした。

「いや、別にわたしは頑固だからって、その……」

「まあ日向は常在戦闘ということでご容赦を。彼女にすれば、くつろ

ぐのは戦の後ということですよ」

ナス提督はそう言つて、困つた様子の自分の秘書艦に助け舟を出した。

「そっか、おれは日向さんの浴衣姿も見たかったけど、次回のお楽しみとしところか」

「うむむ、わたしは少しタバコを呑んでくるぞ」

日向は照れ隠しにつぶやくと、懐からキセルを取り出し潜水艦の艦尾の方へ歩いていく。

「長居もできないな。間宮さん、その後の敵の通信状況は？」

「今日は累計で四十六回を数えています」

ナス提督が聞くと間宮は不安そうな顔で言った。敵の通信は依然、高頻度で推移していた。

「うちはとりあえず敵の近くギリギリまで寄せます。何かあれば無電ですぐ知らせますよ」

「間宮さんもいるし、うちも日向がいるので、電文は必ず拾います」

戦艦は、空中線の短い駆逐艦や展張位置が低い空母よりもずっと通信能力が高い艦種だった。少し離れたところでキセルをくわえていた日向も任せてくれとうなずいた。

潜水艦を見送るため一同が戻ろうとしたとき、ふと気まぐれな一塵の南風が伊四〇一の甲板上を吹き抜けた。間宮と鳳翔の浴衣の裾がめくれ、一瞬だけ白い素足があらわになり、艦娘二人は小さく叫んで浴衣を押さえた。

別に何が見えたわけでもなく、一瞬膝くらいまでめくれたに過ぎないが、分別ある中年男二人を年甲斐もなく狼狽・絶句させるには十分すぎる破壊力があつた。カメラマ提督とナス提督は、若者がやるように「ヒュー」とか「おおお！」などと声を上げて喜ぶ真似はしなかつた。すぐに帽子を目深に被りなおし、バツが悪そうに素知らぬ様子を決め込む。

——— 那样的いえば、「大根足」という言葉は本来、太くて不格好な脚ではなく、白く細い美脚を意味する褒め言葉だったらしい……

ナス提督は無理やりすつとぼけたことを考え、眼前にちらつく白い

柔肌の像を脳裏から追い出そうと試みた。

「提督、見ました？ 見ちゃいました？」

「バ、バカ、何のことだ！」

シオイがニヤニヤしながら聞くので、カメヤマ提督はムキになって首をふるが、間宮と鳳翔は顔を真赤にしてうつむく。一方、潔癖症の大鯨は男性陣二人があきららかに色気づいた気分になっていることを察し、シヨツクを受けたような顔で思わず叫ぶ。

「ふ、ふ、二人とも不潔です！」

何も言い返せない「不潔」な提督と恥じらう艦娘二人を救ったのは、それまで笑いをこらえていた日向だった。

「ハハハハ、時間もそろそろ良い頃だ。出港前にカメヤマ提督が運を使い果たしてしまわないよう、失礼しようじゃないか」

「もう、日向さんたら……」

ようやく鳳翔たちも顔を上げて、潜水艦隊の一同に一礼すると内火艇へと戻る。

カメヤマ提督とナス提督は苦笑いを見合わせて握手する。

「この上ない手土産でした。この御礼は任務で返します、な、シオイ」

「うん、まかせて！」

「ご無理は禁物ですよ」

提督二人はそう言って別れを告げた。

「提督、シオイちゃん、どうかご武運を」

間宮と鳳翔も別れの挨拶を済ませます。

ナス提督らが内火艇に戻ると、駆逐艦以上の巨体を誇る伊四〇一は大鯨からゆつくりと離れた。鳳翔と間宮は内火艇の上で敬礼し、ナス提督は手をふる。月が雲に隠れ、一段と夜の闇が増すところを見計らい、半月湾の外へと姿を消した。

「うわー！ 洗濯板だあ！ 一人で一本、全部食べられるなんてすごい久しぶりだよね」

間宮名物の煉羊羹、通称「洗濯板」にくろもじを刺した加古が喜ぶその隣では、長良が羊羹とアイスクリームを両手に首を振る。

「ああー、これを全部食べちゃったら、明日はプラス十週走らないと駄目だし、どうしようー、ああ〜悩む〜」

一方、荒潮と初風はキンキンに冷やした桃缶を一人一個、たいらげていた。

「おいしーわね〜。もう一つ食べようかしら〜」

がつついて食べている様子はないのだが、すでに一缶目のシロップまで飲み干してしまった荒潮は氷水を張ったオスタップ（たらい）につかるパイン缶を手にする。

闇夜の半月湾に停泊中の重巡加古の後甲板では、トビウメ艦隊によるささやかな甘味祭がひらかれていた。明かりはいくつかのランタンのみで、光が空へもれないよう、後甲板はキャンバス地の天幕で覆ってある。海上に重巡加古が選ばれたのは艦隊で一番広い甲板スペースを持つているからだ。

不知火はアイスクリームカップにのった抹茶アイスを一口一口、味わうように噛みしめながら、艦隊の客人二人を見つめていた。その視線の先には扶桑型姉妹が折りたたみ椅子に座りながら、アイスクリームとドーナツケーキを次々と口に運んでいる。

「山城、まさかこんなところで間宮さんのドーナツケーキが食べられるなんて、夢のようね」

「はい姉様、山城感激です。姉様、もう一ついただきましょう！」

戦艦姉妹はお菓子に舌鼓を打ちながら、二人で幸せそうに談笑している。懇親をというよりも完全に二人の世界に入っている二人の様子を、少し離れた通風筒に腰掛けたトビウメ提督も、ラムネ瓶片手に黙って見つめていた。

「何よあの二人……。せっかく司令官のためにドーナツケーキもらってきたのに……。ほとんど食べちゃってるじゃない」

提督のそばへ、切り分けた羊羹の乗った皿をもって初風がやってきた。

「まあまあ、はじめて来たお客さんだし、僕は好きだけラムネ飲んでるから。それより早霜さんはいないのかい？」

「早霜はここにいますよ……」

トビウメ提督がそう言い終わらないうちに右の耳元にぬるい吐息とともに早霜が答えた。

「う、うわあ、び、びっくりした……。い、いつからそこに？」

急に闇から浮かび上がったように出現した早霜に、提督は肝をつぶして思わず飛び上がりそうになった。

「三分と四十一秒前からです。私のような者にも気を使ってくださいなんて、司令官、いい人なのね。フフ、フフフフ……」

「い、いやあ、べ、別に……」

——三分だつて？ 全然気配なかったぞ？

「早霜は何食べるの？ 最中でも羊羹でも、今夜だけは何でもあるわよ」

「フフフ、ありがとう初風さん。では、最中、いただくわ」

「司令官も、さつきからラムネばかりじゃない。そういえば、特別にスポンジケーキもらってきたから司令官も食べましょう」

「ああ、そうだね」

「初風さん、司令官のためには一生懸命なのね」

早霜がいたずらっぽくいうと、初風は真つ赤になって首を振る。

「は、はー、違うし。別に司令官なんか気にしてないしー」

初風はそう言つて肩をいからせながらお菓子を取りに行つてしまった。

「早霜さん、あまり初風をからかわないでください。一度へそ曲げると、あとで大変なんだから……」

トビウメ提督が苦笑いすると、早霜は口の前で手を組んでクスクスと笑う。その表情は年相応の少女の屈託ない笑顔だった。

「ごめんなさいね。わたし、とても楽しくてつい……。フフ、フフフ……」

相変わらず笑い声は不気味だったが、トビウメ提督は初めて安心したような親しみこもった笑みを浮かべて早霜を見つめた。

——『とても人懐っこい船だぞ』か……。そうかもね

トビウメ提督はふとそんな言葉を思い出した。

「間宮さんのラムネ、美味しいですか？」

早霜の問いに、トビウメ提督はうなずいた。

「砂糖も香料もレシピどおりだから、やっぱり自分たちで作るのは違うよ。特に那智さんが作ると甘みが足りなくてね……」

巡洋艦以上の艦では消火用の炭酸ガス発生機をラムネ製造に転用し、水と砂糖と香料を混ぜて自分たちで作ることもできるのだが、前線では砂糖の供給も不安定で、さらに艦娘個人にも得手、不得手や味の好みによらつきがあるため、間宮のようにいつも美味しいラムネができるとはいかなかった。

「司令、早霜、食べていますか？」

アイスのスプーンをペロペロ舐めながら、不知火がやってきた。

「不知火さん、これから最中をいただくところよ」

「なら結構です。姿を見せなければ呼びに行こうかと考えていたところですよ」

トビウメ提督は少し呆れて言った。

「ぬい……じゃなくて、不知火、アイスはまだいくらでもあるから、そんな意地汚くスプーン舐めなくても大丈夫だよ」

「ぬっ！ し、不知火は決してそのような……」

不知火は頬を赤くしてもごもごと誤魔化す。

そこへ扶桑と山城が連れ立って一同の元へやってきた。

「トビウメ提督、今日は山城だけでなく、わたくしまで呼んでくださり、ありがとうございます」

「扶桑姉様と一緒に美味しいものが食べられて、今日は山城にとって二百十三日ぶりに不幸ではありませんでした」

「今回の作戦、みんなのため、扶桑型も全力でがんばりますよ、提督」
扶桑が穏やかな笑みを浮かべてそう言うので、トビウメ提督も笑顔でうなずく。

「今日は長旅だったので二人とも休みます、お先に失礼しますね」

二人はそう挨拶すると、頭を下げて内火艇の係留されている舷梯を降りていった。

提督はちよつとホツとしたように手足を伸ばす。

「扶桑さんが同じ戦隊で行動できるからよかった」

「扶桑がなにかに取り掛かると、山城も急に元気づくようです。許されるなら扶桑を旗艦にしたほうが、指揮が取りやすいように見受けられました」

不知火もそう言うてうなずいた。

「あの二人帰ったのね。はい早霜、最中よ。あと司令官のケーキ。お代わりあるわ」

お菓子を取りに行った初風が戻ってきた。トビウメ提督はケーキがのったお皿を受け取り、一口大に切り分けた黄色いフワフワのスポンジを口に含む。軽やかな食感とともに口いっぱい甘味が広がる。甘さ控えめなんていう中途半端なものではなく、砂糖を十分に使った甘いケーキだ。トビウメ提督はしばし無言で間宮自慢のスポンヂケーキを堪能した。

「編成についての意見具申、されるのですか？」

「やれることはやるよ」

提督は迷わず即答したので、不知火と初風は顔を見合わせた。今まで軍令部の作戦に消極的だった提督が、急に積極的な姿勢になったのが二人には引つかかった。

「みんな、お菓子まだ沢山あるわ、早くしないと荒潮達が全部食べてしまうわよ」

「ちよつと駄目よー」

「ギンバエ行為は許しません」

荒潮がこちらに向かって挑発的に呼びかけたので、初風と不知火は血相かいて走っていく。残されたトビウメ提督は波の音に耳を濟ませながらぼんやりと真つ黒な海を見つめている。傍らに立っている早霜はそんな提督を観察するようにじつと見つめていた。

雲が流れると強烈な太陽がダークグレーの艦の上部構造物やリノリウム張りの甲板に再び照りつける。エメラルドグリーンの海面に波が立つと、陽光がキラキラと反射する。重巡那智の羅針艦橋のフロア上にある主砲指揮所にいる二人は日差しのことなど微塵も気にする様子もなく、双眼鏡を顔から離す。

「右舷対艦戦闘、外筒砲射撃用意。目標、1の浮標」

マツエダ提督の号令を那智は復唱し、ブザーとともに前後五基の砲塔がゆつくりと右舷へ砲身を向ける。

「目標、1の浮標。方位〇八四、距離一五五、砲撃準備よろし」
「撃て！」

提督の号令とともに前甲板、一番砲塔の二門が立て続けに発砲、空へ砲声が響くが、それは重巡洋艦の主砲発射の轟音にしてはかなり控えめな音だった。というのも、号令ともに実際に火を吹いたのは、二十・三センチ砲の砲身上部に平行して装着された直径五センチの小型砲だった。

5センチ外筒砲。泊地で砲戦演習をする際に主砲に装着する小型砲で、実戦を想定し、同じ砲戦の指揮命令手順をふみつつも、実戦より近距離に位置する海上の模擬標的を狙い撃つ訓練で、主砲の砲身と連動して狙いを定めることができるので、実戦の動きをる程度シミュレーションしつつ狭い水域でも実施できる。また訓練に高価で貴重な実弾を消費することなく射撃訓練ができ、射撃回数をおさえることで主砲の砲身寿命を伸ばすこともできる。

「第一射、夾叉。第二射、遠い」

続けて三番砲塔の外筒砲が撃った。二秒半後、百五十メートル先の「1」とペンキで書かれた木製のブイが水柱に粉碎され海面から姿を消す。

——三射目で命中。さすがだ

「第三射、命中！次、目標、右舷、2の浮標」

マツエダ提督は心中で感心しつつも、次の攻撃目標を指示すると、那智は復唱し、主砲を一斉に2の浮標へ向けはじめた。

提督が艦橋構造物の指揮所から眼下の主砲を見下ろすと、砲塔の天井に積まれた演習用砲弾の格納箱から一人でに砲弾が動き出し主砲の砲身にくくりつけられた5センチ砲弾の薬室に滑り込んでいく様子が見えた。

ここはナムル島から三千キロ近く離れた太平洋の西の端、赤道直下に位置する連合艦隊最大の艦隊演習用海域、ギンガ泊地。大小無数の

島々に囲まれた約五十キロ四方の海域で、海面は年間を通して穏やかなうえ、全域が遠浅の海なので敵潜水艦の侵入も難しい海域だった。また近くには有数の燃料供給拠点のシヨウナン軍港があり、大規模艦隊の泊地、訓練海域としてこの上ない立地だった。

マツエダ提督は修理を終えたばかりで転属してきた重巡那智の調整と能力測定を兼ね、重巡高雄、駆逐艦三日月を伴ってギンガ泊地へとやってきたのは昨日のことだ。

那智が外筒砲ですべての浮標を破壊したので、マツエダ提督は外筒砲の用具納めを命じた。

「那智君、実弾を撃ちに沖へ出よう」

十分後、演習海域の中心へ向けて重巡那智は速力二十ノットで波をかきわけ進んでいた。後続には駆逐艦三日月が観測と周囲警戒のため追隨している。

ベルの鳴動とともに、再び那智の主砲塔が一斉に左舷へ旋回を開始した。

「左舷砲戦、交互打ち方用意」

マツエダ提督の号令とともに各砲塔の左砲身が一斉に仰角二十度まで持ち上がる。

「交互撃ち方、準備よし」

「左舷対艦戦闘、撃ち方はじめー」

「撃ち方、はじめー」

那智が叫ぶとともに、一番から五番主砲塔の左側の主砲が実際に発砲炎を履く。指揮所のガラス窓がビリビリと震えた。

およそ二十斉射を終えたところで提督は砲撃やめを命じる。熱せられた砲身から湯気が立つ。

マツエダ提督が羅針艦橋の屋上のようにになっている防空指揮所へ降りていくと、クリップボードを手に、砲撃の記録をとっていた秘書艦の高雄が振り返り、両耳に詰めていた綿をとった。

「さすが妙高さんご自慢の妹さんですね。いずれも設計時の諸元以上の成績です。一門あたり毎分三・四発発射。発射速度は設計値以上の速さです」

「おお、高雄ちゃんより早いね」

マツエダ提督は少し驚いて言った。

「ええ、妙高型重巡洋艦はその拡張強化型である私達高雄型にとって姉も同然の存在ですから、私も鼻が高くなる思いです」

高雄は嬉しそうに笑う。提督はなるほどとうなずいた。実際の、那智の諸元、練度ともに期待通りのものだった。

「一斉射で五回ほど撃ったら、ギンガ島に戻ろう」

マツエダ提督は伝声管に口を近づけて叫ぶ。

「左舷対艦戦闘、想定目標距離一万五千。一斉撃ち方用意」

那智指揮所的那智が応答し、再びブザー鳴動とともに全主砲塔が今度は左舷へ向けて動き出す。

「全門撃ち方、準備よろし」

スピーカーから指揮所にいる那智の声がしたので、マツエダ提督は耳に綿を詰めてから伝声管に叫ぶ。

「撃ち方はじめ！」

猛烈な爆轟とともに十門の主砲がほぼ同時に硝煙を吐いた。

高雄と提督は指揮所に据えられている大口径の双眼鏡を覗きこむと、数十秒後にはるか遠方の海面に白い水柱が何本も立つのが見えた。

初弾弾着を待つことなく各砲塔は砲を水平に戻し次発装填に取り掛かる。およそ二十秒後、すぐに砲身が一斉に持ち上がる。各砲身が止まると共に二回目の斉射が空に響く。高雄は双眼鏡で弾着を確認すると、弾着の散布界を確認し記録する。

「非常に狭い範囲にまとまっています。よいですね！」

散布界とは、特定の標的を狙って各砲が射撃した際の着弾がばらつく範囲のことで、ある一点狙い撃った場合に弾着が散らばらずにまとまっていれば、それは射撃精度が高いことを示している。凄まじい発砲音と耳に詰めた綿のせいでマツエダ提督には高雄の言葉は殆ど聞こえなかったが、何を言いたいかはすぐにわかった。

那智が五回目の一斉射を終えると、マツエダ提督は砲撃やめと叫んで主砲指揮所へ上がった。

「お疲れ様、今日の砲戦演習はこれまで。ギンガ島へ帰還しよう」
「了解した。演習終了。帰還する」

「高雄ちゃんも驚いていたが、重巡那智が優秀な艦だということはおわかりましたよ」

マツエダ提督はメガネをかけなおしながら、那智を労ったが、那智は難しい顔をして腕を組んだ。

「万全ではないが、射撃系統の機械的な動きは悪くなかった。だが……散布界が修理前よりやや広い。前はもつと集中できた。観測系統と射撃系統、光学系統には若干の調整が必要だ」

マツエダ提督は嬉しそうにうなずいた。

「素晴らしい。明日、引き続き調整し万全な状態にしてもらいたいな。ひよつとすると、うちの艦隊のペースになるかもしれない。高雄ちゃんも驚いてたよ」

マツエダ提督の言葉に、那智は照れくさそうに外の海へと目をやった。打ちひしがれた自分の自尊心が久方ぶりにかすかに潤ったような感覚がむず痒かった。

シヨウナン港の方角へと日が傾き、海面はオレンジ色の染まり出す。ギンガ港に近づくと、三本煙突の軽巡洋艦と二隻の駆逐艦が港に係留中の重巡高雄に横付けしている。

「見てください提督、鬼怒ちゃんたちが着いたみたいですよ！」

ブーメラン島奪還のため本土から陸軍の師団を乗せた輸送船五隻を本土南端のニライニライ島からローリー泊地まで護衛してきた軽巡鬼怒と駆逐艦春雨、清霜だった。

「任務を終えたらこちらへ回航するよう言っておいたんだ」

マツエダ提督は那智に説明した。

「ちよつと遅いですけど、投錨したらみんなでお茶にしましょうか？」

「ああ、そうしよう」

提督がうなずくと、高雄は満面の笑顔でうなずいた。高雄の幸せそうな顔を見て、那智はこの秘書艦がそうした時間になによりも大切にしている事がわかった。

——提督も艦隊も悪くはないな……。そういつたところへ来られ

たことは感謝するべきことなのか
那智は自分に言い聞かせるようにそう思った。

兵棋演習

重巡高雄の後甲板でマツエダ艦隊の面々は午後の喫茶を楽しんでいた。冷えた麦茶や烏龍茶、ビスケットなどが並んだテーブルをデスクチエアで囲み、入港したばかりの鬼怒ら三人が任務完了をマツエダ提督に報告した。

「道中、何の問題もなかったよ。無事ローリー島で輸送船団を後任の護衛駆逐隊に引き渡しました！ ローリー近海で何度か敵潜水艦らしき通信はキャッチしたけど、それ以外は問題なしだったよ」

報告する鬼怒に続いて春雨もうなずく。

「兵隊さんや装備を満載した輸送船五隻の護衛でしたから、気を抜けませんでしたが、無事に済んでほっとしました」

麦茶の注がれたコップを両手で握りながら春雨が言うのと、隣に座っていた清霜もビスケットを頬張りながら提督に尋ねる。

「ねえ、あの人達、これからブーメラン島を取り戻しに行くんでしょ？」

わたしも奪還作戦に参加したかったなあ〜」

「後方線の防御もとても大切な戦いですよ。頑張っていきましょう」

三日月が生真面目に清霜を慰める。

「およそ、一個連隊……。足りるといいがな」

「それがさあ、わたしたちがニライニライ島を出るとき、入れ違いで別の輸送船団が入ってきたんだ。積んでるのは陸軍の工兵隊だったんだけど、あの人達もブ島に行くらしくて、もう今頃ローリー島まで来てそうなんだよね」

鬼怒が輸送任務で見してきたことを語る。

「ブ島奪還後、島を要塞化するための工兵隊だろう」

「少し気が早すぎるような気もするが……。素人の私には、それが正しいのか間違っているのか、判断つかない」

那智の推測を受け、マツエダ提督は率直に言った。

「鬼怒、ニライニライで他の戦線の話は何か聞かなかったか？ 深海軍との戦いは外南洋だけではない」

那智の質問に清霜があっと思ひ出したように言った。

「そういえば、あそこで睦月ちゃんと望月ちゃんに会ったよ。二人ともこれまで北部大平洋戦線にいたんだって……。そしたらね、睦月ちゃんは『暇にやし、清霜ちゃんも北方戦線に来るがよいぞ』って、望月ちゃんは『南洋戦線は激戦が多くてたりーから大変だね』。その点北方は潜水艦と寒さにだけ気を付けてれば楽ちんさあ。水上艦なんかほとんど見ないからね』だって」

それを聞いた三日月は顔をうつむかせ、肩を震わせた。ニライニライ島の姉妹達の声が脳裏によみがえり、三日月は耳まで真っ赤になつてつぶやいた。

「すっかり、だらけきつちゃって……。わたしは姉妹艦として、とても恥ずかしいです……」

「ふ、二人だつていざとなれば、き、きつと頼りになるわ」

「そ、そうだよ。きつと、い、今は充電期間なんだよ」

高雄と鬼怒が苦し紛れに、必死にフオローする。

「中部戦線では先に大規模な機動部隊決戦があつて以降、深海棲艦の活動は低調と聞いています、提督」

「敵は外南洋に艦を集めている可能性もあるわけか……」

マツエダ提督はふと無言でいる那智を見ると、思い詰めた様子で東の空をながめていた。

マツエダ提督は敢えて話題を変えることにした。

「暗くなるまでには少し時間がある。那智君、みんな集まっていることだし、兵棋演習をやってみないか」

マツエダ提督が思いついたようにそう言った。急なことだったが那智に断る理由はない。一つ返事で承知すると、高雄がすぐにテーブルの上を片付け、縦横に座標軸の入った作戦盤を広げる。

「じゃあ、那智君には青軍の艦隊指揮を執ってもらおう。赤軍の第一艦隊は鬼怒君、第二艦隊は……」

「わたし、わたしやりたい！」

「よし、じゃあ清霜が第二艦隊。第三艦隊は三日月が担当でいいかな？」

「はい、司令官」

「春雨君は青軍の輸送船団と護衛艦隊を担当してもらおう。状況設定は春雨君の率いる青軍を赤軍の三艦隊が船団撃滅をはかりこれを追撃、巡洋艦と駆逐艦で編成された青軍の第一艦隊がこれをはばむという想定だ」

マツエダ提督はそう説明しながら、作戦盤の上に青軍、赤軍の艦隊のそれぞれの開始位置を指さしながら、艦船のかわりとなる将棋の駒を置いていく。駒は赤と青の二色に塗り分けされ「CA」（重巡を指す）とか「DD」（駆逐艦の意）と記入されている。

「勝利条件は輸送船団を作戦盤の西の辺まで離脱させられれば青軍の勝ち。一方、それを捕捉撃滅できれば赤軍の勝ちだ。布陣、兵力差ともに青軍不利な状況だがどうだろうか？」

正直、眼の前の布陣には大いに引つかかるものを感じたが、那智はそれに言及せずにならずく。

「ああ、問題ない」

「ふふふ、逃さないからね。こっちには高速戦艦があるもん」

清霜が嬉しそうに言った。

盤面に駒が配置される。西へ向けて複縦陣で遁走する青軍の輸送船団とその右で並走しつつある那智指揮下の青軍主力が単縦陣で並んでいる。兵力は重巡二隻に軽巡一隻、駆逐艦二隻という、那智にとってはなんとも曰く有りげな編成だ。一方赤軍の主力は、青軍の後方四時から六時方向に広く展開、さらに厄介な別動の水雷戦隊が北側から囲むように接近してきている。この布陣に駒を置くとき、マツエダ提督と高雄は何度も綴じ込み表紙に挟んだ冊子に目を通しながら指示だしていた。

兵棋演習とは、軍が作戦行動の学習や研究のため、作戦地図上で実際の戦闘状況の指揮のあり方や戦闘経過を再現するもので、現代のシミュレーションゲームに近いものだ。実際、どこの艦隊でも訓練や作戦立案に活用しており、艦娘であればお馴染みの訓練だ。

盤上で演習状況が開始されると那智は艦速を上げて駒を素早く進め、その後すぐに転針をかけた。春雨は速度の遅い輸送船団と敵の間に護衛艦を挟むように陣形を変える。

『右舷、対艦戦闘！』

どうしても那智の脳裏にブ島沖で聞いた主砲指揮所での号令が浮かぶ。

「船団はいただきだよ」

鬼怒の動かす水雷戦隊が迫る。敵艦隊の射程に入り、鬼怒は砲撃を開始した。自分の攻撃ターンに砲撃を宣言し、命中判定のためサイコロを振る。出た目は4だった。

「青軍の駆逐艦2に命中判定」

賽の目に対応した判定表によれば、敵水雷戦隊の一斉射撃のうち、1と2発が青軍の駆逐艦に命中したらしい。続けて鬼怒が損害判定のサイコロを振る。出た目は2。損害判定表では「2」は小破判定が割り当てられていた。

「初弾命中かあ、まあまあだね」

清霜と三日月が動かす艦隊もまもなく青軍の那智艦隊を射程に捉えるだろう。青軍の攻撃ターンとなった。那智は自分の艦隊の重巡二隻で鬼怒の赤軍艦隊の軽巡洋艦と駆逐艦を攻撃すると宣言し、サイコロを振る。

一隻目の重巡は「5」、二隻目は「1」の目が出た。一隻目の砲撃が初弾命中、二隻目ははずれだった。

「うわっ、やられちゃった？」

頭をかく鬼怒をよそに那智は損害判定のため、再びサイコロを振ると「6」が出た。

「ぎゃあー！」

「すーいー！」

鬼怒が顔を押しさえて呻き、駆逐艦達が声を上げる。

「赤軍の軽巡に砲撃命中。大破、火災発生」

マツエダ提督が損害表を読み上げる。幸先の良い立ち上がりといって良かったが、那智は難しい表情で腕を組んだ。おのずと過去の記憶が呼び起こされる。

「へーぎえんしゅう？」

「そうだ、兵棋演習だ。図上で艦隊行動や作戦指揮を学習、研究するためにおこなう訓練だ。そうだな・・・カタカナ語で言えばシミュレーションとかいうやつだ」

五ヶ月前、タロタロ泊地の提督執務室。困惑顔で聞き返すトビウメ提督に、那智は普段あまり使わない横文字言葉を織り交ぜて説明した。テーブルに並べられた駒や各種表などを見てトビウメ提督はうなずいた。

「なんか戦争ボードゲームみたいだね」

「英語ではウオーゲームと言うそうぞ。だが、これも大切な訓練だ。遊びじゃない。よし不知火、ひとつ相手になってやれ」

那智はそばで見えていた不知火に言った。不知火はうなずくと、相変わらずの無愛想な顔をトビウメ提督へ向けて言い掛けた。

「司令、シメ、シユミ……ッ」

「不知火、無理しなくていい」

「ぬっ……」

カタカナ語をさつそく噛んだ不知火を那智がフォローする。

とりもなおさず、不知火相手にトビウメ提督は那智の手ほどきを受けながらテーブルの上で艦隊戦にとりかかった。

ルールを良くわかっていない初めてやるゲームがうまくいくはずもなく、トビウメ提督の艦隊はあつという間にバルチック艦隊も真っ青なT字不利に陥り、次々と大破、撃沈の判定を受けていく。

「ひ、ひどい状況だ」

ゲームとはいえ一方的な敗北を喫したトビウメ提督はげんなりとした表情でうなだれるが、那智は盤面の一点を指さした。

「そうだな。ただ、この残った戦艦がやっと、あの敵戦艦を射程に捉えたぞ。どうする?」

「じゃあ攻撃しよう。うち艦隊には戦艦ないけどね……」

トビウメ提督はサイコロを放ると命中判定がでた。那智にうながされ、損害判定のためもう一度振ると「6」の目が出る。

「おお、これは一撃大破だな」

不知火の戦艦は機関損傷、推力喪失、弾薬庫火災という想像するの

も恐ろしい状況になった。

「これは形勢逆転もありえるぞ」

不知火は何も言わなかったが、額に青筋を立てて表情をひきつらせている。

次にトビウメ提督の重巡が砲撃すると、不知火側の重巡が中破し、事実上の戦闘能力を喪失した。

「し、不知火を……。お、怒らせましたね……」

「そ、そんな……」

不知火は顔を紅潮させてつぶやく。恐れをなしてたじろぐ提督の肩を那智が叩いた。

「心配するな。不知火はいつも全力投球だ」

次のターンで不知火の砲撃もトビウメ提督の艦に相当なダメージを与え、双方の艦隊とも距離が開いているにも関わらず満身創痍となった。

トビウメ提督はやや優勢でありながら、何故か不可解そうに腕組みして盤面を見つめる。

「どうした？ 勝利とはいえずとも、最初にしてはまあまあな戦況だぞ」

那智にそう聞かれた提督は首をひねる。

「洋上訓練とかでも、現実にはこんな当たらないよね。損害判定も砲弾一撃の威力が少し強すぎるような気がするんだけど、これでちゃんとしたシミュレーションになってるのかな？」

「二応、連合艦隊司令部と軍令部が監修した全軍統一の判定表を採用しているんだがな……」

トビウメ提督の疑問に那智は困惑顔になる。

「いっそ、はずれ判定と小破判定のしきい値をあげて命中率と被弾率を下げたほうが少し現実的になるんじゃないかな……。あ、ごめんなさい。素人の思いつきだから気にしないで」

よく考えず口からこぼれた疑問を提督は慌てて打ち消した。というのも、那智も不知火も急に険しい顔つきで黙り込んでしまったからだ。普通、門外漢の自分が事情も知らずに偉そうなことを言ったら、

プロたる艦娘は良い顔をしないだろう。

「なるほど……。それは面白いな。確かに兵棋演習が実戦の困難さを的確に反映していると言いは難いな。ここは一つ、貴様の言うとおりの判定表を変えてみるか。どうだ、不知火?」

「構いませんよ。実戦で最高の実力を発揮するのが不知火達の仕事です。訓練は困難な状況の方が効果的です」

「よし、今からそれでいくぞ」

その後は急に砲弾が当たらなくなり、ダメージも限定的で、双方消耗戦を繰り広げた末に勝負はドローとなった。

「し、不知火は、け、決して悔しくなど、あ、ありません」

素人に敗北寸前まで追い込まれた不知火は悔しさに身を震わせながら言ったものだ。

「一つ、提案したいのだが……」

那智はマツエダ提督に判定表の難易度を上げることが提案した。マツエダ提督と高雄は驚いたようだったが、提督はすぐに提案に賛成した。

「さすが最前線の部隊は違うな。高雄ちゃん、これは試してみる価値あるよ」

鬼怒や駆逐艦娘達は嫌そうな顔をしたが、次のターンから新しいルールでのウォーゲームが始まった。

途端に遠・中距離の被弾率と損傷率が格段に下がる。マツエダ提督は先ほどの冊子を手に盤面を見ている。実際の展開状況は違うものの、この提督が那智に何を期待しているのかはおのずと判った。

——ブーメラン島沖のあの戦いを再現しろということか……

那智はあの日のことを思い返しながら青・赤両軍の展開状況をもう一度見回す。春雨が守る鈍足の輸送船団は逃げ切れそうもない。春雨の駆逐隊は船団に密着して避退をはかる。

那智は春雨の耳元に何やら小声でささやきかえた。春雨は一瞬、えっと驚くが次のターンで一気に速力を上げて護衛艦隊の進路を反転させた。これには赤軍の三人も仰天する。

「ええ、輸送船団を見捨てちゃうの？」

鬼怒の言葉に、春雨は不安そうな眼差しを那智に向けるが、那智はそれでいいとばかりにうなずいた。

「輸送船団いったらだきー」

清霜がさらに戦艦を含む船団との距離をつめる。一方、那智と対峙する赤軍の鬼怒と三日月は一齐に砲撃を続け、那智の駆逐艦一隻を撃沈した。

春雨の駆逐艦は船団から離れ、単縦陣になって反航状態になったところで煙幕展張を宣言した。輸送船団と敵の間に煙のカーテンができ、一時的に敵は直接攻撃することができなくなった。同時に赤軍の三人に判らないようにテールブルの下から審判役の高雄へ、針路や座標を記した札を手渡した。それは今自分の艦隊が魚雷を撃つたという宣言だった。那智は敵に十分接近した段階で一気に単縦陣から単縦陣に艦隊の陣形を変え、鬼怒と三日月の艦隊に真横から突っ込ませる。

「えええ！ そんな無茶なく」

「これじゃあ全滅してしまいますよ」

あまりにも無謀な突撃に鬼怒と三日月が驚きの声をあげる。那智の艦隊はバラバラになり統制を失ったが、それは鬼怒と三日月も同じで組織的な追撃が不可能になった。

マツエダ提督と高雄は冊子を見ながら笑みを浮かべる。

「輸送船団の撃滅は清霜に任せてー」

清霜の動かす艦隊は煙幕の向こうに隠れた輸送船団の追撃を続ける。一方、春雨の艦隊は再び海域離脱をはかっていた。

「砲撃！ 目標、護衛艦隊。撃てー！」

攻撃ターンを迎えた清霜は威勢良くかけ声を上げながらサイコロを投げる。難易度が上がったとはいえ腐っても戦艦。その砲撃は一撃で春雨艦隊の駆逐艦一隻を大破・航行不能にさせた。

「ああ、そんな……」

春雨はか細い声で悲鳴をあげる。

「ふっふーん！ 戦艦清霜、最強でしょー！」

清霜艦隊の旗艦はいつのまにか『戦艦清霜』になったようだ……。

「次は武蔵さんの番だよ」

再び清霜がサイコロを振る。戦艦の2番艦は『武蔵』になったらしい。

「は、はずれてください〜」

手を合わせて祈る春雨の願いが叶ったのか『戦艦武蔵』の砲撃は命中しなかった。

「ああ、武蔵さんの下手クソ〜」

八つ当たりに近い清霜の悪態に、今頃本土にいる艦娘の武蔵はくしゃみをしているに違いない。

次に青軍の攻撃ターンになったところで高雄が魚雷の到達を宣言した。

「清霜ちゃんの艦隊を春雨ちゃんの酸素魚雷が捉えたわ、この座標で進路一一〇だから先行する4隻が命中範囲に入りますね」

「え、え〜そんな……」

清霜の顔が青くなるが、春雨は無情にサイコロを振る。先頭を走る直衛の重巡に魚雷一発命中で中破。続けて続航する『戦艦清霜』に魚雷三発命中で大破火災炎上、さらに後方の『戦艦武蔵』にも魚雷二発が命中し主砲が使用できなくなった。

「え〜左舷？ え？ 航行不能〜？」

清霜は愕然として肩を落とす。那智は、ほっとしたように笑みを見せる春雨の頭を撫でた。

「よしよし、よくやったぞ」

「はい、那智さんのおかげです」

マツエダ提督と高雄もうなずいて、青軍の善戦を称える。

「船団から離れたときはどうなるかと思っただが、赤軍をこうまで撃退するとは思わなかったな」

「そうですね。見事な采配ですね、那智さん」

「いや、わたしも、こううまく魚雷が当たるとは思っていなかったのだが……」

やはり机上の演習だけあって、那智には少々出来過ぎた展開に思え

だが、今は喜んでいる春雨の健闘を称えることにした。

一方、ほぼ勝利を確信していた赤軍の鬼怒は頭を抱えてうめく。

「追撃戦とかいっても、これもう負け戦じゃない？　ねえ？」

今輸送船団を追撃できるのは鬼怒艦隊の先頭を走る駆逐艦二隻のみだった。

一方、青軍の春雨の残存艦は再び脱出をはかりつつ船団の直衛に戻ろうとする。次のターンで『戦艦清霜』が消火に失敗し弾薬庫火災で爆沈した。なまじ自分の名前なんか付けたものだからシヨックは倍増だ。清霜は目尻に涙を溜めながら必死にサイコロを振る。なんとか武蔵は沈没を免れそうだったが、ただでさえ鈍足なところへ、損傷で速度二分の一しかだせない判定が出たため、もはや青軍の船団追跡は不可能だ。

結局その二ターン後、青軍の輸送船団は無事戦闘海域を離脱し、今回のウォーゲームは青軍の戦術勝利に終わった。

「これではブ島沖での戦いを再現しろ言っているようなものだ。あいに、同じようにはいかなかったが、これで満足か？」

「いや失礼、気付くほうが自然だね。ようやく連合艦隊司令部の作成した戦闘詳報が手に入ったから、あの時と似た状況で那智君がどう動くか見てみたかったんだ」

マツエダ提督は冊子を持ち上げながら恐縮したように言った。

「そうか……。兵棋演習だから青軍の勝ちとなったが、実際、私の戦隊はほぼ全滅。春雨の護衛艦隊も離脱できたのは半数。普通、薩摩の『捨てがまり』のような、自分の艦隊をすり潰して時間を稼ぐ戦術はたやすく決断できるものではない……」

捨てがまり。戦国時代末期の関ヶ原の戦いで、西軍の島津軍が戦場から離脱する際にとった捨て身の時間稼ぎ戦術で、自分の軍を小分けにして何度も追撃者へ突入させ本隊が離脱するまでの時間を稼ぎ、敵に突入した部隊は全滅するまで足止めをはかるという、半ば特攻にも近い決死の戦術だ。

「そうか、じゃああの時のこと、もう少し詳しく教えてくれないかな」
「皆さん、夕食の準備ができたそうですよ。演習道具を片づけたら上

陸しましょう！」

基地の係員から知らせを受けた高雄がそう伝えたと、空腹だった一同がご飯だー！と声を上げる。鬼怒と駆逐艦娘達は使った道具を畳むと、大急ぎで内火艇のある方へ走っていく。

「ビールくらいは出るそうだ。今夜くらい一緒に飲まないか？」

「そうだな……今夜は。いただくとするか」

那智もかすかに笑みを浮かべた。

マツエダ提督は立ち上がり、椅子にすわる那智の肩に手をやり立ち上がる那智をエスコートするように引き上げた。

「さあ提督、那智さ……。えっ……」

高雄は残った二人を促そうとして思わず言葉を呑んだ。

別に何気ない仕草だったが、何故か高雄の心のすみに鋭い痛みが走った。

マツエダ提督は艦娘に始終セクハラをするタイプの男ではなかったが、駆逐艦の頭を撫でたり、衣笠につつかれたり抱きつかれたり逆セクハラされたり、鬼怒と組んでストレッチをしたりと、日頃スキップする場面が多かった。高雄自身、それを目にしても別段、何も感じることはなかった。もつとも、衣笠のようにもつと気安く提督と触れ合いたいという思いはあり、純粋な羨ましさは感じていたが……だが、今のマツエダ提督と那智を見ていて、高雄はこれまであまり感じたことのない、理由のわからない違和感と辛さを感じ、二人に自分の異常を悟られまいと、逃げるように内火艇へ向かった。

同じ頃、はるか東方のタロタロ島。基地司令部庁舎の会議室では、白熱球の熱気がこもるなか、連合艦隊司令部の要員や参謀連中、そしてブ島奪還作戦に参加する提督たちが大テーブルを囲み、まさしく作戦の兵棋演習に取り組んでいた。

「第二分隊、これより第一分隊援護のためポートfrisビーに突入します」

審判役の軽巡娘の大淀がそう宣言し大きく広げられた専用の海図

の上の将棋の駒を動かした。駒には第一分隊と第二分隊を示す漢字がそれぞれ『壹』、『弐』と記されていた。

第二戦隊を指揮する中年の提督が砲戦準備を命じる。第二分隊は二ターン後にポートフリスビーを封鎖している敵艦隊に接的し交戦を開始したが、複数の重巡と軽巡を含む敵艦隊との砲戦で苦戦を余儀なくされた。作戦通り第一分隊が接的したが、強力な敵艦隊に撃退され、より強力な水雷戦隊本隊となる第二艦隊が敵に挑むが、封鎖を突破することはできなかった。偵察機による最新の偵察結果を演習に反映した結果、作戦立案時より封鎖艦隊が増強されているため、当初の編成では打撃力不足というシミュレーション結果が出てしまったのだ。作戦の第二段階で第一分隊は損耗率五十パーセントを超え、第二分隊との時間差波状攻撃も不首尾に終わっていた。

「それまで。もう一度作戦開始時刻へ戻してはじめる。今度は第一分隊の接的後、威力偵察の終了と同時に第二分隊も突入を開始、封鎖艦隊に大穴を空ける」

フルカワ司令長官によって演習は一時中断となった。戦艦を伴う第三戦隊の出番はまだなく、トビウメ提督は不知火とテーブルから少し離れた席につき、じつと成り行きを観察していた。

「おい、これで三回目じゃねーか」

隣に座っていた見知らぬ提督が独り言をつぶやく。この日の午後からはじまった『図上演習』という名目ではじまった兵棋演習は、フルカワの命令ですでに二回もリセットされていた。現在の計算では、急に作戦成功がおぼつかなくなつたのだ。すでに日も暮れきっているのに、未だ作戦の第二段階より先に進めずにいる状態だ。

「分隊個別の戦力が足りないのなら、第一、第二分隊を統合して、決戦を挑んだ方が良いのでは？」

「敵戦力が増強されているならば、我々も投入する戦力を増やさねば作戦は成功しませんよ」

苛立ちをあらわにした提督数人が食つてかかる。

「今回作戦に参加する戦艦は全部で三隻。うち一隻から二隻をポート・フリスビー解放に使うべきだと思います」

「それはだめだ、上陸作戦に万全を期すためには戦艦の援護は不可欠だ。陸軍部隊の救出はあくまで高速の水雷戦隊主体でやるべきだ」

フルカワの反論にさらに多くの異議の声が上がる。

「そもそも、救出作戦と上陸作戦、どっちが大切なんですか？」

「皆さん静粛に、静粛に願います！」

軽巡艦娘の大淀が荒れはじめたその場を一生懸命しずめようとする。

第一分隊の指揮をまかされているシンドウという中年の提督が立ち上がった。

「偵察機の報告にあった、島北部に展開している艦隊には多数の給油艦が含まれているとの情報は皆さんもご存じでしょう。増強された敵軽巡や駆逐艦はその護衛艦と考えることもできる。給油艦はいつまでも封鎖艦隊と一緒にはいない。補給を終えれば奴らの根拠地へ帰る。給油艦が帰るときにその護衛艦がそのまま居座るとは考えにくい。敵の戦力増強は一時的な現象かもしれない。そうなれば現状でも勝機は十分あると考えます」

フルカワやその両側の参謀連中が感心したように声をあげた。

「さすがシンドウ提督、すばらしい洞察力だ」

疑問を口にしていた提督の一部はその意見に納得したのかおとなしくなった。フルカワの後ろに座っていた金モールを付けた作戦参謀が手を挙げた。

「そもそも、今日の演習を見て大いに疑問に感じられたのが、演習で使うダメージチャートの難易度です。特に我が方の酸素魚雷は敵の魚雷よりも、威力、速力、射程いずれも数倍のアドバンテージを持っているはずが、この演習では敵、味方いずれも同一の表を使うという非現実的な状況となっています。むしろ我が方の雷撃は命中精度、ダメージいずれも敵の倍の能力を付与しなければ、リアリティのある演習や作戦立案はできません」

「おお、確かに君の言うとおりだ！」

その参謀の意見をフルカワは拍手で絶賛した。一部の提督はそうだそうだうなずいたが、この話には大淀も難色を示す。

「えっ……。それはさすがにどうなのでしょう？ 判定表まで変えてしまうのは、不確定要素が増大してしまいますし……。」
「おい、そんなことしていいのか？」

そんなつぶやきが至る所から漏れた。先のシンドウ提督もそれには同意しかねたようだ。

「雷撃はそう簡単決められるものではありません。命中判定や威力判定の操作しての想定は危険を伴います」

トビウメ提督は隣に座る秘書官の顔を見ると、不知火は驚愕のあまり口をぽかんと空けたまま参謀連中とフルカワのやりとりを見ている。トビウメ提督自身、我が耳を疑うばかりのとんでもない事態が進行しはじめているの理解していたが、この議論の流れを止める術はもっていない。

「このままでは埒があかない。とりあえず新しい想定でやってみよう」

懸念の声もよそに、フルカワ司令長官は新しい作戦状況で演習開始を命じた。

その後の演習は、(ある程度予想できたことだが)驚くべき展開が続いた。第一、第二分隊の時間差突入と酸素魚雷により、ポートフリスビー沖の敵巡洋艦は次々に轟沈、味方のあきつ丸を含む輸送船団は難なく離脱に成功、さらにトビウメ提督率いる第三分隊は敵高速戦艦を含む敵主力をブ島西方から駆逐し、第四分隊は何の抵抗も受けず島の南部に陸軍を逆上陸させることに成功した。島の完全奪還を除けば、ほぼ当初の作戦目標を満たす結果に終わったのだ。

不知火はぼそりとつぶやいた。

「驚きましたね、司令」

「うん、僕も驚いたよ。こうもご都合主義が通るとはね……。」
「そうじゃありません。彼らが決してふざけているわけではないことです。彼らは不知火が思っている以上に真剣です。不知火は、不知火は……人間が少しわからなくなりました」

不知火の語尾が少し震えた。トビウメ提督は最初、不知火が怒りに震えているのかと思ったが、血の気の引いた青い顔を見て悟った。

——ぬいぬいも、僕と同じで怖いんだ。こんなデタラメがまかり通る状況が……」

トビウメ提督は勇気を出して秘書艦の小刻みに震える手を上から握りしめた。

「僕もすごい不安だけど、頭絞って乗り越えるしかない。なんとか生き残って、任務を達成する方策を考えないと……」

汗ばんだ掌のぬくもりを感じ、不知火は少し落ち着きを取り戻して、強くうなずいた。

「了解しました、司令。司令が現状に不安を抱いて下さっていることは、不知火達にとっても幸いなことだと思います」

不知火はそう言ってトビウメ提督の手を握り返した。

兵棋演習は二十二時を回ったところで終了となり、その日の提督会議は解散した。

トビウメ提督と不知火は連れだつて司令部庁舎の廊下へ出る。

「もうこんな時間か。寝る前だけど何か食べたいな」

「そうですね、何かご用意します。」

二人とも夕食がまだだった。食堂の厨房へ向けて歩き出すと、ふと廊下のホールを行く重巡艦娘の足柄が歩いてくる。

「あつ、足……」

「あらっ……」

提督と足柄はお互いに気づき一瞬驚いた顔を見合わせる。トビウメ提督が足柄と顔を合わせるの、那智が転属する日に埠頭で会って以来だ。不知火は順手に持っていたのがった鉛筆をすぐに逆手に持ち替えるが、当然、トビウメ提督は気付かない。足柄はすぐに敵意のみなきった目でトビウメ提督を睨むと、八重歯をむき出しにする。

「グルル……」

足柄はそう一声うなつてから、顔をふんつと背けて足早に去っていった。不知火は一安心とばかりに鉛筆を再び順手に戻す。一方、トビウメ提督は肩を落とす。これまで関係の良好だった艦娘から今みたいにあからさまな憎悪の向けられるのは、トビウメ提督にとって非常に残念で堪えることだった。

「司令？」

「ああ、大丈夫。行こう」

トビウメ提督は意気消沈した様子で歩き出す。

「そういえば、足柄さんは今回の作戦に参加するのかな？」

「ええ、第四分隊の後発隊に名前がありました」

そうかと、トビウメ提督はうなずき、食堂へ向かった。

戦艦山城

作戦開始まであと四十五時間。タロタロ泊地のトビウメ提督の姿は、秘書艦の不知火とともに戦艦山城の前部甲板にあった。

遠距離砲戦を想定し、測距・索敵で敵より少しでも優位に立とうとマストを高層化させた結果、艦上に建て増しを重ねた塔のような艦橋構造物がつくられることになった。

艦娘の山城とは、コミュニケーションに若干の難を残しつつも作戦開始へ向けて対話を重ねていた。今日は初めて戦艦山城に乗艦し半月湾の外で、出撃前最後となる砲戦演習を実施する予定になっていた。

「高いなあ……」

太陽を隠さんばかりにそびえ立つ塔を見上げながらトビウメ提督がつぶやくと不知火が応じる。

「これでも姉妹艦の扶桑より若干低いくらいです」

「エレベーターはないよね？」

「大和型ではないので、ラツタルしかありませんよ」

「判ってる。ちよつと聞いてみただけ」

提督はため息をつくようにそう応じた。

「提督、羅針艦橋はこちらですよ」

山城が艦橋構造物へ通じる水密扉を開けて、二人を招き入れた。

山城が最初に二人を案内したのは、薄暗い艦内のラツタルを何度か登ったところにあるガラス窓に囲まれた部屋だった。

「羅針艦橋はやや低層に位置しますね」

不知火が室内を見回しながら言った。

——やっぱり船体が大きいだけあって、巡洋艦の艦橋より少し広いな……

あまり気心の知れない艦娘と、長時間狭い空間に二人きりというのは、双方の精神衛生によくない。着任当初の那智はそのあたりによく気がまわり、航海中ことあるごとに甲板や士官室へ連れ出し、気分転換やストレス発散がはかれるよう気を使ってくれたものだった。

——このあたりに折りたたみ椅子、デッキチェアは後ろの旗甲板に置こうかな

トビウメ提督はそんなことに思いを巡らしながら羅針艦橋の見学を終えると、山城は二人を上へ向かうラツタルへ案内する。

「砲戦艦橋、主砲指揮所はこの上になります。頭をぶつけないよう気を付けて下さい」

山城はそう呼びかけると急なラツタルを登っていった。

山城を追って二人は後に続く。上に登るにつれてフロアは狭く、ラツタルは急になっていく。

ラツタルを幾重にも登っていくが、なかなか目当ての砲戦指揮所のフロアまでたどり着かない。

「山城さん、あとどれくらい登ればいいの……!」

トビウメ提督は息を荒くしながら先に登る山城を見上げ、絶句してしまった。

「あと三階上ですよ。もうバテたんですか?」

山城があきれた様子で振り返るので。トビウメ提督はブンブンと首をふって大丈夫と即答した。提督は山城の顔を正視せず、戸惑い気味に否定する。山城は怪訝な表情をしながらも再びラツタルを登っていく。トビウメ提督は間を空けて顔を上へ向けないようにして必死にラツタルを登った。今さつき眼前に突き出された赤いスカート奥の弾力感に満ちた臀部を覆う白い布のことを頭から締め出そうと必死だったのだ。胃が痛くなるような気分だった。

「司令、顔の色がすぐれないようですが、気分でも悪いのですか?」

「へ? いや、そんなことない。大丈夫、ほんと大丈夫」

心配した不知火がたずねるが、トビウメ提督はそうまくし立てて、手元だけを凝視しつつ黙々とラツタルを登っていく。

「あつ痛!」

ゴツンという音とともにトビウメ提督は脳天を押さえて悶絶する。上を見ずにラツタルを昇ったため昇降扉に頭を強くぶつけたのだ。

「だから、気を付けて下さいって言ったじゃないですか」

山城が少し苛ついた様子で振り返る。

「ご、ごめん、大丈夫だから……」

頭をさすりながらそう言う提督の後を不知火も怪訝な顔をしながら登っていく。

羅針艦橋から五フロア上がったところにあるのが、戦艦山城の戦闘艦橋だった。見晴らしがよく、海面からの高さは三十メートル以上、窓からはタロタロ泊地を一望できた。窓際には見張りのため備え付けの双眼望遠鏡がいくつも並んでいて、なおさら観光地の展望台みたいな風情を醸し出している。このフロアの上にはさらに副砲指揮所、主砲指揮所、主砲射撃指揮装置などがある。

「戦闘時はここから指揮を執っていただきます」

——高所恐怖症の人にはちよつと大変そうだけど……

トビウメ提督は以前、駆逐艦不知火の前部マストの上にある見張所に連れて行かれた時のことを思い出した。揺れる海上で、簡単な梯子につかまりながら艦橋のはるか上の見張り所まで登るのは想像を絶する恐怖だった。途中で身がすくみ、動けなくなった提督を、上を登る不知火はあきれ果てた表情で見下ろし、ガタガタ震えているとかえって足を滑らせて死にますよ、と諭した。無論、風が吹きすさぶなかで梯子にとりついているので、上をいく不知火のスカートはひつきりなしにめくれ上がるが、命がけの時にそんなことは気にならない。そんなトビウメ提督の懊悩もよそに、山城は艦の錨を上げてスクリューを回し始めた。

「外洋に出るまで羅針艦橋に戻りましょう」

山城が階下へ繋がるラツタルへと二人を促す。

「あ、その、レ、レディーファーストだからね、ふ、二人とも先に下りて」

「はあ」

不知火と山城は不思議そうな顔で先にラツタルを下りはじめた。

——これからどうしようかな……

トビウメ提督は最後にラツタルへ足をかけながら暗澹たる思いに囚われた。

外洋で砲戦演習を終え、戦艦山城が半月湾に帰ってきたときには、

もう夕方になっていた。戦艦山城を退艦し、不知火が操舵輪を握る内火艇に乗ったトビウメ提督は消耗した様子で長いすにもたれかかっていた。おのずと視線は海風にはためくスカート裾へと注がれる。「やはり聞いていたように、主砲の散布界が大きいみたいですね。実戦の際にはそのあたりにも注意を要します」

「そうだね……」

不知火の言葉にトビウメ提督は締まりのないあいづちを返す。

不知火は内火艇を係留棧橋に寄せてスロットルをしぼった。

「司令、着きましたよ。司令？」

不知火が振り返ると、トビウメ提督はぼんやりした様子で不知火を見つめている。その視線は脚のあたりに注がれている。不知火は自分の足下を見下ろしてから首を傾げた。

「ぬいぬいはスパッツはいてるからいいなと思って……」

不知火の顔が一瞬で紅潮したのは、怒りのためか、それとも恥じらいか……。不知火は険しい表情で提督を見返した。

「何を思い詰めているかと心配していれば、その様なことを考えていたのですか？」

ドスの効いた声で聞き返すもトビウメ提督は心底弱り切ったようにうなだれた。

「真面目な話、今日はちよつと困ったんだよ。山城さん素足にスカートでしょ？ ラツタルや風が強いところだと、その……ちよつとまずいよな。こつちもまるでいけないことしているみたいで、気が塞ぐし……。ただ、それはこつちが知らぬ振りを決め込めば済むんだけど、もし山城さんが途中で気づいたらどうしようかと不安で」

急にふざけたいやらしい話を振られたと思い、凄んでみたものの、どうも提督が真剣に悩んでいそうなので、不知火は毒気を抜かれて瞬きした。

そもそも艦娘の戦闘服のほとんどはスカートだ。それはこの不思議な世界を構築した創造主の決めたことで、普通の人間のように着替えれば済むという問題ではない。

「そ、その、不知火のも、司令には、見えていたのですか？」

不知火はガラにもなくもじもじと体を揺すりながら、顔を赤くして聞いた。トビウメ提督は相変わらずうなだれたまま手を振った。

「大丈夫。スパッツがあるし、そもそも緊張感をもって何かやってるときに、いやらしいこと考えられるほど器用じゃないから」

「そうですか。でも、那智さんだってスカートでしたよ。それは平気だったんですか？」

不知火がそう詰問すると、トビウメ提督は力強く首を振る。

「だって那智さんはタイトスカートにストッキングだよ！ 露出は少なく、でも体のラインはちゃんと主張する。完璧だ。二日で慣れたよ」

提督は少々ムキになつて熱弁した。くだらないことを、自分たちはなぜこんなにも真剣に話し合っているのだろうと不知火は自問自答した。

——そういえば、あの油断のならない朝潮型もスパッツを着用していました。長良さんは……あれもスパッツみたいなものと考えていいでしょう。そうなると残るは……

「加古さんや初風は？ 二人とも素足にスカートで、山城さんと同じですよ」

そう問われると、トビウメ提督は一瞬キョトンとした顔をしてから、急にクスクス笑いだした。

「加古は大丈夫だよ。あの寝坊助が……。本当に眠ることにかけては器用だからなあ、今度加古と一緒に海に出ることがあったら、居眠りする度にスカートを引っ張つてやるか。アハハハ、ハハハ……ごめんなさい、今のは悪い冗談だよ」

トビウメ提督はまた真剣な表情で頭を抱える。

「確かに初風もね、彼女の艦に乗って遠出したことはあまりなかったけど、ちよつと注意しないとね。結構ムキになるほうだからなあ……」

不知火は半ばあきれながらも、提督がなぜこうも悩むのか少し理解できたような気がした。

——山城との信頼関係に、まだ不安あるのですね

確かに加古だったら実際にスカートを引つ張つても笑い話で済むだろう。初風だつて、せいぜいギヤーギヤー騒ぐぐらいで大きな問題は起こらないことは不知火にもわかつていた。もし自分がスパッツをはいていないときにそういうことが起きたら……きつとゲンコツ一発で済みますだろう。あの朝潮型は……不知火はそれ以上考えるのをやめた。ただ、山城がそうなったときどうなるか、不知火にも想像がつかなかった。

「そうだ。不知火から、やんわりと山城さんに『ジャージはいてみない』とか『スパッツをはかれては?』と言ったらどうだろう?」

「不自然すぎないでしょうか? それに山城の戦闘装束は姉の扶桑とおそろいです。山城の性格を見るに、自分から他の格好をしたがると思えません」

「そうだね……いつそ、扶桑さんを通じて勧めてもらおうとか……」

不知火はため息をついた。

「今の話を、扶桑さんにも理解してもらえたら良いでしょうが、大丈夫だと思いますか?」

「それは無理だね。いろいろと危険すぎる」

結局堂々巡りになってしまった。

「いいですか、司令。あとは司令次第です。とにかく風の強い露天甲板やラツタルでは視線に注意して、山城に気取られないよう注意してください」

「うん、それしかなさそうだね……」

不毛な議論を終え、二人はどつと疲労感に襲われながら棧橋の板木へ足をおろす。不知火は先ほど案内された戦艦山城の艦尾にある長官用の個室のことを思い出した。

「そういうえば、戦艦の長官室はさすがに凝った内装で、豪華でしたね。戦艦を持つ艦隊司令はあそこに寝泊まりする事もできます。戦艦の人気の秘密はあの部屋を使えるからという話もありますが」

日本の主力戦艦の艦尾には、帆船時代の名残で高級士官室が集まっ

ており、特に最後尾にある長官室は豪華な調度品の備わり、高級ホテルのスイートルームのようだ。

「いやいや、僕はホテルで十分だよ」

トビウメ提督は苦笑いして首を振る。不知火にも理由はわかっていた。長官室には扶桑のものと思われるクシやアクセサリーなどの私物が残っていたのだ。姉妹と一緒にいられるとき、その部屋はきつと扶桑のためものなのだろう。それにも増して二人を驚かせたのは、士官室や艦長室、ガンルーム（士官次室）などの調度だ。まるで独裁国家の指導者かと思わせるくらい、廊下や部屋の至る所に、扶桑の艶やかな、あるいは優しそうな笑顔または物憂いげな表情を捉えた大判の写真が丁寧に額に入れて飾られている。写真のこととあって、提督が山城にたずねてみると、広報部付きの青葉に軍票をはたいて撮らせたという。確かに良い写真が多かった。「連合艦隊でもっとも美しい艦娘」と山城が豪語する気持ちは、トビウメ提督も十分納得できるのだが、さすがに何枚もの写真に見張られているようで、どうにも落ち着かない気分になってくる。一応提督専用艦尾の一角にある参謀公室を一部屋借りることになったが、トビウメ提督はその部屋の壁に飾ってあった扶桑の写真には丁寧に風呂敷を被せてしまった。とはいえ、そこでもあまりくつろげるとは思えない。

二人が岸壁に戻ると、対岸の商用棧橋のにぎわいが聞こえてきた。岸壁には陸軍の輸送船が五隻係留されている。カーキ色の戦闘服姿の陸軍兵が倉庫前に列をなして、夕飯の給仕を受けているところだった。

「ブ島攻略の陸軍一個連隊、到着したようですね」

トビウメ提督は足を止めて兵士達の様子に見入った。

「ぬいぬいも僕も「前の世界」から来たけど、あの兵隊達はどこから来たんだらう？」

不知火はかぶりを振って答える。

「陸軍の世界は、海軍とは全く異なった理で動いているようです」

提督はそうかとうなずいた。

自分の艦で用事があるという不知火と別れ、トビウメ提督は岸壁を

宿舎へ向けとぼとぼと歩き出した。昼間からのストレスでどうも気分が落ち着かない。トビウメ提督は鞆の中から茶封筒を取り出す。四つ切り判のモノクロ写真には自分で撮った艦娘達が写っている。現像の済んでいる一番最近のものはシューズ・ベラ島に初風達を迎えに行つた際のもので、指揮下の駆逐艦達や看護服姿の翔鶴が笑顔を向けている。そんな愛らしい姿を眺めっていると、日中ピンク色に濁つた脳味噌が少し晴れ晴れしてくる。提督がさらに写真をめくつていくと、最後の一枚に、前に現像してあつた第一次ブーメラン島沖海戦直前に撮つた那智の横顔の写真につきあつた。重巡足柄を見送る那智の端正な横顔を食い入るようにつめめる。

「そういうえば、那智さんと二人で写真撮つたことなかつたよな……」
トビウメ提督は今更ながらに呟いた。

気づくと、いつの間にか提督の濁つた思考は、曇りのない紫とも白ともいえる晴れ晴れとしたものに清められていた。

——出航まであと二日、ミニスカートなんて些末なことに動揺している場合じゃない。今回ばかりは失敗できないんだ
トビウメ提督は頭を振りながらそう自戒した。

提督と別れ、自分の艦へ戻つた不知火は甲板に佇み、提督とのやりとりを回想する。

——まったく司令も何を考えているのかしら……
不知火はそう嘆息し、冷蔵庫で冷やしていたラムネを一瓶手にして一番魚雷発射管の屋根に座り込んだ。栓を落として冷たい炭酸の刺激を堪能する。給糧艦間宮で長良達が調達してきたものの残りだ。やはり隊内の巡洋艦で製造したものより甘くて美味しい。

「こういうとき那智さんなら、司令にどう答えたんでしょうか？」
不知火はラムネ瓶を手に一人つぶやいた。不知火はふと那智のタイトスカート姿を思い出した。不知火は自分のスカートの裾をつまんだ。

——タイトスカートの話をしてるときだけ、ずいぶんムキになっていましたか……。もし、不知火が那智さんのようなタイト

スカートをはいてみたら、司令はどう思われるでしょう？

いざ自分で想像してみると、上着とちぐはぐすぎて、ひどく滑稽な自分の姿が脳裏に浮かび、不知火は思わず顔を両手に沈める。自分は一体何を想像しているのか……。

「まったく、変なこと相談した司令のせいですよ……」

不知火は深呼吸してから、ふと自分のスパッツの生地を引っ張ってみる。姉妹艦の陽炎や黒潮とおそろいの服装だが、赤道直下の熱帯気候では蒸し暑く感じることも多い。

——初風もスカートだけですし、不知火がこれを着用しなければならぬ理由もありません。そもそも司令は、スパッツがない不知火にも、山城に対するように狼狽してくれるでしょうか？

不知火の思考はだんだん明後日の方へオーバーライドしていく。

「不知火さん」

そこまで考えたところで不知火はふと頭を抱えた。

『あらあら、ウフフフ』

もつとも警戒すべき駆逐艦娘のことを思い出し、顔から血の気が引いた。

——いけません！ 不知火がそのような真似に及べば、あの不埒な朝潮型がきつと同じ事をやりだすに決まってるわ……。いえ、それどころか荒潮なら、スパッツだけでなくその下までとりかねません。そんなことになったら司令が……。

そこまで考えてから、不知火は眠気を覚ますように両頬を軽くたたく。

「し、不知火は一体何を考えて……。まったく……」

「不知火さん」

——まったく、こんな事で悩むなんて、司令のせいです。決して不知火の落ち度では……。

「不知火さん？」

不知火はようやく自分を呼ぶ声に気づき、正気を取り戻す。そして、まるで死神を見るかのように、驚愕の表情で声の主を見返した。

「はっ、早霜！」

駆逐艦不知火の舷側近くまで内火艇を寄せていた早霜が、その操舵室から不知火を見上げていた。不知火は思わず心臓が止まるかと思っただ。

「い、いつからそこに……………」

不知火は必死に狼狽を隠しながら問うと、早霜は静かに微笑んだ。

「フフフフ……………、三回呼んだわ」

——さ、三回も……………」

「顔色がすぐれないみたいですが、大丈夫かしら？」

「え、ええ、し、不知火は万全です。早霜こそどうしたのですか？」

「ちよっとお話、しませんか？」

早霜はフフフツと静かに笑った。

駆逐艦達の夜

不知火は乗艦した早霜に冷えたラムネを渡し、煙突横にある対空機銃座の欄干に腰かけた。早霜は甲板の通風筒によりかかりラムネのビー玉を落とす。

「次の作戦、わたしは参加できないから、恩返しできないわね」

「そんなことは気にしないでいいです。今は一日も早く修理と調整を考えて下さい。我々は慢性的な戦力不足です。遊んでいる暇はありませんよ」

不知火は素っ気なく言った。早霜はラムネ瓶を傾けながら、陸軍の輸送船団が接岸している商用栈橋を見つめる。

「不知火さん、あの兵隊さん達、何人くらいが戻ってくるかしら」

不知火も栈橋をぼんやりと見つめる。

「少なくとも、輸送船ごと海没する事がないよう、力を尽くすのが不知火達の役割です」

「そうね……」

陽が沈みはじめみるみる暗くなっていく。すると対岸の栈橋を賑わしていた陸兵達は蜘蛛の子を散らすように姿を消し、ひっそりと静まり返ってしまった。

—— 話に聞いていましたが、随分と規則正しいのね

不知火がふとそんなことを考えていると、早霜が顔を上げた。

「那智さんは元気かしら」

不知火は我に返って早霜を見下ろした。

「那智さんは気丈な方です。きっと新しい艦隊でも能力を發揮されると信じています」

「不知火さん、暗くなると、あの時のことを思い出してしまうわ。あれからまだ一ヶ月も経っていないのね」

そう言われ、不知火も確かにそうだと思った。いろいろなことがあり、ブ島沖の海戦など、はるか過去の出来事のように感じていたが、まだ一ヶ月も経っていない。

「確かに、そうですね」

二人の意識は、重油が海面を黒く染め、空には煙幕と火災の黒煙渦巻くあの戦場へ引き戻された。

シューズ・ベラ島沖合。連合艦隊主隊は深海軍による包囲攻撃の末、敵味方入り乱れた乱戦状況に陥った。

敵高速戦艦に魚雷命中させ、なんとか撃退に成功した駆逐艦不知火は旗艦の重巡那智、加古に続き西へ舵をとった。先頭を行く那智はすぐに煙幕の向こうに姿を消し、不知火も全速でスクリューを回す。

周囲には敵味方の艦船が炎と煙を上げて沈み始めている。船体全体が破壊尽くされている艦もあれば、まだ生きている艦娘がマストにしがみついている艦もあった。艦娘の不知火は敢えて見ないように前だけを見つめた。たとえ誰であれ、必要とあらば見捨てる覚悟はできていた。仮にそれが陽炎型の姉妹艦であろうとも……ただそのとき、不知火の艦橋に据えられた70ミリ双眼望遠が、右舷方向の低く垂れ込めた黒煙の隙間に「モシヤハ」という白いペンキ塗りの表記を視界に捉えた。察知した不知火は反射的にその方向へ顔を向けたが、その船影はすぐに煙の向こうに隠れてしまった。不知火は戸惑いながら加古の船尾と、右舷方向を煙幕とを交互に見かえず。

不知火は二秒の逡巡後、一階下の操舵室に取舵一杯を命じていた。

——那智さんと司令はきつと怒るでしょうね

不知火はそう思ったが、決然と機関を回した。もう迷いはない。離脱する僚艦を狙い敵艦が煙幕めがけ盲撃ちしてくるので、周囲に再び高い水柱が立ち、駆逐艦不知火の船体を翻弄する。しかし、不知火は気にもとめずに艦を走らせ、ようやく煙の向こうに今しがた見失った駆逐艦の船体を視認した。

夕雲型駆逐艦十七番艦の早霜は、艦中央部の一番魚雷発射管と二番煙突周辺が滅茶苦茶に崩壊しているのを除けば、火災も浸水もないように見えた。不知火は衝突しないよう艦の速力を落とし、両艦の舳先同士が10メートルほどの距離まで来たところで停船させた。

「早霜・早霜・無事ですか？」

不知火は前甲板に降りてそう呼びかけるが、応答はない。艦娘がすでにやられていたら救う手立てはないが、不知火は前甲板機銃座によ

じ登ってみると、向こうの駆逐艦の前甲板で、艦橋構造物に寄りかかって座り込んでいる艦娘が見えた。黒くて長い髪が海風に吹かれるままに乱れ、呆然と海をみつめているが、死んでいるわけではないようだ。

「早霜ー！ 救援です！ 至急、被害状況知らせ！」

その艦娘はかすかに顔をこちらに向けた。怪我をしているようには見えないが、慌てたり、急いだりする素振りもない。不知火はメガホンをとってさらに大声で呼びかけるとようやく艦娘の早霜は緩慢な動作で立ち上がり、艦首の方へ歩いてきた。

不知火が舳先まで駆け寄り大声で叫ぶ。

「早霜、機関の状況は？ 自走できますか？」

「不知火さん、こんな時に何をしているの！」

早霜は感情のこもらない声で不知火にそう返事した。

駆逐艦娘の早霜、不知火はこの世界で過去に一度だけ顔を会わせたことがあった。その時は前世の因縁もあり短い時間に挨拶だけすませたのだが、早霜は非常によそよそしく、またとにかく無愛想で辛気臭く、暗い艦娘で、名乗った不知火に対しても慇懃無礼に定型的な挨拶で応じると逃げるように去っていったのだった。

周囲の砲声や砲弾の着水音で不知火には早霜の声がよく聞こえなかった。

「損害は！」

早霜は肩をすくめて艦首の錨甲板までやってくるとはつきりとした声で言う。

「機関室が四つとも水を被ってしまったわ。二ノツトも出れば良いほうね。それより早く逃げないと間に合わないわ。早く行って」

不知火はうなずいて艦尾から曳航索につながったロープを持ってきた。

「不知火が曳航します。すぐにこれをつないでください」

不知火がそう促すが、早霜は動こうとしない。

「何の意味があるというの。早く逃げて。わたしはもたないわ」

「早くしてください！ 追手が迫っています！」

不知火は顔に青筋を浮かせて怒鳴るが早霜は動こうとしない。

「前のようにはさせないわ。わたしはここで沈みます。あとは不知火さん次第よ……」

早霜はまるで死人のように真っ白な顔で、眉ひとつ動かさずそう告げた。静かながらも、冷たくて硬い、強い意志が感じられた。不知火は顔をゆがめて舌打ちすると、急いで艦橋構造物へ取って返した。

——ずいぶん扱いづらい艦娘になったものですね

不知火が自室にしまっておいた白兵戦用の艦装の主砲を手に戻ってきたとき、早霜はまだ艦首に呆然と立ち尽くしていた。

不知火は、まるで自艦の主砲のミニチュアのような（でも実際には本物と同じくらい緻密に動作する）主砲艦装を右手にはめ、早霜の顔に狙いを定めた。ガチャリと砲弾を装填した音が響くが、それが早霜の耳に届いたどうかはわからない。

「なにか勘違いしているようね、早霜。前世で不知火に耐え難い悔恨を背負わせた貴女に、不知火の前で勝手に沈む自由など無いんですよ。もしその動く意志がないなら、不知火がいますぐ介錯して、前世の無念を濯いでから離脱するまでのこと」

不知火は夜叉のような顔でそう言い放ち、引き金に力を込めた。

早霜は少し驚いたように、前髪に隠れていない左目を少し大きく見開いてからため息をついた。

「なら、どうしようもないわね……」

早霜はようやく体を動かして曳航の準備を始めた。不知火は手にした艦装を甲板に下ろし、太い曳航索に紐でつながったボールを早霜の甲板へ放り投げる。早霜はすぐにそのボールと紐を伝って伸びてくる頑丈なロープを甲板に拾い上げると、艦首フェアリーダー（ロープなどを通すための甲板の縁にあるガイド金具）にくぐらせて、あとは見えない妖精さんの力で前甲板のウインチへと結びつけた。早霜が動き出したのを見て、不知火は続けて電話線のケーブルを投げ渡す。これがあれば甲板から大声を張り上げたり、何かある度に面倒な発光信号を送らずに済むからだ。

「すぐに機関を回してください。索の長さは四十メートルで曳航しま

す」

そう怒鳴ると不知火はすぐに曳航索を艦尾のリールで巻き取りながら、舵を面舵にきりつつ機関を回し始めた。

駆逐艦早霜もプロペラをまわしはじめたらしく、少しずつ前へ進み始める。曳航索がピンと張り、駆逐艦早霜はぐつと前に引つ張られはじめた。煙幕と水柱をかくぐり、二隻の駆逐艦はゆつくりと進み始める。速力は十ノットも出ればいいほうだ。

「バカみたい……」

数十メートル先で必死になって動けなくなった自分の艦を引つ張っていく駆逐艦不知火の艦尾をじつと見つめながら早霜は声にならない声でつぶやいた。それは無謀な振る舞いに出た不知火に対するものか、それとも前世と同じ道を辿ろうとしている自分へ向けたものだったのか……。

——これで二人共帰還できなかつたら、不知火さんは犬死になってしまうわね……

早霜は心が凍るような思いに駆られ、甲板に膝をついて顔を覆った。

その時、早霜の左舷双眼鏡が煙幕の向こうで赤い燐光を発する深海棲艦の影を捉えた。前を行く不知火は気づいていないようだった。早霜ははつと顔を上げる。駆逐艦不知火の兵装はどれも損傷を受け、すぐに対処できるとは思えない。

——的針〇二二、的速十八……。やはり接敵してしまうのね

早霜はすぐに、なんとか動く二番魚雷発射管と一番主砲を艦の左舷前方へ向けて旋回させた。魚雷戦方位盤がすぐに発射解をはじき出す。

早霜は有線電話で不知火に伝えることなく、左舷へ回頭させた第二魚雷発射管から残っていた三本の酸素魚雷を全弾射出した。

前方の不知火が煙幕を抜けたのはそれから十秒後のことだった。双方ともに意図していなかった遭遇というのは不思議な時間的空白を生み出す。駆逐艦不知火の左舷後方、距離三百メートルにへ級軽巡洋艦が突然姿を現し、不知火ははつと後ろを振り返る。敵にとつても

不意の会敵だったようで、どの砲塔も不知火とは全く違う方向を向いていた。一瞬の呆然状態の後、二艦は同時に相手へ向けて砲塔を回し始めた。駆逐艦不知火が満足に動かせる砲塔は二番砲塔の12・7センチ砲が二門のみ。へ級軽巡の艦前方に備えた15・7ミリ砲計6門の砲口も駆逐艦不知火を追い始めた。かなり分が悪いことを自覚しつつも不知火は射撃解の割り出しと砲塔操作につとめる。へ級の一番砲塔が止まるのと同時に、その右舷の海面が白く光った。すぐに海面から水柱が二つ、数秒間隔でその船体を左へ大きく揺さぶった。へ級軽巡の不格好な煙突から真つ赤な火柱が吹き出し、船体が文字通りへの字にねじ切れているのがわかった。すかさずトドメとばかりに12・7ミリ主砲の砲弾が敵軽巡の羅針艦橋を吹き飛ばした。それは駆逐艦早霜の前部砲塔による砲撃だった。

突然の事に不知火は目を丸くして、すぐに駆逐艦早霜を見返した。

『フッフ．．．．油断大敵よ。でも．．．．これで、魚雷は使
い切ってしまったわ．．．．』

早霜が有線電話で不知火にそう呼びかけた。不知火は緊張を解いて呼びかける。

「二応、礼を言っておきます。早霜も引き続き周囲警戒を。一気に抜
けますよ」

不知火はそうぶつきらばうに伝えると、機関全速で西へ向けて艦を
進めた。

駆逐艦早霜の前甲板に佇んでいた早霜は、声音には微塵も焦りの色
を見せなかったが、内心では不知火以上に安堵していた。もし自分の
酸素魚雷がはずれてしまったら、自分たち二艦合わせても敵軽巡との
撃ち合いに競り勝つ火力残っていなかった。

——これで何分、生き長らえることになったのかしら

早霜は自艦の沈没が確実となったら、すぐにでも曳航索を切断して
しまえるよう、第一砲塔の後ろに斧を準備していた。

それから二時間、深海軍の組織的追撃もなく、二隻の駆逐艦は油の
膜を曳きながら戦闘海域の離脱に成功した。自分たちの向かう西の
空の太陽が低くなってきた。進みながらも不知火は自分の艦の空中

線の復旧を進めていた。なんとか甲板にアンテナとなる臨時のワイヤーを張ると、タロタロ島に逃げた艦が敵潜水艦隊の待ち伏せを受けて大きな被害を出しているという複数の通信が舞い込んできた。

不知火は早霜へ、タロタロ島からシユーズ・ベラ島へ針路を変えたと伝え、面舵に舵をきった。速力は十ノットに届くか届かないか……。応急処置は続けていたが、駆逐艦早霜の右舷機関室への浸水は止まらないままだった。

重油にも海水が混入しており早霜は、不安な様子で空を見上げた。日が暮れば空襲の心配はなくなるが、海上を低速で進む自分達は潜水艦の格好の獲物になる。

前方の不知火も早霜の水力が徐々に弱まっていくことに気づいていた。自分だけで引つ張ることもできるが、このままだと速力は格段に落ちるだろう。

二人の予見は外れることなく、それから間もなく駆逐艦早霜の機関は停止した。罐まで水が入ってきたのだ。スクリュープロペラが完全に停止したため、不知火はすぐに早霜へ機関の再起を試みるよう伝えたので、早霜もそれにしたがって作業してみるが、遂に止まった機関が再び動き出すことはなかった。

「わかりました。ここからは不知火単独で曳航します。早霜は周囲の警戒を続けてください」早霜は返事をせず、第一砲塔の後ろの斧を見る。もう少し暗くなったらこれを使うことになるだろう。早霜は、煙突から黒煙を吐いて必死に機関を回す駆逐艦不知火を見つめた。

「ありがとう、不知火さん。ここまでやってくれれば、十分よ」

『早霜、一時方向に航空機！ 対空戦闘用意！』

不知火の切羽詰った声がスピーカーから聞こえた。

——これまでのようね

斧を手にした早霜が空を見上げると、黒い豆粒が一つ、ゆつくりと高度を落としながらこちらへ近づいてくる。幸い編隊ではなく単機のようなのだ。

「いいわ、お相手します。爆弾でも魚雷でも存分にやるといいわ。わたしに爆弾を使い切れれば、不知火さんは一人で逃げる事ができるわ

ね」

早霜はその機影を睨むと、艦に残った全ての機銃座に指示を出し、一斉に一時方向へと銃口を向けた。

『早霜、射撃待て。あれは……、あれは友軍の水偵です』

不知火の音がそう制止した。語尾には少し嬉しそうな響きが電話越しにわかった。黒い豆粒は徐々にフロートを2つ下げた水上機のシルエットになって近づいてくる。すでに緑とグレーの塗り分けや白ふちの日の丸もはつきり見える。それは味方の零式三座水偵だった。

「あれは、那智さんの……」

艦橋の天井に飛び乗った不知火は水偵を見上げてつぶやいた。水上機は二隻の駆逐艦の周りを低空で旋回しはじめ、無人のコクピットで何やら光が明滅しはじめた。

『シユーズ・ベラ島へ針路ヲトレ。我、上空ヨリ針路上を哨戒ス。側方、後方の対戦警戒を厳トセヨ』

それは信号灯によるモールス信号で、不知火はそれを読み取ると、すぐに艦橋にある有線電話の受話器を手にした。

「早霜、あれは那智さんが送ってくれた水偵です。しばらく前方の針路を見張ってくれようですよ」

不知火は早霜に指示を伝えると思わず水偵に向かって手を振った。まだ無事に帰れる保証は無いが、不知火は数百倍の力を得たように勇氣付けられた。

また、早霜も自分の艦の前甲板から那智の偵察機を見上げていた。

「那智さん……。私なんかを、またも助けようとしてくれるのね」

偵察機は信号を送り終わると、二隻の進行方向を左右に横断するよう哨戒活動をはじめた。西陽で海面がオレンジ色に染まる海を

二隻はゆつくりと進む。すでに速力は時速6ノットに落ちていた。

「不知火さん、貴女は指揮官の許可を得て、私の救援に来たの?」

早霜は那智の水偵を見ながら尋ねた。

『いいえ、そんな余裕はありませんでしたよ』

「これは命令違反だったのではなくて?」

『厳密に言えばそうなるでしょう……』

電話越しに少し不知火の声のトーンが落ちた。

『しかし、これは不知火の宿命です。仮に命令違反となろうとも、選択の余地はありません』不知火の決然とした声を聞き、早霜は受話器を耳に当てながら思った。

——もし無事に戻れたとして、不知火さんが上官から処分を受けてしまったら、わたしはまた罪作りなことをしてしまったのね

水偵のエンジン音がブーンと唸り声を上げて上空を通過した。

駆逐艦早霜が外南洋戦域派遣の命を受けたのは、この作戦のはじまる二週間前のことだった。本土の鎮守府付きだった早霜に移転を命じたのはいくつもの駆逐隊を指揮する上級司令官だった。聞けば南方からの援軍要請に対し、数合わせのためにくじ引きで三隻の駆逐艦を送ることにし、その一隻が駆逐艦早霜だったという。はなむけの言葉も、見送りもなく三隻は外南洋の最前線へと送られた。駆逐艦にとつての新たな艦隊司令となったタロタロ島で出会った提督は、自分に送られた増援部隊が駆逐艦三隻だけだったことに対し、艦娘達の前で露骨に失望の色を見せた。それから一週間を経ずしてこの負け戦となったのだ。

早霜は、自分の所属する寄せ集め部隊が海戦の序盤で総崩れになったことまでは覚えているが、その後の猛烈な砲撃のもと、明確な指示がないまま陣形は崩れ、僚艦は、行方知らずになるか、そばで火柱を上げて沈んでいくのみで、自分の隊の旗艦や司令官のその後の命運はまったくわからない。少なくとも早霜という艦がどうなったのか、気に留めている指揮官や僚艦など、いないことだけはわかっていた。

一方、前を進む駆逐艦不知火にはその身を案じてくれる存在があることを、夕焼け空を飛ぶ偵察機が証明していた。

「ねえ、不知火さん。那智さんは今でも旗艦かしら？」

早霜が尋ねると、不知火は肯定した。

『ええ、ヤムヤム島に赴任して以来、ずっとそうですよ』

「じゃあ、不知火さんの司令官も、那智さんに乗っているのね」
『ええ』

不知火がそう答えると、早霜が黙り込んだ。しばらく沈黙が続くので、不知火はそれが何か？と尋ねるが、早霜はなんでもないわと言って受話器を置いた。

そこまで思い出話をしている頃には二人のラムネ便は空になっていた。

「わたし、あの水漬がいなかったら、きっとシューズ・ベラに辿り着けなかったような気がするわ」

不知火は軽くうなずいた。

「そうですね、結果はどうあれ、上空から見守ってくれたお蔭で、大変元気づけられたのは事実です。あれほど嬉しいことはそうあるものではありません。もう一本飲みますか？」

手を差し出す不知火に早霜は、いただくわと言って空き瓶を手渡す。ラムネ瓶は使い捨てではない。空き瓶を給料艦間宮へ返却すれば再びラムネを充填してくれるのだ。空き瓶の回収率の高い艦隊は優先的にラムネの配給を受けることもでき、各艦隊とも回収率向上に必死だった。

不知火が再び冷えたラムネ瓶を二本持つて来ると、二人は器用にビー玉を落とし、再び瓶を傾け始めた。

「わたし、那智さんにお礼ができないままになってしまったわ」

早霜の言葉によって二人は再び、あの夕暮れ時の海上へと引き戻された。

二隻の駆逐艦は夕闇に包まれた海面をゆつくりと、まだ見えぬシューズ・ベラ島めがけ進んでいた。駆逐艦不知火の推進軸が次第に振動を始め、その不具合により速度は五ノットに落ちた。すでに太陽は水平線の下に姿を消し、空は紫色からすでに群青色へ明るさを失っていても、頭上の三座水漬はいまだ二隻を見守っていた。

早霜は不知火へ不安そうに言った。

「不知火さん。那智さんの飛行機、少し長くないかしら？　もう随分経つわ……」

不知火も先程から気がかりになっていた。間もなく完全に夜になる。また、どの地点で那智から発艦したのかは判らないが、すぐにも帰還の為の燃料も足りなくなるはずだ。

——仕方ありません、帰還を促しましょう。

不知火が上空へ帰還するよう発光信号を送るが、水偵からの返事は「我、哨戒ヲ継続ス」という素っ気ないものだった。

『不知火さん、那智さんの水偵……』

「ええ、戻る気はないようです」

どうやら、燃料尽きるまで自分たちの護衛を務める決意のようだ。不知火は罪悪感に襲われた。自分の意地は那智に犠牲を強しることになってしまった。

艦娘の操る艦載機にはパイロットこそ乗ってはいないが、その艦の艤装や船体と同様に、艦娘の精神、肉体と非常に強い結びつきを持った装備だ。それを失うことは艦娘にとって精神的苦痛を伴う。

——那智さん、すみません……

不知火は水偵を見上げながらわびた。

不知火の行き足はさらに遅くなり、まだ島影も見えないうちに完全に日がくれた。日没から一時間半あまり、進路上をジグザグに飛行を続けていた三座水偵の発動機の音が不意に止まった。すでに低速で主翼のフラップを一杯下げて滑空していた水偵は不知火ら二隻の右舷側に、並行するようにゆっくりと海面にフロートをつけ着水、そのまま二隻を追い越して海上に止まる。燃料が尽きたのだ。不知火と早霜は甲板から波に揺られて漂う水上機を見つめた。

不知火はすぐにも、ワイヤーで自艦にくくりつけ、早霜共々シユーズ・ベラ島まで曳航していこうと思いついたが、不意に水底はフロートからずぶずぶと海面下に沈み始めた。

「あつ……」

不知火と早霜は同時に声を出していた。どうやら那智は最初からその機の処し方を決めていたようだ。きつと手負いの自分たちが無理に回収しようとしないう取り計らったのだろう。人が乗っていないだけ良いものの、不知火の胸は傷んだ。二人の艦娘は右舷甲板で

直立不動の姿勢をとって敬礼した。そんな二人に見守られながら、那智の三番偵察機は真つ暗な海面にゆつくりと姿を消した。

二人がそれを見届けると、早霜はふと甲板に置いた斧に目をやり、再び海面に目を戻す。

「ここまでさせてしまつて……。どうやら、本当に生きて戻つて、直接お礼を言わなくてはならなくなつたわね」

早霜は水上機が沈んでいった海面をそうつぶやいた。

すつかり夜になり、いっどこから潜水艦の奇襲を受けるかわからない状況になつた。駆逐艦早霜から不知火の姿がほとんど見えなくらい暗くなつている。二隻とも、敵に見つからないよう航行灯を含む一切の灯りを消して進んでいた。

はつきりと分かるのは、駆逐艦不知火によつて作られる航跡を彩る、青白い夜光虫の光のみだ。早霜は艦橋に上がつて受話器を取つた。

「不知火さん、わたし……。ひとつ気掛かりなことが。偵察機を失つたことで、那智さんが司令官から責められないか心配だわ」

資材や装備を管理する立場の提督のなかには航空機損耗を異常に嫌う者も多い。早霜の心配もつともな事だつた。

不知火は周囲の海面に注意をしつつ、早霜の懸念を自分で考えてみた。水偵が帰還しないと判つたとき、不知火の脳裏でも一瞬そんな心配が浮かび上がったが、その後、すぐに忘れてしまつていたので。その実、不知火は自分が、那智が提督から叱責される心配などしていないことに今更ながらに気がついた。確証は無いのだが、そんな心配は取り越し苦労に思えたのだ。

「どうでしょう、その心配はしなくてもいいと思います」

そう答え、不知火はちよつと前のことを思いだした。

「以前、こんなことがありました。まだ司令が着任して間もない頃のことです。那智さんや司令と哨戒任務に出ていた姉妹艦の初風が潜水艦の雷撃で被雷し、航行不能に陥つたことがありました。その時、不知火は母港にいて、知らせを受けて救援体制を整えていたのですが、司令と那智さんが棧橋へ初風を曳航してきたとき、司令はやたら

取り乱していて、まったくみつともない様子でした」

思い出を語りながら、不知火はそこで人知れずクスリと笑う。「まったく戦争ごには向かない軟弱な方ですが、慌てふためきながらもその司令が、負傷した初風を背負って病院に一番に運び込んでくれました。その時は姉妹艦として、ありがたいような……なんというか、少し嬉しかったです」

——文句ばかり言いつつも、初風が司令に懐き始めたのはあの頃からかもしれないね

「不知火の司令はそういう人です。だから早霜はそんなことは心配せず、今は潜水艦に注意を向けてください」
「そう……」

不安そうに早霜は受話器を置いた。

二隻の駆逐艦の視程に薄っすらとシューズ・ベラの島影が浮かんできたのはそれから二十分後のことだった。不知火は自分たちの位置を確認後、早霜に航行灯をつけるよう指示し、潜水艦待ち伏せに注意するよう伝えた。

灯火管制でほとんどの灯りが消されたシューズ・ベラの港の湾内で不知火はようやく機関を止めた。

「早霜もう安心です。すぐに救援が来ますよ」

不知火は艦の錨を下ろしてから、湾内を眺め渡す。那智や加古達の艦影を探すが、真っ暗でどこにいるかわからない。すぐにも提督と那智へもとへ出頭しなければと気がはやった。すると、さっそく救援隊と思しき内火艇が近寄ってくる。

——あの人達に聞けばわかるかしら

不知火が艦橋から見下ろすと、内火艇の操舵室に見紛う事なき人影が二つ並んで立っていた。シルエットを見るに、幸い大きな怪我はしていないようだ。不知火は大きく息を吐いた。早霜を連れ帰えることができ、那智も提督も生還できた。これ以上何を望むことがあるだろうか。

二人が乗艦してきたので不知火も出迎えと報告のため下へ降りて二人を迎えた。

真つ暗で二人の影しか見えないが、事情を知っている那智は多くを語らず、早霜の様子を見に内火艇へ戻って行った。一方、トビウメ提督は、那智が去るといつもよりも抑揚のない、聞き慣れない押し殺した声でいう。

「どれだけ心配したと思っっているんだ……。まったく勝手なことばかりして……」

本気で怒っているのだろう、それも当然だと不知火は思った。

「罰を受けてもらう……。一回で済むから……」

不知火は鉄拳制裁に備え奥歯を噛み締めた。不知火はじつと目を閉じ提督の制裁を待った。

「あの後、シューズ・ベラ島にいる初風さんを見ていて、よく判ったわ。それに、あの夜、真つ暗な港で救助を待っている時にとても安堵したの。わたし……。不知火さんが制裁を受けなくて、本当に良かったと思っっているわ」

もう真つ暗になった駆逐艦不知火の甲板で早霜が言った

「はい……。え？」

不知火は急に引っかかるものを感じ、戸惑いの声をあげる。

——不知火は、一応司令からきつく『お叱り』を受けて許されたことになってはいるはずで……。何故……。もしやあの時！

耳まで赤くなって狼狽し始めた不知火を他所に、早霜はすくつと立ち上がると不知火に妖しげな笑みを向けた。

「不知火さん、今夜はもう行くわ。ラムネご馳走様でした。フフツ、フフ……」

早霜は、冷や汗をかき始めた不知火を残し、内火艇へと乗り込むと、低い笑い声を残して去っていった。

同じ頃、夜の帳が落ちた湾の中央に停泊中の給料艦間宮に内火艇一艘が接舷し、制服姿の提督と艦娘が間宮の舷梯に飛び移った。甲板で作業していた主計科の職員たちが手を止めて敬礼するので、その提督は気にしないで作業を続けるように促して艦橋へ続く階段へと向か

う。その提督には、どうもこの軍隊じみた挨拶の習慣が面倒でならなかった。

「あら、ナス提督！ それに日向さんも！ お待ちしてました。さあ上がってください」

艦娘の間宮が艦橋横のウイングから顔をのぞかせ、嬉しそうに二人を呼んだ。三人は先日会議を開いた間宮の通信室に腰を落ち着けた。

「今日は随分と遅かったんですね」

間宮の問いにナス提督は渋面でうなずいた。

「陸軍部隊の司令部との合同戦勝祈願パーティをやつとの事で抜けてきたところです。戦いがこれからという時に……」

日向もまっただという表情でうなずいた。

「陸軍の師団長は、まだ作戦も始まっていないというに、酔いにまかせてブーメラン島奪還の次はクナイ諸島も我が師団で占領して良いか？なんてうそぶく始末だ」

「まあ……」

間宮も驚いたように口を抑える。

クナイ諸島は、ブーメラン島の南約百裡に位置する群島で、一年ほど前に深海軍の奇襲により守備隊、住民全員が犠牲になるという惨劇の舞台となった。それ以降は深海軍の進出拠点の一つとなっている。

「海軍の司令部連中もそれを諫めるどころか、『次はクナイ奪還だ！』と呼応する有様でね」

日向は呆れ果てた表情で首を振る。

「それはそうと、間宮さん。その後どうです？」

ナス提督は自分の耳を指しながら尋ねた。間宮は真剣な表情になつてうなずき、ノートを開く。

「ええ、一日最大三回程度だった深海棲艦の短波通信が今日未明から頻繁に傍受されるようになりました。現時刻までにすでに二十二回、遠距離の長波通信も十一回。昨日は短波通信がたったの五回だったのに……」

間宮が不安そうにうつむく。

「今日入港した陸軍の船団を追っていると見るのが自然だな……」

日向が腕を組みながらつぶやく。

「間宮さん、連合艦隊司令部に至急扱いで報告を上げてください」

そう言うナス提督に、間宮ははいとうなずいた。

「どうせ聞く耳を持たんだろうがね……。ただ、敵は私たちがどれほどの規模で上陸作戦を展開するか、ある程度知つているということになるな」

日向の言葉により、無線室に沈黙がおとずれた。

「そういえば、カメヤマ提督からはまだ連絡来てないですよね」

「ええ、つい心配になつてしまいますね」

間宮が不安そうに言った。

「まだしばらくかかるでしょう。きっと敵にギリギリまで接近して情報を送ってくるつもりなのでしょう。引き続き、傍受をお願いします」

間宮はうなずいた。

「それにしても、作戦は大丈夫なのでしょうか？」

「司令部はどうしようもないだろう」

日向がそう言つて首を振る。間宮はやるせない表情でうつむく。

「ただ、各戦隊長は司令部よりずっと真剣です。個別に詳細な情報を伝えてあげれば、まだ望みはあります。臨機応変に状況に対応してくれることを期待しましょう」

各提督の性格頼みでなんとも心もとない話だが、今はそう願うしか無い。ナス提督の言葉に艦娘二人がうなずいた。

翌朝、不知火がフラフラと食堂にやってきて、お盆に朝食の膳をのせて席に着く。目の下にはうつすらとクマができていた。

結局、トビウメ提督の下らなくも切実な相談と早霜の不可解な一言により昨日は真夜中まで寝付けなかったのだ。

「あー！ぬいぬ……じゃなくて不知火、おはよう」

「おはようございます……司令」

ここ数日間では珍しく元気がいいトビウメ提督が食堂に現れた。急いで自分の朝食をカウンターから持つてくると、提督は不知火の隣

に座った。

「昨日はありがとう！ おかげで少し気が晴れてね。久々によく寝られたよ」

そして小声で、もうあんなことは気にしない、大丈夫とささやいた。「そ、それは、大変喜ばしい事です」

まるで伝染病のように悩み事をうつされたような心持ちの不知火は、笑顔を引きつらせてそう答えた。

「あら、今日もおそろいね」

ひらひらとどこからともなく現れた荒潮が二人に声をかける。

「荒潮、おはよう！」

「……おはようございます」

挨拶を終えた荒潮を顎に指を当てて周囲を見回した。

「なんか、今朝は提督の数が少ないわね」

そう言われ、二人も広い食堂を見回す。艦娘はそこそこいるものの、言われてみれば提督はトビウメ提督を除けば三、四人くらいしか見当たらない。総員起こし後のこの時間にしては、かなり少ないほうだ。

「そういうえば、昨日は陸軍の司令部の歓迎の宴席が設けられたそうですが、そういうえば司令は行かなくてもよかったですか？」

トビウメ提督は沈鬱な表情で不知火を見返す。

——ああ、そうでした。司令はそういうのが死ぬほど嫌いでした……

「あらあら、出撃前から二日酔いだなんて。次の作戦はなんだか随分、余裕がありそうね」荒潮も半ば呆れた様子で言った。

「皆さん、おはようございます」

わきから挨拶の声がして、三人の元へ早霜がやってきた。

「おはよう、早霜さん」

いつものように突然現れる早霜にトビウメ提督が返す。

「ああ早霜ですか。おはようございます……」

不知火はそう言いかけて、思わず胃が逆流しそうな衝撃を受けた。「ぬいぬい、大丈夫かい？」

提督があわてて不知火の背中をさする。不知火は血の気の引いた顔で早霜を見上げた。

「な……、どうして……」

早霜は不敵に微笑むのみだ。

「あら、今朝はストッキングをはいてないのね」

荒潮が目ざとく早霜の膝を見下ろしながら言った。

トビウメ提督も今になって気づいたようで、早霜の白くて細い生足を見てうなずいた。

「ほんとだ、こういう暑いところだと、その格好も涼し気だね」

昨夕、那智の写真のご利益により解脱状態になったトビウメ提督は、細くしなやかな早霜の脚線美を見ても全く取り乱す様子はなく言った。不知火からしたら、どの口が言っているんですかと文句の一つも言いたいところだか、当の不知火はそれどころではなかった。

「御免なさいね……。ついさつき伝染してしまいました。フフ、フフフフ」

早霜はそう言つて艶っぽく笑う。

「わたしも非番の時はスカートだけでいようかしら」

「この暑さだからねー、それもいいんじゃない？　ねえ、ぬいぬい？　あれ、どうしたの？　具合でも悪いの！」

そう気遣う提督の横で不知火は頭を抱えてうつむく。

——どうして？　なぜ？　し、不知火は昨夜、誰にもそんな話はしていないのに……早霜はどうして……

口頭で問いただすこともできず懊悩する不知火の心中を知ってか知らずか、早霜は妖艶に微笑み続けた。

ナイトキヤップ

時化で横風が強く、軽巡鬼怒と指揮下の三隻の駆逐艦はローリングとピッチングに翻弄されつつ、単縦陣を組み速力二十七ノットで深海棲艦の水雷戦隊を追撃していた。

「目標、進路変えたぞ！ 針路210へ転舵中だ」

前衛の駆逐艦菊月から分隊指揮官の鬼怒へ無線電話が入る。艦娘の鬼怒は艦橋の上から、北へ遁走をはかる敵の単縦陣へ目を凝らす。曇天のもと不気味な黄色い光を灯して逃げつつ、こちらへ反撃する機会をうかがっているようだ。鬼怒が自分の艦へ指示を出すと、前部マストにかけられた索に沿って信号旗がするすると昇っていく。

「次のタイミングで一気に速度上げるよー！」

「了解、まかせて！」

「はい、承知しました」

後ろに続く駆逐艦清霜と春雨から相次いで応答があった。

「菊月だ。最後尾の駆逐艦が単縦陣から外れたぞ！」

高速航行中に急に転針したため、陣形を維持できなくなった敵の駆逐艦が味方艦から針路を大きくはずれて回頭している。味方の援護のない独航艦は格好の標的のだが、鬼怒は戦闘前の申し合わせ通り、敵本隊の追撃を優先させた。

鬼怒が増速の指示を出すと各艦の煙突からぼつと黒煙が吹き出し、艦首波がいつそう激しく海面を割る。鬼怒たちはついに三十ノット以上の早さで敵艦隊を追跡し始めた。さすがにそれまで綺麗に一・五キロ間隔で組んでいた単縦陣が乱れるが、なんとか一列の陣形を維持できていた。

その頃、はるか上空からは重巡那智から発艦した零式三座水偵が彼我の艦隊運動の動きを見守っていた。重巡那智と衣笠、そして駆逐艦三日月からなる第二分隊も戦闘海域に展開しているのだが、未だ接敵せず鬼怒達から西に九浬の離れた位置に占位し続けていた。

『水雷戦隊ハ、敵主隊ノ追撃ヲ継続スベシ』

自艦の砲戦指揮所に立った那智は水偵を介して鬼怒へそう無電を

送り、自艦の前方を走る衣笠へ向け無線電話で呼びかけた。

「そろそろ頃合いだな」

『はい、お任せ、お任せ！』

受話器から元気のいい返事が届き、前方の重巡に新しい信号機が上がった。今回、この第二分隊の旗艦は衣笠が務めている。衣笠、那智、三日月の三艦は測距儀で独航艦となった敵駆逐艦の距離を測り、ちょうど二時方向に位置する敵駆逐艦へ向け砲塔を回す。

『全艦、交互射撃、撃ち方はじめ！』

衣笠の号令とともに第二分隊の各艦は砲撃を開始した。

「第二分隊、砲戦開始」

那智は艦橋を襲う爆音と衝撃波のなか、遠方の敵を見据えながらつぶやいた。

すぐに次の組の砲身が仰角をとって敵を追う。二撃目の発射とほとんど同時に敵の艦列の周囲に水柱が現れる。

前方の衣笠は、すぐに修正した発射解を那智と三日月へ知らせつつ三撃目を準備し始める。今回新しく搭載した徹甲弾には艦ごとの弾着確認を容易にするため、着色剤が混ぜられており、衣笠は黄色、那智には青い着色弾が割り当てられていた。

第一撃、二撃は目標の手前に落ちたようだ。水柱を見ながら那智は前世で自分が参加した海戦を思い出した。

太平洋戦争劈頭、重巡那智が姉妹艦の羽黒らとともにスラバヤ沖で連合国軍の混成海軍を迎撃した際、昼戦では敵の反撃を恐れて遠距離砲戦、魚雷戦にこだわったため敵艦隊の殲滅まで多くの時間を浪費してしまったことがあった。結局、最前線で多くの戦果をあげたのは軽巡、駆逐艦ら水雷戦隊で、重巡部隊は敵に効果的な打撃を与えることができなかったのだ。

そんな記憶の「古傷」をさするような気持ちで那智は衣笠の命令を待った。

——まだ距離が遠いか。さて、衣笠はどうする……

那智がそう思ったところで無線電話のスピーカーから衣笠の声が響いた。

「那智さん、三日月ちゃん、このままじゃ当たらないから、一気に寄せよ！」

衣笠は隊列維持のため発光信号で増速と転舵の方向を指示してきた。那智は衣笠の機敏で大胆な命令に那智は少し驚かされたが、にやりと笑った。

「承知！」

『三日月、了解です！』

重巡衣笠は白い波を曳きながら敵艦隊の左舷側から一気に間合いを詰めつつ敵の針路の前方を遮るように圧迫した。当然、敵は盛んに撃ち返すから敵の砲撃が艦の周りの海面を叩く。

見ているうちに衣笠の艦橋構造物後部に爆煙が上がった。

「衣笠！」

『こっちは平気だよ！ 一気に潰しちゃお！』

距離が詰まれば命中精度どんどん上がる。那智が標的に定めた駆逐艦には挟又後立て続けに二発が命中、急激に速力を落とす。衣笠が狙っていた駆逐艦からもぱつとオレンジ色の花が咲いたように炎が上がらぬ、みるみる炎上しはじめる。後続の駆逐艦三日月も敵を射程にとらえ、敵の駆逐艦に数発の命中弾を与え、敵は完全に戦闘能力を喪失したようだ

『こちら第一分隊、魚雷戦いきます！』

末尾のはぐれ駆逐艦を片付けた時、敵を挟んで反対側に占位する鬼怒からの無線電話が届く。

『第二分隊、了解。分隊各艦、同士討ちに注意して』

那智は了解と応答し、羅針儀に寄りかかりながら彼我の展開状況を観察した。ここまですれば一方的な勝利はほぼ間違いない。敵艦隊の殲滅は間違いないだろう。那智は艦内の見張り台に周囲警戒を命じた。いつか艦を衣笠に追従させる。第一分隊の魚雷が敵艦の船底を粉砕したのはそれから六分後のことだった。

三時間後、夕闇迫る頃、メジロ泊地に艦隊が戻ってきた。果たして海戦は、敵艦へ魚雷が命中後、衣笠率いる第二分隊による近接砲戦により敵艦隊を全滅、メジロ島巡航警備艦隊の完全勝利に終わった。

タグボートの指示により泊地に錨を下ろした艦隊の艦娘たちは各自内火艇で棧橋におり立つと、出迎えたマツエダ提督と高雄の労いを受けた。

「お疲れさま、やったわね！」

「いい指揮だったね。こんなパーフェクト勝ちは久々じゃないか」

「うん、見事敵艦隊を完全撃破できたよ！」

「すごかったんだよ。火を吹いて敵の巡洋艦がくるんつと転覆した途端にボカーン！って、ものすごい迫力だったんだから！」

鬼怒と清霜が興奮気味に語る。

那智や衣笠も内火艇のもやい綱をかけて棧橋へ上がってきた。

「那智君、衣笠君もおかえりなさい。今日の殊勲賞は衣笠君達の第二分隊かな」

マツエダの言葉に他の艦娘達も大きくうなずく。

「はい、衣笠さん達が一気に距離を詰めたから砲撃で敵艦を一方的にやっつけられたんですよ」

と春雨が言った。

「そうだな、あんな大胆な手に打って出るとは思わなかったぞ。いい判断だった」

那智もその通りとばかりに衣笠をほめたので、当の衣笠は照れくさそうに視線を泳がせて頭をかく。

「わ、私はただ、いつも通りやっただけだよ」

「さすが、かつてサボ島沖で単艦敵に肉薄して仲間を救った艦だけあるな」

「もう那智さんまで、ちょっとおだてすぎだって！」

恥ずかしがる衣笠を前にみなが笑い声をあげる。

マツエダ提督は那智に聞いた。

「初めてうちの実戦に参加してもらったけど、どうだった？」

「勇敢だし、練度も高く、恐れ入った。これなら群島の島民や付近を航行する民間船も安心だろう」

那智の言葉に艦娘達は照れ笑いを浮かべる。

「ただ……」

那智が一言添えたので、一同笑顔も引つ込み急に神妙な面もちとなった。

「第一分隊は敵艦を撃破後、轟沈する様子に目を奪われて周囲警戒も艦隊運動も完全にお留守になっていたな。特に旗艦の鬼怒と清霜は艦隊運動も忘れて行き足がかなり遅くなっていたぞ」

「うぐっ……そ、それは……」

敵艦隊を全滅した後、第一分隊は炎上しながら沈みつつある敵を間近で眺めていたため、周囲の見張りや対潜警戒が完全におろそかになつていたのだ。その間、那智達の第二分隊が周囲で円陣を組んで警戒にあたっていた。

第一分隊の面々はしゅんとして肩を落とした。

「その昔、あの戦争で轟沈する敵艦に見とれて万歳三唱なぞにふけつていて、肝心な敵の残存艦を取り逃がすという大マヌケを演じた艦隊がある。この艦隊では、くれぐれもそんな事がないようにな」

「ぶっ免なさい……」

「こ、これから気を付けます……」

清霜と鬼怒がしよげて頭を下げる。那智は澄ました顔で説教を垂れた後、くすりと笑って、さらに続けた。

「まあ、その大マヌケのやった艦というのは、他でもないこのわたしなんだがな。だからみんなはそうならないよう気をつけてくれ」

那智がそう言って笑うと、一同もつられて笑い出す。

ひとしきり笑ってから高雄が号令した。

「さあみんな、早くお風呂に入つて夕飯にしましょう。今日は戦勝を祝つてちよつとしたご馳走よ」

一同が歓声を上げる。

「提督、那智さんがだいぶ打ち解けてくれて、良かったですね」

嬉しそうに言う高雄の言葉に、マツエダ提督もうなずいた。

「ああ、急なことだったから心配していたけど、うまくやってくれそうだ」

マツエダ提督から見ても、那智は想像していた以上にメジロ泊地の艦娘達に慣れてきているように見えた。それに那智の転属が他の艦

娘にも良い刺激となっているように見えた。

艦娘達がにぎやかに宿舎の方へ歩いていく中、マツエダ提督は棧橋に最後まで残っていた那智の労をねぎらった。

「お疲れさま。うちの子達、那智君から見えてどうだった？」

「ああ、想像していた以上に練度も士気も高く、戦闘中も安心して戦うことができた。特に衣笠は判断も的確で戦意も旺盛だ。頼もしいな」
自分が直接ほめられたわけではないが、マツエダ提督ははにかんだように照れ笑いを浮かべた。

「彼女は前世で姉妹艦を含む艦隊が窮地に陥ったとき、単艦で殿について敵を叩き、味方の脱出を助けた。この前の那智君達と一緒に。それに第一次ソロモン海戦も経験している。あまり昔のことは口にしてないタイプだけど、高雄と同じくらい頼りにしているよ」

「そうか、心強いな……」

二人は宿舎へと歩き出した。

「今日は大勝だ。もしよければ夕飯後、少し飲まないか。明日は出撃もないし」

マツエダ提督がグラスを傾ける仕草をしながら言った。那智は一瞬、虚を突かれたような顔で提督を見つめる。一瞬ためらいも感じたが、今日の酒は美味しい酒になりそうな気がした。那智はうなずいた。

「そうだな、今夜ばかりは飲ませてもらおう」

那智はそう言ってマツエダ提督へ微笑んだ。

夕食後しばらくして那智がマツエダ提督の執務室をたずねると、マツエダ提督は第二種軍装の上着を脱ぎワイシャツ姿で何やら作業をしていた。

「少し早かったか？」

「いいや、もう仕事は済んでるから。今日の日報も終わったところだよ」

マツエダ提督は机の上に広げていたバインダーを閉じ、万年筆のキャップを閉めてから立ち上がった。

那智は改めて執務室を見回した。提督の執務机の斜め前には秘書艦用の机があり机上のタイプライターにはすでに埃除けの布カバー

が被せてある。部屋はヤムヤム泊地の執務知るより広々としており、右手の壁には本や書類がぎっしり納められた本棚に覆われている。ヤムヤム島の執務室はここより手狭でやや雑然としており、職住一致的な、居間と兼用しているような気安い雰囲気だった。一方、この部屋は瀟洒で落ち着いた雰囲気でないが、あくまで仕事場としての緊張感を漂わせている。部屋の一角にはソファアールとローテーブルがしつらえてある。

「高雄は？ もう下がったのか？」

「ああ。さあソファアールにかけてて」

提督は机の引き出しからサントリーオールドの丸い瓶を取り出した。

ソファアールの正面の壁には畳一畳くらい額縁に納められた重巡高雄の油絵が飾られていた。晴天のなか白波を立てながら優雅に進む姿が、きめ細かいタッチで描かれていた。ローテーブルにダルマの瓶を置いたマツエダ提督は那智とともにその絵を見上げた。

「素敵だろう？ 食堂に飾ってある方には気づいたかい？ 向こうには衣笠のが飾ってある」

那智はうなずいた。食堂の壁に飾られた絵画は、夜間荒々しく砲戦を繰り広げる重巡衣笠の姿を荒々しいタッチで描いた勇ましいものだった。

「ああ、どちらも素晴らしいな。もともとここにあった備品なのか？」
「いいや、陽炎型の末っ子に絵が上手な子がいてね。これは特別に頼んで描いてもらったんだ」

名前こそすぐに出てこなかったものの、那智は噂で聞いた覚えがあった。なんでも、仲間の艦娘をモデルに猥褻な劇画を描く駆逐艦娘がいるらしいというものだ。

マツエダ提督是那智の困った表情を読みとり、苦笑いを浮かべる。「確かに、ちよつと困ったところがある子なのは本当みたいだけど、腕は確かだね。まあ安くはなかった。これだけのものを作ってもらうには、それなりの軍票をはたく必要があったけど、悪くない買い物だと思ってる」

「そうだな」

那智がうなずくと提督は良いことを思いついたとばかりに掌を叩く。

「もしよければ那智君も描いてもらってはどうかだろうか？ 次は鬼怒君の番って決まってるから、その次ということになるんだけど。そうだな……、軽巡鬼怒は玄関に飾るから、那智君はこっちのあいている壁に飾ろうか。妙高型と高雄型、きつと壮観だ」

「おいおい、そんな性急に決めることでもないだろう……」

一人嬉しそうに語る提督の前に、那智はあきれ半分に笑う。

「それもそうだが……。そういえば、君はチーズ好き？ 本土にフランスの軍艦が来たときにたまたま出張していた鬼怒君がお裾分けでもらって来たんだが、私以外はあまり食べなくてね」

「ああ、嫌いではない」

「よかった」

マツエダ提督は銀紙に包まれた半円形のチーズと氷の入ったグラス、それに薄く切った食パンを盆にのせてもどってきた。

「さすがにこの島ではフランスパンは手に入らないから」

「これだけあればご馳走じゃないか」

那智は自分のグラスに琥珀色のウイスキーを注ぐ。グラスの中で氷が回ってカラリンと心地よい音が鳴った。那智がマツエダ提督のグラスにも注ごうとしたが、提督は別のボトルネックの長い黒い洋酒の瓶から酒を注ぐ。

「それは？」

「私はブランデー派なんだ」

その言葉を裏付けるように、那智の鼻孔をウイスキーとは異なる芳香がくすぐった。

「さて、今日の勝利に乾杯だ」

「ああ、乾杯」

二人はグラスを軽く打ち合わせてからグラスをあおった。

「うまい……。海戦の後、特に勝利の後の一杯は最高だな」

マツエダ提督はつまみのブルーチーズを薄切りにした食パンにの

せて食べ始めた。

「他の艦娘は、酒は飲まないのか？」

那智の問いにマツエダ提督は軽くうなずいた。

「高雄ちゃんはお酒がだめな質だし、衣笠君も鬼怒君もお酒好きというわけではないから、これまでは一人でちびちびやってたんだ」

那智は無言でうなずき、その言葉を噛みしめた。姉妹艦の足柄以外とここまですらラックスして酒を酌み交わすのは久しぶりのことだった。僚艦の加古は酒好きだったが、野放図にガブガブ飲んですぐ寝てしまい、ふと起きてはまたグビグビ飲んで寝てしまうという、滅茶苦茶な飲み方を朝まで繰り返すタイプで、とてもその時間を共に楽しむ相手ではなかった。またトビウメ提督は飲酒の習慣がなく、そもそもアルコール嫌いであって、泊地で那智はいつも一人で酒を飲んでいった。トビウメ提督がこんなふうな夜の一時につき合ってくれたらさぞや楽しかっただろうにと、那智はふと夢想したが、この期に及んでそんなことを考えても仕方がないとその思いを振り捨てた。実際、那智は今この場が心地よかったのだ。

「この泊地は戦線のやや後方に位置するから、最前線のような激しい戦いはそんなに起きないけど、戦線の内側に浸透を図る深海軍の撃退や群島部周辺海域の安全維持は最前線の戦闘と同じくらい重要だ。そんな時、もつとも頼りになるのは駆逐艦や巡洋艦だ。かつてあの大戦争の際も敵と最も激しく砲火を交えたのは中・小型艦艇だった。おそらくこの世界でも、それは変わらないだろう」

那智はそう真剣に語るマツエダ提督を黙って見つめていた。おそらくそうなのだろう。確かについてこの前までそう信じていた。今もそう信じたい……。那智は不意に辛くなって口元を押さえた。

「那智君、大丈夫？」

「す、すまない、ちよつと酒が回った」

マツエダはラポール泊地の居酒屋鳳飛で出会った時を思い出した。今の那智の顔はその時と同じものだった。

「貴官の言うことはきつと正しい。ただ、わたしはこの前、自分を信じてくれた者の期待を裏切り、恥をかかせた。わたしでは戦艦を倒せな

い。訓練や戦術ではどうにもならない、もって生まれた火力の差だ。あいつだけがわたしを信じてくれたのに、あんな目にあわせて……」

那智は急に俯いてむせび泣きはじめた。

「な、那智君、それは違うだろうに……」

慌ててマツエダ提督は那智の横へ来てその両肩をつかんだ。精神が不安定な状態にある人間にとってウイスキーなどのある種の蒸留酒が悪く作用することはマツエダ提督も知っていた。マツエダ提督は自分の考えが浅かったことを自覚した。

「あの日の戦闘詳報は読んだよ。あの戦況で、夕級戦艦二隻を足止めできたからこそ、多くの艦が生還できたんじゃないか。君とトビウメ提督が引け目を感じることもなど何も無いはずだよ。あの戦いでは二人とも、任務を十二分以上に果たしたじゃないか。君たちはそのことを誇りに思うべきだ」

正直なところ、マツエダ提督はトビウメ提督の名を出して讃えるのに若干の心理的な抵抗を感じたのだが、そのことに言及しないのは不誠実に思えた。

その時、戸口で物音がしたのでマツエダ提督が顔を上げると、お盆に麦茶のポットをのせた高雄がうろたえた表情で立っていた。

「あの……その、ご、ごめんなさい。まだお休みされてないようだったので、その、お茶を……」

気まずそうに顔を背けて言う高雄をマツエダ提督が招き寄せた。

「ああよかった高雄ちゃん、那智君ちよつと麦茶を飲んで。今日は疲れたろうから、そろそろ休んだほうがいいね」

グラスを置いて両手に顔をうずめる那智の肩を抱きながらマツエダ提督は高雄から麦茶が注がれたコップを受け取り、那智に手渡した。

「高雄ちゃん、那智君を部屋までお願いしていい？ こっちの片しは私がやるから」

「急に取り乱してすまない……」

麦茶を飲み干した那智は絞り出すように言った。

「明日の朝はゆっくりで大丈夫だから」

「じゃあ那智さん、行きましよう?」

高雄に肩を借りて那智ながら、二人は執務室から出て行った。残されたマツエダ提督は残った皿やグラスを給湯室へ片づけると、テーブルに残った食べ残しのブルーチーズとパン、ブランデーの瓶を執務机に持ってきて一人でナイトキャップの続きをはじめた。

程なく高雄が執務室に戻ってきた。

「那智君、大丈夫そうだった?」

「ええ、そんなに酔っている訳ではなかったみたいですが、あの……一体どうされたんですか?」

高雄は遠慮がちにおずおずとした口調で尋ねた。マツエダ提督は手元のブランデーグラスを曇らすアルコールの湯気に視線を落とす。

「この前の海戦のこと、特にG F司令部の連中からの評価を引きずっているみたいだ……。変なこと聞くけど、高雄ちゃんは『戦艦になりたい』とか『空母に生まれれば良かった』って思ったことあるかい?」「ええっ、わたしがですか? そんな清霜ちゃんみたい……。うーん、戦艦の方達は素敵だなど思ったことはありますよ。でも、わたしは高雄型があの戦争で重巡の中核を担ったことを誇りに思っています」

提督はうんうんとうなずいた。マツエダ提督も今那智を悩ませているものが、清霜がいつも願っているような子供らしい憧れとは違うことをわかっていた。

「寝る前に悪かった。高雄ちゃんはもう休んで」

「はい……。あの、提督は?」

「わたしはもう少ししたら寝るよ」

高雄ははいとうなずくと部屋を後にしたが、マツエダ提督の思考はすぐに悲しみに歪む那智の表情のことで一杯になり、退出する高雄の表情がすぐれなかったことに気付くことはなかった。

執務机の上に広げられた戦闘詳報を仕舞いながらブランデーを一口あおう。濃厚な香りとともに酒が舌を焼く。

「なんだよ。思った以上に愛されてるじゃないか、トビウメ君……」

マツエダ提督は空になったブランデーグラスを握りしめながら一

人つぶやいた。

この夜、メジロ那智泊地の那智、高雄、マツエダの三人はそれぞれの理由で眠れる夜をすごすことになった。

翌朝、睡眠不足を自覚しつつもマツエダ提督は防暑衣に着替えて食堂へ出向いた。海戦の翌日とあって駆逐艦もまだ起き出してないようだった。

——昨夜の様子じゃ、那智君もまだだろうな

そう合点して、給仕カウンターのおばさんに朝食を注文しようとする、きちんと制服を着込んだ那智が食堂へ現れた。

「あ、那智君、おはよう！ まだ七時だよ。ゆつくりしていてよかったのに」

那智はバツが悪そうな顔でマツエダ提督に頭を下げた。

「さ、昨夜は見苦しい真似をして、す、すまなかった！ それに、せつかくの時間も台無しにしてしまって……。それに高雄にも謝らなければならぬ」

マツエダ提督は那智の表情を見据え、そこにいつもの澆刺さが戻っていることを確認した。

「いや、そんな。それより、まさか那智君が泣き上戸だとは思ってもみなかった。大発見だ。皆に教えてあげないと」

意地悪そうに言う、急に那智の顔が赤くなる。

「わ、わたしは、決して、そ、そんなことは……」

うろたえる那智の顔を見てマツエダ提督は少し安心した。

「ははは、冗談。もちろんわかっている。また週末の夜にでもつき合ってくれとありがたい」

那智もぎこちないながらも、つられて笑顔になった

「ああ、そうだな。是非に」

「さて一緒に朝飯といこう」

そんな二人の打ち解けた様子を高雄は食堂に入り口から見つめていた。高雄は、那智が艦隊に来て以来、理由のわからない不安にさいなまれるようになっていた。

中小型艦艇を編成に腐心しているマツエダ提督が他の艦隊から巡

洋艦娘や駆逐艦娘をスカウトしてくることはこれまでも何度かあった。衣笠もその一人だし、新しいメンバーを提督と高雄はいつも、できる限りのことをして歓迎してきた。那智の編入も同じことのはずなのだが、高雄はなぜか不安とともに心に痛みが走るのを感じるようになってきた。それは那智に何らかの原因があるわけではないはずなのだが、不安は徐々に大きくなって来る一方だ。それに那智を見るマツエダの眼差しも高雄を理由もなく苦しくさせた、その証拠に、今なぜか二人が膳を並べている食堂に入ることができなかったのだ。

「あ、高雄さん、聞いて。とうとう始まったって！」

Tシャツにハーフパンツという部屋着姿で食堂前の廊下にやってきた衣笠が長距離通信用の電文用紙を手に高雄に声をかけた。高雄はそれを受け取り目を走らせると、すぐに普段の有能な秘書艦の顔にもどり、食堂の提督の元へ足早に駆け寄る。

「提督、おはようございます。緊急電文です」

那智とテールで朝食をとっていたマツエダ提督が電文を読むと那智へ顔を向けた。

「那智君、連合艦隊、未明にタロタロから出発したそうだ」

那智も真剣な表情でうなずいた。

それはブーメラン島奪還作戦、後に第二次ブ島沖海戦とよばれる一連の作戦行動の開始を告げる電文だった。

第二次ブーメラン島沖海戦 1／ブ島上空強行偵察

ブーメラン島の西二十浬。その日は晴れわたっていたが、真つ青な空にはいくつも綿菓子のような白い雲が幾重にも浮かんでいた。それらの雲は雨雲ではなかったが、斑点状に日光を遮って青黒い海面の至る所に明暗のコントラストを作っていた。快晴であれば東の水平線にはうつすらとブーメラン島の島影が見える位置なのだが、今日ともやがかりはつきりとは視認できなかった。平穏な海の筈だった。異形のごつごつしたシルエットを持つ暗色系に染められた三隻の深海棲艦の存在を除いては……。

中央の赤い燐光を発するト級軽巡洋艦をロ級駆逐艦二隻が一・五キロ間隔で挟むように単横陣を組み、北西へ舳先を向け二十二ノットで航行していた。ブーメラン島沖を哨戒中のパトロール艦隊で、潜水艦の接近を警戒し各艦とも三十秒間隔で対潜捜索用の探信音を発していた。

だが、いくら探信音を発しようと、大洋の青黒い黒潮の下を航跡も残さず殺到しつつある六本の九五式酸素魚雷を察知することはできなかった。

死は何の前触れもなく突然訪れた。まず陣形中央のト級軽巡の左舷の艦尾と艦橋直下の船底に四十九ノットの早さで魚雷がめりこみ重量約四百キロの炸薬が周囲五メートル以内のあらゆる物を粉微塵に粉碎、さらに広い範囲に猛烈な衝撃波による破壊をもたらした。ト級の姿が白い水柱に隠れ一瞬見えなくなったその刹那、単横陣の右端にいた駆逐艦の左舷中央部に立て続けに二発が命中し、猛烈な水しぶきとともにくの字に裂けた。唯一無事だった左側のロ級駆逐艦の艦底にも魚雷が飛び込み、砲塔直下の弾薬庫もろとも弾け飛んだ。

三隻とも一体自分に何が起きたのかすら把握する前に急速に沈み始めた。そして、魚雷の爆発をまっていたかのように、群青色の海面下に黒い影が浮かび、パイプ状の棒が海面上に突き出したかと思うと、間もなく白波を立てながら黒い船体が突然姿をあらわした。全長はイ級駆逐艦をしのぐ百二十二メートル、全幅十二メートル、基準排

水量三千五百三十トンの真っ黒に塗装された巨大な潜水艦、伊四〇一が急速浮上したのだ。船体や木製の上甲板から海水が流れ落ちるのを待つことなく、艦橋の昇降ハッチが勢いよく跳ね上げられるとともに、防暑衣に略帽姿の男とスクール水着姿の艦娘が飛び出してきた。「やったね！ 時間きっかり。たぶん緊急電を打つ暇は無かつたんじゃない」

艦娘のシオイは炎と煙に包まれ、みるみる沈んでいく駆逐艦を眺めながら言った。口級駆逐艦は中央部が破断し艦首と艦尾がそれぞれジャックナイフのようにVの字となつて沈んでいく。

無精ひげの浮かぶ顔にニヤリと笑みを浮かべてカメラヤマ提督は愛用の懐中時計で時間を計る。

「計算通りだな。シオイ、いつまでも眺めてないで逆探上げるぞ」

「はい」

二人は艦橋の上でレーダー電波受信機、通称逆探のアンテナを引っ張り出して艦橋の竿の上に掲げる。それを三百六十度回してシオイはうなずいた。

「南南西から微弱な電波が来てるけど、かなり遠いし、それ以外は大丈夫そう」

「周囲警戒、他に敵艦はいないな」

二人とも双眼鏡で周囲の水平線に目を凝らす。ここは深海棲艦がブーメラン島の西方に展開した防衛線の内側に位置し、いつどこから敵艦があらわれてもおかしくない場所だった。

連合艦隊より一足早くタロタロ泊地を出撃した伊四〇一は、騒音を立てないよう、低速でゆつくりとブーメラン島近海まで進出、敵の戦線の後方へ潜り込み、三隻で哨戒中だった敵のパトロール艦隊を奇襲したのだ。

カメラヤマ提督はこの世界で潜水艦娘の指揮を預かるようになってから独学で潜水艦について学び、潜水艦による敵戦線後方への浸透と情報収集、奇襲、一撃離脱などによる敵後方線の攪乱などについてのまとめた戦術書『洋上ゲリラ線』を執筆、一部の提督や艦娘から多くの支持をえていた。

今回の浸透作戦もまさにそれにのつとつたもので、敵の拠点近くまで可能な限り潜航し、不意を突いて強烈な一撃を見舞うというセオリーにのつとつたものだった。

また敵に、自分達に何が起きたのか通報する暇を与えぬため、酸素魚雷が三隻にほぼ同時に命中するように周到に計算し、タイミングをはかって魚雷を発射したのだ。ただ、この手の芸当は失敗がつきものだ。一撃目で討ちもらした場合に備え、八本ある魚雷発射管のうち残り二本には海水を注入し、いつでも撃てる状態でスタンバイしていた。

「ねえ提督、残り二本、発射管から戻す？」

「いや、そのままだ。すぐに撃てるようスタンバつていてくれ。いつ敵があらわれるかもしれない」

シオイははいと答えて、艦橋から梯子を伝って前甲板へ降り、艦橋構造物の前方にある大きな格納ハッチのハンドルに手を添える。艦内から見えない力によつてロックが解除され、大きな円筒形状のトンネルが口を開けた。

伊四〇〇型潜水艦が潜水空母とよばれる所以となっている、有名な攻撃機用格納庫が口を開けた。中には主翼を後方に折り畳み、プロペラとフロートを取り外した状態の特別水上攻撃機「晴嵐」が三機、ぎゅうぎゅうに格納されている。

二人は手慣れた様子で攻撃機の組立てをはじめた。重い部品の取り付けは艦娘搭載艦特有の妖精による見えない力で進め、人力で可能な作業は提督とシオイが直接手伝った。台車により滑走カタパルトまで機体を引き出し、折り畳んでいた翼を展張した。二人はすぐに二機目の組立作業に移る。熱帯の海の上でわき目もふらずに作業する二人の顔から滝のように汗が流れ落ちはじめ、二人ともそろいのタートルを頭に巻いて作業を続ける。一機につきおよそ七分、晴嵐の一番機、二番機が発艦準備を終えた。

カメラマ提督は息も絶え絶えになってシオイに命じる。

「よし風上に進路をとれ、打ち出すぞ」

「了解、任せて」

「シオイ……。出発前から何度も話したが、今回は……」

カメヤマ提督がそう言い淀むと、シオイは晴嵐の方を向いて毅然と
うなずいた。

「わかつてる。大丈夫。これはみんなを守るため、大切な任務だから
ね」

三機の晴嵐は、敵後方を攪乱するための胴体下に真つ黒な二百五十キ
ロ爆弾を二発を懸架、後部座席には敵地を上空から写真撮影するため
の写真機がくりつけられていた。また胴体内には無線電信機も備
えてある。無論、パイロットも爆撃手もない無人飛行のため人的損
失の心配はないが、今回の敵中強行偵察飛行では、もとより艦載機の
回収は想定しない作戦となった。潜水艦搭載機は展開時より、格納す
るときのほうが遙かに手間も時間もかかるため、敵の哨戒線内で活動
する今回はのんびりと回収作業をする余裕はない。

普段から、「晴嵐さんは友達」と公言している艦娘のシオイにはじめ
から艦載機の損失を前提とした作戦を命じたことに、カメヤマ提督は
とてもすまなく思っていたが、最新の敵状を探るにはこれしか策が無
かったのだ。艦載機は艦娘にとって、艦とともに自分の一部ともいえ
るものだ。それを失うことは大きな精神的負担となる。

「大丈夫だよ、提督。晴嵐さんはあの戦争で、搭乗員は収容しても機体
の収容はあきらめることが前提でつくられてたし、最後の任務では特
攻機として使われることになってたんだ」

カメヤマ提督もそれは十分に承知していたので、無言でうなずい
た。

「実際、作戦決行前に戦争が終わって、特攻しなくて済んだけどね
……。だから、他の艦の子よりもショック受けたりしないから大丈
夫。わたしは一応潜水空母なんだよ」

「すまない。苦勞をかける……」
「平気だよ。これはわたししかできない任務でしょ？ 今日わたし
も晴嵐さんも本気出していくよ」

シオイが笑ってそう言うと、ぐらりと潜水艦が南西へ向きを変え
た。船体を安定させるため、シオイは五ノットで前進をかける。舳先

が波を越える度に大きく上下にふれた。

シオイは晴嵐一番機のエンジンカウルに愛おしそうにそつと手を添えた。

——晴嵐さん、今日はよろしくね

「発動機始動！」

提督の号令一下、シオイが念じると晴嵐のアツタV型十二気筒発動機がうなり声をあげて燃料を燃やし始めた。

「発動始動、よし！」

プロペラが回り始めると、後方へのものすごい風が押し出され。甲板に立っていたカメラヤマ提督の頭のタオルが吹き飛ばされた。あらかじめ温めてあった潤滑油、エンジンオイルを充填したので暖気運転の時間をとらなくともすぐに離陸できる。

「発艦準備よろし」

「よし、いつでもいいぞー！」

シオイは、カメラヤマ提督の指示にうなずくと舳先のうねりに意識を集中した。舳先が下を向いたときに発艦してしまうと海面に突っ込んでしまうからだ。ここが、シオイの腕の見せ所だ。荒波のなか、しばらくタイミングをはかる。一つ大きなうねりを越え舳先が大きく下がり、再び上がりだした。

「発進！」

シオイのかけ声とともに、圧搾空気が甲高い音を上げてカタパルト上の台車ごと晴嵐一番機を舳先へ押し出した。急加速した機体は舳先で台車から前方へ放り出されるとともに、フワリと空中に浮かび、しばらく直進してから大空へと舞い上がった。一番機は安定した速度を得ると、伊四〇一の周囲を大きく一回りし、高度を上げてブーメラン島の方へ飛んでいった。

シオイとカメラヤマ提督は大きく手を振って一番機を見送ると、すぐに二番機のエンジンを始動させ、同じ手順で発艦準備にかかる。そして二番機は、一番機に遅れること六分、母艦を飛び立ち、ブーメラン島北方へと飛び去った。

二人は余韻に浸る間もなく残った三番機の準備にとりかかる。格

納筒の一番奥にしまい込まれている三番機は、一、二番機が発艦後でないとは組立て準備にとりかかれなかったので、二人は大急ぎで作業し、なんとか開始六分で格納筒から引っ張り出すことができた。さすがのシオイも感慨深い発艦見送りに心を配る余裕もなく、いつあらわれるか知れない深海軍の警備艦隊の心配をしながら、ようやく三機目を大空へ無事に打ち出した。

「がんばってー！ よろしくねー」

晴嵐三番機は一度大きくバンク（翼を左右に振ること）して、島の北方へ飛び去った。

一仕事終えた二人は木製の甲板にへたりこんだ。カメヤマ提督は艦内に下りると、ラムネ瓶を二つ手にして甲板に戻ってきた。

「お疲れさん、三機いっぺんに発艦っていうのは大変だったな……」

「そうだね。今日は大変だったけど、でも提督、ありがとう。あたしの活躍できる作戦を考えてくれて」

「そいつは無事に帰ってからのな」

二人はラムネ瓶を打ち合わせて乾杯し、一息ついた。

「逆探の反応は大丈夫か？」

「うん。さつきから弱い電波がチラチラ入るだけ」

ラムネを飲み干すとシオイはすくつと立ち上がり、ノースリーブのセーラー服を脱ぎ捨てた。

「さて、暑いからどぼーんしちやっついていい？ 晴嵐さん達が目的地につくまではまだちょっと時間あるし」

「おい、ここは敵地だぞ。大丈夫か？」

「見張りにも気を配ってるから大丈夫、大丈夫」

そう言っつてシオイはセーラー服とスクール水着を脱ぎはじめる。

「ああー、だから泳ぐときは服を着て泳げたっていったらだろー！」

カメヤマ提督はあわてて違う方向へ顔を背けて叫び、後甲板の方へ逃げ出す。

「へへっ、誰もいないから大丈夫だよ」

「俺がいんだろー！」

シオイは無頓着にそう言うと甲板から豪快に海へ飛び込んだ。シ

オイは小さい水しぶきとともに海面下に姿を消すと、まるでイルカのように器用に泳ぎ回る。

その方が開放感があるのかなんとか言って、シオイにはトップレスで泳ぐ妙な癖があり、一緒に船出する度にカメラヤマ提督を困らせていた。

「あーあ、ほんとロリコンじゃなくて助かったぜ……」

もし妙な奴が潜水艦隊の司令にでもなったら、取り返しのつかない間違いが起きるかも知れないと思うと、カメラヤマ提督は自身の責任の重さを痛感するのだった。

シオイが遊んでいる間、カメラヤマ提督は双眼鏡で周囲の水平線へ目を凝らす。単発の水上機が姿を見せたと知ったら、深海軍は慌てて偵察機を周囲の海域に放つはずだ。そうでなくとも、敵は潜水艦による接触でこちらの反攻作戦のタイミングを察知しているはずだ。偵察機から情報を得たらすぐに無線でタロタロ泊地や連合艦隊へ無電を打って脱出しなければならぬ。

「提督も泳げば気持ちいいのにつて、みんな言ってるよー」

海面に顔を出したシオイがそう呼びかけた。

「だから、俺は泳げないのー！」

「いつもそう言うけどさあ、昔の水兵さん達にも、最初けっこう泳げなかった人多かったんだけど、練習してみんな何とかなったから、提督も試してみればいいのに」

「いずれゆっくりできたときにな……」

そうは言ってみたものの、この剣呑な世界で果たしてそんな余裕のある日々が来るのかはカメラヤマ提督にもわからない。

四〇五分してシオイが潜水艦の甲板に上がってきた。いそいそと水着を着たシオイは、髪留めをはずして海水に濡れた髪をタオルでふきながら、艦橋の上に駆け上がった。

「逆探に感あり。島南南東から。あと、晴嵐さん、ブ島の上空に着いたよ」

飛び立った晴嵐を管制する不思議な念力のような何かを感じ取ったシオイが真剣な眼差しで提督を見る。

「よし頼んだぞ」

二人は遠くうつすらと見えるブ島の島影に目を凝らした。

晴嵐三番機はブーメラン島の北端の港湾、ポートフリスビー上空から陸軍部隊や輸送船、そして湾外を十重二十重に囲む深海軍の封鎖艦隊の姿を上空四千メートルの高さから捉えていた。

「三番機から無電、港内の味方船団は無事。敵封鎖艦隊、湾口の北七湊に展開、重巡三、軽巡六、駆逐十以上、西北西に遊弋中。さらに東北東に複数の艦影認む。我、敵の対空砲火を受けつつあり。通信終了」

艦載機からのモールス信号を受信したシオイがそう翻訳した。カメヤマ提督急いで報告内容をメモし、タロタロ島への報告文を書き始める。

「今のところ、戦艦はいないか……」

「あ、ヤシガニ海岸の二番機から入電！ 海岸沖十五湊に戦艦三、重巡五、軽巡その他二十余りの敵艦隊。我、敵機の追跡を受く。ああ、だめ……やられちゃった！」

「クソっ！」

島の南西に位置するヤシガニ海岸は陸軍部隊の上陸予定地点だったが、どうやら深海軍はそれを見越して北端の封鎖艦隊よりも強力な艦隊を展開していた。

——やっぱり敵の潜水艦に全部気取られてたつてことだな

こうなった以上、ブ島奪還どころの話ではない。実際、北の封鎖艦隊に全軍でぶつかってみて、幸運なら敵陣に穴を空けて船団を助けられるかどうかという所までオッズは悪くなっているのだ。

「シオイ、三番機は？」

「ああ、三番機の通信も途絶えちゃった。敵巡洋艦に急降下爆撃を仕掛けたところでやられちゃったみたい」

「こっちは超弩級戦艦が三隻、高速戦艦が一隻。兵力を分散して戦える状況じゃねーな」

その頃、一番遠距離の偵察を任された晴嵐一番機は島の南南東の端に位置するクラゲ海岸の上空に達してした。眼下には白い砂浜とエメラルドブルーの珊瑚礁が広がっているはずなのだが、海面はまるで

赤潮が発生したかのように赤く濁り、白い砂浜には深海軍の上陸部隊がまるで獲物に群がる黒アリの大群のごとくうごめいていた。海上にはワ級輸送艦十隻以上が黒い船体を並べて停泊しており、その護衛の駆逐艦、巡洋艦も総勢三十隻近い陣容で赤く変色した海をおおっていた。沖の輸送艦と海岸の間には、灰色のシヤコのような姿の上陸用舟艇が無数に往来し、上陸部隊をピストン輸送している。

敵はすぐに三番機を発見し激しい対空砲火を浴びせ、晴嵐の周囲は高角砲弾の炸裂で瞬時に真っ黒な綿菓子のような煙におおわれる。

無電でおおよその状況を受け取った伊四〇一では、カメヤマ提督がすぐに晴嵐へ帰還を命じた。

「こつちから電波を発したら猶予はないぞ」

「オツケイ、大丈夫。晴嵐さんに爆弾を捨てさせてすぐに戻すから」

カメヤマ提督は急いで甲板に下り、水密扉から引つ張り出したオレンジ色のゴムボートを甲板に広げ、ふいごで空気を入れ始めた。一方、シオイは晴嵐へ帰還するよう無電を打ち、それは直ちにクラゲ海岸上空の晴嵐へと伝わった。

飛行中の晴嵐は、周囲で無数に炸裂する砲弾の破片により機体の至る所に穴があいていたが、突然、敵の虚を突くように急降下をきめて、砂浜を埋め尽くす深海軍の上陸部隊めがけダイブをかけた。一番機は機首を起こせるギリギリのタイミングまで降下し、二百五十キロ爆弾二発を敵の集積物資所とハゼのような形の陸上兵器の列にの真ん中へ放り込んだ。爆弾はほぼ垂直に落下し、砂浜の弾薬集積所とワタリガニのような深海戦車を木っ端微塵にした。晴嵐は機体の追ってくる曳光弾から逃げるため機敏なロールをかけ逃げはじめ、その後部座席の写真機はひたすらシャッターを切りつづけた。

「今戻らせた。逆探に反応あった。包囲〇三〇、〇七〇、一六七、二四八。四方向から。結構強いよ」

「すぐにドボンでできるようにしとけ！ 魚雷も忘れるな」

カメヤマ提督はそう叫び、パンパンに膨らんだゴムボートを海面に投げ落とす。晴嵐が島に飛来し、さらに伊四〇一が電波を発したことで敵が急遽警戒レベルを高めたのだ。

「晴嵐さん、かなり撃たれちゃってますね。翼に穴が空いたからフロートを切り離すよ。着水はかなり荒くなるし、あつという間に沈み始めるから気をつけてね」

カメヤマ提督はうなずいてボートに木製のオールとロープ、それに手斧を放り込んだ。

「敵の艦上偵察機につけられてないな？」

「今のところ大丈夫」

カメヤマ提督は島の南東部へと目を向けた。まだ何も見えない。本来なら無人の航空機を放棄してすぐに離脱するところだが、唯一生き残った晴嵐が撮影した写真機のフィルムだけはどうしても持ち帰りたかったのだ。

十分後、南東の上空に黒い点が浮かび、すぐに煙を曳いた飛行機とわかった。

「提督、来たよ！ 戻ってきた！」

「よしきた！」

カメヤマ提督はカポックを縫い込んだ救命胴衣を着込むとゴムボートに飛び乗って海に漕ぎ出す。たちまちうねりに翻弄され、ボートがクルクル回り出した。

——くそつ、ボートの漕ぎ方くらいもつと練習しておくべきだったな

カメヤマ提督は心中で悪態をつきながら必死にオールを手繰る。

そうしているうちに、晴嵐一番機はヨロヨロと左右に不安定に傾きながらやつと空に浮かんでいるという様子で、エンジンからは真っ白な煙の筋を曳き、主翼も水平尾翼も穴だらけで、主翼の右翼端は対空砲の爆風を受けて日の丸の識別マークの半分くらいまで欠けていた。

一番機はふらつきながら何度が機首を上げ下げし、エンジンをきって海面に腹から落ちると左翼がもげて、海面に円を描くようにして止まった。あの様子としては見事な着水といってよかった。伊四〇一の左舷から百メートル程のところに晴嵐は機首を海面に突っ込んで漂っていた。エンジンの重みでどんどん沈んでいく。カメヤマ提督は必死しオールを漕いでうねる海面を進み、なんとかコクピットが水

没する前に晴嵐にたどり着くことができた。ロープをひかけて、辛うじて機体とつながっている折れた主翼の縁に乗つたかると、独りでに後部風防ガラスが開いた。何か意志のような見えない力を感じた。斧で風防をたたき壊さずに済んだので、すぐに後部銃座に上半身を突っ込み、留め金のねじをゆるめて銃座にくくりつけられた大判の写真機を取り外す。写真機を海に落つことさないうようずた袋に写真機を放り込め。カメラヤマ提督はサングラスをとり一度、アクリルの風防ガラスをなでる。

「世話になったな。ご苦労さん……」

無人のコクピットにそう労いの言葉をかけると、再びゴムボートに飛び乗って母艦へ向けて再びがむしやらにオールを漕ぎ始めた。

「提督――！ 急いで――！ 逆探の感度強くなつた――！」

「今やつてるよ――！」

カメラヤマ提督がそう怒鳴り返して、肩越しに背後を見ると、役目を終えた晴嵐が静かに機首から沈み、最後は水平尾翼を見せながら海面下に姿を消した。

シオイは何か殺気を感じて西方の海上へ目を移すと、測距儀が何かを捉えた。遙か洋上にうつつすらと黒い艦影が浮かんできた。

「敵艦発見――！ 急いで――！」

シオイがもどかしそうに叫ぶ。本当なら伊四〇一の方からボートに近づいてもいいのだが、潜水艦はあまりに巨大なため、下手に波を立てると小さなゴムボートが転覆する恐れがあり、うかつに動けないのだ。カメラヤマ提督は肩で荒く息をしながらやつこのことで伊四〇一の船体にとりつくと、すかさずシオイがロープを投げ渡す。カメラヤマ提督はそれを伝つてもがくように甲板に這い上がると写真機をシオイに押しつけて倒れこんだ。

「ああ――、もう手が動かない……」

「機関始動、全速前進――！」

シオイの号令とともに全長百二十メートルの巨大な船体がゆっくりと進みはじめ、艦尾の排気口から黒い排ガスが吹き上がった。

耳をつんざく風切り音がしたのはその時だった。右舷二百メートル

ルほどの海面に白い水しぶきが上がるとともに爆発音が二人を襲う。何秒もしてから遠くから砲声が届いた。敵の砲撃だった。

「来やがった。シオイ、さつき渡した文面でタロタロ泊地と連合艦隊司令部に緊急打電だ」

シオイはすぐに長距離通信用の長波無線でブーメラン島の敵状をモールス信号で送信しはじめた。

その間、カメラマ提督は南部十四年式拳銃の遊底を引いて弾丸を装填するとゴムボートに四く五発打ち込んで処分し、甲板にあった荷物を慌てて乗降ハッチの中に放り込む。すぐに二発目の砲撃が艦をゆすぶった。さつきよりずっと近い。三発目はさらに補正されて近くに落ちるはずだった。床に伏せて衝撃に耐えてから急いで艦橋に駆け上がった。

「敵イ級駆逐艦、方位二三四！ 距離一万六千！ 急速に接近中！

……通信終わったよ！」

艦橋の一・五メートル測距儀を覗いていたシオイが叫ぶ。

「よし通信桁格納、全ハッチ閉鎖確認。クラツシユダイブだ！」

シオイが測距儀を潜航状態に戻すとカメラマ提督はシオイに続いて司令塔内のハッチに飛び込み、乱暴にハッチを閉じる。ハンドル状のロックを締めるとカメラマ提督はすぐに潜望鏡を伸ばし周囲を観察する。

「うわ、来てる、来てる。後方にもう一隻駆逐艦が来たな。よし潜るぞ！ ダイブ！ ダイブ！」

艦内に耳をつんざくブザーが二回鳴るとともに潜水艦伊四〇一はバラストタンクに海水の注入をはじめ、砲撃を受けつつも一分余りでその巨体を黒潮の下に完全に隠した。

薄暗い発令所で息を潜めながら、二人は敵駆逐艦が発する対潜捜索用の探信音に耳をすませていた。

偵察は終わったが、たった今から生きて帰るための長い戦いがはじまった。

「ねえ提督。あの無線、ちゃんとタロタロ泊地と連合艦隊に届いたかな？」

シオイが心配そうにたずねるので、カメヤマ提督はシオイの髪の毛をクチャクチャとなでながらうなずいた。

「大丈夫だよ。タロタロ島には間宮さんも戦艦の日向さんもいるから、ナス提督にはちゃんと伝わってるよ。それに連合艦隊にも、あの真面目な大淀ちゃんがついてるから、きつと電波を受信してるはずだ」

「そっか……。これがみんなの役に立ったなら、あたしも晴嵐さんも満足だよ」

「もちろんだ。お前達のおかげで、大勢の命が救われることになるんだ」

半分はカメヤマ提督の願望だった。今伝えた情報を連合艦隊司令部が有効に活用し作戦を修正できるのか、カメヤマ提督にはそれがほぼ無理であることが分かっていた。あの手の人間達は信じたい情報にしか注意を払わない。カメヤマ提督には生前からわかっていたことだ。だが人間側の馬鹿げた実状を今、死地にあるシオイに伝えることははばかられた。

ただ一つ確信を持てるのは、連合艦隊司令部が当初の作戦通りに事を進めようとすれば、今ブ島にいる孤立部隊どころか、逆上陸をはかる陸軍一個師団全て、そして連合艦隊の過半数がブ島沖もしくはブ島のどこかで死ぬことになるということだった。

同じ頃、タロタロ泊地では連合艦隊第四分隊の出港を四時間後に控え、港内は慌ただしい雰囲気に含まれていた。そんな港内の騒ぎもよそに、給糧艦間宮に近づく内火艇には戦艦娘の日向とその上官のナス提督の姿があった。係船桁に日向が内火艇のもやいをつなぐ前に、ナス提督は縄ばしごを器用に上っていそいそと甲板へとあがっていった。すると艦娘の間宮がすぐに駆け寄って出迎える。

「ナス提督、日向さん！ 受信されましたか？」

「はい、確かに……」

三人は給糧艦間宮の食堂室のテーブルについた。

「やはり敵は陸軍の上陸を予期していましたね。詳細は不明ながら、

敵は相当数の陸上部隊を増派し、籠城中の守備隊だけでなく、逆上陸部隊も撃滅するつもりです。陸軍が下手に上陸したら大変なことになる」

「ええ、せめて上陸作戦だけでも取り止めになつてくれれば……」

——望み薄だな……

口こそ出さないが、ナス提督も日向もそうは成らないことを確信していた。そして、ナス提督は心配すでに陸軍の命運から別のことに移っていた。

「今回の作戦で、聯合艦隊がどれだけの艦を失うかによつて、外南洋の島々の命運も変わってきます。この一戦によつて、シユーズ・ベラ島、タロタロ島、そしてさらに内側の外南洋諸島の島々を放棄しなければいけなくなるかもしれません。遅すぎますが、島民達をどうするか考えなければいけません」

カメヤマ提督の言葉に、間宮の顔から血の気が引いた。

「そ、そんな……。わ、わたくしたちにはもう何もできないのですか？」

間宮は泣きそうな顔でうなだれる。カメヤマ提督は手元にある、間宮が出してくれた麦茶の注がれたガラスコップを見つめながら言った。すでに結露でコップは汗をかき、純白のテーブルクロスに染みを作っている。

「私たちは最悪を想定し、島民達のことを第一に考えて動きます。だから日向……」

カメヤマ提督はそういつて隣の秘書艦を見る。

「ああ、心得ているさ……」

日向は無表情でうなずいた。

一時間後、タロタロ泊地に停泊中だった戦艦日向の四番機関室で、燃料系統の不具合に起因する火災が発生し、湾内は騒然となった。ポートフリスビーに第一分隊が威力偵察行動に移る五時間前の出来事だった。

第二次ブーメラン島沖海戦 2 / 天気晴朗なれど

後に「第二次ブーメラン島沖海戦」と名付けられる、深海軍との一連の戦闘の結末は、大勢の者の予想を裏切るものとなった。それは当然連合艦隊司令部が予想した完全無欠の大勝利ではなく、一方一部の提督が憂慮していた、陸海軍双方が致命的な損害を被る大敗北でもなく、そしておそらく深海棲艦が想定していた結果でもなかっただろう。

時間はブ島北方沖で第一分隊が火蓋を切る一時間前にさかのぼる。

トビウメ提督が指揮する第三分隊はタロタロ島を出港の二時間後、速力二十一ノットでブーメラン島沖西方を目指していた。この日の周辺海域は天気晴朗なれども波高し。日本海海戦の故事に照らせば極めて幸先の良い天候ともいえたのだが……。

戦艦山城、戦艦扶桑を中核とした単縦陣の前方に警戒隊として軽巡多摩を中心とした水雷戦隊が単横陣で展開、主隊の左右には戦艦二隻の直衛艦として左舷に駆逐艦不知火、右舷には駆逐艦荒潮が警戒にっていた。

駆逐艦不知火の羅針艦橋にいた艦娘の不知火は、艦橋の右舷の窓を覆う戦艦山城の影を見上げた。

——司令は大丈夫でしょうか？

不知火は山城の羅針艦橋へ目を懲らす、遠くて中の様子はよくわからない。

——那智さん、不知火是那智さんに代わって命をかけて司令を守ります

不知火は今一度決意を堅くし、白い手袋に包まれた両手を握りしめた。

一方、戦艦山城の羅針艦橋で海図台に向かっていたトビウメ提督の口元は緊張のあまり大きくゆがんでいた。さつきから五分おきに手元の腕時計へ目をやる。連合艦隊司令部から何らかの指示変更がないかと気を揉んでいるのだが、艦娘の山城が伝えたのは、シューズ・ベラ島から出撃した空母翔鶴がブ島沖合に展開する複数の敵艦隊へ

航空攻撃を開始したという報告のみだった。

敵主力艦隊との正面对決を期待されている第三分隊の陣容は超弩級戦艦二隻、重巡四隻、軽巡五隻、駆逐艦十三隻の計二十四隻からなる打撃艦隊だったが、最新の敵状報告によれば、ブ島西方の海域に展開する深海軍の艦隊は総勢三十隻以上の大艦隊で、戦艦、重巡などの高火力艦の総数でも完全に劣っていた。その知らせを受け取ったのは出港前の喧噪の真っ只中でのことだ。加古が自分の艦で長距離通信の暗号電文を受け取ったとトビウメ提督に知らせにきたのだ。

「あたしは詳しいことわかんないけど、敵の数こつちより多いよね？」

大丈夫なの？」

「うーん……」

このままでは寡兵で敵の懐に飛び込むことになるが、トビウメ提督に加古の疑問にはつきり答えることができなかった。

「加古さん、戦は兵力差で決まるものではありません。戦闘の帰趨は練度と勝利への執念が決します。この前のように、戦闘時はきちんと目を開けておいてください。頼みましたよ？」

そばに控えていた不知火が提督に助け船を出すように加古に説教した。

「もう、分かっているよ……」

加古は口を尖らせてうなずいた。

加古が去ってから不知火は表情を曇らせた。

「と、精神論を振りかざしたところで、勝利への道が開けるわけではありません。ここは四隊に分かれた兵力を結集するべきなのかもしれません……」

「わかっているけど……」

トビウメ提督にも打開策は思いつかない。

そんなところへ追い打ちをかけるように起きたのが戦艦日向の火災事故だ。湾の中央に錨泊していた戦艦の煙突と昇降口、舷側窓から黒煙がちらちら漏れ出し、タグボートや作業員を乗せた内火艇が一斉に戦艦日向へ殺到、消火活動をはじめたため、出撃準備に忙殺されていた軍港内は一時騒然となった。

トビウメ提督と不知火も岸壁から消火活動の一部始終を見守っていたが、火災は三十分とたたずに鎮火したようで、日向の甲板では大勢の作業員が右往左往して事故の收拾にあたっていた。

「戦艦日向は第四分隊の主力戦力です。出撃に影響がなければいいのですが……」

不知火の悪い予感は現実のものとなった。事故は四番機関室で重油の加熱系統が破断し火災に至ったもので、第四分隊の出撃予定時刻までに機関部の修理を終えることは困難との知らせがもたらされた。噂に聞いたところでは、フルカワ連合艦隊司令長官代理は出撃前の不始末に激怒したそうだが、戦艦日向の指揮官であるナス提督は動じることなく淡々と出撃見合わせを申し出たという。

「ナス提督、そんなことが通ると思うか！ 戦艦日向には片肺でも出撃してもらおうぞ！」

そう凄むフルカワに対し、ナス提督は涼しい顔で応じた。

「もともと日向は機関部を含めた大規模なオーバーホールを予定していたのですが、今回の反攻作戦のための戦艦供出令にに応じて進出したため、このような事態は想定できなかったわけではありません。満足なスピードも出せない状態で無理に出港すれば外洋で他にどんな不具合が発生するか知れたものではありません」

「作戦を放り出すおつもりですか？」

そう食ってかかる参謀にナス提督は年齢特有の落ち着いた笑みを浮かべて応じた。

「作戦は大切です。我々は機関部の応急修理と臨時点検を済ませ次第、分隊の後を追います。第四分隊は定刻通り出撃を。自前の高速修復材も持ってきているので、大幅に遅れることは無いでしょう。それとも、修理完了まで待っていていただけるので？ 皆さんは陸軍を乗せた鈍足の輸送船を伴っての航海です。日向の足でも会敵前に十分に追いつけます」

フルカワら司令部連中は不満ながらも納得するしかなかったという。

トビウメ提督は海図を睨みながら、そんな出撃間際のゴタゴタを思

い出した。トビウメ提督が出撃前に栈橋で、それらの顛末を山城と扶桑に語ると、二人は驚いたような困惑したような表情で顔を見合わせた。

「あの日向が、まさかそんなことに……。大丈夫かしら……」

「調子乗り屋の伊勢ならともかく、日向が……。で、でも姉様、良かったじゃないですか。扶桑型戦艦の頼もしさと強さを見せつける良い機会だわ!」

信じられないという表情でうつむく扶桑を山城がなんとか鼓舞した。

「そうだけど……」

扶桑の不安げな表情が晴れることはなかった。

第三分隊は潜水艦の攻撃を避けるため時々之字運動をして各艦が一斉回頭し進路を変える。第三分隊にはトビウメ提督の他にも、他に三人の提督がそれぞれ自分の艦から指揮をとっている。人間の提督と同道するだけで変なプレッシャーを感じていたが、分隊の練度は高いようで、之字運動完了後も艦隊陣形は全く乱れずブーメラン島へ向けて進んでいた。

実際、羅針艦橋で山城に之字運動の指示を出すと、艦娘の山城はてきぱきと旗旒信号と発光信号を僚艦へ送り、手際よく艦隊運動を制御して見せた。陸で話しているときには何とも漠然とした不安を感じさせる艦娘だったが、やはりレイテ沖海戦では西村艦隊の旗艦を務めただけあり、普段よりずっと頼もしく感じられた。

「山城さんはやっぱり、艦隊の旗艦をやるのには慣れてるの?」

「いいえ。わたし達はあの戦争でも、最後の海戦以外ではほとんど実戦に出ていないので、慣れてはいませんよ。ただ、日向が来られなくなった以上、姉様とわたしで敵を粉碎するしかありません。伊勢型に引けをとらないことを連合艦隊中に見せつけてやるわ……。フフ、フフ……」

山城は不敵な笑みを浮かべて一人で笑いだした。

——やっぱり、この艦娘はとっつきづらいなあ……

トビウメ提督は山城に気取られないよう、すぐに思考を切り替え

た。

「戦艦日向か……」

トビウメ提督は出向前に見かけた伊勢型戦艦二番艦の艦娘の姿を思い出した。侍のような服装に軍刀を腰に下げた、ボブカットの髪型の無愛想な艦娘だった。遠目に一瞥しただけで直接会って話したわけではなかったが、火事を起こした後も、妙に落ち着きはらったその物腰が特に印象に残った。

「戦艦一隻分……。その穴は僕たちで埋めないと……。そういえば、山城さん達は、あの戦艦の日向さんとは親しいの？ ……え？」

そう言いかけてトビウメ提督は言葉を呑む。山城は急に虫を見るような眼差しでトビウメ提督を睨んだ。

「まさか……。伊勢型なんかと親しい訳無いじゃないですか。特に日向なんて、いつも済まし顔で何考えているかわからない女ですよ。まったく……。武装も艦型もほとんどわたし達と同じようなものなのに……。あの人達はいつもなんであんなお気楽そうに……。そうよ、やっぱりおかしいのよ……」

山城は独り言をブツブツ言い出す始末で、トビウメ提督は軽はずみに話を振ったことを心底後悔した。

「や、山城さん。そろそろ戦闘艦橋に上がろうか。上で作戦内容をもう一度読み込んでおくよ」

トビウメ提督が慌てて言うので、山城はようやく我に返る。「ずいぶん早いですね。まあいいですけど……」

山城が承知したので、トビウメ提督は我先にと上階へ通じるラツタルを登りはじめた。

息をきらしてなんとか五階上の戦闘艦橋に登ったトビウメ提督はノートや双眼鏡、カメラ、海図などを海図台の上にひろげ、壁に立て掛けてあった折りたたみ椅子を展開しようやく身を落ち着けた。

「あ、しまった。お弁当を下に置いてきちゃったか……」

食事は作戦前に終えておくのがいつもの習慣だった。とはいえ、予想会敵時刻まで八時間近くある。山城の言う通り、ここへ来るのはまだ早すぎるのだ。

提督は双眼鏡を手に窓際から海を見渡す。戦艦山城を囲む味方の陣形が一望できる。海面は波が高いのか、波頭が白く浮き立っているが、乗り慣れた重巡那智よりはるかに巨大な戦艦はトビウメ提督が想像していた以上に揺れが少なかった。特に船体の前後方向の揺れとなるピッチングは、艦の中央付近にある艦橋では比較的大きな波を超えたときでもあまり負担に感じない程度の揺れにおさまっている。左右の傾きとなるローリングも船体が大きいだけあって、重巡よりゆっくりしており、安定感は駆逐艦不知火に乗った時とは雲泥の差があった。

——揺れだけを考えれば、戦艦も悪くないかもね

トビウメ提督は少し安心しつつ、そう思った。というのも、出発時の火事に伴うゴタゴタのせいで軍医に処方してもらった酔い止め薬を受け取るのを忘れたのだ。出港後にそれに気付き不安に駆られたものの、今の時点で三半規管に異常をきたす心配はなさそうだった。

——あとで洗面器を艦内のどっかから探してこないと……

そう思いながら、トビウメ提督は左舷方向の窓際から外を覗くと、ダークグレーの船体に「シラヌヒ」と白ペンキで艦名を記入した直衛の駆逐艦不知火が並走している。艦橋の天井には艦娘の不知火が短いポニーテイルを風になびかせながら立っていた。不知火がこちらを見上げたのでトビウメ提督が手を振ると、不知火も手を振り返した。

天気晴朗なれども波高し。そんなありふれた気象・海象が第三分隊の進撃に大きな影を投げかけつつあったことに気づいている者はいなかった。

すでに陸軍や高速戦艦比叡を従えた軽巡大淀を旗艦とする第四分隊もタロタロ泊地を出港し、あと三十分足らずで先行した第一分隊が最初の威力偵察行動を開始する時刻が迫ってきた。

トビウメ提督が最初に感じた不調は軽い後頭部の頭痛だった。軽い船酔いの症状が出てきたのだが、那智に乗っていた時も荒天時には良くあることだったので、トビウメ提督は無意識にその症状を無視した。

「少し喉が乾いた。お茶かラムネでも飲もうかな」

「それでは、わたしが取ってきます」

山城がそう言うので提督は礼を言ってお願ひすることにした。その後、すぐに生あくびが出た。良くない兆候だった。

「そんなに揺れてないよな？」

戦艦山城は確かに、駆逐艦不知火はおろか重巡那智よりはるかに揺れにくい船だった。少なくとも艦橋や煙突付近の第一甲板付近ではピッチングもローリングも小型の艦より遙かに少なかったのだが、艦の重心から高さのある位置では状況が異なっていた。トビウメ提督は気づいていなかったが、高さのある艦橋構造物は特に横方向の左右の揺れの影響を他の場所より顕著に受ける場所だった。船は波に翻弄されると重心を中心に左右に揺れる。それはメトロノームの振り子と同じで、左右に揺れる振り子は上の部分ほど、速くそして大きく揺れる。戦艦の艦橋も同じだった。重巡那智より遙かに高い艦橋構造物の上方に位置する戦闘艦橋の揺れ幅は大きく、シーソーのように左右に連続して揺れており、自覚がないままトビウメ提督の自律神経と三半規管を蝕みつつあった。また作戦前の緊張感で気が立ってしまい、昨夜ほとんど寝られなかったことも船酔いを加速させていた。麦茶を煎れたヤカンを手にはラツタルを上ってきた山城はトビウメ提督の顔を見て怪訝な顔をした。

「なんか顔真っ青ですよ。大丈夫ですか？」

「うんちよっとお茶もらう」

トビウメ提督は山城から湯呑みを受け取り、麦茶を注いでもらった。常温で煎れたもので冷たい爽快感はなかったが、胃にはやさしいはずだったが、結果的にはその一杯が引き金になってしまった。

トビウメ提督は麦茶をゴクゴクと飲み干したが、その刺激がいけなかったのか急に口の中に胃酸の不快な味が広がり強烈なむかつきに襲われた。

「ちよ、ちよっとどうしたんですか？」

山城がよろけるトビウメ提督を案じ、支えようと手を出したが、トビウメ提督はそれを制して必死になって言う。

「山城さん、お手洗いは……」

「ええ、艦橋にはありませんよ。下甲板ですが」

通称パゴダマストと呼ばれる、いわゆる神社の仏塔のような構造となっている戦艦の艦橋構造物に水道やトイレを設置するのは難しいのだ。

——とても間に合わない！

「じゃあ、オスタップか洗面器を……」

山城は呆れた表情で首を振る。

「そんなもの、ここにあるわけないじゃないですか……」

山城が言い終わる前に、トビウメ提督の胃が最後の逆蠕動運動をはじめた。山城から離れながら一生懸命に口を手で塞ぎ吐瀉物の逆流を押し留めようとしたことがトビウメ提督の最後の抵抗となった。

朝食をとってから少し時間が経っていたため、吐瀉物の多くは胃液だったが勢いよく吐き出されたそれはトビウメ提督の抵抗虚しく、戦闘艦橋のリノリウム張りの床に派手に撒き散らされた。

——た、大変だ！

「ゴホ、ゴホッ、や、山城さん、これは、す、すぐ掃除するから」

そう必死で呻くトビウメ提督の声も遠く、山城は手にしていたアルマイトのヤカンを落とし、ガシヤンと大きな音を立てて麦茶がこぼれた。

「……た。提督が……いた。私の艦橋で、提督が……」

山城がわなわなと口元を引きつらせて呪文のようにつぶやく。まずいことになりトビウメ提督もすっかり冷静さを失った。山城をなだめようと自分の制服と両手が汚れたままであることを忘れて今にも気絶しそうな山城に近づいた。

「や、山城さん、落ち着いて！　すぐ、すぐに片すから。だから……」

トビウメ提督が、わなわなと震えだす山城に一步近づくと、ついに山城が痴漢にでもあったような特大の悲鳴をあげた。

「お願い、落ち着いて！　今は作戦中だから」

「こ、来ないでくださいー！」

自制心を失った山城が手を振り回し、艦娘の怪力に突き飛ばされト

ビウメ提督はまっすぐ三メートル吹き飛ばされて海図台に背中と後頭部から激しく激突した。トビウメ提督はそのまま視野が真っ白になつて瞬く間に意識を失つた。

第二次ブーメラン島沖海戦 3 / 戦力喪失

「翔鶴さーん！　どうかお気をつけてー！」

「任務を完遂して、早く帰ってきて下さーい！」

時間はやや遡るが、シユーズ・ベラ島の軍港の棧橋には島民や作業員、それに病院の入院患者が押しかけ、出港する巨大な正規空母の船出を見送っていた。それも九割がた男だった。連合艦隊の作戦に呼応し、事前にブーメラン島に周辺の深海軍へ大規模な航空攻撃をかけることになっていた。

病院での看護ボランティアをきっかけに、すっかり島のアイドルに祭り上げられてしまった翔鶴は、仰々しい見送りに困惑しつつも見送りの男どもに笑顔で手を振り返す。

だが、艦が外洋へ出るブイを超えると、その柔らかな表情は一挙に真剣な厳しい眼差しへと変わった。

すでに甲板上には空撃準備のため艦載機が格納庫からエレベーターで次々に引き上げられ、見えない力でそれぞれ所定の発艦場所へ整列しつつある。

艦娘の翔鶴は艦橋から飛行甲板へ降りると、和弓を手に取り、甲板の先端近くまで歩いていって風向きを見た。飛行甲板の中心からは風見代わりに蒸気の湯気が白く吹き出っていて、風に流されて短い筋をつくっている。翔鶴はそれをみて僅かに面舵にきつて風が艦の真正面から吹くように調整し、艦の速力を三十ノットまで増速させた。頭に固く巻いた鉢巻の緒が風で透き通るような銀髪とともに激しくなびく。

すでに甲板後部では第一陣の零式艦上戦闘機二一型およそ十五機が整列、その後ろには各機二百五十キロ爆弾一発、六十キロ爆弾四発を懸架した九九式艦上爆撃機二十六機、艦尾近くには五百キロ陸用もしくは対艦用徹甲爆弾、九一式魚雷のいずれかを装備し、最も長く長い滑走距離を要する九七式艦上攻撃機三十機が出撃にため格納庫から引き上げ作業に取り掛かっていた。

翔鶴は正面から海風を受けながら深く深呼吸した。これまで病院

の手伝いをしつつも、急病で後送された瑞鶴とナカツル提督のことが心配で気が気でない日々送ってきたが、今はブーメラン島の仲間の命がかかった重要な任務についているので、しばしそのことは頭からふりはらわなければならぬ。

「瑞鶴、提督、どうか作戦の成功を祈っていて下さいね……」

翔鶴はそうつぶやくと後部の艦載機を振り返って、戦闘機隊、艦爆隊にエンジン始動を命じた。飛行機のコクピットや機体の周囲は当然無人で誰もいないのだが、見えない念力で一斉にエナーシャハンドルが各機のエンジンカウルの横に差し込まれ、一斉に回り始めた。十分にハンドルが回るとエンジンカウルの横についた引手が勝手に外に引つ張り出され、マグネトーにより点火プラグが一斉に混合気へ火を付け戦闘機の発動機が唸り声をあげはじめた。徐々にプロペラの回転が速度を上げ、全機のエンジンがアイドリング状態となってエンジンカウルの後方へ黒い煙を吐いた。見えない力が主脚のゴムタイヤを止めていた車輪止めをはねとばした。妖精たちは姿こそ見えないうが確実に自分達の役割を全うしている。

翔鶴は戦闘機隊全機が正常なエンジン始動状態になったことを確認してから矢筒から一本、矢を抜き取って弓につがえる。先端に零式艦戦のミニチュア模型があしらってある独特な鏑矢だ。翔鶴は艦首方向を見据え意識を集中させると、弦とともに矢筈を一杯に引き絞つてから矢を放った。鏑矢はラジコン飛行機のように飛行甲板を一気に飛び抜け、迎え風を受けプロペラを回しながら青い海と空の間に消えていく。それを合図に先頭の零式艦戦の一番機がスロットルを全開にして甲板を進み出し、翔鶴のわきを風をきって艦首方向へ進んでいった。間もなく甲板の縁際というところで機体はフワリと宙に浮き、灰色の翼が陽光を反射させながら舞い上がった。すぐに二番機、三番機と続き、戦闘機隊十五機はおよそ十分足らずで全機、艦隊の上空で編隊を組んだ。

その間に翔鶴が二本目の鏑矢を射ると艦爆隊が飛行甲板を発艦をはじめた。また甲板下の格納庫では魚雷と徹甲爆弾を抱えた艦攻がエレベーターで上がってくる。飛行甲板まで上がってきた機体は所

定の位置に整列すると折り畳んでいた主翼を展開し発動機を回し始めた。

三本目の矢を射ると艦攻隊が順次発艦をはじめ、最初の戦闘機が発艦してから約四十分後にはすべての艦載機が飛行甲板から発艦を終えた。翔鶴航空隊の艦載機はそれぞれの割当てに従って三隊にわかれると、東方のブ島へ向けて飛び立っていった。

翔鶴は再び、艦の進路を戻すと、飛行甲板の舳先に立って自分の分身ともいえる艦載機の機影を見送った。艦隊の防空のために残った戦闘機は残りわずかだ。そんなとき、輪形陣を組んだ艦隊の外縁部の上空に黄土色と緑の迷彩色の機体に日の丸を描いた複葉機が近づいてきた

「あら、鳳翔さんね」

翔鶴は緊張を解いて手を振った。タロタロ泊地に残っていた鳳翔が偵察のために飛ばした複葉の九六式艦上攻撃機だった。複葉機の無人のコクピットからチカチカと発光信号が瞬いた。

『進路上四十哩、敵機影、敵艦影ナシ。健闘ヲ祈ル』

そう信号を送ると偵察機はバンクしてタロタロ島の方向へ飛び去った。

「鳳翔さん、ありがとうございます」

翔鶴は小さくなっていく機影に手を振り続けた。

視野の全体でチカチカ光る白い虫が乱舞しているような感覚とともにトビウメ提督はなんとか覚醒した。すぐに猛烈な頭痛と全身に痛みが走り、嗅覚が戻ってくるとともに独特の酸っぱい悪臭が鼻をついた。

——やっぱり、夢じゃなかったんだ……

はかない現実逃避もよそに、トビウメ提督は自分の周りを見回し、状況を把握しようと試みた。

——そうか。山城さんに吹っ飛ばされて気絶してたんだ。こ、こうしちゃいられない！

トビウメ提督なんとか立ち上がり自分が五体満足で大きなケガも

してなさそうなことを確認した。艦娘に手加減なしで突き飛ばされて無事であっただけ幸運だったかもしれない。床に広がった吐瀉物を見てトビウメ提督は自分が情けなくなった。

「や、山城さん……」

猛烈な頭痛をこらえながらトビウメ提督は、戦闘艦橋の隅でひざを抱えて動かない山城に声をかけるが、山城は顔を上げようとすらしない。顔を膝にうめたまま、身じろぎもせず何やらブツブツつぶやいている。

「や、山城さん。僕が悪かったから……お願い、起き上がって」

提督はあまり近寄らないようにしながら山城に声をかけるが、全く動く気配がない。

「……いた。だから、嫌だったのよ……。……様、わたし……。……もう嫌……。……」

ただでさえこんな様子の山城とこれから二人だけで海戦に臨むことと自体が難儀なことだったが、それ以上に絶望的な状況にあることをトビウメ提督はようやく気がついた。艦の揺れが不規則になりつつあった。

トビウメ提督は艦橋のガラス越しに外の海を見ると、右舷を走る駆逐艦荒潮がこちらを追い越していく。トビウメ提督は慌てて左舷へと走ると。駆逐艦不知火もこちらより速いペースで進んでいく。艦橋の上にいる艦娘の不知火が心配そうにこちらを見上げている。

——ま、まさか……

トビウメ提督は青ざめた顔で艦橋の天井付近に並ぶ計基盤を見上げる。速力計の針がどんどん下がってゆき、まもなく五ノットを下回るうとしていた。後甲板の方角へ目をやると、さっきまで後部煙突からもうもうと立ち上っていた黒煙がかなり細くなっている。罐の火が落ちたのだ。

「や、や、山城さん、き、機関が止まってるよ！ 山城さん！」

提督は嘔吐物で汚れた制服を脱ぎ捨て、ハンカチで両手を拭ってから、大声で山城に呼びかけるが、山城は身じろぎもしない。戦艦山城は惰性で前へ進んでいるが、スクリーンが回っていないせいでみるみ

る減速しつつある。

「お願い、山城さん。機関を動かして！ 艦が止まっちゃやうよー！」

泣き叫ぶように言う提督もよそに、山城は固まったまま動かない。

——こうなったとき、どうすりやいいんだ！ ああ、誰か！ ああ那智さん！

パニックに陥ったトビウメ提督は頭を抱えて羅針艦橋の天井を仰いだ。

駆逐艦不知火の艦橋の上に立っていた不知火は右舷を航行する戦艦山城の急減速に気付き、顔を上げた。

「どうしたのでしょうか？」

山城の艦橋構造物を見上げると、上層の羅針艦橋後部のデッキから手を振るトビウメ提督の白い影が見えた。

駆逐艦不知火はこういったなにげないコミュニケーションに、大きな幸せを感じている艦娘だ。表情こそ仏頂面だが、大きく手を振り返す。しばらく手を振り続けていると、トビウメ提督は転げ落ちんばかりの勢いでラッタルを駆け下り、羅針艦橋のさらに下のフロアとなる司令塔の位置する層までまで降りてきて、再度柵から身を乗り出して手を振っている。不知火も再び手を振り返すが、トビウメ提督は一向にそれを止める様子が見せない。不知火はようやく様子がおかしいと気づいた。

見張りの用の双眼鏡越しに覗くと、制服の上着も脱ぎ捨て、泣きそな顔で何やら叫んでいる。それに手を振っているというよりも必死に手招きしているようだった。

——ただ事じゃないわね

不知火はすぐに自分の艦を機関減速に設定し、戦艦山城に横付けするように舵を切った。両艦の間隔が二十メートル以下にまで近づいた時には、戦艦山城は停船寸前にまで行き足が止まっていた。不知火の耳にもようやく提督の悲鳴が届くようになった。

「司令！ 司令！ 何があつたんですか！」

「山城さんが！ 山城さんが動かなくなっちゃった！ どうしよう、

ぬいぬい！」

不知火は舌打ちした。訓練中はなんとか無事に済んでいたから良かったが、懸念した通りやはりあのメンヘラ戦艦はとんでもない地雷を抱えていたようだ。

不知火は周囲を見回した。どうも提督一人の手に負えるトラブルではなさそうだ。その時、山城の艦尾方向から警笛の重い響きが二人の耳に届く。真後ろを航行している戦艦扶桑が鳴らしたものだ。

「司令！ このままでは扶桑に突っ込まれます！ 急ぎ停船指示を！」

今は敵による傍受を警戒し無線封鎖中なので電話を使うことはできない。発光信号か旗旒信号によって意思疎通するしかなかった。

「無理だよ！ 山城さん、うずくまって動かないから、信号も出せないよ！」

提督がパニック状態でわめく。

——司令は一体、山城に何をしたんですか？

不知火は内心面食らいながらも、叫び返す。

「司令！ 不知火も乗艦します！ 後ろの扶桑を止めてください！」

旗甲板で信号旗をさがして掲げてください！ 「L」の信号機を！

黄色と黒とのチェック柄です！ 「L」ですよ！」

「わ、わかった！」

トビウメ提督は旗甲板のあるフロア目指しラツタルを駆け上がった。

その間に不知火は自艦から戦艦扶桑へ発光信号を送りつつ、艦橋の天井から甲板へ駆け下り、扶桑へ乗り移るための右舷に吊っている内火艇のダビットにロープを緩めるよう命じた。本来なら、洋上では船と船を索でつなぎハイラインと呼ばれる臨時のロープーウェイをこしらえ、滑車付きの荷台や専用の椅子を吊って移動するのだが、今回は相手の船の支援が受けられそうもないので、急ぎ内火艇で乗り移ることにした。外洋で艦娘が自分の艦を離れるには大きなりスクを伴うが、不知火には自艦を離れても最低限の指示をするだけの練度があるので、迷わず山城に乗り移ることにした。

一方、トビウメ提督は旗甲板に駆け上がり、金属製の信号旗収納箱の蓋をはね開け、整然とたたまれた旗の束の中からLの信号旗をひつつかんだ。旗を広げると、支柱にまとめられているロープ、いわゆる信号掲揚索に結びつけて引っぱり上げれば良いのだが、通常見えない念力によって動いているせいか、索は固く結び付けられていて、トビウメ提督が何度引つ張つてもびくともしなかった。

再び警笛が鳴った。後方の戦艦扶桑が発光信号を明滅させて迫ってくる。トビウメ提督ははつきりと視界に大きくなりつつある戦艦扶桑の威容を前に頭を抱えた。艦娘によつて管制されている艦船は、ひとたび指揮ユニットとも呼べる艦娘が人事不省に陥れば一切の機動が困難になるという弱点を抱えている。

トビウメ提督は山城の艦橋を見上げた。掲揚索が使えない以上、少しでも高いところに信号旗を結びつけて扶桑に警告するしかない。トビウメ提督は前部艦橋か、もつと扶桑に見えやすい後部艦橋のある後部マストまで走ろうか迷ったが、後部艦橋に向かうには一度第二甲板まで降りなければいけないので、山城の前部艦橋の最上階目指しパゴダマストの中を駆け上りはじめた。

一方、不知火も鉤手で欄干の鎖と内火艇を結びつけると、まるで岩登りでもするように戦艦の高い艦舷をロープ一本をつたって第一甲板に這い上がった。とにかく艦娘の山城の状態を確認しなければいけない。不知火は木板を敷き詰めた甲板を蹴って、艦橋へ走り始めた。

一方、トビウメ提督はラツタルでつまずいたり、ハッチに頭をぶついたりしながら、汗だくで戦艦艦橋のさらに上に位置する高所測距所と呼ばれる吹き抜けのバルコニーのようなフロアへたどりついた。暑さと息切れで意識を失いそうになりながら、欄干から身を乗り出し、後方の扶桑へ向け「L」の国際信号旗を大きく振った。

「扶桑さーん、止まってー!」

三回そう叫ぶと、息が続かなくなり、トビウメ提督は旗を広げて欄干に結びつけると、床に倒れ込んだ。

ようやく戦艦艦橋へたどり着いた不知火は、床の吐瀉物を前に顔を

覆った。室内には脱ぎ捨てられた提督の制服、そして部屋の隅にうずくまって顔を伏せたまま動かない山城を発見し、何が起こったのかおおよその見当がついた。

——やらかされましたね、司令……

あまりに馬鹿らしい事態を前に目眩すら覚えたが、この世界の艦娘には、この手の信じがたい弱点があることも知らないわけではない。とにかく山城が正気に戻らなければ戦いどころではない。

「山城さん、山城さん。しっかりしてください。今は作戦中です。立ち上がって艦の指揮をしてください。山城さん？」

不知火は山城の肩を揺すぶってそう言葉をかける。

「不幸だわ……、いつもこんなオチ……。……されたのよ。また騙された……」

膝に顔をうずめて一人でぶつぶつぶやいているだけで、こちらの話が聞こえてないようだ。不知火は額に青筋を浮かべ大きく舌打ちした。

——懸念はしていましたが、こんな難物のメンヘラ戦艦だったとは……

不知火はふと、山城が正気を取り戻すまでその顔を殴り続けてみようかとも考えたが、そんな真似に及べばトビウメ提督が二度と自分と口を聞いてくれなくなりそうなので、不知火はその衝動をすぐに押し留めた。

窓の外を見ると戦艦山城の急な停船で艦隊陣形は崩れ始め、後続艦は衝突を回避しようと減速や転舵をはじめた。一方、何をのんびりしているのか、戦艦扶桑は減速も転舵もせず、まっすぐに進んできているようだ、不知火は信号灯のある甲板を探して戦艦艦橋を飛び出した。その時、扶桑が再び警笛を鳴らした。

同時に提督が戦艦艦橋へよろよろラツタルをすべり降りてきた。白い麻のズボンの膝は鋼鉄のラツタルにぶつけて血に染まり、おでこや腕にはいくつも擦り傷を負って満身創痍の体だ。

「司令、発光信号で停船の呼びかけをします」

「う、うん。お願い……。僕も行く」

不知火はすぐに信号灯に取り付き、戦艦扶桑の羅針艦橋目掛け和文モールスで「ト・マ・レ」を送り続けた。トビウメ提督もその横で信号用の手旗を大きく振った。

一方、戦艦扶桑の羅針艦橋では、艦娘の扶桑が怪訝な顔で姉妹艦の艦尾を見ていた。

「山城、急に行き足が遅くなってしまったけど、一体どうしたのかしら？ 山城、大丈夫？」

扶桑はそうつぶやきながら艦橋の信号灯で山城に問いかけるが応答はない。一方、自分は二十ノット以上の速力で前進中で、山城の艦尾がどんどん近づいてくる。扶桑は汽笛を長く鳴らして警告してみるのが反応はなく、そうこうするうちに随伴の駆逐艦が山城の左舷に取り付き、内火艇で艦娘が戦艦へと乗り移っていくのが見えた。

「やっぱり何かあったようね……」

艦隊陣形も崩れ、僚艦にも動揺が広がり、相互に発光信号が交錯しはじめた。少しすると白い服を着た豆粒のような人影が戦艦山城の上部艦橋の外へ身を乗り出して「L」の信号旗を大きく振っている。

「これは……、停船しないといけないわね」

戦艦扶桑はようやく自艦に両舷停止を命じ、スクリューが停止したと同時に後進をかけた。それまで二十ノット以上の速力で進んでいた基準排水量約三万トンの船体が急停止するのは困難だ。扶桑の船体は惰性でまっすぐ進んでいく。戦艦山城の艦橋後部から停船を求めめる発光信号がチラチラ光っている。

「山城、急に止まったら危ないわ。このままでは……、ぶつかってしまわね……」

扶桑はそうつぶやきようやく舵を取り舵に切ったが、何もかもが遅すぎた……。

不思議なもので、ぶつかった瞬間トビウメ提督は揺れも衝撃も感じなかった。

「司令！ 床に腹這いになって！」

不知火が信号灯から身を離してしゃがみ込んだ。船尾を振り返る

と、ぶつかった瞬間、戦艦扶桑の艦首はまるでケーキを切り分ける鋭利なナイフのように山城の艦尾を切り裂き、ぶつかり、きしみ押しつぶされる、独特な悲鳴のような音を立てた。扶桑の船首は長官公室を真っ二つにしつつ船体を浸食し、周辺の将校用の個室を押しつぶして第五砲塔の砲身に振れそうなたりまでめり込んでようやく止まった。一方ぶつかった衝撃でトビウメ提督は一テンポ遅れてリノリウム張りの床に投げ出された。腹這いに倒れて胸や前腕を激しくぶつけたものの、山城に突き飛ばされた時の衝撃と比べれば大した衝撃ではない。

「司令、大丈夫ですか！」

すぐに不知火が駆け寄る。不知火に助け起こされ、トビウメ提督は絶望によって光を失った目で、相互に潰れてめり込んだ二隻の惨状を見た。まるで合体ロボの変身途中で時が時が止まってしまったかのように、先頭の戦艦の船尾に後続の戦艦の艦首が深く突き刺さり、まるで一隻の巨大戦艦になったような有様だ。

——あれじゃあ艦長室に運び込んだ手荷物はペシャンコだろうな。カメラだけでも無事で良かった……

ぼんやりとした思考のなか、提督は自分のカメラを握りしめた。はつきりと確信できたのは、もはや自分が来るべき海戦で与えられた任務を達成する機会は永久に失われたということだけだった。

同時刻、第五航空戦隊の空母翔鶴の航空隊がブ島周辺の敵深海棲艦へ攻撃を開始した。第二次ブ島沖海戦の火蓋が切られた。

第二次ブーメラン島沖海戦 4 / 戦いのはじまり

ブーメラン島に殺到した翔鶴航空隊のうち、最初に接敵したのは戦闘機隊だった。敵は島の北部沿岸へのんびりと進出してきた、たこ焼きにヒレが生えたような双発大型飛行艇で、戦闘形態へ変形すらしていなかった。零式戦闘機は瞬く間にこれに機銃弾を浴びせて叩き落とすと、次の獲物を求めて数隊に分かれて島の北方上空に散開する。続いてやってきた艦爆と艦攻は、ポート・フリスビー沖に展開しつつある深海軍の封鎖艦隊に高度三千メートルから一気に襲いかかった。不意に急降下爆撃に晒された深海棲艦の重巡一隻が二百五十キロ爆弾の直撃弾を受けて中破。軽巡二隻と駆逐艦四隻も大破炎上した。それに呼応して海面すれすれの低空飛行で北東から接近した九七艦攻が、封鎖艦隊の中核を成す重巡、軽巡を主な目標に雷撃を敢行した。不意打ちで一撃離脱に成功した艦爆隊に比べ、艦攻隊はすでに敵襲を察知した深海軍の対空砲火に迎えられた。そうでなくても、新海軍の防空火力は日本の艦船より遥かに強力で艦攻隊は敵艦隊陣の内側へ侵入する前にすでに三機が撃墜されてしまった。

それでも九七艦攻は敵の高角砲弾が炸裂するなか、大型艦めがけてスロットルを全開にして、敵艦船を魚雷の射程圏内に捉えるべく、海面上わずか十数メートルの超低空を時速約四百キロで敵艦隊めがけて突入した。

艦攻隊は、艦隊中央にいる重巡三隻とその周囲を囲む軽巡を目標に定めて接近するが、さらに四機が対空砲の直撃を食らってバラバラに吹き飛んだ。そんな絶体絶命の機上では無人の操縦席に備え付けられた雷撃照準器が標的の進路、速力に合わせた雷撃角度を計算し、機体は対空砲弾の爆風に煽られながらも定められたコースに向けて機首を向け、必中の距離になった時点で、各機が吊り下げた九一式魚雷を投下した。魚雷を放り投げた艦攻は速度を上げて一気に敵艦の上を飛び越えて再び低空飛行になり、全速力で離脱する。対空砲火は容赦なくそれを追いかけて、さらに二機が爆発したかと思うとすぐに海面に大きな水柱を上げて突っ込んだ。

一方、海中を時速八十ノットで敵艦に向かう魚雷はゆつくりと敵艦の腹に向けて近づいていく。ただ、艦爆隊の奇襲後、回避行動を始めた敵艦隊は、各艦がまるで蛇がのたくるように進路を不規則に変えて航行し、艦攻隊が決死の覚悟で放った魚雷もその多くが目標からそれてしまった。それでも重巡一隻の右舷に一発、更に軽巡二隻に魚雷が命中し、軽巡一隻は即座に爆沈。また敵陣中央に突入できなかった二機は護衛の駆逐艦二隻に魚雷を命中させうち一隻が被雷後まもなく転覆するという戦果を上げた。

一方、シユーズ・ベラ島の沖からブ島方向へ航行中の空母翔鶴の艦橋では、艦娘の翔鶴が艦載機を指揮、管制しながら、各機からの報告を受けていた。ポート・フリスビー上空方面に進出した艦載機はすべての攻撃を終え、制空任務についている戦闘機を除いた艦載機が帰還をはじめている。

一方、島の西部沖合に展開中の敵艦隊攻撃に向かった部隊は、今まさに攻撃を開始しようとしているところだった。島の西沖合に展開した敵艦隊を攻撃した航空隊は、すでに接近を敵に察知されており、序盤から苛烈な対空砲火に晒された。セオリー通りに急降下爆撃と雷撃機が呼応して同時に襲いかかるものの、艦爆隊は敵艦隊の高角砲がすでに弾幕を張っている中への突入を余儀なくされた。敵は戦艦三隻、重巡五隻を含む総数三十隻以上の大艦隊で、艦載機隊、雷撃隊いずれも戦艦を最重要目標に突入を開始したが、艦爆隊は急降下中に六機が被弾し、うち四機はオレンジ色の長い炎を引きながらきりもみ状態で墜落。戦艦二隻に辛うじて至近弾と直撃弾を得たものの、致命的な打撃を与えることができなかった。一方、三方に散開して低空を接近した艦攻隊も、まるで銃弾の暴風雨のように浴びせかけられる対空砲火をくぐりつつ、敵艦隊の中心へ飛び込むが、すぐに五機が撃墜され、なんとか魚雷を放つものの、戦艦一隻に一発命中、また重巡二隻に各二発の命中弾を与え各艦とも中破相当の打撃を食らわせるのが精一杯で、完全に撃沈できたのは艦隊外側の防衛ラインにいた駆逐艦二隻と軽巡一隻の計三隻にとどまった。

ブ島のはるか東北東の海域にある航空母艦翔鶴の艦橋で艦載機の

指揮・管制にあたっていた翔鶴は、攻撃当初からある種の困惑に囚われ、第二隊の攻撃開始時には明確な不安をいだき始めていた。それはブ島の北と西にいる深海軍の艦隊規模が作名命令を受けた際の提供された情報よりもかなり大規模であった一方、こちらは航空隊を三隊に分散してしまったので、敵艦隊に大きな打撃を与える事前の空爆が不十分に終わってしまったことだ。

翔鶴は各地の航空隊から状況報告を受けると、すぐにそれを連合艦隊司令部が座乗している第四分隊旗艦の軽巡大淀へ転送していたが、司令部からの返答はただ一文「速ヤカニ第二次攻撃ヲ準備シ、敵艦隊ニ対シ、追加ノ航空攻撃を敢行スベシ」と返信があっただけだった。

翔鶴は即座に艦内へ、艦載機の着艦と追加の魚雷、爆弾の用意を命じたが、これから帰投しつつある艦載機を収容後、武器を搭載して再度攻撃に移るには最短でも三時間半はかかる見通しだ。

さらに翔鶴を悩ませたのが目的地上空に到達した第三航空隊からの入電だった。

ブ島の南東の深海軍の上陸拠点、クラゲ海岸を攻撃予定だった航空隊は、そこで海岸一杯に展開する敵の真っ黒な上陸用舟艇と高度五百メートルくらいの高さにまで、係留索で地面と繋がれたグレーの気球が高度を違えて無数に上がっている光景に直面した。また浜辺の沖合には、数え切れない輸送船が浮かび、海岸と輸送船の間をハゼのようにヒレのついた上陸用舟艇が行き交っていた。グロテスクな舟艇は浜辺をはって次々に波打ち際から海岸へと上がってくる。

艦載機からそれらの様子を聞き、翔鶴はうつむいて考え込んでしまった。浜辺には敵の上陸部隊が武器と補給物資を集積中だが、無数の阻塞気球が空からの攻撃を阻んでいる。気球はもっぱら航空機の接近を防ぐために上げられていた。特に急降下爆撃機や低空で火力支援を担う対地攻撃機は、気球とそこからぶら下げられたワイヤーに絡まる危険があり、容易に低空までは降りられない。そのため攻撃は高高度からの水平爆撃となるが、命中精度は低下する。またわずか二十機ほどの攻撃機で広い砂浜と沖の海面を埋め尽くす敵に効果的な

打撃を与えることは不可能だった。

「二体、どの敵を優先的に叩くべきかしら……」

翔鶴は窓の空からブ島のある南の空を見つめた。艦娘は単独で自律作戦行動が可能な権限と判断力をもっているが、やはり機械だった前世の名残で、多くの艦娘は重要な決断を提督に依存していた。艦隊とともに提督が作戦に同行する最大の意義は、決断力を持つ提督の指揮にあった。

数ヶ月前からナカツル提督には別の任務が課せられていたため、外南洋にたった一人で派遣された翔鶴は、当初から提督の座乗しない状態で単独での作戦行動を求められていた。

「提督。提督なら、この場合、どうされますか？」

翔鶴は自分の指揮官のナカツル提督のことを思いながら思索した挙げ句、最も妥当もしくはは無難と判断されうる、陸海の敵全体をむらなく攻撃することを決めた。

艦攻隊のうち陸用爆弾を搭載した機には海岸の陸上部隊を、また魚雷搭載機と艦爆にはそれぞれ敵戦闘艦と上陸用舟艇への攻撃を命じた。航空隊が散開するとともに敵の対空砲火が航空隊を襲う。クラゲ海岸を狙った艦攻隊は、阻塞気球に邪魔されて近づきづらい海岸の上空、高度二千メートルからの水平爆撃を実施し、対空砲と対空機銃に追われつつも、何とか爆弾を投下し空域から離脱した。一方、沖の輸送船団と護衛艦隊を狙った一隊は深海棲艦の防空ピケットラインからの対空砲火により、艦攻、艦爆いずれも次々にオレンジ色の炎を上げて墜ちていき、半数以上の機を失った。一方で、敵に与えた損害は輸送船と軽巡一隻を撃沈、輸送船二隻と駆逐艦二隻を損傷させただけで、到底犠牲に見合わない乏しい戦果だった。

さらにポート・フリスビーの東北東の位置に新たな敵艦隊を捕捉したとの電信が、現场上空で観測任務に就いていた艦攻から翔鶴の元に伝えられた。

『戦艦二隻、重巡四隻、駆逐艦七隻、進路三四〇、推定速力十八ノット』

それはシオイとカメヤマ提督が先ほど正体を捕捉しようとして果たせなかった深海軍の別動隊だった。

——ええ、封鎖艦隊の近くに、そんな強力な別の艦隊がいるなんて……。もうすぐ第一分隊が突入を開始してしまうわ。急いで司令部に伝えないと。

翔鶴はすぐに長距離通信で連合艦隊司令部に状況報告を打電しつつ、攻撃を終えた艦載機に帰投を命じた。水雷戦隊を支援するために、もすぐに第二次攻撃の準備にかからなければいけない。ただ、一連の攻撃で翔鶴航空隊はすでに攻撃機の三分の一以上を失っていた。

艦載機の第一波攻撃終了し、第一分隊の水雷戦隊がポート・フリスビー沖に突入するまで、あと二十分だった。連合艦隊司令部からは先程同様、「さらに航空攻撃を強化すべし」との連絡あるだけだった。その頃、ブ島の遙か西方では二隻の主力戦艦が衝突事故により戦闘能力を失っていたことは、翔鶴も第一分隊の提督や艦娘達はまだ誰も知らない。

ブーメラン島の北端に位置する港町ポート・フリスビーでは、今日もある意味では平穏に時間が過ぎていた。南部から迫る敵陸上部隊の圧迫は緩慢で、空からの脅威も敵の長距離偵察機や艦載機が数日に一度、気まぐれに飛来して小さな爆弾を落として帰るだけだ。

睦月型駆逐艦の艦娘、卯月は日課となっている、棧橋に係留されている駆逐艦卯月の点検だけ済ますとすぐに舷梯子を降りた。艦にこれといった損傷は無いもの、もう三ヶ月近くも港内に繋がれたまま、艦のいたるところに赤茶色の錆が浮かび始めている。姉妹艦の弥生から何度も小言を言われているので、稼働に影響がないように最低限の整備はしていたが、艦の見栄えには全く気をつかわなくなっていた。

市街地はすでに全住民の疎開が完了しているためゴーストタウンになっており、交差点などの要所には塹壕が掘られ、無精髭の浮かぶくたびれた顔をした陸軍の兵士が配置についている。

「うーちゃん、つまらないぴょん」

卯月は誰もいない荒廃した市街地を抜け、港湾を囲む岬の突端にある小高い山へと足を向けた。

山の頂上には土嚢と丸太でこしらえた即席の小さな監視哨があり、島の北側の海と空を監視している。

「おや、海軍の卯月ちゃんじゃなか。お散歩かい？」

げっそりと痩せた当直の兵士の一人が監視哨から顔を出した。

「うーちゃん、退屈でつまらないんだぴよん……」

卯月は髪をまとめているウサギ型の髪留めをいじりながらつぶやいた。

「卯月ちゃん、もう昼飯は食ったか？」

もう一人の兵士がそう声をかけたので、卯月はぱあつと表情を明るくして聞き返す。

「もしかして、缶詰残ってるの？」

「いや、さすがにそれはもう無いよ。タロイモとお粥。食うか？」

卯月はすぐに苦い表情で首を振った。

「そ、それなら遠慮するびよん……」

兵士たちは笑いながら監視哨の中に引っ込んだ。もう正規の食糧は底をつきはじめ、最近では芋や握り飯ばかりが配られるようになってきた。ただ、それもいつまでもつかわからない。

卯月は監視哨の横に積まれた土嚢に腰をおろした。今日はやや薄雲がかかっている、海面は淡い青みがかかったグレーに見える。

沖合いには二十隻以上の真っ黒な船体の異形の船がゆつくりとした速度で遊弋しているのが見える。ポート・フリスビーを海上封鎖している深海軍の艦隊だった。時々赤や黄色、青色に妖しく光り、常に陸地へ睨みを効かせている。もし封鎖艦隊がポート・フリスビーの市街地やブーメランの島の陸地に艦砲射撃を実施すれば、ブ島守備隊も卯月たち輸送護衛艦隊も一瞬で壊滅するだろう。それでも、深海軍は何かを待っているように封鎖を続けていた。島の中部にあるクロコダイルクリークと呼ばれる川を挟んで、守備隊と深海軍上陸部隊は散発的な攻防戦を繰り返していたが、未だ本格的な決戦は起きていない。今日も「比較的」平和な昼が過ぎつつあった。もっとも、その平和は今日が最後かもしれない。深海軍がその気になれば明日にでも卯月から艦娘や陸軍の守備隊は最後の日を迎えることになるのだ。

——睦月たちははどうしてるだろう？

卯月はそんなことを考えながら沖合いをぼんやりと見ていた。しばらくは海風の音と南の方角から時折聞こえる地上戦闘の音が聞こえてくるだけだった。

海上に異変が起きたのはしばらくしてだった。深海棲艦の艦隊が不規則に進路を変えつつ、それまでの複縦陣を解いて、ばらばらに動き始めた。

「あいつら何やってんだ？」

監視哨の兵士も気づいたようで、双眼鏡を目に押し当てて沖の彼方へ目を光らす。数隻の駆逐艦がどこかへ向け発砲し、硝煙により一瞬船体が隠れたのがわかった。

「撃ったぴよん！ まさかこっちへ……」

「いや、砲身は沖へ向いてる」

叫ぶ卯月対し、双眼鏡を覗いていた兵士はそう否定した。それを証明するように上空に黒い煙の花がポンと小さく咲いた。対空射撃だった。しばらくして発砲音が遠く島にも響いてきた。その間に別の艦も空に向け射撃をはじめている。

「見えた！ かなり高いところだ。航空機多数！」

卯月も立ち上がって大空を見上げた。今日は雲が多い。

「うーちゃんにはわかんないぴよん……」

そのとき、雲をつきぬけて小さい豆粒のような機体が敵艦隊めがけてほぼ垂直に急降下してくるのが見えた。

「あれは味方の艦爆だよ！」

卯月は興奮して叫ぶ。

「一時方向にも編隊！ こっちへ向かってくる。日の丸が見えた」

卯月が北北西の空を見ると、薄雲の向こうに、こちらに向かってくる編隊が見えた。

「来たぴよん！ 助けが来たぴよん！ みんなに知らせてくるぴよん！」

卯月はそう言うと、大急ぎで麓の町まで駆け下りていく。その間に編隊は卯月達の真上を飛び越えて島の南部の方へと飛んでいく。

卯月は息をきらせつつ、街の郵便局の建物まで駆けてきた。旧郵便局の建物は、臨時で卯月ら海軍と船団関係者の詰め所になっていた。ちょうど玄関口には船団の護衛で同行してきた、姉妹艦娘の弥生が白兵戦用の艤装を身につけたまま所在ない様子で立っていた。

「弥生、大変ぴよん！ ついに助けが来たぴよん！ 籠城生活もこれで終わりぴよ……うげっ」

卯月がしまいまで言う前に、弥生は艤装の主砲で卯月の腹をどついたのだ。砲身の先があばらの間にめり込み、卯月は悶絶して膝をつく。

「や、弥生、な、何するぴよん……」

身悶えする卯月に、弥生は目を吊り上げて低い声で言った。

「弥生、今は怒っていますよ。あれほど、ついていい嘘といけない嘘があるって言ったのに……。弥生、前に言ったよね……」

「うーちゃん、嘘なんかついてないぴよん……」

卯月が脇腹を抑えながらそう弁明すると同時に、空から発動機の音が響き、零式艦上戦闘機が低空でポート・フリスビーの街の上を飛んでいった。そして弥生にもその日の丸の色がはつきりと見えた。

「艦載機だ！ 沖の艦隊を攻撃しているぞー！」

陸軍の兵士達が建物から飛び出して、港の方へ走っていく。空には戦闘機だけでなく、艦爆や艦攻の姿も見える。海の方からはかすかに対空射撃の爆発音も響いてきた。

「えっ？ 本当だ……」

「弥生、どーしてくれるぴよん！ うーちゃん、殴られ損だぴよん！」

弥生はしまったという表情で顔を背ける。

「し、しかたない……。卯月、今回のパンチは、次に卯月を怒る時までツケておいて……」

「どーゆーことだぴよん！ なんでうーちゃんがまた怒られることが決まってるのー！」

卯月は痛みを堪えながら猛然と抗議するが、弥生はすでに真剣な表情に戻って卯月の手を引っ張って立たせた。

「助けが来たなら、準備をしないと……。卯月、行くよ」

「は、話はまだ終わってないぴょん！」

そうわめく卯月を引つ張って弥生は郵便局の建物に駆け込んだ。

建物の一階には、艦娘が乗艦・制御しない有人型貨物船の船長が詰めかけていた。その中に紺の詰め襟制服に身を包んだ色白の艦娘がいた。ブ島撤退のために派遣された輸送船団の中核を担っている陸軍の強襲揚陸艦娘のあきつ丸だった。

「海軍の連合艦隊が封鎖艦隊の撃滅と我々の離脱支援作戦を開始したであります。作戦が順当に進めば、敵封鎖艦隊は五時間後までに港口の確保を維持できなる予定で、それまでに全陸軍部隊を輸送船に移乗させる必要がありますな」

あきつ丸の報告に応じたのは、ヨレヨレの軍装を着て軍刀を手にした無精髭をはやした陸軍の守備隊長だった。

「町の守備隊は今すぐにも乗船準備にかかれるが、問題は前線で今も敵と交戦中の部隊だ。段階的に手際よく後退させないと、港まで敵に戦線を一気に押し込まれることになる」

「なんか難しい話をしていて、うーちゃん退屈ぴょん……」

「しー、静かに……」

部屋のすみで聞いていた卯月がつぶやくと弥生が小声でたしなめた。そんな二人をよそに話し合いは続く。

「キスカの際は、将兵は全員かさばる装備、小銃を投棄し身軽な状態で迅速な移乗を実現した。ただ今は島内に既に敵が上陸している状況だ」

「むしろキスカよりガダルカナル島からの撤退を参考にすべきかもしれないでありますな……。ところで、白雪殿は前世ではガダルカナル島撤退作戦で無事に脱出した経験をおもちでしたな？」

あきつ丸は、末席に座っていたセミシヨートの髪をツインテールにしたセーラー服姿のおっとりとした雰囲気の駆逐艦娘に話を振る。呼びかけられた艦娘、吹雪型二番艦の駆逐艦娘白雪は今回、船団護衛の駆逐艦三隻の分隊旗艦の任にあった。

白雪は急に話を振られ、ちよつとびっくりしたようにはいと返事をしてから言った。

「ガ島撤退時のケ号作戦は、常に敵の空襲を警戒しなければいけない状況だったため、島への接近は今よりも困難でした。ただ、ガ島でも、その後のキスカからの撤退でも、高速を出せる駆逐艦に分乗することになったので、夜間のうちに島を離れられれば敵の勢力圏外に離脱することができました。今回わたし達は輸送船と強襲揚陸艦、さらに護衛の駆逐艦と速力が大きく異なる艦が集まっているので、近海の制海権を確保しておかないと逃げ切れないと思います」

「確かに敵の強力な艦隊が近くに常駐しておるので、これが確実に除かれないことには、安全な撤退は困難でありますな」

あきつ丸も白雪の説明に賛同するように言った。

「いずれにしろ前線の部隊の撤退は最後になる。また、決して疑うわけではないが……。確実に海軍が敵を排除できる確証が得られるまで、警戒は続ける必要があります、武器や装備の投棄はできない。それだけはギリギリまで待つて判断したい。実際、先の海戦では、味方は島に近づくことすらできなかったのだからな」

守備隊長の言葉に一同がうなずいた。

「報告ー！ 沖合いに友軍の水雷戦隊！ 敵封鎖艦隊と交戦を開始ー！」

郵便局に駆け込んできた伝令がそう叫んだ。

「来たぴよん！ 今度こそ勝利は間違いなしぴよん！」

卯月は飛び上がって言った。

「確かに今回は期待したい……」

弥生は噛みしめるように言った。

「ちよつと海を見てくるぴよん」

そう言つて卯月は郵便局の外へ向かつて走り出した。

「あ、卯月待つて！ 弥生も行く」

駆逐艦娘の二人を見送りながら、あきつ丸と白雪は、有人貨物船の船長や航海士らに向き直つて言った。

「自分らの艦は、その他の貨物船より速力に勝るので最後に出発します。皆さんはいつでも船を出せるように準備だけはおいってください。まず撤収できる兵から輸送船に乗船してもらおうであります」

あきつ丸の言葉に、守備隊長と輸送船の船長らは深くうなずいた。

タロタロ島軍港に錨泊中の戦艦日向の下甲板では、煤けた第三種軍装姿のナス提督と同じく、ところどころ煤で黒く汚れた着物姿の日向が空になったバケツを手に、室内が真っ黒に焦げた機械室に佇んでいた。換気装置がフルで働いてゴウゴウ音をたてているが、重油が焼けた悪臭は当面取りのけられそうにない。

「やれやれ……。コゲ臭さ艦内中にひろがっている。しばらく取れそうもないぞ」

日向が肩をすくめてつぶやいた。

「それくらいは仕方ない。さてどれくらい時間を稼げるか……」

「もう間もなく第一分隊が最初の接敵を果たす頃だな。それにしても、まさか自分の艦に火をつけることになるとはね……。これは明確なサボタージュだぞ」

焦げた壁面や配管を見上げながら呆れる日向に、ナス提督は何度もうなずいた。

「苦勞をかける。ただ、お陰で戦力温存に少し道が開けた。この艦が無傷であれば、この島の島民ぐらいは救えるやもしれん」

出港の三時間前、日向は燃料系統の支線を航行には直接影響しない機械室に導き、意図的に配電盤の外箱を壊した上で火を付け、漏電と燃料漏れによる自作自演のぼやを演出したのだ。出撃直前の慌ただしい時に合わせてだったので、連合艦隊司令部は細かい原因究明をせず、また工廠関係者や妖精にはナス提督がいくばくかの軍票の力と間宮の助力により根回しが済んでおり、狂言火事が司令部関係者に勘付かれることはなかった。

ただ、この行動は日向の指摘するように、明らかに作戦に対するサボタージュであり、敵前逃亡とも解釈される行動で、もし真相を司令部が知るところとなれば、ナス提督も日向も極めて厄介な立場に陥ることになる。

ただ二人は、極めて拙劣な作戦指導を前に、どうしても保険をかけておく必要を感じていた。

「作戦が失敗し、連合艦隊が壊滅した場合、外南洋戦線の一角は崩壊したと考えるべきだ。それでも我々が生き残り、空母翔鶴と護衛の駆逐艦達が無傷で作戦を終えられれば、とりあえずこの島とシユーズ・ベラ島の島民や軍関係者全員を避難させることは可能だ」

ナス提督はそう言いながら制服の袖をまくって腕時計を見た。

「さて、あと二時間半ほど時間を稼いだらゆつくり出港といこう。それまでには第一分隊による戦闘の帰趨が判明するだろう」

「ふむ、そうだな……。おや！」

日向はそう言いかけて虚空を見つめながら表情を険しくした。

「第三分隊から連合艦隊司令部に緊急電だ……」

ナス提督の表情も硬くなる。

「戦艦扶桑……、戦艦山城……、航行中に衝突し、戦闘能力を喪失……。至急、作戦計画の再考と対処を具申……。両艦とも、自力航行不能につき……。タロタロへ曳航せん……。第三分隊司令トビウメ アツオ……。君、大変なことになったぞ！」

日向が戦艦日向の長距離通信用空中線で拾った暗号通信を解読しつつ口にする、大体の事情を察したナス提督も顔色を変えてうなずく。

「戦艦二隻が衝突……。一体何が……。とにかく上へ上がろう」

二人が上甲板へ上がり、艦橋へと歩きながら陸の方を伺うと、やはり同じ通信を傍受したのか、港内の通信所あたりが騒がしくなっているようで、制服姿の要員が右往左往し始めた。

「ん！ 問宮が来るぞ」

日向が艦首の方へ首を向けると、給糧艦問宮が停泊している方向から内火艇が一艘近づいてくる。操舵輪を握っているのは艦娘の間宮だ。

「ナス提督、大変です！」

内火艇から甲板に上がってきた問宮は開口一番に先の通信受電の旨を伝えた。ナス提督はうなずきながら戦艦日向でも受信したことを伝え、士官室へ招いた。

三人は瀟洒な洋間の士官室のソファーに腰をおろした。気ぜわし

そんな間宮とは対照的に、ナス提督はどこか緊張が切れたような、リラックスした様子で海図をゆっくりと広げた。

「今頃、第三分隊はちようどこのあたり、速力十ノットも出れば日付の変わる前にここまで帰還できる距離だ。今頃、第四分隊がその後を追っているが、もしかすると洋上で合流するかもしれない。フルカワ司令長官代理は今後の作戦をどうするだろうね？」

「虎の子の主力戦艦二隻を失った。普通なら作戦中止、もしくは大幅に変更するべき事態だ」

日向がむつつりとした表情でそう断じた。間宮も同意とばかりにうなづく。

「そう。司令部がまともなら心配しない。でも、彼らは本当に『普通』だろうかね？」

ナス提督は自分の略帽を手でいじりながら、艦娘二人にそう問いかけた。

間宮は泣きそうな表情になる。しびれを切らした日向が強い口調でナス提督に言う。

「君、降って湧いた幸運をありがたがる気持ちはわからんでもない。だが、仮にも作戦が失敗しつつかある時に少し喜びすぎだぞ！ 特に艦を降りたら時には注意したほうがいい」

そう言う日向の言葉に、耐えきれなくなったナス提督が相好を崩す。

「いや私は別に喜ぶなんて……。間宮さん、自分はそんなに嬉しそうに見えますか？」

自分の頬に手をやりながらニヤニヤ顔で尋ねるナス提督を前に、間宮は困ったような笑顔を浮かべる。

「そうね……。心なしか、いつもよりもイキイキされているように見えますわ」

「それは、良くないですね……」

ナス提督は自分のあごをさすりながら芝居っ気たつぷりに神妙な表情をつくってみせる。

「まあ、真面目な話、まだ安心はできません。日向、あと二十分で出港

したい。出られるか？」

「ああ、十五分で出せる」

「よし。あと間宮さん、近場の敵潜水艦の様子はどうです？」

「複数の方角から味方のものではない近距離短波無線を複数回、受信しています。近海に敵潜水艦がいると考えるべきでしょう」

「わかりました。日向、沖合いの空母鳳翔に打電、第三分隊とタロタロを結ぶ航路上で対潜哨戒を厳とせよ、と。私は島の警備隊に駆潜艇や哨戒艇の出動を頼んでくる。戻り次第出よう」

「承知した」

三人は立ち上って動き出した。

「さて、少しでも損害を減らさないと……。忙しくなりますよ」

「そうですね。わたしも引き続き通信傍受を続けます。……。それにしても提督、やはり楽しそうに見えますわ」

ナス提督の言葉に、甲板を歩きながら間宮がからかうように言った。

「いやいや、山城と扶桑のおかげで、一筋の希望が見えてきただけですよ」

ナス提督はそう間宮に微笑んで、舷梯子を降りていった。それからきっかり十三分後、ナス提督を乗せた戦艦日向は錨を上げて機関全速でタロタロ泊地を出発した。

タロタロ泊地を出港して約二時間。連合艦隊司令部を伴った第四分隊はようやく輪形陣を組み、鈍足の輸送船五隻を護衛しつつ、速力十二ノットでブ島を目指していた。

第四分隊の主戦力である戦艦比叡の右舷後方に配置されたのは重巡足柄だった。前回の戦闘による損傷も完全に修理され、外から見ると船体は真新しい軍艦色のペンキ塗装によりピカピカの新造艦のように見える。

重巡足柄は今回、上陸支援の主力隊の一員に選ばれ、臨時で若い提督が座乗していた。急な編成割りで昨日突然決まったことで、艦娘の足柄がその提督と初めて顔を合わせたのは今朝のことだった。

その提督は作戦に関係ないことでも何かと足柄にいろいろ話しかける男だった。

「今度、本土にご一緒できたならば是非、金座通りにある洋食屋さんに行きませんか？ 五丁目においしいメンチボーを出す店があるんですよ、足柄さん？」

「へ？ ええ、そ、そうね。美味しいものなら何だって大歓迎よ、ええ……」

提督の話も上の空に、作戦のことを考えていた足柄は慌てて相槌を打った。

「いや、今回足柄さんと一緒に出撃できるって聞いて、やったぜって思ってたんですよ。ちゃっちゃと作戦片付けて、打ち上げに一杯行きましょうね！」

「そ、そうね……」

足柄は、笑顔でそう返答してからややもの憂いげな表情で海の彼方を見た。

——姉さん、どうしているかしら……。新しい艦隊でうまくやれているかしら？

足柄は遥か西方のメジロ泊地に転属になった那智のことを想った。

そんな時、突然足柄の長距離無線用の空中線が味方の遠距離通信を拾った。

「あ、今第一分隊が突入を開始したようね。いよいよね。深海軍にこの前の海戦のお礼をたっぷり返してやる番ね。燃えてきたわ！」

急に熱っぽくなった足柄に、若い提督少し面食らったようにうなずいた。

「そ、そうですね……。がんばりましょう」

「ええ、戦闘の指揮は任せたわ。わたしはあなたが命じたことを素早く確実に完遂してみせるから」

提督は無言でうなずくのみだ。軍令部の指示により連合艦隊司令部付きの参謀連中とともに急遽派遣されてきた提督の一人で、実のところ良い意味でも悪い意味でも艦娘にしか関心がなく、脳裏のほとんどは作戦後の足柄との逢引きや本土のメンチボーことで占められて

いた。それ故、今ひとつ足柄と会話が噛み合わない。提督のほうも、足柄が戦闘のことばかり熱っぽく語るので、少し戸惑っている様子だった。

足柄の空中線が遠く第三分隊の長距離通信を受電したのはそんな時だった。

「ええ、な、なによそれ……」

足柄は、トビウメ提督が発した戦艦二隻の衝突事故を告げる電文を受信し、思わずそう声を漏らす。足柄が見せた動揺の色を見て、提督も怪訝な顔をした。

「足柄さん、どうしたんですか？」

「大変……。たった今、第三分隊の戦艦山城と扶桑が衝突事故を起こして戦闘不能になったって……」

「はあ、マジですか……。第三分隊の主力じゃないですか！ どうなってんだよ」

提督も取り乱した様子で言った。

「今、連合艦隊に作戦再考を意見具申してるけど……。一体どうなるのかしら」

足柄はそう言って、左前方に小さく見える、戦艦比叡の前方を航行している旗艦の軽巡大淀の方を見た。不安に駆られたのか提督はなにやらゴニョゴニョと愚痴り始めたが、足柄の耳にほとんど届いていなかった。

——ちよつと、戦艦山城っていったらあいつが乗ってる艦じゃない。あの人、一体何やったのよ？ 姉さんが知ったらどんなに……。し、知らない！ 姉さんにあんなことした奴のことなんか、わたしには関係ないわ！ 関係ないんだから……

足柄は内心の動揺を抑えつつ、目の前の操艦と作戦のことだけ考えるように意識を向けるように努力したが、なかなか那智や第三分隊のことを完全に脳裏から追い出すことはできなかった。

第二次ブーメラン島沖海戦 5 / 「敢闘精神」

陸軍の輸送艦五隻を帯同した第四分隊の旗艦大淀の後部上部構造内に設けられた作戦室では、フルカワ司令長官代理を筆頭とした連合艦隊司令部の一団が苦い表情で海図を囲んでいた。

「第三分隊の戦艦は本作戦の要だ。何故こんなことに……」

トビウメ提督からの一報は当然、司令部に大きな衝撃を与えた。

「手負いでも構わん。突入させる方策はないのか！ 自力で動けなくとも、敵の真ん前まで引つ張っていけば、浮き砲台の役は果たせるだろう」

「状況はわかりませんが、そんなことが可能でしょうか？」

いらついでそう叫ぶフルカワに、艦娘の大淀が懸念の声を挟むが、その言葉に耳をかたむける者はいない。

「空母翔鶴から入電。第一次航空攻撃完了との報告！ 間もなく第一分隊が突入します！」

連絡要員がそう大声で報告した。

「長官代理、時間がありません。方針だけでも決めませんか」と

参謀の一人が言うので、別の参謀がいくつかの選択肢を上げた。

「第一は、ポート・フリスビー沖の敵艦隊撃滅を最優先に、全隊を至急ブ島北方へ展開させ第一、第二分隊を支援、陸軍部隊と船団を救出するものです。敵艦隊はいずれの方面でも当初の見立てよりも強大との報告があり、こちらの兵力集中には一定の合理性があります。ただこの場合、ヤシガニ海岸への逆上陸は不可能になります」

「では、今連れてる上陸部隊の船団はどうする？」

「上陸はできないのですぐにタロタロ泊地へ帰港させることになりません」

フルカワはうーんと唸り渋い顔をした。

「第二案は、すぐに第一、第二分隊に接敵中止を命じ、ブ島西岸を南下させ、島の西方に展開中の敵艦隊を側面から突き、それに呼応し第三分隊の残りの艦隊と我が第四分隊で敵艦隊を撃滅、陸軍を計画通り逆上陸させるものです。当然、第一案とは逆にポート・フリスビーの封

鎖解除と守備隊の救出はできなくなりますが、逆上陸してブ島の敵上陸部隊を撃滅、さらに洋上で敵艦隊を近海から一掃すれば、孤立していたブ島の守備隊自体も救うことになり、ブ島の占有権も失わずに済みます」

「え、それはちよつと……」

大淀は不安な面持ちで声を上げかけたが、それ以上の言葉を飲み込んだ。

「確かに積極的に魅力的な案だが……。ポート・フリスビー沖の敵をほったらかしというのはどうも……。軍令部の目にはどう映るだろうか……」

フルカワは少し表情を和らげつつも首をかしげた。

「この案では、第一、第二分隊を今から南下させて再配置する必要がありますが、これには十数時間かかります。その間に敵情も変化する可能性があり、敵艦隊と陸上部隊の双方を撃滅できなかった場合、守備隊の救出は今まで以上に困難なものとなります」

参謀一同も弱りきった様子で海図を見つめている。やりとりを聞いていた大淀は心中のもどかしさに耐えられなくなり、ついに勇気を出して胸につかえていた疑問を投げかけた。

「あの長官、守備隊の救出と新たな陸軍部隊の逆上陸、現時点でどちらを優先されますか？」

大淀の問いはその場の空気を一刀両断するだけの鋭さをもっていた。反発、もしくは困惑、さらには怒りの色が籠もった視線が一斉に大淀へ向けられた。ただ、それをあからさまに声に出すほど肝の据わった者もない。結局、口を開いたのは最高責任者のフルカワ長官代理だった。

「無論、現時点でどちらもないがしろにはできないし、するべきでもない。こんな状況でも作戦完遂のため方策を立てるのが我々の責務だ。大淀、我々だけで少し込み入った議論をするから、しばらく席をはずしてくれ」

フルカワはそう柔らかい口調で言うと、大淀に退室を促す。無論、大淀はそれに抗うことなどできず、はいとうなずいて会議室から出て

いった。

ドアが閉まりしばらくしてから、フルカワは手にしていた鉛筆を海図台に放り投げた。

「クソッ、あの役立たずのトビウメめ！ 前回、それなりに成果を上げたっていうんで、いざ会ってみれば、いまいちパツとしない奴だったから気に入らなかつたんだが……。まったく」

「あまり覇気を感じない人物でしたが、そもそもなぜ彼に第三分隊司令などという重役を任せたんですか？」

あまり軍令部の事情に明るくない外南洋戦線付きの参謀がフルカワに尋ねると、フルカワは椅子の背もたれに深くもたれかかってため息をついた。

「軍令部から、作戦に貢献した人物を重用しろという通達が来ていたし、広報部も常に、絵になる成功、勝利の物語を演出できる題材を欲しがっていてな……。今回なんか先の負け戦を挽回し完全勝利を遂げるのに最高の舞台だった。考えてもみたまえ。前は孤立した陸軍部隊と船団を助け出すだけの、戦略全体で考えればただの負け戦の後始末としか評価されない消極的なものだった。一方、今回は救出だけでなく、深海軍に奪われかかっているブ島を完全奪還するという極めて積極的な作戦だ。だから陸軍も本来ニューガリア戦線の増援として送られるはずだった部隊をこっちに回してきたんだ。前回、一番の手柄を立てた男を切り込み隊長にして作戦大成功となれば、軍令部としても大いにポイントを稼げるからな。それが全くこんなこと……」

フルカワは肩を落としてそう吐き捨てた。

別の作戦参謀は真剣な表情で口を開いた。

「問題はこれからどうするかです。今すぐ決めなければなりません。大淀の言うように、最低限の勝利を得るためには目的を絞る必要があります」

すぐに返事は出なかった。室内はしばし沈黙した。口を開いたのはフルカワの腹心の司令部要員だった。

「いや、むしろ選ばないほうが良いのでしょうか？ 我々に

とっていちばん重要なのは、実は結果でなく過程ではありませんか？
軍令部は常に我々の積極性や意欲、過程に評価の重きを置いているように思われます。無論、島の奪還や陸軍部隊の救出ができたなら、それに越したことはありませんが、今回このようなトラブルが起きてしまった以上、我々が今回のトラブルをどう乗り越え、意欲的に取り組んだかが評価されます」

一瞬、場が静かになった。

「確かに『敢闘精神』は重要です。困難を前にしても目標を下げずに向き合ったという実績は重要ですね」

別の一人の言葉にフルカワも大きくうなずいた。誰も口にこそ出さないが、この瞬間から連合艦隊司令部の最重要目標はブ島の陸軍救出でもなく、逆上陸の達成でもなくなつた。司令部要員達の腹は、この行き詰まった事態にどう見てくれの良い結末をつけるかに決まつた。

「私も賛成だ。目標は常に高く、ポジティブにこの難局に向き合うことが重要だ。そのためには作戦の中止はありえない。問題は、現状でどうベストを尽くせるか、だ」

全員が深くうなずいた。非常に薄っぺらいが、不用意に人間を悪ノリさせる嫌な高揚感と一体感が司令室を支配した。

「そこで第三の案です。やはり、第一、第二分隊にはポート・フリスビー沖合への断続的な攻撃を継続すべきです。一方、我々は陸軍の船団を分離し、第三分隊の残存部隊と合流、統合した戦力でブ島西方沖の敵艦隊主力の撃滅を図るべきです。とにかく試してみることです。力が及ばなかったらそれはそれです」

「島の北方でも、西方でも『我が方は戦力の限り敢闘した』と報告できますね」

参謀が口々に言った。

フルカワ連合艦隊司令長官代理は自分で放り投げた鉛筆を拾って海図を叩く。

「よし、ではどこで第三分隊と合流し、最新の敵情を踏まえて、艦隊決戦を仕掛けるポイントを詰めるでしょう」

会議室から退出を命じられた大淀は司令部施設の入っている後部上部構造物から出て甲板へと降りた。大淀は退出を命じられる前から会議室の空気に不安を抱き始めていた。脳裏には作戦会議後のカメヤマ提督との会話を思い出していた。

——『大淀ちゃんには体張って止めてもらわないと』

大淀は大勢いる個性豊かな艦娘のなかでも素直な性格の艦娘だ。軍司令部や連合艦隊司令部にも深い信頼を寄せているのだが、今回の作戦指導には兵棋演習の時から不安を抱くようになっていた。

——不合理なことや無茶なこと命じられたら、ちゃんと意見具申しないと。あの戦争の時のような事を繰り返すわけにはいかないんだから……

大淀はそう考え、気合を入れるために自分の頬を両手でばんぱんと叩いた。

「わたしが旗艦なんだからしつかりしないと」

大淀はそう言って、艦橋構造物へ向けて歩き出した。

軽巡大淀はその構造上、司令部施設から艦橋へ向かうには、一度露天甲板へ出る必要があった。甲板から見上げる空は薄曇りだ。生暖かい海風が大淀の長い黒髪を撫でた。海風に当たるのは嫌いではないのだが、今日は何故か不快に感じた。自分でも分からない妙な焦りと苛立ちが募る。

前の世界でのあの戦争では常に、「必勝」の期待感、高揚感に駆られて進軍し、決定的な大敗を喫してきた。大淀が戦闘詳報を読んだ限り、先の第一次ブ島沖海戦も同じ道をたどってしまった良い例に思えた。一方、今回はどうだろうか。カメヤマ提督が座乗する伊四〇一からの偵察情報によれば、どうやら敵は、こちらが当初想定していた兵力より一・五倍もしくは二倍近い戦力を擁していることが確認され、さらに頼みの綱だった主力戦艦二隻が戦闘開始前にすでに行動不能に陥っていた。この作戦は非常に危うい水域に入りつつあるのだ。

艦橋構造物の後部のバルコニーのようになっている旗甲板に登ったところで、大淀は陣形を組む僚艦がしきりに発光信号をよりにわか騒ぎ出した事に気がついた。先の第三分隊の事故の報に接した艦

が不安に駆られて騒ぎ出したのだ。

緊急電以外の無線は原則封鎖中なので電話は使えないなか、不自由な発光信号が乱舞し、その多くは旗艦である軽巡大淀向けにチカチカと殺到する。事務処理能力に長けた大淀も、一斉に浴びせられる信号には閉口した。

『大淀発全艦（段落）各位冷静二（段落）司令部八（段落）対応策ヲ（段落）検討中ナリ（段落）指示ヲ待テ』

大淀は信号灯でそう返信しつつ羅針艦橋内に戻ったところで、大淀宛に新たな長距離無電が届いた。第三分隊の重巡加古からトビウメ提督が発した、最新の状況報告だった。

『戦艦山城、並びニ扶桑ハ、自力航行困難ナリ。駆逐艦四隻ヲ以テ曳航シ、速ヤカニ、タロタロ泊地へ避退セントス。亦、小生ハ第三分隊司令ノ職ヲ辞シ、戦艦二隻ノ安全ナ回航ニ尽力セン。連合艦隊司令部ニオイテハ、作戦ヲ再考ノ上、至急新タナ指示ヲ発令サレタシ』

大淀は暗号電文を急ぎ翻訳し、電文用紙に鉛筆で書き留めるとため息をついた。いくら作戦は提督頼みとはいえ、これで味方の状況がかなり悪くなったことは大淀にも十分理解できる。友軍の救出は最重要目標故に島の奪還の方はあきらめざるをえないだろう。

大淀は急ぎ足で後部艦上構造物へ戻り、司令部会議室のドアをノックした。

「大淀です。入電です」

入れとの返事があり、大淀は扉を開けて踵をそろえる。

「第三分隊のトビウメ司令より緊急電！」

そうやって大淀は電文を読み上げてからフルカワに電文用紙を渡した。

フルカワは電文を一瞥し、少しだけ不機嫌そうな顔でフンつと鼻で笑う。

「往生際だけは良いやつだ。どちらにせよトビウメは更迭だ。現時点をもって第三分隊の指揮権を剥奪し、そうだな、交代には……誰がいいか？」

「重巡三隈に乗艦しているアリスガワ提督はどうでしょう？ 経験も

豊かですし、軍令部の意向にもよく通じています」

行政参謀の一人がフルカワの言葉を受けて推挙した。フルカワはうなずいて、大淀に告げる。

「今後、第三分隊の指揮はアリスガワ提督に任せる。それと、山城と扶桑の曳航に駆逐艦四隻は多すぎる。その分戦力が減るからな。各艦に一隻で計二隻まで認めると伝えろ」

「お待ちください長官。扶桑も山城も排水量約四万トン的大型戦艦です。駆逐艦一隻では牽引力が足らず、無事に基地まで曳航できません」

さすがに面食らった大淀が異議を唱えた。

「駆逐艦一隻では厳しいと思われます。戦艦二隻の保全のためにも、やむをえんでしよう」

幸い司令部付きの企画参謀が大淀に同調したので、フルカワは舌打ちして言った

「くそ……。仕方あるまい。ただし護衛はつけられんぞ」

「はい、了解しました……」

航行できない戦艦とそれを曳航中の駆逐艦など、潜水艦の格好の餌食になってしまう。大淀はなんとか護衛をつけてほしいと思ったが、やむなく承知した。

「それから、各分隊および我が分隊各艦に伝達。『戦力損耗せるも必勝の信念の元、当初の戦略目標を達成せんとするため、第三分隊残存兵力は当第四分隊と洋上にて合流し、速やかにブ島西方沖へ突入、艦隊決戦の後、ブ島西岸に殺到し敵上陸部隊を艦砲射撃により撃滅せん」とす。第一、第二分隊は引き続き航空支援のもと北方の封鎖艦隊に攻撃を続行し、味方船団を救出せよ』。以上だ」

フルカワはそう宣言し、大淀に命令伝達を命じた。さすがに従順な大淀もこれには食い下がった。

「お待ちください、長官。それでは作戦にほとんど変更がみられませんが。それに、当第四分隊は低速の輸送船を抱えています。敵に素早く接近するのは困難です」

「我々は作戦の達成目標を下げるような真似はしない。力の限り、ブ

島奪還と友軍救援を完遂するつもりだ。無論、陸軍の輸送船を抱えての艦隊決戦など無理だ。輸送船は分隊から分離し、我々は速力を上げて第三分隊と合流のうえ、敵の主力艦隊を全力で叩く。我々にはまだ戦艦比叡がいるし、北方の第一、第二分隊と呼応し同時に襲撃すれば、敵は兵力の分散を余儀なくされる。勝機は十分にある」

大淀は目を丸くして口をあけた。驚きの余り、すぐに言葉が出てこなかった。

「ま、待ってください！ 兵員を満載した丸腰の輸送船を、敵艦隊が近くにいるのに海上に放置して進撃するというのですか？ そんなことをしては深海軍のかっこうの標的になってしまいます！ それにこの海域には多数の敵潜水艦の存在が確認されています。危険すぎます！」

声を大きくしてそう訴える大淀をフルカワは落ち着いた口調でなだめる。

「そう興奮するな。無論ただで置いていくわけじゃない。すぐにタロタロ泊地に連絡し港湾防衛用の駆潜艇を派遣させる。戦艦日向もおっとり出港するし、扶桑と山城を送り届けた駆逐艦を全力で急行させれば、無防備でいる時間はそう長くはない。大淀、これには友軍の命がかかっているんだ。定石通り作戦では到底敵を打ち破ることはできんぞ。危ないのはみんな一緒なんだ。わかるね？」

大淀はぐつと言葉をこらえた。こういう言われ方をすると素直で真面目な大淀は弱い。フルカワが屁理屈をこねているのは本能的には判っているものの、上官に抵抗し言い負かすだけの胆力は持っていない。

——きつと明石が見ていたら『ちよろすぎる』って怒るかしら……大淀は観念してうなずいた。

「承知しました。すぐに全隊へ連絡します……」

間もなく軽巡大淀から各艦、各分隊へ長距離通信で命令が発せられ、その二十分後、第四分隊は陸軍の輸送船五隻をその場に残し、速力二十ノットに増速し第三分隊の後を追った。

同じ頃、第三分隊のトビウメ提督と不知火は重巡加古の前部甲板

で、同じ分隊として同行していた提督らが内火艇から舷梯子を登ってくるのを出迎えた。提督一同はいずれも困惑の表情を浮かべている。

一方出迎えたトビウメ提督は、スラックスの両膝にはラツタルにぶつけたときの出血で赤い染みが浮かび、白いシャツも茶色や黒のオイル染みで汚れ、文字通りズタボロだった。そしてなにより、提督も不知火も頭からオイルと海水をかぶってずぶ濡れだった。

事故後の三十分間、トビウメ提督と不知火は地獄のような忙しさと混乱に襲われた。二人は分隊の僚艦に事故を伝えるとともに、艦の存続のためまさに人力で最低限の応急対策に奔走させられた。

山城の後部は扶桑の船首に切り裂かれるように潰れ、そこから猛烈な浸水が起こっていた。幸い戦闘態勢にあったため主要な防水隔壁は事前に閉めてあったのだが、本来なら使えるはずの排水ポンプや見えない妖精さんによる浸水区画の閉鎖作業のなどは、山城が正気を失ったため一切働かなくなり、トビウメ提督と不知火は下甲板で押し寄せる海水に抗して閉められるだけの防水扉を閉めて回ったのだ。

当然、提督も不知火も、他人の艦であるこの戦艦の内部事情に詳しいわけではない。本来千人以上の水兵が乗務する艦のダメージコントロールを素人同然の二人やりとげるのはそもそも無理な相談だった。実際、艦娘が管制能力を失ってしまった状態の艦をまともに動かすのは、熟練水兵が定員乗り込んで対応しても無理と言われている。

ただ幸運だったのは、深刻な浸水は後部にとどまっており、それより前の区画への浸水はスピードが遅く、現状のままならば短時間に急な転覆や沈没はしそうなまいと云うのが不知火の艦娘としての見立てだった。

山城と扶桑が漂流状態にあるなか、随伴艦は不規則な円陣を組んで潜水艦やその他の脅威に備える必要があった。不知火の練度は高かったのが自分が乗艦せずとも駆逐艦不知火を戦艦の周囲で周回させておくことはできたが、注意も見張りもおろそかになるので、作業中に不安がなかったと言えれば嘘になる。

トビウメ提督と不知火は山城での作業を終えると、内火艇ですぐに

扶桑に乗り移り、羅針艦橋上の艦娘の扶桑の様子を確認に行った。艦橋にいた扶桑は衝突の際に頭を羅針儀にぶつけたようで、額から一筋赤い血を流しながら、籐を編んだ敷物の上に仰向けに倒れていた。二人が慌てて駆け寄ってみると、扶桑は穏やかな表情で天井を見上げながらぶつぶつうわ言を言っている。

「山城……。急ブレーキは危ないわ……。後続車に知らせながら三回に分けてゆつくり踏むのよ……」

不知火はげんなりした表情で舌打ちしようと思ったがなんとか我慢した。一方で、額から血を流しながら天井に儂げに微笑む姿は、場違いな麗しさも醸し出していた。不知火はこんな緊急事態にそんな醒めた事を考えている自分の頭も少しおかしくなったのではと心配になった。

一方そんな余裕など持ち合わせていないトビウメ提督は血相欠いて扶桑の肩をゆすって起こそうとした。

「扶桑さん、しっかりしてください。助けにきましたよ！」

「司令、いけません！今はそつとしておいた方がいいでしょう。見てください。頭に付いている艦橋の艤装もひん曲がっているので、おそらく無理かと……」

「そんな……」

艦娘の扶桑も人事不省になったということは、この艦も管制・航行能力を完全に失っているということだ。不知火は旗甲板へ出て後部の二基の煙突を見上げた。細々とした煙がちよろちよろ立ち上っているだけだ。

艦橋に戻ってきた不知火は首を振った。

「機関も止まっています。ダメですね」

トビウメ提督は絶望感に満ちたため息をつくとき、不知火とともに艦首のある前部区画へと下りていく。

扶桑の艦首はぐしやりと潰れていたが、幸いなことに浸水は山城に比べ遥かに軽微で、浸水している区画も狭い範囲で済み、なんとか防水扉を閉鎖して応急処置を終えた。二人はふらふらになりながら、内火艇に乗って艦隊のなかで、戦艦に次いで長距離通信能力に優れてい

る重巡の加古へとやってきたのだ。

トビウメ提督は、加古に命じて事故の第一報を連合艦隊司令部へ打電し、同じ分隊で同行している提督達を呼び寄せ、事故に至るまでの経緯と現在の厳しい状況をとつとつと、でも精一杯わかりやすく説明した。また自分は分隊の指揮権を返上し、山城と扶桑を何とか帰還させる作業にはいりたいと希望を伝えた。

提督連中はあまりにもくだらない事故原因に驚くとともに、落胆や失望の色を露わにしたが、トビウメ提督の進言を受け入れるしかなかった。

後任の分隊司令は、艦隊指揮経験が豊かで連合艦隊司令部の事情にも通じている、重巡三隈に乗艦しているアリスガワ提督が務めることになった。

アリスガワ提督は、染み一つない第二種軍装をまとい、精悍な面もちの提督で、学業にも運動にも秀でていそうな男で、人のあしらい方もトビウメ提督よりはるかに上手に見えた。

そんなアリスガワ提督が一点だけ難色を示したのが、航行不能の戦艦二隻をどの艦が曳航していくかという問題だった。

トビウメ提督が、駆逐艦不知火と荒潮で山城を、重巡加古で扶桑を曳航していくと伝えると、アリスガワ提督は首を傾げて言った。

「分隊からそんなに戦力が流出してしまうのはどうでしょう？ 特に重巡がいなくなるのはきつい。それでなくても戦艦がまとめて脱落するので、少しでも火力の高い艦を残さないといけませんよ。戦艦一隻の牽引に駆逐艦一隻ずつでは足りませんか？」

トビウメ提督は不知火に顔を向ける。

「原理的には不可能ではありません。ただ、実質五ノツトも出ないので、護衛がない状況下では、ほぼ確実に潜水艦の襲撃を受けると思われます」

トビウメ提督はうなずいて、他の提督たちへ向かってはつきりとした口調で言った。

「とにかく、扶桑、山城の喪失を防ぐことを最優先に考えるべきではないでしょうか。それには最低でも自分のところの艦のほか、最低でも

重巡1隻、もしくは軽巡か駆逐艦二隻が必要です」

他の提督たちは顔を見合わせる。言葉にこそ出さないが、暗に「俺の艦隊からは嫌だよ」と言っているのだ。

しばらく沈黙が続いた。業を煮やしたのか、軽巡多摩に乗っている第三種軍装を着た肩幅の広い大柄な提督があきらめたように言った。

「しよーがないから、うちから一隻出そう。もう一隻は別の人に頼みたいな」

「攻撃力の高い新鋭艦以外から頼みますよ」

アリスガワ提督の言葉に第三種軍装の提督がうなづく

「分かってる。主力オブ主力以外からな……。そうだな……。うちからは朝風を出そう。とにかくこうるさい艦だけど、役には立つから我慢してくれ」

アリスガワ提督は他の提督へ顔を向けるが残りの提督らは視線を逸らして知らんぷりを決め込む。埒があかないのでアリスガワ提督が観念してため息をついた。

「仕方ないので、うちから一隻出します。特型の初雪をつけます」

トビウメ提督は二人に深々と頭を下げて礼を言った。だがトビウメ提督と不知火の本当の苦労はこれからだった……。

「ちよつと！ 艦娘が機能しないと、どういうこと！ 信じられないんだけど！」「帰りたい……」

トビウメ提督と四人の駆逐艦娘、それに手伝いを買って出た加古を待っていたのは、マンパワーだけで曳航索で戦艦としっかりつなぐという重労働だった。曳航索は、重量数万トンの巨大な船を引っ張れるだけの強度が必要なので、直径が二〜三十センチ近い太さがあり、相当な重さがある。怪力の持ち主である艦娘にも、艦の妖精に頼らずにそれを船にしつかり固定するのは楽な作業ではなかった。

とにかく管制能力を失った二隻の戦艦に、それぞれ駆逐艦からのはしてきた索を所定のフェアリーダー（甲板の端についている、ロープを通す金具）をくぐらせてから甲板中央にある一対の金具、センサーボラードに正しく巻き付けなければいけない。

「艦娘が前後不覚とか意味わかんない！　なんでわたしがこんな作業しなくちゃいけないのよ！　あくイライラする！」

駆逐艦娘の朝風は忌々しそうに愚痴りながら重い索を引っ張る。和服に袴姿の朝風はわざわざたすきをかけて着物の袖をつめ、袴の裾を帯で巻いてもんぺのようにして作業にあたっている。テキパキ動くものの、朝風の文句は周囲を辟易させた。

「もう疲れた……。帰りたい……」

一方の初雪は口数こそ少ないものの、動きはだらだらしていてもまったく作業がはかどらない。

「何が、帰りたい、よ！　これから帰るんだから、文句言ってんじやないの！　さつさと手を動かしなさいよ！」

「ううう。朝風、怖い……」

誰が意図した結果でもないが、相性は最悪な組み合わせだった。

「ねえ、わたし神戸生まれだから、こういう荒っぽい作業は苦手なんだけども」

荒潮も重いロープを引っ張りながら不平を漏らす、すかさず不知火が言い返す。

「そうですか。でしたら加古さんと交代して、お一人で分隊についていかれたらいかがでしょう。加古さんも神戸生まれですが、どこぞの朝潮型よりは寝坊助のほうがましというもの」

「あら、ぬいぬい、今日は随分と、言・う・じや・な・い・？」

お互い気が立っているのか、目尻を吊り上げてにらみ合う。

「二人ともそこまで！　無事に帰えれたら、四人にアイスおごるから今は作業。とにかく作業……。もちろん加古にも、作戦が終わったらね。そのためにも早く帰らないと」

提督があわててなだめ、海水を吸って重くなったロープを必死で引っ張った。

その後、四苦八苦しつても艦娘と提督の六人は一時間かけて戦艦二隻に曳航索を結びつけて、帰港への準備をなんとか完了した。

いよいよ別れ際となったとき、アリスガワ提督が連合艦隊司令部からの受信した電文をトビウメ提督に伝えた。

「ええ、作戦続行！ そんな無理だよ……」

自分が分隊司令を更迭されることは予想済みで、何ら驚くことはなかったが、司令部が現有戦力でまだ敵中に突入しようとしていることには驚愕した。

「あの、アリスガワ提督はこの判断が正しいとお思いですか？」

「返答する立場にありません。司令部なりに熟慮した結果でしょう。それに、嫌な言い方になりますが、もはやトビウメ提督が憂慮することではないかと……」

アリスガワ提督は木で鼻をくくったように返答するのみだ。トビウメ提督は、相手が司令部のメンバーとも近いベテラン提督であることを思い出し、口をつぐんだ。

——そう。僕にはもう、何も言う資格はない

トビウメ提督は最後に、自分の艦隊から唯一作戦を続行する加古に声をかけた。

「こんなことになっちゃってごめん。作戦がどうなるかわからないけど、なんとしても無事に帰ってきてよ」

「うん、あたしは大丈夫。ちゃんと両目バッチシ開けて戦うから、提督も無事に山城達を連れ帰ってね。そんな顔しないで、いざとなったら逃げるから大丈夫だって」

加古は冗談めかして言うのと提督の肩をたたく。

ようやく駆逐艦不知火と荒潮が戦艦山城を、また朝風と初雪が戦艦扶桑をそれぞれV字に曳航索を張って牽引し始めた。巨大戦艦を駆逐艦二隻で曳いても速力は五ノットをちよつと上回る程度しかでない。

「各艦、対潜警戒を厳重に。潜望鏡の露頂に注意して」

駆逐艦不知火の羅針艦橋でトビウメ提督が言った言葉を不知火は残りの三隻に発光信号で伝えてタロタロ島へと帰還をはじめた。

一方、それまで戦艦の周囲をぐるぐる回って警戒していた第三分隊の僚艦たちは陣形を組み直し、第四分隊との合流地点を目指して高速でその海域を後にした。

トビウメ提督は油と海水で汚れた第二種軍装から開襟シャツの防

暑衣に着替え、双眼鏡を手に艦橋の天井にあがって周囲の海面に目を走らせた。とにかく、今は潜水艦の襲撃だけが心配だった。第三分隊の方角を振り返ると、すでに艦隊の影は見えなくなっていた。右舷すぐ近くでは駆逐艦荒潮も同じ速度で戦艦山城を引っ張っており、山城は右後ろに見える。またずつと後方には朝風の艦影が見えたが、並んで走る初雪の姿は、山城の陰に隠れて見えなかった。

戦艦山城の損傷箇所は艦尾だったため、その場所に水圧の負担がかかって浸水が加速しないよう、通常通り艦首を前に曳航しているが、扶桑は艦首が潰れているため曳航索を艦尾にくくりつけ、後ろ向きに引っ張ることになった。当然抵抗も増えるので、速力も落ちる。トビウメ提督達は後方のスピードにあわせさらにてゆっくり進む必要があった。

不知火が天井に上がってきた。

「暗くなる前に帰れるかな?」

風音に負けないよう提督が大声で聞く。不知火は首を振った。

「無理でしょう。この調子では明日の未明になりそうです」

「もつと近づけば基地から駆潜艇とタグボートが応援にくる。それまで守り抜かないと」

そのとき、不知火が上空を指さした。薄雲の向こうに米粒のような飛行機の影が見える。

まさか敵機襲来とばかりにトビウメ提督は双眼鏡越しに見上げるが、それは日の丸をつけた複葉機だった。

「味方の偵察機ですね。対潜爆弾を積んでいるようです」

「よかった、これで明るいうちは少し安心できるね」

トビウメ提督は双眼鏡をおろしながらつぶやいた。

——起こってしまったことは仕方ない。これ以上損害を広げないようにしないと。

長い夜になりそうだった。

第二次ブーメラン島沖海戦 6／通信室

メジロ泊地にて。時間は作戦開始時刻までさかのぼる。

朝食を終えた那智は、マツエダ艦隊の新人として、その日もいつもどおり提督執務室で秘書艦の高雄と机を並べ、艦隊の事務作業を補助する業務についた。

商船や漁船からもたらされた近海での深海棲艦の目撃情報の整理や分析、新しい哨戒航路の検討などに取り組んでいたら、あつという間に昼になった。

「那智さんと一緒に仕事をすると本当にお仕事がはかどります。この泊地の秘書艦だって十分お任せできますよ」

「いや…… そんなことはない」

那智はバツが悪そうに首を振った。

「いつも高雄ちゃん一人で、大変だったから、那智君のおかげで少し楽ができそうだね」

執務机の向こうからマツエダ提督もうなずく。那智は恐縮するばかりだが、隣の高雄はなぜか再び理由のわからない不安に襲われた。那智はデスクワークでも、妙高とおなじくとても有能で、高雄の負担もかなり軽減するので、那智と仕事をするのは喜ばしいことなのだが、高雄は不意に理由のわからない居心地の悪さに襲われた。とにかく、高雄は自分の妙な感情を提督や那智に見せないよう、精一杯笑顔を浮かべて不安な気持ちを通り過ぎるのを待った。

午前中の執務時間に三度ほど、通信室当番だった衣笠が電文をもつて執務室へやってきた。果たしてそれは、今まさに繰り広げられているブ島沖の戦況を伝えるものだろう……。電文が届く度、そんな思いが那智の脳裏に浮かんできたが、自分は今新しい艦隊の一員として業務に集中すべきと自分に言い聞かせ、そんな雑念を振り払った。

それでも途中、マツエダ提督は一度、業務の書類の束に衣笠の持ってきた電文用紙を紛れ込ませ、さりげなく那智へと渡した。

書類の間に電文が挟まっていたので、那智は驚いてマツエダ提督を見ると、提督は軽くうなずいてみせる。那智はそんな配慮をありがた

く思う一方で、恐縮するばかりだ。電文は、空母翔鶴からで、第一撃をかける航空隊が発艦したことを司令部へ告げるものだった。大勢が決するにはまだまだ時間がかかる。

提督や高雄らと執務室で昼食をとると、那智はしばらく自由時間になった。マツエダ提督から頼まれ、夕方から駆逐艦娘らに魚雷戦の戦法について教導するよう頼まれており、それまでは自由時間だった。

那智は普段通り、内火艇で自分の艦に戻り、整備状況のチェックや機器の動作確認を済ませてから、艦橋構造物内の通信室で、はるか遠い海域で進行中の海戦の模様を探ろうと遠距離短波通信機のヘッドフォンを耳に当てた。理屈の上では、短波通信は大気の電離層と地表で反射を繰り返しながら遠へ電波が届くことになっているが、大気や太陽の影響で超遠距離での受信状態は日によって大きく異なる。特に艦船の受信設備は陸上の無線基地に比べ小規模にならざるをえなため、いくら機器や空中線の手入れに心を砕いても、通信環境は万全とはいえなかった。

空中線はいくつかの通信を傍受していたが、ブ島沖の戦闘の状況を伝えるものは入ってこない。

「まったく、こっちの世界でも電子機器だけはうまく行かないな……」
那智は誰にともなくそうつぶやき、通信室を出て旗甲板へやってきた。陸には栈橋に係留された駆逐艦の向こうにメジロ泊地の司令部庁舎が見え、その奥に高さ四十メートルはあろうかという鉄骨の電波塔がそそり立っている。那智は腕時計を見た。

——まだ時間はあるか……

那智は再び内火艇に乗って島に戻り、基地の通信施設がある司令部庁舎の裏手へと足を向けた。

基地の主通信室は司令部庁舎とトタン屋根で覆われた渡り廊下でつながっているカマボコ型の倉庫のような建物で電波塔のすぐ隣に建っていた。二十四時間、常に当直の通信士や当番の艦娘が詰めていて、急にもたらされるかもしれない通信に備えていた。

掘っ建て小屋のような通信室にも空調設備が備わっており、近づく
と室外機がゴウゴウと低い音を立てていることに那智は驚かされた。

那智は所在なく、渡り廊下の屋根を支えている柱に寄りかかって腕を組んだ。そばには誰もいないし、何か急な知らせがあれば、必ず誰かが電文用紙をもって飛び出してくるはずだ。

渡り廊下で日差しを避けつつ、しばらくそうしていると、基地の庁舎のほうからマツエダ提督が高雄を伴って庁舎から渡り廊下を歩いてくるのが見えた。

「しまった……」

那智は慌ててどこか身を隠せるところをさがす。あからさまに通信室の前をぶらついて、戦況を気にしている様を見せるのは、マツエダ提督に対しあまりに失礼に思えた。

——いったん通信室の裏に隠れ、さも偶然と通りかかった風にていくことにしよう

那智は急いで通信室へと近づいたとき、間の悪いことに、当番の鬼怒が電文用紙を手に通信室から出てきた。

「あれれ、那智さん。こんな所でどうしたの？」

「うえ、いや、その、わたしはただ……」

ドアを開けたら那智と鉢合わせしたので鬼怒がたずねる。突然のことに、那智は視線をさまよわせながら、しどろもどろに答えるのみだ。

「あら、那智さん」

「あ……」

高雄の声に那智は固まる。通信室前にやってきた高雄とマツエダ提督にも見つかかり、那智は立ち尽くした。

鬼怒は提督達に気づいて電文用紙を差し出した。

「ちようど今持って行こうとしたんだ。そしたら那智さんもいたから」

マツエダ提督は無言でうなづいて用紙を受け取る。提督は電文を読んでから那智へ差し出した。

「連合艦隊の第四分隊、タロタロ泊地を出撃したようだ」

「お気遣いに感謝する……」

那智は恥入りながらも用紙を受け取り、食い入るように電文を読む

だ。

「山城君やトビウメ提督らの第三分隊に関する電文はまだ入っていない」

マツエダ提督の言葉に那智は無言でうなずいた。

マツエダ提督は那智と鬼怒を交互に見てから聞いた。

「鬼怒君、無線当番は何時まで？」

「え？ わたしはあと三十分ちよつとかな」

「次の当番は誰？」

「次は清霜ちゃんだよ」

そうかとうなずき、マツエダ提督は眼鏡をかけなおしてから那智に言った。

「もし那智君さえよかったら、夕方のレクチャーまでの時間、通信当番をやってみないか。通常業務に支障のない範囲で、作戦中は自由時間はいつでも通信室に詰めてもらってもかまわない。どうだろう？」

那智、そして、かたわらにいた高雄も驚いた表情で顔を上げた。

「わたしは決してそのようなつもりでは……」

那智はそう口にしたものの、あまり説得力のある返答ではない。

「前の艦隊の仲間のことか気になるのは人情だ。遠慮しないで」

「……すまない、心から感謝する」

那智は恥ずかしさを感じつつも、提督の配慮に感謝した。

「提督は本当にお優しい方。わたし、本当に提督がこの泊地に来てくださって良かったって思っているんですよ」

通信室から引き返しながら歩く提督に高雄は少し顔を赤くしながら言った。

「何、急に……。やめてよ、高雄ちゃん。恥ずかしいな……」

マツエダ提督は照れ笑いしながら首を振る。

「だって那智君の立場なら、気が気じゃないでしょう？」

そう言いながらマツエダ提督は足早に執務室へと歩いていく。

「はい、そうですよね！」

高雄も笑顔でそう答え、提督の背中を追った。

だが高雄は急に、前触れも、脈略もなく、不思議な疑念に襲われた。

それは「女の勘」とでも言わないと説明できない、理屈に合わない感情だった。

——提督、なぜか那智さんには特に、いつも以上に優しい……。

ふとそこまで考えて、高雄はそんなことを考えること自体が、提督にも那智にも失礼なことだと思ひ至り、慌てて頭を振って自分の馬鹿げた考えを脳裏から追い出そうとした。

「高雄ちゃん？」

しばらく先まで歩いてきたマツエダ提督が不思議そうに振り返った。高雄は自分が呆然と立ち尽くしていた事に気が付いた。

「大丈夫？」

「え？ は、はい、わたしもちよつと妹の摩耶のことを考えていて。あの子も作戦に参加しているので、今頃どうしているのかと……」

とつさに嘘が口をついて出た。

「そうだったね。確か第四分隊だったよね。高雄ちゃんにもすぐに戦況を知らせるようにするよ」

マツエダ提督はそう言つて歩き出した。

——提督はいつも通り。変なことを考えちゃだめよ

高雄は自分にそう言い聞かせながら提督の後を追った。

一方、那智は高雄の懊悩など露も知らず、通信室の一角でヘッドホンを装着し、短波無線を中心に長距離無線のモールス信号に聞き耳を立てていた。まるで巨大なタンク、もしくはオーディオセットのような、メーターとダイヤル、スイッチが無数に付いた箱状の機械に向かつて通信士が一行に座り、ヘッドホンを耳に当てて島へ向けて飛んでくる通信に耳を澄ませている。那智は列の後ろに置かれた事務机に陣取って、無線機から延びたヘッドホンをかけて通信を待ちかまえた。机の引き出しには鉛筆と受信した電文を書き込む用紙が入っていた。那智は鉛筆を一本、鉛筆削りでとんがらせながらあらゆる無電の音に注意を払う。

ありとあらゆる通信が島の上空を飛び交っている。高出力で明瞭なものもあれば、そうでないものもある。そのほとんどはこの泊地にも、ましてや今展開中の外南洋の戦闘にも関わりのないものだった。

しばらくしてメジロ泊地宛の簡単な通信が本土とローリー泊地から相次いで届いた。那智は通信士に自分が清書を請け負うと言って、受信した通信をすぐに暗号から平文に訳す。機密度の低い業務連絡用の通信で、本土からは再来月の補給申請の承認を伝えるもの、ローリー泊地からは定期飛行艇の飛来が悪天候により2日遅れるとの知らせだった。那智は通信用紙に鉛筆で訳を走り書きして席を立った。「わたしは提督にこれを届けてくる」

通信士の一人がうなずいた。那智が通信室から出ようとしたとき、列の右端に座っていた通信士が急に鉛筆で通信を書き写しながら那智を呼び止めた。

「那智さん！　今、連合艦隊の第三分隊発の暗号電文を受信しています！」

「何！」

那智はすぐに机にとってかえし、ヘッドホンを耳に押し当てる。通信電波は微弱で、聞き取りづらかった。通信士はひとしきり鉛筆で通信文を書き殴ると、それをすぐにチームの暗号士に渡す。一方、途中から通信を聞いて書き取っていた那智も自分ですぐに翻訳を始める。自分の艦の通信設備で受信したものならば即座に解読できるのだが、自分の支配下にはない機材で受信した暗号ではそうもいかない。

だが、那智は電文の途中から通信を訳していくにつれて、顔から血の気が引いていく。

——しよ、衝突事故だと？　何故、そんな……

五く六分後、暗号士が痛ましい表情を浮かべて、額から冷や汗を垂らす那智に翻訳電文を無言で差し出した。発信元は重巡加古。その時点で分隊旗艦の戦艦山城が酷い状況に陥ったと予想できた。

「続けての電文や連合艦隊司令部からの返電はまだないか？」

「今はそれだけです」

那智は通信士にそう確認してから三通の電文を手に通信室を出た。ドアを開けるとモワットとした熱帯特有のからみつく熱気に襲われた。那智は思わず目眩を感じて渡り廊下の柱に寄りかかった。目を閉じて額に手をやり気分を落ち着かせる。海は広しいえど、軍艦も衝突

事故とは無縁ではない。実際、前世では重巡那智も作戦中に衝突事故を起こす不名誉な艦歴があった。また演習中でも衝突事故はたびたび発生している。ただ、トビウメ提督率いる第三分隊に何があったのか、那智には全く想像が付かなかった。現在地報告では、まだ接敵するほどブ島に近づいているわけでもなかったのだ、之字運動中の操舵ミス、もしくは不意に敵潜水艦による魚雷攻撃を受け回避運動中に衝突した事などが考えられた。那智は脂汗を浮かべつつも自分で頬を叩いて気合いを入れ直した。

「落ち着け。こんな事で動揺してられないぞ……」

那智は姿勢を正すと足早に提督執務室へ歩き出した。

「山城と扶桑が衝突とは……」

執務室で電文用紙に目を通したマツエダ提督は啞然とした表情でその言葉を詰まらせ、傍らの高雄へ電文を渡す。

「両艦とも航行不能なんて……。山城さん達は作戦の最重要戦力なのに……」

高雄も思わず口を手で押さえて言葉を呑む。

動揺を隠さない二人とは対照的に、那智は険しい表情のまま無言で直立し提督の指示を待つ。

「まだ何もわからないから、引き続き、通信から情報を収集して伝えてほしい」

「承知した」

那智は硬い表情で敬礼して退出しようとするところを高雄が呼び止める。

「そろそろ駆逐艦の子達向けに魚雷戦の講義のお時間ですが……。どうしましょうか？」

「あ、そうか……。那智君、講義は無理に今日でなくても構わない。引き続き通信室に詰めていても構わないが」

マツエダ提督も忘れていたとばかりにそう言った。一方、那智は高雄の言葉にはっとして、執務室の柱時計に目をやる。自分としたことが、マツエダ提督らの好意に甘え、すっかりこの艦隊での自分の本分を忘れていた。那智は慌てて首を振る。

「いや、そのことは予定通り、しつかり務めるつもりだ。お気遣いには感謝するが、自分の仕事はきちんとして務めたい」

「那智さん、そんな堅く考えなくていいんですよ?」

高雄がそうフォローするが、那智の意志は変わらない。提督も延期を勧めたが、結局那智は首を縦にふらなかつたので、二人ともあきらめて予定通り駆逐艦娘達と鬼怒を会議室に集めることになった。

那智は、教本を取りに戻ると言つて自室に戻ると、ベッドに力なく腰を下ろし両手で頭を抱える。

——わたしに何かできることはなかつたのだろうか?

那智はそう問いかけてみたが、すぐにそれが愚問だと気づく。

「何をバカなことを……。わたしは暇を出された艦だぞ」

那智は勢いよく立ち上がると、姿見の前でもう一度自分の顔や髪、身だしなみを今一度整えた。姿見に映るのは表情は少しやつれ、目は充血していたが、それ以外はいつも通りの一分の隙もない、いつもの那智だ。連合艦隊も、第三分隊も、戦艦山城も今の自分には何の関係もない。あつてはいけない。少なくとも講義をしている一時間ちよつとの間はそうでなくてはいけない。那智は姿見の自分を一度、厳しい表情でにらみつけてから教本を抱えて自室を後にした。

会議室の黒板を前に、那智が駆逐艦娘らを集めて魚雷戦の戦法について講義を始めたのは夕方、五時を少しまわつてからだつた。会議室には様子見にきたマツエダ提督と高雄もやってきて、最後尾の席から聴講していた。

那智による講義は、やや堅苦しいものだったが、先ほどの動揺などなかつたかのようにスムーズで簡潔、要点をとらえたわかりやすいものだった。

「そういうわけで、酸素魚雷の効果を最大限に発揮させるには、諸元よりもはるかに敵の近くまで肉薄する事が大切だ。長射程を頼みに遠距離から魚雷を放つてもまず命中は望めない。それは砲戦にも通ずることだ。かくいうわたしも、かつてスラバヤ沖では遠距離で主砲を乱発してばかりで、いたずらに弾薬を浪費した過去がある。皆もそのことを頭の隅に置いて実戦に臨んでほしい」

那智はそう言って、一時間少々の講義を終えた。

講義中、二度ほど無線係だった衣笠が静かに入ってきてマツエダ提督に最新の傍受電文を手渡すことがあったが、那智はこちらには一瞥もくれず講義に集中していた。

「那智さん、みんな、お疲れさま。もうすぐ夕飯の時間よ」

講義が終わると高雄が言った。駆逐艦娘たちは、小さく歓声を上げてそれぞれ会議室を出ていく。

「那智君、ご苦勞様。実体験もいろいろ聞かせてもらって、門外漢の私にもわかりやすかったよ。駆逐艦達にも良い勉強になったと思う。またいずれお願いしたな」

「そうか、それなら幸いだ」

那智は少しだけ表情を和らげたが、すぐに堅い表情に戻った。マツエダ提督と高雄もいたたまれない思いでため息をついた。マツエダ提督は電文用紙を那智へ差し出す。

「先ほど、連合艦隊司令部から、トビウメ提督を分隊司令から解任するとの命が下った。元々、トビウメ君本人から指揮権返上と損傷した戦艦二隻の護送の任につきたいという申し出があつてのことだ」

那智は電文を受け取りながらうなずいた。

「司令部は重巡三隈のアリスガワ提督を第三分隊の臨時分隊司令に任命し、第四分隊と合流後、ブ島西方で艦隊決戦に挑むことにしたようだ」

那智は数枚の電文に目を走らせながら控えめながらも驚きの声をあげる。

「第一、第二分隊も作戦継続か……。司令部は一体……」

「大博打だね。どうも第四分隊も、出港間際に戦艦日向がトラブルで出撃できなかつたようだ。そうなると、戦艦は第四分隊の比叡一隻。先の海戦の敵戦力を考えても、かなり厳しい戦いになるだろう」

「あのしっかりしている日向さんがトラブルなんて……」

高雄も意外そうに言った。那智は電文に目を走らせ、第三分隊には加古が加わっている事に気が付いた。それに姉妹艦の足柄も今、第四分隊の一員として敵地へ向かっている。

「那智君、作戦終了までの間、非番の時間は好きだけ通信室へいてもらって構わない」

「いや、それは……」

那智は思わず声を上げかけたが、マツエダ提督がすぐに制した。

「まあ聞いて。那智君は転属してまだ日が浅い。もし私だったら、前の仲間が心配でとても仕事なんか手につかない。それに、私たちだって、作戦の行く末をとっても心配している。ここで何かできるわけじゃないが、みんなで見守ろう」

マツエダ提督の言葉に那智は目を閉じて深々と頭を下げた。

「何から何まで、本当に、感謝する……」

「那智さん、気にしないで。わたしも、妹の摩耶が第四分隊で作戦に参加しているから実はとても心配しているの。だから一緒ですよ」

恐縮しきりの那智を高雄がそう慰めた。

那智と高雄が連れだって通信室向かうのを見送り、マツエダ提督は執務室にもどって椅子に深くもたれかかった。

「なんとも痛ましいな……」

マツエダ提督は、敢えて自分に確認するように、口に出してそう言った。陸軍部隊の救出はほぼ絶望的で、海戦で勝利できるかもかなり怪しい情勢になった。そして連合艦隊司令部は事態の悪化に適切に対処しているとは思えない。これが痛ましい状況でなくて何なのか？　だがマツエダ提督はそう言いつつ、戸惑いを感じた。というのも、トビウメ提督が今回の作戦で華々しい戦果を得る可能なくなったことを、心の片隅で純粹に安堵している自分がいることに気が付いたのだ。

——私は別に、そんなつもりで……

マツエダ提督は食事前にも関わらず、ブランデーの瓶を取り出してコップに注いで一飲みにする。のどが焼け付くのを感じながら、戦艦山城をはじめ、連合艦隊が無事に戻れることを祈った。少なくともその自分の気持ちだけは嘘はないことを確かめたかった。

第二次ブーメラン島沖海戦 7 / 決死のASW

正午前のタロタロ泊地。今日もよく晴れている。タグボートに曳かれて、戦艦山城は舳先を前にゆつくりと湾の奥にある大型艦ドックへと曳かれてゆく。駆逐艦不知火の後甲板に立ち尽くしていたトビウメ提督は生気のない青ざめた顔で、目の前の鉄の塊が海を上を滑っていくのを見つめていた。その背後には、艦尾を前にした戦艦扶桑が、山城よりも先にドック目指して曳航されていく。山城に比べ、扶桑は左舷にやや傾いた状態で引つ張られていく。扶桑は帰り道で、敵潜水艦による魚雷三発に耐えた。艦外から見れば水平を保っているように見える山城も左舷第五砲塔直下と二番砲塔直下あたりに魚雷二発を受け、浸水により傾斜三度まで傾いた。山城は一見、何ともないように見えるが、艦に乗ってみるといろいろなものがつくり転がりだすくらいには傾いている。艦に乗ったときに感じるのと、外から見るとは大違いだ。

とにかく、トビウメ提督は悪夢の一夜を終え、指揮下の艦を無事にタロタロ泊地まで帰還させることができた。

呆然と戦艦を見つめる提督のそばへ、不知火がやってきた。

「司令、間もなく投錨します。もう大丈夫ですよ」

「うん……」

不知火は、力なくうなずく提督の顔を見上げた。目の下には紫色のクマが浮かび、頬はいつも以上にげっそりとこけて病人のようになら見える。

「司令、何か食べてからお休みになったほうがよいでしょう。急いで何かご用意します」

提督はうんと返事した。

トビウメ提督は背後へと顔を向ける。百メートルほど先には駆逐艦荒潮が停泊場所まで微速前進している。艦娘の荒潮は第一砲塔の砲身に腰掛けて、毛繕いでもするように、風に吹かれる長い髪の毛先をいじっている。その奥にはすでに錨をおろした駆逐艦朝風と初雪の姿も見えた。艦娘の初雪の姿は艦上には見えなかったが、朝風のほ

うは頭に白い三角巾をかぶり、タグボートの作業員に向かい何やら怒鳴っているのが見える。

——長い夜だった……

山城の戦闘艦橋で嘔吐したのがもう何日も前のような気がした。

トビウメ提督は思わず目眩に襲われ、倒れかけたところを不知火に支えられて第二砲塔の日陰になるところまで連れてこられた。

「司令、しっかり！ 今すぐ飲み物をお持ちします」

走っていく不知火を見送りながら、トビウメ提督は、まるで無限に続くかのように思われた長い一夜を思い返した。

およそ十八時間前。空母鳳翔が派遣した複葉偵察機は日没になっても、しばらくは進路上の警戒を続けてくれた。ただ、空が完全に暗くなってしまうと哨戒どころか飛行さえおぼつかなくなってくるため、偵察機は西の空へ去っていった。

日没後まもなく、周囲を警戒していた初雪が北西方向に複数の船影を確認したと発光信号を送ってきた。もしや敵艦か？ とトビウメ提督と不知火は思わず身を固くしたが、幸いにもそれは第四分隊から置いてけぼりを食った陸軍部隊三千人を乗せた五隻の輸送船だった。

輸送船だけで護衛もなく大海原に放り出された船団はこれ幸いと信号を送ってきた。稼働不能の戦艦とそれにつながれたタグボート代わりの駆逐艦ばかりだと彼らが理解してからはしばらく返答がなかったが、数分の間をあげタロタロ泊地まで同行するとの素っ気ない返事を送ってよこした。

——多分、こつちにもまともな護衛艦がいなくてわかって失望したんだろうな……

トビウメ提督は近づいてくる輸送船を見ながら少し申し訳ない気持ちになった。

ただ振り返ってみれば、ここで合流できたことは双方にとって幸運だった。日没により脅威は空から水の下へ移る。夜になると血の臭いをかぎつけた「狼達」がこちらを狙っているはずだった。

深海棲艦の潜水艦部隊は、まるで狼の群が家畜の群を取り囲んで追いつめるように、複数の潜水艦からなる部隊が多方向から船団に襲い

かかる「群狼作戦」またはウルフパックとも呼ばれる集団戦法を常套としていた。

「見張りは多い方がいいんだよね？」

「ええ、そうですが……」

トビウメ提督の問いに不知火がうなずくと、提督は意を決したように戦艦山城を指さした。

「山城の艦橋のほうが少し遠くまで見渡せる。僕もあつちで見張りに立った方がいいよ」

不知火は、制御不能の艦に提督を送り込む事に不安を感じたものの、トビウメ提督の案は合理的に思えたので承知した。

十分後、不知火は内火艇に電話線ケーブルと電話機を乗せて、後ろに曳いている山城へ提督を送り出した。トビウメ提督は長い電話線ケーブルを伸ばしながら、電話機をかついで山城の夜戦艦橋まで上がってきた。夜間、高所は視界が悪くなるため、夜戦は通常、低層の艦橋から指揮することになっている。トビウメ提督も戦艦山城の羅針艦橋まで上がってきた。すぐに電話機を設置しハンドルを回した。

「もしもし？」

「無事につきましたね。司令、一つだけ約束してください。もし攻撃で山城が沈み始めたら、躊躇なく退艦してください。……戦艦の替えはあっても、司令の替えはありません」

不知火の押し殺した声を聞き、トビウメ提督は受話器を持ちながらうなずいた。

「……わかった、約束する」

「司令、艦が沈み始めたら必ず、傾いている側ではなく、せり上がっていく側から海へ飛び込んでください。そうすれば、渦に巻き込まれにくくなります。あとは不知火が助けます」

そう確認し二人は受話器を置いた。

輸送船がいくら鈍足とはいえ、五ノットも出ないこちらに苛立ちを募らせているらしく、しきりに発光信号で「もっと速力は上げられないのか？」とせつついてくる。不知火は無線封鎖中なのがこれ幸いとはばかりに黙殺することにした。

——事ここに至れば輸送船を魚雷の盾にするのも上策ね

考えるだけなら無罪とばかりに、残酷な想像を巡らせ、不知火はしばし心の平安を取り戻す。

不意に直通黒電話が鳴った。トビウメ提督だった。

「不知火です」

『方位二六五あたり、距離不明、茶柱が見えた！ 探照灯照射！ 左舷に星弾を放て！ それらしいものには手当たり次第に砲撃して！ 茶柱を近づけるな！』

「了解！」

戦闘は急に始まった。不知火は返事をしなからすでに砲塔と後甲板の探照灯に指示を与え、暗い海面に光の輪を投げかけた。

受話器の向こうのトビウメ提督は尚も叫ぶ。

『全艦、短距離無線電話を使用を許可。口頭で迅速な情報共有を！』

「了解！ 全艦これより無線封鎖を解除。方位二六五に敵潜水艦らしき艦影を視認。各艦、周囲を警戒しつつ制圧射撃を。朝風、初雪、右舷の海面にも注意を。手段は問いません、なるべく広い視界を確保し、警戒を厳としてください」

『ちよつと、いきなりすぎんでしょ！』

『怖い……。帰りたいたい……。』

朝風と初雪も各人らしい返事でそれぞれ応答する。一方、輸送船からは悲鳴や怒声が聞こえてきたが、もはやそんなものを相手にしている暇はない。

すぐに不知火の三番砲塔が左舷の空へ照明弾、通称星弾（スターシエル）を打ち上げた。照明弾は高度五百メートルほどの高さにかがって炸裂し、マグネシウムが燃焼して白い光を放ちながら、落下傘に吊られてゆらゆらと落ち始めた。

山城の羅針艦橋では、それまで漆黒の空だったところへ突然日が昇ったような明るさになったので、トビウメ提督が思わずまぶしさに目を覆う。目を細めながらも一心に双眼鏡をのぞくと、さっき見つけた茶柱のような潜望鏡が白い筋を引きながら海面に潜っていくのが見えた。またその奥にはすでに艦橋らしき黒い塊を海面からつき出

してこちらを追ってくる潜水艦の影が見えた。

「左舷、潜水艦複数！ 輸送船は衝突に注意しつつ魚雷回避行動を！」

駆逐艦はあらゆる手段を使って敵潜水艦を近づけるな！」

トビウメ提督は受話器にそう叫ぶ。電話の向こうで不知火が全艦へ無線電話で呼びかける。

トビウメ提督は歯ぎしりしながら左右の海面に目を走らせた。今このこの艦隊で自由に動き回って潜水艦を追い散らす事ができる艦はいない。一方で、駆逐艦が曳航索を切って対潜戦闘に向かえば山城も扶桑も、動かないただの的になってしまう。

トビウメ提督が考えているうちに一発目の星弾がみるみるうちに燃えつき。海は再び漆黒に覆われる。駆逐艦不知火はすぐに二発目の星弾を撃ち視界を確保すると。高角機銃で左舷の海面をひたすら撃ち始めた。

「司令このままでは危険です！」

不知火が電話越しにそう言った直後、山城の右舷二キロを航行していた戦艦扶桑の右舷から、艦橋を飛び越すくらいの真つ白な水柱が立ちのぼった。

——やられた！

数十秒後に不知火から戦艦扶桑に魚雷命中の報告を受けるまでもなく、提督は事態を把握していた。

——クソツ、このままじゃただの的だ！

トビウメ提督は即座に不知火へ指示を出す。

「駆逐艦荒潮に命令、直ちに曳航索を切断し、対潜戦闘開始！ また扶桑を曳航中の駆逐艦どちらかも索を切り離して対潜戦闘に」

艦娘にはそれぞれ前世の経験などによって戦闘にも得意不得意がある。今日初めて顔を合わせた朝風と初雪、どちらが対潜水艦戦闘（ASW）を得意としているかはわからなかった。

受話器越しに不知火と駆逐艦がなにやら応酬を繰り返しているのが聞こえてきた。返事はすぐにきた。

「司令、朝風が対潜戦闘に移ります。なにかとかしましい艦ですが、一つ返事で買って出ました。荒潮は曳航索切断、直ちに敵潜水艦の攻撃

に移ります」

トビウメ提督が双眼鏡を二時方向にいる駆逐艦荒潮に向けると、すでに艦尾からは白いウエーキが立ち、一気に速度を上げたことがわかった。

「司令、初雪より、戦艦扶桑、右舷に後方、今は逆さまですから船首側に魚雷一発被弾の様、損害状況は不明なれど、現時点で目立った傾斜はなしとのことです。それから、悪い知らせですが、不知火の星弾は残り三発です」

トビウメ提督は思わず羅針艦橋の天井を見上げた。ただでさえ搭載弾薬に限りのある駆逐艦に、夜戦でそれも短時間でしか使わない星弾が大量に搭載されているわけがない。星弾の燃焼時間はもって三〇四十秒。とても朝までもたないだろう。

駆逐艦不知火の羅針艦橋では、不知火が艦隊の無線電話とトビウメ提督との直通電話の間で忙殺されつつ艦を制御していた。荒潮が抜けたことで山城を一隻で牽引することになり、行き足はますます遅くなった。それは右舷で扶桑を牽引している初雪も同様だ。それ以上に不知火を辟易させたのは陸軍部隊を乗せた船団からの無線通信だった。船員の悲鳴や恐怖に襲われて怒号をあげる陸軍の将校連中の無線電話がひっきりなしに飛び交う。不知火は必要な指示や警告を除き、一切無視を決め込んだ。ただ、この状況ではとうてい朝まで生き残るのは無理だという事もわかっていた。

『ぬいぬい！ 左舷、方位二一〇から魚雷よ！ 三発！』

荒潮が珍しく真剣な口調で無線電話をよこした。

不知火はすぐにその方向を見据えつつ、逆進をかけた。

——魚雷はどこ！

真っ黒な海面へ探照灯の光を走らせていると、光の円が海面下に三本の白い筋を捉えた。

不知火はすぐに取舵にきってジリジリとななめ後方へ船体を向ける。主砲と機銃が一斉に魚雷のくる方向の海面を撃ち始める。

受話器からは、ようやく魚雷に気付いたトビウメ提督から悲鳴のような警告がもたらされるが、それに答えている余裕はなかった。何と

か前進が止まりじりじりと後進し始めたとき、最初の魚雷が駆逐艦不知火の艦首から三十メートル先を通り抜けた。続いて二発目が左舷ぎりぎりを通過、続いて三本目は右舷二十メートルを疾走していった。

不知火とトビウメ提督はほぼ同時にほつと胸をなで下ろす。

のんびりはしていられない。後進をかけたことで牽引力を失い曳航索は海面に垂れ下がり、惰性で戦艦山城がゆっくりと不知火に突っ込んでくる。不知火は急ぎ全速前進を命じて再び山城を引つ張ろうとしたとき、戦艦山城の左舷から巨大な水柱があがった。

「司令！」

不知火は受話器に叫んだ。

トビウメ提督が最初に感じたのは急な傾きだった。爆発音、水音とともに艦橋内が真横から押し倒されるようにぐらりと右に傾き、続いて揺り戻しが襲う。あわてて外へ目をやると、左舷後甲板あたりが一面が水柱の水をかぶっていた。

『司令！ 司令！ 大丈夫ですか！ 司令、応答を！』

「僕は大丈夫。一発やられたみたいだ」

受話器ごしに叫ぶ不知火をなだめるように、トビウメ提督は言った。

——あと一発くらいはもつかももしれない。でも元々艦尾から浸水中の艦だから、三発以上は危険だ

トビウメ提督は窓の上にある艦の傾斜計を見ながら思った。今、針は左舷三度を指している。

左舷の遠方では駆逐艦荒潮が爆雷投射器で爆雷を打ち出し、潜水艦への攻撃を始めている。爆雷を落としてしばらくすると漆黒の海面が一瞬白く光り、一拍おいて水柱が立ち上る。潜水艦から10メートル以内で爆発させれば、耐圧殻を引き裂き、一発で潜水艦を海の藻屑にすることができる。近くにいた潜水艦は一斉に場所を変えてより深い場所まで潜航せざるを得ない。浮上や潜望鏡を上げさせなければ敵潜水艦は魚雷を撃つことができないので、ASWにおいて威嚇という行為は非常に有効だった。

『朝風より連絡です。複数方向よりスクリー音。敵潜多数。あまり高速で動き回ると、海中のスクリー音が聞き取りにくくなるので注意するようにとのことです』

不知火からの電話を受け、トビウメ提督はすぐに左舷側で爆雷をばらまきながら走り回っている駆逐艦荒潮へ双眼鏡を向ける。星弾が輝いているわずかな間だけ。艦首から艦尾の後ろ長く伸びる海面のウエーキが見える。かなり高速を出しているようだ。あちらこちらに爆雷を撒かなければならないし、のんびりしていると逆に自分が雷撃の的になってしまう。潜水艦を攻撃できる能力を持つている駆逐艦を先に始末してしまえば、残りは推進力のない戦艦と鈍足の輸送船だけだ。それは海の上に浮かぶただの的にすぎない。

「ぬいぬい、朝風のアドバイスと一緒に、潜水艦からの反撃に十分注意するように伝えて。敵は真つ先に護衛艦を狙ってくる可能性もある」
だが、十分後には状況はさらに悪くなっていた。

『不知火の星弾、残り一。朝風、残弾ゼロ。荒潮、残弾三。初雪、残弾五。作戦を変えませんか、夜を越すのは困難です』

トビウメ提督は唇を噛んで腕時計を見る。二〇一三時。幼稚園児だってまだ寝ない時間だ。日の出まで、まだ九時間以上ある。今ある星弾だけではとてもしのげない。

——完全に詰んだか……

突如、艦隊前方の空に、新しい照明弾の光がともったのはその時だ。艦隊からはやや遠い位置に光の花を咲かせ、ゆっくりと落ちてくる。

「あれは……」

さらにもう一発がやや艦隊よりの空の上で光り、艦隊全体を照らし出した。トビウメ提督は艦橋から右舷のウイングに飛び出し、真つ黒な空を見上げると、高空にチラリと水上機らしき一対のフロートを履いた航空機の腹が見えた。かすかにエンジンの爆音も聞こえる。ただ敵か味方かは分からない。提督はすぐに艦橋にもどり受話器に告げる。

「ぬいぬい、今上空に飛行機がいる。敵機じゃなきやいいけど……」

駆逐艦不知火の探照灯が上空へ向けられ、飛来した飛行機を探し始

めた。一方、闇夜を飛ぶ飛行機からはか細い光が断続的に明滅し、赤と青の翼端灯が点灯した。どう考えても敵機の挙動ではない。トビウメ提督はほっとして肩の力を抜いた。すぐに受話器越しに不知火の声が言う。

『何型かはわかりませんが、味方の水上機に間違いありません。ありがたいですね』

声にし少し安堵の色が感じられたつかの間、突然曳航弾の筋が空の闇を切り裂いた。トビウメ提督と不知火はほぼ同時にえっと驚愕の声をあげる。別の曳航弾の筋も異なる角度で空に定規で線を引いたように飛び交う。狙いは味方の水上機だ。何拍か置いて複数の機関砲の発砲音が山城の航海艦橋まで聞こえてくる。

「誰？ まさか敵の潜水艦が……」

トビウメ提督が曳航弾の発射元をたどると、それは右舷四時方向を航行中の陸軍の輸送船だった。輸送船は船体こそ民間の貨客船と大差ないが、自衛のため、急拵えで口径の小さい単装砲や機関砲を載せていた。海戦に不慣れな輸送船の乗組員らが、どうやら飛来した水上機を敵機だと思いこんだようだ。

「まずい、ぬいぬい、すぐ止めさせて！ これじゃ同士討ちになっちゃう！」

『はい、直ちに！』

不知火は受話器を戻すとすぐに無線電話で艦隊中に呼びかけた。

「駆逐艦不知火より全艦。上空の航空機は敵機に非ず。発砲を止め。繰り返す！ 上空の航空機は敵機に非ず！」

不知火は必死に呼びかけるが、輸送船上では軽いパニックが起きているのか、無線越しにはよく分からない叫び声や怒号、言い争う声が聞こえてくる。どうやら一部の輸送船では、航行を担う船員と陸軍の将校連中の間で言い争いが起きているようだった。

——いきり立った陸軍ども、血迷ったのかしら？

不知火は険しい表情で輸送船を睨みつけた。最後尾の輸送船は発砲を止めたようだが先頭の二隻はまだ発砲を続けている。不知火は一度咳払いしてから無線電話のマイクをふたたび握る。

「駆逐艦不知火より輸送船団。直ちにあらゆる発砲を止めよ。十秒以内に命令に従わない場合、直ちに魚雷をもって撃沈処分を下す。……これは脅しではない」

一つ前の通信とは打って変わり、慌てや焦燥などの感情のこもらない、ドスの利いた低い声だった。すぐに艦橋の時計を見上げる秒針が無情に時を刻む。間もなく輸送船の二番艦が機関砲の射撃を停止した。ただ、陸軍の師団長一行が便乗している先頭の輸送船は未だ対空機銃を滅多やたらに打ち上げている。

——一番魚雷発射管、方位〇一一。

駆逐艦不知火の前部魚雷発射管がゆっくりと旋回しはじめた。

「四、三、二……」

不意に射撃が止まり、海域一帯がすぐに静かになった。双眼鏡で輸送船上を覗いてみると、船橋上にもうけられた特設機銃台で、陸軍の制服と思しきカーキ色の服を着た数人のグループが、白い上下に白い帽子を被った船員達に殴り倒される様子が見えた。

「チッ」

不知火は舌打ちしてから無線電話のマイクを握る。

「駆逐艦不知火より輸送船団。ご協力に感謝します」

慇懃無礼にそう伝えて不知火は無線電話を一方的に切った。すぐに黒電話ジリジリ鳴る。

『ぬいぬい、良かった。止まったね』

トビウメ提督のほつとしたような声に、不知火はようやく表情を少し和らげた。

「皆さん、大変協力的で助かります」

不知火はそう言って再び艦橋の天井へと上って空を見る。飛行機の爆音はまだ聞こえる。味方の誤射を受けつつも幸い無事だったようだ。先ほどの対空砲騒ぎで途中で途切れてしまった発光信号の続きが再び水上機のコクピットらしきあたりで明滅した。

『センカンヒウカ、クセンチ、タグボート、シンシュツチュウ。シンロ二〇〇ニトレ』

不知火はその信号を解読すると、すぐに了解の旨信号灯で応答し艦

橋へ飛び降りた。

「司令、上空の水上機より連絡。戦艦日向指揮下、駆潜艇とタグボートを引き連れて味方が救援に来てくれているようです。進路二二〇で進むよう求めています」

『本当！ よし！ 全艦に連絡して、進路二二〇に！ もう一踏ん張り……』

不意に言葉が切れた。

『ぬいぬい、大変！』

代わりに聞こえてきたのは荒潮の悲鳴だった。

不知火が背後の戦艦山城を振り返ると、またも水柱が山城の左舷第二砲塔直下あたりから吹き上がり、巨大な艦橋が大きく真横に揺れるのが見えた。

——しまった！

敵潜水艦による魚雷攻撃、二度目の命中だった。

「司令、ご無事ですか！ 司令！」

『……丈夫、ちよつと転ん……だけ』

「もう猶予はありません。司令は一度退艦を！」

戦艦山城の夜戦艦橋でトビウメ提督は艦の傾斜計を見上げた。左舷に一・五度傾いている。今浸水を止める術はないため、傾斜は刻々と大きくなるに違いない。それに駆逐艦一隻の牽引力では、潜水艦の攻撃をかわすことはほぼ不可能だとわかった。

——救援を信じるしかない

トビウメ提督は受話器越しに叫ぶ不知火に落ち着いた声で言った。

「駆逐艦不知火と初雪、それに輸送船団に連絡。不知火と初風は直ちに曳航索を切断し戦艦を中心に円陣を組みつつ、荒潮、朝風に合流して潜水艦を牽制、輸送船団も円陣内を移動しつつ警戒態勢をとるよう伝達。救援到着までの時間を稼ぐ。星弾もあるだけ使って潜水艦可能な限り追い散らすよ」

不知火からは、了解との返答後、命令は艦隊中に伝達された。

『司令、通信手段が無くなります。ご自身もこちらに戻られて対潜戦の指揮を執られては』

不知火がそう進言した。

確かに、係船索と一緒に電話線も切断すれば、山城は通信能力を完全に失うことになる。完全に人事不省に陥った艦娘の山城一人をターゲットになっっている艦に残して行くのには気がとがめたが、ここは不知火の進言通りに再び駆逐艦に移乗する他ない。

「了解、すぐそつちに戻る」

そう言つてトビウメ提督は受話器を置くと、一度山城がいるであろう戦闘艦橋へ続く真つ暗なラツタルを見上げてから、急いで下甲板へ続くラツタルを駆け下りた。

不知火はすぐに係船索と電話線のケーブルを切断し、探照灯の光を海面に走らせつ、山城の近くへ舷側を寄せる。艦の舷梯にくくりつけていた内灯艇は先の被雷により粉碎されていて跡形もない。不知火はすぐにロープを左舷におろして舷梯から飛び移る提督を支援する。

「海面が臭い。だいぶ油が漏れているな」

やつこのことで甲板に這い上がったトビウメ提督は肩で息をしなから言った。夜中の海面は真つ黒で様子はわからないが、確かに鼻をつく刺激臭がする。

提督を甲板に引つ張り上げると、不知火は艦をすぐに速力十八ノツトへ増速し聴音機の音に耳を済ませた。

『ぬいぬい、方位二二五、山城から距離約一千三百、潜望鏡よー!』

荒潮からの無線電話だった。

「不知火より荒潮。了解。すぐに攻撃する」

二人が駆逐艦不知火の艦橋に上がるまでに、不知火は一番主砲をその方角へ向けていた。敵潜水艦は不知火から見て方位〇二〇の位置でこちらに近づきつつあった。荒潮の探照灯が側面から強烈な光で、海面を白い筋を立てて進むマッチ棒のような影を照らしていた。

「全火砲使用自由! 撃ち一方、はじめー!」

不知火の二連装の一番主砲が火を吹く。すぐに水柱が敵潜水艦の潜望鏡近くに吹き上がる。その間にすぐに第二射の準備をすすめ、第一射から三十秒後にはすぐに二回目の砲撃を加える。おそらく敵潜

水艦は微妙なバラストコントロールを誤ったのだろう。真つ黒な岩礁のような艦橋構造物がわずかばかり波間に姿をあらわした。それはすぐに海面下に隠れたがその瞬間、オレンジ色の小さい爆炎が海面に一瞬立ち上り煙が上がる。茶柱のような潜望鏡も一瞬で吹き飛び姿が見えなくなる。

「当たりました。手応えありです！」

「これで沈めた？」

「いえ、おそらくはまだ……。ただ、これでもう潜航はできないはずですよ」

そういう不知火の言葉通り、ギラツと黒光りする魚の背のような物体が海面を割って姿を表した。一見、クジラの背のようにも見えるが、フジツボだらけの艦載砲や、サンゴ礁のようなひしゃげた艦橋構造物を背負っているのでまともな生き物ではないことは明らかだった。

「攻撃を継続します！」

不知火は高速航行で敵に腹を見せるような進路にとりつつ全砲塔を右舷へ向け一斉に浮上した深海棲艦の潜水艦へ向けて斉射をはじめ。艦の機銃も一斉に火を吹き、潜水艦は至近弾の水柱に覆われ、二射目の砲撃から数秒後、船体先程よりもはるかに大きい爆炎を上げて燃え上がった。

艦橋にいた不知火とトビウメ提督は一瞬の眩しい炎に目を覆ったが、再び海面に目を戻すと、すでに海面には小さな破片や燃えカスが浮遊しているのみで、不気味な黒い船体は影も形もなかった。

『やったわ！スクリーン音一つ消えたわ。船体が割れる音を捉えました〜！』

荒潮がいつもの調子をとりもどした口調でそう通信した。

「やったよ、ぬいぬい！」

トビウメ提督が不知火の肩を軽くたたき、不知火も少し誇らしそうな笑顔を浮かべた。

ただ、勝利の喜びは十秒ももたなかった。無線電話越しの初雪の悲鳴とともに戦艦扶桑の右舷後部から巨大な水柱が吹き上がっていた。

『ふ、扶桑さんに、また魚雷が……。爆雷を散々落としても、もう、きりがないって……』

初雪が泣きそうな声で通信をよこした。すぐに朝風の声が割って入る。

『星弾、いま初雪が撃つたので最後よ！ もう防ぎきれないわ！』

「円陣を組んで警戒を続けて。とにかく、そばに寄せられないように！」
トビウメ提督はマイクにそう叫ぶが、完全に漂流している船を守り切るのはもう困難になってきた。それに戦艦だけでなく三千人の兵士を乗せた輸送船も守りきらなくてはならないのだ。「司令、嫌がられるのは承知で、敢えて申し上げます。無傷の輸送船を守るためにも、その……そろそろ、厳しい決断を下さねばならないかもしれません」

不知火はトビウメ提督から顔を背けて早口に言った。

「えっ？」

トビウメ提督は不意打ちを食らったような声を出した。

「戦艦と輸送艦、どちらかを選択しなければならぬ事態になりつつあります。それを決めることができるのは、艦娘ではなく司令だけです……」

不知火は背中を向けたまま言った。不知火には、トビウメ提督がこの上なく狼狽することはわかっていたが、早い段階で覚悟だけはして貰う必要を感じていた。その代わり、それがどんな指示であっても、トビウメ提督の命令に従うつもりだった。その選択の結果が自身の沈没であつても……。

トビウメ提督は双眼鏡で扶桑と山城を後方から見回した。山城に一見、傾きは見られないが、扶桑は右舷にやや傾きはじめているのが外見でもわかった。一方、五隻の輸送船は扶桑と山城を盾にするように、両艦の間で不規則にぐるぐる回っている。トビウメ提督はふと大きなサメの腹に張り付いて身を守るコバンザメを思い出した。

——きつと、那智さんがここにいたら同じことを言っただろうな

……

トビウメ提督は深呼吸した。

「わかった。その時は迅速に決断する。だから、まだ少し頑張ろう！それがどれくらいになるかわからないけど。戦艦のどちらかが曳航不能状態になったら、すぐに輸送船と離脱する。だからもう少し……」

不知火はトビウメ提督に向き合って深くうなずいた。

「了解しました、司令」

円陣の反対側では朝風と初雪が探照灯の光線を振り回しながら時折、機関砲や主砲を乱射している。

再び飛行機のエンジン音が聞こえてきた。艦橋の窓から頭を出して二人が空を見上げると、星明かりの下、複数の発動機が回る音が聞こえる。二、三機の飛行機が来ているようだ。

突然、空に照明弾の光が光った。いくつもの順番に等間隔に照明弾を投下したらしく、空に一行、四つの照明弾の明かりが咲き、海面を照らした。すると後続の機が海に何かを続けざまに落としていく。しばらくすると落ちた海面から真っ白な水柱が上がり、一瞬だけ水の壁ができたように海面が沸き立った。救援隊の対潜航空支援だった。

『やった……。聴音機で艦体破壊音が聞こえた……』

相変わらずぼそぼそとした話し方だったが初雪が無線電話でそう伝えてきた。

潜水艦が海中で損傷、沈没するときには金属が潰れたりや軋んだりする独特の騒音が発生する。一番近くにいた初雪がその音を捉えたのだった。

「今夜は月明かりも少ないのに、あの飛行機、真っ暗な海面で良く潜水艦を見つけられたね」

感心して言うトビウメ提督の疑問に不知火もうなずく。

「あの水上機、電探を積んでいたのかもしれませんが。練度が高ければ、至近距離で露頂状態にある潜水艦でもはっきり捉えることができるそうです」

その時、荒潮の声が艦橋に響く。

『荒潮より不知火。方位二五五、接近中の艦船を発見よ！ 味方の救援みたいね！』

戦艦の周りをぐるぐる回りながら、駆逐艦不知火が艦体の西側へやってくる、遠くに一際大きい戦艦らしきシルエットと、その周囲を囲む六く七隻の囲む小型の船舶が発光信号を贈りながら近づいてくるのが見えた。

「戦艦日向です」

「厳しい決断は、少し先延ばしして大丈夫かな？」

「ええ、一先ずは保留でも良いと思われませう」

二人は安堵のため息をつきながら、高速で近づいてくる救世主を見つめた。

トビウメ提督は、昨夜の長い夜を思い出しながら不知火に問われた「厳しい決断」を下さずに済んだ幸運を改めて噛み締めた。首を転じると後方には陸軍の輸送船五隻が棧橋順番に係留作業に入っている。五隻は一発の被雷も至近弾もなく、無傷だった。

「お待ちせしました司令」

不知火が冷えたラムネの瓶を手に戻ってきて、ビー玉落として栓を開けてから提督に手渡した。トビウメ提督はお礼を言いつて瓶を取り、後方を航行中の戦艦日向の堂々たる艦橋を振り返った。

「戦艦日向、すべかったね……」

不知火も隣に腰をおろしてうなずいた。

「ええ、正直、あのような操艦は初めて見ました」

昨夜、救援が到着して安堵するも、苦難は続いた。戦艦日向が引き連れてきた、高い牽引力を持つタグボート四隻が戦艦を曳航する作業に入っている間も、敵潜水艦は繰り返し、魚雷攻撃のため近づいてきた。トビウメ提督指揮下の駆逐艦四隻と、救援部隊としてやってきた沿岸防御用の駆潜艇六隻が、周囲の海中に耳を済まし、砲撃や爆雷攻撃で敵を退けている間にも、数回に渡って魚雷が扶桑や山城、時には護衛の駆逐艦に向かってきた。急速転舵や海面射撃など、手段を尽くして魚雷を回避してきたが、曳航開始間際の扶桑を確実に命中コースに捉えた魚雷二発が駆逐艦や駆潜艇の警戒を突破して突入してきた。トビウメ提督や不知火をはじめ、誰もが、もはや避けられないと観念したとき、円陣の内側で照明弾の打ち上げをしていた戦艦日向が魚雷

と扶桑の間に割って入ったのだ。誰も扶桑をかばってのことで覚悟を決めたが、一同を本当に驚かせたのはその後だった。戦艦日向は魚雷の命中コース上で急速転舵し、魚雷とほぼ平行になるような進路で魚雷に突っ込んだ。トビウメ提督は魚雷が命中する瞬間悲鳴を上げたが、予想に反し日向の船体を白い水柱が襲うことはなかった。魚雷は爆発しなかったのだ。

「不発？ すごく幸運だ……」

提督と不知火はそう驚いていると、しばらくして朝風が、そんな事もわからないのかという自慢げな口調で言った。

『まさかみんな、運が良かったなんて思ってたの？ 勘違いしちゃダメよ。あれはわざと魚雷に浅い角度でぶつけて弾き飛ばしたの。深海軍の魚雷は精度がイマイチなことを逆手に取った、ある意味究極の対魚雷戦法ね』

朝風のその声音には、まるで自分のことのように自慢し得意がる調子があった。

『何それ……。カツコ良すぎじゃん……』

初雪がそう応じ、不知火とトビウメ提督も驚いて顔を見合わせる。すると戦艦日向から無線電話越しに落ち着いた女性の声が響く。

『戦艦日向より朝風。余計なこと言うんじゃない。また艦体全艦へ。今のは運任せの非常手段だ。決して真似などしないようにな』

戦艦日向に乗っているナス提督による、駆潜艇や駆逐艦に対する対潜戦闘の指揮は、その分野に詳しいわけではないトビウメ提督から見ても、的確で無駄のないものだった。一同はその後間もなく戦艦の曳航しつつタロタロ島へ帰還を再開した。聴音機からは依然、接近しつつある敵潜水艦のスクリーン音が聞こえており、余談を許さない状況が続いたが、しばらくすると、東の空が赤らみはじめ、しだいに周囲が明るくなりはじめた。しばらくすると翼に日の丸のラウンデルを塗装した複葉偵察機が何機も艦隊の周囲を飛び回り始め、艦隊は悪夢のような潜水艦の魔の手から逃れることができたのだった。

不知火はふと、以前に姉妹艦の陽炎から聞いた噂話を思い出した。それは艦隊随一のアイドルとされている給料艦間宮に関する艶間で、

間宮には特別な関係にある提督がいるというものだった。数年前、間宮の動静を把握した深海軍の潜水艦部隊が南洋海域に進出した間宮を執拗につけ狙った事があり、対潜機や駆逐艦、海防艦などあらゆる手段を駆使して航行中の間宮を猛攻から守りきったこと、間宮がすっかりその提督に惚れ込んでしまったという噂だった。不知火は、あまりこの手の噂話に関心を払うタイプではないのだが、どの艦隊にも所属せず、専属の提督もいない、私生活がわりと謎に包まれている間宮に関するものだったので、たまたま覚えていたのだ。陽炎の話によれば、その間宮の想い人というのは伊勢型戦艦に指揮官だったので不知火はもしかと思いつつ日向の方を見上げた。

「ナス提督という方はどういう方ですか？」

不知火の問いにトビウメ提督は首を振った。

「話したのは昨夜の無線電話越しが初めてだよ。出撃前に会議かなんかで何度か顔をあわせてはいたみたいだけど、あまり印象にないなあ。見た感じでは、結構歳いつてる感じだったけどな……」

「そうですか……」

「お礼を言いに行かないとね」

「そうですね」

不知火と提督はしばし無言で港内をぼんやりと眺めていた。自分たちは辛くも誰も失わずに戻って来られたが、第一、二分隊と司令部を伴った第四分隊はそうはいかなかった。

第二次ブーメラン島沖海戦 8 / そして、戦いの終わり

タロタロ泊地の岸壁では第三分隊の戦艦が寄港したという知らせを受け、艦娘の初風が港の岸壁へ息を切らせて走ってきた。湾内には大きな戦艦が、タグボートで曳かれて行くのが見える。すでに岸壁には見物人が集まり始めていた。そんな中に早霜が一人、艶のある黒い髪をなびかせながら黙って戦艦を見つめていた。

「あつ早霜、司令官達も戻ってきたのかしら？」

早霜を見つけた初風が駆け寄って尋ねると、早霜は海を見たままうなずいた。

「そのようね。不知火さんや荒潮さんも一緒よ」

初風は目の前を通り過ぎる二隻の戦艦の破損状況を目の当たりにして思わず口に手をやる。

「何よあれ……。完全に追突して艦首も艦尾もつぶれちゃってるじゃない……」

信じられないとばかりに、初風は顔を青くして言う。

「ああ、いたいた。提督たち戻ってきたって？ みんな無事だった？」

長良も二人のところへ走ってきた。

「不知火さんと荒潮さんは無事みたい。加古さんは見えないわね」

早霜はそう答えながら港内を見回す。ドック近くで錨をおろしている工作艦明石の周囲にも内火艇が集まってきた。

留守の艦娘達に、作戦に大きな障害が発生したことが伝わり始めたのは昨日の午後のことだった。そして、火災事故を起こし、当初修理に数時間かかると見られていた戦艦日向が、急に出港準備をはじめ、駆潜艇を引き連れて港を出ていったのだ。

艦の修理が完了していないトビウメ艦隊の三人は無線通信を自分の艦で受信することができないため、戦況の把握は、通信機器が万全な艦の艦娘が拾った断片的な通信に関する噂話を頼るしかなかった。

その噂話で伝えられる戦況は、どの方面も悪い知らせばかりだった。三人が立っている岸壁の後ろをくろがねが二台、猛スピードで通り過ぎ、五十メートル先の内火艇用棧橋の前で止まった。カーキの陸軍軍服を着て腕に白地に「憲兵」と赤字が入った腕章をつけた将校風の男二人が、鉄帽をかぶり三八式小銃を構えた歩兵四人を引き連れ、くろがねから降りると慌ただしく内火艇へと乗り移る。兵士の持つ小銃の銃口には長い銃剣が付けられていた。内火艇は憲兵隊を乗せてすぐに湾内へと出ていった。早霜は目を細めて、その一隊を目で追う。

——不知火さん、なんだか良くないことが起きそうな気がするわ
早霜の予感通り、内火艇は小さなウェーキを引きながら駆逐艦不知火の停泊している方向へ走っていった。

時間は少し遡る。トビウメ提督や不知火たちが潜水艦相手に悪戦苦闘している時、ブーメラン島の北方では第一分隊旗艦の軽巡能代に座乗するシンドウ提督と指揮下の水雷戦隊が、空母翔鶴の航空攻撃に続いて封鎖艦隊へ攻撃をかけていたが、計画当初の想定を上回る敵戦力を前に、初戦から苦戦を強いられていた。計画では、第一分隊による第一波攻撃は威力偵察的な接敵に終止し、敵の戦力を見極め第二分隊のため、防衛線に間隙を作る役目を担っていたが、深海軍の重巡を中核にした封鎖艦隊はかなり遠距離から第一分隊の接近に勘付き、ポート・フリスビーの湾口はかなり北の海域でこれを迎え撃った。まだ日がある夕方の晴天、それも開けた海上での会敵と悪条件が重なり、得意とする近接魚雷戦は事実上封じられることになった。

一方、第一分隊に呼応して第二波攻撃をかける予定だった、軽巡名取に乗ったカキモト提督が率いる第二分隊は、作戦計画では手薄になった湾口の封鎖艦隊の残存部隊を駆逐し、閉じ込められていた味方を救出できるはずだった。だが、計画では手薄になっているはずの島の北方では、それまで東北東に位置していた未確認の敵増援部隊が新たな封鎖艦隊として第二分隊を迎撃した。第二分隊にとつて不運だったのは、新手の封鎖艦隊には戦艦二隻と重巡四隻が含まれ、やは

り天気の良い開けた海域で、序盤から遠距離砲戦を余儀なくされたことだった。

結果として専ら急襲と殴り込み、近距離魚雷戦を得意とする水雷戦隊の面々はなかなか敵の懐まで飛び込むことができず、損失が積み重なった。後の偵察機が撮影した写真の分析で、敵の主力は夕級高速戦艦を含む快速部隊だったと判明する。カキモト提督は日が傾き始めていたことを考慮し、日没後に夜戦を挑むつもりで一時撤退を決め海域からの離脱を命じた。ただ、この離脱は予想外の敵の行き足の速さにより困難なものになる。

「駆逐艦疾風、爆沈！ 駆逐艦葵、火炎炎上中、応答なし！ 提督……」
軽巡洋艦艦娘の名取が泣きそうな顔で提督に報告する。艦橋横の見張所に飛び出して後ろを振り返ると、指揮下の駆逐艦がオレンジ色の炎に覆われ弾け飛ぶのが見えた。報告を受けるまでもなく状況は深刻だ。

その時、艦の隊列右舷後方にいた駆逐艦初霜の甲高い声が無線電話越しに響く。

『敵艦隊の北方、方位一〇一から味方艦隊が接近！ 側方から砲戦を仕掛けています！』

初霜の声にカキモト提督と名取は顔を見合わせて、慌てて後方の視界が開ける艦橋の天井に上がった。双眼鏡を覗くと軽巡能代を先頭ににした単縦陣がこちらに向かいつつ、左舷側の敵艦隊に攻撃を仕掛けているところだった。

「提督、能代さんとシンドウ提督です！」

この攻撃で、敵追撃部隊の足並みが乱れた。

「名取、全艦に命令！ 合図とともに一齐に方位二〇〇へ一齐回頭。あるだけの魚雷を一斉発射後、進路二七〇へ全速離脱。シンドウさんにもそう伝えろ！」

「了解です」

混乱に乗じて第二分隊の残存艦は後方へ魚雷を一斉射後離脱し、追手を振り切り救援に駆けつけた第一分隊も混乱に乗じてブーメラン島北方海域から離脱しつつあった。それでも敵艦隊は追撃を続け、味

方も機関故障や損傷により速力が低下し離脱は難しくなってきた。

水雷戦隊の最後の危機を救ったのは、第二次航空攻撃の命を受けて雷撃機と爆撃機を送り込んだ空母翔鶴だった。最後まで追撃してきた重巡洋艦と軽巡、駆逐艦で構成する敵艦隊へ、雷撃機が低空飛行で一斉に襲いかかった。夕暮れ間際の薄暮攻撃、それも数を分散しての少数攻撃のため、戦果は軽巡洋艦と駆逐艦を各一隻撃沈、重巡に中破相当のダメージを与えただけだったが、その果敢な攻撃により第一、第二分隊は辛くも戦場からの離脱に成功した。

そして第三、四分隊の残存部隊の危機を救ったのも空母翔鶴の艦載機の捨て身の攻撃だった。

第一、第二分隊が追撃部隊を振り切るのに必死になっている頃、フルカワ連合艦隊司令長官代理が旗艦大淀から直接指揮する第四分隊はトビウメ提督から指揮権を譲られた重巡三隈に乗艦するアリスガワ提督率いる第三分隊と合流し、ブ島西方の敵パトロール艦隊と接敵した。前衛の駆逐艦同士の小競り合いの後、敵は一時撤退し、連合艦隊は敵を深追いせずに悠々とブ島を目指した。

「もう間もなく敵の本隊の前衛と接触する頃です」

水上偵察機からの最新情報をもとに参謀が告げる。

「どうも敵の抵抗は弱い。前回のように誘い込まれないように注意しろ」

司令部施設内でフルカワはそう指示した。

「報告します、第二分隊より入電、『敵封鎖艦隊、敵兵力、想定より大にして、撃滅困難なり。一時ブ島西方へ避退後、再度突入の機会をうかがわんとす』以上です！」

司令部要員の報告を聞いてフルカワは舌打ちした。

「あつちは失敗だな……」

すぐに大淀が司令部の会議室に入ってきた。

「先程の入電はもう読まれましたか？ 第一、第二分隊は現在離脱中とのことですよ。こちらから何らかの支援はなされますか？」

「いや、我々はこのまま進める。陸軍部隊救助が不首尾に終わった以上、ブ島西岸の制海権確保が今や最重要目標だ」

フルカワはそう作戦の継続を命じた。ただ、フルカワには司令部の参謀共々、この作戦の成功の見込みがないことも判っていた。作戦を畳むには『きれいなオチ』が必要だった。

「リスクヘッジのため、艦隊を二手に分けましょう。高速戦艦、重巡と水雷戦隊の一部を囚として先行させ、敵の出方をうかがい、それに応じて我々本隊が呼応して敵の急所を叩くというのはどうでしょう？」

作戦参謀の進言にフルカワ一つ返事で同意した。

「戦艦比叡に乗っている司令部要員の指揮下に重巡古鷹、摩耶、足柄とアリスガワ提督の第三分隊を編入し、先行して敵部隊を叩かせよう」
こうして先方の攻撃部隊に指名された艦は、ブ島西方沖の敵主力と正面からぶつかり合うことになった。敵はすでに空母翔鶴からの報告で戦艦三隻、重巡五隻を含む総数三十隻以上の規模と判明していたので、比叡に分乗していた司令部はかなり慎重に敵艦隊へ接近した。夕焼けを背後から受けつつ進む艦隊が南方に敵艦隊の艦影を捕捉したのは艦隊の分割から二時間後のことだった。

後から考えてみると、この時の深海軍の対応はやや慎重さに欠けるものに思えた。当初の想定通り、戦艦比叡を中核にした主力は戦闘序盤から苦戦を強いられることになったが、ぶつかってきた敵の兵力規模は最新の偵察情報を元にした想定よりも小さいものだった。

「ああもう！ どこも敵ばつかじやないですか！ 金剛お姉さまの仇、この私がみんな吹っ飛ばしてやるー！」

あまりものを深く考えない比叡が旗艦だったことは、彼女ら艦娘たちには幸運だったかもしれない。比叡は圧倒的戦力差の前にも普段の能天気さを失わず、薄暮の海戦に臨んだ。幸い見通しの良い晴天と逆光を利用し、接近しつつある敵駆逐艦と軽巡を一方的にアウトレンジで撃破しつつ艦隊は進んだ。ただ、戦闘開始から三十分程経過すると、未確認の敵から一方的に砲撃を受け始め、周囲には巨大な水柱が立ち上り始めた。

「ど、どこですか？ どっから撃たれてますか？」

比叡が叫ぶが、答えられる者はいない。

『足柄より比叡。方位〇四〇方面に新たな敵影。ル級戦艦！ それも

「二隻！」

「ど、ど、ど、どうしましょう？ やりますか？ やるなら徹底的に戦いますよ！」

元気な比叡よりも、むしろ躊躇っていたのは司令部要員達の方だ。もともと本土の軍令部付きの者達なので、フルカワがどういうつもりで自分たちを送り込んだのかはだいたいわかっている。

「比叡、前回の海戦を覚えているだろう。敵にありつたけ撃ち込んで一時離脱だ。攻勢は本隊と一緒にの時に実施すべきだ」

戦艦比叡の戦闘艦橋に詰めていた作戦参謀の一人が言う。

「ええ、もう逃げるんですか？」

比叡は急な方針転換に戸惑うが、もう一人の参謀もうなずく。

「扶桑も山城もいない以上、致し方あるまい。誠に残念でならない。さあ命令を伝え、敵を一撃して本隊に戻るぞ！」

「はあ……」

比叡は拍子抜けしつつも命令を艦隊に伝える。

「はあ？ 離脱ってどういうことよ！ まだ敵の先鋒とちよつと撃ち合っただけじゃない！」

重巡足柄の主砲指揮所で艦娘の足柄は驚きの声をあげる。一方、一緒に乗り合わせていた提督はうんうんとうなずいた。

「き、きつと、これは司令部なりの敵を誘い出す作戦ですよ。敵をやつつけるのは最適な海域に誘い込んでからなんですよ」

「そんな説明まったく聞いていないわ？ 司令部はどういうつもりなのかしら……うにゃあ！」

猛烈な衝撃が重巡足柄を襲い、二人は戦闘艦橋の床に盛大に転ぶ。「いっつう……。被弾したわ。後部艦載機格納庫に一発。火災発生、これより消火にかかる。艦載機が使えなくなつたわね」

足柄はぶつけた肘をさすりながらすぐに各砲塔に反撃を命じる。一方、提督はガタガタ震えだして叫ぶ。

「反撃なんていいから、早く逃げましょう！ こんな所にいたら死んじゃいますよ！」

そう言っている間に左舷を航行中の摩耶の後部甲板も爆煙に覆わ

れ四番砲塔が吹き飛ぶのが見えた。

「敵戦艦の砲撃だわ！ クツソ〜！」

足柄は、自艦の向けられる砲塔全部で、敵の戦艦めがけて反撃するが、この状況では踏み止まる事もできず、日が沈みつつある西へ艦首を向けて脱出を初めた。艦隊は西へ向け、算を乱し無秩序に逃げ始めた。

これは後の分析で分かったことだが。第一次ブ島沖海戦に参加した艦船に比べ彼らが幸運だったのは、敵深海棲艦が包囲網を構築する前に味方が脱出を開始したこと、そして、深海軍も前回に比べ、あまり本気で連合艦隊を追い詰める意欲が感じられない対応を続けたことだった。

比叡や足柄達は自慢の快速航行で、比較的容易く敵戦艦を振り切り脱出したが、敵の軽巡や駆逐艦から執拗な追撃には苦しめられた。徐々に小型艦の落伍が相次ぐなか、最後に彼らを救ったのは、空母翔鶴から飛来した雷撃部隊と急降下爆撃隊だった。追撃してきた深海軍の駆逐艦や軽巡洋艦は、空からの薄暮攻撃により一斉に回避運動と対空射撃に忙しくなり、全力で離脱する敵の追撃どころではなくなつた。それはまるでかつてサマル沖で栗田艦隊の攻撃に立ち向かうタフィ3の空母艦載機の奮闘を彷彿とさせるものだった。その後、第三分隊は駆逐艦を中心に分隊の四分の一の艦船を喪失しつつも夜中までに危険海域からの離脱に成功した。

最後に敵の脅威にさらされたのは軽巡大淀が旗艦となつている第四分隊だった。重巡加古と複数の軽巡、駆逐艦が残った本隊は戦艦比叡から離脱の報告を受けてタロタロ島への撤退を決定した。

大淀はその命令を受けて、違和感を抱きながらも少しほっとした。

——作戦の失敗は残念だけど、前回のような大敗にならなかつただけ良かったのかもしれないわ

一方、司令部要員たちの間には、大淀とは全く違った理由による安堵感が広がっていた。

「なんとか、うまく作戦を収めましたね」

司令部会議室で作戦参謀がフルカワに言った。フルカワも当初の

目論見通り、少ない被害でなんとか作戦を一段落できる目処が付き安堵の色を隠さない。

「一時はどうなることかと思っただが、これで軍司令部への顔も立つ」「輸送船団は大丈夫でしょうか？」

「今すぐ取って返せば、夜中のうちには合流できるだろう。陸軍の連中は、本来行くはずだったニューガリア戦線まで送り届けてやれば文句も言うまい」

そこへ司令部要員の一人が書類を持って会議室へやってきた。

「現時点で集計した我軍の損失状況です。駆逐艦・軽巡を中心に喪失は最大でも二十隻に届かないかと……」

『尊い犠牲』としては十分だ。我々が十分に戦った証だ」

フルカワは声を潜めてそう答えた。

そんな彼らが本当の恐怖を感じるのは日没後のことだった。分隊は潜水艦を警戒し、複縦陣で之字運動をしつつタロタロ泊地を目指していた。そこへ闇夜のなか、突如南方から砲撃を受け始めた。巨大な水柱が軽巡大淀の右舷前方百メートルに突然吹き出し、艦がぐらりと揺れる。水柱は立て続けに艦隊の周囲を打ちさえ、第四分隊、特に人間が多く乗っていた大淀の艦内は恐慌に陥った。

「ど、どこだ！ どっから来た！」

「わかりません。見張りは！」

その時、左舷方向にいた随伴の駆逐艦一隻が突然火の玉になって吹き飛び、燃える鉄くずになってあつという間に海面下に姿を消した。

海面で漏れ出した重油が巨大なキャンプファイヤーのように燃え上がる様子を目の当たりにし、大淀とフルカワらはしばらく甲板で声を出すこともなく戦慄していた。

「各艦、周囲警戒を！ 敵の位置を知らせてください！」

大淀は我に返って無線電話で呼びかけるが艦隊は大混乱に陥っていた。

波間に浮かぶ駆逐艦の燃える残骸を見ながら大淀は確信した。

——この砲撃！ きつと戦艦だわ

大淀には心当たりがあった。翔鶴からの連絡で、当初ブ島西方には

三隻の戦艦の存在が確認されていた。ただ、先に第三分隊からの報告では接敵した戦艦は二隻のみ。残り一隻はこの第四分隊を捕捉するため全力で西進していたのだ。大淀は絶望感に襲われつつ唇を噛んだ。

「きつと潜水艦の触接を受けていたんだわ……」

『こちら朝霜！ 八時方向に発砲炎が見えたぞ！ 敵はあそこだ！』

駆逐艦朝霜からの無線通信が大淀に届く。

一部の艦は、闇夜の海上で敵を探そうと勝手に探照灯を点灯し、かえって集中砲火を浴びて爆沈する。また統制を失って各艦バラバラに主砲を撃ち返すが、発砲の閃光目掛けて撃ち返され、いたずらに被害を拡大することになった。

「各艦、全速力で西方へ退避！ 反撃よりもまず距離をとって！」

大淀は無線電話でそう叫ぶが、僚艦は次々に餌食になっていく。

大淀は司令部施設横の甲板から艦橋へ走り出した。戦闘中、艦娘はできるだけ艦橋にいるべきだ。それにつられてフルカワ司令長官代理も艦橋へ向かった時、敵の砲弾が一発、浅い角度で大淀の司令部施設がある後部上部構造物の左舷外板を突き破って炸裂した。

後の調査で、巡洋艦クラスの中・小口径弾が水平に命中したものと推定されたが、上部構造物の天井が爆発によってめくり上がり、司令部施設内は炎と煙に覆われた。

「うわあああああ！」

フルカワはつい一分前まで自分がいたところへ敵の砲弾が命中したため、恐怖の叫び声を上げて甲板に膝をついた。取り巻きの参謀らも同じく驚愕の表情のまま固まってしまった。

「被害状況確認！ 緊急消火！」

大淀は自分の艦に命じつつ司令部施設へ取って返すが、上構のハッチを開けると、黒煙がもうもうと吹き出し、煤と血にまみれた参謀や司令部要員数名が外甲板へ転がり出てくると、ぼったりと倒れて動かなくなる。ゲホゲホと咳込みながらもがいている者を除き、身動きしない者はすでに息が止まっていた。施設内では大淀の指示で放水が始まり、その後も負傷者が施設からよろよろと這い出してくる。

「皆さん！ 手を貸してください！」

大淀が負傷者の搬出しながら、腰を抜かして動けない参謀連中へ叫ぶ。なかには泣き出したり失禁したりする者もいるなか、幸運にも無傷だった要員のうち二〜三人がようやく我に返って大淀を手伝い始めた。

大淀は救助、消火活動に取り掛かりながらも艦を全速で航行させつつ艦隊の離脱を指揮する。

——明石、今回はわたしも帰れないかもしれない……

ガスマスクを装着し、負傷者を外へ運び出している間にも敵の攻撃は続く。大淀はふとそんな弱気の虫に襲われた。

敵の攻撃から三十分、ようやく最初の虚脱状態から脱した司令部要員達が負傷者の救助を手伝い始めた頃、敵の攻撃が突然止んだ。洋上には被弾してチラチラとオレンジ色の炎を上げつつ懸命にスクリューを回す味方の艦が見えるだけ。海は突然、穏やかさを取り戻した。

大淀はガスマスクをはずして死傷者が横たわる甲板に呆然と立ち尽くす。敵の砲弾は居住区を直撃したのみで、航海には何の支障もなかった。すでに火災は鎮火し、司令部構造物のハッチや破損部位からは白い煙が闇夜の空に流れて霧消する。

大淀は、目を閉じて叫び出したい衝動をこらえ、気丈に第四分隊の僚艦へ改めて周囲警戒と襲撃への備えを命じた。

完全に戦意を喪失したフルカワ司令長官代理を含む生き残りの司令部要員に代わり、大淀はなんとか連合艦隊全艦への指示を継続し、タロタロ泊地もしくはシユーズ・ベラ島への帰還命令を発信した。大淀は再度の深海軍による追撃を警戒していたが、幸いそれは杞憂に終わり、関わったすべての者に苦い記憶を刻みつけて、第二次ブーメラン島沖海戦の幕は閉じた。

ブーメラン島・ポート・フリスビー。すっかり日が落ちた港内では輸送船と輸送艦に陸軍兵士が行列を作って乗船橋を渡り、小隊ごとに船倉へと降りていく。撤退準備はまさにクライマックスを迎えてい

た。少し離れた棧橋では駆逐艦白雪、弥生、卯月がすでに機関の暖機を完了し、主砲や対空機銃のカバーもすべて取り去り、戦闘準備を整えていた。

卯月は艦橋の窓に寄りかかり、照明に照らされた岸壁で列を作っている兵士たちの様子を眺めていた。陸軍の兵隊達は、前線から遠い配置にあった部隊から順番にポート・フリスビーへ集結し、中隊ごとに火器や背囊、鉄帽を手放して一箇所に集積し、身一つで輸送船へと乗り込みはじめ、すでに部隊約四千人のうち半数以上の二千七百人が乗船を完了していた。投棄した武器や背囊は出港直前に爆薬やガソリンで処分し離脱する手はずになっており、司令部付きの兵士らがガソリンタンクや爆薬の準備を進めていた。岸壁には、これまで数ヶ月間兵士一人一人の命を支えてきた背囊や小銃の山ができている。「もう少しで帰れるぴよん……」

卯月は、艦橋でそう独り言をこぼしたが、夕方まで沖合から盛んに聞こえていた砲声がすっかり止んでいた。最後の無電では、次回の襲撃と呼応して脱出するとの連絡が届いていたが、それがいつになるのか具体的な指示はないままだった。

急に港の輸送船の方から笛の音がいくつも響き、行列を作っていた兵隊が回れ右をして反対方向へ順番に走り出した。どの船からも慌ただしい声が聞こえ始める。

「各小隊、自分の小銃、背囊、鉄帽を回収後、速やかに原配置へ復帰せよ！ 繰り返す……」

「ど、どうしたぴよん？」

卯月は異変を感じ甲板へと降りた。弥生も同様に棧橋へと降りている。責任者の白雪も不安そうに岸壁の端から陸軍部隊の様子を見守っている。そこへ、あきつ丸が棧橋のある方へ叫びながら走ってきた。

「中止ー！ 中止であります！ 撤退作戦は中止となりました！ 艦娘の皆さんも出撃体制を解除し、敵との白兵戦に備えてください！」

「中止って、作戦は一体どうなったんですか？」

「誠に残念ではありますが……。連合艦隊は封鎖艦隊の撃滅に失敗。すでに撤退したそうでありませ……」

あきつ丸は遠慮と失望の入り混じった感情を隠そうとしながら言いにくそうに言った。

「そんな……。今回も駄目だったの……」

「撤退準備のため戦線の防備が手薄になっており大変危険な状況のため、皆さんも陸戦の準備を頼みます。深海軍がこの機に乗じて陸からの攻勢を強めるかもしれません」

あきつ丸の言う通り、ブ島中部のクロコダイル・クリーク付近には、決死の殿部隊だけで戦線に支えている状況で、他の兵力はみな北端のポート・フリスビーに集まっている。今は一刻も早く通常の守備体制に復帰させないと、一気に港まで攻め込まれるかもしれない。あきつ丸は栈橋に上がった駆逐艦娘三人にそう伝えると、再び陸軍のいる岸壁へと走っていった。

「第六小隊整列！ 総員点呼ー！……よし！ 第二陣地まで総員駆け足、はじめ！」

号令が至るところから聞こえる。兵士たちは次々に下船すると自分たちが置いた背囊と小銃を手に駆け足で街へ、そしてその向こうの守備陣地へ向かっていく。

「こ、こんなのあんまりぴよん……」

卯月は、先程まで生還への期待に表情をほころばせていた兵士たちの心中を思い、目尻に涙がたまってきた。隣の弥生もグスツツと鼻をすすった。

「弥生、こんな島でやられてしまうなんて、いやだよ……」

「だめだぴよん！ うーちゃん達が泣いちゃだめ！ まだ何も決まっていないぴよん！」

卯月は鼻声になって弥生の肩をゆする。

「そうですよ。……わたし達は前の世界でもっと酷い状況だっ……知ってるんですから、そんな……。泣いてはいけません」

白雪は声を詰まらせながら、仲間の駆逐艦二人を抱き寄せて必死に涙をこらえた。

再び、タロタロ泊地昼下がり。戦艦扶桑と山城を海軍工廠へ引き渡したトビウメ提督は不知火にラムネ瓶を返し、周囲を見回した。

湾内の駆潜艇や海防艦では、いずれも出港に向けた準備が進んでいる。帰還し一安心したものの、まだ海戦は終わっていない事を思い知らされる。まだ洋上には撤退中の味方艦隊が大勢残っている。

すぐに内火艇が駆逐艦不知火の右舷に近づいてきた。それに気付いた不知火がすぐに上甲板へ上がってきた。内火艇には江戸時代の渡世人のような服装の艦娘と第二種軍装を着込んだ年輩の瘦身の物静かそうな提督が乗り、トビウメ提督と不知火の方を見上げた。その年輩の提督が軽く会釈したので、トビウメ提督と不知火も慌てて頭を下げる。

不知火が艦の舷梯を下げると、提督と艦娘は甲板へと上がってきた。た。

「サンダーランド泊地の第十混成艦隊の提督をやっているナスです。こっちは私の秘書艦で、伊勢型の日向」

ナス提督は二人にそう挨拶した。トビウメ提督と不知火は不意の来訪者に驚きつつも、自分達を救ってくれた提督と艦娘へすぐに頭を下げてお礼を伝える。ナス提督はそれには軽くうなずいて応えるのみで、すぐに来訪の目的を伝えた。

「味方の艦隊の多くが未だ撤退の途上です。一方、護衛艦の数がとても足りない。撤退支援のためにトビウメ提督指揮下の駆逐艦四隻にも是非、協力をお願いしたい」

トビウメ提督と不知火はすぐに緊張した表情で顔を見合わせ、うなずきあった。

「もちろん協力します。ただ、どの艦も爆雷を使い果たしています。それがないと有効な対潜護衛にはなりません。どうしましょうか？」

任侠者のような艦娘の日向が仏頂面で腕を組んだ。

「爆雷が不足している。一隻あたり十発も配分できればいいだろう。ただ見張りも火力も多い方がいい」

「そういうわけです。我々もすぐに出るので、一緒に来てくれればありがたい」

ナス提督の言葉を受けトビウメ提督はうなずく。

「わかりました。爆雷を積んだらすぐに抜錨します。大丈夫だね？」
「はい司令」

そう問われ不知火もうなずいた。

ナス提督と日向が舷梯を下りるため足をかけたとき、もう一艘の内火艇が近づいてきた。カーキ色の軍服を着た陸軍の将校と兵士がこつちを見上げている。不知火は険しい表情で新たな来訪者を見据えた。すぐに兵士の抱える小銃と銃剣、将校の腕章に書かれた「憲兵」の文字に気付き、事態の悪化を想定した。

「トビウメ提督！ 乗艦を求めろ！」

将校の一人が大声で叫ぶ。高圧的な物言いだった。不知火の脳裏で最初の警告灯が灯る。その一隊は不知火が許可する前に舷梯に内火艇を寄せると、将校を先頭に乗り移りはじめた。

——チツ！ 無粋な奴等……

不知火はわき上がる殺意を押さえて、すぐに白兵戦用の艤装の保管場所まで何分でもどり着けるか計算し始めた。一方、ナス提督と日向は顔を見合わせる。

憲兵隊は無遠慮に甲板へ上がってくると、トビウメ提督を囲んだ。正面に将校二人、四方には銃を持った兵士四人が立つ。銃にはいずれも負い紐で肩に掛けられていたが、いずれの銃口にも銃剣がつけられており、こちらを威圧する意図は明白だ。

「ヤムヤム島泊地のトビウメ提督ですね。連合艦隊司令部の命により、ご同行を願います」

トビウメ提督は狼狽しつつもうなずく。

「報告には行かないといけないとは思っていますが、たった今、艦隊の撤退支援の要請を受けました。その後に出頭するのはだめですか？」
「申し訳ありませんが、緊急の出頭をお願いしたい」

憲兵隊の責任者は傲慢そうに顎を傾けてトビウメ提督の言葉を遮った。

隣に立っていた不知火はわき上がる殺意を押さえ、その脳裏では次にとるべき行動を高速で計算していた。もし憲兵どもが汚い手で司令に触れようものなら、まず左にいる兵隊の右膝を一蹴りで粉碎し、肩の小銃の銃身を掴んで右の兵士の喉笛を抜き身の銃剣で一突き。しよせん相手は前線から遠い、修羅場を知らない内勤の兵士ゆえに突然赤い噴水を浴びれば度肝を抜くはずだ。将校二人は腰のホルスターに拳銃小を吊っているから、すぐにそれに手をやるだろうが抜かせはしない。手刀で手前の将校の鳩尾を心臓ごと押しつぶし、開いたホルスターから南部十年式拳銃を奪って、持ち主の将校に銃口を押しつけ、後ろの将校と兵士へ弾倉一杯、貫通弾をお見舞いしてやればいい。最後に片脚がつぶれて泣きわめく兵士の頸をねじ切れればそれで済む。仮に誰か取り逃がしても、憲兵どもが内火艇へ逃げ出せば都合だ。そうすれば内火艇が煙突横の三連装25ミリ対空機銃の射界に入る。むしろそのほうが甲板も汚れず簡単に済む。

——ふふ、完璧ね……

憲兵隊を始末したら泊地の司令部施設と通信所、憲兵隊詰め所を主砲で破壊し、邪魔する警備艇も魚雷で黙らせて、ヤムヤム島まで司令を乗せてトンズラするのだ。荒潮は……好きにするだろうが、多分ついてきてくれるだろうという予感があった。

「連合艦隊司令長官代理からの命令です。その身柄を預かります」

憲兵の言葉とともに両側の兵士がトビウメ提督の両腕につかみかろうとし、不知火が兵士の膝頭を見据えながら左足を持ち上げた。破局の寸前、その場にいた者すべてを救ったのはナス提督だった。

「ちよっとお持ちを。憲兵隊は彼に何の嫌疑があつて身柄拘束するか説明を。我々提督を拘束するには、明確な法令違反の疑いがあるということだ。嫌疑は何ですか？」

ナス提督が憲兵とトビウメ提督の間に割って入った。戦艦娘の日向も銃を持った兵士を牽制するようにトビウメ提督の脇をガードする。憲兵隊を殲滅するつもりだった不知火は毒気を抜かれて様子を見守るしかない。

憲兵の二人は顔を見合わせて困惑顔を浮かべる。というのも、海軍

と名乗っていても、この世界にとばされてきた提督はいずれも軍人ではない。軍紀も一般社会並みの常識的なもので、提督に関わる海軍の軍法も、重い罰則が設けてあるのは殺人や盗み、艦娘への狼藉、深海軍との通謀、破壊工作を防止するための条項ばかりで、明確な理由もないのに憲兵隊に逮捕されたり処罰されたりすることは本来あり得ない。今回の憲兵隊の動きは明らかに越権行為だった。

「いえ、自分らはただ連合艦隊司令部から、トビウメ提督を当泊地に留め置くよう命じられただけで……」

憲兵隊の将校は急に狼狽しだした。

「GFの司令部が、ね……。今、その命令を出した連中が、未帰還になるかどうかの瀬戸際なんだがな……」

日向も自分の腰に差した軍刀の柄をこれ見よがしに撫でながら言う。

「残存艦隊の無事の帰還のためにも、トビウメ提督にも出撃を依頼したところです。命令を出した司令部が全員帰ってこなかったとしたら、今回の越権行為の責任はすべて貴官らの責任となりますね」

畳みかけるように言うナス提督と日向の前に、兵士達は困惑顔に、そして将校らの顔は窮地に立たされ青ざめてきた。

トビウメ提督と不知火は安堵と驚きの様子で、ナス提督と日向が眼前で憲兵隊をやり込める様を見ていた。情勢有利と見た不知火は、甲板に設置してある一番近い対空機銃をゆっくりと旋回させながら、丁寧な口調で憲兵隊に下船を促す。

「憲兵隊にあらわれては、十秒以内に艦から退去されることを、強くお勧めいたします。そうでない場合、作戦行動に対する障害として、御身の安全は保証いたしかねます」

不知火は押し殺していた殺意を今や全身から発散させて、最凶の笑みを浮かべた。今まで自分達が死の縁いた事にすら気付かなかった憲兵隊も、ようやく自身の危険を自覚するに至った。

「ほ、本日はこれにて失礼するー」

憲兵達は将校を先頭に、我先に滑り落ちように駆け下り内火艇に飛び乗ると、急いでもやい綱を解こうとするが、慌てているせいでなか

なかほどけないようだ。不知火はこれ見よがしに対空機銃の照準を内火艇にあわせて、直径二十五ミリの弾薬を装填する、ガチャリという金属音を鳴らして見せた。

憲兵達は、早くしろとか、絡まってますとか叫びながら悪戦苦闘し、とうとう銃剣でもやい綱を切り落として棧橋へ遁走した。不知火は機銃弾で内火艇を粉碎する誘惑をなんとか振り払った。

「ふん、十二秒もかかって、時間切れでしたよ」

不知火はよたよたと去っていく内火艇の艇尾を睨みなが言った。

トビウメ提督は居合わせたナス提督と日向に改めて頭を下げて、お礼を言うと、ナス提督は軽くうなずき、日向に爆雷の手配を命じた。

「GFの者達は油断していると平気で勝手をやるので、地方にいる我々は注意しておかないといけませんよ。では、すぐに兵器廠から各駆逐艦にバージで爆雷を届けさせます。積み込み次第出港するので、引き続き道中の対潜哨戒をよろしく」

「はい、わかりました」

トビウメ提督は再び真剣な表情に戻ってそうなずいた。

「それはいいとして……。忠義心に篤すぎるのもちよつと考えものだぞ、不知火」

去り際に、日向が苦笑いを噛み殺してそう言うので、トビウメ提督は意味が分からず、日向と不知火の顔を驚いた様子で何度も見返す。

「何のことでしょうか？」

不知火はぶいと不機嫌そうに顔を背ける。

「くれぐれも冷静にな」

日向とナス提督は少し困ったような笑顔を残し舷梯を降りていき、甲板には、しらばつくれる不知火と、困惑顔のトビウメ提督が残された。

入れ違いにクレーンを備えたバージが駆逐艦不知火はじめ指揮下の四隻に横付けされ、ドラ缶のような形の爆雷を積み込み始めた。そして戦艦日向や駆潜艇、タグボートとともに三十分後には錨を上げて再び外洋へとスクリューを回し始めた。

さらに時間は遡り、トビウメ提督や不知火が夜中にASWに忙殺され、連合艦隊が手近な泊地への帰還に必死になっている頃、はるか西方で戦況を注視してきたメジロ泊地も、第二次ブ島沖海戦の帰趨が明らかになったことで重苦しい空気に包まれていた。

すでに日も沈み、司令部庁舎はすっかり静かになっていた。提督執務室でマツエダ提督はブランデーグラスに琥珀色のブランデーを四分の一ほど注いでからソファアの背もたれに大きく寄りかかった。ブ島海戦にはほとんど関与していない立場だが、自分も直接の当事者だったかのような疲労感に襲われていた。

通信を断片的に拾っているだけで正確な損害の全容はわからないが、陸軍部隊救出も逆上陸も失敗し、敵に効果的な打撃を与えた確証もないまま作戦は終了した。失敗の主要な原因になった戦艦の衝突事故の当事者が旧知の山城だったことも、マツエダ提督はじめ高雄や衣笠ら元同僚ともいえる艦娘の心中にも暗い影を落としていた。同時にマツエダ提督は、那智のことが心配になっていた。那智が作戦前から、トビウメ提督やヤマヤム泊地の原隊のことを気にしていることは明らかだった。本人は努めてそれを隠そうとしていたが、表情や行動の端々を見るに、それははなから無理な試みだった。マツエダ提督としては複雑な思いにならなかつたわけではないが、那智の心配は人としては当然のことに思えたので、極力その気持ちに寄り添うことにした。そして作戦では、トビウメ提督と山城がこのような大失態を演じてしまい、那智の心中は察するに余りある状況になってしまい、マツエダ提督そして高雄も、那智にどう接するべきか考え込んでしまった。

執務室のドアがノックされ、高雄が入ってくる。

「提督、那智さんは今入浴を終えて自分の部屋に戻りました」

「そうか。ありがとう」

マツエダ提督はうなずいてため息をついた。今頃、自室で酒を飲んでいるのだろうか？と想像した。一緒につきやっつてあげたい気分だが、那智からすれば余計なお世話になってしまいうだろう。

「仕事の時間以外はずっと通信室に詰めたきりでしたから、きつと疲

れているはずです。わたし、なかなか掛ける言葉がみつかりません」
高雄がいたたまれないという表情で言った。

「私もそうさ……」

「提督、あの件、那智さんにはどうしましょう？」

高雄の質問することはわかっていた。ソファー前のテーブルに置かれた最新の受信電文だ。それは四十分前、那智が交代で通信室を出た直後に受信したもので、ブ島西方から撤退する連合艦隊の軽巡大淀からフルカワ連合艦隊司令長官代理名義で、タロタロ島憲兵隊へ発信された命令文だった。

『タロタロ島駐留憲兵隊ハ、駆逐艦不知火ガタロタロ泊地ニ帰港シダイ速ヤカニ、トビウメアツオ提督ノ身柄ヲ拘束シ、連合艦隊司令部ガ帰還スルマデ基地内ニ留置セヨ』

「司令部も完全に頭に血が上ってる証拠だ。軍人の真似事も行き過ぎだ。こんな乱暴な命令見たことがない……」

マツエダ提督はテーブルの電文用紙を摘むとそうウンザリしたように言つて再びテーブルの上に放つた。用紙は風を受けて不規則に回つて絨毯の上に落ちる。高雄は律儀に用紙を拾い上げる。

「これ、どうされますか？」

「こんなのとても見せられない。処分しちゃって……。くれぐれもこの件は彼女には内密にね。通信室の担当者にも口止めを」

高雄は深くうなずいた。

「ええ、判つていますわ」

マツエダ提督はブランデーを口に含みながら、宿舍の個室に下がつた那智のことを想つた。

——恐らく今夜は眠れまい……。きつとトビウメ君もな……

そういうマツエダ提督自身が様々な想いにさいなまれ、眠れぬ夜になりそうだった。

銃剣とオムレツ弁当

タロタロ泊地。駆逐艦不知火は日が暮れた港湾基地の建物をぬって、バスケットを抱えながら泊地の司令部庁舎の前へとやってきた。庁舎内全体が喧騒に包まれていたが、奥の中会議室の付近には「憲兵」の腕章をつけた陸軍の兵士二人が小銃を担いで入り口を見張っている。

「トビウメ艦隊の秘書艦不知火です。司令に差し入れです」

兵士二人が不知火をじろりと見下ろす。不知火も負けじと殺意百パーセントの視線を返すと、一人がちよつとたじろぐ様子を見せた。それは一昨日わざわざ駆逐艦不知火まで乗り込んできた憲兵隊の一人だった。

「司令にお取次ぎを」

兵士らは気まずそうに咳払いして会議室のドアをノックした。

「トビウメ提督の秘書艦が来ています」

中から入れと声が聞こえ、兵士がドアを開けると、十畳ばかりの会議室には、司令部付の参謀や憲兵隊付の陸軍の士官ら四人が尋問官のごとく部屋の真ん中に座っているトビウメ提督を囲んでいた。中心にはトビウメ提督がまるで死人のような顔で座っている。

「司令に夕食を届けに伺いました」

参謀の一人が舌打ちして腕時計を見る。

「ちよつと休憩とする」

四人はそう言うのとポケットから煙草やライターを取り出しながら廊下へと出てきた。

入れ違いに会議室に入りドアを閉めると、トビウメ提督はようやく儂い笑みを浮かべて見せた。

「大丈夫ですか？ 司令」

「休み無しでしんどいけど、まあなんとかね……」

憲兵隊の身柄拘束から救ってくれたナス提督の要請を受け、トビウメ提督は引き続き、不知火と荒潮を伴って残りの味方艦隊の撤退援護のため駆潜艇やタグボートなどと一緒に外洋へと進出し、なんとか撤

退しつつある第三、四分隊の残存艦が敵潜水艦隊の餌食にならないよう対潜哨戒を続けながら丸一日かけてほとんどの艦を無事にタロタロ泊地まで護衛することができた。すでに第一、第二分隊の水雷戦隊も、空母翔鶴らの機動部隊とともにシユーズ・ベラ島へ撤退に成功し、作戦行動は完全に終了した。

ただ泊地に帰ってきたトビウメ提督らを驚愕させたのは、直撃弾を受けた旗艦大淀の司令部施設の被害だった。たまたま連合艦隊司令部の要員らが詰めていたところに敵弾が飛び込んだため、参謀や幕僚、司令部要に数名の犠牲者と多くの重傷者が出て、大淀が入港してからの港内は修羅場になった。当然、すんでのところまで難を逃れたフルカワ司令長官代理のトビウメ提督への怒りはすさまじく、即時身柄拘束を憲兵隊に命じたものの、今度もあの年配のナス提督が割って入り庇ってくれたのだった。

ただ戦艦二隻が戦闘不能に至った経緯には説明は必要で、寄港後、身柄拘束を伴わない形での報告と聴取を受けることになった。それからざっと十二時間、トビウメ提督は会議室の一室で調査官が入れ替わり立ち替わりするなか、事故について同じ内容の供述を五回も繰り返し説明することになった。

また特に問題になったのが、何故艦娘の山城が正気を失う事態になったのかという点だった。山城から話が聞けない状況で、憲兵隊や司令部はすぐに、トビウメ提督が作戦中の艦娘に破廉恥な狼藉を働いたという疑いを持った。実は憲兵隊による提督の検挙件数の半数以上が、提督による艦娘に対するセクハラ、痴漢行為という深刻な実態があり、今回も真つ先にそれが疑われることになった。

「そもそも、数々の修羅場をくぐってきた艦娘が、床に嘔吐された程度で我を失うような事態に陥るか！　嘘をつくならもつとまともな嘘をつけ！」

司令部付きの調査官は、トビウメ提督の供述を聞くやそう吐き捨てた。トビウメ提督自身も全くその通りだと思ふものの、こればかりは真実だからどうしようもない。山城の最大の理解者である姉の扶桑も頭の打ち所が悪く、回復には週単位の療養が必要と言われており、

山城の性格について参考になる供述を得ることはできない。普段から提督を知る指揮下の艦娘達はそろって、トビウメ提督には普段から気弱で、艦娘にいたずらをする度胸などないことを憲兵隊に訴えたが、憲兵隊は、身内の証言であてにならないとして全く取り合わない。艦娘にいかかわしい事をして作戦を失敗させ、味方に多くの犠牲を出させたとなれば、もはや社会的には死んだも同然だ。

——もしそう決めつけられたら、もう那智さんに合わせる顔がないな……

そんな絶望の底にいたトビウメ提督を救ったのは、憲兵隊に呼び出された、山城の修理を担う工廠の担当者と工作艦娘の明石だった。

「ああ、あった、あった。山城の戦闘艦橋だっぺ？ まったく、ゲロくらい自分で掃除しとけよって思ったけど、戦闘中ならまあしよーがねーかって、うちの班でジャンケンに負けた奴に掃除させたよ。なあ明石ちゃん？」

無精髭を生やした太鼓腹の担当者は安全第一ヘルメットを抱えながら言った。

「ええ、最初見たときはうげってなりましたけど、大淀の司令部施設の惨状に比べればまだマシですね。あっちはちよつと言葉にできない状況でしたから……。それにしてもあの程度で動けなくなっちゃうとは、艦娘にも思わぬ弱点があるものですねー」

明石も担当者に向かってうなずく。二人の供述により、トビウメ提督の痴漢疑惑はなんとか晴れた。

「みんな心配しています。耐えられなくなったら言ってください。憲兵を始末してすぐに脱出できます」

不知火はバスケットからお茶の入った水筒と弁当を包んだ風呂敷包みを取り出しながら、小声で言った。

「またそんな物騒なこと言ってる……。大丈夫、もうすぐ終わるよ。だから変なことは考えないで。このお弁当は？」

「先程日向さんから、司令への差し入れとして頂きました。どうも間宮さんお手製のようです」

「ええ？ また間宮さんが？ どうして？ ……まだ温かいね」

アルミの弁当箱の蓋を開けると、鮮やかな黄色いオムレツに真っ赤なトマトソースがかかった洋風弁当が顔を出す。ソースの匂いが二人の鼻腔をくすぐる。夕食をすでに済ませていた不知火も思わずつばを飲み込んだ。

「ぬいぬいも一口食べる？」

「え？ いや、これはあくまで司令のために頂いたもの。不知火が頂戴するわけには……」

「いいから、いいから」

慌てて首を振る不知火に、トビウメ提督は割り箸を割って、オムレツの端を取り分けると弁当箱の蓋に載せて差し出す。

「お箸これしかないから、反対の端を使つて食べて」

「あ、ありがとうございます……」

不知火はバツが悪そうにそう言うのと、割り箸を受け取り、オムレツからこぼれたチキンライスをかき集めてから口に入れる。ふわふわな卵とトマトソースが口いっぱい広がる。思わず不知火は目を閉じ、ゆつくりと咀嚼し卵とライスとソースのハーモニーをしばし堪能した。名残惜しくも不知火はすべてを咀嚼し飲み込むとようやく目を開けて我に返る。トビウメ提督が口を半開きにしてよだれを垂らしそうな顔で不知火を見つめている。不知火は慌てて割り箸をぬぐって提督に返す。

「す、すみません。さあ、早く召し上がってください」

「う、うん、なんかすっごく美味しそうな顔してたから……」

トビウメ提督はつばを飲み込み、割り箸を受け取るとオムレツ弁当の残りを食べ始めた。

「これは……、なかなか……、癖になりそうだね……」

「ええ、自分で焼いた卵焼きとは比べ物になりません」

不知火はそう言いながらコップに麦茶を注ぎ提督へ差し出す。提督はありがとうと言ってコップを受け取り、一気に飲み干す。

「昨日、初風と早霜の修理が完了しました。戦艦を除き、ほぼ全戦力を回復しましたが、重巡の主砲弾薬の供給が滞っており、現在の搭載率はおよそ七割です」

それは、良かったとトビウメ提督はうなずいた。

「それにしても、司令部もずいぶんと時間を取らせませぬ。山城の急性ストレス障害の原因は、司令部や憲兵隊もようやく納得したのとこのでしたが？」

「え？ ああ、そうだね。同じことを何回もしやべらされているうちに、対潜戦の段取りでもいろいろとね……」

トビウメ提督は歯切れ悪そうに言った。

「そういえば、昨日は葬式だったって？ 代わりに出てくれたみたいだね。嫌な役目やらせちゃって御免……」

「ええ、どういう風の吹き回しか、初風と一緒に来てくれました。ただの儀式にすぎません。どうということもないですよ」

昨日は軽巡大淀に乗艦していて戦死した司令部要員五人の合同葬儀が営まれ、各艦隊の代表者が参列した。トビウメ提督も出席しなければいけない立場だったのだが、取り調べのため身柄を押さえられているため、なんとか出向かずに済んだのだ。もし参列していたら、「作戦を失敗に導いた大罪人」として一身に怨嗟の視線を集め、今頃はきつと胃に穴があいていただろう。そういう意味ではこの取り調べは不幸中の幸いでもあった。不知火と初風は、喪章をつけて焼香を終えるまで、大勢の提督や艦娘から憎々しげな視線を向けられたが、気丈な態度ですべてをはねのけ、最低限の義務を果たしたのだ。たださすがの不知火にも厳しい時間であったことは否めず、半ば強引に同道してくれた姉妹艦の存在はありがたかった。

「司令のほう心配です。新しい問題でも発生していませんか」

「え？ いやあ、大丈夫、ははは……」

トビウメ提督はそう言って視線を宙に彷徨わせる。

実は山城と扶桑の衝突事故の他にもう一つ、トビウメ提督の指揮に対する責任を問う懸案が浮上していた。その追求の急先鋒は陸軍の師団司令部だった。トビウメ提督も驚いたことに、師団司令部のトビウメ提督に対する怒りは、あの敵潜水艦の狼の群れから逃れるための、あの悪夢の一夜の出来事に起因していた。

「トビウメ提督、貴官は戦艦二隻と陸軍の輸送船五隻を護送中、陸軍の

護送船団に対し、指示に従わない場合は船団を雷撃すると脅迫したという抗議が、陸軍師団司令部から寄せられている。これは事実であるか？」

「ええっ、きよ、脅迫って、そんなこと……」

調査官からそう詰問されたトビウメ提督は思わず言葉を失う。全く身に覚えの無いことだった。

「師団司令部は連合艦隊司令部に対し、この件について、嚴重に抗議し、説明責任と責任者の処罰を要求してきている」

トビウメ提督は調査官から突きつけられた陸軍の抗議文に目を通し、思わず目眩を感じた。抗議文には、あの夜、輸送船団が味方の水上機めがけて対空射撃を止めさせる時の駆逐艦不知火と輸送船団との間の無線電話のやりとりの記録も添付されていた。

『直ちにあらゆる発砲を止めよ。十秒以内に命令に従わない場合、直ちに魚雷をもって撃沈処分を下す』

——これは間違いない……。ぬいぬいだ……

この無線電話通信があつた時、トビウメ提督は戦艦山城の夜戦艦橋にいて、不知火と陸軍の間はどういう応酬があつたのかをまったく把握していない。だが不知火が全力で発砲を止めようとすれば、当然このように通告をするだろう。確かにあの時、陸軍の船団はなかなか射撃を止めず、やつと駆けつけてくれた味方機を撃墜してしまわないかヒヤヒヤしたのを思い出した。あの水上機は艦隊の命綱だった。それは絶対に撃墜させてはならない希望の星であり、どうやら自分の副官である不知火は当時それを守るため全力で事態に対処したのだ。

トビウメ提督は大きいため息をつき、まっすぐ調査官を見据えながらゆっくりと言った。

「……思い出しました。今になってみればやりすぎでしたが、あの時は敵の潜水艦に取り囲まれている中、ああでも言わないと味方機が撃ち落とされてしまうところだったんです。あの水上機がいなかったら、山城と扶桑だけでなく、陸軍一個師団全て、そして僕も今頃、海の底だったでしょう。陸軍の方たちには、射撃を止めるよう何度もお願いしたんですが、一向に聞いてもらえなかったんで、ちよつと厳し

く言うように指示しました。責任は艦娘ではなく僕にあります」

トビウメ提督がそう認めると、調査官の追求はさらに厳しくなる。「訴えでは、言葉での脅迫に飽き足らず、貴官は実際に駆逐艦不知火の魚雷発射管を輸送船に指向し雷撃を凶つた、とある。それは事実であるか？」

トビウメ提督思わず額に手を当てて目を閉じる。それが真実であることはトビウメ提督にも察しがついた。もし射撃が止まなければ、不知火は躊躇なく輸送船を沈めていただろう。ただそれを言って司令部や陸軍が納得するとは思えない。いつもなら困惑して言葉を失うところだが、あのぞつとする一夜を思い返し、今日は珍しくいい加減な答弁が脳裏に浮かんだ。

「まさか……。み、味方を撃沈だなんて、そんなこと常識的に考えてありえないです。そもそもあの闇夜でよく魚雷発射管の向きまでわかりましたね？ た、確かに指揮下の駆逐艦はいずれも咄嗟魚雷戦に対応できる態勢をとっていました。えっと、それはあれです。そう……。あれ。えーと、浮上する敵潜水艦に備えたものです。そうです。記録にもあるかと思いますが、私たちは『狼』の群れに取り囲まれている状況です。魚雷もそのためのものです」

今夜に限って、珍しく人間相手に流暢に返答できた。調査官らは渋い表情になったが、追求は一旦止んだ。

当時戦艦日向に乗っていたナス提督が艦娘の日向を伴って調査室に直談判に来てくれたのはその後のことだった。ナス提督と日向は、当時に同士討ちの危険が高く、トビウメ提督の強硬な指示がいかにも的確だったかを供述し、弁護してくれたのだ。そこでは陸軍が、いかに敵味方の彼我を確認しない状況で発砲し、その行動が交戦規則を無視した無軌道なものであったかが明らかになったため、陸軍も引き下がらざるをえなかったのだ。

「あのナス提督って人と戦艦の日向さんって、あまり気さくな印象はないけど、このお弁当といい、憲兵隊のときといい、なんか妙に親切にしてくれるよね？」

トビウメ提督はお弁当をむしゃむしゃ食べながらそう言うと、不知

火もうなずいた。

「そうですね。実はさつき、不知火も日向さんから直々にお礼を言われました。『瑞雲を守ってくれたこと、感謝するぞ』とおっしゃっていましたね」

不知火の口マネはちつとも似ていなかったが、トビウメ提督はそれ以上に不思議そうな顔をした。

「ずいぶん？ ああ、確か水上機だったよね？」

「はい、うちでは運用していない機体です。不知火も航空機には詳しくありませんが、日向さんがおっしゃるには、偵察、哨戒、制空、爆撃、連絡などあらゆる任務に対応できる万能艦載水上機で、もし前の大戦であと二年登場が早く、量産にこぎつけていれば、戦況も大きく違っていただろうとのことですよ」

「へえ……、そんなにすごい飛行機だったんだ……。うちでも使ったほうがいいのかなあ……」

——なんか器用貧乏な飛行機って印象しかなかったけど、そんないい機体なら、もし那智さんに導入の相談したいたら、なんて答えてくれただろう……

オムレツを口に運びながら一瞬の妄想でトビウメ提督の意識は弁当の味と不知火の顔から離れたが、トビウメ提督はすぐに自分の意識を目の前のリアルに引き戻した。黙って口を動かしていると、不知火が口を閉じたまま提督が手にする弁当箱の中を見つめている。そこにはオムライスの最後の一切れが残っている。トビウメ提督は心中で少し笑う。

——まあ常習性のある、魔力をもった美味さだったからな……

「ぬいぬい、最後の食べるかい？」

不知火は物欲しそうな顔からハツと我に返り首をぶんぶん振る。

「え？ いえ、そんな。そ、それは司令のお弁当ですよ！」

「いいから、いいから」

トビウメ提督は再び箸をひっくり返してからオムレツを掴み不知火の顔の前に差し出す。

「司令、それはいけません……」

「僕はお腹一杯になった。残すともったいないから、ほら」

不知火は少し顔を赤くして口を開けた。トビウメ提督が遠慮がちに開いた口にオムレツとチキンライスの塊をやさしく押し込むと、不知火は最後までオムレツを堪能するように噛み締めた。

秘書艦との他愛ないやりとりは、どん底だったトビウメ提督の気分を心なしか軽くしてくれた。

——取り調べもあと少しだろう

提督は、美味しそうに口を動かしている不知火を見ながらそう見通した。

不知火が弁当箱を閉じて、バスケットへしまい始めると、司令部付きの調査官らがノックもせずドアへと入ってきた。

「聞き取りを再開する」

トビウメ提督はうなずいてから、不知火に向いた。

「もう少しで終わると思うから、みんなをお願いね。何も心配しなくていいから。とにかく変なことはしないで待ってて」

「はい、承知しています。ですが我慢ができなくなったら、いつでも呼んでください」

不知火はそう言うバスケットを手には会議室を出た。すぐに小銃をかついだ兵士がドアを閉め、不知火の背中越しにガチャリと鍵の締まる音がした。挨拶がわりに、とりあえず最大限の敵意を両目に漲らせ、憲兵どもに威嚇の視線を送って冷や汗をかかせてから不知火は外へ向かって歩き出した。

不知火は司令部庁舎を後にし、自分の艦に戻るため内火艇棧橋へ歩きかけると、庁舎の車寄せの脇にあるヤシの木の陰から、荒潮が姿を現した。

「荒潮ですか。そんな所で何をやっているんですか？」

不知火が呆れたように問うと、荒潮は不敵に笑う。

「ぬいぬい、ほっぺにケチャップが付いてるわ」

「ぬぬー！」

不知火は狼狽して思わず手の甲で頬を拭う。

「なーんちゃって、やーっぱりお弁当をつまみ食いしたのね」

荒潮はけらけら笑いながら言う。不知火は一杯食わされたことを悟り思わず顔を赤くする。

「不知火は、決してそのような！ 司令が一口、どうしても食べてみるというので、ほんの少しお相伴に預かりましたが、不知火はつまみ食いななんて意地汚い真似はしません！」

慌てて否定する不知火を見て荒潮は笑い過ぎで目尻の涙を拭いながらうなづく。

「わかつてるわー。ただ、秘書艦つてほーんと、役得が多いのねー」

——本当に忌々しい朝潮型め……。いつか必ず思い知らせてやるわ……

不知火は恥ずかしさと同時に冷たい怒りを燃えたぎらせて同僚を睨む。

「ところで、憲兵隊の警備状況、ちゃんと見てきたのよねえ？」

表情はいつもの薄笑いを浮かべているが、荒潮の声のトーンは急に低く冷たいものになったので、不知火は再び虚をつかれた。

「提督にもしもの事があつたら、わたし達で取り返して逃げないといけなくなっちゃうわ。ほらあ前の時代は自決の強要とかいくらでもあつたじゃない。もし提督がそんなことになりそうになったら、ちよーと荒つぽいことをしても仕方ないわね。憲兵隊は、士官が毎日〇六三〇に第三士官食堂でそろって朝食をとることになつてるの。ちようど勤務交代の境目で一日にこの時だけ一箇所に集まるから、もし吹き飛ばすならこの時がいいわね」

——え？

不知火は思わず狼狽した。

「通信所、それから島の飛行場は荒潮たちの停泊地から主砲で十分狙えるから、荒潮かぬいぬいどちらかが通信所と格納庫と滑走路を潰しておく必要があるわ。それに水上機や飛行艇の係留所は高角砲で破壊できるわね。もし島内で憲兵や司令部、陸軍とやり合うには、艦の武器より白兵戦用の艀装を使ったほうが身軽で良いと思うわ」

まさか荒潮から反乱を持ちかけられるとは思ってもしなかった不知火は目を丸くして、冷静かつ的確に段取りを話す荒潮を見つめる。

どうも冗談で言っているのではなさそうだ。

「ね、まさかブルっちゃってるわけじゃないでしょね？」

驚く不知火の前に、荒潮が挑発するように言った。ようやく不知火も反撃に転じた。

「戯言も休み休み言ってください。まさか不知火が臆するなど……ふんっ。司令部の会議室の前に兵士が二人だけ。後は問題になりません。それよりも、これは暴挙に及んで解決する問題ではありませんし、司令のためにもなりません。それに日向さんも言っていました。司令部にも軍令部にも、司令をどうこうする権利はない、と。荒潮もくれぐれも軽挙妄動しないようにしてください。まったくこれだから……」

二日前、危うく憲兵隊相手に大立ち回りを演じかけた自分のことも忘れ、不知火は呆れたように笑って見せた。

「確かに最後の手段ではあるけど、準備だけは必要だと思うわ」

「当然です。その時はきちんと初風や加古さんにも話した上で動きまします。今はまだその時ではありません」

不知火がそう言うとき荒潮は肩をすくめて背中を向けた。

「そうならいいけど、じゃあもう少し様子を見るしかなさそうね。先に休むわ」

荒潮はそう言うとき手をひらひら振って、夜の闇の中へ去っていった。

不知火はため息をついて、バスケットを手に内火艇の棧橋へと歩き始めた。

——確かに、これから司令や不知火達はどうなってしまうのでしょうか……。こんな時、那智さんがいてくれたら……

不知火はふとそんな不安に捉われながら、間宮へお弁当箱を返すため自分の内火艇に向かった。

同じ頃、工廠区画の大ドックでは大型の引き戸が開けられ、巨大な建屋内の照明の明かりがこぼれて灯火管制が敷かれた湾内の海面を四角く照らし始めた。すると前後計四隻のタグボートに曳かれた戦艦山城が、建屋内の水を張ったドックへ向けてゆっくりと曳かれてい

く。

「あそこに明石さんがいるわ」

大ドック内の天井近くに吊るされたキャットウォーク上から作業を眺めていた初風が、ゆっくりと建屋内に入ってきた山城の船首上甲板を指さした。そこにはツナギにヘルメット姿で工廠の作業員に指示を出しながら立っている明石の姿が見えた。

「明石、ずっと働き詰めじゃない。大変だよー」

眠そうにあくびしながら蘭干に寄りかかっていた加古が応じる。

「艦の損傷は扶桑さんのほうが軽いけど、艦娘の扶桑さんのほうが重傷だって話だね」

加古の隣で長良が体を伸ばす運動をしながら言った。

「損傷は山城のほうが酷いらしいんですって。艦娘のほうは、体はピンピンしてるけど、メンタルが大破してて、回復の見通しは立たないらしいわ」

初風は蘭干にのせた腕に自分の顎を乗せてドックに入ってくる山城を見ながら言った。少し離れた鉄階段の陰では、早霜が静かに作業の様子を見守っている。

「艦尾が真つ二つじゃん……。あのぶんじゃ修理に一月はかかるんじゃないかな……」

「そういえば、さつき不知火から聞いたわ。あのナス提督って人が山城と扶桑さんのために高速修復剤を分けてくれるそうよ。艦自体の修理は二週間もからないじゃないかって」

「あの人、太っ腹だね」

長良が肩を回しながら目を丸くした。

「戦艦の日向さん、確か火事が起きた時も高速修復剤で急いで修理して出撃したって聞いたよ。補給に余裕のあるところは羨ましいねえ」

加古があくびをしながら言った。

「そういえば日向さんとの提督、いつも間宮さんのところに入ったりしてるわね」

「ああ、知ってる！ 空母の鳳翔さんもよく一緒だよ」

初風の言葉に長良が答えた。

「そのお陰であたしらは、帰港してから特別にケーキやら最中を一杯にごちそうになれたみたいなんだよね。初雪や朝風も喜んでたね」

トビウメ艦隊と対潜護衛に従事したその他二人は日向に招かれ、一昨日の夜に間宮から特別食としていっぱいのお菓子の提供を受けたのだった。

「出撃もしてないのに、ちょっと気が引けたわ……」

そうつぶやく初風に、長良が寄ってきてポンポンと肩を叩く。

「大丈夫だって！ 作戦は失敗しちゃったけど、まだ目的の友軍の救助ができてないんだから、これから休んだ分を取り返して活躍すれば大丈夫だよ！」

長良は白い歯を見せて元気な声で言った。

初風は弱々しい笑みをうかべてうなずいたが、それをじつと聞いていた早霜は眼下のドックをじつと見下ろしながら考えていた。

——司令部は、本当に『次』を用意してくれるかしら……

早霜は脳裏に、前世の辛い戦いの記憶を呼び覚ましながら、明石ら工場作業員らの作業を見つめていた。

それから三時間経ち日付が変わろうとする頃、「正式な処分は追って下す。許可なくタロタロ島から離島しないように」との言葉とともに、トビウメ提督への事情聴取は終了し、ようやく解放された。トビウメ提督の証言はすぐに司令部付の事務官によって戦闘詳細の一部としてまとめられることになる。

戦闘詳報 1

トビウメ提督が憲兵隊から開放されて五時間後、まだ空が朝焼けに染まりだしたころ、タロタロ泊地の半月湾上空に、灰色の塗装に日の丸を描いた複葉水上機が姿を現した。島に設置した電探がはるか前にその接近を捉えていたため、すぐに迎撃の零戦が二機、スクランブルに上がってきたが、複葉機の日の丸を見てすぐに引き返していった。その複葉水上機、九四式水上偵察機は半月湾上空を一周してからエンジンの回転を落とし、ゆっくりと静かな海面に小さなウエーキを残して着水した。複葉機はゆっくりと内火艇用棧橋の近くまで航走して鉄製のポンツーンの手前で止まるとエンジンを止める。プロペラが止まりきらないうちに基地の係員がもやい綱を持ってポンツーンの上を走ってきた。飛行帽と飛行眼鏡、革のフライトジャケットを着た色黒髭面の男がもかくように操縦席から這い出そうとしている。係員の鼻を強烈な香水、汗と体臭それに機械油の入り混じった臭いが突く。

「第六潜水艦隊司令のカメヤマだ。報告のため緊急で帰還した。戦艦日向座乗のナス提督の元まで連れて行ってほしい」

もやい綱を水上機の係員はそれを聞き、すかさず敬礼してうなずいた。

カメヤマ提督は飛行眼鏡をおでこまで上げると、大きなズタ袋二つを後席から引っ張り出し、波に揺れる水上機の翼からタイミングをはかって棧橋の上に飛び降りた。

「機体は後で水上機用棧橋へ預けておいてほしい」
「承知いたしました」

カメヤマ提督は慌ててフライトジャケットを脱ぐ。上空では寒くて叶わなかったが、地上に降りれば高温多湿地獄だ。そのうえ九四式水上偵察機は零戦やその他の攻撃機と異なり、座席は露天の開放式なので横風や高空の冷気に直にさらされる。ジャンパーを着込んでいても五百キロを三時間半かけての夜間飛行は堪えるものだった。艦娘が管制する航空機は自分で操縦する必要がないので飛行中寝てい

ることも可能だが、吹きさらしの操縦席では寒さと強風でとても休めたものではない。

カメヤマ提督とシオイがブーメラン島の上空で強行偵察を敢行し、唯一戻った晴嵐から写真機を回収後、二人は深海棲艦のパトロール艦隊による十四時間に及ぶ執拗な爆雷攻撃にさらされた。敵が攻撃をあきらめた頃、近海では連合艦隊と深海棲艦が激しい海戦を繰り広げており、洋上はひっきりなしに深海軍の艦隊が行き交い、伊四〇一はしばらく、消耗したバッテリーを充電するために浮上することができなかつた。さらに敵の警戒線を避けつつ、安全な海域にいる潜水母艦大鯨との合流海域に到着するまで丸四日かかってしまった。

やつとのことで大鯨と合流したカメヤマ提督とシオイは、そこで初めて山城と扶桑が航行不能になり、その後あらゆる戦線で連合艦隊が敗退した顛末を大雑把ながらに知ることになった。そのため、カメヤマ提督は晴嵐から回収した写真機を手に、急ぎ単身でタロタロ泊地へ戻ることにしたのだった。

内火艇で戦艦日向の停泊場所まで送り届けられたカメヤマ提督を、寝間着がわりの浴衣姿の日向と、遅れて私服に着替えて出てきたナス提督が迎えた。

「おはようございます。無事に帰還され何よりです」

「来る時間が悪かったようで……」

カメヤマ提督はぼつの悪そうな顔で言った。

「日向、お風呂の支度を」

「ああ、いま始めた……。とりあえず朝食だな」

日向はそう言つてカメヤマ提督を下甲板へと招き入れた。

カメヤマ提督は士官用浴室で戦場の垢を落とし、三十分後にはさっぱりした様子で士官食堂にもどつてきた。

「日向ちゃん、お風呂ありがとう。夜間ぶつ通しで飛んできたから心底冷え切つてて、生き返つたよ……」

日向は士官室の白いクロスに覆われたテーブルの一角を指さして座るよう促した。そこにはコッペパンとバター、ゆで卵と緑茶がのつたお盆が用意されていた。

「普通なら鳳翔を起こして用意させるんだが、今日だけはまだ休ませておいてやりたいので、すまないがこれで我慢してくれ。いま味噌汁をよそってくる」

「なんか申し訳ないな。ありがとうな、日向ちゃん」

カメヤマ提督が席につくと同時に第二種軍装に着替えたナス提督も食堂にやってきた。

「あ、君は朝餉はどうする?」

「私はもう少し後でいいよ」

日向にそう言ってナス提督はカメヤマ提督の正面の椅子に腰をおろした。ナス提督は紙ファイルの綴じられた書類を一束テーブルの上に置いた。

「帰還が今日で正解でしたね。昨日だったら合同葬儀に出なければならなかったでしょう。鳳翔さんも間宮さんも昨日は朝から遅くまで、葬儀と精進落しの会食の準備に駆り出されて大忙しでした」

コッペパンをかじっていたカメヤマ提督の手が止まる。

「やはり損害は深刻ですか?」

「なんと言いましようか……。正式な戦闘詳細はまだ発表されていませんが、おおまかな作戦の経過と損害の一覧は手に入れました」

ナス提督は書類をカメヤマ提督の方へ差し出した。

日向がお椀に湯気の立つ味噌汁をもって戻り、テーブルに置くとなす提督の隣に座る。カメヤマ提督はパンを口に押し込みながら、真剣な表情で書類をめくり、目を走らせる。そして、すぐに安堵したようにため息をついた。

「想像していたよりだいぶ軽く済んだ……。これならなんとか……」

カメヤマ提督はふとそうこぼしてから、艦娘の日向がいることに思い至り、すぐに自分の発言の不用意さを恥じた。

「すまん日向ちゃん。そういう意味じゃないんだ。決して犠牲になった艦娘達を軽く考えているわけじゃない。つい……」

「ああ、わかってるさ」

日向はうなずいた。

「撤退戦の最中、大淀の司令部施設が直撃弾を受けて、司令部要員五名

が戦死、うち三名は元提督だったので、司令部も大きな衝撃を受けたようです。昨日はその葬儀で一日大変でした」

「艦娘や他の人間がやられても、いつも平気な顔してるくせに、あいつら……」

カメヤマ提督自身、これまでの作戦では複数の部下の艦娘の未帰還を経験している。そんな時でも司令部はいつも冷淡な態度を隠さなかっただけに、いざ前の世界からの転生組となる自分たちが危険な状況に陥った時の狼狽ぶりを見るに、毎度苦々しい思いがこみ上げてくるのだ。

カメヤマ提督は、朝食を平らげお盆をわきによせるとテーブルにファイルを広げて詳しく報告書を読み始めた。

「大鯨から、山城と扶桑の衝突事故の話聞いて本当に驚いたんですが、あれで作戦がガタガタになったということですか？」

「今回の海戦は本当に予想外のことばかり起きました。ただ、結果的には我々が危惧していたよりも遥かに軽い損失で終えることができたのは確かです」

その後しばらくして報告書を読み終えたカメヤマ提督はため息をついて椅子の背もたれに寄りかかった。

「冗談みたいな話ですね。船酔いで戦艦二隻が行動不能って……」

「信じがたいですが、どうも事実のようです。まあ日向も他の艦娘も、我々ほどには驚いていないようですが……」

カメヤマ提督は日向に顔を向けた。

「人としての心を手に入れた今となっては、どんな弱点を抱えることになったのか、わたし達にも想像がつかない」

「へえ、日向ちゃんみたいな女丈夫にも、こんな弱点があるのかい？」

「さあ、自分でも想像できない爆弾を抱えているやもしれんぞ」

日向はカメヤマ提督をからかうよう言うとし笑った。

「それにしてもあれをまたやったんですか？ 『魚雷にゴン』を」

ナス提督は誤魔化すように肩をすくめた。日向は当然だとばかりに腕を組む。

「他に扶桑へ向かう魚雷を防ぐ策が無かったのだ」

カメヤマ提督が言っているのは、戦艦日向が先の対潜護衛の際、自分の艦舷で敵の魚雷を弾きとばしたことだった。

「あれは戦艦でやっていい芸当じゃないでしょう？　小回りの利く駆逐艦、大きくてもせめて軽巡で慎重に操艦してやつとできる危ない技ですよ。他の艦娘が真似したらどうするんですか？　それも戦艦でやっちゃうなんて……」

「日向の言うとおりで、策を選んでいられる状況ではなかったんですよ。その戦艦山城に乗っていた若い提督、元々対潜を専門とする部隊ではなかったようですが、衝突事故後の対応は概ね適切なものだったと思います。だから航行不能になりながらも二隻ともなんとか生還させられた。ただ気の毒なことに、凶らずも作戦失敗の全責任を押し付けられることになりました」

ナス提督の言葉を聞き、カメヤマ提督は困ったように頭をかいた。「ああ、あのお兄さん、特によく知ってるってわけじゃないんだが、前に一、二度話をしたことがある。大人しくて、ちよつと生真面目そうな若者だったな。なんというか、司令部の奴らみたいなの相手をするにはちよつと気の毒になってしまいうタイプに見えました」

三人はしばし押し黙った。

「いずれにせよ私達は、陸軍の壊滅と連合艦隊艦船の致命的な損耗、それに付随した外南洋の島々の島民の差し迫った危険からは逃れることができませんでした。実際、カメヤマ提督からの偵察結果の無電を受信したときは、私も日向も間宮さんもみんな絶望していましたから」

ナス提督の言葉を聞き、カメヤマ提督は思い出したように自分の手提げかばんから茶封筒を取り出した。

「そうだ、これを写真に焼き付けてもらいたいです。とりあえず二枚だけ潜水艦で現像したんだが。ちゃんと撮れてればいいんだけど」

カメヤマ提督は茶封筒から大判のフィルムネガを二枚取り出して差し出した。ナス提督はそれを天井の照明にかざしてみたら日向にわたす。日向はそれを受け取ると丸い舷窓の近くまで行って窓蓋を開けて外の日の光にネガフィルムをかざした。いずれも海と砂浜

を空から撮ったモノクロ写真で、地形の様子は辛うじて想像できるものの、ピントがボケているのか像がはつきりしない。

「残念だが、かなり不鮮明だ。写真は二枚だけなのか？」

「やっぱりそうか……。試しに潜水艦で二枚だけやってみたが、フィルムの実像作業っていうのはいまいち勝手が分からんから、二枚でやめといて正解でした。残りのフィルムは現像していません。うちのシオイにかなり無理させて、やっと撮ったブーメラン島の敵上陸地点の航空写真です」

カメヤマ提督は自分の後頭部を叩きながら言った。

「すぐに情報部に現像させましょう。日向、朝一番でこれを写真班へ」「じゃあ頼みます」

カメヤマ提督が差し出す茶封筒を日向が受け取った。

「自分も実際にこの目で見たわけじゃありませんが、深海軍がブーメラン島に大部隊を上陸させたことは確かみたいです。ことによると島の守備隊、長くはもたないかもしれない……」

ナス提督と日向は押し黙り、それに答えることはなかった。二人とも自分達が何を最優先にするのか明確にして行動してきた。それは島々にいる一般島民の安全確保と守備隊の命運を冷徹に天秤にかけどちらを助けるか、態度と行動を明確にすることを意味していた。二人は今が、その結果と責任に向き合い、目を逸らさず耐える時だと理解していた。

メジロ泊地。午前。同じ外南洋でも戦線に隣接した島々と、はるか後方に位置する島々とは、戦いの切迫感も全く別物だ。時折、警戒線を突破してくる深海棲艦が出没する危険性は高いものの、島の人々も艦娘もかなりリラックサして生活していることは否めない。

今日も泊地は晴天におおわれ、マツエダ提督は海と砂浜が見渡せる司令部のテラスでリゾートチェアに座りながら、強い日差しの下でも気にせず砂浜で遊んでいる清霜と菊月を眺めていた。

幸いにして、マツエダ提督は今回も前回はブ島沖海戦に参加せずに済んでおり、内心でそのことをありがたく感じていたが、海戦の経過

や結末には立場以上に関心を持っていて自分に気がついていた。

今朝から知り合いの提督数人に電話をかけ海戦の経過や今回の作戦についての意見を聞いて回ったが、直接作戦に参加した提督はおらず、連合艦隊司令部による今回の作戦行動に対する評価も、人により完全に意見が分かれることになった。

マツエダ提督自身も作戦の詳細には人並みならぬ関心を寄せていた。それは、自分が送り出した戦艦山城の様子が気になるという外向きの理由だけではなく、那智の元の指揮官であるトビウメ提督の立場に大きな関心があった。そしてそれ以上に、那智が今何を考えているのか、正直なところ気が気でなかった……。

マツエダ提督はリゾートチェアから身を起こすと、執務室へ戻ることにした。執務室には誰もいない。腕時計を確認すると、時差を勘案しても相手も活動を開始している頃合いだった。提督は執務机の黒電話の受話器を取り、交換所を呼び出す。

「メジロ泊地のマツエダです。ローリー泊地の戦域作戦本部の第二参謀室のクスマ室長へ繋いでください」

交換所は了解し、しばらくして中年らしき男の声が電話に出た。

「お久しぶりです。マツエダです」

『おうヒロ、ご無沙汰じゃないか。元気か？』

「ええ、クスマさんもお変わりないようで……」

クスマという男は、マツエダ提督の先輩に当たる元提督で、今は現場仕事から離れローリー島の戦域本部に詰めている。この世界では、マツエダ提督のことをファーストネームの愛称で呼ぶ数少ない一人だ。クスマと二言三言、挨拶の応酬を終えてからマツエダ提督は本題に切り出した。

「実は折り入って伺いたいことがあって。先のブーメラン島の海戦ですが、そちらに詳しい経過は伝わってきてますか？」

遠距離電話故の一拍のタイムラグを挟んでクスマが返す。

『あー、あれかー。いやまだ詳細な報告は届いてない。あの件はこっちでも大騒ぎだ。作戦の結末はそっちにも届いているだろうが、完全な大失敗に終わった。ただ理由は戦艦の衝突事故以外、ほとんど伝

わってきていないから、いろんな噂が飛び交ってるよ」

——やはりまだ駄目か……

マツエダ提督は心中でがっかりしながらも尚も尋ねる。

「GFから戦闘詳報はまだ届いていないということですか？」

『ああ、まだだ。こっちも何が起きたのか実はほとんど知らされていないんだ。みんな何があつたのか知りたがつてる。ヒロも気になんのか？』

「ええ、まあ……。実は戦艦山城は、GFの司令部による戦艦供出令に応えてうちから出したんです」

マツエダ提督の言葉にクスミは合点がいったとばかりに大きな声で言った。

『ああ、そういや山城はヒロのこの艦だったな！ 思い出したぞ。古今、軍艦同士の衝突事故っていうのは珍しくないが、そういうのはだいたい高速航行する軽巡や駆逐がやらかすものだとはばかり思ってたから、みんな驚いてるぞ。どんな子なんだ？ 山城っていうのは』

「ちよつと難しい子ではありませんが……」

マツエダ提督はそう言葉を濁した。

『いずれにしろ詳報の写しが届くのは一番早くても次の連絡機が来る明後日以降だ。他の泊地や基地に写しを配れるのはかなり後になるな』

「それはやむをえないですね……」

『戦艦をGFなんかには渡しちまって、そっちの戦力は大丈夫か？』

「ええ、こちらは戦線の後方ですから。それに、代わりに非常に優秀な重巡をうちにまわしてもらいました」

少しばかり語意に自信がこもる。

『へえ……。相変わらずの好き者だな。前もあつたよな、相手に頼み込んで融通してもらつた重巡のガサ……ええと、なんつたつた？』

艦名を忘れていているらしいクスミの言葉に、マツエダ提督は受話器を握りながら思わず笑う。

「衣笠君です」

『ああそうだ、衣笠だ。あの時もGFを經由して相手に無理言つて配

属してもらったの覚えてるよ。ヒロの巡洋艦好きは筋金入りだからな』

「純粹に能力を買っただけですよ」

マツエダ提督はそう言っただけで笑ってごまかした。確かに衣笠は優秀な重巡だったが、それに加えて快活な性格に魅力を感じ、相手方の艦隊に強く転入を掛け合うことにしたのだった。実際、衣笠がこの泊地へやってきたことで、高雄、山城、三日月など、比較的物静かな性格艦娘が多いこの艦隊の雰囲気はかなり明るいものになった。衣笠の編入のことが話題に出るたび、高雄はいつも「提督のおっしゃった通り、衣笠さんが来てくれて本当に良かったと思います」と言っている。

その後、クスミとちよつとした世間話をしてからマツエダ提督は受話器を置いた。

「収穫はなしか……」

マツエダ提督は今日の当番表を見る。那智は非番だった。マツエダ提督は自分に急ぎの用務がないことを確認し、秘書艦の呼び出しブザーを押すと、すぐに三日月が入ってきた。

「はい、御用ですか？ 司令官」

高雄は衣笠、春雨を連れて基地の外へ買い物に出ているので今は三日月が秘書艦当番だ。

「私も少し出かけてくる。一三〇〇までには戻るよ」

「はい、行ってらっしゃい、司令官」

マツエダ提督はそう言うと言いつつ制服から麻の短パンに白シャツ、日除けにカンカン帽子という私服に着替えて庁舎を出た。

メジロ泊地の艦娘用の宿舎は、司令部庁舎から渡り廊下でつながった、レンガ積みの二階建ての建物だった。別に男子禁制という規則はなく、廊下を出歩くときはまともな格好をするよう高雄が厳しく言いつけてあるため、決して提督が立ち入って不都合なことがあるわけではないのだが、泊地の中でもここだけはほぼ完全な「女の園」状態なので、マツエダ提督もどうしても必要な時以外はなるべく立ち入らないようにしていた。そして、止む無く入る場合も、かなりの気後れを感じる場所だった。普段着姿のマツエダ提督は開け放った宿舎の昇

降口で足を止める。

——やはり、止めておいたほうがいいだろうか？

一瞬逡巡したが、出入り口あたりには誰もいる気配がないので、マツエダ提督しばし迷った後、意を決して宿舎へと足を踏み入れた。部屋の割当表を確認して一階の一番奥の個室へ足を向ける。宿舎内は恐ろしく静かだった。

——もしかしたら、艦の方にいるかな？

マツエダ提督は少し緊張しつつも那智の個室の前に立った。

「当たって砕けろだな……」

そう呟いてから、合板のドアを二度ノックした。

「那智くん、いるかい？」

ドアはすぐに空いた。那智は少し驚いた様子でマツエダ提督を見つめる。酒は飲んでいないようだった。相変わらず化粧がうすくても美しい顔だったが、どことなく血色の悪そうな青白い顔に見えた。そして非番であるのに、いつもの制服と同様、タイトスカートにブラウスという服装だった。

「提督か。一体、何用でわざわざ……」

「いや、その……。もし急ぎの用事が無いなら、一緒に街へ出ないか？」

那智は少し迷った表情を見せたが、すぐに承知した。

那智はその格好のままマツエダ提督と共に宿舎を出た。

「街にはよく出かけてる？」

「いや、まだ一、二度だな。なかなか機会がなくて……」

「ならちようど良かった」

二人は基地のゲートを出て、赤土の道を並んで歩き出した。基地からメジロ島の市街地まで歩いて十分ほどの距離だ。

「ヤムヤム島にも住民はいるだろう？ 街はどんな感じ？」

「ああ、もちろんあるにはあるが、ここよりもずっと小さい。ここはずっと賑やかで、店も多いな」

すぐにスコールがやってくる心配はなさそうなのでマツエダ提督は途中、小高い丘に通じる横道のほうへ案内した。ヤシやシダに囲ま

れた小道をしばらく登っていくと、少し平らになったところで視界が開け、小さな、塗装の色褪せた木製の鳥居と小さな祠が建っていた。「こんな所にも社があるとはな……」

二人は祠を前にしばし、手を合わせた。那智はしばらく手を合わせたまま動かなかった。

「何をお祈りしたの？」

「え？ いや、たいしたことではない。この艦隊の無事や、連合艦隊の次の作戦での勝利などだ」

マツエダ提督は無言でうなずき、祠から反対側に位置する港町を見下ろした。

「ここは良い眺めだろう？ 散歩の時なんかによく来るんだ。今日は良い天気になりそうだ。これからますます暑くなるだろう」

そう言ってカンカン帽のつばに手をやり、空を見上げた。那智は提督と並んで丘から港と街を展望した。青い空と群青色の海、そして眼下にはニツパハウスやトタン屋根の住居、コンクリ造りの小規模な低層ビルなどからなるメジロ島の街が一望できた。足元の泊地には黒光りして見える自分達の軍艦が錨をおろして浮かんでいる。

「降りたら喫茶店で何か冷たいものでも飲もう」

マツエダ提督はそう言い、来た小道を再び本道へ向けて降り始めた。マツエダ提督は歩きながら、先程ローリー泊地の知人から得た、わずかばかりの情報を那智に話して聞かせた。話題がそのことになると、那智が一瞬息を飲んだのがマツエダ提督にもはっきりとわかった。

——気になるのは仕方のないことだ

提督はそう自分に言い聞かせた。

那智はマツエダ提督とともに、ゆっくりと街の目抜き通りを歩きながら尋ねる。

「戦闘詳報が読めるまでどれくらいかかりそうなんだ？」

「前線で、まだまとめている最中らしくてね。ローリー島にすらまだ届いていないようだ。衝突事故の状況も何も判っていない」

しばらく歩くと、道路に面した側に丸太でテラス席をこしらえた南

国調のカフェが見えてきた。

「あそこに入ろう」

マツエダ提督と那智は店に入って街路に面する席についた。

「あら提督、いらっしやいませ。こちらはもしかして、新しい艦娘さんかしら?」

店主とおぼしきおばさんがお冷をもって二人の元へやってきた。

「ああ、うちの新人、重巡洋艦の那智君」

「重巡那智、よろしく頼む」

提督が紹介し、那智は軽く会釈した。

「あら、やっぱり。山城ちゃんが出発してからしばらくして、湾に見慣れない艦が来ているって噂になってるから、どんな新人さんかしらと思っていたら、これまた綺麗な艦娘さんね」

那智は恐縮して顔をうつむけるが、マツエダ提督はそうでしょう?と言って笑った。

「そういえば山城ちゃん、一人でよく来てくれてたんだけど、出発前にわざわざ挨拶にきたのよ。転属になったからって。いつも元気がない様子だったけど、その時だけはとても嬉しそうで、これからお姉さんと一緒に戦えるから楽しみだって言ってたわ」

「あの山城君がわざわざ……。それは知りませんでした」

「海軍のことはあんまり聞いちゃいけないのかもしれないけど、山城ちゃんは元気にやってる?」

マツエダ提督と那智は顔を見合わせたが、マツエダ提督は大きくうなずいて笑顔で言った。

「ええ、もちろん。遠方に配属になったので細かいことはわかりませんが、元気でやっていると聞いています」

「そう、なら安心したわ。そういえばご注文は何にされます?」

提督がアイスコーヒーを二つ頼むとおばさんは伝票ホルダーを手に店内へ下がっていった。

二人はしばし無言で街路の往来を眺めていた。

「山城君がここへ通っていたとは知らなかった。お姉さんと一緒になつて、ここよりも良い状況で戦えると思ったんだが……」

那智は無言でうなずいた。

「実は明日、定期連絡の飛行艇が来る予定だから、それでローリー泊地まで行こうと思ってる。戦域司令本部のあるローリーまで行けば、戦闘詳報も早く届くし、海戦の状況ももつと判るだろう」

那智はグラスにささったストローから手を離す。

「まさかとは思うが、わたしのことで……」

そう言いかけた那智を制して、マツエダ提督はつぶける。

「もちろん、那智君のためという理由もあるが、それ以上に我々には山城君を送り出した責任がある。何が原因で事故が起きたのか、知っておく必要がある。あまり考えたくはないが、この泊地での訓練や習慣の積み重ねが事故の原因になった可能性もゼロではないし、もしそうならうちでも対策が必要だ。とにかくいち早く事情を知っておきたいんだ」

那智は神妙な顔でうなずいた。

——また那智君が沈んだ顔をしてしまった……

マツエダ提督は一瞬ためらったが、テーブルの上の那智の手の甲から自分の手をかぶせて優しく握った。今日の那智は、いつもしている白手袋を付けておらず。提督も普段着なので手袋はしていない。素肌がはじめて触れ合った。那智は驚いて一瞬手を引きそうになったが、決して嫌悪感が沸き起こったわけでもなく、どうしてよいかかわらず、戸惑いながら提督の顔を見上げた。

「またそんな顔をして……。那智君にはもつと元気になってもらわないと。もう大切なうちの一人なんだから」

マツエダ提督は内心非常に緊張していたのだが、さも当然のことをしているとばかりに那智の手の甲をやさしくたたいた。那智は恐縮しつつもうなずいた。

「す、すまない、わかっている。ここは本当に良い艦隊だと思っっている。本当に……」

那智は自分の口から自然とそんな言葉が出たことに、言い終わってから少し驚いた。それは決してお世辞などではなく、自分がかすかにこの泊地に居心地の良さを感じ始めていることに気がついた。

「少しでも慣れてもらえれば、嬉しい」

マツエダ提督はそう言つて笑いかけ、手を引つこめた。那智は少し頬を赤らめて無言でうなづく。

アイスコーヒーを飲み干してしまつてから、マツエダ提督は無遠慮に那智の足元から顔までをながめてから、真面目な表情で言つた。

「君、今日は非番だったね。そのブラウスもスカートもいつもの制服の予備だろう？ 普段着はないのかい？」

「ああ、何分急な転属だったからな……。今は艦にある持ち合わせだけだ」

那智は少し気まずそうに言つた。

「それは言つてもらわないと。艦娘の福利も提督の責任だよ。せめて高雄ちゃんに相談してくれれば……。よし、ちよūdい。買い物に行こう」

マツエダ提督はそう言つて、那智を立たせた。

会計を済ませて喫茶店を出た二人は、日に照らされた目抜き通りを連れ立って歩いて行く。

「ここも南海の孤島であることには変わらないから、決して品数は多くないけど、間に合せに必要なものを買つていこう」

那智は提督に連れられ、ニブロックほど街路を進んだところにあるこじんまりしたニツパ屋根に丸太づくりの洋品店の前にやつてきた。出入り口横には一応ショーウィンドウもあり、その中には南国柄のワンピースを着たトルソーが置かれている。

ドアを開け放した入り口から遠慮なく入る提督の後を那智は気の進まない様子で続いた。

「提督さん、いらつしやい。あれ？ ツケまだ残つてたかしら？」

洋品店の店主とおぼしきおぼさんが尋ねると、提督は笑つて首を振つた。

「そうじゃなくて、今日は彼女用にくつか洋服を……。トップスでもワンピースでも、何着か見繕つてほしいんですが」

「あら新しい、艦娘さん？ わかりました」

おぼさんはカウンターを回り込んで二人のそばまでやつてきた。

「ここは、高雄ちゃんや衣笠君、鬼怒君がよくお世話になってね。必需品は艦隊の予算から出せるから、遠慮なく選んでほしい」

提督は那智にそう言った。

「あらまあ、モデルさんみたいな艦娘さんね。かわいらしいのより、ちよつとシックな感じのほうが良いかしら？」

遠慮がちに那智が挨拶すると、おばさんは那智の足元から頭までを観察しながら言った。

「その辺は女性同士、よく相談して」

マツエダ提督はそう言ってふらつと店の外へと出てきた。この手の買い物は時間がかかるのが常だ。

通りに面したテラスにもハンガーラックが出され、そこに多くの洋服が掛けられていた。マツエダ提督は退屈まぎれに洋服を数枚か手にしてみる。そのラックにはワンピースが多くかかっていたが、ランやヒマワリなどの柄があしらわれ、肩が大きく露出したりリゾート地に着るような派手な物が多く、あまり那智に似合いそうなものではなかった。そんな中、ラックの一番端にかかっていた薄水色のワンピースがマツエダ提督の目に止まった。露出が高いわけでもなく、ラフすぎず、堅すぎずで、涼しげな印象を与える、那智に似合いそうな落ち着いたデザインのワンピースだった。マツエダ提督はおもむろにハンガーごとそれを取り、店内に戻る。

店内では二人が鏡を前に、何着か候補の服を選び出していた。
「那智君、これなんかどうだろう？」

提督は那智の胸元にハンガーにかかったままのワンピースを掲げてみせた。

「あら、提督もなかなかいいセンスじゃないですか。きっと似合うと思おうわ」

「どうだろう……」

那智は困惑して首をかしげる。

「さあ那智ちゃん、試着室があるから、こちらで試しに袖をおおしてみたら？」

「ああ、それがいい。是非是非！」

おばさんの言葉を受け、マツエダ提督もやや強引にそう勧めた。

「ねえ高雄さん、もう買い忘れた忘れ物は無い？」

「ええ、提督の好きなココナッツケーキも買ったし、大丈夫ね」

市街の通りで高雄、衣笠、春雨の三人はフルーツや雑貨、おやつ、スイカなどを詰め込んだ買い物かごをぶらさげて基地の方へ足を向けた。

「帰ったら、ちょうどお昼ね。今日はお蕎麦でも茹でようかしら？」

提督もお腹をすかしているかもしれないわ」

「じゃあ、春雨もお手伝いします。一緒にかぼちゃとサツマイモの天ぷらでも揚げましょう」

「あら、いい考えね」

高雄は嬉しそうに笑い、二人を先導して歩き出した。三人はちょうど街の目抜き通りに通りかかった。衣笠は二人について歩きながら通りに並ぶ店々を眺めていた。

——そーだ、今度新しいTシャツでも買おうかなあ。次に本土から連絡船が来た時に来てみよう

衣笠はそんなことを思いながら歩いていると、道を隔てた前方の洋品店の入り口で、カンカン帽にシャツ姿のマツエダ提督がしきりにハンガーラックにかかったワンピースを物色しているのを見つけた。普段着だったため一瞬見間違いかと思ったが、提督のいつもの外出スタイルなので間違いない。

「え、何やってるんだろ？」

衣笠は思わず声に出した。言い終わらないうちに店からおばさんに促されて、鮮やかなワンピースを着た那智がおずおずと出てきた。提督はそんな那智にハンガーにかかった別のワンピースを試すようにハンガーを首にあてがって似合うかどうか品定めしはじめた。

「ねえ、あれ提督と那智さんじゃん。二人も買い物に来てたんだね」

衣笠の声に、前を歩く高雄と春雨も、洋品店の店先にいる二人に気づいた。

「あ、本当です。那智さんのお洋服を選んでるんですね。那智さん、あ

れもお似合いですね」

春雨もそう言つて笑う。

——そっか、那智さんも日用品まだ揃つてなかつたんだね

衣笠はすぐ合点した。

——一緒に提督に何かおねだりしたら、衣笠さんもなにか買つても
らえたりして？

遠くから見ると二人は楽しそうに見えた。那智は遠慮と照れで、ぎこちなさが目立ったものの、提督が勧めたワンピースのいくつかが気に入つたようで自分の体に当てて姿見を見ている。一方、提督の方は別の候補をさがすのに忙しく、二人共、通りにいる三人には気付かないようだった。

高雄はしばし無言で、シヨッピングに我を忘れて二人を見つめていた。

「あはは、夢中で気づかないみたい。声かけてみよ？」

「帰りましょ……」

衣笠が言い終わらないうちに高雄が低い声で言った。その声音には、微笑ましい場にそぐわない、なにかを両断するような鋭さがあった。そのため春雨も衣笠も一瞬虚を突かれた顔で高雄を見た。前を歩く高雄の表情が見えなかつたので二人は一瞬驚いたが、振り返つた高雄はいつもと変わらぬ朗らかな高雄の顔だった。

「ほ、ほら、あの様子だとまだちよつと時間かかりそうじゃない？ それに……、そう、この暑さでせっかく買った食べ物も傷んでしまうかもしれないから。先に戻つてご飯を作つて待つていてあげましょ？」

高雄はいつもの明るく笑顔と優しい声で言つて先に歩き出した。

「はい、そうですねー」

春雨は納得したようで、笑つて高雄についていく。衣笠だけが戸惑つた表情で高雄の背中と遠く的那智とマツエダ提督を見比べた。

重巡艦娘・衣笠。あるときは『海軍の影の情報部員』またあるときは『連合艦隊の覗き魔』などと妙な通り名の付いた重巡艦娘・青葉の妹である衣笠もまた、優れた状況把握能力や観察眼を備えた艦娘だつ

た。また普段はふざけたり、おちゃらけたりして鬼怒と揃って基地内のムードメーカーになっっているが、その実、周囲に対する気遣いや注意を忘れない、思慮深い艦娘だった。そんな衣笠だけは、今の高雄の反応に驚きと困惑を隠せないでいた。

「え？　え？　何？　そうなの？」

歩いて行く高雄と、那智と提督を交互に見ながら衣笠は思わずつづやく。このメジロ泊地でこれまで経験したことがない、そしておそらく当事者達すらまだ気付いていない厄介な事態が生じつつあることに最初に勘付いたのが衣笠だった。

一時間半後、大きな紙包みをいくつか抱えてマツエダ提督と那智が司令部へと帰ってきた。

「ああ高雄ちゃん、先に戻ってたか。実は那智くんの日用品の買い出しに出ていたんだ」

マツエダ提督は昼食のざる蕎麦が並んだ食堂やってきて屈託なくそう言った。

「あら、そうだったんですね？　那智さん良かったですね！　わたしがもつと早く気付いて差し上げるべきだったわ」

高雄がいつもどおりの明るい声で言った。

「すまない……。提督が全部経費で支払うと言って聞かなかったんだ。私物の支払いは後で請求してくれ」

那智はまだ遠慮がちにそう言ってテーブルについた。

「必要なものは経費でやってるから、そんなことを気にしたらだめですよ、那智さん」

高雄はそう言っただけに座るよう促す。

「実は、街でお二人を見かけたんですよ」

春雨が屈託なく言った。提督と那智は驚いて高雄や衣笠を見る。衣笠の顔から一瞬血の気が引いた。

「なんだ、なら声をかけてくれればいいのに。那智くん似合う服を探してたんだ。男の私よりみんなの方がいいアドバイスができたのに……」

提督は不思議そうな顔をする。春雨は、そうでしたねと笑い、高雄

は困ったような表情を浮かべた。一方、衣笠だけは、生きた心地がないまま、静かに蕎麦をすすする。

「そうだ、実はね、明日の連絡機でローリー島の戦域司令部へ行ってくる。いち早く戦闘詳報を確認したいんだ」

一同が驚いた顔をした。

「ずいぶん急ですね。どうしてまた……」

高雄が驚きと怪訝な表情で言った。

「山城君のことが気になってね」

マツエダ提督は高雄らに、先程街のカフェで那智に伝えた理由を言った。

一同は納得し、もちろん異論を挟む者はいなかった。衣笠自身、提督の決定に反対ではなかったのだが、どうしても妙な疑念が脳裏から離れない。

——提督は本当に、山城さんのことだけが理由でローリーへ行くのかなあ？

衣笠の気苦労は始まったばかりだった。

翌日午前、ほぼ定刻にメジロ泊地へ飛来した九七式飛行艇が湾内の着水し、飛行艇用栈橋に接岸すると、マツエダ提督はカーキ色のネクタイにジャケットからなる第三種軍装姿で革の手提げ鞆を手に司令部庁舎を出た。見送りに高雄と那智が栈橋までついてきた。

「三〜四日のうちには戻るから。二人共留守をよろしく」

「はい提督、どうかお気をつけて」

「泊地は全力で守る。心配しないでくれ」

高雄と那智はそう言つて、提督を見送る。燃料補給を終えた飛行艇はすぐに離岸、白波を駆つて離陸すると東北東にあるローリー島の方へ飛び去った。

戦闘詳報 2

タロタロ泊地の大ドック建屋内。巨大なコンクリのバスタブのよ
うなドックが二つ並んでいる。そのうち一番ドックと呼ばれる大き
なバスタブでは、戦艦山城の巨大な船体が枕木に乗せられた状態で鎮
座していた。建屋の壁面にある煤けたガラス窓からはオレンジ色の
朝日が差し込んできた。

まだ早朝にもかかわらず、ドックの排水が終わってすぐに工作艦娘
の明石は、安全第一ヘルメットとツナギ姿となり、ドックの底でク
リップボード片手に山城の船体の底を見て回っていた。

ふだんは常に海面下に沈んでいる船舶の船底部分には、いつの間
にかフジツボや牡蠣などの貝類や藻、イソギンチャクなどの様々な生物
が付着してしまい、そのままにしておく航行時に無駄な抵抗を生み
出して速力低下や船体バランスと燃費効率の悪化を招くこともある。
それを防ぐために保守点検や整備のたびに、海棲生物が付着しないよ
う赤褐色の特別な船底塗料を塗るのだが、それでも放っておけば次
第に効果は薄れ、船底は再び貝やフジツボだらけになってしまう。

山城の船底もそうだった。喫水線のやや下までは赤い船底塗料が
見て取れるが、そこから下は貝やフジツボ、牡蠣でびっしりと覆われ、
元々何色に塗装されていたのかすら想像できない有様だ。

「やっぱり、船底の掃除からはじめないと駄目ですね」

まだ工廠の作業員が出勤していない大ドックで、明石は巨大な船体
を見上げながらつぶやいた。

山城は艦尾の衝突の他、左舷に魚雷二発を受け、側面に大穴が開い
ている。幸い高速修復剤の提供を受けているため修復作業自体は比
較的スムーズに運びそうだが、本格的な修復に取り掛かる前に、様々
な段取りを決めておかねばならない。

「スクレイパーでこそぎ落とした後、サンドブラストしたほうがいい
かしら？」

明石はクリップボードに綴じた書類に状況をメモして船底を見て
回る。

「ムール貝に、牡蠣がびっしり……。これは工廠の皆も大喜びですね」
明石は艦底の陰になっている部分に無数の牡蠣殻がびっしりと貼り付いているのを見て声を上げた。

そうしてチェックして回るうちに、明石は舷側に気になるものを見つけた。

——あれ？　なんか擦った痕でしょうか？

喫水線の六〇七メートル下にあたる側面の装甲板の一部だけ、他の部分より汚れが少ない箇所があった。直径四十〜五十センチくらいで、その部分だけ何か擦ったような痕だ。明石は船体に沿って組まれた足場を登り、その箇所近づいてみた。確かにその部分だけはフジツボや貝が強い力で押し潰されたように砕けていて、部分的に鉄の地金が出て赤錆が浮いている。

「おはよう明石ちゃん。朝から精が出るな」

出勤してきた作業員の一人が、ドックの底から声をかけた。

「おはようございます！　ねえおじさん、船体の状況を確認してるんですけど、ここだけ何かぶつかった跡みたいなのがあるんですよ」

その作業員はどれどれと明石のところまで足場を登って船体の横腹を見る。

「あー、ここもそうか……」

その作業員は少し驚いた口調でそうつぶやく。はてな顔の明石に作業員は言う。

「あっち。左舷側の横っ腹にも同じようなのがあった。艦首のちよつと後方だったな。向こうのはもつと横に引つ搔いた痕みたいなのだが、高さはほとんど同じだ……。こいつは運が良かったな……」

明石もそこまで聞いてようやく合点がいった。

「やっぱり不発弾ですかー」

それは敵潜水艦が撃った魚雷が側面に直撃した痕跡だった。

深海棲艦の魚雷は日本海軍のものに比べ機械的な精度が低いことで知られている。速力、射程は旧日本海軍の艦娘が使用する九十二式酸素魚雷に大きく劣るだけでなく、撃発機構の粗雑さにより信頼性が大きく劣ることがわかっていた。これらの痕跡により、少なくとも山

城に命中した魚雷は四発だったがうち二本が不発だったことが判明した。

「扶桑でもいくつか魚雷が擦った跡が見つかったらしいし。それより驚いたのは陸軍の輸送船だ。二隻の船底に不発の魚雷が三本突き刺さってたっていうんで、軍の技官が今日から弾頭の撤去作業を始めるって騒いでた」

民間船舶と変わらない装甲のない貨物船の船底は薄いので、高速で魚雷が当たると外板を突き破ってしまうのだ。信管が作動して爆発すれば大惨事だが、不発の場合は横腹に突き刺さったまま港まで持つてくることになる。

「ええ〜そんな何本も命中して、もし爆発してたら戦艦も輸送船も多分やられてましたよ」

明石は驚き半分、呆れ半分と言った表情で山城の船体を見上げた。

「ああ、不幸戦艦なんて誰が言い出したか知らねえが、みんな言ってるよ。こんなツイてる姉妹はそういないって」

「そうですね……」

明石と作業員は足場を降りながら今日からの作業手順を確認する。

「思っていた以上に艦底の付着物が多いので修復作業はサンドブラスターできれいにしてからやりましょう。運用記録を見ると、山城は定期訓練以外、ほとんど作戦行動をとっていませんでした。そのせいか付着物が思った以上に多いですからね。扶桑の方はきれいなんですぐに修理に移れそうですけど」

「そりゃそうだ。明石ちゃんがこっちへ来る前、扶桑は最初の海戦でも弾くらって二週間前に修理したばかりだからな。とにかく職長に伝えて作業の準備する。」

「それよりおじさん。底の方、牡蠣がびっしりですよ。牡蠣汁に牡蠣飯、食べきれないくらいの量になりそうですよ」

明石がいたずらっぽく言うと、作業員の目の色が変わった。

「おい、ほんとか？ バケツを用意しねえと」

「一つや二つじゃ足りませんよ。じゃあ山城はお願いして、わたしはこれから扶桑のほうを見てきますね」

明石は舌なめずりしながら言った。

「あいよ、任しときな」

そうして作業員に後を託し、明石は一番ドックの外につながる階段へ向かった。

エアコンが効いた涼しい室内で、マツエダ提督は椅子に座って、黒表紙に綴じられた第二次ブ島沖海戦の戦闘詳報、その第一版のページをめくりながら思わず顔をしかめた。

「これ、本当のことなんですか？」

ここは外南洋戦域における連合艦隊の本拠地、ローリー泊地の戦域総司令部庁舎内の小会議室。口の字型に長机を並べた向かい側には第二種軍装を着た、日焼けした壮年の男、外南洋戦域作戦本部に詰めているクスミ ショウイチロウ第二参謀室課長が座って無言で苦笑いを返す。元々は提督として外南洋で艦隊を指揮していたが、今ではローリー島で事務職の責任者を努めていた。マツエダ提督は二年余前にこの世界にやってきて提督として着任して以来、クスミからは艦隊運営について助言やサポートを受けるなど、なにかと世話になってきた。

マツエダ提督は飛行艇に乗って約五時間半かけローリー泊地へとやってきたのだ。すぐに総司令部に顔を出すと、クスミ課長はあわてて迎えに出てきた。

「おおヒロ、わざわざ来たのか。ナイスタイミングだったな。数時間前にローリーから連絡機が来て、最初の戦闘詳報をもってきた。今写しを作っているからしばらく待っていてくれ」

「本当ですか？ それはよかったです」

それから会議室で待つマツエダ提督に戦闘詳報の写しが手渡されたのはそれから二時間半後、もうすでに日がオレンジ色になりはじめた頃だった。

マツエダ提督が問題の箇所まで読み進めて困惑顔になると、向かいに座っていたクスミ提督は、そんなマツエダ提督の様子を見て楽しむようにニヤニヤと笑った。

「驚いたろ？俺だつて正直信じられないよ。ゲロ吐いて戦艦二隻がオジャンだ。コントにもなりやしない……。参謀連中のなかには、前線の司令部が何か別の大失態を隠すために、こんな馬鹿話をでっち上げてるに違いないって疑うやつもいる」

マツエダ提督は艦娘の山城と気弱そうで明らかにコミュニケーション能力が劣っていきそうなトビウメ提督の顔を思い浮かべた。もし知らない艦娘だったらこんな与太話、まともに取り合わなかっただろう。だが、実際に山城の眼の前で、艦の床を汚してみたらと想像すると、マツエダ提督にはだんだん戦闘詳報の真実味を強く感じるようになってきた。

「とにかく思い違いはあってもこれが現場の最初の生の声だ。この後、GFの司令部や軍令部がどう都合良く書き変えるかわかったもんじゃないから、みんなこれは保存しとく必要があるって言ってるよ」

マツエダ提督はページを進めつつも、脳裏にはいたたまれなさが浮かび上がってきた。これを那智に読ませたら、彼女はどんな思いになるだろう、と。

——彼女のことだ……。落胆し嘆くに違いない……

マツエダ提督自身も暗澹たる思いに駆られてきた。

戦闘詳報を読み終える頃にはすでに日が暮れ始めていた。マツエダ提督はクスミに誘われ、送迎のくろがねの後部座席並んで腰をおろした。くろがねは基地のゲートを出て夕暮れの市街地に向かう。外南洋最大の拠点とあってメジロ島の街よりはるかに賑わっており、軍用車だけでなく民間人の車の往来も頻繁で、出歩く人の姿も遥かに多かった。

くろがねは数分かけ繁華街の端まで走ると道に面して立派な朱塗りの壁や柱が目立つ店構えの中華料理店の前に止まった。

くろがねを基地に帰り、クスミについてマツエダ提督が押戸を開けて店に入ると、白い上着を着た支配人が恭しく二人を迎えた。

「いらっしやいませクスミ課長」

「こんばんは。個室空いてる？」

「はい、空いております。こちらへどうぞ」

支配人は二人を個室に案内し障子張りの戸を閉めた。二人はテーブルに着くと、すぐに瓶ビールが運ばれてきた。栓を開けて二人で乾杯してからクスマは遠慮がちに口を開いた。

「ところで、山城と交代して迎えた重巡的那智だが、どんな様子だ?」「え? いや、うちの高雄や衣笠にひけを取らない優秀な艦娘です。少なくとも、今のところはそういう印象ですが……」

「そうか……。少し気性が荒いとか、その辺は大丈夫か?」

「ええ。いつも戦いのことばかり気にしていますが……。確かにちよつと硬いところもありますが。それでも艦娘です。一見男勝りですが、女性らしい、繊細で、また可愛らしいところもありますよ」

まるで必死に弁解するかのようにマツエダ提督が言うのでクスマは何度かうなずいてビールをすすった。

「それならいいんだ。……実はあの那智って艦、一年ちよつと前に上官だった提督から暴行・侮辱の罪で告訴されてるんだよ。それ以前も着任する提督と折り合いが悪く、何人もから解任されてる。中部太平洋ではそれなりの戦果を上げてたんだが、急にそんなことになって、結局外南洋の果てに留め置かれることになった」

マツエダ提督は驚いて言葉を失った。折しも、料理が運び込まれ、二人は再び黙って、青椒肉絲、酢豚、水餃子、チャーハンなどの料理が卓に並べられるのを待った。

再び戸が閉められると、マツエダ提督は口を開いた。

「暴行と侮辱ってどういうことですか?」

「おれも詳しく知ってるわけじゃない。そもそも提督と艦娘の間には表に出てこないだけで、いろんなトラブルが発生してる。ただ、ヒロが引き取ったのが重巡那智だと聞いて思い出したんだが……。どうも那智は当時、その上官を暴行し口汚く罵ったらしい。怒った上官は軍令部に訴え出て軍法会議だと騒いだそうだが、実態は痴話喧嘩レベルでまともな事件にはならん。ただ上官への態度、素行の不良は事実として、艦隊ごと冷や飯食いになっていたという話だ」

マツエダ提督にはちよつとした衝撃だったため、すっかり気落ちしたような表情で炒めものとチャーハンを黙々と口に運んだ。

「すまなかつたな、変な話ししちやつて。ヒロが上手くやってんなら、おれが何か言う筋の話じゃない」

——那智君は、あのトビウメ君とも上手くやっていた……。そんな那智君が一体なぜ……

妙な苛立ちを覚えてマツエダ提督はコップのビールをグビグビと飲み干した。すかさずクスマミがビール瓶を傾けて空になったコップにおかわりを注ぐ。

「その相手の提督はどうしたんですか？」

「確か艦隊を放り出し本土に抗議に出かけ、結局戻ってこなかった。よくは知らないが、優秀な男だったんで軍令部の作戦課に行ったらしいが、その後のことはおれにもわからない。心配になって変な話したおれが悪かった。難しい顔せんで、ほら飲もう、食おう」

「クスマミさん、那智君は良い重巡ですよ」

クスマミはうんうんとうなずいた。

「ヒロがそう言うなら、心配しない。艦娘にはいろんな変なやつもいるが、人間と違って性根の悪い子は一人だっていない。最近は直接面倒を見る機会は減ったが、そのことはおれだってよくわかってるよ。さあ、つまらん話はこれまでにしよう。さあ」

そう言つてクスマミはビールのコップを手に掲げた。マツエダ提督は晴れない表情ながらコップを手に二度目の乾杯をした。

クスマミの手前、その後マツエダ提督は最大限夕食を楽しんでいるように振る舞ったが、脳裏には那智と那智を告訴した提督、そして今夕ロタロ泊地にいるトビウメ提督のことが頭から離れなかった。

戦闘詳報 3

メジロ泊地、昼下がり。基地の最高責任者であるマツエダ提督が留守であっても、基地ではいつも通りの日常が続く。那智は午前の仕事を終え、非番となった。今日も日差しが強く蒸し暑い。寮の自室に戻りすぐにガラス窓と鎧戸を開け放つ。部屋に籠もった熱気を追い出すため扇風機の電源を入れた。

上着を脱いでから、窓の外の遠い水平線へと目をやる。

——トビウメ、一体貴様は……

「いや、今そんな事を考えていてもなんの役にも立たない」

しばしばんやりしてからはつと我に返った那智はそう独り言ち、無意識に手は棚のダルマに伸びかけて、すぐ手を引つ込める。

「違う！　今は酒ではない……。まったくどうしたことか……」

——ヤムヤム泊地に居たときは、こんなにだらしなくはなかったぞ……

那智は自分自身に呆れながら、なにか生産的な用事を見つけようと殺風景な室内を見回し、ふと視線は洋服ダンスの前に向けられた真新しいワンピースに向かう。しばしワンピースを眺める。今更ながら、那智は自分がマツエダに買ってもらったこのワンピースをとても気に入っていることに気づいた。不意にマツエダ提督の自分を見るやさしい眼差しを思い出し、那智は今更ながら頬が赤くなった。那智は一部の艦娘のように提督との色恋に強く興味を持つ性格ではなく、これまで共に戦ってきた多くの提督とはさばけた付き合い方をしてきたが、そんな那智でもマツエダ提督から普通以上の好意を寄せられていることに気付いた。

那智は困惑して姿見に映る自分の顔を確認する。顔を赤らめつつも唇は困ったように歪んでいるが、目尻はやや柔和に下がり、どこか毒気が抜けたような眼差しの色白の女が強がった表情でこちらを見つめている。まさに那智の心中がそのまま顔に出ていた。

那智は居住まいを正して、再び姿見に向き直った。那智は妹の足柄のように、あまり濃い化粧はしない。してもしなくても面貌がほとん

ど変わらないため、軽く紅をさす程度で済ませてしまうことも多い。足柄は、そんな那智を妬んで、いつもああだこうだ言うのだが、那智から言わせれば足柄も本来、ベタベタ塗りたくらなくても素顔は殆ど変わらない。ただ、足柄には自分のメイク手法にこだわりがあるようで、なかなか厚化粧をやめようとしないので。

ただ鏡の中の那智の顔は、慣れない環境での新生活と心労で、頬にやつれの筋が浮いている。

「何を呆けているんだ、お前は……」

那智は姿見に向かってつぶやくと、自分の最大の自慢である、サイドテールにしている足元に届かんばかりの艶のある黒髪を掴んで鼻元に近づける。

——この暑さだ。そろそろ洗髪しないとな……

那智は腕時計を見る。哨戒に出ている駆逐艦たちが帰る前に入浴する時間がありそうだった。那智は一念発起し、着替えや洗面具を準備すると艦娘用の浴場に向かった。

艦娘用の浴場は寮の同じ建物内の一階にある。まだ昼間で、非番の艦娘が入っている様子もなく。面倒な洗髪をしても迷惑になりそうになかった。

那智は入り口にかかっている暖簾をくぐり六畳ばかりの脱衣所で衣服を脱ぎ始めた。衣類を畳んでかごに入れ、体にタオルを巻いてサイドテールを束ねていたゴム紐を解く。黒髪がマントのように後頭部全体からゴザ敷きの床にまで広がった。このままでは自分で踏んづけかねないので後頭部でまとめようとしていると、洗面器や衣類袋を手にした高雄が暖簾をくぐって入ってきた。

「あら、那智さん。那智さんもこれからですか？」

「ああ。哨戒中の皆が帰ってくる前に済ませてしまおうと思つてな」

すると高雄は朗らかに笑い、わたしもですよと答え那智とは反対側の棚の脱衣カゴに服を入れるとブラウスを脱ぎ始めた。

那智は急いで自分の髪をまとめて浴室へ入ろうとしてふと、上着とスカート脱ぎ、ガーターベルトに繋がったストッキングと下着姿になった高雄の肢体を一瞥する。上下とも緻密な装飾の入った黒い下

着が、色白で肉感的な体を覆っている。女性である那智から見ても、魅力的であることはわかる。人に見せるわけでもない物のデザインには頓着しない、質実剛健を旨とする那智はまず選ばない種類の下着だ。

——そういえば、色こそ違い足柄が似たようなのを選んでいたな……

以前、似たような下着を足柄から勧められたことがあったが、自分には不似合いに思えて断ったこともあった。

——高雄のような大人しい艦娘でも、ああいうデザインを好むんだな……

那智はそう思いながら板戸を引いて湯気で曇る浴室の洗い場に入った。ヤムヤム島泊地と異なり、立派な浴室だ。那智は左壁に面したシャワーと蛇口の前に腰をおろし、ヘチマで体を洗い始めた。

那智と高雄。妙高型と高雄型。実際の巡洋艦としては親戚とも姉妹とも言える間柄だが、いざ艦娘として会ってみると、容姿も物腰もかなり異なると那智は改めて感じた。妙高型はどちらかといえばスレンダーで、「日刊青葉」では以前「連合艦隊最強のスーパーモデル姉妹」などとおちよくられたこともあった。そんな中でも足柄は姉妹の中でももっとも凹凸のある恵まれた体型で、実際に多く男たちの視線を一身に集めることも多い。一方、那智は姉妹の中でもっとも背が高く（といっても姉妹間での差は三センチ程度だったが）で無駄を削ぎ落としたようなすらっとした体型で、ことさら男性陣の視線をさらうようなことはなかったが、その事を不満に思ったことはない。自分は戦い義務を果たすことを何よりの喜びとしてきた。

——そういえば、あいつとはそんな艶めいた話をするとはなかったな……

那智はそう思いつつ体を洗い終え、髪を洗うことにした。解いた長い髪を平安時代の姫君よろしく洗面器にためて、シャンプーで毛先から根気よく洗っていく。

いつの間にか高雄も湯気の方こうの反対側の洗い場で体を洗い始めていた。那智は黙々と髪を洗いながら高雄型姉妹のことを考えた。

確か妹の二番艦、愛宕も高雄同様、人を魅了するプロポーションで、確か写真集を出しているという噂を聞いたことがある。先の作戦で一緒に戦った三番艦の摩耶も姉ゆずりの魅力的な体型をしていたことを思い出した。

那智は髪を洗いつつ、肩越しに高雄を一瞥した。提督と指揮下の艦娘の関係は艦隊ごとに様々だ。那智から見ても、高雄とマツエダ提督の関係は非常に良好に思える。二人はいつたいていどういう関係なのだろうと那智は考えた。上官と部下の間の忠誠心、ともに敵と戦うパートナーとして戦友愛、男性と艦娘としての異性愛、もしくはそのいくつかを含んだもの……。実際、那智の姉である妙高は、自分が仕える提督の公私に渡るパートナーとなり、指輪を交わし内縁関係にある。海軍内でも妙高は実施的にその提督に「嫁いだ」こととして扱われていた。

——わたしと貴様は一体、どういう関係だったのだろうか……

那智はそんな事を考えつつ長い髪を石鹸でこすり続ける。すると体にタオルを巻いた高雄が近づいてきて遠慮がちに声をかけた。

「あの那智さん……。もしご迷惑じゃなかったら、髪を洗うの、お手伝いしましょうか？」

すでに高雄は体も髪も洗い終えていた。どうも余計なことを考えていて手を動かすのが遅くなっていたようだ。

「え？ あ？ いや……」

那智は一瞬戸惑ったが、長居をしているのは哨戒中の艦が帰ってきてしまうかもしれないので、やむなく毛先からリンスがけを頼むことにし、那智は急いで自分の頭を洗う。

まるで貴重な博物標本を扱うような丁寧さで、那智の髪をさすりながら高雄が言う。

「妙高さんの黒髪も本当に綺麗ですが、那智さんの髪も本当に艶があつて綺麗……。憧れちゃいますね」

うっとりとした表情でそう言う高雄の顔を那智は思わず見上げた。この髪が自慢でないと言ったら嘘になる。那智は照れくさくなり、返答に窮した。

「いつそ高雄も伸ばしてみればいいではないか」

「確かに妹たちはロングにしていますが、わたしはきちんとお手入れできるかしら……」

高雄はそう言っつて、洗面器にためた那智の髪を優しくこすつた。

高雄の手助けもあり、なんとか洗髪を終えた那智は再び髪をまとめタオルで巻くと、高雄と並んで湯船に浸かった。

熱帯地域なので浴槽の湯はややぬるめに調整されている。それでも色白の高雄はすぐに上気して顔が赤くなりはじめた。

「立派な風呂場だな」

那智が浴室を見回しながら言うと、高雄は少し嬉しそうに笑う。

「ラポールやローリーの基地のようにはいきませんが、提督が艦娘の福利厚生は大事だとおっしゃって、予算を多く融通して建ててくれたんです」

那智は納得してうなずいた。

「高雄はマツエダ提督のもとについてももう長いのか？」

「二年になるくらいでしょうか？ わたしは元々本土の連合艦隊直属だったのですが、技術部からもう少しでこの島に新しい提督が着任する模様だからと通達があつて、それで派遣されてきたんです」

この不可解な世界の大きな謎の一つが提督の着任に関するものだった。新たに「前の世界」から提督が飛ばされてくる際には事前には軍令部隷下の技術部から着任見込みの知らせが発せられ、命令を受けた艦娘、泊地がその受入準備をすることになる。もつとも、どのような人物が来るのかは誰にもわからない。どうも部分的には妖精が関係しているとも言われているが、全ては理解の及ばない謎のベールにつつまれている。実際に那智もこれまで複数人の提督をそうやって迎えてきた。これまでの提督達のことを思い出し、那智は自身の心の古傷が痛むような感覚に襲われ、無意識に下唇を噛んだ。

——トビウメ……。貴様も、きつとわたしから去っていった大勢の提督の一人になるのだな

「高雄にとつて、マツエダ提督は初めての直属の提督となるわけか？」
「ええ、そうなんですよ。実はわたし、着任するまで自分が秘書艦と旗

艦として任務をこなせるか不安だったんです」

高雄はそう言つて一度言葉を切った。

「わたしは前の世界で大きな作戦中に、眼の前で妹の愛宕と摩耶を潜水艦の雷撃で失いました。同じ時にわたしも魚雷を受けてしまって艦隊から落伍してしまつたんです。ただ一隻残つた鳥海は、その後間もなく進撃先で戦没し、結局わたしは最後の一隻となって戦闘不能な状態で敗戦の日を迎えたんです。お姉さんの妙高さんとはその時ずっと一緒だったんですよ」

そのことは那智も妙高から少しだけ聞いたことがあり、軽くうなずいた。

「わたし、その事がずっと負い目になっていて、時々塞ぎ込んでしまいたくなることがあつたんです。それに引き換え妙高さんは、いつも凛としていて、前の世界でも今でも、わたしにとって憧れの先輩なんですよ」

那智はそれを聞き、自分の前世を思い出した。自分は姉妹の中で一番早くに戦没し、結局敗戦を見届けたのは長姉の妙高だけだった。自分も、姉に高雄と同じ重荷を背負わせたことはわかつていた。

「わたしは精一杯頑張るつもりで提督をお迎えしても、この不安と後ろめたさが消えなくて、提督が着任してからしばらくして、わたし、提督に自分の不安を話したんです。そしたら提督は『君はちゃんと乗っている人みんなを守りきつたんだ。それはとても誇るべきことなんだよ』って、提督は私の前世のこともわかつた上でそう言ってくれたんです。それを聞いて、わたし……」

高雄は頬を赤くしてうつむいた。

「こんな素敵な提督がわたし達の艦隊に来てくれて、ほんとに良かったって……」

そう目を逸して赤くなる高雄を見て、那智にもようやく高雄がマツエダ提督に対して、上官としてだけでない特別な感情を抱いていることがわかつた。そして自分が再び良い提督の指揮下に入ることができたことを嬉しく思ったのだが、一方で自分が実は非常に難しい立場に置かれているのではないかという懸念も頭をもたげてきた。

「そうか……。高雄がそう言うなら安心だ。わたしも良い提督と艦隊に巡り会えてありがたく思う」

那智が言葉を選んでそう言う。高雄は顔を赤くしたままにっこりと微笑み返した。

「ただいま、衣笠さんのご帰還だよ」

「衣笠さんおかえりー」

陽気な声とともに司令部の建物に戻ってきた艦娘の衣笠を清霜が迎えた。

「今日も暑いね。みんなまだ係留作業中だけど、先にお風呂いただきちやおうかな？」

衣笠が仰ぎながら言う。清霜はうなずいた。

「大丈夫だよ。今、高雄さんと那智さんも入ってるみたい」

「ええっ？」

衣笠は思わずギクリとして浴場の方へ目をやった。

——あの二人が一緒に？　だ、大丈夫かな？

とうてい、そんな気まずそうな場所に一人で乗り込んでいく勇氣はなかった。

「あくそうだ、いっけな。衣笠さん、もやいをちゃんと縛ったか確認してなかった。ちよつと見てくるね」

この艦隊でおそらく一番察しが良く、目端が利く艦娘の衣笠はいらぬ苦勞を一人背負いつつ、不思議そうに目をパチクリさせる清霜を置いて再び棧橋へ戻っていった。

タロタロ泊地。上空の雲の流れが早く、泊地でも風がではじめた午前。錨泊中の艦の艦尾に掲揚された旭日旗がひっきりなしに揺れている。陸地に身の置所がないトビウメ提督はずつと湾内に停泊した重巡加古の士官室こもって、ただ時間が過ぎていくのを待っていた。

無事に修理が完了した長良、初風、早霜は近海の哨戒・警備の当番に加わり、誰かしら数日に一度、泊地から外洋へ出撃することになった。連合艦隊司令部は本土の軍令部に戦闘詳報の第一版を提出し、今

後の方針について指示を仰いでいる最中で、泊地ではその返答までに急ピッチで損傷艦の修理が始まっている。

トビウメ提督は泊地から出ることが許されていないため、哨戒任務の監督に就くこともなく加古で過ごしていた。当初は秘書艦の不知火の艦で過ごしていたが、艦隊により居住性に優れる巡洋艦があるにも関わらず、無理に駆逐艦で過ごす事もないため、提督、不知火、加古の三人で話し合い、当面は加古で寝起きすることになった。不知火は提督が生活の拠点を移してしまうことに内心不満を抱いたが、不知火自身も秘書官の業務として恒常的に重巡加古に滞在することを加古に認めさせた上で承知した。

この日、日がな一日、廃人のように過ごしているトビウメ提督に動く機会を与えたのはジョギングから戻ってきた長良だった。

「朝のジョギングで山の上の中央病院まで行ってきたよ。山城さんと扶桑さんもあそこにいるんでしょ？ 気晴らしにお見舞いに行ってきたら？」

昨日もらった戦闘詳報の写しを読んでさらに気落ちして、加古の士官室のソファから動こうとしなかったトビウメ提督は長良の声で身を起こした。

「じゃあ二人に会ったの？」

「ううん、外を一周して戻ってきただけだよ。わたしの足で二十分ぐらいだから歩ける距離だよ」

——絶対歩ける距離じゃない。くろがねを手配しないと……

長良あつけらかんとした様子で言うが、病院は島の山の上にあり、歩くにはちよつと骨が折れそうだ。

長良には、目が覚めたら考えると適当な返事をしてトビウメ提督は隣のテーブルで黙って麦茶を飲んでいた不知火にどう思うか尋ねた。不知火はしばらく考えてから言う。

「そうですね。司令も不知火も、今ここでじっとしていても、できることはないません。治療経過を把握するためにもちよつと見に行ってみるのも良いかと」

トビウメ提督はあまり気乗りしないものの、管理者としての責任も

あるので、結局それを受け入れ、立ち上がった。

「司令官……、軍装では目立ってしまうわ……。平服で行かれたらいかが？」

不意にソファの後ろから低い声が発せられ、驚いて振り組むと薄暗い室内の影から実体化するように早霜が現れた。

——またか……

相変わらずぎよつとさせられるものの、最近ではトビウメ提督も早霜の『急襲』に随分慣れてきた。

「そつか……。それがいいかもしれないね」

トビウメ提督は身支度をするため居室として加古からあてがわれた艦隊司令室で外出用の防暑衣に着替えてから、加古の私室となっている艦長室のドアをノックした。

「加古、ちよつと山城さんの様子を見に、中央病院まで行ってくるけど、加古も行く？」

もう一度ノックしたが返事はない。どうもまだ寝ているようだ。

マツエダ提督は綿のサファリ帽を片手に甲板へと降りていった。内火艇へつながる舷梯の前には、不知火とともに早霜もそろいの麦わら帽子を被って待っていた。

「あれ？ 早霜ちゃんも行くの？」

「ええ、お邪魔でなければ……」

「もちろん、いいよ」

そうして三人は内火艇で陸地の棧橋まで向かい、すぐに不知火が司令部庁舎へ行ってくるがね四起を運転手ごと調達してきた。棧橋で警備していた憲兵の一人がすぐにトビウメ提督に外出場所や目的を詰問してきたが、提督が事情を話した上に、戻ってきた不知火が恐ろしい顔で詰め寄ろうとしたので、憲兵はすぐに逃げていった。

三人は小さなくろがねにすし詰めになつて乗ると、車はすぐに検問ゲートを越え市街地に出る。

タロタロ島は決して大きな島ではない。五分もせずくろがねは市街地を抜け山へ通じる未舗装のガタガタ道を登り始めた。

トビウメ提督は、ここしばらく海軍の仕事に追われて周囲に目を配

る余裕が無かったが、この島も自然豊かで、カメラ片手散策に出かければ疲弊した精神も少しは癒やされそうに思った。両側が熱帯性の森林におおわれた山道をガタピシと十五分ばかり登ってくるがねはようやく白くきれいに塗装された木造の三階建ての洋館風の病院の前にたどり着いた。

運転手に礼を言つて、三人は病院の正面玄関に向かう。後ろを振り返ると軍港や街が一望できた。

「結構登ったね。やっぱり歩く距離じゃないよ……」

——いい眺め。良いところにあるなあ……

不知火によると、市街地や基地が爆撃にあつた場合でも病院が巻き込まれないよう、あえて辺鄙なところに多いな病院を移したという。元は結核患者用のサナトリウムで、今でも一角が専用病棟になっているらしい。

「くれぐれも、サナトリウム病棟には近づかないでくださいね」

病院に入る前に、不知火は強くを念を押した。

「うん、わかってるよ」

トビウメ提督の生前の世界では、結核で死ぬことなど聞いたことがなかったが、この世界では依然、罹患すると重篤化する可能性もある深刻な感染症として恐れられていた。この世界の人々の食料事情や栄養状態は、艦娘達が活躍していた昭和初期の世界よりは良好のようだが、医薬品や医療の発達は追いついていないようで、特效薬のストレプトマイシンの供給が十分ではない。そのため提督らは艦娘から、結核にかからないようきつく注意されていた。

「ところで、艦娘も結核にかかるの？」

「当然です」

「でも人間と違って死んだりしないでしょ？」

不知火は呆れたように首を振った。

「確かに聞いたことはありませんが、第一号になるつもりはありません」

そりやそうだねとトビウメ提督は納得した。

病院の受付で山城が入院している精神病棟の場所を聞き、閉鎖病棟

となつてゐる別棟の二階に向かつた。嚴重に施錠されたドアを何枚かくぐつて閉鎖病棟へやつてきた。出入りが規制されているだけで、特に変わった病棟ではなかつたが、入り口越しに見えた男性向けの病室にはベッドに座りながら痙攣が止まらない者や寝転がったまま奇声を上げている者の姿が見えた。トビウメ提督はおぞましきにおもわず顔を背けた。

——あの人達には一体何が起きたのだろうか？

早霜がどこかで聞きつけて、後に判つたことだが、その病室に収容されていたのは、連合艦隊司令部付きで軽巡大淀に乗艦していた参謀などの司令部要員で、幸い命は助かつたものの、大淀被弾の際の惨事を目の当たりにして精神にダメージを受けてしまった者達だった。

一行は看護師の先導で山城の病室へやつてきた。そもそも山城に身体的なダメージはない。山城はベッドの上で背を丸め親指の爪を噛みながら、体育座りをしていた。

「くれぐれも刺激してはだめですよ」

看護師のおばさんはそう一同に念押しした。

「姉様…… 姉様…… 姉様……」

光を失つた濁つた瞳で何処か一点を凝視しながら、相変わらずぶつぶつ呟いてる。

「ちつ…… ほとんど回復が認められませんね？ ちよつと叩いてみましょうか？」

不知火が苛つきも隠さずそう言うので、トビウメ提督は慌てて制止する。

「や、山城さん……。わかるかい？ みんなでお見舞いに来たよ。お土産にモモ缶を持ってきたから、あとで看護師さんにかけてもらつて食べてね？ ！」

提督が小さい声で山城に恐る恐るささやきかけると、突然、山城の目に鋭い光が宿り、提督を睨みつけた。

「どこだ！ 姉様はどこだ！ もう騙されないぞー！」

「ちよつとー！ ぎゃあー！」

突然叫びだすなり、山城は狂犬のような表情でトビウメ提督の襟元

に掴みかかった。恐れをなしたトビウメ提督は派手に床に転倒した。それでも山城はまだ手を離さない。

「し、司令！ 離せメンヘラ戦艦が！ 早霜！」

不知火はそう叫ぶや山城を提督から引き剥がそうとし、すぐに早霜も加わり山城をベッドに押し戻そうとする。叫び声を聞いた看護師たちも駆けつけ、トビウメ提督はなんとか絞め殺される前に山城から解放され廊下に避難した。

「だから刺激しちゃだめって言ったでしょ！」

「いや、僕らは別に……」

看護師に怒られ、三人は得るものもないまま、ぐったりしながら閉鎖病棟をあとにした。

「開襟シャツのボタン二つもとれちゃった……」

「司令官、あとで付け直して差し上げます」

シャツをつまんでそう言う提督に、早霜はやさしくそう言って笑った。

三人はその後、一般病棟にいる扶桑を見舞った。扶桑は一見、ケガも無さそうなのだが、相変わらずベッドの天井に向かって一人で何やら話しかけている。

「山城ったら、駄目よ。缶詰はちゃんと缶切りできれいに開けるのよ。缶切りはどこにいったかしら〜」

「扶桑さんも全然良くなってないね……」

もはや話しかける勇氣も湧かず、トビウメ提督はげんなりした表情で言った。一方不知火はベッドに横たわる扶桑の様子をじっと観察してから首を振った。

「いいえ、少しずつですが回復しているようですね。見てください、あの艦橋、事故時より歪んだ角度がかなり小さくなっています」

「ええ？ そうなの？」

「そういえば、昨夜から艦の修理が始まったそうよ……。船の修理が終わると、扶桑さんも良くなるかもしれないわ」

「そういうものなの？」

扶桑にもお土産の缶詰を持ってきたのだが、看護師や艦娘専門の医

官によると、扶桑はまだとても物が食べられる状況ではないとのこと
で一行は病院を後にし、くろがねで港へと戻った。

内火艇で三人が重巡加古に戻つてくると、モツプを手にした加古が
血相を変えて上甲板へ駆け上がった。

「やつと帰ってきた！ 提督、ぬいぬい！ 士官室の舷窓、開けたまま
出かけちゃ駄目って言ったじゃん！ 士官室、波が入り込んでびしゃ
びしゃになっちゃったよ！」

「ぬ!?!」 「あ！ そうだった！」

珍しく感情的に怒る加古の前に、不知火とトビウメ提督はしまった
という表情で顔を見合わせた。

「この艦は喫水線から上の舷側が低いから、窓開けるときは注意し
てつてあれほど言ったじゃん！」

万事ズボラな加古も自分の艦の窓の開け閉めだけは厳格に守つて
いた。というのも、舷側が低く設計されている古鷹型重巡は、ちよつ
と海が荒れるだけで窓を越えて海水が流れ込んでしまうため、開ける
際は天候や周囲の状況に注意が必要だった。どうも加古は艦長室で
寝ていたため、留守中に舷窓が開けっ放しであったことをしばらく把
握できなかったようだ。

提督と不知火は深くため息をついた。

「ごめん加古……。ぬいぬい、モツプを持ってきて」

「はい、司令……」

トビウメ提督と不知火は肩を落として士官室へ向かう昇降扉へあ
るき出した。

「ねえ、シモっち？ あの二人どうかしたの？」

意気消沈した二人の背中を見ながら、怒りの鎮まった加古が早霜尋
ねる。

「労多くして、実り少ない半日を過ごしてしまっただけですよ。もし
加古さんが情けをお持ちなら、今日だけは二人に優しくしてあげてく
ださいね……。フフフ……」

「あたしも、そんなに怒ってるわけじゃないし、これから気をつけてく
れば良いんだけど……」

加古は少し戸惑いつつ言った。

甲板を再び少し強い風が吹き抜けた。早霜の黒髪が一時的に風に翻弄される。

「昨日は窓を開けていても平気だったのに。少し時化てきたのでしゅうか？」

「そうかなあ？ あたしの艦はちよつとの波でも水かぶつちやうから、どうだろう？」

——湿った風……。嵐が来るのかしら？

早霜はそう思いながら外洋の方へ見つめた。

その後、四人はモツプを手に海水が入り込んだ士官室の掃除に励んだ。

メジロ泊地。その日のローリー島からの定期便は定刻より三十分ほど早く泊地の上空にすがたを見せ、軍港に隣接した砂浜にある飛行艇用棧橋に着岸した。九七式飛行艇が白波を立てて着水するのを見て、秘書艦の高雄と、一緒に執務室で仕事をしていた那智は慌てて砂浜まで迎えに出た。

第三種軍装を着たマツエダ提督が手提げかばんと紙袋を両手にハツチから棧橋へと降り立つ。砂浜で高雄が深く礼をし、那智は敬礼して出迎えた。

「お疲れ様でした、提督！」

マツエダ提督は返礼しつつ大きな紙袋を二つ、那智へ手渡す。

「ただいま。これは向こうでクスマさんから頂いた間宮羊羹とクッキー。食堂の主計科に渡しておいて。那智君、すぐに呼ぶから、しばし食堂で待機してほしい」

「承知した」

「高雄ちゃん、ちよつと一緒に来て……」

マツエダ提督は終始真顔を崩さずそう言うと、高雄を伴い執務室の方へ歩いていく。当然、那智は戦闘詳報に内容が気になって仕方がなかったが、言われたようにお土産が詰まった袋を手に食堂へ向かった。

そして十数分後。執務室で黒表紙綴じの戦闘詳報を手にした
高雄は辛そうな表情で思わず口に手をやる。

「こんな事が本当に起きるなんて……。そんな……。これを那智さん
に伝えるんですか？」

「そこなんだよ。どうするべきだろう？　ここに書かれていること
は、私はほぼ真実だと思う。ただ、那智君はこれを知ったらどう思う
だろう」

執務机の向こうで、マツエダ提督は困った表情で言った。

「きつととても悲しむと思います。でも……。いつまでも隠しておける
ことではないですし、そのまま知らせるしかないのではないでしょう
か？」

「やはり、そうだな。私達は山城君がどういう性格か知っているから、
こういう事が起きてても、ありえない話じゃないと思えるが、原因があ
まりに突飛なんで、『実は提督が山城に航海中、良からぬいたずらをし
たんじやないか』などという悪い噂も出ているみたいだ」

「酷い……。もし、提督にそんな噂が立てられたら、わたしとても耐え
られません。でも、後で変なかたちで知るよりも、やはり今の状況を
ありのまま伝えるのが、那智さんにとっても良いのではないでしょう
か？　艦娘と提督の間でもっとも大切なものはやっぱり信頼だと
思っています」

マツエダ提督はうんと深くうなずいた。

「わかった。知っていることを全部伝えよう。那智君を呼んできて」

すぐに高雄が那智を伴い、執務室に戻ってきたので、マツエダ提督
は戦闘詳報を那智へ手渡した。

那智は硬い表情で頷き、自分の机でゆっくりとページをめくり始め
た。それからの数十分、マツエダ提督と高雄は固唾を飲んで、戦闘詳
報を読み進める那智を見守っていた。あるページに入ってから、急に
那智の額にじつとりと汗が浮かび、表情がひきつり始めた。顔色はみ
るみる紅潮していく。マツエダ提督にも高雄にも、それが恥じらいな
のか怒りなのか、判別できなかつた。二ページほどめくった後、那智
の顔は急速に青ざめはじめた。黒表紙を掴む手もかすかに震えてい

る。それを見守る二人も気が気じやない。その後那智は血の気が抜けたような白い顔で、淡々とページをめくり、報告書を最後まで読み終えた冊子を綴じた。

視線を落として深い溜息をついてから那智はいつにも増して硬い表情で立ち上がり提督の執務机の前に来て冊子を返した。

「全て承知した。わざわざのご配慮に心から感謝する」

那智はそう言つて深く頭を下げた。

「私はこれが、この戦闘詳報がある程度、現場の真実を伝えていると考えているが、君はどう思う」

「わたしもこれは真実だと考える。実際、トビウメ アツオ提督は着任時点で非常に船に弱く、未だ克服できていなかった。乗り慣れない山城艦上でこのようなことが起きることは、用意に想像できる」

「そうか。私達も山城君の性格を知っている。些細なことで人事不省に陥る可能性があることは認識している。ただ……、なかにはその事を想像できない者もいるみたいだ」

マツエダ提督はそう前置きして、山城が行動不能になったのはトビウメ提督がなにか不道徳なことをしたからだという噂があることを伝えると、那智は顔を赤くし、初めて感情を顕にして大声をだした。

「そんなことはありえない！ あの男は決してそんな真似できる男ではない。それだけは保証する！」

「那智さん、落ち着いて。わたし達もわかっているから……」

——まあ那智君ならそう言うだろう

マツエダ提督は心の隅に起こった、トビウメ提督へのかすかな嫉妬心を払いのけてうなずいた。

「私はトビウメ提督のことを詳しく知っている訳では無いが、そう思う。それに山城君の扱い辛さもよく解っている。だから連合艦隊司令部と軍令部宛に、今回の事故は予見が難しく、避けられない不幸な事故で、決して提督が艦娘に狼藉を働いて起きた事件ではないと訴える上申書を提出しておいた。どこまでの意味があるかはわからないが、少しでも彼の助けになればいいのだけど……」

那智は少し驚いたような顔をしたが、すぐに真剣な表情で提督を見

据えた。

「貴官のご配慮に心から礼を言う。また、今回わざわざこういう形で状況を伝えてもらい、御礼の言葉が見つからないくらいだ。本当に感謝する」

そう言つて那智は深々とお辞儀をした。

「那智さん、そんな大げさなこと……」

那智は頭をあげると無理やり、辛そうな笑顔を見せた。

「着任以来、色々、前の艦隊に関して気を使つてもらい恐縮するばかりだ。ただ、わたしの今の居場所はこの泊地、艦隊にある。特別なご配慮は、これきりにしてもらいたい。この艦隊のために全力をつくす」

那智はそう言つて敬礼をすると退出を求めた。提督が許可すると那智はそのまま執務室を後にした。

「那智さん、ちよつと心配です。わたし見きます」

高雄がそう言つて立ち上がった。

「提督、上申書の件、やっぱり提督はお優しい方ですね……」

高雄は顔を赤らめてそう言うのと那智を追つて出ていった。

一人残されたマツエダ提督は椅子の背もたれに深々と身を預けた。どつと疲労感が押し寄せてきた。これが最善の対応だったと自分に言い聞かせた。

那智は足早に自分の宿舎まで戻ると乱暴にドアを閉めて鍵をかけた。急いで鎧戸と窓を閉めてからベッドにある枕をひつつかんで思いつきりベッドマットに叩きつけた。ボフつと鈍く揺れるベッドマットに向けて、那智はあらん限りの声で叫んだ。

「あの……、大馬鹿者がああああ！」

那智はがつくりと床に肘を付きマットに苛立ちと羞恥心で真っ赤になつた顔を押し付けた。

ドアの外では、心配になつてついでにきた高雄と那智のただならぬ様子を目撃した衣笠が、突然のドア越しの絶叫に身をすくませて顔を見合わせる。

那智は荒く肩で息をしながら怒りの波の第一波が引くのを待つて

棚のダルマの瓶へ手を伸ばしかけるが、栓を開ける前に乱暴に瓶を棚に戻した。那智はしばらくベッドに身を預け、感情の波が凪ぐのを待った。動揺がおさまれば次やるべきことが見えてくる。

那智は一時間後、ようやく身を起こし、新呼吸をしてから机に向かった。そしてデスクライトをつけ、便箋と封筒、万年筆を取り出し、便箋にゆつくりと、言葉を選びながら筆を走らせ始めた。二時間後、ようやく手紙を書き終えた那智は茶封筒に糊を塗り、丁寧に封をする。

「トビウメ提督、無力なわたしがしてやれることは何もない……」

封筒を握りしめて、絞り出すような声で言った。

二日後。定期便の飛行艇が来る前に、軍用郵便と一般郵便の目録を高雄がクリップボードへ挟んで持ってきた。島の防衛の最高責任者である提督には、島と外部とのあらゆる私信や通信を検閲する権限があった。提督がその気になれば手紙や電話にプライベートはない。もつとも今まで一度もその権限を行使したことはなく、その必要もなかった。ただ毎回、外部への郵便を送るのに提督の決裁が必要とされ、毎回機械的に印を押すだけだった。この日もそうだったのだが、マツエダ提督はその日送り出す軍用郵便の一覧の一行に、重巡那智の名前を見つけた。決裁印を押す手が一瞬止まる。

——那智君、まさかトビウメ提督に……

心中がざわついた。宛先は元々秘密でもなんでもなく、一覧表にすべて併記されている。那智の私信の宛先はタロタロ泊地にいる妹の重巡足柄宛となっていた。自分がちよつとホツとした気持ちになっていることに気付いた。正直なところ、手紙の内容がとても気になったが、このようなことで検閲なんてもつてのほかだと自分に言い聞かせ、マツエダ提督は書類に決裁印を押した。仮に手紙がトビウメ提督宛だったとしても、中身を見ることは人として許されない。もやもやした気持ちにならずに済んだことにマツエダ提督は安堵しながらクリップボードを高雄の執務机に置いた。

その日の午後、メジロ泊地に飛来した二式飛行艇は那智の封書を収めた郵袋を積み、再び離陸すると東方のローリー泊地へ向けて飛んで

い
っ
た。
。

山城牡蠣

ブーメラン島中部、最前線。クロコダイル・クリークと呼ばれる川幅約20メートルの浅い川をはさみ、兩岸から赤い黄色の曳光弾が交錯、また迫撃砲弾の撃ち合い合戦が続いている。深海軍の勢力下にある南岸のジャングルの向こうから、深海軍の装甲車両がのっそりと姿を見せたのは日没からすでに二時間が経過した頃だった。打ち上げた照明弾の白い光の中で、真つ黒なアンモナイトのような形の重装甲車両が三台、低木をなぎ倒しながらゆっくりと川に近づいてくる。

「十時方向に戦車だ！ 戦車が来るぞ！」

銃声と砲声の合間に誰かが叫んだ。それを聞きつけたのか一番近い重機関銃陣地から機関銃がまっしぐらに銃弾を送り込み、赤い曳光弾の筋がその黒光りする奇怪な巨体に吸い込まれるが、銃弾はことごとくその厚い装甲に弾かれ、空に跳ね散る曳光弾が対岸からはつきり見えた。

前線を預かる守備隊の小隊長は足元の有線電話のクラックを回して速射砲陣地を呼び出した。

「戦車が来ている。そっちから撃てるか？ よし、すぐにやれ！」

小隊長がそう叫んでいる合間に突然先頭の『アンモナイト』が発砲した。貝殻の隙間から黒光りする砲身を伸ばすと突然、川の北岸の陣地へ向けて榴弾を発射したのだ。戦車砲はすぐに重機関銃陣地を直撃し、オレンジの爆炎とともに土囊もろとも陣地を吹き飛ばした。

「くそー！」

小隊長が叫ぶ。衛生兵が数人そのわきを駆け抜け、吹き飛ばされた陣地へ走っていく。衛生兵が向かっているが、あの爆発ではあの重機関銃班は誰も助からなかっただろう。

一方、陣地左方にある、樹木や繁みで偽装された砲座からゆっくりと車輪付きの対戦車速射砲が前進し、砲口を対岸の『アンモナイト』へ向ける。

「てっ！」

掛け声とともに九四式三十七耗砲により直径37ミリの九四式徹

甲弾が秒速約六百メートルの初速で撃ち出された。砲弾は一秒足らずで『アンモナイト』の殻に直撃し穴をうがった。すぐに先頭の深海戦車が殻の隙間から火を上げて停止した。速射砲班はすぐに薬莖をはじき出すと次発を装填して二両目の戦車へ砲身を向ける。その間わずか十五秒、第二射も目標を違わず二両目の戦車に命中し、爆炎を上げる。それは当たり所が悪く、その『アンモナイト』は砲身を引き出し、ゆっくり狙いをつけ始めた。すぐに第三射が追い打ちをかけるように命中しようやく二両目の『アンモナイト』も燃え上がり始めた。

砲座では砲兵隊がすぐに次の砲弾を込めて三両目の戦車を狙う。

「弾が足りない！ 速射砲弾、急げ！」

「残り五発です！」

それを聞き一同は絶望感に襲われたが、そこへ場違いな女性のハスキーな声が響いた。

「対戦車砲弾の補給であります！ 徹甲弾を優先して持ってきたであります！」

一同が振り返ると後方の塹壕から背負子を背負ったグレーの制服姿の娘が両脇に木箱を抱えて走りこんできた。

「お前は……」

それは陸軍所属の艦娘、あきつ丸だった。速射砲の戦車砲弾を納めた木箱を複数個抱えて走ってくるという、普通の人間には不可能な芸当を見せられ、一同は一瞬顔を見合わせた。

「陸軍の艦娘のあきつ丸であります。弾薬は自分が運びます！ 射撃を続けてください！」

砲兵達はすぐにあきつ丸が置いた木箱を開け始める。

「装填急げ！」

速射砲が射撃を続けるなか、あきつ丸は背負子に縛った木箱をおろすとともに陣地の後方にある弾薬集積場まで走り始めた。

「敵戦車、後退！」

「敵の攻勢、止まりました！」

背中越しに前線の声が聞こえた。あきつ丸は少し安堵しつつも、次

の襲撃に備え集積所まで走り続けた。

第二次ブ島沖海戦の終了後、深海軍の陸軍部隊は島の北方への攻撃を強化し、クロコダイル・クリークを挟んだ攻防が激化していた。陸軍の守備隊はなんとか川岸での戦線を維持していたが、敵の攻勢激化により戦死者、負傷者が急増し、艦娘も戦闘支援のため前線への補給などの任務を買って出ている。

あきつ丸が再び速射砲の弾薬を担いで戻ってくると、前線部隊の小隊長が仁王立ちであきつ丸を迎えた。

「貴様は、一体何をやっておるか！」

頭からものすごい怒号を浴びせられた、あきつ丸は驚きつつも直立して木箱を置いて敬礼した。

「自分は微力ながら戦闘支援のため……」

そう言いかけたところであきつ丸は右頬に強烈な鉄拳制裁をくらしい思わず目の前に星がちらついた。あきつ丸は少し吹き飛ばされて泥地に尻もちをついた。

「ここでの戦闘は貴様の仕事ではない！ 貴様の任務は島の者を無事に島外へ運ぶことだ！ こんなところの戦闘で死んだりすることなど断じて許さんぞ！ 判ったらさっさと港へ戻れ！」

そう一喝すると小隊長はすると踵を返して速射砲陣地を後にした。あきつ丸はさすがすぎる右頬を抑えながら立ち上がると、そばにいた砲兵が助け起こしてくれた。砲兵隊の班長もあきつ丸の肩をたたく。

「お嬢ちゃん、ありがとうな。ここはもういいから、早く港へ戻りな」「おい、あきつ丸ちゃん。頼む、これだけ船にもって行ってくれ。こいつらだけでも本土に帰してやってほしい」

もう一人の兵士が小さな木箱と小判型の真鍮製のプレートにひもを通した、まるでペンダントのような認識票の束をあきつ丸に差し出した。それを見て思わずあきつ丸の顔が凍る。それは、このブーメラ島の最前線で戦死した守備隊兵士達の切り落とした指先を納めた箱と認識票だった。遺体を持ち帰ることはできない。せめて体の一部でも本土へ帰そうという前線での習慣だった。

「とても全員とはいかないが、この隊で集められたものはこれで全部だ。頼んだぞ」

あきつ丸は口元をぬぐいながら、悔しそうにうなずき、箱と認識票を受け取り、とぼとぼとポート・フリスビーへ向けて塹壕を歩き出した。殴られた際に口の中を切ったようで、舌に血の味を感じた。小隊長が右腰に軍刀を吊っていたことはあきつ丸も判っていた。あえて利き手でない手で自分を殴ったのだ。後方から再び機関銃と小銃の銃声が聞こえ始め、夜空に閃光が反射した。あきつ丸はやるせなさとも無力感により両頬に涙がつたうのを感じながら『戦死者達』を抱えて北の港へ急いだ。

タロタロ泊地の重巡加古に一艘の内火艇がやってきたのは、トビウメ提督達が扶桑姉妹のいる病院を訪ねた翌日の午前だった。極力他者との面会や接触を避けていたトビウメ提督だったが、さすがに自分の艦隊の整備を手がける明石の訪問には対応せざるをえないため、慌てて防暑服をきちんと着たうえで不知火、加古ともに甲板へと上がってきた。明石は工廠の作業員二人とブリキのバケツを両手に持って甲板に立っていた。

「トビウメ提督、おはようございます！」

「お、お疲れ様です、明石さん……」

訪問の意図を図りかね、トビウメ提督は戸惑い気味に挨拶した。

「扶桑さんの修理は昨夜から始まりました。高速修復材があるのでそんな二〜三日中には大きな作業は終わりそうです。山城さんも昨日船底をきれいにしたので今朝から本格的に修復作業を始めています」
「そうですか。お手数をおかけします。とにかくよろしく願います」
「す」

トビウメ提督はそう言っただけで頭を下げた。

「ところで今日は一体……」

「はい、今日はこれをお持ちしましたー」

そう言っただけで明石ら三人はブリキのバケツ合計六個を甲板に置いた。中には石ころのような黒いゴツゴツしたものが山盛りに入っている。

それはバケツ一杯の牡蠣とムール貝だった。

「牡蠣ですか？」

「すごい量だね」

不知火と加古が首を傾げてバケツを覗き込む。

「はい、牡蠣です！ これ全部、山城さんの船底から採れた牡蠣なんですよ！」

「あー、なるほどね〜」

加古と不知火は納得したようにうなづくが、トビウメ提督はいまだ事情が判っていない。

明石は昨日から戦艦山城の船底の清掃ともに大量の牡蠣やムール貝が採れたことを説明した。

「通常なら、慣例として工廠の関係者で頂くことになってはいるんですが、今回は普通以上に大量に採れたのでせっかくなら山城さんの指揮官にと思って、お裾分けすることにしたんです」

トビウメ提督をようやく事情を理解してうなずいた。

「それはわざわざありがとうございます。僕らが頂いちやっついていいんでしようか？」

「ええ、遠慮しないでくださいね。山城さんはこれまで停泊していた時間が長かったようで、船底の付着物の多さがとびぬけて多かったです。食べられる牡蠣も多くて、工廠のみんなも大喜びしていますよ」

明石は嬉しそうに言うと、黙って聞いていた連れの作業員らもうなずいた。

「そうですか……。ではちよつと気が引けますが、頂戴します。うちの艦隊の子たちに御馳走してあげられそうです」

「うわあ、何にしようか、ぬいぬい。牡蠣飯？ 牡蠣汁もいいよね？」

「確かに立派な牡蠣ですね。迷います」

加古と不知火はバケツの貝を覗き込みながら言った。

「ちゃんと養殖した牡蠣ではないので、必ずよく火を通してから食べてくださいね」

「はい、わかりました。本当にありがとうございます。引き続き山城

さんの修理、お願いしますね」

「はい、お任せください！」

明石は澆刺とした声でそう言ってウインクした。

明石らの一行が去ってから、三人はバケツ山盛りの貝の山を囲んで顔を見合わせた。

「すごい量だな……」

「これ、わたしらだけ食べきれるかなあ？」

加古が嬉しそうに言う。

「このままにしておけませんから、いったん海水に浸けておきましよう」

不知火が言うので、三人は貝をさらに別のバケツに小分けにしてから海水で満たした。

「司令、夕飯までにどうやって食べたいか考えておいてください。ちなみに、不知火は酒蒸しを提案します」

不知火にそう言われ、トビウメ提督はバケツの牡蠣を困惑顔で見下ろす

「みんなはもちろん、好きなだけ食べていいんだけど、僕はちよつとなあ……」

「？ 司令は牡蠣がお嫌いですか？」

「いや、牡蠣は好きなんだけど、これ山城さんの船底で採れたんでしょ？ うくん……」

昨日病院で会った山城の恐ろしい形相を思い出すに、トビウメ提督は自分がそんな物を勝手に食べたら、さらに良くないことが起こりはしないかと不安になった。

——なんか崇られそうだあんまり食べたくないけど、粗末にもできないしなあ……

「あ！ そうだ……。これだけ大量にあるから、色々助けてくれた間宮さんや

ナス提督達のところにもお裾分けしたらどうだろう？」

「そうですね。なかなかお礼をする機会もありませんでしたし、良い考えだと思います」

不知火もそう言つてうなずいた。

この山城直産の牡蠣の山が、トビウメ提督を直感どおり、トビウメ艦隊をさらなる窮地に追い込むことになるとは、この時はまだ誰も知らない。

重巡加古から離艦した明石の内火艇は作業員二人を棧橋に送り届けると今度は舳先を司令部前の棧橋に向けてスロットルを入れた。現在連合艦隊旗艦を預かる軽巡大淀はそこに係留されていた。

明石はポンツーンに内火艇を停めると、牡蠣の入ったバケツを一つ下げて舷梯を登った。後部上部構造物は被弾して破損したままで、もうすぐ修理に取り掛かる予定になっていた。司令部要員はみな下船しているようで艦内は静かだ。

「大淀く！ いるく？ 入るよー！」

明石は大声でその声をかけながら、無遠慮に大淀の艦橋構造物にずかずか入り込む。明石は大淀を呼びながら食堂や士官室を覗いてから最後に艦長室の前にやってきた。

「大淀く、まだ引きこもり中？」

明石はそう言つて艦長室のドアをたたく。

「起きてるんでしょ？ 大淀く」

明石がしつこくドアをたたいて声をかけ続けると、ようやく鍵の音とともに艦長室のドアが細く開いた。

「明石……」

戸とドア枠の細い隙間から眼鏡のレンズ越しに濁った眼差しが明石を迎えた。目の下にはドンヨリとした隈が浮いている。軽巡大淀は先の第二次ブ島沖海戦で唯一、死傷者が発生した艦だった。戦闘時には実際に提督が犠牲になるケースも時折発生していたが、旗艦に乗った司令部要員がまとまった数で死傷する事態は、戦況が押され気味となった最近でもレアケースだった。自分に艦に乗っていた者が死傷することほど、艦娘にとり不面目で、辛いことはない。今回の犠牲の責任はすべてトビウメ提督に帰せられつつあり、大淀を責める声は無かったが、大淀自身は結果の重大さの前に、自責の念に押しつぶ

されつつあった。実際、帰港後に損害調査と報告書の提出を終えた後は、呼び出しがない限り一切下船せず、自分の艦の艦長室にこもって塞ぎこむ日々を送っていた。

「うわあ……ひどい顔。ちゃんと食べてるの」

やつれた大淀の顔を見るなり明石が言った。

「何しに来たの、明石……。ごめん、今は独りにして……」

大淀はそう言ってドアを閉めようとしたが、明石はすかさず隙間に足を突っ込んで阻む。

「何しなびた大根みたいになってんのよ。連合艦隊旗艦の名折れもないとこじゃない」

明石が挑発するようにいうと、大淀は少し気色ばんでドアを開く。

「何よ。明石は、自分の艦に乗船して命を預かった人達を失ったことなんてないでしょ！ それがどんなに悲しくて、辛くて、恥ずかしいことなのか判ってないじゃない！」

大淀は上品ながらも少し声を荒げて言った。明石は笑みを浮かべたまま黙って大淀の言葉を正面から受け止めてから、落ち着いた声で言った。

「お互い、前世では辛いことを何度も経験したじゃない……。確かにこの世界では犠牲になる人は遥かに少なくなっただけど、どうにもできないことってあるでしょ？ それに大淀は今回、具体的に自分がどうしたら被弾しなくて良かったって思うわけ？ わたしは戦闘のことはさっぱりだけど、今回みたいな乱戦のときには、そんなことは考えたって無駄なことくらいは判るわ」

「そうだけど……。つい数分前に話していた人達が、一瞬で変わり果てた姿になってしまって……。どうすればこうならなかったんだろうって、そればかり考えて……」

大淀の眼鏡の奥の目じりから涙が頬に伝う。

「仕方ないわね……。今はいっぱい泣いて、いっぱい寝て、いっぱいくじけたら、美味しいものをたくさん食べて、次の作戦に精一杯力を注ぎましょ。あたしたち艦娘にはそれしかできないでしょ？」

そう言って明石は、嗚咽する大淀の肩を抱きしめた。

しばらく二人は抱擁をかわしていたが、明石は不意にくんくんと鼻を鳴らしてから不用意な一言をこぼす。

「大淀、ちゃんとお風呂入ってる？ 髪に汗と火薬の臭いが染み付い、あ痛！」

大淀のゲンコツが明石の後頭部にさく裂し、二人はようやく抱擁を解く。

「これから入るところよ……」

大淀は真つ赤になって言う。

「グーで殴ることはないのに……。ま、でもちよつと元気になったみたいね。お風呂入ったら、ちゃんと食べることにしよう、これたくさんあるから大淀にもあげる」

明石は自分の後頭部をさすりながら足元のブリキバケツを指す。

「ええ？ 牡蠣？ それもこんなにな？」

「そう。戦艦の船底にもうびっしり。食べきれないからもってきたの」

大淀は驚くとともに改めて明石に向き直った。

「ありがとう、明石……」

大淀は再び明石を抱きしめた。

「良かった、笑顔になって。じゃあ私はそろそろ行きますね。貝はどう料理してもいいけど、必ず火を通して食べてね。じゃあまたね！」

明石はそう言うのとバケツを残して甲板につながるラツタルを降りていった。

トビウメ提督と秘書艦の不知火は貝で山盛りになったバケツ二つをもってまずは給糧艦間宮へと内火艇を走らせた。

ちゃんと第二種軍装を身に着けて間宮の甲板に上がった提督を、いつも通りの割烹着姿の間宮が穏やかな笑顔で迎えた。

「おはようございます、トビウメ提督。今日はどうされたのですか？」
「いつもお世話になってます、間宮さん。実は、思いがけず食べきれないくらいの牡蠣をもらうことになりました。それで、間宮さんには今回、お弁当とかいろいろお世話になったので、せめてものお礼で間

宮さんにもお裾分けと思った次第で……」

「まあ……、わざわざそれで？ それにしても立派な牡蠣ですね。あら、ムール貝もあるんですね」

間宮はしゃがみこんでバケツを覗くと、大きな牡蠣殻を手にして嬉しそうに言った。

「ええ、なんか明石さんがいろいろ持ってきてくれたので。もしよければ主計課の皆さんでは是非お召し上がりください」

「お気遣いありがとうございます、トビウメ提督。これだけの量だったらナス提督達にも少し分けて差し上げてもいいですか？」

間宮がそう言ったのでトビウメ提督と不知火は思わず顔を見合わせる。

「実は、ナス提督とカメラヤマ提督にも今回、大いに助けて頂いていたので、別にご用意してあるんです」

不知火がさかさず説明すると、間宮はそうだったのねと言って笑った。

「ちょうど良かったわ。ナス提督と日向さん達、今ここにいらしてるので呼んできましようか？」

トビウメ提督と不知火は再び顔を見合わせる。

「ではお願いします。この後戦艦日向を訪ねるつもりだったんです」

「わかりました。少しお待ちくださいね」

そう言って、間宮は足取り軽く艦橋構造物のほうへ歩いていく。

——やはり、間宮さんはあのナス提督と非常に親しいようですね

……

不知火は間宮の背中を見送りながらそう思った。

トビウメ提督がナス提督に渡す分のバケツを内火艇から引っ張り上げてくると、ちょうど間宮に連れられてナス提督と日向、それにサングラス姿のカメラヤマ提督が甲板へ上がってきた。

「いよお、元気してたか？」

カメラヤマ提督が調子よく手を挙げた。

「ええ、なんとか……」

トビウメ提督が三人に挨拶し、これまでの助力に礼を述べた後、牡

蠣を持ってきた理由を告げた。

「そういや、定期点検の時にたまにあつたな、こういうの。でも、こんなもらっちゃっていいのか？　うちは今、大鯨とゴーヤしかないぞ」

カメヤマ提督がサングラスを外しながら間宮と並んでバケツの牡蠣を物色する。

「いいえ、どうか気にしないでください。皆さんには本当に助けていただいたので」

日向と並んで静かに見守っていたナス提督が口を開いた。

「そういえばトビウメ提督、昨日、メジロ泊地のマツエダ司令からGF司令部宛に、山城のこれまでの運用上の問題や精神的な弱点について報告し、今回の事故は一定期間運用してきた自分でも予見困難だったと訴える上申書が届きました。司令部も山城を長く運用してきた指揮官の意見を無視することはできないでしょう」

「お兄さん、戦艦山城の前の提督が律儀な人で良かったな」

カメヤマ提督も笑って言う。

「司令部は、今は小言や嫌がらせをしてくるかもしれませんが、一過性のものだと思って、悲観しないでください。確かに作戦の結果は重大だったが、それはトビウメ提督一人の責任ではなく、また今回のことで彼らには君に何もできはしない。だから窮屈な状態も今しばらくの辛抱です」

「はい、ありがとうございます……」

——わざわざ上申書を出してくれるなんて。あの提督、ちよつと気になるころはあるけど、今の那智さんの上官が良い人そうなのはよかった……

トビウメ提督は複雑な感慨を飲み込みながらうなずいた。

牡蠣を品定めしていた間宮はふと思いついたように不知火たちに向き直る。

「皆さんの艦隊では牡蠣はどう料理するかもう決めましたか？」

不知火とトビウメ提督はそろって首を振った。

「さつき貰ったばかりで、後でみんなで決めようと思っています」

間宮は少し考えこむ表情をしてから、差し出がましいかもしれませんがと前置きして二人に言う。

「もし良ければ、わたくしがなにか作って差し上げますよ。ナス提督のところには鳳翔さんもいらっしやるし、二人でちよつと手をかけた物がお出しできるかもしれません」

「え？ 本当ですか？ どうしよう、ぬいぬい」

「ええ、良いと思います。間宮さんの手料理を食べる機会を逃す手はありません」

提督二人もそれはいい考えだとうなずいた。

話は決まり、トビウメ艦隊の残りの牡蠣も持つてくることになったが、そこでカメラヤマ提督がちよつと言いにくそうトビウメ提督に向き直る。

「お兄さん、確か写真撮るんだよな？ 写真の現像ってできる？」

トビウメ提督はいきなりの話に驚いたが、うなずいた。

「モノクロなら、できなくはないですが。最近はやらなくなりましたが、どうしてですか？」

「実は急ぎで現像してもらいたいフィルムがあるんだけど、情報部の写真班が、司令部連中から別の現像の仕事を押し付けられたせいで、すっかり後回しにされて困ってたんだよ。俺も潜水艦の中で見様見真似で数枚やってみたが、どれも失敗しちゃって使い物にならなくて、やっぱ素人には無理があった」

そう言うカメラヤマ提督に続き、ナス提督も口を開く。

「実はその件で、私もあとでトビウメ提督を訪ねようと思っていました。もし時間があるなら力を貸してほしい。非常に大切なフィルムで、一刻も早く現像したい」

それを聞き、トビウメ提督は一つ返事で引き受けた。世話になった恩人たちの頼みを断る理由はない。

「自分でよければ、お力になります。フィルムのサイズは？」

「高さ七インチのロールで6メートル」

すかさず日向が即答する。

「大きいですね……。わかりましたすぐに支度します。えーと場所は

加古の写真室を借りるか……」

「そうですね。そこが一番広い作業場となりそうです」

トビウメ提督の言葉に不知火もそううなずいた。

「よければ日向の現像室を使ってもらっても構いません。戦艦なので部屋も一番広く、機材も充実していると思います」

ナス提督が言い、日向も無言でうなずいた。

「わかりました、ではそうします。一度戻り、すぐに戦艦日向にうかがいます」

「ああ、準備しておこう」

トビウメ提督に日向が答えた。

トビウメ提督は間宮に、牡蠣は必ず加熱するよう念押しし、そして品目に一品、酒蒸しを追加するよう頼んでから、不知火に続いて甲板から内火艇へ降りて行った。

写真暗室

それから二時間後、戦艦日向の写真暗室の漆黒の闇の中で、トビウメ提督と不知火は汗だくになりながら大判の銀塩写真フィルムと格闘していた。二人ともラフなシャツにエプロン姿となり、閉め切った暗室内で、手探りで大きな写真フィルムを専用の現像容器に押し込む作業に取り掛かっていた。

普段トビウメ提督が使っているカメラ用の一三五フィルムではなく、航空偵察機用のカメラフィルムは大判で、非常に重い金属製マガジンに格納されている。真つ暗闇の中でマガジンからフィルムを取り出し、それをステンレス製の専用現像タンクに移し替えるのだが、それは慣れていないと非常に手間取る作業だった。

「ぬいぬい、そっち押さえてて。今からマガジン開けるから」

「はい、こちら準備万端です」

提督は声を頼りに、専用のリールに巻いたフィルムを現像タンクに押し込む。ふたをしつかり閉めてから提督は不知火に電気をつけるように命じた。

「さて、一番大変なところは終わった……。さて薬液を作ろう」

明るい白熱電球の下、二人は汗をぬぐってから大量のお湯を沸かし、さらにオスタップ三つに三種類の粉末の薬剤を入れてからお湯に溶き、素早く攪拌する。現像室内に現像液の酸っぱい臭いが充満した。その後、オスタップを日向からもらった氷嚢で覆い冷やしていく。トビウメ提督は薬液にそれぞれアルコール温度計を差し、目盛りを覗んだ。フィルム現像のキモは薬液の温度管理だった。アルコールの高さが摂氏二十度近くまで下がってきたところで、トビウメ提督はようやく現像液を現像タンク一杯に流し込み、ストップウオッチを押しした。秒針が数回回ったところで提督が合図すると不知火がうなずき、ふんつと声を上げて現像タンクを力一杯に揺すりはじめた。フィルムが通常より大きいため、現像タンクも大きい。なので現像液の攪拌は怪力を持つ艦娘の不知火が引き受けることにした。これで銀塩フィルムが薬液と反応して現像が始まる。

「はい、ストップ。一分間そのまま」

ストップウオッチを手にしたトビウメ提督が言うと、不知火は手を止めてタンクを置く。一分後、提督の合図とともに不知火は再びタンクをシエイクし始める。そんな作業を数回繰り返してから、トビウメ提督はタンクの排水口から現像液を捨てると、今度は急いでタンクに二番目の薬液となる停止液を注ぎ込む。これでフィルムが過剰に現像されるのを止めるのだ。提督は再びストップウオッチを押し、秒針の動きを凝視する。数分経ってから再び薬液を捨てて、今度は最後の薬液、定着液を注ぎ込んで再び時間を計る。現像作業は時間と温度との戦いだっただ。

「司令が時々、一人で現像作業をされているのは知っていましたが、こんなに大変とは思いませんでした」

顔をつたう汗をぬぐいながら不知火が言うと。トビウメ提督も笑ってうなずく。

「いつも使うフィルムの現像タンクは魔法瓶くらいのおおきさだから、こんな大変じゃないよ。ただ失敗できない写真だから、今回は神経を使うね」

——それにしてもカメラヤマ提督も、巻きフィルムから最初の数枚だけ適当に切り出してから試し現像をするなんて無茶やるなあ……ほかのフィルムが感光してダメになつてなければいいけど……

そう思いながら秒針を見つめトビウメ提督は七分経ったところでストップウオッチを止め、定着液を捨ててから現像タンクを開けた。定着液に触れて、初めてフィルムは光に当てても感光しなくなるのだ。巻きフィルムがよく見るネガの状態となつて入っていた。

「お疲れ様、これで前半は一段落」

二人は流水で入念にフィルムを洗い、薬液を慎重に落とす。ネガをしばらく水に浸けて洗浄してから、二人は大判のフィルムを数枚単位にハサミで切つて、写真室のドアを開けた。

「日向さん、ネガを風通しの良いところで乾かしたいんですが？ どここが良いでしょう」

士官室にいた日向にトビウメ提督が声をかけると、日向は心得たと

ばかりに二人を第五砲塔の裏にある後甲板に案内した。すでにそこには直射日光を遮る天幕と洗濯物を干すロープと洗濯ばさみが用意してあった。

びしよびしよのネガを抱えた二人は洗濯ばさみに带状のネガフィルムを吊るしていき、丸まらないように下に重しとなる金属クリップを留める。干し終わると二人はスポンジで濡れているフィルムの水滴を吸い取るように優しく拭っていく。

「強くこすらないように、やさしくね」

トビウメ提督の指示にうなずきながら、不知火は一心にスポンジでフィルムについている水滴を吸い取っていく。見ていた日向も軍刀を置いてスポンジを手伝い始めた。

しばらくして作業を終えた二人はさすがに疲れを感じ、日向が出してくれた折りたたみイスに身を預ける。

「結構時間がかかりましたね。もうお昼過ぎですよ」

不知火の言う通り、日が高く昇っている。

——今は天気がいいけど、乾く前にスコールが来なければいいな
二人がへたばっている前で、日向は干してある大判のネガを透かすように覗き込んでいる。

「うん、うまく現像できているようだな。上出来だ」

「それは良かった。あとは印画紙に焼き付けるだけなんで」

トビウメ提督は安堵したように言った。

「お疲れ様です、皆さん。お昼食におにぎりをお持ちしましたよ」

その声とともにやってきたのは空母艦娘の鳳翔だった。手したお盆にはお握りを盛った皿と冷茶を入れた湯呑茶碗がのっている。

トビウメ提督と不知火は急に空腹を覚え、お礼を言いつつ鳳翔が差し出すお盆に手を伸ばす。

トビウメ提督は塩味のきいたおにぎりを頬張りながら、同じくおなかのおにぎりを一心不乱に咀嚼している不知火の横顔を見て思い出した。

——こんな風になっているぬいぬいの写真も、もつと撮ってあげたいな……。今カメラを持ってきていないのが惜しかった……

そんなことを思いつつ提督はふと加古との会話を思い出した。

「そういえば、ぬいぬいと荒潮は写真写りにすごく厳しんだってね。自分を撮ろうものなら下手な写真は許さないって」

「ほへ？（はい？）」

口に米を頬張ったまま不知火は何のことだと言わんばかりに答える。

「聞いたよ？ 僕が加古にあげた写真、二人から厳しくダメ出しされちゃったって。軍艦も含めて二人を撮ってあげるときは、気軽にシャッター切らないで、気合を入れてやらないといけないと思ってね」

不知火は何を言われているのか判らず、首を傾げた。別に自分も荒潮も写真にうるさいなんてことはない。不知火は、加古や長良のようにあからさまに喜ばないだけで、内心この世界で生きていた証ともいえる自分の写真は撮ってもらえれば普通に嬉しい。特にトビウメ提督からもらった写真ともなれば、宝物にするだろうし、事実、これまで撮ってもらった写真は大切にアルバムに納め、駆逐艦不知火の本棚に大切に保管している。本当はもつと撮ってほしいのだが、敢えて頼むのは気恥ずかしいだけのことだ。それが一体何故……。

そこまで思いを巡らしてから不知火は突然、先の海戦前に基地の食堂で加古から写真を自慢されたことを思い出した。とんでもない誤解と判り、不知火は思わず飲み込んだ米粒が気管に入りかけ、盛大にむせた。

「ぬ、ぬいぬい、ちよつと、どうしたの？ 大丈夫？」

「大変！ さあ、早くお茶を飲んで」

トビウメ提督があわてて背中をさすり、驚いた鳳翔も麦茶を注いだコップを差し出す。不知火は盛大にせき込みながらコップを受け取り、グビグビ飲み干した。

「失礼しました……。ちよつとがっついてしまいました。不知火の落ち度です……」

しばらくせき込んでからそう言って、不知火は口元を拭いた。

——あのボンクラ重巡め……。永遠に昼寝させてやるわ……

不知火は恥ずかしそうに居住まいを正しながら、心中で冷たい怒りの炎を燃やす。

そう昼食をとっていると、第二種軍装姿のナス提督が後甲板にやってきた。

「すみません、御馳走になっています」

「いえ、こちらこそ面倒な用事を頼んでしまって申し訳ないですね」

ナス提督は静かな口調でそう言って、干してある日向のほうを向くと、日向は問題ないとはかりに深くうなずいた。ナス提督は無言で干してあるネガに顔を近づけ、何が写っているか覗き込んでいる。トビウメ提督と不知火は口をもぐもぐ動かしながら、その様子をじっと観察した。自分の作品を品評されているかのような心持ちとなり緊張して見ていると、ナス提督は満足そうにうなずいた。

「はつきり写っている。さすがプロですね」

トビウメ提督と不知火は安堵しお互いの顔を見合わせて笑みを浮かべた。

それからナス提督は日向に向かって小声で言った。

「日向、先ほど夕張と島風が入港した。予備の修復材なども持ってきている」

「そうか、後ほど確認しておく」

日向は静かにうなずいた。

フィルムを入念に乾燥させるため、十分に昼休憩をとってから、トビウメ提督と不知火はネガフィルムとともに再び蒸し暑い写真室へと戻った。

トビウメ提督はネガフィルムを一枚単位にハサミで切ると、ネガを一枚一枚照明にかざす。鮮明な像を写しているネガは三十枚ほどだった。提督は不知火に指示してトレイ上の大きなバットを三つ用意させ、フィルムの現像時と同様、専用の粉末薬剤を水で解いて薬液を三つ用意した。それはフィルムの像を印画紙に焼き付けてから現像する際に使う専用の現像液、停止液、定着液だった。

「じゃあ始めよう」

提督が言うのと不知火は写真暗室の照明を赤色灯に変えた。室内が

まるで映画に出てくる潜水艦の艦内のように、赤と黒の世界に変わった。トビウメ提督はOHPプロジェクトのような形の引き伸ばし機に大判の印画紙とフィルムをセットすると、ストップウオッチを手に引き伸ばし機のライトのスイッチを入れネガの像を印画紙に焼き付ける。ストップウオッチで数十秒計りライトを止めるとすぐに不知火へ印画紙を渡す。ナス提督とカメラヤマ提督から、ネガの写真を二セット作るよう依頼されていたため、二人は約六十枚近い現像作業をする必要があった。お互い流れる汗をふきつつ、閉め切った赤い室内で二人は時間と光と格闘しつつ印画紙にネガを透過した光を当てて像を焼き付けていく。

一通りの作業を終えると、二人はテーブルに用意したバットの現像液に最初の印画紙を一枚沈め、竹とゴムでできた専用トングでまんべんなく薬液に印画紙を浸す。再びストップウオッチで時間を計りつつ印画紙を凝視していると、それまで真っ白だった印画紙にみるみる灰色と黒の世界が浮き上がり焼き付けられた何かが姿を現してきた。像が明確になってきたところで、提督がトングで印画紙をつまみとまりの停止液の満たされたバットにフニャフニャになった印画紙を浸ける。ビチャビチャと薬液につけながら三十秒、さらにとりだの定着液のバットに写して再び三十秒、真っ白だった印画紙は立派なB4版の写真に変身した。二人はお互いの顔を見合わせて無言で笑う。最後に印画紙の薬液を洗い流すため、水を張ったバットで印画紙を十分に洗ってから、暗室内に張った物干しロープに洗濯物のように印画紙をクリップで吊るした。

「よし成功だね」

「はい、司令。これは気球ですね。向こうが海で、上から深海軍の輸送艦ですね」

トビウメ提督は出来上がったばかりの写真を覗き込む。どうやら海岸線を斜め上の上空から撮った写真で、複数の白い気球がたくさん浮かび、その下でエビともカニともつかないグロテスクな黒い物体が整然と波打ち際から浜辺に揚がってきている様子が写っていた。すぐ沖にはトビウメ提督も知っている深海軍の輸送艦が複数隻写って

いた。

「これは……、ブ島南岸の偵察写真かな？」

「ええ、おそらく……」

二人とも神妙な面持ちで、グロテスクな敵の上陸部隊の姿に見入った。

「確かにこれは大切な写真だ。よし、次の作業にかかろう」

「はいー！」

ルーティーンを確認し、二人は残りのネガの焼き付け作業にとりかかった。トビウメ提督が引き伸ばし機と現像を担当し、不知火が停止、定着、洗浄、乾燥を流れ作業でやることにした。

「停止液、定着液はそれぞれ三十秒。もし像がイマイチなのがあったら教えて。やり直すから」

「了解です」

二人は赤色灯の下ひたすら作業に没頭した。

焼き付け作業がフィルムの半分以上を終えて少しした頃だった。トビウメ提督はネガが投影する画像に不可解なものを見つけた。とにかく印画紙二枚に同様の像を焼き付けてから現像液に浸す。

「ん？ これ、なんだろう？ 人？」

赤い照明の色に染まった現像液の底に、砂浜と風景と思われる像が浮かび上がってきた。かなり低空で撮ったものらしく、深海軍の戦車や装甲車はかなり大きく映っているが、トビウメ提督の注意を引いたのは四分の一ほどが写真の右端に見切れている異形の人影だった。両腕の肘から先がまるで巨人の腕のように異様に大きく、右腕は片手でドラム缶を軽々と握った、モンスターのような女だった。モノクロなので肌の色こそ判然としないが、周囲との明度の差を考えると異様に色白の肌、そして色素自体がないような白髪であるに違いない。そして白い大きな三つ編みを首に巻き、頭はカメラの方を向きながら何やら怒鳴っているのか、口を大きく開けている。そして像が不鮮明ながら眼鏡らしきものや耳当てのようなものを身に着けていた。トビウメ提督はふと第一次ブ島沖海戦の最中、那智艦橋上で対峙した夕級戦艦の艦橋にいた人型の中樞ユニットの姿を思い出した。

トビウメ提督の声に、不知火も作業の手を止めてバットを覗き込む。トビウメ提督は時間が経ったので写真をすぐ停止液と定着液に浸ける。

——知らない型ですが、これは間違いなく『姫』……

不知火は写真を凝視しながらすぐに思い至った。

「……おそらく深海棲艦の上級個体でしょう。やはり上陸を始めていましたか

不知火が目の奥に憎悪の炎を隠しながら言った。

「このこともちゃんとカメラヤマ提督たちに伝えないと」

トビウメ提督はそう言って、残りのフィルムの焼き付け作業に戻った。

三時間後、二人はようやく六十余枚の写真の現像を終えた。

「なんとか終わったね。ありがとうぬいぬい。一人じゃとても終わらなかったよ……」

「いえ、秘書艦として当然のことです」

そう言いつつも二人は脱力して肩を寄せ合って椅子にへたり込んだ。トビウメ提督が腕時計を覗くと、すでに十七時を回っていた。

二人が現像液などを片付け、写真室を掃除してから後にしたのは十八時前だった。すでに夕焼けは西の水平線に名残を残すのみで一帯は薄暗くなり始めていた。

日向とナス提督が二人を労った。明るい士官室の、白いテーブルクロスの上に、トビウメ提督は仕上がったばかりのA4版の写真を一枚一枚、ナス提督と日向に披露した。

「本当に良く現像できていますね。無理を言ってお願ひした甲斐がありました」ナス提督はいつもより感情をこめてそう言い、微かに笑みを浮かべたものの、それはぎこちないものだった。写真が進むにつれて、日向とナス提督からはある種の緊張感のような張り詰めたものが高まっていき、それはテーブルを挟んだトビウメ提督と不知火にも伝わってきた。そして、あの白い「人型」の写真まできたところで、その緊張は最も高くなった。写真を目の当たりにした瞬間、ナス提督と

日向の表情が同時に険しく歪んだ。

「……日向、すぐにカメラヤマ提督をここに。あとGFの情報部にも伝えないと」

「ああ、わかっている……」

そのやり取りを見ていたトビウメ提督は意を決して尋ねた。

「砂浜にいるこれは一体何でしょう？ いえ、別に無理に知りたいというわけじゃなくて、その、機密なら誰にも口外しませんけど……」

慌ててそう言い添えるトビウメ提督に、ナス提督はうなずいて口を開いた。

「ちゃんと説明するべきでしたね」

そう前置きして、ナス提督はこの偵察写真が第二次ブ島沖海戦の初日にブ島南岸で撮影したものであること、この規模の深海軍の上陸部隊が本格的な攻勢に出たら、陸軍の守備隊は二日ともたず全滅することなどを説明し、先ほどの白い人影の写真を示した。

「これは深海軍の強力な兵装の一つ、おそらく『集積地棲姫』でしょう」
士官室にナス提督の沈鬱な声が響いた。

「しゅうせきちせいき？」

「深海軍の強力な陸上型の上級個体だ。わたし達もこいつがいることは想定していなかった。もう手遅れかもしれないな……」

日向は腕を組んだまま、そうつぶやいた。

「うわあ、衣サクサクだよ！」

「大きいね！ 中トロトロだよ」

加古と長良が大ぶりのカキフライに舌鼓を打つ。戦艦日向の士官室に招かれたトビウメ提督とその指揮下の艦娘に早霜を加えた艦娘達の前には、間宮と鳳翔が艦内の厨房で腕によりをかけた牡蠣をはじめとする多くの貝料理が並んでいた。

「沢山ありますから、遠慮しないで食べてください。大ぶりの身はカキフライに、小さいものは鳳翔さんが主にかきめしにしてくださいました」

エプロン姿の間宮はお盆からかきめしが盛られた茶碗をトビウメ

艦隊の面々に給仕していく。

「あ、そうでした！ トビウメ提督から御所望の牡蠣とムール貝の酒蒸しですよ」

間宮が大皿に乗った貝の酒蒸しをテーブルの上に置いた。

「ありがとうございます。これはまず、ぬいぬいに」

加熱した貝独特の芳香が不知火の鼻孔をくすぐり、生唾を飲み込む。

「司令、覚えていてくれたのですね……」

「今日は手伝ってくれたからね。さあ食べよう」

トビウメ提督はそう言っただけで不知火に箸と取り皿をまわす。

現像作業を終えた二人は薬液で汚れ、酸っぱい臭いが染みついた服を着替えるため、一度自分達の艦に戻り着替えてから、艦隊の皆を内火艇で戦艦日向訪れた。

「お礼をするつもりが、またもご馳走になってしまうことになってなんだか申し訳ないような気がします」

「そんなこと気にしないでください。お礼をいうのは私たちの方ですよ、トビウメ提督」

間宮はそう優しく笑った。慈愛に満ちたその笑顔に凶らずもトビウメ提督もおもわず見とれてしまった。横にいたナス提督も間宮の言葉にうなずいた。

「ああ、写真の現像は本当に助かりました。急を要することでしたので。疲れたでしょう、そもそもトビウメ提督の貝です。沢山食べて行ってください」

そう言っただけで通された士官室には日向のほか、カメラヤマ提督やその指揮下の大鯨、さらに今はシャツを着ているショートカットの小柄の潜水艦娘と思われる艦娘が隅のテーブルに着いていたほか、隣のテーブルにはセーラー服姿の艦娘とそれよりやや小柄でうさ耳型のヘアバンドをつけた艦娘が座っている。

「間宮さん、料理おっそーいよ。あたしもうお腹ぺこぺこー」

「ちよつと島風、お行儀悪いでしょ！ そんな急かすんじゃないの」
ぶーたれる島風を向かいに座った夕張がたしなめる。二人ともナ

ス提督の指揮下の艦娘で、今日入港したという。

「お兄さん、今日はありがとな。ナスさん、ビールか日本酒あるでしょ？ こちらのお兄さんに」

トビウメ提督が席に着くなり、カメヤマ提督が新しいコップを手に寄ってきた。

「いや、僕はその、酒はダメなんで、できればラムネかコーラでも」

「なんだそうか……。日向ちゃん、ラムネだつて」

すると酒好きの加古がすかさず手を挙げてアピールする。

「待つて、待つて！ あたしは日本酒がいい！」

「おし、今注いでやる」

酒瓶を手にカメヤマ提督が加古のわきへ行き、コップに清酒を注ぐ。

「加古、あまり飲みすぎないでね」

心配そうにトビウメ提督が声をかけると、加古は大丈夫、大丈夫と笑って一息にコップを空にした。

「いい飲みっぷりじゃん。さあもう一献……」

カメヤマ提督と加古は、日本酒を注ぎ合いながら楽しく飲み始めた。

その横では初風がかきめしを口に運びながら長良に言った。

「定期点検でドック入りも、こんなに大きい貝なんてそうそう採れたことないのに。戦艦だとそんなにちがうのかしら？」

「うーん、この大きさまで育つのは、かなりの期間、動く機会もドック入りもしてなかったからじゃないかなあ……。でもこのカキフライ本当に大きいし美味しいよ！ 山城さんもこの際、戦艦を辞めて牡蠣の養殖屋さんやったら儲かったりして」

「いや、ちよつと長良さん、それはちよつと酷すぎ……」

初風は呆れながらコップに注がれたラガービールをちびりちびりとすすりながら明るい白熱電球に照らされた士官室を見回した。

「あの隅のテーブルにいるの、確か島風よね？ 隣の人は、知ってる？」

巡洋艦娘の人みたいだけど」

「島風ちゃんの前衛的なユニフォームは見間違えないわね。確か」

向かいに座っているのは軽巡の夕張さんだったと思うわ〜」

早くも焼き牡蠣三つをペろりと平らげた荒潮が隣から割って入った。

「あの夕張ちゃんかあー。そういえば、二人とも一人っ子艦娘だね」

長良が思い出したように言う。確かに夕張も島風も同型姉妹艦がない。

「思い出した〜、確か姉妹艦のいない特殊艦の子ばかりが集まった『変態艦隊』があるって聞いたことがあったわ。それって〜ナス艦隊のことだったのね〜」

荒潮の酷い言い草に長良と初風は思わず吹き出した。

「あはははは、荒潮ちゃん、変態は酷すぎるよー」

「はははははは、こんなにお世話になってるのに、そんなこと言ったら殴られるわよ」

「あらやだ、お食事中に殴るなんて物騒ね。乱暴はダメですよ。はい、牡蠣のお味噌汁をお持ちしましたよ」

タスキがけにエプロン姿の和服の艦娘、鳳翔がお盆にいくつもお椀を載せてテーブルにやってきた。一同の顔が凍る。

「あはははは、こ、こんな御馳走食べたって他の姉妹艦に知られたら、きつと殴られちゃうなって、ははははは……」

咄嗟に長良が苦しい言い訳で誤魔化す。普段は人を食ったような態度を崩さない荒潮も、笑みを浮かべつつも青い顔をしている。

—— といえば、鳳翔さんだって『一人っ子』じゃない……。みんなが尊敬している鳳翔さんを変態呼ばわりしたら、他の空母艦娘に殺されかねないわね……

初風は引きつった愛想笑いでやりすごしつつ、そう思った。

トビウメ提督は不知火の向かいに座り、小ぶりのカキフライを一、二個自分のさらに置きつつ静かに士官室を見回していた。この賑やかな空間にやや以後土地の悪さを感じていたことに加え、未だ山城の船体から採れた牡蠣を遠慮なく口にするに抵抗があった。当の本人が病院に入院中だというのに、勝手にカキパーティーで飲み食いしていて良いのだろうかという気遅れを感じていた。

——もし正気だった、山城さんも扶桑さんと一緒に、牡蠣食べたかったらうな……

とはいえ、昨日閉鎖病棟で会った山城の恐ろしい錯乱ぶりを思い返すに、牡蠣をもつて再びお見舞いに行く気にもなれない。一つ試しに食べたカキフライは絶品だった。前の世界でもここまで衣がカリカリ、中がジューシーな完璧なカキフライは食べたことがない。それだけに、もやもやは一層募る。

そんな折、士官室の入口にエプロン姿の間宮がお盆をもって他のテーブルに料理を運んできた。トビウメ提督は間宮が給仕を終えるのを待ってから、立ち上がり、士官室のすみで声をかけ改めてお礼の気持ちを伝えた。

「艦娘達にはほんと良かったです。ただ、本当は主計課の方たちや間宮さんにお礼がしたくて持ってきたのに良かったですか？」

間宮は微笑みを絶やさず首を振った。

「大丈夫ですよ。艦には伊良湖ちゃんがいるので、主計課の皆さんの分は伊良湖ちゃんがちゃんと美味しい料理して今頃楽しんでるはずです。わたしも一段落したら鳳翔さんと一緒に頂きますから。トビウメ提督は、今は少しでもくつろいでください」

そう言つて微笑む間宮につられてトビウメ提督もぎこちなく笑つた。

——本当に、この人は艦隊の誰もを元気付けるアイドルなんだな……

トビウメ提督は改めてそう思った。

トビウメ提督が座席に戻ると、話し込んでいた不知火と早霜の二人が、提督の分のかきめしのお代わりを茶碗によそってくれていた。

「山城が怖いのは解りますが、今はつまらないことは忘れて召し上がられることをお勧めします」

「そうですよ司令官……。お腹に入ってしまった物は誰にも元に戻すことはできませんからね……。フフ、フフフ、フフフフ」

ウイスキーの水割りグラスを手にした早霜が不敵に笑う。

——この子、もう酔っぱらってるのかなあ……

トビウメ提督は戸惑いつつも差し出されたかきめしに箸をつける。だしのきいたご飯と程よい硬さに煮込んだ牡蠣の身が口の中でまろやかに調和した。とにかく絶品だった。

かきめしの味を堪能しつつ、トビウメ提督は無言で再び室内を見回す。加古はすでにウイスキーグラスを握りしめたままうたた寝をはじめている。これはいつものことだ。加古の相手をしてきたカメラマ提督はテーブル座席から離れた、ソファとサイドテーブルが置かれた区画で、食事もそこそこに、ナス提督それに艦娘の日向と写真を並べながら話し込んでいた。トビウメ提督の視線に気付いた不知火もじっと三人の様子を見ていた。

「きつと、あの写真のことだね」

「ええ、恐らく……」

——ブ島の人達は今どうしているのだろうか？

はるか南東の島の様子に思いを馳せながら、トビウメ提督はそう思いながら黙々とかきめしを咀嚼した。

ソファに腰掛け、サイドテーブル上の焼き付けを終えた写真を見下ろしながら、カメラマ提督は深くため息を吐いて色眼鏡をはずした。

「こんな大規模な増援部隊が上がってたか……。こうと判つてれば、情報部なんかじゃなくてあのお兄さんに頼むべきだったぜ……」

カメラマ提督は悔しそうになる。

「これはもう一週間以上前の写真だ。続けて最新の状況を把握しておく必要がある」

「シオイはラポールで修理中。それに今晴嵐の予備は本土にしかない」

そう言うカメラマ提督にナス提督はうなずいて言った。

「わかっています。こうなれば、ラポール泊地から偵察機の彩雲、もしくは陸軍から百式司偵を借りて飛ばす必要があります。それがだめなら中攻でも構わないので強行偵察をする必要があります」

「GFの情報部のやつらにこの写真をすぐに叩きつけてやろう」

日向は深くうなずいた。

「わたしがすぐに持っていく」

「あくあ、せつかく飲んででも、酔いが醒めちまった。しっかし、まさか『姫』が来るとはなあ」

カメラヤマ提督は頭を抱える。

「確かに姫も予想外だったが……」

そう言葉を切って日向は、砂浜に上陸した深海軍の兵器の列を真上から撮った写真を見せた。そこには、ヤドカリともロブスターにも見えるユニットがいくつも列をなしている。

「これは奴らのブルドーザーだ。もしこんな所に滑走路でも造られたら、シユーズ・ベラ島どころか、この島だって敵機の攻撃圏内に入る」日向の言葉に、カメラヤマ提督とナス提督は血の気の引いた顔を見合わせた。

「翔鶴の航空隊や泊地の防空隊だけじゃいずれ制空権は持たなくなる」

会食の楽しげな喧噪も遠く、『戦線崩壊』という恐ろしい四文字が三人の脳裏に冷たく浮かび上がってきた。

同じ頃、工場の大ドック建屋の中でも別の饗宴が始まっていた。その日の作業を終えた明石がつなぎ姿でドックへやってくると、すでに工場の空地のいたるところで、作業を終えた作業員らが七輪や日本酒の瓶などを囲んで床に車座になっている。

めいめい、カゴに押し込んだ殻付きの牡蠣を七輪で焼いたり、鍋にしたりして宴会を始め、すでに建屋内には炭と牡蠣の焼ける良い匂いが立ち込め始めていた。

「おーい、あがしちゃん、ごっちだー！」

ダミ声に呼ばれて顔を向けると、工場長らの一団がビールケースを椅子替わりに七輪やビール瓶などを持ち寄って牡蠣パーティーをはじめていた。

「ああ、皆さん始めていますね?」

明石も嬉しそうにとんでいくと、すぐに作業員がコップを渡しビールを注いだ。「さあ、明石ちゃんが来たから乾杯しなおすぞ」

工廠の作業員にとってのアイドルは、間違いなく共に働く工作艦娘の明石だった。乾杯を終えて、作業員は再び大ぶりの牡蠣を七輪にのせていく。

「わたしにも一個焼いてください」

「おうよ、ちよつと待ってろ」

そう言つてるとなりで作業員の一人は、まだバケツの海水に浸かっている牡蠣を手に取ると、マイナスドライバーで器用に殻をこじ開け、貝柱を剥がすや、そのまま口元に持っていき、するつと身だけ吸い込んだ。

「うあくたまんねえ」

「ええ〜？ 生で食べちゃったんですか？」

明石は驚いたが、工廠長をはじめ、周囲の作業員らは気ままに殻から生で身を吸っている者たくさんいた。

「大丈夫だって。酒をぐい飲みして消毒すれば大丈夫さ」

「ええ〜？」

明石は心配そうな顔をするが、周囲の者は気にしていない。

「明石ちゃんも一個どうだ？ ちよつとだけなら大丈夫さ。それに今日はとっておきの、キリリと辛口なフランス産白葡萄酒も用意してあるぞ」

工廠長がそう言つて指さす先には、床に氷を張ったオスタップが置かれ、そこには葡萄酒特有の緑色の瓶が数本差さっていた。

「ええ〜フランス産なんて、こんな所で良く手に入りましたね！」

ラガービールや日本酒、一部のウイスキーは配給として定期的にも入ってくるが、舶来品のワインやブランデーは、南方ではなかなか手にできない貴重品になっていた。工廠に手に入らねえ物はねえよと工廠長は不敵に笑つて明石に牡蠣殻を手渡す。そこには工廠の水銀灯の光を反射して乳白色に輝く大ぶりの牡蠣の身が乗っていた。明石が牡蠣を手にとると、隣の作業員がすかさず四つ切りにしたレモンの切り身を絞つてくれた。思わず明石は生唾を飲み込む。

「まあ一個ぐらいなら大丈夫ですよね？」

そう言つて明石は一思いに牡蠣を吸い込んだ。ぷりぷりの食感と

独特のこくとかすかな苦みが口内に広がる。

「ほら、白葡萄酒だ。ぐぐつといけ」

明石はコップを受け取り、キンキンに冷えた白葡萄酒を口に流し込むと、牡蠣の味と硬質な酒の味が融合して牡蠣の身が溶けたような新たな旨味に変わる。

「最高ですね〜！」

生牡蠣を堪能し明石は余韻を楽しみながら言った。

「明石ちゃん、まだいっぱいあるぞ、早い者勝ちだぜ」

作業員の一人が言った。食欲と白葡萄酒が明石の理性を押し流した。

大ドックでの饗宴は夜更けまで続き、牡蠣を食べつくしてお開きになるまで、明石は最終的に大ぶりの生牡蠣を6個も平らげることになった。